野阿弥全集

第十二巻

解説

明治十一年六月、新富座の新築成りて開場式を擧げ、「松榮千代田神徳」なる默阿彌の新作を上演した。この圖は、その作を草雙紙に綴つたものゝ口繪として挿入されたものである。開場式は六月七、八の兩日にわたつて催され、座の關係者は悉く燕尾服を着用して、招待の貴顯紳士の迎接に努めたといふ。その時、俳優以下座員一同が舞臺に並んで式辭を述べた。これはその光景なのである。默阿彌は河竹新七として左方第一列目の前方にゐる。洋裝の寫眞は其の際のもので、明治十一年であるから、六十三歳の時である。

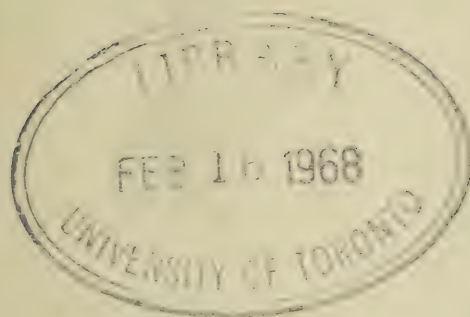
新富座
新富座劇場開業式ノ圖
市川團十郎
中村仲蔵
市川小團治
尾上菊五郎
市川左團次
岩井半四郎
守田勘弥
坂東家橘
河竹新七

實錄先代萩（豊原國周畫）

一子千代松（澤村源平）　乳人淺岡（助高屋高助）　幼君鶴千代（澤村由次郎）

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集　第十二卷

東京　春陽堂刊行

默阿彌全集　第十二卷目次

挿繪目次

西は誠忠
東は奸悪

足利殿御前相撲黒白分菖蒲月

其御抱の荒浪が忍ぶ御殿の床下に誰松枝に鐵扇で打れてすくむ濡鼠銀山ならぬ一升の酒に和助が悪事の異見忽善に鳴神が尋ぬる親はむき身賣憂身に迫る五平次おつるが身賣を遁れ百兩の兼てこゝらと汐澤も悔悟に明す心の奥筋順路を逆に水戸領で太守の情蒙りて涙にしめる袖ヶ崎死する覺悟の義宗公を止るお高と珍賀が忠義に保つ命の藥酒連判狀を片桐が國の土産に召連し故郷へのこす千松につらき別れの淺岡は親子の緣も薄茶の試み娘お梅が恩愛にお豐が苦勞黒茶碗土となる氣で嘉兵衛が毒味斯迄工む奸計も三左衛門が駈込み訴訟に罪に伏せし世良田が刃傷深手に屈せぬ舘安藝が熊田を杖に玄關前鶴喜代君へ松島の千代を壽く扇の一指細川侯の裁判に惡人ほろび善人の榮

古換再新青葉山

早苗鳥伊達聞書

『實錄先代萩』は明治九年六月、作者六十一歳の時、新富座に書卸された。御家物の作中最も代表的なるもので、講談に材を採り、好評を得た狂言である。新富座の全盛時代の事で先代の彦三郎、芝翫、菊五郎、左團次、訥升(後の助高屋高助)等の一座で、役々皆よく適して立派な舞臺であつたのは言ふまでもない。菊五郎と左團次の神並、荒木は好一對とも稱すべく、牢屋の別れは悲壯な場面であつた。水戸街道に於ける彦三郎の水戸黄門の態度といひ、訥升の柔らかみのある淺岡といひ、後々の語り草に殘されたものが多くあつた。伊達家奥殿の場は所謂實錄の政岡と稱されてゐる場面で、現今に至つても中村歌右衛門丈を始め諸優によつて屢々中幕物として演ぜられる。例によつて、書卸しの時には原田甲斐が世良田甲斐となつてをり、伊達安藝が館安藝となつてゐるが如く、人名を憚つてあつた。

書卸しの時の役割は、坂東彦三郎(太守義宗、原田甲斐、魚賣五平次、大領黄門)、澤村訥升(板倉内膳、汐澤丹三郎、乳人淺岡)、尾上菊五郎(片倉小十郎、神並三左衛門、茶道珍賀)、中村芝翫(松前鐵之助、木戸嘉兵衛)、市川左團次(伊達安藝、荒木和助)、坂東しう調(五平次娘おつる、局呉竹)、嵐大三郎(嘉兵衛女房おとよ、老女澤の井)、市川子團次(倉田甚五兵衛)、中村喜世三郎(嘉兵衛娘おうめ)等であつた。

口繪にしたのは國周筆伊達家奥殿の場の錦繪であり、挿繪にしたのは國周筆の荒木神並の兩人が牢屋の前で面會するの場、及び當代中村歌右衛門丈の淺岡に扮せる舞臺寫眞である。

大正十四年十月　　校訂者

唐木和助
市川左團次
神浪三左衛門
尾上菊五郎

早苗鳥伊達聞書（實錄先代萩――六幕）

序幕

中邸鹽釜社の場
上邸松前宅の場
同奥殿床下の場

【役名――田村隱岐守、修驗者理現院、伊達刑部、渡邊金兵衛、中間四人足輕二人。】

（中邸鹽竈社の場）――本舞臺後淺黄幕、眞中に注連を張りし丸木の鳥居、左右石の玉垣、所々に奉納の石燈籠、楓の立木、日覆より同じく釣枝、上下共白地の幕を張り、總て伊達家中屋敷鹽竈社の體、爰に中間四人◎〇△□等立ち掛り居る、此の見得大拍子にて幕明く。

◎何と可内、先殿樣には御放埒で、遂にお上の御首尾が惡く、お若い身そらで袖ケ崎へ御隱居におなりなされ、御幼年の龜千代樣が御家督相續と事極り、今日此のお屋敷の鹽竈樣へ御代替りの御參詣、先づ泰平と思ひの外、穩かならねえ事ではないか。

〇さうとも〳〵、今方こゝへ龜千代樣が御參詣に附いて、お傅役の松前樣や淺岡どの、其外お局お腰元が大勢附添ひござつたのは、名に負ふ大家の奥向を勤める女中の御守殿風、別品揃ひで見事ゆゑ、垣根の外から鹽まぐろの、すきみをして居た所。

△御後見の田村様や刑部様が御一緒で、既にお社内へお入りになるを、渡邊金兵衛様が鳥居の内から暫く／＼と留めに出て、理現院といふ法印をそれへ呼出し、怪しい事が社の内にしてあるからよく取調べた其上で、御參詣が肝要と、それから俄に騒ぎ立ち。

□乾の隅の土中を穿ち、掘出したのが白木の箱、中を開けば人形と呪詛調伏の願書が出て、松前様と淺岡どのへ其疑ひが掛つたのを、田村様が遮つて是れは餘人の巧み事と、おつしやつたので調伏の、其の疑ひは晴れたれど、

◎松前様と淺岡どのが、不義いたづらをして居る噂が、刑部様のお耳へ入つて、捨置き難き一大事と、

○松前様には御前體を遠けられて悄々と、お上屋敷へお歸りあつたが、お氣の毒な事ぢやあねえか。

△日頃忠義な松前様が、不義をなさらう筈もなし、何でもこりやあ惡人の流言とやらに違えねえ。

□人の事よりこちとらも、惡い噂をされねえやうに、神信心でも仕にやあならねえ。

◎何は兎もあれ御參詣が、濟んでこつちは掃除の年明け、

○是れから部屋でゆつくりと、盛切り酒の大胡坐、

△初鰹とはいかねえから、屋臺見世の蟹でも買ひこみ、

□眞赤にゆだつてぐでん〳〵に、横に這つて寐にやあならねえ。

◎さあ〳〵來やれ〳〵。

ト中間四人下手へはひろ。此時鳥居の内より金兵衛くりさげ鬘、上下大小にて、跡より修験者理現院
胡麻鹽撫附鬘、緋の法衣輪袈裟にて附添ひ出來り、

金兵 理現院どの、今日は終日御苦勞でござつた。

理現 そこ許の種運びで、今日參詣の人々の身の上などを巨細に當て、荒膽を抜いて置いて、社の内が怪しいと愚僧が言出し乾の隅を、掘らせて取り出す白木の箱、中に這入つた人形と呪詛調伏の願書にて、松前と淺岡兩人を罪に落し、御前體を遠ざけさせる一工風。

金兵 それも後見田村殿が口出しをして成就せねど、不義の汚名で松前めを遠慮さすれば今宵から、女中ばかりの奥御殿、先づは安堵と申すもの。

理現 して又愚僧へお約束の、御褒美を下さりませうな。

金兵 其儀は原田甲斐殿より、追て御沙汰に及ばうから、歸宅いたして待つてお居やれ。

理現 いえ〳〵それはいけませぬ、斯ういふ仕事は現金商ひ、右から左へ御褒美をお貰ひ申して參りませんでは、段々相場が下ります。

金兵　はて、假令褒美が延引するとも、何で相場が下らうぞ、其儀は必ず心配めさるな。

理現　それでも今日下さる積りの、お約束ゆゑ拙僧も、疾うから當にして居ります。

金兵　とあつて玆に持合せが、

理現　なければ何ぞ抵當の、金目な物を下さいまし。

金兵　其品とても爰にはない。

理現　そんならお宅へ御一緒に、

金兵　然らば一緒に、手前宅へ、

理現　どれ、御同道いたしませう。（ト此時鳥居の內にて、）

刑部　その褒美、遣はさん。

理現　や、あのお聲は、

金兵　刑部樣。

ト大拍子になり、正面の鳥居の內より、刑部好みの鬘、上下大小にて出る。

理現　先刻皆々御同道にて、御歸館ありしと思ひの外、

金兵　刑部樣には何時の間に、此のお社へお歸りありしか。

刑部　されば先刻松前めを罪に落して蟄居させ、龜千代樣と同道せしが、我が腹心なる荒木和助、此中屋敷へ參りしと承はつて取つて返し、社の裏手で計らず出逢ひ、密談いたして居つた。

金兵　それはよくこそ刑部樣には、お立戻りに相成りました。

理現　何卒愚僧へ御褒美を、頂戴いたしたうござります。

刑部　約束通り五十金、改めて請取りやれ。

ト懷中より金包を出し、理現院へ渡す、理現院請取り改め見て、

理現　いや久し振りでの山吹色、是れで愚僧も當分は、呑代にあり附きまする。

金兵　して又、荒木和助めに、何の御密談でござりましたな。

刑部　原田甲斐の言附にて、今日松前鐵之助を蟄居させたる上からは、女ばかりの奥御殿、今宵かしこへ忍び入り、荒木和助に龜千代を殺害させる一工風、若し仕損じて捕へられなば、金子に目がくれ奥殿へ賊に入りしといふ積りで、和助が自身に引取りの暇の禮狀認めて、刑部へ手渡しいたしに參つた。

金兵　流石は俠氣、荒木和助、後日の憂ひを推量り、お暇の出た積りにて禮狀をお渡し申すとは、惡事に拔かりのなき若者、渡邊金兵衛感心いたした。

理現　然し御門の通行が、お上屋敷は嚴重ゆゑ、刑部樣の御家來が御門切手を持ちまして、通行すればお暇が出たと言つても刑部樣へ、やはり後日にお疑ひが、掛りますまいものでもなし。

刑部　そこは拔らぬ此の刑部、今日淺岡松前の贔屓立てして某へ、過言を申した相後見、田村隱岐守へ汚名を着せんと、豫てひそかに盜み置きたる田村の屋敷の門切手を和助に與へ置きたれば、田村の家來の積りにて門を通行いたしなば、萬一仕損じ捕へられなば、隱岐守へ疑ひかゝり、是れ兩斷の苦肉の計略。

金兵　何かに附けて拔かりなき、刑部樣のお計らひ、

理現　理現院めも感心いたしました。

刑部　褒美を渡す上からは、貴僧は早く歸宅おしやれ。

理現　左樣なれば刑部樣、金兵衞樣にも御機嫌よろしう。

金兵　貴僧の働き、御苦勞千萬。

理現　どれ、お暇をいたしませうか。（ト行きかける、此時花道揚幕の内にて、）

隱岐　あいや理現院、暫く。

三人　何と。

ト大拍子になり、花道より田村隱岐守、上下大小にて出る、跡より菖蒲革の足輕二人、誂への鎧櫃を
舁き出て來り、花道に留る、刑部隱岐守を見て、

刑部　田村氏には御邸宅へ、お歸りならんと思ひしに、

金兵　見受けますれば鎧櫃を、御持參あつて此處へ、

理現　何故お越しでござりまするな。

隱岐　其仔細隱岐守、それへ參つて申し述べん。

刑部　何は格別、

三人　先づ〳〵是れへ、

隱岐　然らば御免下されい。（ト右の鳴物にて隱岐守舞臺へ來る、隱岐守上手へ通り床几へ掛ける、）

刑部　して、其の仔細と申さるゝは、

金兵　如何なる譯でござりまするな。（ト是れにて隱岐守思入あつて、）

隱岐　理現院とやら、ちよつとそれへ。

理現　あの、愚僧に、

隱岐　如何にも。（ト是れにて理現院薄氣味惡き思入にて前へ出て、）

理現　何御用でござりまする。（ト是れより合方になり、）

隱岐　用事と申すは餘の儀にあらず、先刻幼君龜千代殿當社へ御參詣ありしに、渡邊金兵衛の忠節にて神前を淸める爲め其方を頼みし所、何か怪しき事ありとて、修驗の法を行ひ見れば、乾の隅の土中を穿てば必ず埋めし品ありと、見通したるそちが敎へ、早速土中を掘らせ見れば案に違はぬ白木の箱、中より出し人形と呪詛調伏の願書一通、宛名は辰巳の男女と記してあるゆゑ松前と淺岡に疑ひ掛りしゆゑ、某執成いたせども、刑部殿には御不承知の御樣子ゆゑ、まこと其方が行力にて人の善惡速に當るとあれば、我が祕藏なす鎧櫃の內にはひりし其一品、是れにて當てさせ試し見んと、態々持參いたさせたれば、如何なる物がはひつてあるか、それにて篤と當て、見やれ。

トきつと言ふ、是れにて理現院當惑の思入よろしくあつて氣を替へ、

理現　そりやはや、人の身の上さへ見通しに當てる程の拙僧でござるゆゑ、品物位を當てまするは何でもない儀でござりますれど申さばお家の一大事に拘はる儀ゆゑ神慮を惱まし、先刻の當物をいたし、わざと惡事を巧みましたる人の名前は指しませぬが、是れも神慮の慈悲といふもの、僅それなる當物位で神の心を惱ましまするは、甚だ以て恐れ多し、其儀は御容赦下さりませ。

刑部　こりや理現院の申すのは、尤も至極、左こそあるべし。

金兵　用事が濟めば理現院、疾く〳〵此の場を退散いたせ。
隱岐　いや、歸すこと罷りならん。
理現　すりや、どうあつても拙僧は、
隱岐　神慮によそへ口賢く言ひ脫れんとなすとても、いかで此儘打捨て置かうや、假令品物なればとてやはり此場の潔白を立てる基ゐの當物なれば、見事汝が行力にて、是れなる品を當てたる時は刑部殿の仰せに任せ、松前淺岡兩人を直ちに遠慮申し附けん、まつた是なる當物が當たらぬ時は理現院其分にはいたし置かぬぞ、性根を据ゑて當てゝ見やれ。
理現　はてさて、是れは迷惑な。
隱岐　や。
理現　いえなに、明白に唯今當てゝ御覽に入れん。（ト氣味惡き思入、刑部金兵衞氣を揉む思入にて）
刑部　田村氏が鎧櫃に、入れて持參をめされしは、
金兵　まさか鎧を其中へ入れて持參もなさるまい。
刑部　衣服の類か、但しまた、
金兵　道具の類に相違なし。
刑部　違はぬやうに、

兩人　當て〻見やれ。（ト此内理現院考へるこなしあつて、）
理現　先づ其中の品物を、五色の色にて申さうなら、赤いやうにて黄ばみがあり、黑いやうにて白みがあり、其くせ青く見えまして、曖昧とした五色の色合。
隱岐　して〳〵、金氣か、但し又、絲の類か、木石なるか。
理現　されば、金氣も少々ござつて、絲の所も少々あり、木のやうにて石のやうにて、重からず又輕くもなし。
隱岐　して、活物か死物なるか。
理現　死物金佛石佛の、たぐひのやうに見受けまする。
隱岐　何さま、是れは感服いたした、中は則ち石佛ぢや。
理現　え〻、あの石佛でござりますか。
刑部　これは所謂紛れ當り、いやさ、是れが所謂目の當り。
金兵　はて、速かなるものぢやなあ。
隱岐　それ、中なる品を取り出し見せい。
足輕兩人　はッ。（と鎧櫃の蓋を明け、中より誂への萬年青の植木鉢を出す、理現院見てびつくりして、）

理現　南無三、違つた。

ト逃げにかゝるを金兵衛突廻して拔打ちに理現院を切り下げる、是れにて理現院倒れる、隱岐守きつとなつて、

隱岐　やあ、詮議の種の賣僧めを、何故みだりに討ち果した。

刑部　それぞ憎き賣僧めゆゑ、金兵衛めが當座の手討ち。

金兵　峰打にする心得なりしが、つい手が廻つて此の成敗。

隱岐　はて、粗忽なる其振舞、是れと申すも正しく同意の、

刑部
金兵　や、

隱岐　いやさ、道理に闇き此の計らひ、渡邊金兵衛遠慮いたせ。

金兵　はッ、恐れ入りましてござります。

刑部　何は格別、最早夕景、いざ御同伴仕らう。

隱岐　手前は是れに用事もござれば、刑部侯には先づ〱お先きへ。

金兵　とはいへ、此の儘。（ト理現院の死骸へ思入）

刑部　あこれ、（ト目で押へ、）左樣ござらば、田村侯。

隱岐　然らば、是れにて、刑部侯。

刑部　どりや歸邸いたさうか。(ト刑部先きに金兵衛附いて花道へはひろ。隱岐守跡を見送り思入あつて、)

隱岐　何か唯今金兵衛めが、是れなる死骸の懷中へ心を殘して歸りしは、油斷ならざる事どもなり。こりや兩人、彼奴の懷中改め見やれ。

足輕兩人　はツ。(ト理現院の死骸の懷中を改め、以前の金を出し、)

足一　はツ、かやうな金子が、

足二　ござりました。

隱岐　其の金子是れへ、(ト封を切り改め見て、)三ツ引龍の極印あるは、正しく分家刑部殿の手許金に相違なし、是れを彼奴が所持なし居るは、さては惡事の頼み手も、(ト思入あつて、)油斷ならざる(ト件の金を袂へ入れるを道具替りの知らせ。)事どももぢやなあ。

ト此模様大拍子にて道具廻る。

(松前宅の場)――本舞臺三間の間、向う折廻し上手一間の置床、是れに一行物の掛物、此前に鹿の角の刀掛け、書物箱を並べあり、是れより下手白地中形の襖、上手は出這入りの障子屋體、いつもの

所兩開きの冠木門、此外黑の板塀見越しの松、よき所に挾箱を置きあり、總て武家長屋松前住宅の體、爰に佐五平着流しの中間にて草鞋を造り居る、下手にお豐、木綿やつし、前垂掛け門番の女房にて見舞に來て居る體、此の模樣よろしく、薄き雨車、合方にて此道具納る。

お豐　旦那樣の御病氣をお案じ申してお見舞ながら參りましたが、いつもの通りお枕許へ行つてよいか御樣子を、ちよつと伺つて下さんせ。

佐五　相替らず親切によう尋ねて下さつたが、旦那樣はさつき方お供先きからお歸りなされて、お心持が惡いかして、一間の內へはひつた切りで、ろく〳〵お口もお利きなされず、たゞ考へ事ばかりして、まだ御膳も上らぬが、知つての通り不斷から一度もお怒りなすつて、小言をいはぬ旦那樣ゆゑ、何だか氣味が惡いやうだ。

お豐　ほんにそれは何事か、お胸に落ちぬ事でもあるから、それで鬱いでおいでゞあらうが、今方お前が道益さまへ見舞を賴んでござんしたゆゑ、さてはと思つて御樣子を、お聞き申しに來たわいなあ。

佐五　實は旦那は、醫者を呼べともおつしやらないが、案じられて大場樣に逢つたを幸ひお見舞を、お賴み申したが、直にお前に聞きかじられ、見舞に來られて面目ない。

お豐　何のわたしに心配がいらうか、外の者なら兎も角も、わたしはこつちの御家來同然、何の隔てがいらうかいなあ。

佐五　委しい話しは知らないが、そんならお前も此お家へ。

お豐　繫がる御緣の身の上を、あらましお前に話さうわいなあ、（ト合方になり、お豐思入あつて、）元はわたしもお國の生れ、こちら樣の御緣家の伊達安藝樣へ御奉公、御恩になつた其上に、首尾よく勤めた御褒美にと、奧樣からもそれは〳〵お小袖お簞笥何やかや一方ならず頂戴して、斯うして今は御門番の嘉兵衛の女房になつて居れば、こちらのお家は御主人同然、殊に今度お國許から遙々御出府遊ばせば、御新造樣でも出來るまでは、朝夕わたしが見廻つて、お世話をするが御恩送りとわたしや思うて居るわいなあ。

佐五　成程聞けばこちらの家も、同じお主の御緣家とて、御親切に何事もお世話をして下さるゆゑ、何時でも旦那の洗濯物やわしの着替の穢ない物まで、お前さんに賴みますが、今日の見舞は知らぬ分で、歸つた方がよろしからう。

お豐　お氣が鬱いで御面倒と、思召しても御樣子を見て歸らねば此胸が、どうも濟まぬやうぢやわいなあ。

トお豐奥へ行かうとする、此の時上手障子の内にて、

鐵之　嘉兵衛の妻が見えたとあらば、それへ參つて逢はうわえ。

お豐　あのお聲は、

お豐
佐五　旦那さま。

トお合方になり、上手障子の内より松前鐵之助、着流し好みのこしらへにて、煙草盆を手に持ち出來り、上手に住ひ、

鐵之　樣子は一間で聞いたるが、何時に替らぬそちが親切、此の鐵之助が病と申すは、諺にいふ我儘病氣、決して案じる程でもないから、必ず心配してくりやるな。

お豐　ほんにお顏も常ならず、お氣の晴れぬ御樣子なれど、お床にお就き遊ばす程なことでないゆゑ、私もこれで安心いたしました。（トお豐安心の思入、鐵之助思入あつて、）

鐵之　拙者も江戸へ出府中は、國許と事替り男ばかりの勤番ゆゑ、たゞ何事もそち夫婦を力と頼み居る某、此上ともに暫くは、厄介になるであらう。

お豐　勿體ないそのお詞、御緣者の安藝樣へ御恩送りがいたしたうても、今では遠いお國詰め、せめてこちらの旦那樣のお世話をいたすが此身の願ひ、何なりと御遠慮なくおつしやり附けて下さりま

せ。

佐五　それ程お前が親切に言つてくれるを無にしても、お氣の毒ゆゑ遠慮なく、旦那様と此わしが下帶の洗濯を明日お頼み申しませう。

鐵之　それよりそちが親切なる、詞に附いて某がそちに大事を頼みたいが、何と聞いてはくれまいか。

お豐　何の御念に及びませう、此の身に叶つた事ならば、おつしやり附けて下さりませ。

佐五　して又旦那が、お豐どのへ、

お豐　お頼み遊ばす其の仔細は、

佐五
お豐　どういふ事でござりまする。

鐵之　外でもないが今晩より、御門の出入りをいたす者に、心を附けて貰ひたい。

お豐　そりや、何ゆゑでござりまする。

鐵之　何をか包まう、今日より君の御前を遠ざけられた。

佐五
お豐　何とおつしやりまする。（ト合方になり、鐵之助思入あつて、）

鐵之　古へより和漢とも例も多き無實の罪、彼の菅原の道眞公は聖賢にましませど、讒者の爲に筑紫へ左遷、それに引替へ拙者などは、取るに足らざる無骨なれど、惡人共が流言にて、淺岡どのと某

が不義をいたして居るなど、、呪詛の願書を證據となし、終に無實の汚名を着せ、お目通りを遠ざけられしが、お案じ申すは我が君樣、某お側に居ぬを附込み、若し奥御殿へ曲者などが忍び入らんも計られずとそれのみ心掛りなり、それゆゑ今宵怪しき者が入つて御門を通行なさば、大儀ながら某へ、ひそかに知らせてくれるやう、賴みと申すは此の一儀、どうぞ心を附けてくりやれ。

お豐　ほんに今日はお中邸の鹽竈樣へ、殿樣が御參詣ぢやと聞きましたが、定めてお供の旦那さま、まだ御歸館のない先きにお歸りになつたゆゑ、こりやまあ例にない不思議の事と蟲が知らすかぎつくりと、此の胸へこたへましたが、御門の事なら夫が役目、夜の目も寐ずに氣を附けまして、きつとお知らせ申しまする。

鐵之　人に勝れしそなた夫婦が、忠義を見拔き一大事の、今宵の事まで打明けて賴むも同じ主家の大事。

お豐　然し誰が其のやうな、跡方もない惡いことを、此の御家中へ觸れ歩き、

佐五　お物堅い旦那樣が、不義をなさらう謂れがないに、是れといふもお家を覘ふ、惡人どもが皆仕業。

お豐　只今はじめて承はる、私共さへ悔しいもの、

佐五　あなたの御身では御無念に、思召すでござりませう。

鐵之　それも此の身に覺えなき、濡衣なれば其の内には、

お豐　晴れる時節もござりませうが、
佐五　何をいふにも此の遠慮、
鐵之　假令出仕は叶はずとも、
お豐　其の御忠義が屆きまして、
佐五　龜千代樣の影身に添ひ、
鐵之　片時忘れぬ君の守護、
お豐　ほんに此の世はさま〴〵な、
佐五　惡人榮え善人は、
鐵之　此身に受ける不義の科、味氣なき世の、
三人　有樣ぢやなあ。（ト三人よろしく愁ひの思入。時の鐘になり、鐵之助思入あつて、）
鐵之　最早あれは芝の暮六つ、少しも早く宅へ戻り、門の出入りを氣を附けくりやれ。
お豐　其儀はお案じなされまするな、きつとお知らせ申しませう、左樣なれば旦那樣。
鐵之　くれ〴〵其儀を頼んだぞよ。（トお豐思入あつて門口へ來る、佐五平も立上り、）
佐五　嘉兵衞どのにもよろしくと、どうぞ言傳を頼みます。（トお豐門口へ出て、空をながめ、）

お豐　時々あがる雲合も、今宵はどうか強い雨に、
佐五　またばらついて來たやうだが、傘を貸して進ぜようか。
卜佐五平は有合ふ傘を出す、お豐思入あつて、
お豐　なに、それ程でもござんせぬ。どれ、お暇をいたしませう。
卜雨車合方になり、お豐は思入あつて下手へはひる、佐五平は跡を見送り、捨ぜりふあつて、
佐五　もうとつぷりと日が暮れたから、どれ、行燈の支度をしませう。
卜よろしく奥へはひる。跡合方になり、
鐵之　下人に似合ぬ彼等が親切、僅の御扶持を頂戴して御門番を勤め居れど、心は今日千石の重役にも劣らぬ彼等、人は斯くこそありたきものぢや。
卜感心の思入、奥より佐五平行燈を提げて出來り、よろしく下手に置く、時の鐘薄き雨車合方になり花道より大場道益、長合羽大小醫者のこしらへにて、蛇の目の傘をさし、下駄がけにて、跡より中間箱提灯を提げ附添ひ出來り、花道に留り、
道益　先刻あれなる松前氏の、下男が見舞を頼みしが、其の主人は我が君御社參のお供と聞きしが、何とも以て不審の事ぢや、何は兎もあれ、ちよつと見舞つて參らうか。（卜中間に案内させ、舞臺門口

へ來り、）大場道益お見舞に參つた、松前氏は、お宅でござるかな。

ト門口を明けて内へはひろ、鐵之助心得ぬ思入あつて、

鐵之　はて、お迎へも上げませぬに、如何いたして道益老には、拙者が病氣を御存じあつた。

ト是れにて佐五平前へ出で、

佐五　いえ〳〵其儀は私より、お願ひ申したのでござりまする。

鐵之　そりや、其方が賴みしとな。

佐五　先刻御門でお目に掛り、差出ましたやうなれど、少しも早く御病氣はお醫者に願ふが、手後れにならぬとやら申しますから、あなたに申さず私から、お見舞を願ひました。

道益　不斷は人並御丈夫の松前氏ゆゑ早速に、お見舞ひ申す筈なれど、此頃陽氣の替り目ゆゑか、兎角病家が多いので、つい延引仕つた。

鐵之　拙者に申さず佐五平より、粗忽にお見舞願ひしかど、只今にては此の通り最早病氣も全快いたせば、折角ながら道益老の、御診察には及びませぬ。（ト是れにて道益鐵之助を見て、不審の思入にて、）

道益　それは早速の御全快恐悅に存じまする、いやもう、外々の醫者と違ひ、藥を賣附け快くなつても、無理にすゝめる藪醫ならず、愚老もいつぞや兵部樣へお抱へとなつてより、今は御本家のお

匙同樣、御扶持を頂戴なして、殊に悴宇右衛門までお取立てに預る身分、是れと申すも甲斐殿の皆お引立てと申すもの。いやそれに只今承はれば、今日鹽竈へ御參詣のお供先にて椿事出來いたせしとやら、定めて貴殿はお供ゆゑ、其の儀は委しく御存じでござらうな。

（ト是れにて鐵之助扨はといふ思入あつて、氣を替へ、）

鐵之　成程拙者はお供にて、彼の地へ參つて戻りしが、左樣な儀は一向承はらぬが、それは定めて家中の浮說でござりませう。

道益　なに、そりや、其許には御存じないとな。

鐵之　一向に存じませぬが、して又其儀は何方にて、お聞き込みでござつたな。

（ト是れにて道益不審の思入あつて、）

道益　只今今村善太夫殿に承はつて參りました。

鐵之　そりや今村氏で。

道益　左樣でござる。

鐵之　さては彼れめも。

道益　や。（ト兩人よろしく思入あつて、鐵之助氣を替へ、）

鐵之　いやなに、彼も珍說好きゆゑ、家中の浮說を實と思ひ、お話し申した事と見えまする。

道益　いやもう、兎角に世間に事なかれ、虛說とあらば愚老も大慶、左樣なればお暇いたさう。

　　ト道益思入あつて立上る、佐五平氣の毒なる思入にて、

佐五　是れはとんだ御足勞を掛けまして、お氣の毒でござりました。

道益　何の〱、醫は仁術と申せば、足勞位は何でもござらぬ、（ト門口を明け、道益思入あつて、）何ぼ病氣が直つたとて、けんもほろゝの挨拶で、愚老に歸れと申したが、兎角病家は現金ぢやが、それに引替へ藥禮が、貸しになるのは困つたことぢや。

　　トよろしく思入あつて、中間附いて、雨車合方になり、花道へはひろ。跡佐五平もぢ〱と思入あつて、鐵之助に向ひ、

佐五　おつしやり附けもないものを、差出た事をいたしまして、旦那樣のお氣に障り、恐れ入りましてござりまする。

鐵之　いや、何の其言譯には及ばぬこと、左程に鐵之助へ心を用ゐて醫者を賴み、病氣を案じてくりやるのは忝けないが、餘人と違ひあの道益には心は許せぬ。

佐五　そりや又、なぜでござりまする。

鐵之 彼れは原田へ一味の者ぢや。

佐五 えゝ、そんならあいつも惡人へ、荷擔の者でござりましたか。

ト合方になり、佐五平びつくり思入、鐵之助こなしあつて、

鐵之 今も自ら問ず語りに、兵部殿の引立てにて其身はお匙の列に入りしと、嬉しがつて居る樣子、それに原田が奸侫に勝れし者ゆゑ、彼親子に恩義を着せ、退引きさせず味方に附けし彼等が巧み、假令この身はどのやうな病に罹り苦しむとも、餘人は知らず道益が、療治は決して受けぬ心ぢや。

佐五 左樣な事でござりましたか、さうとは知らずお抱へのお醫者の事ゆゑお見舞を、願ひましたは不調法、危ない事でござりました。

鐵之 たゞ何事も油斷大敵、萬事に心を附けてくりやれ。

ト此時ばたばたになり、下手より以前のお豐あわてゝ出來り、直に内へはひり、心の急く思入にて、

お豐 旦那樣、はひりましたく。

鐵之 なに、はひりしとは。

佐五 そりや又何が。（ト佐五平お豐を介抱する思入、お豐は鐵之助に向ひ、小聲になり。）

お豐 此夕暮を幸ひに、饅頭笠で顔を隱し、田村樣のお使ひだと、只今御門をはひりました。

鐵之　そりや曲者が入りしとな。（ト早めたる合方になり、）

お豐　中間體の大の男、合點行かずと存じまして、よく／＼見れば赤合羽の、裾からぴかりと光りましたは、銀の鐺の長刀、何でも胡散と存じまする。

鐵之　して／＼それは何れの方へ、御門をはひつて參りしぞ。

お豐　見え隱れに跡を附け、夜目にはつきり分らねど、お臺所を左りへ取り、お庭續きに御殿の方へ參りましてござりまする。

鐵之　むゝ、それぞ打捨て置かれぬ奴、是れより我が君の御寢所近くへ忍び込み、竊に御守護申し上げん。（ト鐵之助立上り、きつと思入、佐五平案じる思入にて、）

佐五　とはいへ、遠慮の御身分にて、

鐵之　はて、我も姿を身輕に出立ち、お庭傳ひに御殿の床下、これ屈竟の隱れ所。

お豐　折も折とて、此の大雨。

鐵之　假令風雨の烈しくとも、何程の事やあらん。佐五平、早く袴を出せ。

佐五　心得ましてござりまする。

ト早き合方になり、佐五平お豐奧より袴を持ちいで、お豐は是れを手傳ひ大小を持ち出で、直に鐵之

助に着せることよろしくあつて、

鐵之　かゝる椿事もあらんかと、心を盡す甲斐あつて、天の助けに曲者を、必ず生捕り惡人が、枝葉を斷つも今宵の内。(トよろしく支度をする、お豐件の大小を出し、)

お豐　お忍びゆゑにお邪魔なれど、なくて叶はぬ此の二腰。(ト出すを見て思入あつて、)

鐵之　其の兩腰を身に帶びなさば、お咎め受けし身の上に、非常ながらも上への恐れ。

佐五　それではせめてお手馴れの、此の鐵扇を御所持あらば。(ト佐五平件の鐵扇を出す、お豐思入あつて、)

お豐　假令數千の大敵でも、

鐵之　是れさへあれば、(ト鐵扇を手に取上げるを道具替りの知らせ)大丈夫だ。

ト鐵之助はきつと向うを見込む、お豐佐五平は勇ましいといふこなし、此の模樣よろしく雨車、早めたる合方にて此道具廻る。

(奥殿床下の場)――本舞臺向う奥深に四間通し誂への高二重、床下の道具、此の上に金物附黑塗の欄干、向う竹に雀の金襖、前面一面に御簾をおろし、上下とも奥深に網代塀、此前誂への四ツ目垣、上手へ寄せて大きなる石の手水鉢、此の廻り生花の葉蘭、其外所々に扇骨木檜葉などよろしく下草を取合せ、日覆より松の釣枝、尤も床下奥まで見通しにて、後に立廻りに遣ふこと、總て奥御殿御寢所

床下庭先の體よろしく、此の前淺黄幕にて、此の模様時の鐘、雨車にて道具納る。と直に赤合羽饅頭笠の○△の足輕、弓張提灯六尺棒を持ち、火の廻りにて上下より出來り、舞臺にて行合ひ、

○　そこへ行くのは、又内ぢやアねえか。

△　誰かと思つたら助内か、大分精が出るの。

○　今夜は止みツこなしに素敵に降るが、何でも斯ういふ時、えて化物や盜人などが這入る晩だ。

△　さうだ〳〵、今二の側から御寢所の方を廻つて來たが、誰にもさつぱり逢はなかつた。

○　斯ういふ晩は役目でも、誰もみんなずるけると見える。

△　然し夜さへ明ければ、ぐつすりと思いれ晝寐が出來るから、もう少しの辛抱だ。

○　そんならお互ひに、もう少しお庭の方を廻つて來よう。

兩人　それがいゝ〳〵、火の用心〳〵。

ト雨の音にて、火の廻りは上下へはひる。知らせに附き、淺黄幕を切つて落す、時の鐘、誂への唄淨瑠璃になる。

唄淨瑠璃〽五月雨に近き空さへ行く雲の、晴間もいつかばら〳〵と、卯の花くだし撫子の、花も替らぬ黑出立、對の姿も雪と見し、垣根の花の更衣

ト此文句にて、花道より澤田の局、松島の局、東の揚幕より、吳竹の局、錦木の局、何れも黒出立、懷劍を差し、好みのこしらへにて、龕燈を持ち出來り、双方よろしく花道へ留り、

澤田　散り果てし花の梢も若葉して、四月の雨の濡れ羽鳥、

吳竹　塒求むる梢さへ、今宵は水も池の面に、增りてうつる夏木立、

松島　袖の渡りと陸奥や、月吹き返す大雨に、しめる袷の涙川、

錦木　花袖の馨りかうばしく、雄島にあらぬ築山の、草さへまがふ青簾、

澤田　澤田の名さへ由緣ある、蛙の聲も途絶えして、

吳竹　その吳竹も青々と、茂る林の一叢は、

松島　人松島の影見えて、空に一聲時鳥、

錦木　對の出立も錦木に、あるかあらぬか岩藤の、

澤田　しがらむ軒の月影は、

吳竹　ても風情ある、

四人　ながめぢやなあ。

〽水にうつらふ顏世花、何れわかたぬ短夜に、猶明け易き庭の面や、嵐もいつか晴れの袖。

卜此文句の内皆々よろしくあつて、舞臺へ來り行合ふ、蛙の聲謠への合方になり、皆々顏見合せ思入あつて、

澤田　吳竹さまか。

吳竹　澤田さま、お役目、

四人　御苦勞に存じまする。（卜龕燈にて四邊へ思入して）

澤田　淺岡どのゝお賴みにて、お庭を見廻る私共、

吳竹　今日鹽竈の御社參にて、松前どのゝ不慮の濡衣、

松島　かの御方を遠ざけさせ、女子ばかりの此の御殿へ、

錦木　我が君を失はんと、曲者入らんも測られず、

澤田　殊更以て夕暮より、催す空の此の大雨、

吳竹　松前どのが御歸館に、ならぬ内は晝夜とも、

松島　心許せぬお庭先き、

錦木　今鳴る鐘は最早子の刻、

澤田　猶此上はお泉水の、邊の木々の茂みまで。

吳竹　限なく見廻る非常のいましめ、

松島　少しも早く手分けして、

錦木　君の御守護を申し上げん。

澤田　左樣なれば何れもさま、後程お目に。

四人　掛りませう。

〽音信れかはす岩梨の鐘も夜更けて藻汐草。

ト此文句にて、四人よろしく思入あつて左右へ別れはひろ、跡時の鐘、合方、蛙の聲になり、下手床下より荒木和助、黑の手拭頰冠り、同じく着附大小尻端折り、好みのこしらへにて窺ひ出來り、四邊を透し、思入あつて、

和助　恩義によつて兵部樣へ一味なしたる此の和助、田村の使ひと大雨に紛れて爰まで忍び入りしが、女ながらも淺岡が御殿の用心嚴重にて、油斷をせぬと聞くからは、こいつは迂濶に這入れぬわい。

〽玉卷く葛のよすがさへ、風には脆き芥子の花、哀れ明け行く夏の短夜。

ト唄淨瑠璃切れる。此内和助四邊へ思入して御殿を窺ふ、此時上手石の手水鉢の後より、以前の鐵之助、袴股立凜々しきこしらへにて窺ひ出で、和助の鐺を押へちよつと引戻す、和助これを拂ひちよつ

と立廻つて、ト鐵之助鐵扇にて頭を打つ、和助たぢ〳〵として額を押へ兩人よろしくきつと見得、誂への鳴物になり、和助は刀を拔き、鐵之助へ切つてかゝる、是れを鐵扇にてあしらふ立廻りになり、ト和助の刀を打落し、押へ附ける、鳴物替つて是れより柔術の立廻りになり、床下を遣ひ、よろしくあつて鐵之助和助を引附け、

鐵之　曲者を捕へてござる、何れも、お出合ひなされい〳〵。（ト上手にて）

澤田　なに、曲者が、

四人　入つたとや。（ト上下より、以前の四人出來り）

吳竹　やゝ、あなたは松前、

女皆々　鐵之助殿。

鐵之　お咎め受けし身を以て、君の御前は恐れあれど、かゝる狼藉あらんかと、竊に忍ぶ寢所の床下。

澤田　さては野心の者あつて、君を窺ふ、

女皆々　曲者なりしか。

鐵之　折よく此奴を召捕つたり。（ト和助を引据ゑる）

澤田　いつに替らぬ其のお手柄、

呉竹　折よく捕へし此者も。

松島　大方彼等が廻し者、

錦木　頭巾を取つて、面體を。（ト四人つか〳〵と行き、和助の頭巾を取り、顔見合せて皆々不審の思入）

呉竹　こりや是れ慥に、

四人　兵部さまの、

鐵之　それで樣子が。（トうなづくを木の頭）

和助　えゝ忌々しい。

ト和助は悔しき思入にて、有合ふ龕燈を仕掛にて踏み潰す、鐵之助は危ない事であつたといふ思入。澤田の局、呉竹の局、松島の局、錦木の局は和助を引立てる、此の模樣よろしく早めたる六段にてよろしく、

ひやうし　幕

二幕目

原田甲斐宅の場
田村邸假牢の場

【役名——原田甲斐則輔、神並三左衞門實は鳴神峰右衞門、荒木和助實は荒浪梶之助、田村隱岐守、

伊達兵部少輔、大場道益、渡邊金兵衛、侍四人、汐澤丹三郎、松前鐵之助、嘉兵衛女房お豐、嘉兵衛娘お梅等。」

（甲斐邸庭先の場）＝本舞臺四間中足の二重本縁附、正面墨繪の銀襖、上下建仁寺垣此前松の立木、石燈籠四ツ目垣、是れに夏草の下草、いつもの所風雅なる枝折戸、總て甲斐邸庭先の體。爰に前幕のお豐着流し前掛けにて奧へ行かうとして居るを、前幕の金兵衛袴一本差しにて是れを留めて居る、此の見得合方調べにて幕明く。

金兵　これ〳〵お豐どの、拙者が是れに控へ居るに、案内もせずつか〳〵と、何でお居間へ通るのだ。

お豐　お取次も願はずにお庭口から參りましたは、まことに恐れ入りまするが、是れまで度々上りましても、お上へ通ずる樣子もなく、一向譯が分りませぬゆゑ、それで今日は私が自身にお奧へ參りまする。

ト又行かうとするを金兵衛留めて、

金兵　あゝこれ〳〵、藪から棒に、やれ通じるの通じないのと、醫者に容體でも申すやうに、いつたいそれは何うした譯ぢや。

お豐　成程これは私があなたへ譯も申さずに、お奧へ行かうといたしましたは失禮ではござりますが、一昨日より今日で三日、娘をこちらへお留めなされて、いまだに歸つて參りませぬゆゑ、夫嘉兵

衞もきつい心配、それゆゑ今日は私が娘を連れに參りました、どうぞあなたのお取次にてお返しなされて下さりませ。

金兵　お豐どの、娘の事なら必ずともに心配をさつしやるな、一昨日から御當家へお客來がある積り、所を一日々々と段々に延引して今日はいよ／＼お出でになるゆゑ、お梅どのをお客人へお給仕に出す思召しゆゑ、何も案じることはない。

お豐　してお客樣とおつしやりますのは、どなた樣でござりまする。

金兵　お客人は外人ならず、御當家の後見兵部樣に隱岐守樣、今日お出に相成る筈、それゆゑ今日まで留め置いたが、お客來さへ濟んだなら直に宅へ歸して遣るから、嘉兵衞にも心配せぬやう、そちよりよく申したがよい。

お豐　賤しい育ちの娘ゆゑ、お客來とおつしやるのはお女中方と思ひの外、御後見樣と承はつては、猶更娘は上げられませぬ、若しお取持の御場所にて不調法でもあつた時は、取つて返しが出來ませぬ。

金兵　いや其心配は尤もだが、當時上つ方のお取持は行儀正しき者より、何も存ぜぬ女子供が、殿樣一つ差上げませうなど、申した方が却つて其座の興になり、お悅びの時節ゆゑ、それで態々其方の

娘を見立てゝ呼寄せたのぢや、殊更以て女子のこと少し位の粗相があるとも、何のお咎めのあるものぞ、必ず共に案じるな〳〵。

お豐　いえ〳〵何とおつしやいましても、失禮のあつた其時は後の祭りで私達まで申し譯がなりませぬゆゑ、どうぞ娘をあなたから、お渡しなされて下さりませ。

金兵　すりや是れ程に申しても、そちは心配いたすのか。

お豐　假令あなたがそれ程に、おつしやつて下さいましても、親の心は又格別、是非とも返して下さりませ。

金兵　それはさうでもあらうけれど、今日までも留め置いたれば。

お豐　たつて返して下さいませねば、お奥へ參つて連れて行きます。（ト行かうとするを、）

金兵　いや、お奥へは相成らぬぞ。

お豐　いえ〳〵ならぬとおつしやいましても、娘を連れて戻らねば、夫へどうも濟みませぬ。

ト留める金兵衞を振拂つて奥へ行かうとする、兩人爭ふ内奥より汐澤丹三郎、袴着流しにて獻立の書附を持ち出來り、兩人の眞中へはひる、お豐思はず丹三郎に突當り、びつくりなし、

や、あなたは汐澤丹三郎樣。

丹三　御門番の、お豐どのではござらぬか。
お豐　そんならやつぱりあなた樣も、此方へお出でゞござりまするか。
丹三　如何にも今日御當家へお客來があるに附き、戸田氏のお頼みにて、斯樣に膳部の獻立萬端拙者へ指圖仰せ附けられ、お手傳ひに參つたのぢや。
金兵　それ見たことか、先刻より拙者が申すを實とせず、たつて娘を連れ歸ると留るもきかず申せしが、是れにて疑ひ晴れたであらうな。
お豐　さあ承はると猶の事心配になりまするが、いよ〳〵今日お客樣が、お出でになるのでござりますか。
丹三　おゝなるとも〳〵、仕出しを入れて膳部まで整ひあれば、おッつけお入りになるであらう。
お豐　左樣なれば、あなた樣へ、折入つて私がお願ひがござりまする。
丹三　して、其の願ひと言はるゝは。
お豐　外のことでもござりませぬが、娘の梅が一昨日よりお客樣のお出でに附き、お給仕役に差上げましたが、只今これなる金兵衛樣より承はれば、お出でになるのは御分家の御後見樣、なか〳〵以て私風情の下賤の娘がお給仕などゝは思ひも寄らぬ事ゆゑに、お暇を願ひに參りましたれど、此

御用の濟まぬうちは返すことはならぬとあるゆゑ、どうぞあなたのお心添へにて、娘に粗相のござりませぬやうお引廻しを願ひまする。

丹三　何事の爭ひかと手前も不審いたせしが、娘お梅が事でありしか、それは必ず心配いたすな、よしなに心添いたして遣はす。（ト是れにてお豐安心せし思入にて、）

お豐　そのお詞で落着きました、汐澤樣がお出でなくば實に安心出來ぬ所、いやさ、安心しては居るもの〻、若しも粗相があらうかと、案じ過して居りましたが、是れでやう〳〵落着きました。

丹三　さて〳〵女と申す者は、心の狹い者であるわえ、よしんば彼れに粗相があるとも、此方にて借りた娘、原田氏が其儘に何打捨て〻置かれうぞ、殊には御家の御執權、假令幾日留め置くとも、其身の爲に惡しきやうな事は必ずなきゆゑに、決して心配せぬがよい。

金兵　汐澤氏の仰せの通り、長く主人が留め置くほど其身の德にならうも知れぬ、よく譬にも申す通り、女は氏なうして玉の輿と、主人國許には歷然とした奧樣もござれども、江戸表にては御獨身、若しお梅が御意に叶ひお手でも附いた其時は、言はずと知れし直に權妻、願うてもない其方達が出世の蔓と申すものぢや。

お豐　そりやもうあなたのおつしやる通り、氏素性もない賤しい身でも、娘のお蔭で親子とも榮耀をい

たすは往々ある習ひ、なれどもそれがなりませぬは、實は義理あるなさぬ中、身腹を痛めぬ娘ゆゑお金に目が暮れ御大身へ、お妾などに差上げては夫嘉兵衛は申すに及ばず、私までが世間の人へどうもそれでは濟みませぬ。(ト是れを聞き丹三郎思入あつて、)

丹三 然らばそちの娘御は、實の子にてはあらざるか。

お豐 はい、貰ひましてござりまする。(ト丹三郎不審の思入、金兵衛思入あつて、)

金兵 いや、よい金箱を貰ひ居つた。

丹三 義理ある娘とあるからは、心配いたすも無理ならず、上つ方のお給仕は手前が萬端教へてやれば氣遣ひいたさず、歸宅のいたしやれ。

お豐 宅へ戻つて委細を話し、安心させます程に、何卒お願ひ申しまする。

金兵 汐澤氏がお請合とあれば、お給仕の儀は氣遣ひなく、夕刻迎ひに參るがよい。

お豐 左樣なればお二人樣、

丹三 嘉兵衛によろしく申してくりやれ。

お豐 有難う存じまする、(トお豐挨拶なして平舞臺へ下り、枝折戸の外へ出で、思入あつて、)汐澤樣があれ程に、請合うては下さるものゝ、どうも仔細が。

丹三　え。
金兵　いえなに、いづれ夕刻上りまする。
お豐　卜唄になり、お豐跡を案じる思入にて花道へはひろ、合方引き流し、金兵衞思入あつて、
金兵　いや汐澤氏のお扱ひにて、やう〳〵お豐めが歸りましたが、女の强情には困り切ります、先刻より此處で種々申し談じましたが、何でも娘を連れて歸ると、拙者も弱り果てました。
丹三　委細の事は存ぜねども、一昨日より原田氏の手許へ彼れを引附け置くのは、餘程御執心と見えますな。
金兵　遂に婦人に目を掛けぬ御氣質でありながら、どうした事か彼女を呼び寄せ、晝夜を分たずお側にて、御酒の相手をいたさするは、一圓合點が參らぬて。
丹三　然し此道ばツかりは、譬へば名將勇士たりとも、又別なものでござれば、御主人にも御出府の後、御獨身では却つて御氣鬱にござらう程に、斯樣なお伽の出來るのが、お體の爲には藥になりませう。
金兵　藥と申せば最前より、大場道益老が入來にて、奥の閣ひで酒宴最中。
丹三　然らば大場道益老も、お客來の御連中でござるかな。

金兵　いや左樣ではござらぬが、先刻よりさいつ押へつ、彼の梅が酌にて、五德になつて積るお話し、あゝ、身共もどうやら思ひ出したら、喉がぐびくいたすやうだ、汐澤氏眞平御免下され、（ト立上り、）どれ、附込みといたさうか。（ト唄になり、金兵衞奥へはひる、丹三郎思入あつて、）

丹三　色好まざるは玉の杯底なきが如しと、實に兼好が徒然草に出せし文も理なるか、あの物堅き原田氏も梅が色香に心動き、今日客來の前方より、宅へ引留め手料理の、其の註文の彩どりも、（ト獻立の書附を取上げ、）明していへぬ亭主役、結ぶ針魚の獻立ても心を盡す初ざかな、此味ひは茶人でもやつぱり違はぬ戀の道、爰等が思案の、（ト書附を下へ置くを道具替りの知らせ、）外ちやなあ。

トよろしく思入、合方調べにて此の道具廻る。

（茶座敷酒宴の場）――本舞臺三間常足の二重、向う一間の床の間、眞中腰張りの茶壁、下手三尺太鼓張の茶立口、同じく下手棲誂へのにじり口、三方土庇、上下後へ下げて一面の低き土塀、下手に狐格子の出入り、諸所に生花を植ゑ、下手に置燈籠突這を据ゑ、日覆より松の釣枝、總て此の道具本物と見える茶座敷の模樣、二重に酒肴を並べ、上手に原田甲斐袴着流しにて坐蒲團の上に住ひ、お梅着流し娘裝にて酌をなし、下手に前幕の道從、以前の金兵衞と酒の相手をして居る、誂への合方にて此道具留る。

道益　先刻より此處へ早く參つて御主人の、お相をなさればよいことに、貴殿は何れへおいでなされた。
金兵　いやもう、身共も疾うより是れへ參り、お相をいたす心得なれども、入替り立替り繁く人の參るゆゑ、思はず延引いたしまして、よつぽど頂戴いたし損なつた。
甲斐　その替り金兵衛には、大きなもので遣すゆゑ、駈附け二三獻過すがよい。（ト甲斐有合ふ杯を金兵衛にさし、）梅、酌をしてやりやれ。
お梅　畏まりました。
金兵　是れは有難い仕合せにござりまする、斯く別品のお酌にて、頂戴いたすのみならず、御酒の肴にお國の雲丹とは、一入賞翫いたすでござる。お梅どの、憚りでござるな。
　　　トお梅酌をして、金兵衛重ねて呑む。
甲斐　して分家よりの客來は、まだ沙汰はあらざるか。
金兵　未だお人は參りませぬが、其替り昨日よりうるさく當家へ參るのは、お梅が母のお豐でござる。やれ、嘉兵衛が案じるの、又は娘に用事があるのと、うるさく迎ひに參りまする。
お梅　そんなら度々か、さんが、こちらへ迎ひに參りましたか、さういふ事なら少しも早く、戻りたう存じまする。

道益　折角そちは當家へお給仕役に參りながら、未だお客の御入來なき內歸るといふがあるものか、それ程宅を心配するなら、愚老が是れより戾りがけ、母や嘉兵衞に傳言いたし、安心させて遣はさう。

甲斐　成程是れはよい思召し、然らば左樣願ひませう。

金兵　道益老がそちの宅へ御傳言下さる上は、少しも心配いたさずに、今兩三日逗留して主人のお伽をいたすがよい、さうさへすれば身共まで、御酒のお相が出來るといふもの、何と左樣ではござらぬか。

道益　さらばでござる、然し、未だ年若の世間知らずの生娘なれば、兎やかう申すも尤もなれど、是れが一度でも殿方の味をしめた其時は、何の否やはござらぬて、それ故愚老も立合ひまして親へ說得いたしますれば、必ずお案じなさるゝな。

甲斐　いや、左樣貴殿のお察しでは、身共甚だ迷惑いたす。

道益　はてお隱しあるな原田氏、愚老脈體ばかりに限りませぬ、人相もうかゞひますて、はゝゝゝ、いや、御酒の上とは言ひながら詰らぬことを申し上げ、思はぬ長座を仕つた最早お暇いたしまする。

ト道益會釋して立上るを、甲斐思入あつて、

甲斐　道益老、暫くお待ち下され。

道益　何ぞ御用でござるかな。

甲斐　ちと其許に密々に、お談じ申す一儀がござる。（ト是れにて道益甲斐の側へ住ひ、）

道益　して、其お談じと申すのは。

甲斐　別儀でもござらぬが、爰では少々申しにくい。（ト道益膝を打ち、）

道益　はゝあ、御縁談の儀でござるか、それは愚老身命に替へて、御周旋のいたしまする。

金兵　お梅を伴ひ次の間へ、暫く下つて居りませうかな。

甲斐　いや／＼左樣な儀ではあらざるゆゑ、貴老は居間へお出で下され。

道益　然らば御同伴仕つり、委細承はるでござりませう。（ト甲斐立上り、お梅へ思入あつて、）

甲斐　こりや金兵衞、必ず共に跡へ心を、いやさ、心遣ひをいたさぬやう、そちより梅に申し遣はせ。

ト唄になり、甲斐先きに、道益附いて茶立口へはひる。

金兵　これお梅、そちは宅へ歸りたがるが、あのむさくるしい御門番で、一生涯を暮すより、當家へ上つて勤めなば、結構であらうがな。

お梅　その仰せは御尤もながら、譬に申す住めば都、一生襤褸を身に纏ひ其日を送る暮しでも、やつぱ

り居馴れた宿の方が、結句ましでござりますれば、どうぞ返して下さりませ。

金兵　はてさて、そちは悪い料簡、斯うして毎日留め置くのも、是れには深き御主人の思召のある事ぢや、若し其方が御意に叶ひ、お手が附いた其時は、國表では妾なれど江戸勤番の其内は主人のそちは御本妻、何でも言ふ日が出放題、春は上野の花園に、暑中を凌ぐ箱根の湯治、廿六夜は袖ケ浦、雪見はいはずと向島、その外衣類着物まで自由になるも其方が、心たつた一つのことゆゑ、それぢやに依つて其様に、歸宅いたすと申さずに、幾日も當家に居るがよいわい。

お梅　いえ〳〵何とおつしやいましても、片時も早く私は戻りたうござります。

金兵　むゝ、是れ程身共が勸めても、達て歸宅いたしたいと、申す事なら是非がない、お客が濟めば送つて遣はさう。（ト此時後で手を拍つ、）はッ〳〵只今參りまする。こりや〳〵お梅、御用の筋を承はるまで、必ず外へ行くまいぞ。

お梅　畏まりましてござりまする。

金兵　どれ、御用を辨じて參らうか。

ト唄になり、金兵衛思入あつて奥へはひる、お梅四邊へ思入あつて、

お梅　どうした譯やら知らねども、一昨日こちらへお客様があるからわたしを貸してくれと、お迎ひゆ

ゐに上つて見れば、今日で三日の其間たゞの一人もお客もなし、此お座敷へはひつた儘で、少しも外へ出る事ならず、金兵衛さまのお話しでは度々迎ひに來る樣子、唯とゝさんやかゝさんが、案じ過してござんせう、ても氣の揉めることぢやなあ。

トお梅俯向き愁ひの思入、誂への合方になり、奥より以前の丹三郎出來り、

丹三　こりや梅、何を鬱いで居るのぢや。（ト是れにてお梅心附き、）

お梅　や、あなたは丹三郎さま、そんならやつぱり此方のお內へ。

丹三　おゝさ、お客來のあるに附き、膳部掛りの手前ゆゑ料理の獻立萬端に指圖を賴まれ參つたが、承れば其方も、一昨日より當家へ參り、泊つて居ると申すことぢやの。

お梅　疾うにお客がいらつしやると、お迎ひゆゑに參つて見れば、お出でになるのは御後見樣、何にも知らぬ私ゆゑ、心配いたして居ります。

丹三　それは必ず案じぬがよい、お給仕萬端お取持は身共が敎へて遣はす程に、心置きなく勤められよ。

お梅　それは〳〵御親切に、有難い事でござります、どうぞよしなにお指圖を、偏にお願ひ申しまする。

丹三　其儀は身共が心得居るわえ。

お梅　有難う存じますハ。（ト丹三郎思入あつて、）

丹三　ちと其方に承はりたいは、今日までも御門番の嘉兵衞の娘と存ぜしが、先刻母が話しでは義理ある中の親子とやら、其方は何れの產れ、何者の娘なるぞ。

お梅　御親切のお詞にお話し申すも淚の種、元私は御同家中互三平と申す者の遺兒の一人の娘、また乳吞兒で居る時分、父上には殿樣へ、御諫言を申し上げしが御不興にてお手打となり、跡に殘りしかゝさまやまだ頑是なき私まで其場より御追放、便る知邊もなく〳〵に、途方に暮れし其處へ御門番の嘉兵衞どのが路頭に迷ふを不便に思ひ、丁度其頃實の子が疱瘡にてとられた當座、乳のあるのを幸ひと家中へ內證でわたしを貰ひ、育てくれたる義理ある二親、その後實の母さまは何れへお出でなされしやら、皆暮れ行方が知れませぬ。（ト淚ながらによろしく思入）

丹三　扨はそなたは三平殿の、遺兒であつたるか、知らぬ事とて今日の今まで嘉兵衞の娘と存ぜしが、

お梅　追放者の血筋ゆゑ、深く包みて此事は、誰にもお話し申しませぬが、御代替りになりまして、今は憚ることもなく、それゆゑお話し申しまする。

丹三　して、互氏の實子といふ、何ぞ證據はあらざるか。

お梅　證據は父が橫死の後、肌身放さず戒名を、守りに入れて持ちまする、（ト帶留の守りの中より戒名を出し、）御覽なされて下さりませ。（ト丹三郎戒名を開き見て、）

丹三「萬治元年十月三日、淸月淨光信士、俗名互三平」むゝ、そんならそちが實の親は三平殿であつたるか、父上無二の交りせしも、今となつては此の姿。
お梅　お主の爲とはいひながら、其命をば御馬前で、
丹三　捨つる心で諫言を、申し上げしはあつぱれ忠臣、
お梅　もしやあなたの親御樣も、
丹三　三平殿と兄弟の、約を結びし深き緣、
お梅　知らぬ事とてお互ひに、
丹三　名乘らぬ内は他人同士、（トお梅思入あつて、）
お梅　え、さうして名乘りし其上は、
丹三　さあ、斯う明し合ふ上からは、そなたはわしの許嫁ぢや。（お梅びつくりなし、）
お梅　そりやほんまの事でござりますか。
丹三　父丹左衞門と三平殿が、藁の上より許嫁ぢや。（ト是れにてお梅嬉しき思入にて、）
お梅　すりや、あのあなたと私は、ほんまの許嫁でござりまするか、こりやまあ夢ではないかいなあ、（ト恥かしき思入にて、）實は疾うから私も、とても女子に生れたなら、あなたのやうなよいお方を

夫と定めて一生涯、女夫になつて居たいものと明暮お慕ひ申しましたが、今は賤しい此身ゆゑ、心で心に異見をなし、わたしやあきらめて居りましたわいなあ。

丹三　天晴見上げた其の心底、假令錦は飾らずとも、清き心が何より貞女。

お梅　そんならわたしを見捨てずに、やつぱり親の許嫁に。

丹三　おゝさ、約束變せぬ女夫中。

お梅　すりや、あの、きつとでござりまするか。

丹三　何の替らう、まことのことぢや。（ト丹三郎お梅の手を取り引寄せる）

お梅　えゝ、嬉しうござんすわいな。

ト丹三郎の側へ寄添ひ、恥しさうに顔を隠す、此時後の襖を明け、甲斐親ひ居て、

甲斐　不義者見附けた、そこ動くな、（ト前へ出る、兩人びつくりなし逃げに掛るを、甲斐しつかと押へ）此の場はいつかな、立たせぬぞ。（トきつといふ、誂への合方になり、丹三郎手を突き）

丹三　許嫁とは申しながら、執權職のお宅にて不義を犯せし身の大罪、申し譯なき此身のしだら、何卒お慈悲を持ちまして、此場に於て拙者めを、御法通りの御仕置に、どうぞ遊ばして下さりませ。

ト丹三郎覺悟の思入、お梅びつくりなして、

お梅　いえ〳〵あなたに罪科は、皆私より申せしこと、丹三郎樣はお助け下され、お慈悲に愛で私を
お手に掛けて下さりませ。（ト前へ出るを、丹三郎搔き退け、）

丹三　何のそちに科があらうぞ、その成敗には拙者めを。

お梅　いえ〳〵、どうぞ私を。

丹三
お梅　お手に掛けて下さりませ。（ト兩人爭ふを、甲斐きつとなつて、）

甲斐　不義は嚴しく禁じある、其の場所柄も辨へず、人もあらうに某の邸宅におき密會なすとは、言語
に絕えし不屆き奴、諸人の見せしめ此處で、身が成敗をいたしてくれん。

丹三　斯くお目立ちまする上からは、元より命は覺悟の前。

お梅　どうぞ此の場で共々に。

丹三　さゝ、御存分に遊ばしませ。（ト兩人合掌なして覺悟の思入、）

甲斐　いふにや及ぶ、覺悟いたせ。（ト立上つて刀を拔き、丹三郎の目先へ突附け、）えい、（トむね打に打つ、兩
人目を閉ぢ、ぢつと覺悟の思入、甲斐感心せし思入にて、）はて、大丈夫なる其魂、不義の成敗止めに
いたす。（ト兩人目を開き、）

丹三　何と言はるゝ。（ト合方になり、）

甲斐　討つべき所を討たずして、表向にて某が此場に於て媒介なし、女夫になして遣はさん。

丹三　え、不義の科ある兩人を、

お梅　原田樣が媒介遊ばし、

丹三　祝言さして下さるとは、

兩人　一圓合點が參りませぬ。

甲斐　合點ゆかぬは尤もなれど、如何にも二人が天晴なる、其の魂に一命助け、媒人いたし遣はすのぢや。

丹三　すりや、原田氏には御本心に、媒人なして兩人を、

お梅　女夫になして下さりまするか。

甲斐　如何にも。

兩人　えゝ、有難う存じまする。

甲斐　幸ひ爰に有合す、先づ杯を其方より。（ト以前の杯を取つてお梅にさす、）

お梅　斯う物事が改まると、どうもお恥かしう存じまする。

甲斐　はて初心らしい其詞、世間晴れての女夫ぢやわえ、（ト甲斐酌をなし、お梅呑み干し丹三郎呑んで甲斐

の前へ（置く、）目出度く納杯いたすでござる、（トお梅酌をして甲斐呑んで、）此の婚姻を豊が聞かば、嘸
悦ぶ事であらう。
丹三　思へば最前參りし折、梅を伴ひ戻りなば、此の悦びは出來まいもの。
お梅　今となつては私も、度々お暇願ひましたは、面目なうござりまする。（ト甲斐思入あつて、）
甲斐　お手前方と斯くまでに因みを結ぶ上からは、ちと折入つて此方より、お頼み申す一儀がござるが
何と聞き濟んでは下さるまいか。
丹三　何がさて、斯くまでに御恩を受けし其許ゆゑ、身に叶ひしことならば。
甲斐　すりや、聞き屆けて下さるとな。
丹三　如何にも、承知いたすでござる。
甲斐　いや、それは千萬忝けない、他聞を憚る事ゆゑに、梅は暫く次の間へ。
お梅　畏りましてござりまする。（ト立上り行かうとして、跡を案じるこなし。）
丹三　原田氏の仰せゆゑ、次へ參つて控へて居やれ。
お梅　それぢやと申して、どうやらあなたが。
丹三　えゝ、參れと申すに。

お梅　ハアイ。（ト唄になり、お梅是非なく奥へはひる、甲斐跡を見送り、）

甲斐　汐澤氏、是れへ。

丹三　はッ。（ト誂への合方になり、丹三郎甲斐の側へ進む、）

甲斐　餘人を遠ざけ其許へ、お頼み申す其前方、とてもの事に此處にて誓文を拜見いたさう。

丹三　如何にも、承知いたしてござる。（ト丹三郎思入あつて金打する、甲斐安心せし思入にて、）

甲斐　先づは是れにて、滿足いたす。

丹三　して拙者へ、一儀と仰せあるは。

甲斐　斯く金打まで拜見いたせば、よも御違約はござるまいな。

丹三　是れは又きつい御念、何事のお頼みか存ぜねども、斯く金打いたす其上に、若し御胡亂と思召すなら、拙者が一命其許へ、誓ひのしるしに捧げ申す。

甲斐　いや、それにて安心仕つる。

ト甲斐丹三郎へ思入、合方きつぱりとなり、丹三郎うなづき、路地草履をはき、切戸口上下へ心を配る、甲斐は茶立口を窺ひ、よろしく思入あつて二重へ住ひ、甲斐懷中より連判の一卷を出し、

汐澤氏、先つ血判いたされよ。

丹三　どれ、（ト件の一卷を繰廣げ見渡してびつくりなし、）やゝ、こりや是れ、御分家兵部樣を棟梁となし、江戸詰の一家中は大半一味、むゝ、（ト思入あつて、）して、連判に與なすには、定めて深き仔細ぞあらん。

甲斐　いかにも、大義を企つる仔細と申すはさいつ頃、兵部公の屋敷へ招かれ、見立に預り、此の甲斐を同志に語らひ、御子息たる市正殿を世に立てんと、退引きならぬお頼みに、引くに引かれず一味合體なせし上は、是非とも大望成就させんと、某苦肉の策を構へ、既に先殿綱宗公に、神並荒木の兩人より淫酒をすゝめ浮れ女に心亂せし折を窺ひ、かゝる御所行ある時はお家のお爲にならざると殿を直樣袖ケ崎へ御隱居となし、御家督は市正樣と思ひの外、僅五歲の龜千代殿に、御代を取られし我等が殘念、然し斯くまで企てし一義を空しくなさん事鳥の翼を得ざるが如し、たゞ此上は幼君さへ失ふ時は、兵部公は言はずと知れし當家の御先祖正宗公の、十三番目の御男子にておはしませば、其嫡子たる市正殿にて御家督あるは是れ順道、是れを計るは毒害より外に手段の候はず、此儀を賴むは御膳番たる其許より外になし、何卒配膳に毒を仕込み、時を計りて龜千代殿に、首尾よく捧げて貰ひたし。（ト甲斐思入にて言ふ、丹三郎びつくりなし、）

丹三　すりや御世取り樣へ拙者より、あの、毒害いたせとな。

甲斐　左ある時には此甲斐が、御身の科にならざるやう、上をよしなに取計らひ、事成就に至りなば追追登庸おさせ申し、やがて老臣の列に加へ、本國四十八館の一つをお預け申さん程に、此儀御承引下さらずや。

丹三　さあ、それは、

甲斐　但し一義の列に入るは、御不承知でござるかな。

丹三　さあ、それは、

甲斐　それとも、御承知下さるか。

丹三　さあ、

甲斐　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

甲斐　誓ひの金打なされしゆゑ、密事發言なせし上は、其儘は立たせぬ。汐澤氏、さあ御返答は如何でござる。（ト甲斐刀の鍔許をくつろげ、きつと詰め寄る、此内丹三郎ぢつと思入あつて、）

丹三　如何にも、お頼み承知いたした。

甲斐　すりや、御承引下さるとな。

丹三　聊か違變はいたしませぬ、（ト卷を引寄せ、血判をなし、）誓ひし血判、まツ此通り。

ト丹三郎前へ出す。

甲斐　むゝ、是れにて某安堵いたした。（ト爰へ以前の道益出で、）

道益　原田氏、嘸御滿足でござりませう。

丹三　さては疾くより道益老にも、此場の樣子を聞かれしか。（ト丹三郎刀へ手を掛けるを、）

甲斐　あいや、必ず御心配あるな、則ち毒藥調合は、道益老が祕密の配劑。

丹三　流石は貴殿の御心中驚き入つたるお手配、是れにて身共も安心いたす。

ト奥より金兵衞出で、下手に手をつかへ、

金兵　はツ、只今御後見伊達兵部樣、田村隱岐守樣御同伴にて、松前鐵之助を召連れられ、御入來にござりまする。

甲斐　むゝ、最早入來に相成りしとか、然らば衣服を改めん。

丹三　拙者は料理の獻立萬端、

道益　愚老もお取持いたすでござらう。

金兵　どれ、お茶の支度を仕つらう。

甲斐　何れも、申すまでも候はねど、此場の事は此場限り。

丹三　其儀は拙者も心得居れば、やはり料理の雇人。

道益　愚老は替らぬ大場道益。

金兵　左樣ござらば御主人樣。

甲斐　どりや出迎ひを、（ト立ち上るを道具替りの知らせ）いたさうか。

トやはり右の合方にて此道具廻る。

（元の庭先の場）――本舞臺元の庭先の道具、二重の上手に兵部繼上下、大小にて住ひ、眞中に隱岐守下手に鐵之助、同じく繼上下大小にて、前に書院煙草盆を置き、住ひゐる、此の見得しらべにて道具留る。

兵部　先夜深更に及びてより、御殿の床下へ忍び入りし元我が家來荒木和助を、鐵之助が働きにて其場を脫さず捕縛なし、早速調べをいたす筈を、所勞に犯され思はずも立合の儀延引せり、隱岐殿にも出役の儀、御苦勞に存じ申す。

隱岐　吾等に於てもお察し申す、只憎きは彼の曲者、田村家よりの使ひと僞り、御門を通行いたせしゆ

ゑ迷惑かゝり、預り中牢舍させしが、今日こそは是れへ呼出し、篤と吟味を遂ぐるでござらう。

鐵之　執權原田甲斐殿が、御出座なくとも此處で、拙者が詮議の仕らん。

兵部　尤もなる其の詞、遲刻いたせば、詮議の妨げ。

隱岐　それ、曲者を呼出せ。

鐵之　はッ、畏つてござる、（ト鐵之助平舞臺へ下り、向うへ思入あつて、）それに控へし曲者和助、此處へ引立て參れ。（ト向うにて、）

四人　畏つてござりまする。さ、立ちませい。

ト時の太鼓になり、前幕の和助五十日鬘好みのこしらへにて繩に掛り、侍四人大小袴股立にて割竹を持ち附添ひ出で來り、花道にて、和助舞臺を見込み、思入あつて平舞臺へ來り、下寄りに住ふ、四人後へ控へ、

はッ、召連れましてござりまする。（ト兵部思入あつて懷中より一札を出し、）

兵部　こりや和助、面を上げい。こりやよッく承はれ、其方過日身が屋敷を暇を願ひ、斯くの如く直筆にて引取りの證書を受取り引渡せしが、直に其夜通用門より田村殿の使ひと僞り、奧御殿へ忍びしは言語に絕えし不屆奴、假令暇が出たればとて以前は家來の其方ゆゑ、思ひ寄らざる迷惑掛り、

是れに列坐の田村公の、手前と申し面目なし、さあ有體に此處で、包まず白狀してしまへ。

ト和助顔を上げ、

和助　斯くお捕へになりましたら、幾ら白狀しない氣でも、それからそれと拷問の度重つた曉は、どうでも申し上げることゆゑ、痛い目しない其内に包まず爰で申しますが、實は是れまで兵部樣の御恩を受けて居る内も、身性が惡く幾度かしくじつた揚句の果てが到頭今度追放され、いはゞ俄の天竺浪人、どこのいづくへ行かうにも先立つものは錢金ゆゑ、思案に盡きた出來心で、奥御殿へ忍び入りお手許金を盜み取り、樂をしながら段々に上方筋へ行かうと思つた、其の魂膽もぐれは、いゝまに、馴れぬ事とて生捕られ、殘念なことでござりまする。

鐵之　默らう、こやつ金子を奪ひ取らんといふ巧みの者が、何ゆゑ用心嚴しき奥御殿へ廻り遠くも忍び入らうぞ、察する所何者にか、そちや頼まれて我が君を、殺害なさんと奥庭へ忍び入つたであらうがな。

和助　いや頼まれた覺えはない、小祿取りの家中などへ賊にはひつて金を盜めば、跡の難儀が氣の毒ゆゑ、そこを察して小前を助け大々名の手許金なら、百や二百は盜んでも跡の障りになるめえと、そこで御殿へはひりましたが、白狀するのは此事ばかり、外に仔細はござりませぬ。

ト和助づう／＼しき思入、鐵之助きつとなつて、

鐵之　やあ假令如何程陳ずるとも、此鐵之助はまことゝなさうか、其の申し譯相立たぬぞ。

隱岐　こりや和助とやら、其方は惡い料簡、當時龜千代殿の御後見たる兵部殿を始めとして、相役たる某まで出席なして此の調べ、よしんば白狀いたしたとて、又其の時は寛仁の御處置を以て執成しいたせば、包まず是れにて申してしまへ。

和助　田村樣まで同じやうに、幾ら白狀しろと言つても、金を盗みにはひつたより、外に譯はござりませぬ。

隱岐　すりや是れ程に事を分け、某執成しいたさんと、所存の程を申し聞すに、それでも白狀いたさぬか。

和助　へい、どうも申し上げやうがござりませぬ。

隱岐　よし、所詮たゞでは申すまい。こりや松前、それにて彼れを拷問いたせ。

鐵之　はツ、畏つてござりまする。（ト和助の側へ行き、）さあ、有體に申し上げるか、但し白狀いたさずば、此の鐵之助の鐵拳、（ト繩附のまゝ襟上を取つて、）カウ／＼／＼、さあ申し上げい／＼。

トしたゝかに打て、据ゑ、トゞ繩の間へ鐵扇を入れ腕をこぢ上げる、和助體を藻掻き苦しむ、二重の兵

部是れを見て、氣を揉むこなし。
是れでも白狀いたさずば、汝が背骨をくだいてくれん。（ト鐵扇を振上げるを兵部たまり兼れ、）

兵部　松前、控へい。

鐵之　でも、白狀いたすまでは、

兵部　いや、其の詮議の前方、其方にも調べがある。

鐵之　何とおつしやります。

兵部　調べと申すは先達て、邸內鹽竈神社へ龜千代殿參詣の砌り、其方は局淺岡と不義の風說申し開きの立難く、當主の目通り遠ざけられしにてはあらざるか。

鐵之　え。（トぎつくり思入、）

兵部　さあ、其の遠慮の身を以て、何ゆゑみだりに奥御殿へ、夜中一人立ち入つて、其の曲者を取押へた。

鐵之　はツ、其お咎めは恐れ入れど、宅に愼み居る所へ御門番たる嘉兵衛が妻、怪しき者が御門內へ通行せしと知らせしゆゑ、遠慮の身をも顧みず曲者の跡を附け、奥御殿の床下にて取押へましてござります。（ト隱岐守思入あつて、）

隱岐　こりや尤なる其の詞、忠臣無二の松前ゆゑ、君の大事と心得て、遠慮の身をも打忘れ、曲者捕へしものならん。

兵部　いや／＼、其の申譯は相立たぬ、御門番より屆けがあらば、なぜ其筋へ訴へ出で、餘人を頼み取押へぬ。

鐵之　其儀は心得居りますれど、夜陰と申し火急の場合、若し訴へる其隙に曲者逃せし其の時は、詮議の蔓を失へば、却つて上への不忠と存じ、直樣拙者取押へました。

兵部　汝如何程申し解くとも、場所柄といひたゞ一人、淺岡の許へ忍ばんと竊に御殿へ罷り越し、折よく曲者有合せしを、取押へたに相違ない。

鐵之　假令何やう仰せあるとも、左樣な覺え決してござらぬ。

兵部　然らば遠慮の身を以て、何ゆゑ御殿へ忍び入りしぞ。

鐵之　さあ、其儀は、

兵部　但し是れにて言譯あるか。

鐵之　さあ、

兩人　さあ／＼／＼。

兵部　申譯の立難き、御法を破りし憎き松前、汝も罪は脱れぬわい。それ、彼れめに繩打て。

四人　はッ。（ト四人立ち掛るを奥にて、）

甲斐　何れも、暫くお待ち下され。

侍　あのお聲は、

四人　原田氏。

　ト誂への合方になり、奥より甲斐繼上下大小にて出來り、二重下手に住ひ。

甲斐　これは〳〵御兩所には、ようこそ御入來、衣服を改め居りしゆゑお出迎ひも仕らず、失禮御免下されい。

隱岐　計らざる椿事出來、執權たる其方にも、心勞の程察し入る。

甲斐　恐れ入つたる御仰せ、委細は次で承はりしが松前氏をお調べの儀、拙者へお任せ下さらば、大慶至極に存じます。

隱岐　兵部侯のお直のお調べ、出席いたせし手前に於ても、甚だ恐れ入りますゆゑ、此儀其方に申附けん。

甲斐　委細承知仕つりまする。

兵部　して其方が何ゆゑに、御法を破りし松前の、調べいたすを横合より、待てと聲かけ止めしぞ。
甲斐　御後見の御兩所へ、恐れ入つたる事ながら、餘人は知らず鐵之助、何ゆゑあつて淺慮と不義などをいたしませうや。
兵部　何と。
甲斐　先日鷹狩御參詣の砌り、拙者お供に列り居れば鐵之助が不義の汚名遁つて申解んに、有合さねば殘念至極、既に先夜も曲者を忠義の爲に遠慮の身も、忘れて召捕り候は、是れ鐵之助が天晴手柄。此功に愛で今日より、元の役目に歸參の儀を、願はしう存じまする。
隱岐　甲斐が願ひは隱岐守然るべしと承知いたせど、兵部殿の思召しは、（ト隱岐守兵部へ思入）
兵部　不承知なりと申したけれど、甲斐が此の場の執成しといひ、貴殿が左樣思さるゝなら、萬端そちに任すであらう。
隱岐　すりや某と御同意とな、それは近頃重疊でござる。甲斐、よしなに計らへ。
甲斐　はツ、早速のお聞き濟み、有難う存じまする。（ト鐵之助に向ひ、）松前氏にはお聞きの通り、賊を捕へし功に愛で、今日より以前の如く館へ出仕いたされよ。
鐵之　すりや、其許のお執成しにて、元の身分に歸役とな。はツ、有難う存じ奉つりまする。

ト甲斐の前へ進み出て、

甲斐　こりや和助、先刻より松前氏が辛き拷問いたせども、金子を奪ひに奥御殿へ忍び入りしと申すばかり、外に一向白狀せぬが、こりや金子ばかりではあるまいがな、定めし何者にか賴まれて、龜千代君を失はんと、忍び入りしに相違あるまい。さあ、有體に申してしまへ。

トきつと言ふ、和助顏を上げ甲斐を見て、

和助　言つてしまへとおつしやるなら、包まず爰で申しますが、其賴み手は現在あなたが、(ト言ひ掛けるを甲斐思入、和助呑込み、)いやさ、あなたが新規にお調べなくとも、其前方に松前樣が、力任せの鐵扇に打たれてさへも白狀の、出來ぬといふは覺えのない事、金を盜みに入つたといふより外はござりませぬ。(ト和助よろしく思入にて言ふ、)

甲斐　すりや如何やうに拷問なすとも、金子を奪ひに入りしより、外に白狀いたさぬな。

和助　決して白狀いたしませぬ。

甲斐　やあ、上を僞る不屆き奴めが、(トきつと言ふ。是れにて兵部和助顏見合せ合點の行かぬ思入、隱岐守始終心を附けるこなし、甲斐詞を和らげ、)こりや、一旦人に賴まれし事、如何なる責めに逢はうとも白狀をせぬ俠氣を、見込んでそちは賴まれたか、必ず申すな。(ト和助へ呑込ませ、)申さぬからは某が、

和助　只今是れにて拷問いたすぞ。（ト甲斐態と隱岐守鐵之助へきつと思入、和助呑込み、）
打たれる位は愚なこと、罪を算へる算盤で脊丈より高い石を抱き、足が碎ける苦しみでも、知らぬ事ゆゑ何處がどこまで、出入りの息のある內は、假令骨が舍利になるとも、いつかな白狀いたしませぬ。

ト覺悟の思入、鐵之助きつとなつて、

鐵之　やあ、返す〴〵も憎き詞、言はずば斯うして言はしてくれん。（ト鐵之助立ち掛るを、）
甲斐　松前氏、お待ちなされい。
鐵之　何ゆゑお止めなされまするな。
甲斐　今日より幼君のお側近く仕へる其許、獄卒どもの手に掛る囚人詮議にお手下さるゝは、お身の穢れと申すもの、其儀は手前へお任せなされい。
隱岐　甲斐が挨拶尤も至極、當主を守護なす其方なれば、囚人詮議控へてよからう。
鐵之　歸役いたせし身を以て、調べをなせしは、全く心附かざる事、平に御免下さりませ。
甲斐　是れもやつぱり忠臣の、凝りかたまりし御心より、近頃感心いたしてござる。
鐵之　其のお詞に預りては、まことに恐れ入りまする。

甲斐　いで、某が曲者に、是れにて白状いたさせん。それ、拷問の用意いたせ。
四人　はッ。（ト甲斐立上ろ、四人の侍割竹を持ち、縄を繰りにかゝろ、此時下手にて、）
三左　暫く〳〵、暫くお待ちなされて下さりませ。
　　ト ばた〳〵になり、下手より神並三左衛門、袴股立大小にて走り出來り、下手に控へろ。
隱岐　そちは神並三左衛門、何ゆゑ詮議を止めしぞ。
三左　匹夫の身にてお歴々の御場所へ出まして恐れ入れど、此拷問私へ仰せ付られ下さりませ。
甲斐　して其方が何ゆゑに、彼れが拷問願ひ出づるぞ。
三左　此の拷問を願ひますのは、まだお暇にならぬ前方、おのれ一人の利慾に迷ひ、此の神並を讒言なし、しくじらせようとしたのが顯はれ、追放された是れなる和助、以前は一ツ朋輩でも、今となつては敵同士、其意趣晴しを此處で、いたす心で拷問をお願ひ申しに出ました。
　　ト甲斐思入あつて、
甲斐　成程それも一理あり、實は其方參るのを、いやさ、其方是れへ參らずば身が手を下し和助めを、拷問なさんといたせし所、然らば代つて白狀させい。（ト思入にて言ふ、三左衛門呑込み、）
三左　すりや私へ此の拷問お任せなされて下さるとな、有難う存じまする、（ト辭儀をなし、）恨み重なる

憎き和助、責めさいなんで言はしてくれん。

ト侍の割竹を取つて俯向いて居る和助の胸へ當て引起す、是れにて、兩人顔見合せ氣味合ひの思入、是れを誂への合方になり。

これ和助、原田樣や松前樣が拷問なさるを横合より、願つて出たも有りやうは、どうかおぬしを助け度く、いやさ、助けてやらうと云ふ所も、以前の誼に引替へて可愛さ餘つて憎さが百倍、素直に爰で言へばよし、又強情を張り通せば、此の神並の腕節が折れるか但し其方の、體が爰で碎けるか、二ッに一つの此の拷問、性根を据ゑて返答いたせ。（ト三左衛門思入にて言ふ、）

和助　取るにも足らねえ此の和助を、入替り立替り、かはる〴〵の其の調べ、どの道命はねえものと覺悟を極めた曉は、假令おぬしが打つ竹の數も積つて此の體が、閻魔の帳へ載らうとも、決しておれは言はねえから、神並おぬしも安心しろ、いやさ、幾らおぬしが拷問するとも、金を盜みにはひつたより、外に仔細のねえ事を、よく御役人へ申し上げろ。

ト和助大丈夫なる思入、三左衛門不便だといふ思入あつて、氣を替へ、

三左　む、よし、たつて白狀せぬといふなら、拙者が是れにて言はしてくれん、（ト割竹を振上げ、和助を打たうとして打ち兼れる、此の時隱岐守鐵之助是れを窺ふ、三左衛門きつとなつて、）さあ申し上げろ〳〵

申し上げろ。（ト割竹にて和助をかばひながら打ち据ゑろ。）

隱岐　え、手溫い、もつと打て〳〵。

三左　はツ、さあ申し上げい〳〵。

　　トやはりかばひながら打つゆゑ、鐵之助堪り兼ね、立ちかゝらうとして、兵部少輔、甲斐と顏見合せ
　控へながら、

鐵之　え、、齒痒いなあ。（ト悔しき思入）

三左　所詮是れでは申しませぬゆゑ、拷問に品を替へ、もう一責め仕らん。

　ト立ちかゝる、此時時計の音、甲斐聞き耳を立て。

甲斐　神並待て。

三左　はツ。（ト控へる。）

甲斐　只今打ちしは申の下刻、最早夕景近ければ詮議殘りし奴なれど、明日に相延し、囚人の儀は願ひ
に任せ、神並そちに預け遣はす。

三左　はツ。

兵部　いや、流石當家の執權たる原田甲斐が取計らひ、兵部感心いたした。

隱岐　其お詞御尤もには候へども、苟且ならぬ大事の囚人、神並如きに預けんより、やはり身共が預りて元の牢舍をいたさせん。

甲斐　まことに以て種々のお手數、然らば何卒お賴み申す。

鐵之　詮議を遂げぬは殘念ながら、甲斐殿のお執成しにて、歸役いたせば身の重疊。

甲斐　何は格別、田村公へ、粗酒一杯獻じ度く、用意萬端調ひ居れば奧へお通り下さりませ。

隱岐　其の御配慮忝けなけれど、斯く囚人を預り居れば直に邸へ立歸り、後して頂戴いたすであらう。

鐵之　某事は田村公と、御同伴の仕つり、直樣御殿へ出仕なさん。

隱岐　それ、囚人を引立てい。

四人　はツ、立ちませい。（ト引立てる、和助思入あつて、）

和助　どれ、今夜も牢内で、娑婆の夢でも見ようかい。

隱岐　左樣ござらば兵部侯。

兵部　隱岐殿にも、何かに附け、

甲斐　終日の御足勞、

鐵之
三左　御苦勞に存じまする。

隱岐　然らば、お暇いたすでござる。

ト隱岐守平舞臺へ下りろ、侍の繩取り附いて和助悠々と花道へ行き、思入あつて舞臺を振返り甲斐ト顔見合せにつたり思入、是れを三重やうの合方へ太撥の時の太鼓を冠せ、隱岐守鐵之助附いて向うへはひろ、三左衞門思入あつてつか〳〵と二重へ上り、兵部少輔と左右より甲斐へ詰寄り、

兵部　こりや原田、折角某遠慮させし、鐵之助を歸參させ、

三左　何ゆゑあつて龜千代殿の、又お傅役に推擧ありしぞ。

兵部　近頃そちが計らひとも、心得難きいたし方、

三左　こりやお心がなまりましたな。

甲斐　むゝ、はゝゝゝ、拙者が心はなまらねど、左言ふ貴殿の御胸中、まことに以て心許なし。

兵部　なんと言はるゝ。（ト訛への合方になり、）

甲斐　日月明かなると雖、浮雲出でゝ其光りを隱す、況やかゝる大望の道理に背きし企てゆゑ、面に慈悲を施して忠臣無二の面々に、油斷さするが是れ專一、松前如き武士を歸役させしは意味あること、恩を得て恩を知らざるは、是れ人間の道にあらず、そこを存じて情を掛けしは、彼れが心を許させ置き、龜千代殿を毒殺なさん深き巧みの拙者の胸中、又二つには拷問の和助が苦痛を助け

る爲め、旁々以て今の計らひ、必ずなまりはいたさぬゆゑ、先づ御安心下されい。

兵部　むゝ、して松前を歸役させ、心の油斷窺つて、當主龜千代を毒殺なす、

三左　其のお手筈は調ひましたか。

甲斐　それぞあらまし此方に、一味の血判いたさせ置いたり、先づ是れを御覽なされい。

ト懷中より連判を出し、兵部少輔是れを開き見る、三左衞門四邊へ思入、

兵部　さては大場道益と、御膳番たる汐澤まで、一味の血判いたせしか。

甲斐　まだ其上に先達て、和助の忍びを見咎めたる、門番嘉兵衞夫婦等も一味に語らひ、國許より近々着の伊達安藝を毒殺させんと、人質の娘を當家へ引寄せ置けば、先づ是れとても氣遣ひなし、なれどもかゝる事件ゆゑ、なか／＼容易く成し難し、一事が萬事の諺にて、是れ薄氷を踏むに等し必ず逸りめさるゝな、それを兎に角お心逸り、拙者に一應御相談もなく、淺々しき事を企て、理現院などを語らひ、松前淺岡兩人を罪に取つて落さんなどゝは、則ちこれが露顯の小口危ふし／＼。萬端お任せあるならば、必ず成就疑ひなし、烏滸がましけれど拙者より、まだ惡事には若い／＼。

ト甲斐思入あつて連判を懷中する、兩人安心せし思入にて、

三左　左樣な事とも存じませず、御料簡がなまりしなど、過言を申せし拙者が粗忽、眞平御免下さり

ませ。

兵部　然し大場道益には、成就の上にて五千石與へる證書を遣せば、同意いたす筈なれど、丹三郎は片意地者變心あらんも計られず。

甲斐　それも手段を囘らして、思ひ寄らざる所より退ツ引きさせぬ手筈にござれば、必ず氣遣ひござりませぬ。

兵部　いや、何から何まで行屆きし、甲斐が胸中察し入る。

甲斐　たゞ平生の行ひこそ諸事正しきが第一なれば、一味の者はくれ〴〵も、非道の行ひあらざるやう心掛けねば相成らぬ。

三左　執權職の御說諭は一味へ報知いたすでござる。（ト合方になり、花道より以前のお豐出で來り、）

お豐　もう日の暮れるに間もないゆゑ、定めしお客も濟んだ時分、ちつとも早く娘に逢つて、悅ばして遣りませう。（ト舞臺へ來て枝折戶の外にて、）おゝ、幸ひあれに殿樣が、眞平御免下さりませ。

ト內へはひる、三左衞門お豐を見て、

三左　そちや御門番の嘉兵衞の妻、何用にて參りしぞ。

お豐　先程上つてお願ひ申せし、娘の迎ひに出ましたれば、どうぞお返し下さりませ。

甲斐　未だ娘に用事もあれば、まだ返すことは相成らぬ。

お豐　え、今日で三日になりますのに、いまだに御用も濟まぬので、返しては下さりませぬか。

甲斐　お丶、返す譯には行かぬから、歸宅いたして嘉兵衛に申せ。

お豐　假令歸れとおつしやいましても、そりや御無理でござります、たつた一人の可愛い娘、さうべんべんとは置かれませぬ、あなたは御存じなき事なれど、親の身になつて御覽じませ、夜もろくろく寐兼ねる程、あれが事を案じ過し、今日は〳〵ともう三日、樂んで來た甲斐もなく、又もや連れずに歸られませうか、どうぞお慈悲に私へお渡しなされて下さりませ。

トお豐涙ながらに賴む、甲斐思入あつて、

甲斐　それ程そちが歎くのを返さぬも不便の至り、然らば只今渡して遣るが、其替り此方よりちと賴みたい一儀があるが、何と聞いてはくれまいか。

お豐　何の御用か存じませぬが、私風情に叶ひし事なら、

甲斐　聞き濟んでくりやるとか。

お豐　承はるでござりませう。

甲斐　只今是れにて發言いたすを、他言いたすと命がないぞ。

お豐　え丶。（トびつくりする、）

甲斐　さ、遠慮に及ばぬ、是れへ參れ。

お豐　はい。（ト顫へて居る。）

三左　豐、御意ゆゑ、是れへ參られよ。

甲斐　え丶、參らぬかへ。（トやはり顫へて居るゆゑ、）

お豐　はアい。（ト氣味惡さうに二重の下手へ上る、甲斐進み寄り、）

甲斐　頼みと申すは餘の儀でない、此度國許より江戸屋敷へ到着いたす、伊達安藝を毒害いたしてくれまいか。

お豐　え丶。（トびつくりなすを冠せて、）

甲斐　さ丶、其の驚きは尤もながら、只一向に聞く時は謀叛人とも思ふであらうが、なか〳〵左樣な譯にあらず、身が申す事とつくりと、心を鎭めてよう聞きやれよ。我申さずとも合點であらうが、先殿樣御亂行ゆゑ老臣どもが評議の上、御家の大事に替難く御隱居おさせ申せしを、安藝一人が憤り、此度當地へ出府なし、公訴に及ぶと申す事、左すれば再び仙臺の御家の安泰覺束なし、そ

れゆゑ今日兵部公にも斯く御尊來に相成りて、種々御心痛遊ばすも、斯かる椿事の御相談、たゞ此上の所存と申すは當主龜千代君の御爲を思ひ、小の蟲たる伊達安藝を毒害するより外になし、さ、爰の所を合點して道ならぬ事ながら、是れも當家へ盡す忠義と、どうぞそちより伊達安藝を毒害いたしてくれまいか。

ト甲斐まことしやかに和らかに頼む。お豐始終顫へながら、

お豐　事を分けてのあなたのお頼み、早速御返事いたさねば濟まぬ事ではござりまするが、假令お家へ忠義でも夫嘉兵衞は言ふに及ばず、私とても幼い時より御恩を受けし伊達安藝樣を、どうして毒害いたされませう、此事ばかりは旦那樣、お許しなされて下さりませ。

甲斐　すりや是れ程に事を分け、忠義の爲めに頼んでも、そちは承知いたさぬのか。

お豐　御家へ不忠になりましても、是ればかりは幾重にも、御免なされて下さりませ。

ト涙ながらによろしくこなし、兵部少輔思ひ入れあつて、

兵部　いや、女子にしてはなか〳〵死太い奴、一筋繩では行きがたし。

三左　こりや、御手段を替へずばなるまい。

甲斐　斯くあらんと察せしゆゑ、豫て所存を回らし置いたり。やあ〳〵汐澤氏、其者是れへ。

丹三　はあ〻。

ト合方きつぱりとなり、奥より丹三郎お梅に猿轡、繩をかけ引立て出て來る、お豐見てびつくりなし、

お豐　そんなら娘を人質に、退引きさせぬ此の難題、こりやどうしたらよからうなあ。

丹三　さ、原田氏のお頼みを、そちが承引いたさずば、是れにて娘を刺殺さん、覺悟いたせ。

ト丹三郎お梅を引立て、つか〳〵と平舞臺へ下り刀へ手を掛けるを、お豐びつくりして二重より駈下り、丹三郎に縋り、

お豐　まあ〳〵待つて下さりませ、義理ある中の娘をば、もしもの事でもあつた時は、わたしがどうも濟みませぬ、あなたばかりはお優しいお方とばかり思ひましたが、此の有樣を見ますると、ても恐ろしいお人ぢやな。

三左　是れといふもお家のお爲めに、餘儀なく忠義の汐澤樣も、御同意をなされたのだ。

丹三　さ、斯くなる上は此の場にて、お頼みの儀承引なすか。

お豐　さあ、それは、

丹三　但し娘を刺殺さうか。

お豐　さあ、

皆々　承引なすか。

お豐　さあ、

皆々　さあ〳〵〳〵。

甲斐　お豐返事は、

皆々　如何なるぞ。(ト皆々きつと思入)

お豐　はあゝ。

ト泣き伏す、お梅縛られし儘、お豐の膝へ摺寄り泣き伏す、甲斐此體を見て、

甲斐　凡そ世界に生あるもの、親として子を思ひ、子として親を思はざるはなし、況んや人間萬物の長たるそちは我が子をば、可愛くはあらざるか。

兵部　ましてや家祿を頂戴せし、當家へ盡す忠義ならずや。

三左　我が子を助くるのみならず、御家の安泰思ふなら、執權職のお賴みを、是れにて承引いたされよ。

丹三　それともたつて不承知なら、是非に及ばず刺殺さうか。

甲斐　さあ、どうぢや。(トきつといふ、お豐覺悟せし思入あつて思ひ切つて)

お豐　いかにも、毒害いたしませう。

丹三　そんなら承知いたせしか。
三左　それは千萬忝けない。
甲斐　然らば首尾よく仕遂げるまで、梅は當家へ人質替り、汝も左樣心得よ。
お豐　そんならやつぱりあの娘は、返しては下さりませぬか。
甲斐　おゝ當人の頼みに任せ、よい聟がねを定めしぞ。
お豐　え、して其の聟とおつしやりますは、
甲斐　餘人でない、丹三殿ぢや。
お豐　えゝ。（ト丹三郎お梅の猿轡を解く。お梅お豐に縋り。）
お梅　かゝさん、許して下さりませ。
お豐　そんなら、こなたも得心か。
お梅　あいなあ。（ト顔を隱す。）
お豐　こりやまあ呆れて、物が言へぬ。（ト此時奥にて、）
道益　相に相生の松こそ目出度けれ、（ト道益謠をうたひながら出て、平舞臺下手へ來り、）お豐どの、嘸お悦びでござらうな。

お豐　そんならやつぱり、あなたも一味に、
道益　與せし愚老は、毒藥調合、
お豐　こりやまあ、夢ではないかいな。（ト三左衛門思入あつて、）
三左　斯樣に一味の何れもが、爰へ會合なさるに附け、たゞ不便なは荒木和助、嘸今頃は牢内で、辛い思ひをして居るだらう。
甲斐　神並其方夜に入らば、竊に田村へ忍び行き、彼れに食事を與へ遣はせ。
三左　委細承知仕つる、然らば今宵の時刻をはかり、和助の飢を救うて遣ります。
甲斐　思へば是れまでお互ひに、盡力なして大義を企て、
兵部　武運も開く連判の、首尾よく成就いたしなば、
道益　卷きをさまりし泰平に、其の血判の血汐を見ず、
丹三　徒黨も睦む陸奥の國、榮うる常磐松島の、
お豐　その浮島の風景も、よからぬ道に動き勝ち、
お梅　一夜の内に居所さへ、替る二十重の山おろしも、
三左　時の變化に覺悟の前、忽ち修羅の巷となるか、

兵部　但しは大望成就なすか。
甲斐　二つに一つは時の辻占、何ぞそこらに。
ト四邊へ思入、此時下手より、金兵衛犬の首へ繩を附け引いて出で。
金兵　試みの品此處へ、引き連れましてござりまする。
甲斐　おゝ、幸先きのよきこやつめに、ちつとも早く一藥を。
丹三　はツ。（ト丹三郎袂より紙に包みし握飯を出し投げてやる、犬は是れを喰ふ、兵部見て、）
兵部　さては件の一藥を、
三左　試し見るには丁度幸ひ、
金兵　家中で困る此の病犬。
ト此内犬は毒の廻りしこなしにて、藻掻きながら血を吐き、トゞ金兵衛をはね飛し丹三郎の方へ飛附かうとするを、三左衛門手早く引捉へ上下の顋へ手を掛け、口を裂く、仕掛にて、犬の口より血汐滴り出る、是れにて、
お豐
お梅　あれえ、（ト飛び退くを丹三郎圍ひ）
丹三　はて、仰山な其の振舞。（ト甲斐犬を見て、）

甲斐　毒のきゝめは。（ト兵部と顏見合せ、扇を膝へ突くを道具替りの知らせ。）速かなものぢや。

ト皆々引張りの見得、合方にて、此の道具廻る。

（田村邸假牢の場）――本舞臺三間前面一面の大格子、よき所に首だけ出る食事の穴を明け、下の隅に出這入り口、是れに錠をおろし、左右板羽目欄間一面無雙窓、上手柵矢來の木戸口、下手植込みにて見切り、日覆より松の釣枝、總て田村邸假牢の體、平舞臺に筵を敷き以前の侍四人十手を差し、弓張提灯を置き、朝顏茶碗にて一升樽の酒を呑み居る、此見得時の鐘、八ツの拍子木にて道具留る。

侍一　今のは八ツの廻りだが、不斷ならばめつきりと、夜がつまつたと申すとこだが、斯樣に見張りの役が當つては、少しも油斷をいたせぬせゐか、中々今夜は長うござる。

侍二　それに不斷事馴れない昨夜からの寐ずの番で、猶更今夜は夜が長いが、町家の者が自身番で火の番するのと譯が違つて、少しも油斷の出來ない役柄。

侍三　宵には廻りが嚴しいから、一杯遣るにも世間を憚り、內證で呑んだ其のせゐか、夜更になるに隨つて殊の外醉が出て、少し上目がたるんで參つた。

侍四　斯ういふ時に高枕で、一息ぐつすり寐たうござるて。（ト此內侍の一牢內を窺ひ、）

侍一　寐るといへばお預りの、彼の囚人は牢の中で、大鼾で寐て居るが、何とづう〳〵しい奴ではござ

らぬか。
侍二　聞けばあいつは其以前、荒波梶之助と申した、相撲取だと申す事。
侍三　假令名前は荒波でも、白川夜舟で楫枕。
侍四　其の豪傑の曲者も、松前樣には叶ひませぬて。
侍一　聞けば伊達家の奥御殿で、組伏せられたと申すことだが、譯は知らねど床下へ、夜陰に忍ぶ曲者と忠義に凝りし松前殿と、双方力士にいたした所が、こりや理の當然で松前殿に、團扇の上るは當り前。
侍二　近き例は慶安に、道灌山へ寄合つた、由井の正雪がよい手本、十が九つ利であるとも、惡事は必ず滅ぶが順道。
侍三　成程それを聞いて見ると、二人を相撲の賭で申さば、松前殿から安を賣ります。
侍二　半減や四六ぢや、買手はござらぬ。
侍一　明日の勝負の分らぬうち、睡氣ざましに運動しながら。
侍二　十一を賣りに各々と、
侍三　どれ一廻り、

四人　廻つて參らう。（ト一升樽と提灯を持ち立ち上つて、）

侍一　安でござります。

　ト やはり時の鐘八ツの拍子木にて、割竹を引きながら、木札の附きし鍵を落して上手へはひる、時の鐘打上げ、床の淨瑠璃になる。

〽更渡る鐘も四更の響きさへ、木の葉にそよぐ庭續き、闇き其身の忍び男も、四邊に心隱岐殿の締り嚴しき構へ内、人目を包み神並が、假牢間近く歩み來て、

　ト 此内花道より三左衞門、頰冠り尻端折り、一本ざしにて、德利と重箱を風呂敷へ包み、是れを提げ、四邊を窺ひながら出來り、

三左　人目繁くて宵の間に、忍ぶ事がならざるゆゑ、夜の更けるのを待兼ねて、裏手の塀をやう〳〵乘越え、爰まで來りやあ大丈夫、向うが慥假牢だが、どうか誰も居なけりやあいゝが。

〽足踏みしめてやう〳〵と、格子の外へ立寄りて、（ト舞臺へ來り、格子の側にて小聲になり、）

和助々々。

〽呼ぶ聲さへもしやはと、四邊憚る内と外、和助は思はず顏差出し、

　ト 三左衞門若しや人は來ぬかといふ思入あつて、小聲にて呼ぶ、此時和助格子の穴より顏を出し、

和助　誰だ〳〵。
三左　和助、おれだ。（ト此聲を聞き附け、）
和助　おゝ、神並か。（ト大きくいふを、）
三左　あこれ、（ト押へてつか〳〵と下手へ行き、兩人四邊へ思入あつて、元の所へ來り、）靜にしろ〳〵。
和助　おぬしやア、よく尋ねて來てくれたなあ。
三左　おれも手前を案じるから、宵から忍んで附けて居たが、廻りの奴等が烈しいので、到頭今までつらされたが、何にしろ内と外で、おち〳〵話しも出來ねえが、と言つた所が、外ならねえ締りの嚴しい此の牢屋、どうか仕樣がねえか知らぬ。
和助　手前が來ると知つたなら、今まで爰に居た奴等を、どうか騙して鍵を取り、外で話しを仕ようものの。
三左　どうもこいつア仕方がねえが、何にしろちつとも早く、おぬしに遣らうと甲斐樣から、持つて來た物があるのよ。
〽言ひつ、探る足許へ、躓く鍵を手に取り上げ、
ト三左衛門包みを取りに探りながら行かうとして、以前の鍵を蹴附け、思はず拾ひ取り透し見て、

や、足にさはつた此鍵は。

和助　今番人が喰ひ醉ひ、廻りに行つた其時に、もしや落して行きやあしねえか。

三左　こいつア計らず天の與へ。どれ、錠前へ合して見よう。

〽探り〳〵錠前に、合して難なくさやの口、神ならぬ身の神並が、和助の手を取りやう〳〵に、外の面へ連れ出しほつと息、

ト此内三左衛門探りながら錠を明け、和助を連れ出し、有合ふ筵の上へ住はせ、ほつと思入、此時朧の半月を出し、床の合方になり、

和助　親身も及ばぬ手前の親切、おらあ死んでも忘れねえぜ。

三左　えゝ、ろくでもねえ、死ぬなどゝ緣起でもねえことをいふなえ。

和助　何にしても不思議なのは、どうして鍵を落して行つたか、まつたくこれも手前とおれが、深い緣のあることだぜ。

三左　そりや、手前の言ふ通り、盛り場挊ぎか板の間のちよつくら持ちなら知らねえこと、假にも六十二萬石の太守を覘つた囚人を、張番をする侍が、鍵を落すも一つの不思議。

和助　斯うして逢つたが幸ひだが、手前もおれも餓鬼の時から、相撲が好きで家を駈出し、師匠を取つ

て段々と上の二段へ取上つた、其時分から兄弟の因みを結んで、一ッ鍋の物を喰つた二人が中、若し此後責殺されて、おれが死んだら其時は、跡の始末をしてくれろよ。

三左　そりやァおぬしが言はずとも、若しも手前が先きへ死んだら、骨はおれが拾つて遣るから、心を丈夫に持つて居ろ。

和助　忝けない、よく言つてくれた、おれも白狀しねえ日にやあ、段々重なる拷問で、所詮命は助かるめえと、元より覺悟はして居るから、責殺されて死んだと聞いたら、塔婆の一本も立てゝくれ。

三左　そんな弱いことを言はずと、ちつとの間だ辛抱しろ、其内にやあ手を廻して、樂にも仕ようし出牢して、又面白い時節もあらうから、何でも我慢が肝腎だぞ。おゝ、我慢と言やあ調べの時、おれが庇つてやりてえにも、目ッ張りッこで據なく、おぬしを打つたあの時は、噺體にこたへたらうなあ。

〽面にまことあらはして、詫びる其の手を押拂ひ、

和助　そりやあ大きな間違ひだ、こつちで手前に禮をいふとも、そつちで詫びる譯はねえ、砂で固めた體だから、大概なことぢやあ弱らねえが、あの松前に鐵扇で、

〽幾度となく拷問の、數も此身の罪科に、

ひつぱたかれた此の時は、
〽皮は破れ肉は爛れ、
いつそのことに白狀と思つた胸を張詰めて、辛抱した甲斐あつて、運よくおぬしに助けられた、
禮はこつちで言はにやあならねえ。
〽言ふ聲さへも哀れげに、四邊憚る男泣き、神並はたと心附き、
ト和助愁ひの思入、三左衞門思ひ出せしこなしにて、
三左　とんだ話しに實が入つて、肝腎の物を忘れたが、手前腹はいゝのか。
和助　どうして〳〵いゝ所か、下ツ腹が引ツ附くやうだ。
三左　えゝ、そんなら飯は喰はねえのか。
和助　なあに、喰つたことは喰つたが、知つての通り丼飯を五六ぱいづゝも喰ふおれが、急に爰へ預けられて物相飯の一本位ぢやあ、腹の中でどこへ行つたか、ちつとも他愛がねえやうで、實に是れにやあ一番弱つた。
三左　大方そんなことだらうと、握り飯と酒を一升原田樣にお願ひ申して、おれが爰へ提げて來たから是れで腹を拵へるがいゝ。

和助　そいつは何より有難い、是れが譬にいふ通り、地獄で佛といふのだらう。

三左　さあ、ちつとも早くやるがいゝ。

和助　幸ひ爰に茶碗がある。

〽包みとく／＼取出す酒、夜風を凌ぐ百藥の長にはあらで劍菱の、胸のつるぎと露知らず、枯木に水の心地して、悅び合ふぞ賴もしゝ。

ト此內三左衞門茶碗を番手桶で洗ひ、包みの重箱と酒を出し、酌をして和助吞み、

ひもじい所へ此の酒で、體の痛みも忘れてしまつた、あゝ有難い／＼。

ト和助悅ぶ、三左衞門見て合方になり、

三左　其悅びを見るに附け思ひ出すのは其以前、二人角力で居た時分、先殿樣の取卷で每晚出掛けた吉原通ひ、しかも廓で評判の大三浦の高尾太夫、御意に叶つて一晚でも足を拔かずに通ひ詰め、到頭仕舞が身請けとなり、太夫を乘せる其爲めに、其頃名高い汐留の山崎屋で新造に高尾丸といふ屋形が出來、山谷堀から乘込んだが、廓の者が送つて來て、あんな賑やかなことはねえ。

和助　未だに太夫は袖ケ崎で、先殿樣のお側に居るのに、誰があんなことを言つたか、島田重三といふ間夫が、あるので其晚三股で吊し切りになつたといふ、惡い噂がぱつとしたが、瓦板で賣歩く大

方香具師の仕事だらう。

三左　此頃御殿で言ふ目の出た、太夫も今は殿樣と、お下屋敷へ押込められ、座敷牢へ入つた同樣、嘸窮屈なことだらう。

和助　それといふのも勤めの內、客を騙した皆報い、此の荒波も殿樣の威光を借りて吞み歩き、あんまり樂をした報い、こんな憂き目を見にやあならねえ。（ト和助酒を吞みながらよろしく思入）

三左　今となつちやあ手前もおれも、原田樣から賴まれて、巧んだ事とは言ひながら、先殿樣へ面目ねえ。

和助　然し手筈も誂へ通りで、兵部樣にも甲斐樣にも、嘸悅んでござるだらう。

〽過ぎし話しに時移る、折しも差込む苦痛の體、

トよろしく兩人思入、此の內和助苦痛のこなしにて、頻りに胸を搔きむしり、

あいたゝゝゝ、あ苦しい〳〵。（ト頻りに藻搔く、三左衞門びつくりなし）

三左　これ和助、どうした〳〵。

和助　すきツ腹へ吞んだせゐか、無暗に胸へ込み上げて、あゝ苦しい〳〵。

〽虛空を摑んで七轉八倒、見るも哀れに介抱と、思へど何と詮方なく、途方に暮れて居たり

しが、和助は苦痛の面を上げ、

ト三左衞門介抱しようとして何もなきこなし、和助苦しみながら思入あつて、

やい、神並、わりやあ親切らしく見せかけて、おれに毒を呑ましやあがつたな。

ト三左衞門びつくりなし、

三左　何で手前に毒などを、おれが呑ましていゝものか。

和助　いゝやさうだ〳〵、なぜ毒なら毒と斷つて、おれに呑ましてくれねえのだ。えゝ、誼甲斐のねえ野郎だなあ。

〽齒を喰ひしばり無念の面、こなたはふつと心附き、

三左　はゝあ、そんなら今夜甲斐樣から受取つて來た此の酒に、毒が仕込んであつたるか、えゝゝゝ（ト、びつくりなして和助へ縋り）これ和助、後の祭りで返らぬことだが、今となつて氣が附いたのは一味荷擔の企てに手前を生して置く時は、若し白狀でもするかと思ひ、それと言はずにあの甲斐が、持たしてよこした此の毒酒、おれまで一杯喰はすとは、えゝ忌々しいことだなあ。

和助　それぢやあおぬしも計られて、知らずにおれに呑ましたのか、血判までをさせて置いて毒害するとは人でなし、見下げ果てたる原田甲斐、一旦男が請合つたら、どんな手強い拷問でも、骨が

舍利になればとて、白狀するおれぢやあねえに、武士に似合はぬ卑怯な仕方、今に恨みを晴してやるぞ。

三左　定めし悔しく思ふであらうが、毒と知つて何で手前に、態々持つて來るものか、今夜屋敷で酒が始まり、旨え料理を喰ふに附け、嘸今頃は牢内でひもじい思ひをして居るだらう、せめて願つて酒でもやらうと、木登りをして塀を越え、人目を忍んで持つて來た酒が毒だといふことは、おらあ夢にも知らなんだ、どうぞ堪忍してくれ〳〵。

〽と手を合せ詫びる詞と計られし無念の拳握り詰め、淚に暮れて居たりしが、こなたは苦痛の息をつぎ、（ト三左衞門和助に詫び、又向うへ思入あつて無念のこなし、）

和助　これ神並、おらアどうで此儘ぢやあ、所詮命は助からねえから、末期の際に形見替り言ひ置くことをよく聞けよ、（ト床の合方になり、）さつき爰で番人が、世間の話しに言つたことが、丁度二人にいゝ敎へ、まだ二昔にやあならねえが、道灌山へ會合して、天下を我が手に握らうと、軍學兵法辨へた正雪ですら大望の、際に臨んで丸橋が、舅の忠義に訴人され、忽ち罹る天の網、聞きかじつた時胸に釘、よしんば原田が大智略で十が九つ仕果せても、お側に忠義の松前淺岡、お國家老も近々に江戸へお着になつた日にやあ、所詮成就にならねえ道理、そこへ心が附かねえで、惡

人めらに附いて居ると、果てはやつぱりこんな目に、馬鹿を見にやあならねえから、いつそのことに今の內、足を洗つて心を入替へ、其命をば全うして、忠義を盡してくれたなら、草葉の蔭でおれまで悅び、惡いことは言はねえから、末期の賴みだ三左衞門、まともの人になつてくんねえ。

へ性は善なる本心に、立ち返つたる身の懺悔、聞く神並は歎息なし、

ト此內和助苦痛を悰へ、よろしく思入、三左衞門成程といふ思入あつて、

三左 よく事を分けそれ程に、爲めを思つて言つてくれた、それでこそ兄弟分、成程由井の正雪が、何より一番いゝ手本、こいつアおれも今の內、さらりと心を入替て、御家へ御恩を返さにやあ、天道樣へ濟まねえなあ。（ト改心なしたる思入、和助悅び、）

和助 そんならおれの異見を用ゐて、あの、本心になつてくれるか。

三左 おゝ、なるとも〳〵、其代り是れからおぬしと二人前、お上へ忠義を盡したなら、甲斐が敵も討てるといふもの、大丈夫だ安心しろよ。

和助 それ聞いたので此婆婆へ、心を殘すことはねえ、思へば是れまで惡人に、荷擔をしたるばツかりに。

三左 扶持を貰つて最屓を受けた、先殿樣をそゝのかし、

和助　廓へ連れ出し淫酒をすゝめ、
三左　大事な御身を押籠めに、
和助　した天罰が報い來て、
三左　さつき引裂く病犬の、
和助　苦痛にまさる狂ひ死に、
三左　是れが世界へいゝ手本、
和助　惡事は出來ぬ世の中に、
三左　思へば果敢ない、
兩人　身の果ぢやなあ。

〽先非を悔いて兩人が、哀れこの世の別れ路は、娑婆と冥土の二道に潤む涙の雨催ひ、落ちて流れて泉水の水嵩增るばかりなり。

ト三左衞門和助を勞り、よろしく愁ひの思入、此內月に雲かゝり、文句の切れ、上手にて、

侍一　火の廻り〳〵。（ト呼ぶ。）
和助　さ、見咎められては後日の妨げ、やつぱりおれは此內に。

三左　おゝ、合點だ。

〽介抱なしてさゝやの口、ほつと吐息をつく間もなく、苦痛にくるしむ血汐の紅、

ト三左衛門介抱なして和助を元の通りに入れ、錠を下しほつと思入、和助格子の内にて苦痛の思入あつて、血を吐き糊紅になり、苦しみながら顔を出す、三左衛門立寄り、

そんなら、和助。

和助　おゝ、神並。

三左　地獄で逢ふぞよ。

〽あはれ果敢なく、

ト三左衛門跡を見返りながら、花道へ行く、和助がつくり下を向く、爰へ上手より侍の一提灯を持ち出來り、灯を出して和助を見ろ、是れにて糊紅になりし顔を上げる、侍の一びつくりなし腰が抜ける、三左衛門花道にて手を合せるを木の頭、和助獄門の見得、三重時の鐘にてよろしく、

ト是と一緒に三左衛門、一散に花道へはひる。跡シヤギリ。

幕

三幕目

花川戸五平次内の場
奥州海道蘆野宿の場
水戸海道宍戸宿の場

〔役名――魚賣五平次、水府黄門公、神並三左衞門、朝比奈彌太郎、熊田甚五兵衞、家主六兵衞、水府の臣八人、浪士五人、角力の中賣辨太、醫者大場道益、金貸勘右衞門、蜂谷六左衞門、汐澤丹三郎。五平次娘お鶴、合長屋の娘お村、酒屋の小僧三太等〕

(魚賣五平次内の場)――本舞臺三間の間平舞臺、向う一間押入戸棚、三尺佛壇、六字の掛物佛具誂への位牌を飾り、三尺角力の番附を張りし襖、下間平戸、眞中繩簾、下手鼠壁、鼠入らずの釣戸棚、荒神棚此前に一ツ竈、米櫃臺所道具よろしく飾り、上の方一間障子屋體、いつもの所門口、此側に盤臺を積み重ね、下の方路地口、黑塀、此の向う裏長屋の片遠見、總て花川戸魚賣五平次内の體。爰に六兵衞〻織着流し家主のこしらへにて煙草を呑み居る、お村世話娘のこしらへにて、箱火鉢へ火をつぎ居る、門口に三太角大師の鬘、酒屋の御用聞にて德利を繩にて提げ立ち掛り居る、此の見得鉦と太鼓の入りし本町二丁目の唄にて幕明く。

お村　小僧さん、いつもの飴屋が來たかえ。

三太　あい、あすこに唄つて居ます、姉は二十一妹は二十。（トちよッとうたふ。）

六兵　姉といへばこつちのお鶴は、裏の湯へでも行つたのか。

お村　いえ〳〵、今日は十七日ゆゑ、觀音さまへお參りに、今しがた行きなさいました。

六兵　それぢやァ其内お村坊は、留守番を頼まれたのか。

お村　あい、左樣でござります。

三太　若し、大屋さん、今日は御用はござりませんか。

六兵　おゝ、いつもの通り持つて來てくれ。

三太　畏りました。

六兵　手前の家も此頃は、よつぽどつぎが惡くなつた、番頭に氣を附けろと、家へ歸つたらさう言つてくれ。

三太　つぎが惡いとおつしやりますが、五勺の酒で一合あれば、澤山ぢやあござりませぬか。

お村　おや〳〵、それぢやあ大屋さんでは、五勺お買ひなさいますのか。

六兵　一合一度に買ふよりか、五勺づゝ二度買ふと、よつぽど酒がたんとある。

お村　わたしの內ではお神酒の外、五勺買つたことはござりませぬ。

六兵　それだから手前の親は年中錢に困つて居るわ、振舞酒なら何合でも明日の分まで呑むけれど、自腹で呑むのは五勺か一合、それを、三合はいゝ、五合はいゝと、無暗に跡を引いて見ろ、かなり八

合に行く身上でも目よりか先きへ内が廻り、一しやう貧乏をしにやあならぬ。

お村　それぢやあ不斷一合より、餘計にお上りなさいませぬか。

六兵　自分の錢ぢやあ一合より、餘計に呑んだことはない。

三太　大屋さんだから仕方がないが、五勺のお得意は眞平だ。

六兵　そんなことを手前はいふが、一升一度に買はれるより、五勺づゝ二十度に買はれるはうが見世の景氣だ、手前の家は酒ばかりだのに、そんなに油を賣つて居たら、家へ歸つて叱られるぞ。

三太　まだ歸るにやあ早いから、是れから山をぐるりと廻つて、音吉でも見て歸らう。

お村　音吉を見ると遲くなるよ。

三太　一幕見ると遲くなるから、ちよツと五勺ばかり見て來ます。

お村　大屋さまのお酒のやうだね。

三太　どうで是れから二十度も、毎日行かにやあ見られねえ。

六兵　うぬ、そんなことをぬかしやあがつて、どうするか見やあがれ。（ト立ち掛るを、）

お村　あもし、堪忍してやつて下さいまし。

六兵　それだといつてあの小僧も、よい年をした者をへこましやあがる。

三太　それもお前の顏の通り。

六兵　どうしたと。

三太　中低の備前德利やアい。

ト右の鳴物にて、三太備前德利を六兵衞に見せながら、下手へ逃げてはひる。

六兵　あんな、口の減らねえ小僧はねえ。

ト腹の立つ思入、合方替つて上手屋體より、五平次好みの鬘着流し、細帯、病人のこしらへにて出來り、

五平　大屋さん、お出でなさいまし。

六兵　おゝ、五平次どんか、こなたも久しい病氣だが、どうだ少しはいゝ方かな。

五平　この二三日は時候も直り、大きによろしうございます。

六兵　そりやあ何にしろいゝことだが、挊ぎ人が半年から生業をせず寐て居ちやあ、嘸不都合な事だらう。

五平　それでもお鶴が剝身を剝いて、よく挊いでくれますから、今日まで凌いで居りましたが、斯うして居ると何やかや餘計に錢が入りますゆゑ、ついお前さんへも三月越し、店賃を上げませぬが、

もう少し待つて下さりませ。

六兵　知つての通り金造りのやかましやの地主だから、月々立替て納めて置いた、どうで一度には寄越せめえから一月でも入れるがいゝ。

五平　生業にさへ出ますりやあ、何を置いても店賃は、先きへ御勘定いたします、去年は春から都合よく、一枚づゝも引張りましたが、みんな喰つてしまひました、まことに樂はさせません。

六兵　それも内のあのお鶴が、今當世の娘だと、こなたも樂が出來るけれど、所柄に似合はねえ、浮いたことが嫌ひだから、仕方がねえが惜しいものだ、あの子が山の楊弓場か茶見世へ出れば別品だから、直によい旦那が出來て、今日は芝居明日は花見と、言ふ目が出るのに剝身をむいて、しがない暮しをして居るとは、此の淺草には珍らしい、新聞にでも出してえやうだ。

五平　よく口入の婆さんが何のかんのと言つて來ますが、人の世話になる事はあれも嫌ひでござりますが、わつちも堅氣な魚賣り、不漁の時にやあ蛤を賣りに出る日もありますが、娘は賣り度くござりません。

六兵　娘を賣り度くないといふは、貧乏人には感心だが、然し背に腹は替へられねえ、地獄は長屋でさせられねえが、旦那取りは流行の權的、おれが承知だ させるがいゝ、野暮を言はずに内證が、樂

になつたら病氣も直らう、爰らは一つ考へものだぜ。

五平　癇が起つて此頃は、夜るもろく〳〵寐られませんから、よく又わつちも考へて見ませう。

六兵　兎角今は旦那流行り、お村坊も此頃は、いゝ旦那が出來たさうだな。

お村　そんなことは存じませんよ。

六兵　なに存じませんことがあるものか、此間東橋亭へ一緒に行つた散切は、お村ばうの旦那だらう。

お村　いえ〳〵、あれはわたしの隣りの、おきんさんの旦那でありますよ。

六兵　それぢやあ八百屋のおきん子の旦那か、此間まで洟を垂らして子供の守をしてゐたが、女の子は早いものだ。

ト又元の本町二丁目の唄になり、花道よりお鶴島田髷やつし裝にて出て來る、跡より辨太半合羽一本ざし、紺の脚絆にて出て來り花道にて、

辨太　もし姐さん、ちよつとお聞き申したいが、元角力をして居た鳴神峰右衛門さんの家は、花川戸だと聞きましたが、御存じではござりませんか。

お鶴　あい、それはわたしの兄さんで、家は向うでござりますが、三年跡に餘所へ行つて、今では家に居りませんわいなあ。

辨太　そりやあお前さんがお妹御でござりますか、元私は角力場の中賣りをして居りましたが、ちつとお目に掛りたいことがあつて、態々今日參りましたが、昨夜お家へ鳴神さんが、お歸りなされはしませぬか。

お鶴　いえ〱歸りはしませぬわいなあ。

辨太　兎も角お家へ參つて、お話し申して置きませう。

お鶴　さういふことなら、わたしと一緒に、

辨太　お連れなされて下さりませ。(ト本舞臺へ來り、門口から内を覗き、)爰がお家でござりますか。

お鶴　穢ない家でござりますが、まあ、おはひりなされませ。

辨太　有難うはござりますが、又出直して參りませう。

ト四邊へ思入あつて下手へ足早にはひる、お鶴合點の行かぬ思入にて、

お鶴　何だかうそ〱氣味の惡い、よくもない簪だが、是れでも拔く氣であつたか知らぬ。

トこの聲をお村聞き附け、

お村　姉さん、お歸りなさんしたか。

お鶴　今歸りましたよ、(ト内へはひる、)是れは大屋さん、お出でなさいまし。

六兵 あゝ、何時見ても美しいものだが、剝身をむかすは惜しいものだ。
お鶴 又そんな御常談ばかり。
五平 これお鶴、今表へ誰か來たか。
お鶴 角力場の中賣りをして居たとやらいふ人が、兄さんを尋ねて來たが、何だかきよろく見廻して、氣味の惡い人でござんした。
五平 あいつを尋ねて來るからは、どうでろくな奴ぢやァあるめえ。
六兵 角力場所を引いてから、久しく息子に逢はないが、何も替ることはないかな。
五平 三年この方家へと言つたら、少しも便りをしませぬから、何處に居るか知りませぬ。
六兵 噂に聞けば御分家の兵部樣の御家來に、なつたとやらいふことだが、現在實の親の所へ便りをせぬはどうした事だか、さてく困つた息子だなあ。
お村 姉さん、お前がさういつたといつて、酒屋の小僧がお酒を持つて來たよ。（ト五合德利を出す、）
お鶴 あゝ、さうでござんしたか。
五平 何で酒を買つたのだ。
お鶴 昨日からめつきり氣分がよいと言はしやんすから、少しづゝ上つたら、胸が開いてよからうと、

それでお酒を買ひました。

五平　飯より好きな酒だから、遣つて見てえが、呑めりやアいゝが。

お村　まだ今日は湯へ行かなんだが、もう歸つてもようござんすかえ。

お鶴　おゝ、よいどころではござんせぬ、お前が留守居をしてくれるので、ゆつくりお參りをして來たわいな。

お村　それぢやア小父さん、お大事になさいましよ。

五平　おつかあによく言つてくんな。

お村　あい〳〵、大屋さん御ゆるりと。

六兵　世辭のいゝ娘だなあ。（トお村門口へ出ろ、お鶴送つて、）

お鶴　明日髮を結つて上げるよ。

お村　有難うござります。（ト右の唄にてお村下手路地口へはひろ、六兵衞思入あつて、）

六兵　無駄話しにうか〳〵と、用があつてこつちへ來ながら、肝腎の用を忘れてしまつた、おれもよつぽど弛んだわえ。

五平　肝腎の用とおつしやるは、何のお話しでござります。

ト此時下手へ勘右衛門、羽織着流し金貸のこしらへにて出來り、ちよツと門口に窺ひ居て、

勘右　いや、其の話しはそこへ行つて、わしが直に話しませう。（ト合方になり、門口を明け、内へはひろ。）

五平　や、お前は諏訪町の勘右衛門さん。

お鶴　ようおいでなさいました。

勘右　いや、あんまりよくも來ねえのさ。（ト上手よき所へ住ふ、お鶴煙草盆を出し、）

お鶴　まあ、一服お上りなされませ。

勘右　六兵衛さん、大層待たせなすつたね。

六兵　つい浮々と話し込んで嘸待遠でござりましたらう。これ五平次どの、おれが爰へ來た用は、此勘右衛門さんがこなたへ貸した、金の掛合に來なすつたから、其の入譯を言ひに來たのだ。

五平　勘右衛門さんから借りた金不義理にしては濟まねえゆゑ、心に忘れはしませぬが知つての通りの長煩ひ、半年ばかり生業なしで、しがなく暮してをりますから、つい延び〱になりまして、まことに申譯もござりませぬ。

勘右　其の言譯は聞き飽きた、地藏の顔も三度はおろか、百度來ても同じ言譯、賽の河原で積む石より段々積る利足高、一重二重三十兩五兩一に五分の禮金、三月縛りのをどりを入れ、元利で丁度七

十五兩、こんな所へ貸込んだのは、おれが因果と觀念して、利足も取らず待つて居たのも、こつちの家の生業物魚心ありやァ水心、幾度おれが謎を掛けても、さつぱりそれが解けねえから、長く考へちやあ居られねえ、大屋さんから預りを、貰つて元利七十五兩、出る所へ出て取らにやあならねえ。

お鶴　出る所へ出て取るといふのは、何處へお前は行かしやんすのだ。

勘右　何處へおれが行くものだ、こなたの親仁の預りを、貰つて直に御番所へ恐れながらと願ふのだ、耳を揃へて七十五兩金を返せばそれまでだが、金が出來にやあ氣の毒だが、直に體へ繩が掛り、暗い所へ行かにやあならねえ。

お鶴　そんならどうでも御番所へ、お前は願ひなさんすのか。

勘右　おゝ、是れまでおれが親切に言つて遣るのを聞かねえからは、可愛さ餘つて憎さが百倍、憂き目を見せて腹を癒るのだ。（ト五平次これを聞き、）

五平　それぢやあおれを願ふ氣か、斯うして長々煩つて其日を送るに困るから、病氣が直つて生業に出るまで待つてくれといふに、待たれなければ仕方がねえ、願ふ氣なら願ひなせえ。

勘右　願はねえでどうするものだ。さあ大屋さん、五平次の預りをおくんなせえ。

六兵　そりやお家主の役だから、くれろとお前が言ひなされば上げないとは言はないが、斯うして長の煩ひで困り切つて居るものを、願つた所が人費損、お前も爰へ三十兩金を貸すには是れといふ、目當があつて貸したのだらう、及ばずながら家主の、わしがどうにか扱ふから、何と預けては下さるまいか。

勘右　どうで逆さにふるつた所が鼻血より外出ねえ五平次、元より金の取れねえのは、知つては居るが言ひ掛り、暗い所へ入れて遣るのだ、然し御支配をなされるお前さんが、扱つてやらうと仰しやるなら、綺麗にお任せ申しませう。

六兵　それぢやあ任してくんなさるか。

勘右　御町内でも口利の、お前さんの顏に免じて。

六兵　それは何より忝けない、お前のやうに言つてくれると、へこんだ顏も高くなる。ときに五平次どん、此家主が扱ひに入つたは外でもない、勘右衛門さんがこつちの家へ三十兩貸したのも、抵當物はお鶴ばうだ、豫て女房に貰ひたいと話しのあつたことだから、何と物は相談だが、娘を女房に遣つてはどうだ、さうさへすれば波風なし、三十兩は其儘に、是れから先きも月々幾らと、暮しの附くだけ送らせるが、うんと言つてはどうだらう。（ト五平次思入あつて、）

五平　有難うはござりますが、縁談ばかりは我が子でも親の自由にはなりませぬ、今でも是れが氣に入らぬ所へ遣れば百や二百支度金も取れますが、產れ立ちから貧乏させ、着てえものも着せねえ代り、亭主は一生連添ふものゆゑ、これぱつかりは氣に入つた者を持たせて遣りたいから、折角お前さんのお扱ひだが、先づお斷り申します。

六兵　そりやあさうでもあらうけれど、親孝行な娘だから男好みはしやあしまい、そんな野暮を言はねえでお鶴坊を女房にやり、棒手振を止めにして、樂をするのが當世だ、惡いことは言はねえから

おれが言ふことを聞くがいゝ。

五平　不斷お世話になりますから、外の事なら聞きますが、これぱかりは大屋さん、どうもわしは聞かれませぬ。

六兵　さう强情を言はねえで、膝とも談合、娘にも相談して見たがいゝ、そなたはそんなにいやがるけれど、娘心に勘右衞門さんを、いゝと思つて居るかも知れねえ。

お鶴　何でわたしが勘右衞門さんを。

六兵　それぢやあおぬしも、氣がないか。（ト お鶴俯向き默つて居る、）

五平　そりやあ娘の氣に入らねえのは、言はずと初手から知れたことだ、金貸だから仕方なしに附合つ

ては居るけれど、誰が縁を組むものだ。（ト是れを聞き勘右衛門むつとなし、）

勘右　是れだから大屋さん、預りをくれとわしが言ふのだ。

六兵　いや、お前が腹を立つのも尤も、又つく〴〵と顔を見れば娘の嫌ふも尤も。

勘右　えゝ、お前まで同じやうに、無駄を言はずと六兵衛さん、早く預りをくんなせえ。

六兵　斯うなるからは仕方がない、望みの通り上げませう。

勘右　よくおれに恥をかゝせたな、困るといふから三十兩、娘を目當に貸した金、女房にくれぬ意趣晴し、直に明日願ひ立て、暗い所へ入れて遣るぞ。

五平　おゝ、入れるなら入れて見ろ、御定法の利息と違ひ、五兩一分の高利貸し、そつちが喰え込まねえやうに、用心をして願つて出ろ。

勘右　假令五兩一分だらうが、承知で借りた上からは、うぬが言ひ條が立つものか。さあ大屋さん、預りをおくんなせえ。

六兵　家へ行つて書いて上げよう。（ト此内お鶴思入あつて、）

お鶴　あもし大屋さま、其預りを明日まで、お待ちなされて下さりませ。

六兵　待てといふなら待つてもやらうが、何ぞ趣意がなくつては。

お鶴　さあ明日中にはどうかして、お金の都合をしますから、どうぞ待つて下さりませ。
五平　これ〳〵お鶴、當もねえのに詰らねえ、そんなことを何でいふのだ。
お鶴　ちつとわたしが心當りの、あることがござんすゆゑ。
六兵　それぢやあ明日の夕方まで、おれが預りを出さないが、若し金の出來ない時は、勘右衛門さんの所へ行くか。
お鶴　そりやどうなりとしませうわいなあ。
五平　えゝ、跡先きの考へもなく、まだ〳〵そんなことを言ふか。
お鶴　さあ一寸延びれば尋とやら、何であらうと今日の所は、わたしに任せて下さんせいな。
　　トお鶴五平次を留め、よろしく思入。
六兵　もし勘右衛門さん、今聞きなさる通りゆゑ、明日まで待つて下さりませ。
勘右　金が出來ずば女房になるなら、明日までお前の顔を立つて、
六兵　それぢやあ待つて下さるか。
お鶴　えゝ、有難うござります。
五平　とは言へ金の出來よう當が、

お鶴　あもし、たゞ何事もわたしが胸に、
五平　それだといつて、
お鶴　はてまあ、默つて居やしやんせいな。(ト五平次是非なくちつとなる、)
六兵　そんなら、お鶴。
勘右　明日の晩まで、待つて遣るぞ。
お鶴　どうぞ待つて下さりませ。(ト六兵衞勘右衛門門口へ出で、思入あつて、)
六兵　もし勘右衛門さん、お鶴を女房に持てますぜ。
勘右　それでも、金が出來た日には、
六兵　何のつけに出來るものかな。
勘右　どうぞ金を取りたくねえ。
六兵　そんな間違つたことはない。
　　ト時の鐘合方にて兩人下手へはひる。お鶴跡を見送り、門口をしめる。跡合方になり、五平次思入あ
　つて、
五平　これお鶴、一寸脱れか知らねえが、勘右衛門へ七十五兩、明日までに返さうとは、何を目當に言

つたのだ。

お鶴　病の障りになる故に、お前に話しはせぬけれど、明日までに其の金は、必ず都合が出來ますわいな。

五平　女の體で其の金の、出來るといふは合點が行かねえ。若しや手前はおれに隱して、苦界へ其身を賣りはしねえか。

お鶴　あいなあ。（ト お鶴泣き伏す。）

五平　え、それぢやアいよ〳〵身を賣つたか。

お鶴　さあ、お村さんに留守を頼み、觀音さまへ行くといつて、家を出たのは判人の源七さんの所へ行き、切ない家の譯を話し、此身を苦界へ賣ることを頼んで參りましたわいな。

五平　それぢやあ手前は勘右衞門の、金ゆゑ苦界へ身を賣る氣か。

お鶴　いえ、そればかりではござんせぬ、剝身を剝いてやう〳〵に、其日を過して居たけれど、僅の儲けに足らぬ勝ち、お前の病に障るゆゑ、今日まで隱して居たけれど、勘右衞門さんを始めとして、大屋さんから米屋薪屋諸方に借りが出來たれば、其の催促の言譯も、泣きの涙で今日明日と、言ひ延しては置いたれど、金の出來よう當はなし、お前に言はゞ止せと言はれ、留められるのが知

れてあるゆゑ、お村さんの伯母さんに、跡の事をば委しく頼み、此身を賣る氣になりましたも、諸方の借りを返したなら自然と内も樂になり、病も早く直らうと思ひますれば、もしとゝさん、どうぞ許してわたしをば、苦界へ遣つて下さんせいなあ。

トお鶴思入にていふ、五平次感心の思入にて、

五平　親の心を休めようと、其身を賣つて借金の方を附けてくれるとは、何にも言はねえ忝けない。今更言ふも愚痴ながら、五ツの年にお袋に別れておれが手一つで、育てたゆゑに不自由勝ち、欲しい盛りの簪や髷紐せえも買へねえから、年中天窓は結び髪、親甲斐もねえ此のおれを、親と思つて其身を賣り、内の暮しを樂にして病を早く直したいと、思つてくれる志し、子とは思はぬ忝けない。（ト五平次お鶴に禮を言ふ思入あつて、）是れに附けても家出した、兄が人間並ならば手前に苦勞は掛けまいもの、餓鬼の折から喧嘩ツ早く小さな形に似合ねえ、力のあるので角力になり、仙臺樣のお抱へになつたと聞いたが暇が出て、今では分家の兵部樣へ御家來分になつたとやら、どうで碌なことぢやアあるめえ、現在親を過すべき兄はあつても頼みにならず、誰を便りにする人もないから手前が身を賣つて、借りを返してくれるのは嬉しいけれど生きて居て、どうまあおれが見て居られう、生き甲斐のねえ體ゆゑ、どんぶり遣つてしまふから、其の身を賣るにやあ及ばね

え。

お鶴　そりやまあ何を言はしやんす、此の身を苦界へ沈めるもお前を達者にしたいから、必ずそんな心をば、どうぞ出して下さんすな。

五平　出すなと言つてもおれが氣で、娘を賣つちやあ居られねえ。

お鶴　居られないと言はしやんすが、是れが世間にない事ならお前の恥でもござんせうが、苦界の勤めをするものは七分は親か夫の爲、まゝある事でござんすれば、留めずと遣つて下さりませ。

五平　それだと言つて、おれが氣で、此儘見ちやあ居られねえ。

お鶴　さあ、それがお前の病の毒。

五平　いつそのくされ病が重り、早く死んでしまひてえ。

お鶴　まあ其のやうに氣を揉まずと、ちつと横になりなさんせ。

五平　えゝ、寐ても起きても居られやしねえ。

お鶴　はてまあ、奥へござんせいなあ。

ト唄時の鐘になり、お鶴五平次を無理に引立て、上手障子屋體へはひる。時の鐘打ち上げ、床の淨瑠璃になる。

浄るり〽はや日も暮れて人顔も、誰そやと知れぬ宵闇や、くらき其身に神並が塒へかへる鳥さへも
若しや追手と跡先へ心配りて立止り、
ト此内花道より三左衞門紺の手甲脚絆好みの旅裝、深き菅笠を冠り、割掛の荷を肩へかけ出で來り、
花道へ留り、跡先へ思入あつて、

三左　三年この方家出をなし、問ひ音信をしねえから、敷居の高い親の家、寄られた義理ではねえけれど、此身の惡事を打明けて、名乘つて出ると極めたからは、此世の別れに餘所ながら暇乞をした上で、是れまで不孝をした代り、元手の金でも置いて行かう。

〽打ちうなづいて門口から、覗く途端に一間より燈火提げて出る妹、それと見るより聲潛め、
ト三左衞門舞臺へ來り、門口から内を覗く、此時奧よりお鶴行燈を提げ出て來る、三左衞門見て、

これ、妹々。

お鶴　なに、妹とは、
〽おとなふ聲に門を見て、（ト門を見て）
や、お前は兄さん。

三左　あこれ、

〽四邊憚り門の戸しめ、（ト三左衞門四邊へ思入あつて内へはひり、門口をしめ、合方になり、）
親仁は内か。

お鶴　あい、内に居なさんすわいな。

三左　何も替ることはないか。

お鶴　いえ〳〵、とゝさんは半年から煩うて居やしやんすわいな。

三左　久しく内へ立寄らねえから、さつぱりおれは知らなんだが、よつぽど重い病氣だつたか。

お鶴　一しきりはむづかしく、案じる程であつたれど、此の四五日は大きによく、寐たり起きたりして居なさんす。

三左　そりやあ何よりいゝ事だ。

お鶴　見ればお前は旅支度で、どこへ兄さん行きなさんす。

三左　今度急に旦那の御用で、遠い所へ使ひに行くゆゑ、親仁や手前に暇乞を、仕ようと思つて寄つたのだ。ちよツと親仁にさう言つてくれ。

お鶴　さあ、とゝさんへさう言うても、久しく便りをしなさんせぬので、腹を立つて居やしやんすゆゑ、お前には逢ひなさんすまい。

三左　成程是れまで身持が悪く、餓鬼の折から此年まで、長年世話をやかせたゆゑ、腹を立つのは尤もだが、今度ばかりは心を入替へ、眞人間に立ちかへり、旦那の御用で遠い所へ、使ひに行くが是れぎりに、いやさ、何時歸られるか知れねえから、暇乞をした上で、長年世話をやかせた言譯、元手の金に今日百兩、あやまり賃を持つて來た、どうか親仁に手前から、執成しをしてくれめえか。

お鶴　そんならお前は心が直り、これまで長くとゝさんに、お世話をやかした言譯に、金を持つてござんしたか。

三左　おゝ、金は爰へ持つて來た、どうか是れを手前から、親仁へ直に渡してくりやれ。

〽言ひつゝ取出す百兩は、金の切羽に妹は嬉しく、

ト三左衞門は胴巻から、百兩包みを出す、お鶴は嬉しき思入にて、

お鶴　さういふ事ならとゝさんへ、少しも早くさう言ひませう。（ト此時上手屋體にて）

五平　いや、來るに及ばぬ、今行くぞよ。

〽隔てし中も眞實の、親子に破れし障子を明け、五平次病所を立ち出で、、

ト上手障子を明け、以前の五平次出來り、

思ひがけない峰右衛門、何と思つて尋ねて來た。

三左　今更何と言譯の、仕樣もないが實の事、三年便りをしないのは、是れにも譯のあることだが、それは扨て置き半年から煩つて居たといふ事だが、知らぬ事とて見舞もせず、不孝に不孝を重ねしゆゑ、育て甲斐のない奴と嘸や腹が立つたであらうが、惡い心を入替へて眞人間になりましたから、どうぞ許して下さりませ。

五平　餓鬼の折から喧嘩ツ早く、人を打つたり打たれたり、苦勞をかけた其上に、角力になつても惡い噂、親が聞いては居られぬから異見をしたのが腹が立つたか、それからこつちへ音信不通、親を親とも思はねえ、そでねえ奴だと手前のことを言はねえ日とては一日もねえ。今も今とてお鶴と二人で、返らぬ愚癡を言つて居たのだ。

三左　さう言ひなさるは尤もだ、痩せても枯れても男の總領、力にならねばならぬ體で、身性の惡さに三年このかた、問ひ音信をしねえのは、此上もない親不孝、濟まねえ事と氣が附いて、遠い使ひの旅掛けに我が身の詫びと、二ツには、何日歸られるか知れねえから、暇乞に參りました。身の言譯に持つて來た此百兩を元手にして、小商ひでもして下せえ、腹も立たうが過ぎ去つた、此身の不孝を料簡して、是れを受取つて下さりませ。（ト百兩包みを五平次の前へ出し、思入）

五平　むゝそれぢやあ手前も目が覺めて、是れまで不孝をした詫びに、此の百兩を持つて來たとか、

三左　又其内に都合してお前を樂に致します、是れから餘計な苦勞をせずに、煩はぬやうにして下さりませ。

〽常に替つて峰右衛門が、優しい詞も心では、是れが別れと目に淚、見る五平次は斯程まで、まことの人になりしかと、嬉し淚を押拭ひ、（三左衛門五平次よろしく思入あつて、）

五平　今も今とてお鶴と二人で、手前のことを言つて居たが、心が附いて持つて來た此の百兩は何よりも、二人が身に取り忝けない、何を隱さう半年からおれが病氣で生業せず、盤臺よりか内證が干上り、そこら爰らに借りが出來、切羽詰つて吉原へ實はお鶴を沈める所、思ひがけない此金で、もう沈めるにも及ばねえ。

お鶴　もう一日遲ければ、わたしは苦界へ行く所、今夜わざ〳〵此の金を、とゝさんに下さんしたは、親兄妹を思ひなさんすお前の心が屆きました。兄さん、嬉しうござんすわいな。

三左　それぢやあ手前は身を賣る所か、それは何よりよかつたな。

五平　娘を一人拾つたは、全く手前のお蔭ゆゑ、是れに免じて是れまでの事はさつぱり許して遣るぞ。

三左　思ひがけなく今日爰へ、尋ねて來たが此身の仕合せ、元手と思つて持つて來た此百兩が役に立ち、

それぢやあ許して下さりますか。

五平　おゝ、許さねえでどうするものだ。

三左　其の一言でさつぱりと、日本晴がしたやうだ、こんな嬉しいことはねえ。

五平　さうして手前は遠い所へ使ひに行くといふことだが、何處へ是れから使ひに行くのだ。

三左　さあ、其の行く先きは奥州の、いやさ、其の往來は中仙道、然も越後の新潟へ、火急の用で參ります。

五平　それぢやあ是れから新潟へ、火急の用で使ひに行くのか。

お鶴　どんな御用か知らねども、今夜は泊つて明日の朝、早く爰から立たしやんせいな。

三左　おれも今夜は内へ泊つてゆつくり話して行きたいが、どうもさうして居られねえ、今にも屋敷からわしを尋ねて、若し人が來ないものでもござりませぬが、三年此方音信不通で、今夜内へ來たことは沙汰なしにして下さりませ。

五平　今夜内へ來た事を、沙汰なしにしてくれといふは、何ぞ案じることではないか。

三左　いえ、案じることではござりませぬ、仔細は今度のお使ひを、勤めた上で話しませう。

五平　どんなことだか其譯を、聞いて置きたいものなれど、急ぐとあれば留められず。

三左　斯うして話しをして居る内も、心が急けば是れから直に。

お鶴　そりやまアあんまり本意ないこと。

五平　せめて一夜は泊めたくも、

三左　主用なれば是非がない。

お鶴　そんなら、どうでも、

三左　更けねえ内に行きませう。

〽追手の掛らぬ其うちと、草鞋の紐を結ぶ間も、心急かれて立ち出づれば、

ト三左衛門心の急く思入にて、草鞋を穿き門口へ出る、此時最前の胴巻を忘れて行く事。

五平　必ず御用が濟んだらば、

お鶴　直に歸つてゆつくりと、

三左　目出度く其時、

三人　逢ひませう。

〽これが別れと峰右衛門、先きへ一足又後へ、引かるゝ氣をば取直し、足を早めて急ぎ行く。

ト五平次お鶴門口にて見送る、三左衛門よろしく思入あつて、ばた／＼になり、一散に花道へはひる。

〽跡見送りて妹が。

お鶴　餘程急な御用と見えて、雲を霞と行かしやんしたわいな。

〽傍にありし胴卷を、五平次は取り上げて、（ト五平次三左衞門が忘れし胴卷を取り上げ見て、）

五平　や、此胴卷は見馴れぬが、峰右衞門が忘れて行つたか。

お鶴　ほんに是れは兄さんが、取り急いで仕舞ふを忘れ、爰へ置いて行かしやんしたか。

五平　嘸まあ困ることであらう。

お鶴　まだ遠くは行かしやんすまい、わたしが跡を追掛けて。

五平　いや〳〵女の足では追附かれぬ、殊には夜道で物騷なれば、手前に持たしちや遣られねえ。

お鶴　それでは誰ぞ人を賴んで。

五平　まだまあ跡にも百兩餘り、うつかり持たせて遣られもせず、心が附いたら途中から、取つて返すに違ひない。

お鶴　早う歸つて下さんすりやよいが。（ト お鶴起ちつ居つするを、）

五平　いや、歸つて來るに違ひないから立ち騷がずに居るがいゝ、（ト以前の金を出し、）それに附けても今日に迫りし、金の切羽へ思ひ掛けなく、百兩持つて來てくれたは。

お鶴　まことにこれが地獄で佛。
五平　鬼の責めよりまだ切ない。
お鶴　辛い貧苦を助かりて、
五平　浮み上りし親子二人。
お鶴　ほんに明日から極樂に、
五平　なるのもみんなあれが蔭。
お鶴　是れを思ふと世の中に、
五平　持つべき物は我が子だなあ。

〽金押し戴き親と子が、嬉し涙に暮れ果てゝ、日割れの戸より映す火影、目當に爰へ汐澤が。
尋ね來りて立ち留り、

ト時の鐘、花道より前幕の丹三郎、羽織袴大小にて出來り、花道へ留り、

丹三　花川戸の裏手にて、船宿より三軒目といへば向うに違ひない、逐電なせし三左衛門が親の家とあるからは、探索なして彼れが在所、どうか尋ね當てたいものだ。

〽心にうなづき丹三郎、目差す軒端へ立寄りて、（ト丹三郎思入あつて舞臺へ來り、門口より、）

ちと、お賴み申す。

五平　これ娘、どなたか表へお出でなされた。

お鶴　はい、どちらからお出でなされました。

〽門の戶あくれば慇懃に、（ト お鶴門口を明ける）

丹三　以前鳴神峰右衞門というて、角力をいたして居られた仁の、宅はこちらでござるかな。

お鶴　はい、こちらでござりまする。

丹三　然らば許しやれ。

〽刀を提げて打通れば、五平次は不審に思ひ、

ト丹三郎刀を提げ上手へ通る、五平次お鶴顏見合せ、さてはといふ思入。

五平　見れば立派なお侍様、何御用あつて私方へ。

丹三　ちと尋ねたい用事あつて、態々是れへ罷り越した。

〽いふに二人は扨はと思ひ、

五平　私事は峰右衞門の親五平次と申します者、してあなた樣はどちら樣の、御藩中でござりますか。

丹三　某事は伊達家の藩中、汐澤丹三郎と申す者。

兩人　え、（ト思入、誂への合方になり、）

五平　すりやあなたがお噂に承はつて居りました汐澤樣でござりましたか、知らぬ事とて失禮千萬、眞平御免下さりませ。これ娘、お茶を早く上げないか。

お鶴　あい〳〵、今お上げ申しますわいな。

丹三　いや、必ず構うてくりやるな。（ト お鶴茶を出す、）

五平　して汐澤樣には夜中と申し、此の見苦しい私宅へ、何御用で入らせられました。

丹三　そちが悴峰右衞門に、逢はねばならぬ用事あつて、態々これへ參つたが、定めて家に居るであらうな。

五平　え。

丹三　ちよつと身共に逢はしてくりやれ。

五平　いえ、お尋ねなさる峰右衞門は、三年この方音信不通、私方へ一度でも參つたことはござりませぬ。

丹三　いや、此家へ今宵參りしと、慥に申せし者あつて、逢ひに參つた丹三郎、包み隱さず逢はしてくりやれ。（ト お鶴思はず、）

お鶴　そんなら今宵兒さんが。（ト言ひ掛けるを、）

五平　あゝこれ、何を手前が入らぬ口出し、茶でも入れる支度をしろ。（ト思入あつて、）私方へ峰右衞門が立寄りませぬは、外ならず御恩になつた先殿樣、今御隱居にお成りなされ、袖ケ崎のお下屋敷に御不自由をなされまして、おいでなさるを餘所に見て、御恩報じもいたさずに、どこの國にか御分家の兵部樣の家來となり、名も三左衞門と替しとやら、見下げ果てた性根ゆゑ、異見をなしたが氣に入らぬか、それからこつちは音信不通、今では勘當同樣ゆゑ、家へは決して寄せ附けませぬ。

丹三　假令是れまで不通なりしも、勘當なせしといふにもあらず、切つても切れぬ五本の指、正しく今宵尋ね參り、匿ひ置いたであらうがな。

五平　いや、合點のいかぬ其お詞、匿ひあるとおつしやりますは、何か悴が不埒でもいたしましてござりますか。

丹三　おゝ、如何にも不埒をいたしたり、兵部樣のお手許金を二百兩奪ひ取り、昨夜出奔いたせしぞ。

五平　えゝ、さては悴が二百兩、

お鶴　そんなら、もしや、

五平　あこれ。いや、飛んだ事をいたしましたなあ。

〽はつと二人が驚けば、

丹三　今朝より八方へ手分けをなして詮議いたせど、今に於て在所知れず、假令いづくへ立退くも、現在親身の親兄妹、此家へ來るは必定と詮議の爲めに參りし某、荒立て申さば伊達家の恥辱、事穩便に計らはん、包み隱さず是れへ出せ。（トきつと言ふ、）

お鶴　其の仰せでは兄さんは、お金を盗んでお屋敷を、立退きましてござりますか。

五平　お主の金を盗み取り、出奔せしとは憎い奴、三年此方おとづれもせず、擧句の果に此樣な惡い耳を聞かせるとは、言はうやうない人でなしめが。

丹三　やあ、しら〴〵しき其詞、何やう知らぬと申すとも、此家を目指して參りしからは、たゞ此儘にはいたさぬぞ。さあ、何れへ隱した、それを申せ。

〽刀を取つて詰め寄れば、（ト丹三郎刀を構へきつとなる、）

お鶴　まあ〳〵お待ち下さりませ、そりやもう親の家ゆゑ、逃げて來たかとお疑ひは御尤もではござりますが、全く以て私共は夢にも知らぬ其のお話し、お疑ひがござりますなら、御覽の通りの狹い家、家搜しなされて下さりませ。

五平　此身に覺えない事を疑ひ受くるもあいつゆゑ、餓鬼の折からあの年まで、親に苦勞を掛け通し、まだあきたらず覺えもねえ、こんな難儀を掛けるといふは、あんな不孝な奴はねえ。

〽斯うと知つたら最前の、金も貰ひはせまいものと、悔し涙に暮れければ、さては爰には居らざると、丹三郎は推量なし、（ト五平次は悔しき思入、丹三郎は是れを見て頷き、）

丹三　むゝ、知らぬとあらば知らぬにして、此場は宥免いたしくれんが、必ず今宵か明日は、立廻つて參るであらう、其時きつと取押へ、伊達の屋敷へ知らせてくりやれ。

五平　そりやもう家へ參りますれば、此の五平次が面晴れに、きつと捉へてお屋敷へお知らせ申すでござりまする。

丹三　親子の中ゆゑ其儘に、捉へず逃す其時は、五平次汝が身の上だぞ。

五平　畏りましてござりまする。

丹三　然らば身共は立歸らん。

お鶴　左樣なれば、汐澤樣には。

丹三　未だ外にも志す調べがあればそれへ參つて、彼れが探索いたすであらう。

五平　悴が不埒をなせしばかり、かゝる夜中に汐澤樣へ、

お鶴　御苦勞お掛け申しまする。（ト合方にて丹三郎門口へ出て）

丹三　返す〴〵も此家へ來らば、きつと捉へて屋敷へ知らせよ。

五平　早速お知らせ申しまする。

丹三　しかと申し渡したぞ。

〽詞祢へて汐澤は、立歸りしがうなづきて、道を違へて行き過ぎぬ。

ト丹三郎門口をしめ、花道へ行きかけ、思入あつてうなづき、下手へはひる。

〽跡見送りて五平次が、どうと坐して齒嚙みをなし、

ト五平次門口を明け、表を見て、どうと下に居て、

五平　あゝ、知らなんだ〳〵、三年この方音信せぬ不孝を詫びて百兩の、此の金持つて來をつたは、惡い奴だが一ッ宛取る年ゆゑに目が覺めて、孝行する氣になつたかと、嬉し淚がこぼれたが、やはり心が直らずに、持つて來たのは盜んだ金。

お鶴　丁度わたしが苦界へ沈む、金の切羽の其處へ思ひがけない兄さんが、お金を持つてござんしたは天道樣のお助けと、悅ぶ甲斐も情ない、盜んだお金でとゝさんに、難儀の掛るといふことは、何たることでござりませう。

五平　今にも忘れた此金を、取りに戻つた事ならば、親が縛つて此の金添へ、兵部様のお屋敷へ連れて行つて御處置を受けん、思へば憎い奴だなあ。

〽正直一途に五平次が、盗みする子を持ちたるは、何たる因果と身をあせり、悔し涙に暮れける折柄、取つて返せし三左衛門、走り入つて門の戸しめ、

ト此内五平次よろしく思入、ばた〳〵になり、花道より以前の三左衛門走り出來り、直に門をはひり、門口をしめほつと思入あつて、

三左　これ妹、金のはひつた胴巻が、爰に落ちてはなかつたか。

お鶴　おゝ兄さん、爰にござんすわいなあ。（ト胴巻を出す、）

三左　やれ〳〵嬉しや〳〵、もしや途中で落しはせぬかと、心も急いて立歸つたが、今此金がない時は、路用がなければ行かれぬ旅。

〽胴巻取らんとなす所を、襟上とつてぐつと引附け、

ト五平次腹の立つ思入にて、三左衛門を引附け、

五平　こりやい、よくもおのれは此の親を、盗人に仕ようと仕をつたな。

三左　なに、盗人に仕ようとは。

五平　さつきおれにくれた金は、兵部樣のお屋敷で、盜んだ金であらうがな。
三左　えゝ、どうしてそれを。
五平　たつた今お屋敷から、汐澤丹三郎といふお人が、金の詮議にござつたわ。
三左　えゝゝゝ。(ト南無三といふ思入)
五平　言はうやうない不孝者めが、

〽突放して佛壇より、位牌取出し詰寄りて、

ト五平次佛壇より誂への位牌を出し、三左衛門に詰寄り、

今更言ふに及ばぬが、おれが親仁は津輕のお家で、深見五郎太夫といつて、百五十石御扶持をお貰ひ申せしもの、仔細あつて浪人なし、大小捨てゝ町人になつても仕馴れぬ商法に、貯へ置いた金も減し段々下司になり下り、おれが代には魚賣、しがない暮しの瘦世帶、昔の影の殘つたは家に傳はる位牌のみ、どうぞ悴は人らしくさせたい者と明暮に、思ふ折柄角力になり、大名衆のお抱へに旅行は帶刀なすと聞き、やれ〳〵嬉しや御先祖も嘸お悅びと思ふうち、御恩を受けし殿樣に廓通ひをお勸め申し、それが箇條に御隱居の御身とお成りなされしに、御恩も送らず御分家の兵部樣の家來となり、それからこつちへ音信不通、憎い奴とは思へども現在我が子に一日でも、

われを思はぬ事はない、やう〳〵床は上げたれど半年越しの長煩ひ、そこら爰らに借りが出來首の廻らぬ借金に、仕方なく〳〵此お鶴を、廓へ賣らうといふ程に煎じ詰めたる貧乏暮し、二度の食を二度喰つても人樣の物塵ツ葉一本盜んだことのない五平次、假にもお主と賴んだる兵部樣の金を盜み、今にも天の網がかゝり、捕へられたら命がないぞ、おれは兎もあれ御先祖の、深見の家名へ疵を附け、それでうぬは濟まうと思ふか。

ト位牌を取つて五平次が、打つ力さへなく〳〵も、病後の疲れに咳入るを、お鶴は背を撫でながら、

ト此内五平次よろしく思入にて言ひ、位牌で三左衞門を打つ、三左衞門は俯向き居る、トヾ五平次手の疲れし思入にて咳入る、お鶴介抱しながら、

お鶴 もし兄さん、何でお前は此やうな道ならぬ事しなさんした、言譯あらばとゝさんに、早う言うて下さんせいな。

三左 これには深い仔細あれど、めつたに言はれぬ事ゆゑに。

五平 人間らしいことをいふが、慾に迷つて盜んだより、外に仔細があるものか、それを此儘おく時は先祖の恥になる事ゆゑ、おれが繩かけ此の金添へ、兵部樣へ連れて行く。さあ、覺悟極めて繩掛

れ。

〽傍に掛けし用心の、繩引下し立ちかゝれば、三左衛門は詮方なく、

ト五平次柱に掛けし細引を取り立ちかゝる、三左衛門思入あつて、

三左 他聞を憚る一大事に、是ればッかりは言ふまいと、心に錠を下したが、先祖の恥とあるゆゑに江戸を立退く置土産、包まず仔細を言ひますから、まあ一通り聞いて下され。

〽門口明けて表を窺ひ、元の所へどつかと坐し、

ト三左衛門門口を明け表を見て、ぴつしやり戸をしめる、床の合方になり、思入あつて、

若い時から負けぬ氣に、喧嘩が好きで叩き合ひ、形に似合はぬ小力のあるので角力になつた所、江戸の産れに贔屓が多く、來る場所毎に出世をなし、仙臺様の抱へとなり、思ひ掛けない身の晴れも、惡い性根を見込まれて、執権原田甲斐殿が一味の中へ引込まれ、御恩を受けし殿様へ廓通ひをお勸め申し、放埒懦弱にしてくれと頼まれたがわしが不運、首尾よく行つて殿様が御隱居となる其時に、兄弟分の荒浪と共に屋敷を追ひ拂はれ、角力仲間も省かれて、身のたゞずみに困るゆゑ、兵部様へ泣き込んで御家來分にして貰ひ、前髪落して野郎となり、神並三左衛門と名を改め、惡事の手先きを働くうち、荒木和助と名を替へた兄弟分の荒浪が、龜千代様を殺さうと、奥

御殿の床下へ忍び込んだを、豫てより窺ふ松前鐵之助に見咎められて生捕られ、手酷い拷問受けたれど白狀せぬゆゑ假牢へ、入れられたのを原田さまが、和助も嘸や切なからう酒でも吞して遣つてくれと、お賴みゆゑに忍び込み酒を吞まして遣つた所、思ひがけねえ其酒に、毒が仕込んであつたかして、

〽和助は七轉八倒の、苦しむ中にわしへの異見、

手前もうか〳〵惡人の、手先を働き與して居ると、終にはこんな馬鹿を見て狂ひ死にをしにやァならねえ、こりやァおれが名言だから今の內に心を改め、とても命を捨てるなら、誠の人になつて死ねと、言はれて實にもと發起なし、是れまで盡した惡事の言譯、一味徒黨の連判を盜んで國へつッ走り、お家の要の御老臣、片倉樣へ訴へ出で、一つの功を立てる心。

〽さはさりながら連判のみ、盜まば人の氣が附いて、

直に追手がかゝるゆゑ、金に目が暮れ盜みをなし、逃げたと見せる積りにて、お納戸金を二百兩盜み取つたも一つの手段、次第によれば證人にならねばならぬ三左衞門、命を捨つる覺悟ゆゑ、此世の別れに百兩の金は則ち生形見。仔細といふは此の通り、疑ひ晴らして下さりませ。

〽一部始終を物語る、門には以前の汐澤が息を凝らして窺ひ居る、斯くと聞くより五平次は

横手を打つて打ち悦び、

ト此内三左衛門よろしく思入にて言ふ、よき程に下手より以前の丹三郎出來り、門口に窺ひ居る、五平次は嬉しき思入にて、

五平　お丶倅出來した、それでこそ武士の流れ、親に勝つた料簡だ、泥坊するはよくないが、是ればかりはよく盜んだ。

お鶴　斯ういふ事とは知らぬゆゑ、何ゆゑ盜みをしなさんしたかと、今の今まで二人して、お前を恨んで居たわいな。

五平　今の話しを聞いて見ると、さつき手前を尋ねてござつた、汐澤樣はよいお人と、思ひの外に惡人へ荷擔なすつたお人であつたか。

三左　原田甲斐が手段に落入り、才智勝れしお人なれども、思案の外の色に迷ひ、到頭一味になりました。

五平　見た所は三十に、まだ間のある若いお人、定めて親御もあるであらうな。

三左　六十近いお袋樣が、お達者でおいでなされます。

五平　あゝ、其のお袋樣が聞かれたら、嘸歎かつしやることであらう、ほんに今まで此おれも、捨ては

居れど血を分けた、たつた兄妹二人の男、悪い噂を聞く度、親の胸は張り裂く思ひ、何であゝいふ子が出來たかと、半年餘りの長煩ひに、力んだ力も落ちてしまひ、

〽返らぬ愚癡に夜もすがら、涙で床がしめるほど、

不孝な手前が案じられ、泣いて明した此の年月。

お鶴　よく說教のお諭しにも、

〽親の因果が子に報ふと聞いては居れど人樣に、恨みを受けぬ父樣が、兄さんゆゑにお胸を痛め、

貧苦の外の御苦勞を、なさるは因果が盡きぬのか。

〽側で聞くさへおいたはしく、共に涙の此の袖が、

乾いたことはないわいな。

〽二人に口說き立てられて、三左衞門も先非を悔い、

ト此内五平次お鶴よろしく思入、門口の丹三郎も思入あつて、

三左　色と慾との道に迷ひ、おのれの榮耀がしたいばかり、道に背いた惡事に與なし、涙に袖の乾かぬ程、親兄弟に歎きを掛け濟まぬ此身の言譯も、善に戻つて孝行を仕にやアならねえ身の上も、又

もや親を振捨て、纎弱き妹に苦勞をかけ、遠い所へ行かねばならぬが、是れも忠義の一つゆゑ、どうぞ許して下さりませ。

五平　一旦惡事に與なした手前が善に立返れば、朝夕おれが側に居て孝行をしてくれるより、遠い所へ行かうとも、忠義を立てゝくれるのが、おれが爲めには百層倍、遙かにまさつて嬉しく思ふ。

三左　其とつさんの悅びを、聞いておれも心が殘らぬ、何時まで居ても名殘りが盡きねば、是れから直に出掛けよう。

お鶴　そんならお前は夜道も厭はず、是れから直に行かしやんすか。

五平　又何時逢はれるか知れねえから、せめて別れの杯でも、

お鶴　おゝ、其の杯なら、もしとゝさん、さつきのお酒がござんすぞえ。

五平　そいつは何より幸ひだ、早く支度をしてくれろ。

お鶴　あい〳〵。

三左　いや、さうゆつくりとはして居られねえ。

お鶴　いえ〳〵、直でござんすわいな。

へお鶴が手早く取出す、酒の調度に五平次は、猪口取り上げて嬉し氣に、

ト此内お鶴八寸の膳の上へ、燗徳利猪口干物を皿へ入れ、是れを載せて出す、五平次猪口を取りお鶴酌をする、此内丹三郎は下手へはひる、床の合方にて五平次ぐつと呑み、

五平　今日此やうに打揃ひ、酒を呑まうとは知らなんだ。（ト三左衛門へさす、）

三左　とつさん、お前と一緒に呑むは、今年で丁度三年振りだ。（ト三左衛門お鶴へさす、）

お鶴　こんな嬉しい事はござんせぬ。

三左　さあ手前が呑んだら、とつさんへ。

五平　目出度くおれが納めよう。（トお鶴五平次へさす、五平次猪口を受け思入あつて、）あゝ、何時又斯うして呑まれるか。

〽これが名残りと五平次が、惜しむ名残りに咽せ返れば、

ト五平次名残りを惜しむ思入にて、酒に咽せろ、お鶴介抱する、三左衛門思入あつて、

三左　是れで思ひ置くことなければ、とつさんわしはもう行きますよ。

五平　それぢやあ直に出掛けるか。

三左　更けねえ内に行きませう。

お鶴　お名残り惜しうございますが。

五平　引留めたらば忠義の邪魔。
三左　今宵本意なく別れるとも、
お鶴　やがて目出度く三人が、
五平　又逢はれるか、逢はれぬか、
三左　知れぬ浮世は老少不定。
お鶴　若しも是れぎり逢はれずば、
五平　是れが互ひに顔の見納め、
三左　とつさん、
五平　悴、
三左　思へば果敢ない、
三人　身の上ぢやなあ。
〽親子兄妹三人が、手を取交し身をかこち、憂きを宮戸の川水も、涙にまさる如くなり。
ト三人手を取交し、愁ひの思入よろしく、時の鐘。
お鶴　今鳴る鐘は、もう九つ、

五平　是れから先きは夜見世も引け、
三左　往來稀な裏道傳ひ、
五平　忘れて行つた此の金を、
三左　路用となしてちつとも早く。（ト五平次胴卷を出す、三左衞門腹へ結び附ける。）
お鶴　そんなら兄さん、御機嫌よう。
三左　とつさんの世話を賴むぞよ。
お鶴　あい。（ト泣く。）

〽又も淚の雨催ひ、降らぬ內にと立ち出づる、門に窺ふ汐澤が、

ト三左衞門門口へ出ようとする、此內門に窺ふ丹三郎思入あつて、身ごしらへなし、

丹三　盜賊神並三左衞門、逃ずこと相成らぬぞ。（ト丹三郎ずつと內へはひる。）
三左　それ聞かれては、生けて置かれぬ。

〽拔手も見せず切り掛るを、丹三郎身を躱して神並が、刀持つ手をしつかと留め、

ト三左衞門一腰を拔き切つて掛るを、丹三郎身を躱し、ちよつと立廻つて三左衞門を留め、

丹三　こりや三左衞門逸まるな、氣を急かずとも、まあ待ちやれ。

三左　むゝ、待ては汐澤命が惜しいか。
丹三　いゝや、命は惜しまねど、汝に言ひ度き事があるゆゑ。
三左　如何なる事か知らねえが、聞いて居る間も心が急けば、此の三左衛門を見脱すか、見脱されずば生けては置かれぬ。
丹三　如何にも汝を見脱さうが、たゞ此儘には見脱されぬ。
三左　何と。（ト跳への合方になり、）
丹三　最前詮議に來りしが、全く居らぬ體ゆゑに、是非なく此家を立去りしが、親の家ゆゑ今宵のうち立廻らんは必定と、再び此家に歸り來て、門に佇み樣子を聞けば、子ゆゑに迷ふ親の異見、我にも一人の母あれば一々胸に當りし上、汝が惡事を見限りて改心なせし物語りに、計らず無明の夢も覺め、惡事を止り善心に立返れども武士の身で、誓紙血判なしたる上は、此儘汝を見脱しては原田氏へ言譯なし、とても死すべき一命なれば、忠義の刃に掛りて死なん、我を此場で討果し潔く出立いたせ。
三左　すりや汐澤樣にも惡事を止まり、御改心なされしとか。
丹三　是れといふのも五平次殿が、異見を聞きての改心なれば、丹三郎には善知識、命は惜しまぬ三左

衛門、いざ此の首を討つてくりやれ。

三左　是れまでならば知らぬ事、御改心ある上は。何ゆゑあなたが討たれませう。

丹三　討たねば一味の盟約ゆゑ、汝を此の儘見脱されぬぞ。

三左　それだといつて、

丹三　追手の掛らぬ其内に、我れをば討つて出立いたせ。

〽義を立て通す汐澤が、詞に五平次感心なし、（ト丹三郎思入、五平次感心せし思入）

五平　あゝ有難い其のお詞、此の五平次が歎きをば母御樣に引較べ、御改心なされましたは、まことに恐れ入りました、人は斯樣にありたいもの。然しながら御料簡が、まだお若いかと存じます。

丹三　なに、料簡が若いとは。

五平　只今爰で命をば、お捨てなさるはほんの犬死、とてもお捨てなさるなら、何かあなたが頼まれて惡事を仕損じ、潔く御切腹をなさいましたら、一旦一味に加はりし原田殿へも義理が立ち、又お上へも功が立ち忠死とならば跡々まで、母御樣へ御難儀が掛るまいかと存じまする、まだ御料簡が若いとは、爰の所でござりまする、御思案なされて下さりませ。

〽道を教へし五平次が詞に迷ふ心を定め、

丹三　むゝ、流石は武士の流れとて、我が死を留めし利害得失、汝の詞に隨ひて、如何にも思ひ止りしぞ。

五平　すりやお止り下さりますとか、えゝ有難うござりまする。

三左　其のお詞を承はり、安堵いたせば私は、是れでお別れ申します。

丹三　して、又汝は何れより、白石へ行く所存なるぞ。

三左　是れより直に山谷へ出で、千住通りを眞直に、夜明までには鍋掛の原まで漕ぎ附け、奧州路を。

丹三　いや〳〵それは危ふき事、伊達安藝殿の出府を待ち受け、道にて討取る手筈にて、浪人共を打ち語らひ、本街道は鵜の目鷹の目。

お鶴　それでは迂濶に白石まで、一人旅では行かれまい。

丹三　それゆゑ是れより向うへ渡り、曳船通りを眞直に、水戸街道の松戸へ出で、

三左　むゝ、それぞ覺えのよき裏道。

五平　人目に掛らぬ其うちに、

三左　左樣なれば汐澤さま、

丹三　跡氣遣はずと、

三左　はや、おさらば。

〽荷物を肩に立出づる。

ト三左衛門此内草鞋をはき、割掛けの荷を肩へ掛け、菅笠を持ち出ろ、門口に幕明の辨太窺ひ居て、

辨太　神並見附けた。

〽むんずと組附く目明しを、取つて投げ退け一目散、道を早めて。

ト三左衛門に組附くを、振り解いて内へ投げ込み、つか〱と花道へ行く、丹三郎辨太を引附けろ、お鶴はびつくりなす、五平次は門口より三左衛門を見送る、三重、本釣鐘の寺鐘、ばた〱にて三左衛門一散に花道へはひろ、此の引張りよろしく、

ト時の鐘にてつなぎ、直に引返す。

幕

(蘆野宿並木の場)――本舞臺一面の平舞臺、正面太き松並木、上下藪疊み、向う在體の遠見、上の方に奥州街道蘆野宿といふ榜示杭、日覆より松の釣枝、總て奥州街道蘆野宿並木の體、爰に大場道益背割羽織小紋の脚絆、草鞋大小にて立身、これを○△□◎の四人の浪人、尻端折り大小抜身にて道益を取巻き居る、馬士唄にて幕明く。

道益　見れば各抜刀にて、此の道益を何とさつしやる。

○　何とするとは愚な事、こなたも伊達家のお抱へにて、

△　醫者をしながら此の脈が、引けぬは知れた藪醫どの、

□　こなたを爰まで連れ出したは、原田様のお頼みで、

◎　江戸を放れた奥街道、此の松並木で殺すのだ。

道益　扨は褒美の五千石、領地の下見をして來いとまことしやかに僞つて、此の道益を欺きしは、毒薬調合させたのを若しや口外でも仕ようかと、それで我を殺すのか、さりとは卑怯な原田甲斐。

○　やあ、脈の上つた病人同然、命はねえから、

四人　覺悟なせ。

道益　葛根湯をだい〳〵せんに盛る藪醫者も匙先きより、悪事の智慧が先きへ廻り、四枚肩に長棒の殿様といふ御殿醫に、勝る心の大場道益、味方に頼んで今となり、爰へ連れ出し殺さうとは、古法家過ぎる荒療治、人を助ける業ながら、原田に荷擔の浪人共、命を取るぞ覺悟なせ。

△　匙先きならば知らぬこと、

□　うぬらに取られる命はねえ、

◎　こま言いはさず、

四人　疊んでしまへ。

ト馬士唄にて四人道益へ切つてかゝる、道益四人を相手に立廻り、よろしくあつて、トゞ道益深手を負ひ、

道益　えゝ浪人共の手にかゝり、やみ〳〵死ぬるが、口惜しい。

○　默つて往生、

四人　仕てしまへ。（ト道益を切倒し、止めを刺し、）

○　こんな非業な最期をするも、是れまでうぬが匙先きで、人を殺した皆報い。

△　こいつをばらせば毒藥を、調合させし密計も、家中へ漏るゝ氣遣ひなし。

□　人目に掛らぬ其内に、原田氏より渡されし、

◎　證書を入れし紙入れを、取つて歸るが褒美の種、

○　少しも早く搜しめされ。

△　心得ました。（ト時の鐘合方になり、△道益の懷より紙入を出し、中より證書を出し見て、）慥に是れに相違ござらぬ。（トばた〳〵馬士唄になり、花道より同じこしらへの平馬出來り、）

平馬　何れも、爰にござつたか。

○　おゝ、平馬どのでござつたか、先づ道益めは仕留めました。

△　して伊達安藝めは見えませぬか。

平馬　某遠見いたせし所、旅乗物にて主従とも、只今是れへ參りまする。

□　すりや、此處へ、

四人　參るとな。

平馬　附添ふ家來は腕前の、たしかに勝れし者ならん、必ず共に油斷めさるな。

四人　心得ました。

ト時の鐘合方になり、皆々上下へ忍ぶ、花道より人足旅乗物を舁き、蜂谷六左衛門背割羽織、半天紐附股引草鞋大小にて附添ひ、紺看板脚絆草鞋の中間雨掛を擔ぎ出來り花道にて、

六左　先刻立場で承はりしに、人家途絶えし並木などへ盗賊出ると申す噂、油斷ならねば宿場まで、大儀ながら急いでくりやれ。

若衆　畏りました。（ト右の合方にて舞臺へ來る、以前の五人ばら〳〵と出で、駕籠を取卷き、）

○　やあ、其の駕籠待つたっ。通すことは、

四人　罷りならぬ。（ト六左衛門きつとなり、）

六左　やあ、何ゆゑあつて道を遮り、駕籠を止めて狼藉なすぞ。

○　おゝ、狼藉なすは此の駕籠の、内は正しく涌谷の伊達安藝、

△　此度忍びの同勢で、江戸へ下ると聞いたゆゑ、

□　かねぐ我々遺恨あれば、

◎　二三日跡より爰へ出張り、

平馬　待網掛けて、待つて居たのだ。

○　さあ尋常に、

四人　勝負なせ。（ト取巻く、六左衛門きつと思入あつて、）

六左　やあ、其の名も名乗らず勝負せよと、武士の作法を知らざる奴、浪人などに遺恨を受くる我が主人ではあらざるが、遺恨と名を附け狼藉なすは、察する所御家を覗ふ惡人共に頼まれたな。

○　いゝや、人には頼まれぬ、奥州におき伊達安藝に、

△　深き遺恨のある我々、

□　其の姓名が聞き度くば、

◎　冥土の土産に言ひ聞かさん。

平馬　きり／＼駕籠から、

四人　是れへ出よ。

六左　いや、忍びなれども伊達家の元老、其名も知れざる浪人共に、故なく對面いたさうや、達てと申さば某が、手並の程を見せてくれるぞ。

○　やあ、小癪なる其の一言、

△　こやつ諸共討つて取れ。

皆々　合點だ。

ト驛路の鈴の入りし鳴物になり、五人六左衛門へ切つてかゝる、六左衛門拔合せ立廻る、是れにて中間は雨掛を置いて、人足と共に下手へ逃げてはひる、六左衛門は五人を相手に立廻りながら上手へはひる、少し經つて上手より、○△□◎の四人出來り、

○　それ、伊達安藝めを引摺り出せ。

三人　合點だ。

ト駕籠の戸を引放す、内より熊田甚五兵衛、背割羽織達附大小凜々しき拵へにて刀を持ち、ずつと出

ろ、四人見てびつくりなし、

○や、こりや老人と思ひの外、

△見れば血氣の若侍、

□定めて伊達家の家來ならんが、

◎其名は何と、

四人　いふものだ。（ト誂への合方になり、）

甚五　斯ることもあらんかと、伊達安藝殿には豫てより慮りて途中から、町人體に姿をやつし、中仙道へ横切れて、早今頃は江戸表へ到着ありしに疑ひなし、又道中を伊達安藝殿と僞り來たる某は奥羽に於て强力の譽れを取りし一個の壯士、其名は熊田甚五兵衞、望みに任せ元老に替つて勝負いたしくれん。

○さては汝が聞き及びし、

△力强の熊田なりしか、

□假令替玉なればとて、

◎生けては置けぬ、

四人　覺悟なせ。
甚五　高の知れた浪人共、命を取るも殺生ながら、望みとあるゆゑ勝負なし、我が腕前を見せてくれう。
四人　何を小癪な。
ト誂への鳴物にて、甚五兵衞四人を相手に立廻りよろしくあつて、トゞ四人叶はず下手へ逃げてはひる、此の時道盆の紙入を落して行く、甚五兵衞刀を拭ひ鞘へ納める、ばた〳〵になり、上手より六左衞門走り出來り、
六左　熊田氏、御別條はござらぬか。
甚五　貴殿も御無事で先は重疊。
六左　かゝる狼藉あるに附け、伊達安藝殿の先見には、まことに恐れ入つてござる。
甚五　奸智に長けし原田甲斐が、巧みし事を悟られしは、若年者の及ばざる叡智勝れし年の功、安藝殿首尾よく江戸着あらば、惡人滅び善人の榮える時節に到るでござらう。（ト六左衞門紙入を拾ひ、）
六左　やあ、此紙入は今の浪士が、逃げるはづみに落して行きしか。
甚五　慥に今の浪士等も、甲斐へ荷擔の者と思へど、何ぞ證據になるべきものが。
六左　先づ紙入の此中を、改め見たら何ぞ證據が、（ト六左衞門紙入を明け、中を改め一札を出し、）此の一

札を御覽下され。

甚五　どれ、（ト一札を開き見て、）「一札の事、一、此度毒害の儀首尾よく成就いたすに於ては、其方へ三千石、忰宇右衛門へ二千石宛て行ふべき者也、寛文四年四月二十日、原田甲斐、伊達兵部判、大場道益老へ。」是れぞ惡事のよき證據。

六左　測らず是れにて手に入りしは、

甚五　まことに天の賜なり。（ト押戴いて懷中する、六左衛門四邊を見て、）

六左　この、人足は如何せしか、荷物は拙者が擔いで參るが、此の乘物を置いても行かれず、はてさて困つたことでござる。

甚五　いや、氣遣ひめさるな、乘物は身共が一人で擔いで參らう。（ト乘物の棒を片寄せる、）

六左　すりや、乘物を一人にて、

甚五　なに、これしきは、（ト乘物を舁き上げるを道具替りの知らせ、）何でもござらぬ。

ト六左衛門も兩掛を上げる、此の見得よろしく馬士唄にて道具廻る。

（水戸街道宍戸宿の場）――本舞臺眞中より上寄りに九尺常足の二重、丸太柱の辻堂、藁葺、三方平屋根本緣附、向う古びたる狐格子、明け立てあり、上手に松の大樹、日覆より同じく釣枝、下手に水戸

海道宍戸宿といふ榜示杭、後筑波山を見たる遠見、ずつとの上下を樹木の張物にて見切り、總て水戸街道宍戸宿の體、爰に宿役人立掛り、下手に一、二、三、四の百姓四人控へ居る、在郷唄にて道具留ろ。

宿役　今日は御領主樣のお鷹野だが、雨上りでそこ爰が馬さくれで高低があるから、お通り道の繕ひは平に直して置いたらうな。

一　昨日から山を毀し、道普請をすつかりして、

二　山際から田の畔まで、

三　塵ツ葉一本ないやうに、

四　綺麗に掃除をいたしました。

宿役　よく念を入れてするがよい、こんなお慈悲深い御領主樣は、外の國にはありはせぬ、諸事萬事がお手輕でお鷹野などの時でさへ、お上を學ぶ下々のお役人もやはらかにやかましいことをおつしやらねば、粗末にしては勿體ない、大火などを焚いてはならぬぞ。

一　煙を出しては濟まぬゆゑ、

二　わしらが村は昨夜のうち、

三　みんな飯を炊いてしまひ、
四　今日は圍爐裏の火ばかりゆゑ、
四人　大丈夫でござります。
宿役　それは何より安心だ、もうお通りに間もあるまい。
一　これからわし等も足でも洗ひ、
二　村中一緒に、
四人　拜みませう。
宿役　さあ〳〵、一緒にござれ〳〵。

ト右の鳴物にて、宿役人先きに四人下手へはひる。時の鐘、誂への合方になり、辻堂の扉を明け、前幕の三左衛門油紙に包みし割掛けの荷を持ち、椽へ出て思入あつて、

三左　一昨日の晩花川戸の親仁の所を立つてから、追手のかゝる身の上に、なるたけ人の目に立たぬ間道傳ひに晝夜を掛け、休みなしに歩いたので、氣は張つて居れど體が疲れ、日に二十里は苦にならぬ足も三里の膝脚氣、乘りたい駕籠も若しひよつと、跡の噂になつてはと、駕籠にも乘らず歩いて來たが、間者の覘ふ奧州路と違つて爰は水戸街道、先づ安心と氣も弛み、此の辻堂で足休め

に一息ついたが疲れたゆゑ、寐るともなしに一寐入り、二時餘りと思つたが、もう日差しでは八ツでもあらうか、立場は人の目に附くゆゑ、百姓家にて支度して、今夜も夜通しやッつけようか。

ト時の鐘、三左衛門思入あつて荷を肩へ掛け、笠を持つて花道へ行きかける、花道の揚幕にて下に居ろ〳〵と聲する。

はあゝ、どなたかお通りと見える、江戸と違つて道中ぢやあ、露拂ひの下に〳〵に葵の御紋が附いて居りやあ、長持が來ても下に居にやアならねえ。

ト花道へ行く、花道より侍六人、半纏紐附股引切草鞋大小にて出來り、花道よき所にて行き合ひ、三左衛門を眞中へ挾み、

侍一　やあ、其方は何れの者か。

侍二　今日御領主のお鷹野の、

侍三　御成り先きをも憚らず、

侍四　見れば帯刀なすと言ひ、

侍五　怪しき姿の一人旅、

侍六　通すことは相成らぬぞ。

三左　えゝ。（トびつくりなす、）

侍一　何れもそやつを引立てめされ。

侍五
侍六　心得ました。（ト三左衛門を引立て舞臺へ來る、三左衛門これを振拂ひ、）

三左　あもし、何も怪しい者ではござりませぬ、私事は江戸表より道を急いで白石まで、火急の使ひに參ります、旅の者にござります。（ト六人思入あつて、）

侍一　やあ、默り居らう、僞り者めが、汝は使ひに參ると申すが、方角地理を存ぜぬか。

侍二　道を急いで江戸表より白石まで參る者が、

侍三　何ゆゑあつて廻り遠き、水戸街道を通行なすぞ。

侍四　見れば眼中鋭くして、常者ならぬ面構、

侍五　察する所賊をなし、

侍六　逃ぐる奴と覺えたり、

侍一　それ、懷中を改め召され、

侍五
侍六　心得ました。（ト侍五　侍六、三左衛門の懷中へ手を入れるを留めて、）

三左　先づ〳〵お待ち下されませ、成程あなたのおつしやる通り、白石まで參りますに水戸街道へ掛り

しは、仔細あつて據なく廻り道をいたす者、なか〳〵以て賊などをいたせし覺え嘗てなし、胡散な者ではござりませぬ。

侍一　胡散でなくば所持なせし、汝が包みを解きほどき、中改めて、

六人　通してくれん。

三左　仰せではござりますが、他見を憚る品あれば、是ればかりは見せられませぬ。

侍二　他見を憚る品ありとは、

侍三　いよ〳〵以て怪しき奴、

侍四　御前へ引立て、

六人　詮議なさん。

三左　御疑念受けし上からは、御尤もにはござりますが、急ぎの旅にござりますれば、其の儀は御容赦下さりませ。

侍一　然らば包みの其中を、

侍二　われ〳〵共に改めさすか。

三左　さあ、それは、

侍三　但しは御前で。
侍四　詮議を受けるか。
三左　さあ、
侍五侍六　改めさすか。
三左　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。
侍一　引立て召され。
五人　心得ました。（ト三左衞門を引立てに掛る、此時花道の揚幕にて）
彌太　何れも。暫くお待ち下され。
　　トばた〳〵になり、花道より朝比奈彌太郎、背割羽織半纏紐附股引大小、切草鞋騎射笠を持ち、つかつかと花道へ出來り、よき所へ留る。
侍一　貴殿は朝比奈、
六人　彌太郎殿。
彌太　只今我が君此處へ、お入りあれば何れも方、立ち騷がずとお控へなされい。（ト誂への合方になり、

彌太郎靜々と平舞臺へ來り、三左衞門へ目を附け、會釋をなして上手へ通り、）して是れなる旅人をば、何ゆゑあつて御吟味めさる。

侍一　されば怪しき此者は、江戸表より白石へ、急ぎの用で參ると申すが、

侍二　奥街道を行かずして、水戸街道を通行なすは、何とも以て心得ませねば、

侍三　包みの內を改めて、

侍四　通しくれんと申せども、

侍五　其儀は容赦なしくれと、

侍六　包みを改めさせぬゆゑ、

侍一　胡散と存じて。

六人　詮議いたす。

彌太　何さま是れは何れもが、御詮議なさるは尤も至極（ト三左衞門に向ひ、）こりや旅人、只今同藩に承はれば、其方急ぎの用事にて江戸表より白石へは、奥街道の順路あるに、何ゆゑあつて道遠き此街道を通行なすぞ。（ト三左衞門思入あつて、）

三左　今は何をか包みませう、私事は伊達家の家來、主家の大事に道を替へ奥街道を行かずして、斯く

て下さりますやう、偏にお願ひ申しまする。道遠き御領地を通行いたすも忠義の爲め、何卒あなたのお目鏡にて、私事を速にお通しなされ

彌太　むゝ、承はれば伊達家には何か内亂出來いたし、一家中も混雜なすよし、本街道を通行せぬは、正しく汝は惡人の手先きを働く廻し者ぢやな。

三太　全く以て、左樣なものでは。

彌太　左樣でなくば有體に、仔細を明して所持なせし、其包みを改めさせるか。

三左　さあ、其儀は。

彌太　但しは中を見せられぬか。

三左　さあ、

彌太　見せぬと申すは不正なるぞ。（トきつと言ふ。）

三左　むう。（ト三左衛門ぢつと思入。）

彌太　それ、包みの內を改め召され。

六人　はッ。

ト合方早くなり、侍の三、四、五、六包みを取らうとする、三左衛門是れを抱へ、渡すまいといふち

よつと立廻りあつて、侍の五、六を投げ退ける。

彌太　やあ、手向ひいたす憎き奴、いで某が搦めてくれん。

ト彌太郎羽織を脱ぎかけ、きつと見得、三左衞門も思入あつて、

三左　無益の腕立て好まねど、水戸家に於て隱れなき、英名轟く朝比奈樣、どれほど力がござりますか搦め取るとおつしやれば、身に曇りなき私ゆゑお手向ひをいたしまする。

彌太　我も聊か力あれど、汝も只今同藩と挑みし體は餘程の力、手向ひいたすとあるからは、我が勝るか汝が勝るか、其の甲乙を試みん。

三左　定めてあなたは柔術の手練を以て私を。

彌太　いふまでもない覺えし業、帶刀なせば其方も。

三左　その柔術は心得ませぬが、若い時より角力を好めば、

彌太　然らば武士の柔術と、

三左　力士の四十八手を盡し、

彌太　此の芝原を道場か、

三左　土俵と見なして兩人が、

彌太　力くらべの、
兩人　勝負いたさん。
　　ト白囃子になり、彌太郎身拵へする、三左衞門も笠の內へ荷物を入れ、双方よろしくあつて、
三左　御用意よくば、
彌太　搦め捕るぞよ。
三左　いざ、
彌太　いざ、
兩人　いざ〳〵〳〵。
　　ト三味線入り白囃子になり、兩人角力と柔術の好みの面白き立廻りよろしくあつて、トゞ彌太郎三左衞門を組伏せる、侍の一捕繩を出し繩を掛ける。
侍一　今に始めぬ朝比奈氏、
六人　お手柄〳〵。（ト三左衞門無念の思入、彌太郎思入あつて、）
彌太　いや、さしてもなき事お褒めに預り、近頃恐縮仕る。然し小兵の形に似合はず、なか〳〵勝れし彼れが力量。

三左　力づくでは朝比奈樣に、負けぬ心で居りましたが、手練勝れし柔術に、不覺を取つて此の細目、
　まことの業には叶はねえ。

侍二　して、召捕りし此者は、

彌太　御前に於て詮議を遂げん。

侍三　然らば、御前へ。

皆々　引立て行かん。（ト立ちかゝる、此時花道の揚幕にて、）

黄門　其の曲者引くに及ばぬ、それへ參つて詮議を遂げん。

彌太　あの、お聲は、

六人　我が君樣。

　ト皆々下に居ろ、小鼓のあしらひにて、花道より水戸黄門公、背割羽織半纏紐附股引大小の太守、鷹野のこしらへ、侍の七半纏紐附股引大小にて、黄門公の騎射笠を持ち、侍の八同じ拵へにて紫紐の鷹をすゑ、此外從者大勢、殘らず半纏股引大小にて附添ひ出來り、花道へ留り、

黄門　只今あれより見聞せしが、手練勝れし朝比奈彌太郎、よくぞ捕縛いたせしぞ。

　ト彌太郎思入あつて、

彌太　はヽツ、御懇の御意を蒙りまして、大慶至極にござりまする。（ト辭儀をなす、）

侍一　君には是れより、大雲寺へ、

侍二　直にお越し、

六人　遊ばしまするか。

黄門　いや、それへ參つて其者の身許を詮議いたすであらう。

侍七　すりや我が君には、

皆々　直々に、

黄門　おゝ、皆參れ。

皆々　はツ。

ト右の鳴物にて舞臺へ來る、一人上手よき所へ誂への革床几を直す、黄門公是れへ掛け、眞中に彌太郎、下手に三左衞門、跡は殘らず後に居並び、合方になり、

黄門　こりや彌太郎、今其方が捕縛せし、それなる者は何れの者ぢや。

彌太　未だ深くも尋ねませぬが、彼れは伊達家の家臣のよしにて、江戸表より白石へ火急の使ひに參る者と、申しますれど順路なる奥街道を行かずして此街道を通行いたすは、心得難く存じますゆゑ、

荷物を改め仔細なくば、許しやらんと存ぜしに、荷物を見せざる其の上に、無禮の手向ひいたせしゆゑ、止むを得ずして某捕縛いたしてござりまする。（ト黄門公思入あつて、）

黄門 慶元兩度の戰爭以來、今德川の德に化し、六十餘州平穩にて四民鼓腹の治世なれども、諸侯の内には奸臣あつて及ばぬ謀逆の企てなし、國家を騷がす事あれば、治世なりとて油斷はならず、諸侯の機密を探索なすは、副將軍の我が職務、小事は必ず大事の元、よくぞ心を用ゐしぞ。

皆々 はツ。

黄門 それなる者が所持なせし、荷物の包みを是れへ持て。

侍二 はツ。（ト荷物を取上げるを、）

三左 あゝもし、其の荷物を明けられましては。

侍七 荷物の中を憚るは、

侍八 猶々以て怪しき奴。

三左 ではござりますが、其の中ばかりは。

侍一 中改めるは、

皆々 御前なるぞ。

三左　あゝ、是非もない事だなあ。(ト三左衛門是非なき思入、)

黄門　早く包みを開き見よ。

侍二　はッ。(ト荷物を明け、中より紫の袱紗に包みし一巻を出し、)包の内に斯樣な品が。

三左　南無三、それを。(ト立ち掛るを、)

皆々　下に居らう。(ト引き据ゑる、)

黄門　其の品是れへ。

侍二　はッ。

ト誂への合方になり、侍の二、一巻を出す、黄門取上げ、開き見てぎつくり思入あつて、

黄門　こりや是れ、一味徒黨の連判。

皆々　や。

彌太　連判狀を所持なすからは、さてこそおのれは、

皆々　正しく曲者。(ト皆々立ちかゝろ、三左衛門是れまでといふ思入にて、)

三左　斯くなりますれば何をか包まん、仔細具に申し上ぐれば、先づ／＼お靜まり下さりませう。(ト合方きつぱりとなり、)私事は伊達家の先主綱宗公のお抱へにて、厚き寵を蒙りし、鳴神峰右衛門と

申す角力取りにござります。

彌太　かねて其名は聞き及びし、角力取の鳴神なりしか。

三左　廓通ひの箇條にて、先主御隱居なされし後、間もなくお暇たまはりて一度浪人の身となりしを、則ち伊達の御分家たる兵部樣の情によつて侍分に取立てられ、今神並三左衛門と名を改めて御扶持を貰ひ、無役で勤める恩義に搦まれ、一味徒黨の數に加はり、惡事の手先きを働く內。

ト此內 黃門公思入 あつて、是れへ冠せ、

黃門　こりや〱、待て〱。

三左　え、待てと仰せられまするは。

彌太　君の御意ぢや、暫く待ちやれ。

三左　はツ。（ト控へる、黃門公皆々を見返り、）

黃門　彌太郎一人是れへ殘り、跡は皆々遠慮いたせ。

皆々　はツ。

侍一　仰にそむくは恐れ入れど、

侍二　斯かる曲者にござりますれば、

黄門　えゝ、苦しうない。立て〳〵。

皆々　はあゝ。（ト皆々下手へはひろ、黄門公跡を見送り、思入あつて、）

黄門　今其方が申し掛けしは、容易ならざる伊達家の内亂。して又兵部に一味なし、惡事の手先きを働きしとか。

三左　仰せの如く此頃まで、一味に與して居りましたれば、種々惡計に遣はれましたが先非を悔いて改心なせしは、以前荒浪梶之助とてやはり伊達家の抱へ角力、當時荒木和助と申し兵部どのゝ家來分にて私同樣一味に與なし、原田どのに頼まれて既に御當主龜千代樣を勿體なくも失はんと、御殿へ忍び入つたる所、松前殿に生捕られ、牢舍いたして日毎の拷問、白狀なさんも計られずと毒酒を以て殺される、其時和助が遺言に、長く一味をして居ると手前も命を取られるから、おれを手本に改心しろと言はれて惡心飜し、何か一つの功を立て、此身の詫びにいたさんと、惡人共の名を記せし連判狀を盜み取り、是れを本國白石の片倉殿へ持參なし、謀叛の次第を訴へんと、思ひ立ちは立ちましたが、何を申すもたゞ一人本街道を參る時は、跡より追手の掛るは必定、捕へられなば折角の我が心願も水の泡、それゆゑ遠き御領地を廻つて國へ參りまするも、晝夜をかけて歩きしゆゑ、幸ひ是れなる辻堂で足を休めて居るうちに、體の疲れに一寐入り、道のおくれ

と心も急ぎ、立ち出る折柄御同勢のお先きの衆に見咎められ、斯くの仕合せにござりまする。

ト三左衛門よろしく思入あつていふ、黄門公もこなしあつて、

黄門　驚き入つたる伊達家の內亂、かねて風說に承はりしが、斯程の事とは知らざりし、其方事も一旦は惡事へ荷擔なせしかど、和助とやらが異見にて與せし惡心飜し、一つの功を立てんと思ひ此連判狀を白石へ持參いたして訴へんとは、天晴なる心底なるぞ、かく改心せし者あるは、伊達家繁昌の基るなり、忠義に愛でゝ其方は、內分に見脫しくれるぞ。

三左　すりやお見脫し下さりますとか、えゝ有難うござりまする。

黄門　彌太郎、繩目を許せ。

彌太　はツ。（ト彌太郎三左衛門の繩を解く、黄門公思入あつて、）

黄門　然し惡事に與せし其方、いよ〳〵改心いたせしといふ、何ぞ證據を予に見せよ。

三左　まこと改心いたせし私、別に證據と申しましては。

彌太　君の仰せ何なりと、まこと改心いたせしといふ、證據を是れにて御覽に入れよ。

ト三左衛門當惑の思入あつて、

三左　是れと申して改心の證據なければ朝比奈樣、命をあなたへ差上げますから、證據になされて下さ

りませ。

彌太　すりや、一命を捨てると申すか。

三左　則ちそれが慥な證據、爰で命を捨てまするも一つの忠義が立てたいばかり、此の連判狀を白石の片倉殿へあなたから、何卒お屆け下されませ、武士の情にお聞き濟み下さりますれば身の本望、お願ひ申し上げまする。

黃門　改心なせし其の證據に一命捨つるは天晴なり、斬首いたすは不便ゆゑ、とても死すなら切腹いたせ。

三左　すりや、私に切腹を。

黃門　情を知らぬものなりと、定めて我を恨むであらうが、汝が忠義の臍を見せよ。

彌太　其の代りには連判狀は、きつと屆け遣はすぞ。

三左　それさへお屆け下されば、此世に望みのなき私、只今命を捨てまするが、角力上りに切腹の仕樣も未だ存じませぬが、死なれぬこともござりますまい、とてものことに朝比奈樣、介錯なされて下さりませ。

彌太　言ふにや及ぶ、介錯いたさん。

三左　左様ならば、少しも早く。（ト合方きつばりとなり、三左衞門肌を脱ぎ脇差を手拭にて卷き、）返すぐも一卷を。

彌太　承知いたした。

三左　どれ潔く。

ト三左衞門腹へ突立てようとする、此内黄門、彌太郎ぢつと三左衞門へ目を附け居る、三左衞門むやみに腹へ突立てようとする。

黄門　それ、留めい。

彌太　はッ。（ト三左衞門の手を留める、）

三左　何ゆゑお止めなされまする。

黄門　改心なせし證據が見えた。

三左　え。

黄門　最早切腹には及ばぬぞ。

三左　すりや、お疑ひは晴れましたか。

黄門　忠義面に顯るれば、予が領分より白石へ片時も早く立ち越して、連判狀を證據となし、惡事を訴

へ盡すがよい。（ト一卷を返す、三左衞門取つて、）
三左　はツ、有難き其の御仁惠、恐れ多うございまする。
黃門　左はいへ是れより白石まで行程遙の道なるに、證據の品を所持なして、たゞ一人にては心許なし
　路次の禍ひなきやうに、彌太郎彼れを送り遣はせ。
彌太　はツ、畏つてございまする。
三左　すりや此上に白石まで、お送りなされて下さるとか、冥加に餘る仰せながら。
彌太　改心なせし其方を、思召しての御意なれば、決して遠慮に及ばぬぞ。
三左　重ね〴〵も厚きお惠み、嬉し淚がこぼれまする。（ト三左衞門淚を拭ふ、黃門公思入あつて、）
黃門　日も西山に傾けば、最早歸館いたすであらう。（ト是れにて彌太郎下手へ向ひ、）
彌太　君の御歸館、（トばた〳〵になり、下手より以前の人數殘らず出で、）
侍一　最早、御歸館に、
皆々　ございまするか。
　ト平伏なす、黃門公床几を放れる、三左衞門は此内一卷を仕舞ひ、荷ごしらへをする、黃門公思入あつて、

黄門　伊達家は天下の大諸侯、予に於ても心配いたす、若し興廢に及びなば、必ず惡しくは計らはぬぞ。

三左　はッ。（ト辭儀をなす、）

黄門　申すまでもあらざるが、其の一巻を光圀は、内見をいたさぬぞ。

三左　はッ。

黄門　たゞ胸中に、（ト黄門公氣味合の思入あつて胸を叩くを木の頭、）納め置くぞよ。

ト承知せしといふ思入、三左衛門は有難きこなし、此の見得よろしく、誂への合方に、小鼓をあしらひ、

ひやうし　幕

四幕目

袖ヶ崎下屋敷の場
高輪大木戸の場

【役名――伊達綱宗公、茶道加藤珍賀後に秋穗平八、伊達安藝、濱田玄蕃、渡邊金兵衛、門番久内、中間宅助、濱川屋穴五郎、贋中間四人。愛妾お高等。】

（下屋敷内庭口の場）――本舞臺正面屋根附の門、扉しめ切り出這入りあり、左右筋塀、上の方に九尺の門番所膝隱しの板などよろしく、下の方に楓の立木、日覆より同じく釣枝、總て袖ヶ崎下屋敷の内庭口の體、爰に久内門番の親仁にて蒔繪の重箱を持ち立ち掛り居る、是れを二幕目の金兵衛着流し袴裝

にて支へ居ろ、此の見得合方しらべにて幕明く。

久内　もし〳〵金兵衞さま、折角お上から下された此お肴、頂戴を仕らうといふのを、何であなたはお留めなさる。

金兵　えゝ、それを喰せてたまるものか、惡い事は申さぬから、其儘身共に渡してくりやれ。

久内　いえ〳〵滅多に渡されませぬ、今方お茶道の珍賀どのが、此の重箱を持つてござつて、御前樣のおつしやるには、親仁も定めて退屈であらう、此の肴を喰せてやれと有難い下されもの、もし間違ひではあるまいかと、今御愛妾のお高さまにお聞き申しに行つて來たが、全く下すつたに違ひないと有難い思召を、何で空しくお前さんにお渡し申してなりませうぞ、是れは此儘辨當の菜にせねばなりませぬ。

金兵　えゝ手前は何にも存ぜぬが、それを喰つたらつひころり、いやさ、それを喰つては罰が當るわえ。

久内　是れはしたり、何をおつしやりまする、そりや殿樣のお下りゆゑ粗末にでもいたしましたら、罰が當るか知れませぬが、推戴いて喰べますのに何で罰が當りませう。

金兵　いや〳〵罰が當るといふは、其お肴は、おゝさうぢや、鹽竈樣へ供へたお下り、手前如きに喰はれては神樣へ申譯がない、それぢやによつて喰はされぬ。

久内　え丶そんな事をおつしやつて、お前さまが上らうと思つて。
金兵　お丶、如何にも手前が貰つて喰ひたい、其代りに金子を遣はす、何と譲つてくれまいか。
久内　惜しいものだが仕方がない、金子と引替へなら、お譲り申しませう。
金兵　然らばそちに一朱遣はす。
久内　どうして〳〵此料理が、二朱や一朱で喰はれませう、一分でなければ賣られませぬ。
金兵　え丶足許を見て値を上げるな。
久内　いえ、足許ではござりませぬ、それで元値でござります。
金兵　いや、何で損をするか知れぬものぢや、（ト懐中より一分出し、）仕方がない、言ひ値で買ふぞ。
ト久内金を請取り、重箱を渡し、
久内　然し重箱はお上のだから、只今お茶道の珍賀どのが、是れへ取りに寄ります筈、どうぞお渡し下さいませ。
金兵　それは承知いたしたが、手前はどこぞへ參るのか。
久内　此の一分で久し振り、穴子で一杯やつて參ります。
金兵　門番のくせに贅澤な奴だ。

久内　いえもう年を取りましては、飲み喰ひより外樂しみはございませぬ。
金兵　そんなら早く行つて參れ。
久内　どれ、一杯遣つて來ようか。
　ト久内花道へはひる、爰へ上手より濱田玄蕃、くりさげ鬘、袴羽織大小にて出來り、
玄蕃　こりや金兵衞、危ない所であつたなあ。
金兵　あなたは玄蕃樣、まんまと首尾よく遣り損ひ、あの親仁めに是れを喰はれ、血でも吐いて死ぬ時は、忽ち惡事が露顯ゆゑ、據なく冷たい金子を一分散財に及びました。
玄蕃　片意地者の伊達安藝めが、昨日當地へ着くと聞き、綱宗公に逢はせては何かと事が面倒ゆゑ、肴の中へ毒を仕込み、手短かにと思ひの外、油斷をせぬゆゑ迂濶に喰はず、久内めに喰はせるとは是れが所謂鶍の嘴、喰ひ違うたるこつちの手筈。
金兵　どうがないたして御隱居を、押片附ける目論見にて、原田氏より內意を受け、其許樣と斯くいふ金兵衞、此の下屋敷の取締役、かねぐ庭の井の內へ毒を仕込んで置いたれど、花活へ入れ挿花が忽ち枯れて勘附かれ、承はればお高めが竊に外の水を取寄せ、手桶へぴんと錠前をおろし、手づから膳部をこしらへて、毒味をいたし差上げるとやら、あた舌たるい事でござる。

玄蕃　彼れめも廓で全盛の、高尾と呼ばれし其折は、綱宗公をつれなく持成し、よもやにつらされ深入りをいたさせ居つた手管などは、末頼もしい奴でありしが、身請けの後は打つて替り押込め隱居の綱宗に忠義立てする面憎さ、是れが所謂可愛さが、餘るとやらであらうわえ。

金兵　その外忠義の奴儕は皆それ〳〵に罪を負はせ廢してしまへど彼れ一人、玄蕃さまには御不便加へ、其儘にいたし置けば、よい事にして忠義立て、工夫を廻らしお高めもしくじらせずばなりますまい。

玄蕃　まだ其外に茶道の珍賀、若年なれども惡賢くなか〳〵油斷のならぬ奴、只今あれより承はれば久内親仁の詞では、使ひに出たとあるこそ幸ひ、奧へ參つて綱宗の樣子を某見て參れば、御身は是れにて張番おしやれ。

金兵　委細承知仕つりまする。

玄蕃　どりや、見廻りと出掛けようか。（下正面の門の內へはひる、）

金兵　どれ、此間にどこぞへ人知れず、此の肴を捨てゝ參らう。

卜作の重箱を持ち上手へはひる、やはり合方しらべにて、花道より伊達安藝好みの鬘、上下大小草履にて出來り、花道にて、

安藝　久方振りにて江戸表へ、出府いたして見る所、何時に替らぬ當地の繁榮、高輪の大木戸などは見世物やら放下師やらで、貴賤群集の其の賑ひ、實にも天下の膝許にて金の生る木の植所とは、此地の事であらうわえ、（ト舞臺へ來り、あちこちを見廻し思入あつて、）それに附けても先殿様、お心柄とは申しながら五十四郡の御主人が、此の荒れ果てたるお下屋敷の一間の内に御蟄居遊ばし、嘸御不自由にゐらせられん、老臣共の勸めにより江戸表へ出府いたし、着のお屆け二つには、御機嫌も伺ひ度し、また此度の公訴の手配逐一に申し上げ、龜千代君の御成長を申し上げなばお悦び、御安心をばさせましたい。あゝ、此御門が庭口と見ゆる、門番とても居らぬ樣子。どれ、案内を乞うて見ようか。

　　トうろ〳〵して居る、上手より以前の金兵衞明重箱を持ち出來り、安藝を見て、

金兵　これは〳〵伊達安藝樣、ようこそ御入來にござります る。

　　ト辭儀をなす、安藝金兵衞を見て思入あつて、

安藝　誰かと思へば渡邊金兵衞、して御隱居の居らせられる、御座所は何れぢや、敎へてくりやれ。

金兵　へい、其の御座所は、（ト思入あつて、）此のお内でござりまする。

安藝　然らば、奥へ取次ぎくりやれ。

金兵　さあ、其儀は。

安藝　伊達安藝當地へ出府せしゆゑ、早速御機嫌伺ひの爲め、罷り出でしと申し上げてくりやれ。

金兵　はゝはッ。（トもぢ〳〵して居るゆゑ、）

安藝　何を猶豫いたして居る。

金兵　はッ。

安藝　えゝ、早く取次ぎいたさぬか。（トきつと言ふ、此時門の內にて、）

玄蕃　あいや、其のお目通りは叶ひますまい。

安藝　何と。（ト合方きつぱりとなり、門の內より、以前の玄蕃出で、）

玄蕃　これは〳〵安藝殿には、一別以來御意得ませぬが、今般遙々御出府とやら、御苦勞千萬に存ずる。

安藝　誰れ人なるかと思ひしに、原田甲斐のお身內たる御身は濱田玄蕃殿、御勇健にて祝着に存ずる。

玄蕃　先づ其許にも御健勝にて、手前に於ても大慶至極。

安藝　して、何ゆゑに御隱居樣へ、お目通りが叶ひませぬな。

玄蕃　されば其儀も其許には、昨日當地へお着の由ゆゑ、深き仔細は御存じあるまい、其のお目通りの叶はぬと申すは、綱宗公には御隱居以來、御亂心にならせられ、やゝともすれば御近臣をお手討

に遊ばしたり、晝夜淫酒に耽りたまへば、只今なども既の事加藤珍賀と申す茶道が不調法をいたせしてお手討に遊ばす所へ、某折よく參り合せ、お諫め申して退座いたせば、惡い矢先きでござるゆゑ、お目通りの儀をお止め申した。こりや〳〵金兵衞、安藝殿が入來ありしを奧へ參つて申し上げ、御返事を聞いて參れ。

金兵　あいや、それでは。

玄蕃　はて、御亂心に居らせられても、申し上げねば家來の越度、そこをよしなに、（ト追返せといふ仕方をして呑込ませ、）取次いたせ。

金兵　委細承知仕つる。（ト思入あつて門の內へはひる、安藝は愁ひのこなしにて、）

安藝　はて歎かはしき御行跡、先年手前お國許にてお側に伺候いたせし折は、御聰明なる君でありしがそれと申すも惡人が、

玄蕃　や、

安藝　いや。あくまで募る御亂行、はてさて困つたものでござる。

玄蕃　それゆゑ餘人が此處に、君を守護なし居る時は、もし御他行でも遊ばしなば、將軍家へ相濟まずと、斯くいふ玄蕃晝夜とも、勤番いたし罷りある。

安藝　それは何かと御心配、近頃以て御苦勞千萬。（ト門の内より金兵衞出で、）

金兵　はッ、安藝殿が御入來の由を御隱居樣へ申し上げし所、何ゆゑあつて參りしか、予が指圖をも待たずして出府なしたる我儘親仁、目通りなどは相叶はぬ、早々國へ立歸れ、押して推參いたしなば、手討にいたずと仰せあつて、以ての外なる御立腹、是れと申すも御癇癖の、御病氣ゆゑかと存じまする。

玄蕃　伊達安藝殿、斯樣でござる。

安藝　すりや此の安藝が出府の儀を、あの、殿樣には御立腹とな。

金兵　如何にも、左樣にござりまする。

玄蕃　まことに以て是れゆゑに、玄蕃も當惑仕つる。（ト是れにて安藝思入あつて、）

安藝　はて、お情なき其お詞、かゝる暗愚の君にてはあらせられぬ筈なりしが、如何なる天魔が魅入りしか御亂行になりたまひ、我が聟白川主殿を始め、亙三平なんどゝいふ諫めを入れし忠臣は、御不興蒙り皆なお手討ち、君一人のお身持ゆゑ國許四十八館の老臣共は申すに及ばず、御幼君たる龜千代樣まで思ひ寄らざる御艱難、其の惑亂も御存じなくお家のお爲めに遙々と出府いたせし此安藝を、我儘親仁と仰せあるは、如何に御病氣なればとて、餘りといへばお情ない、大事を抱へし

身でなくば、此儘奥へ推參なし、命に代へても御異見を、申し上げねばならざるに、（ト後へ向ひ
よろしく思入あつて氣を替へ、）いや、是れは女々しき我が述懐、お聞きに入れて面目なし。
ト涙を拭ひ愁ひのこなしよろしく、此内玄蕃金兵衛顔見合せにつたりと思入あつて、氣を替へ、

玄蕃　いや、御尤もなる儀でござる、それも只今申す如く皆御病氣の業でござれば、御癇癖さへ鎭りなば某御前へ推參いたし、お目通りの儀は身に代ても、よしなに執成し仕らん、先づ折角の御入來ゆゑ、手前が小屋へお越しあつて御休息いたされい。

安藝　いや忝けなうはござれども、昨日到着いたせし儘にて、私用も多くござるゆゑ、又出直して伺ひ申さん。

玄蕃　左樣ござらば伊達安藝殿、何れ御沙汰を仕つれば、御歸宅あつてお待ち下され。

安藝　然らば、是れにて玄蕃殿。

玄蕃　途中の儀ゆゑ、失禮御免。

安藝　返す〴〵も、（ト思入あつて氣を替へ、）お別れ申す。
ト唄になり、安藝殘念なるこなしよろしくあつて、花道へはひる、兩人是れを見送り、思入あつて、

玄蕃　布婁那の辯にて伊達安藝めを、欺き果せて返したれば、是れで當分參るまいわえ。

金兵　只今拙者が卽智の計らひ、まことしやかに御隱居の聲色を使ひましたは、芝居咄しの桂文治にさし劣らぬ役者氣取り、こりや御賞與にあづかりたい。

玄蕃　いや、只今の聲色は、荒次郎によく似て居つた。

金兵　荒次郎とはお目違ひ、手前はどこまでも、坂彦氣取りでござる。

玄蕃　その坂彦の狂言めかし、立役仕込みで宅へ連れ行き、鵙となりし彼の肴を喰はせてやらんと思ひしに、親仁もなか〳〵油斷せず、尻尾を卷いて歸り居つたは、まだ〳〵運の盡きぬ老耄。

金兵　其お肴は人知れず、只今庭の土中を穿ち、深く埋めてしまひました。

玄蕃　それで露顯の愁ひもなく、一つの安堵と申すもの。

金兵　今久内の話しには、此の重箱を茶道の珍賀が、取りに參ると申す事。

玄蕃　どうがないたして綱宗に、自滅をさせる一工風、

金兵　よい分別はござりませぬかな。

玄蕃　こりや又原田によい智慧を、借りて置かねばなるまいわえ。

ト思案の思入、ばた〳〵になり、花道より珍賀坊主鬘茶道のこしらへにて出來り、花道にて跡を見返り思入あつて、直に舞臺へ來り、金兵衛を見て、

珍賀　金兵衛さま、是れにござりましたか、久内はどこへ參りましたな。

金兵　その方は茶道の珍賀、久内に用とは、此の重箱か。

珍賀　へい、左樣でござります、明いて居りますなら持つて參りませう。

金兵　持つて參るはよろしいが、折角是れなる玄蕃樣が御隱居樣へ差上げたいと御趣向なされたあのお料理、直と其儘門番などにお下げになるとはお情ない、餘り手前も殘念ゆゑ、久内から一分で買ひ受け是れにて殘らず賞翫いたした、そちも一足早く參れば、裾分けをして遣つたものを、惜しい事をいたし居つた。（ト是れを聞き珍賀思入あつて）

珍賀　左樣ならお前さまが、あれをお上りなされましたか。

金兵　おゝ、喰うたとも〳〵、斯くの如く賞翫いたし、骨まで甜ぶつて惜しいものだが、跡は小犬に遣はした。

ト重箱を見せる、珍賀思入あつて、

珍賀　はてな、それでは違つたか知らん。（ト考へて居る、玄蕃是れを聞き咎め）

玄蕃　こりや〳〵珍賀、何が違つた。

珍賀　えゝ、（ト心附いて氣を替へ）いえなに、違ひはいたしませぬ。

玄蕃　違はぬものを何ゆゑに、今違つたと申せしぞ。

珍賀　左樣なら申しませう、譯は斯樣でござります。(卜合方になり、)實は先程其のお重を金兵衛さまが御持參なされて、玄蕃樣よりのお遣ひ物、御隱居樣の御徒然を取繕ひしお料理と、置いてお歸りなされた跡で、是れは此儘門番の久内に遣はせと御隱居樣がおつしやるゆゑ、久内一人で此のやうな結構なるお肴を喰べきれまいと存じますから、此の珍賀めも其内を少々頂戴いたしたいと、お裾分を願ひましたら、いや〳〵是れは其方などが、迂濶に喰はれる品でない、決して摘んで一ツでも喰つてはならぬとおつしやり附け、さては毒でもはひつて居るかと、不思議に思つて居りましたが、金兵衛樣が其のやうに綺麗にお上りなされましたなら、何も仔細のないお料理、惜しい事をいたしました。

卜此内兩人思入あつて、氣を替へ、

金兵　何の仔細があるものぞ、さてはそれゆゑむざ〳〵と、あの結構なお料理を、門番などへお下げになりしか。

玄蕃　はてお情ない思召し、斯くまで忠義な此の玄蕃を毒害いたす惡人かと、お疑ひはお恨めしい、返す〴〵も殘念至極。

珍賀　どれ、左様ならお重箱は、こちらへお貰ひ申しませう。

金兵　金兵衛めが頂戴いたしたと、御隱居さまへ申し上げてくりやれ。

珍賀　畏りましてござりまする。（ト件の重箱を持ち、門の内へ行かうとするゆゑ、玄蕃思入あつて、）

玄蕃　こりや〳〵珍賀、暫く待ちやれ。

珍賀　何ぞ御用でござりまするか。

玄蕃　さて其方は不便なものぢや。

珍賀　そりや何ゆゑでござりまする。

玄蕃　其仔細言うて聞かせん、用もあらうが下に居て、心得の爲め聞いて置きやれ、（ト合方きつばりとなり、）今其方なり手前なり、老若高下の差別はあれど、やはり伊達家の祿を穢し、君のお側に仕へまつれば忠を忘れず義によつては一命をも捨てる覺悟、それを君には兎に角に、御隱居ありし其後は世俗にいへる僻みとやらにて、御疑惑を生ぜられ、此度本國涌谷より出府いたせし伊達安藝と御相談を遊ばされ、殘らずお側に仕へる者は祿を取り上げお暇になり、俄か浪人にいたす御所存、そりやはや手前や金兵衛は、親族もあり聊かたりとも蓄への金子もあれば、路頭に迷ふ程でもないが、小祿取りの其方などは、三十俵二人扶持の祿を俄に取り上げられ、一人の老母を抱へ

忽ち路頭に迷はにやならぬ、それが不便と存ずるゆゑ心得の爲め教へ遣はす、必ず手前が申した
など、口外は相成らぬ、只胸中に含んで居やれ。(ト是れを聞き、珍賀扨はといふ思入あつて、)

珍賀 はゝあ、それで樣子が分りました、只今御門を入りまするを遂に見馴れぬ御老體が、お庭の方からやつて參り、何やら怖い顏をして私を見返りまして御門外へ出て參つたが、あれが今度お國からござつた、伊達安藝樣でござりますか。

金兵 おゝ、其老體が伊達安藝殿だ、御隱居樣へお目通りをさせる時には其方や、我々を暇の相談、碌な事は言ひ出さぬゆゑ、御隱居樣は御病氣にて、今日はお逢ひがないと虛言を構へて返して遣つたが、又候參るに相違ない。

珍賀 もしお暇となる時は、八十一になりまする老母が一人ござりますゆゑ、それを抱へて明日から路頭に迷はにやなりませぬ。(ト愁ひの思入、)

玄蕃 おゝ尤もぢや／＼、それが不便と存ずるから、どうぞいたしてあの親仁と、御隱居樣の中を隔て逢はせぬやうにいたしたいが、そちや此の使ひをする氣はないか。

珍賀 して、お使ひとおつしやりまするは。

玄蕃 豫て覺えの安藝が手跡、只今書面を認めれば、御門内にて親仁に出逢ひ、君へお屆け申してくれ

と頼まれたる體にいたし、使ひを首尾よく勤めてくりやれ。

珍賀　左樣いたせば、私親子の、お暇の儀が助かりますか。

金兵　おゝ助かるとも〳〵、君と安藝との其中を引分けてさへしまふ時は、そち達親子は安泰ぢや。

珍賀　さういふ事なら其のお使ひ、きつと仕果せ見せませうが、僞筆などゝ知られぬやうに。

玄蕃　其儀は年來某が、習ひ覺えし安藝の手跡、

金兵　殊に江戸國隔たりて、稀な便りに出す一封。（ト珍賀思入あつて）

珍賀　老筆ゆゑに墨色も、なるたけ薄く、主家來。

玄蕃　三世にあらで僞筆の、

金兵　知れぬ所がこつちの命毛、

珍賀　どうぞ首尾よく、（ト腕組をするを道具替りの知らせ、）遣りたいものぢや。

ト合方時の鐘にて道具廻る。

（お居間の場）＝本舞臺三間の間中足の二重、折廻し本緣附き大和葺の庇、上手一間後へ下げて窓のある廁の前面、よき所に突這の手水鉢、誂への車井戸切穴よろしく、下手一間の附屋體次の間の心に

て前面塗骨の障子を建切り、隔てのつまに襖建切りあり、二重の正面上の方一間床の間、此の次地袋戸棚、違ひ棚、下手腰張の壁、平舞臺上下四ッ目垣、夏草のあしらひ諸所に若楓の立木、日覆より同じく釣枝、總て此道具大名の下屋敷古びたる屋敷の心、二重上手に綱宗公、着流し大名の隱居のこしらへにて褥の上に住ひ、のべの煙管にて煙草を呑み居る、下手にお高妾のこしらへにて、一輪ざしの花活へ芍藥を活けて居る、丸盆の上に花鋏などよろしく、傍に錠の下りたる黑塗の手桶あり、此の模樣床の淨瑠璃にて道具留る。

〽永の日のいとゞ侘しく謹愼の、身には涙の袖ヶ崎、君へ操を立花も補ふ心芍藥の、ながめ樂しく憂きことを、暫しの程は忘れ草、細き煙と見えにける。

ト此内お高花ごしらへよろしく、綱宗この體を見てこなしあつて、

綱宗　はて、見事なる其の芍藥、花の入れ方感服いたす。

お高　不束なる此の挿花、お恥かしう存じまする。（ト是れより合方になり）

綱宗　申すも愚なることながら、佞臣共にすゝめられ、廓の意氣地といふ譯も、知らで通ひし綱宗を、つれなくせしも跡々にて、聞けば此身を大切と思ふがゆゑの敎訓なりしを、心附かざる我が過り既に根引と事極まり館へつれて是れまでの恨みを報ふ所存にて、切つて捨てんと思ひしも、そちが切なる心根を聞けば聞く程道理に叶ひ予も發明をいたせしゆゑ、手許へ置いて召仕ふ其悅びの

間もなく、今は浮世の癈り者、それのみならず家國を覘ふ惡人蔓りて穩ならぬ時節ゆゑ、假令近習の者たりとも片時も心は許されず、そちが自身にしつらへてくれる食事に綱宗が、饑を凌ぎて今日まで、存命なせど日の目さへ晴れて見られぬ此の一間、閉ぢる襖の隔てより結ぼれ解けぬ我が胸中、思へば甲斐なき身の上ぢやなあ。

お高　仰せの通り惡人に、今はお家をせばめられ、忠臣無二の御家來は、お爲めにならぬと遠ざけられ年端も行かぬお茶道の珍賀どのゝみたゞ一人、お側に仕へて朝夕の御介抱をいたすばかり、既に此身も先達て遠ざけられる所をば、玄蕃殿の執成にて斯うして居れど明日知れぬ、たゞ怖ろしき讒者の口の端。

綱宗　舌の劒の佞辯に、深き惠みと思ひきや。

お高　お庭の井戸の水だにも、呑むに呑まれぬ毒藥の、

綱宗　仕込みありしを活花の、凋れしを見て悟れども、

お高　其惡人を御詮議の、事さへならで車井の、

綱宗　めぐる時節もあれかしと、

お高　計る底意の汲みかねて、

綱宗 つなぐ命の綱宗は、
お高 よしなき人をつるべ繩、
綱宗 油斷ならざる、
兩人 事ぢやなあ。
〽漏らさぬ惡事心には、錠を下せし塗手桶、取片附ける折柄に、お次ぎの襖引きあけて、
珍賀は手紙携へ出で、それと見るより手をつかへ。
ト此内お高件の手桶を片附けて、下手の襖をあけ、以前の珍賀手紙を持ち出て、
珍賀 はツ、我が君樣へ申し上げます。
綱宗 誰かと思へばそちは珍賀、して先刻の品々は、久内に遣はしたか。
珍賀 へい、御門番の久内に遣はしましてござります。
お高 見れば何やらお手紙を、御持參なされし其御樣子。
珍賀 是れは只今お使ひから、戻つて參つた御門内にて、伊達安藝樣とおつしやりまする御老體にお目に掛り、我が君樣へ上げてくれと、頼まれましてござりまする。
〽言ひつゝ手紙差出せば、

綱宗　なに、安藝が書面を送りしとな、
〽悅ばしげに綱宗公、直に御手に觸れたまひ、
　トお高取次ぎ、綱宗公手紙を取上げ上書を見て、
「袖ケ崎樣へ安藝より」、むゝ、扨は安藝には江戸表へ、出府なせしと相見ゆる。
お高　さうして其の御老體は、最早お歸りなされましたか。
珍賀　差置きでよいとおつしやりまして、お手紙を渡しなされまするど、直にお歸りなされました。
〽聞くに本意なく豫てより、待ちし賴みの綱宗公。（ト綱宗公思入あつて向うへこなし、）
綱宗　えゝ、聞えぬぞこりや安藝、書面を置いて戻らずとも、門内まで參りなば、なぜ目通りをしてはくれぬぞ、そちに逢うて段々と賴み度き事もあり、又詫び入らねばならぬ儀もあり、國表にて出産せし龜千代が事も承はりたく、出府いたすを心に待ち侘び、樂しみにいたし居つたに、目通りもせで戻るとは、そりやつれないと申すものぢや。
珍賀　どうして、逢はれて堪りませうぞ。
綱宗　や。
珍賀　いえなに、あわてゝお歸りでござりまする。

お高　それも定めて御繁多で、お目通りがなり兼ねますゆゑ、御書面ばかり差置いて、お歸りなされし
事ならん。
〽君は心に打ちうなづき、（ト綱宗思入あつて、）
綱宗　いや〳〵恨むは愚癡の至り、思慮分別ある老人ゆゑ、惡人共の他聞を憚り、態と書面に認めて珍
賀へ屆け寄越せしならん、兎にも角にも此一書は、予が身に取りて六韜三略、悅ばしいぞよ。こ
りや珍賀、よくぞ早速持參いたした。
珍賀　へい、私も悅ばしうございまする。
お高　其のお詞を承はり、數なりませぬ私も、どうやうお嬉しう存じまする。
綱宗　どりや、軍法を熟覽なさん。
〽實にも奧儀を授りし傳書の如く押戴き、開封なして綱宗公、讀む間に替る御顏色、不審氣遣
ふお高より、珍賀は心落ち着ず、
ト此內綱宗悅ばしき思入にて、件の手紙を押戴き、開封して口の內にて讀むことよろしく、段々と愁
ひの思入になる、お高この體を見て、合點の行かぬこなし、珍賀は案じる思入にて、
珍賀　もしや大事を。

お高　えゝ。

珍賀　いえ、大事のお手紙御披見ゆゑ、お次へ御遠慮いたしませう。

〽お次へ立つて引下れど、心ならねば襖越し、猶も様子を窺ひ居る。

ト此内珍賀思入あつて下手の屋體へ出で襖を建切り、前面の障子を明け様子を窺ひ居る、綱宗公手紙を讀み終り、

綱宗　むゝ、（ト歎息のこなし、）

〽始め終りを繰返し、讀んで是非なき御顔、見るにお高は打案じ、（トお高こなしあつて、）

お高　恐れながら伺ひまする、其の御書面の御様子では、我が君様の思召しにどうやら違ひし御文體と御推察申し上げまする。如何なる譯か私へ、仰せ聞けられ下さりませ。

〽尋ねに包むよすがさへ、なまじ打明け言はんより、胸に納めて我が腹と、思ふ心を取直し、

ト此内綱宗公よろしくあつて、

綱宗　そちに語るも面目ないが、此の綱宗の運命も、最早是れまで、廢つたわい。

お高　えゝ、何と御意なされまする。（ト是れより床の合方になり、）

綱宗　國許四十八館の老臣多き其中にて、力と頼むは白石の小十郎と安藝の兩人、其の一人が出府なし當地へ着をいたせしは、我が運命の盡きざる所、面會なさば是れまでの不行跡をも詫び入りて、惡人共の奸計にて、全く斯樣に成り行きしと委細の譯を物語り、家の安危に拘はりなば我が放埓を遠慮なく將軍家へ申し立て、惡人共を罪科に行ひ、假令綱宗將軍家の御沙汰によつて切腹なすとも、先祖累代の勳功により、悴龜千代に相違なく家督相續御許容あるやう願ひ出でよと言ひ聞かせんと、待ちに待ちたる今日の入來も空しく一書を殘し、立歸りしは、無情なしと、恨みしことも思慮深き老人ゆゑに惡人の他聞を憚るゆゑならんと、思ひ返せしは大いな不覺、此の文體では放埓の綱宗ゆゑ見下げ果て詞交すも穢らはしく、殊に蟄居の身といたして、未だ無明の夢覺めず素性賤しき女を引き附け鼻毛の延びし大たはけ、將軍家への申譯、且は家來のわれ〳〵へ言譯いたす所存とあらば、切腹いたせと綱宗へ、申し送りし惡口雜言、（ト是れを聞き、珍賀びつくりする。）忠臣無二の家來にまで、斯く惡言を言ひ送られるも、此の綱宗が不覺ゆゑなり、そも此の屋敷へ押籠められ、隱居となりし其砌り、相果てんとは思ひしかど、家の安危と二ツには、跡目の願ひも如何ぞと、心ならねば惜しからぬ命を延はり今日まで、存命せしは我が過り、死すべき時に死なざれば死に勝りたる恥ありと、古人の金言思ひ當れり、許してくれよこりや老人、そちが詞に

隨つて、是れにて生害いたすぞよ。

〽淚拂うて座を改め、覺悟の樣子見るよりも、お高はあわて縋り留め、

ト此內綱宗公有合ふ刀掛の刀を取り、諸肌を脫ぐ、お高側へ進み寄り、

お高　先づ〱お待ち遊ばしませ。そりやもう忠義一途にお凝りなされし安藝樣ゆゑ、惡人共の取沙汰をお國表でお聞きあらば、委しい事も御存じなく定めて左樣に思召しませう、たゞ一向に聞く時は、御幼年の龜千代君や、御一家中の方々に思はぬ御苦勞かけながら、

〽素性賤しき傾城を、お側へ置いて御遊興遊ばす事と思召せど、

さら〱左樣な譯ならず、御隱居遊ばし其後は、御禁酒までをなしたまひ、お家の御無事を明暮にお案じ遊ばす我が君樣、左樣な譯なら今日より、私事は身退き、伊達安藝樣へお縋り申し、よしなにお詫びいたしますれば、どうぞ暫く御最期は、お待ちなされて下さりませ、

〽女子の淺い心から、ついお情に絆されて、かゝるお恥になる事も、知らでお側に宮仕へ、

此身の罪は幾重にも、お詫びいたすでござりまするが、如何に忠義に凝りかたまり、お家の大事を思へばとて、現在お主に御切腹をお進めなさるは何事ぞ、情の道といふ事を御存じのない伊達安藝樣、そりやお胴慾でござりますわいなあ。

へ流石女子の愚癡多く、なく音も哀れ時鳥、やがて血を吐く覺悟なり。
ト此内お高よろしく愁ひの思入。

綱宗　やあ、假令何やう申しても、只今となり返らぬことぢや、必ず留めるな無用なるぞ。

お高　お詞返すは恐れながら、どうまあ是れが此儘に、お留め申さずに居られませうぞ、假令御隱居遊ばすとも、御存命にてましまさば、御實子樣たる龜千代君に、又御對顏もなりませうが、只今お果て遊ばしましては、嫰若君にも跡々にて、お側に附添ふ者共を、お恨みなさるでござりませう。

綱宗　いや〳〵それはいらぬ義理立て、忠臣無二の安藝ですら、斯く惡言を申し送れば、定めて忰龜千代も、此綱宗をうつけ者と蔭にて誹謗いたして居らう、死して言譯いたすより、外に所存は嘗てないわえ。

お高　そりや左樣でもござりませうが、死は一旦にして易く生は難しと申しますれば、先づ〳〵お待ち遊ばしませ。

綱宗　やあ、此の期に及び未練なり、必ず共に留むるな。

お高　いえ〳〵、留めねばなりませぬ。

綱宗　えゝ、邪魔な奴の、

〽留める腕を捻伏せて、膝に引敷き御佩刀、拔き放さんとなしたまふ、折に駈け入る茶道の珍賀、君の御手に縋り附き、

ト此内綱宗公よろしく、下手より以前の珍賀出であわてゝ留め、

珍賀　我が君樣お待ち遊ばせ、こりや違ひました〱。

綱宗　なに違ひしとは、そりや何が。

珍賀　其のお手紙は眞赤な僞書と存じられます。

綱宗　何と。

珍賀　左樣なら我が君樣には、伊達安藝樣に言附けて私共に暇を出し、俄浪人におさせ遊ばす御料簡ではございませぬか。

綱宗　やあ、たはけ者めが、何を申す、斯く無人なる其中にて、何ゆゑ家來の暇を出さんや。

珍賀　しかと左樣でございまするな。

綱宗　いらぬ馬鹿念、控へ居らぬか。

珍賀　それではやつぱり玄蕃樣や、金兵衛めにだまされしか。

お高　だまされしとはどういふ譯、早ゥ聞せて下さりませ。

珍賀　譯を只今申し上げます。我君樣にはお覺悟を、先づ〳〵お待ち下さりませ。

へ最期を留め座を下り、珍賀は悔しき涙を浮め、（ト是れより替つた合方になり）

何をお隱し申しませう、先刻御前のお使ひにて前町まで參りし歸り、御門を入ると一人の御老體にお目に掛り、怖いお人と思ひながらお庭口まで參りますと、玄蕃樣と金兵衛どのが門番所にいでなさつて、お重箱を渡しながら、こりや〳〵珍賀、其方も浮々すると御隱居樣が、今爰へ來た伊達安藝にお逢ひなさつて附人は殘らず近々お暇になり、老母を連れて御扶持を上げられ、俄浪人にならねばならぬ、それが厭だと思ふなら、今僞手紙を認めて御前へ差上げるから、あの伊達安藝に賴まれた積りでそちが持つて行け、さうさへすれば御隱居樣と安藝の中が惡くなり、お逢ひがなければそち達も、お暇になる憂ひはないと、親切らしく言ひますゆゑ、をかしいとは思ひましたが、老母を連れて浪人となり、路頭に迷はぬ方がよいと、其手紙を持つて參り、勿體ない御前樣をおだまし申してござりまするが、どうも何だか御樣子が、變だと思ひお次にて、段々譯を窺へば、跡方もない惡口を書いて送つて御前樣に、自滅をさせる彼れ等が巧み、怖ろしいとも悔しいとも言ふにいはれぬ惡人ども、知らぬ事とは申しながら、使ひをいたした此身の罪は幾重にも、御免なされて下さりませ。もしお高さま、どうぞよろしう御前樣へ、お詫びをなされて

下さりませ。

〽お詫び〳〵と撫で廻す、天窓を疊へ摺り附けて、まことを明かす言譯を、聞くに呆れて詞さへ出でぬお高に綱宗公、血走る眼押し拭ひ、手紙の文字を改め見て、

ト此内珍賀お高よろしくこなし、綱宗公件の手紙を見て、

綱宗　如何に非運に至ればとて、安藝の手跡に似せてはあれど、正しく謀書、僞筆なるを心附かざる其上に、若年者の珍賀にまで、欺かれしか口惜しい。

〽無念涙に暮れたまふ、側へお高は進み出で、

お高　其の御立腹はお道理さま、御尤もにはござりますれど、年端の行かぬ珍賀どの、惡い事とも心附ず、惡人共に欺されまして手紙を持參いたしましたも、我が君樣が御切腹と聞いて實を明しましたは、まだ〳〵不忠にあらざる證據、何卒、お心和げられ、珍賀どの丶不調法、お許しなされて下さりますやう、偏にお願ひ申しまする。

珍賀　是れと申すも一人の老母を連れてお暇になり、路頭に迷ふと承はりびつくりいたして、斯樣な事とも存じませいで、其の手紙を持參いたした此の珍賀、是れが科にて御前樣のお見限りを受けましては、母を伴ひ今日から路頭に迷はにやなりませぬ、どうぞ不便と思召して、お許しなされて

下さりませ、

〽日頃孝子に母親を、いたはる事は綱宗も御存じゆゑに氣も和らぎ、（ト綱宗思入あつて、）

綱宗　憎い奴とは思へども、諺にいふ過つて改むるに憚ることなし、まつたく惡事と存ぜずして、いたせし事とあるならば、罪は許して遣はさんが、一旦巧みし此惡計露顯と覺らば綱宗を、よも此儘には捨て置くまじ。

お高　仰せの如く惡人に、取りしきられて只今では、力となるべき御家來は、遠ざけられし此のお住居今にも是れへ多人數で、切り込む時はおめ〳〵と、御最期遂げねばならぬ仕儀。

珍賀　其の御危難をお助け申すは、先刻御門でお目に掛りし伊達安藝樣を私が、お呼び申して參りますれば、それを一つの功にして、惡人共に欺されました罪はお許し下さりませ。

綱宗　いや〳〵それは詮なき事、斯くまで巧む惡人ども、最早屋敷の出口を閉ぢ、張番なすに相違なし。

お高　とあつて此の儘おめ〳〵と、お果て遊ばす其の時は、お家の安危も測られず。

珍賀　何卒それゆゑ私を、伊達安藝樣までお使ひに、お遣りなされて下さりませ。

綱宗　いや〳〵そちを使ひに遣り、恥辱に恥辱を重ねんより、伊達安藝へ賴み狀今宵一封書殘し、自殺いたして相果つれば、高は女子の事ゆゑに命に拘はる事もあるまい、死を延はつて跡々にて、安

藝へ竊に屆けてくりやれ。

お高　そりやもう命に代へましても、きつとお屆け申しまするが。

珍賀　其のお手紙のお使ひを、おさせなされて下さりませ。

〽押して願へどなす事の、所詮叶はぬ敵の中、（ト綱宗公思入あつて）

綱宗　あゝ如何なればこそ綱宗は、五十四郡の家國を、握る主人に生れ來て、

お高　まだ三十のお盛りにも、ならぬ御身が此の御隱居。

珍賀　現在家來の計らひにて、一間の内へ閉ぢ込められ。

綱宗　籠中の鳥も同然にて、たゞ一封の便りさへ、

お高　我が君樣の御自由に、ならぬといふは何事ぞ。

珍賀　どうかさつきの意趣返しに、向うを欺して遣りたいものだ。

綱宗　欺すと申せば玄蕃めは、高に執心して居る樣子、

お高　何をするのも御前のお爲め、事によつたら手管にて。

珍賀　だますは以前の生業柄、

綱宗　むゝ、然らば斯樣に、（トお高と珍賀に囁く）

珍賀お高　心得ました。(ト大きく言ふを、)

綱宗　あこれ、ひそかにいたせ。

〽牒し合せて、(ト床の送りにて三人引張りよろしく、此道具廻る。)

(高輪大木戸の場)――本舞臺一面上手に海を見て、下手に町家を見たる大木戸の遠見、上の方へ寄せて海端の茶漬見世の心にて二間の屋體、上手一間腰通り板羽目、之へ御茶漬と記せし半障子を建切りあり、此の下手一間の入口葭簀を建掛け、柱に濱川あなごと記せし行燈を掛け、竹の先きへ納め手拭を大分に結びしを出してあり、下の方筵張りの見世物小屋の後に見せ、此の前に開帳札を建て、よき所に床几一脚直し、此の上に幕明きの久内穴子皿を前へ置き、手酌にて酒を呑み居る、穴五郎茶漬屋の亭主にて立掛り居る、此の見得浪の音、見世物の鳴物にて道具留る。

穴五　もし久内さん、又お歸りが遲くなるとお屋敷が面倒でござりませう。それで三合になりますからもう大概になさいまし。

久内　勘定がなからうと思つて、おつウ酒をたしなませるが、今日は一分あるから、借りては行かぬぞ。

穴五　そんなことをお言ひなすつて、又常談ぢやあござりませぬか。

久内　何で常談を言ふものか、此の通り持つて居る、前金に渡して置くぞ。

ト懐より一分出して穴五郎に渡す、穴五郎金を改め見て、

穴五　成程、こりやあ本當の金だ。
久内　誰がうその金を遣ふものか。
穴五　そんならどうか御ゆるりと、たんと召上つて下さいまし。
久内　いや、現金な男だぞ。
穴五　いえ何でも商ひは現金に、安く賣るのが兩爲でござります。
久内　然し、斯うして見世物の鳴物を聞きながら、一面の海を見晴して、名代の穴子で酒を呑むは、廓へ行つて藝者を揚げて遊興をするも同然、餘程徳用といふものぢや、是れといふも殿樣のお蔭、いや有難い〳〵。
穴五　時にお前さんのお屋敷へ、先の殿樣が來てござるさうだが、やつぱり以前が以前だから、内々御遊興の御酒宴などが、折節始まるでござりませうね。
久内　どうして〳〵當節では、座敷牢同然な所へ押籠めにおなりなされて、御酒を一つお上りなされぬとは、まことにお氣の毒な事だわえ。
穴五　はゝあ、それぢやあ御亂行だといふ噂があるが、ほんの世間の説でござりますか。

久内　何であれが御亂行なものか、やつぱり家來が惡いから、あんないゝ殿樣をだいなしにしたのだ。
穴五　そんな事でございませう、いや、お大名などゝいふものは、何でも御家來が肝腎でございますね。
久内　樣子を聞けば、お國から、伊達安藝樣といふえらいお方が、昨日あたりお着になつたとやら、今にどうかなるであらう。
穴五　何にしろ殿樣は、お氣の毒なことでございますね。
久内　それを思ふと斯うやつて、酒を呑んぢやあ濟まねえ譯だ。どれ〳〵、早く屋敷へ歸らう。
穴五　まあ御ゆるりとなされませ、お預りがございます。
久内　いや〳〵さうはなか〳〵呑めぬ、勘定をして釣錢を下ッし。
穴五　又今度までお預りにいたしませう。
久内　えゝ、さう言はずと釣錢を下せえ。
穴五　左樣なら一貫三百文ゆゑ、二朱お返し申します。（ト懷より二朱出して久内に渡す）
久内　いや、酒と肴で六百出せば氣儘といふが、一貫三百とは奢り過ぎた。
穴五　それは、昔の事でございます。
久内　どつこい、年が露顯をするわえ。あゝ、いゝ心持に醉つた。

ト ひよろ〳〵し乍ら花道へはひる、穴五郎は件の道具を持つて入口へはひる、跡かすめて浪の音合方になり、件の茶漬見世の入口より以前の安藝出て、向うを見送り、思入あつて、

安藝 遠國者ゆゑ江戸へ參り、何かと當所不案内ゆゑ、めつたな料理へ寄られぬと話しに聞きし名代のあなご、此家で支度いたし居つたが、今これに居た親仁こそ、正しく屋敷の小者と見えるが、先刻濱川玄蕃より承はりしと打て替り御隱居樣のお愼み、彼此以て相違いたすは惡人甲斐の身内ゆゑ、我を主君に逢はせまいと、謀計を構へて計られしか、こりや滅多に歸宅は出來ぬわえ。

ト ぢつと思入、ばた〳〵になり、花道より以前の珍賀、草履にて走り出て來る、跡より宅助中間のこしらへにて追掛け出で、兩人舞臺へ來る、是れにて安藝見世物小屋の蔭へ隱れる。

宅助 これ〳〵珍賀どの、屋敷の塀を乘越えて、こなたは何處へ使ひに行くのだ。

珍賀 それはあの、おゝさうぢや、御隱居樣の御祕藏の植木鉢を毀したので、手討ちにするとのお腹立ち、兎角命が物種と、塀を乘越え逃げ出したが、是れから原田甲斐樣へお詫びを頼みに行く所ぢや。

宅助 いゝや、さういふ譯ぢやあるめえ、何ぞそなたは御隱居樣から、頼まれたものを持つて居るだらう。

珍賀　いや〳〵、何にも持つては居ぬ。

宅助　持つて居ねえといふならば、居ねえにもしてやらうが、其の懐を見せなせえ。

珍賀　やあ。（トぎつくり思入）

宅助　濱田様から言ひ附かつて、屋敷の出口を爰かしこ張番する此の宅助、どうやら怪しい曰窓、おれが覗いて居るとも知らず、塀を乗越え懐からちよつと出したる状箱を、又もしつかり内懐へ入れた様子を認めたゆゑ、跡追掛けて來たのだ、どこへ使ひに行くのだか、それが聞かせて貰ひてえ。

ト珍賀思入あつて、

珍賀　さう知られたら隱しはせぬ、實はお妾のお高どのから、内證の手紙を頼まれて親許まで持つて行くのぢや、どうぞ見ぬ顔して下さい。

宅助　さういふ事なら知らねえ顔で、通してやるめえものでもねえが、まあ其の状箱を見せなせえ。

珍賀　いや〳〵、是れは見せられぬ。

宅助　見せぬはやつぱり怪しい状箱、見脱す事は出來ねえわえ。

珍賀　そこを不斷の馴染甲斐、どうぞ見ぬ顔して下さい。

宅助　そんなら手紙を、おれに見せるか。

珍賀　さあそれは。

宅助　えゝ面倒な、斯うして見るのだ、（ト珍賀の懷へ手を入れろ、珍賀其手を捉へ、きつと捻上げる。）あッ痛

え〳〵、どうするのだ。

珍賀　一合取つても大名の、家に勤める此の珍賀、無禮をしたら許さぬぞ。

宅助　えゝ、小癪なことを言やあがるな。

ト振拂つて木刀にて打つてかゝろ、珍賀ちよつと立廻つて下手にある開帳札を取つてきつと見得、是れより見世物の鳴物を借り、宅助を相手に可笑味の立廻りよろしく、よき程に小屋の蔭より以前の安藝出て、宅助を當てろ、珍賀安藝を見てびつくりなし、

珍賀　や、あなたは慥伊達安藝樣。

安藝　左いふは先刻門内にて、行き逢うたる茶道でないか。

珍賀　へい、加藤珍賀と申しまする、御隱居樣の茶道でござりまする。

安藝　して其方は何ゆゑに、此處へ參りしぞ。

珍賀　只今あなたのお住居まで、參る所でござりまする。

安藝　して〳〵それは、何用にて。

珍賀　御隱居樣より、お手紙でござりまする。

安藝　なに、殿樣より御手紙とな。

珍賀　是れを御覽下さりませ。

　ト懷中より狀箱を出し安藝へ渡す、安藝手に取り、狀箱の上書を見て。

安藝　何かは存ぜず、脇附けに、大急用といたしあるは、猶豫ならざる火急の御紙面。

珍賀　委細はそれなるお手紙に、認めあると申すこと。

安藝　然らば是れにて拜見なさん。

珍賀　左樣なされて下さりませ。

安藝　珍賀とやら、是れへ參れ、（ト上手の床几へ腰をかける、是れより誂への合方になり安藝件の狀箱の封印を切り、中より手紙を出し、押戴いて開封なし、）「一、其方儀老體の身にて遠路の出府大儀に存ずる、予も其方に面會いたし度く着を相待ち居り候所、佞臣共の妨げゆゑか今日態々尋ねくれ候樣子跡々にて相分り、まことに殘念の至り。」むゝ、さてこそ先刻彼奴等が、虛言を構へ此の安藝を、追ひ返せしと覺えたり。

珍賀　して、其のお跡は如何なるか、お讀みなされて下さりませ。

安藝「まことに殘念の至り、猶此末とも龜千代の身の上、家の安泰計らひくれ候樣頼み置きたく、且つ公訴の儀につき不都合の場合もこれ有り候へば、憚りなく予が是れまでの不覺を申し立て、只々家の安全こそ冥府にて悦びに候。」はゝツ、勿體なき此の御書面、かゝる事とも存ぜずして、惡人共の詞を證據に、暫しの間も我君をお恨み申せし心得違ひ、御容赦願ひ奉ります。

ト手紙に向ひ詫び入る思入。

珍賀　して其お跡は、もう何も認めてはござりませぬか。（ト安藝件の手紙の末を繰開き、）

安藝　末に何やら、一首の歌。

珍賀　して／＼、それは何とでござりまする。

安藝「梅の花匂ふ春邊は位山、闇に越ゆれどしる人ぞありける。」

珍賀　それは慥に古今集の、紀の貫之の詠まれし古歌。（ト安藝思入あつて、）

安藝　此の述懷のお歌といひ、書面の末に冥府にて、家の安全を悅ぶと、認め送りたまひしは。

珍賀　其お手紙をお殘し遊ばし、君には今宵御生害の、はや御覺悟でござりまする。

安藝　なに、我が君には御生害とな。（トびつくり思入、）

珍賀　何卒是れより袖ケ崎へ、お越しなされて下さりませ。
安藝　いふにや及ぶ、是れより直に。(ト立ちかゝる、爰へ以前の宅助起上り)
宅助　手紙をこつちへ。(ト取りに掛るを安藝ちよつと立廻つて引附け)
安藝　彼も惡事へ荷擔の下郎。(ト珍賀以前の開帳札を取り上げ)
珍賀　それゆゑこやつの足腰を。
宅助　何を。

ト振解いて逃げにかゝるを、珍賀開帳札にて宅助の足を拂ふ。是れにて宅助べつたりと下に居る。安藝は件の手紙を懷中する、珍賀は宅助を押へ附ける、双方見合はせ道具替りの知らせ、輕業の鳴物にて珍賀開帳札を遣ひ、宅助操の思入よろしく、此の模様右鳴物にて道具元へ戻る。

(元の綱宗居間の場)――本舞臺元の中足の道具、二重上の方に銀地の屛風を逆に建廻しあり、此前に經机を直し、上に芍藥の花活香爐などよろしく並べ、此の傍に以前のお高泣き伏し居る、下手に以前の玄蕃控へ居る、此の見得床の送りにて道具留る。

〽無慚なる逆さ屛風も夢の間に、變り果てたる蝶番ひ、哀れ無常と鳴る鐘を、算へ立てたる繰言ひ、跡は涙に泣き沈む、こなたは胸に思ふ壺、笑を隱して殊勝げに。

ト玄蕃思入あつて、

玄蕃　あいやお高どの、思ひ寄らざる御變死ゆゑ歎くは理、さりながら千萬いうても返らぬこと、只今金兵衛を御後見たる兵部侯や執權原田甲斐の方へ知らせに遣はし置いたれば、老臣共が立會の上惡しきやうには計らふまい、是れも定まる薄き縁と、あきらめられたがよくござる。

〽おのが巧みを押隱す、情の詞面憎く思へどわざと泣く目を拭ひ、（ト お高こなしあつて、）

お高　御親切なるお心添へ、そりやもう是れが御病氣にて、お果てなされし事ならば、あきらめやうもござりますが、伊達安藝樣のお手紙を珍賀殿がことづかり、御覽に入れしそれゆゑに、御切腹を遊ばしたかと思へば女子の愚癡なれど、お恨み申すは伊達安藝さま、憎うて〳〵なりませぬ。

〽素知らぬ振りで餘の人を、恨み歎けばしたり顏、（ト是れを聞き玄蕃思入あつて氣を替へ、）

玄蕃　さてはそれゆゑ我が君には、御生害をなされしとか、不忠といはうか不埒といはうか、人非人たるあの伊達安藝、見よ〳〵今に我が君の、修羅の御無念受け繼いで、服罪させいで置くべきか。

お高　たゞ此上はお力とお賴み申すは玄蕃さま、何卒お願ひ申しまする。

玄蕃　其儀は篤と承知いたした、して〳〵茶道の珍賀めは、何れへ參りましたか。

お高　手紙をお屆け申せしゆゑ、我が君樣の御生害、面目ないと見えまして、お庭口から何れへやら參

りましてござります。

玄蕃　さてはそれゆゑ逃げをつたか、はてさて憎き奴ではある。
〽口と心の裏表、お高は四邊見廻して、（ト お高こなしあつて、）

お高　もうし玄蕃さま、わたしやあなたに折入つて、お願ひがござりまする。

玄蕃　なに、改まつて願ひとは。（ト是れより媚いたる合方になり、）

お高　其のお願ひと申しまするは。（ト上手の經机の上にある手向の水の茶碗と、一輪挿しの芍藥を持つて來り玄蕃の前へ差出し、）則ち是れでござりまする。（ト玄蕃思入あつて、）

玄蕃　手向の水に芍藥の花、物言はぬ判じ物ぢや、手折れといふ謎では。

お高　どうぞあなたのお手活に私をなされまして、我が君樣の御無念を、共に受け繼ぎ伊達安藝どのへ恨みを返して下さりませ。（ト顏を背けて恥しきこなし、玄蕃悅ばしき思入にて、）

玄蕃　はて、よい時にはよい事が、いやさ、よいとも〳〵、其儀なら願つたり叶つたり、そもじの心底感心々々。

お高　すりや、御承引下さりますとか。

玄蕃　承知も承知、大承知ぢや。

お高　えゝ、お嬉しう存じまする。
玄番　斯くいふ手前も悦ばしい。
お高　とてものことに其のお水を、お呑みなされて下さりませ。
玄番　すりや手前に、手向の水を。
お高　さあ、我が君様の御無念を受け繼ぐあなたでござりますれば、御酒の名に呼ぶ芍藥の丁度手活けの花を添へ、杯がはりに固めのしるし。
玄番　いや、面白き其の口合、然らばそもじが先づ一口。
お高　頂戴いたすでござりまする。（トお高思入あつて件の茶碗の水を一口呑んで差出す、）
玄番　それで安心、
お高　えゝ。
玄番　いやさ、安心いたす固めのしるし、斯くの通りぢや。（ト残りの水をぐつと呑み干し、）どうやら甘露の味がいたす。（トお高これを見屆け、）
お高　嬉しやそれで、此の身の願ひも、
玄番　手前も實は日頃の望みが、

お高　お叶ひなされてござりまするか。

玄蕃　おゝさ、叶うたしるしに、つい爰で。（トお高に寄り添ふ、此時お高胸を押へ）

お高　あいたゝゝゝ。（ト苦しき思入）

玄蕃　如何いたした〳〵、（ト癪を押さうとしてどうとなり）やゝ、俄に手足の痺れるは。

ト此時屏風の内にて、

綱宗　おゝ、其の仔細申し聞かさん。

玄蕃　やゝ、あの聲は。（トびつくり思入）

〽不審見返る後より、立ち出でたまふ綱宗公、是れはとばかり呆れ果て、逃ぐる玄蕃の襟上取り、疊へ頭をにじり附け、

ト此内後の屏風を取りのけ、以前の綱宗公、白小袖肌脱ぎにて刀を引提げ出る、玄蕃此體を見てびつくりなし、逃げに掛るを引附け、

綱宗　あの、こゝな人非人めが、（トきつと思入、是れより替つた合方になり）こりややいおのれ、家來の分際にて主たる我を害せんと、此程よりの種々の惡計、皆一つとして道ならねば、手違ひとなり露顯に及べど、惡人多く蔓りて、是れを咎むる力なく無念を怺へ今日まで素知らぬ振りにて許し置

きしに、よくも先刻珍賀を欺むき、安藝が僞筆を取りこしらへ、此の綱宗が眼を晦まし、生害させんと計りしよな、我れ又おのれが奸計に、おめ／＼落入る體に見せかけ、是れなる高に申し附け、色香を以て心を許させ只今呑ませし其の水は、いつぞやおのれら綱宗を毒殺なさんとあの井筒へ、仕込みし毒の大惡水、それと知らずに甘露なりと悦び喰ふうつけ者、見よ／＼今に其の五臓惱亂なして苦しむ事自業自得と思ひ知れ、たゞ不便なは此の女、おのれに毒をすゝめんばッかり、其身に罪のあらずして毒死いたさす殘念さ、是れも誰ゆゑ汝等ゆゑ、思へば憎き獄卒めが。

〽丁々發止と打ちするて、緣より下へ突き落せば、五體揉まれて腹內へ毒の廻りの恐しく共にお高も苦痛の體、玄蕃は無念の齒嚙をなし、

ト此內綱宗刀の鞘にて玄蕃を打ちするゑ、緣より下へ突き落す、是れにて玄蕃毒の廻りし思入にてよろしく苦しみ血を吐く、二重の下手にてお高同じく苦しみ血を吐く、玄蕃きつとなつて、

玄蕃　ちえゝ、計る／＼と思ひしに、返つてそつちに計られしか、誂文通りに行きしゆゑよもやと思ひ綱宗が變死の疵口見屆けぬが、此の玄蕃が一生のあやまり、さう聞く上はもう是れまで、綱宗汝も生けては置かぬぞ。

綱宗　やあ、主に刃向ふ大罪人、いでや成敗いたしてくれん。

玄蕃 小癪なことを。

〽毒の惱みに切先きも、亂れてよろぼひ立ちかゝるを、刀拔き持ち緣先きへ下り立ちたまふ綱宗が、刃銳き弄り切り、見る間に青葉の庭上も、朱に染りて散る紅葉、惡の報いは忽ちに廻る車の釣瓶繩、井筒の中へ切り込んだり、

ト此內床の合方へ鳴物をあしらひ、綱宗公庭下駄をはき玄蕃へ切つてかゝろ、玄蕃刀を打ち落されあちこちと逃げ廻りながら散々に切られ、トゞ上手の車井戸を遣ひ、立廻りよろしくあつて、玄蕃手負にて井戸へ飛びこむ、綱宗公釣瓶繩を切り拂ふ、是れにてどんと水の音して、綱宗公上手にて井戸へ片足踏掛け中を見込み、きつと見得、此の時本釣鐘を打ち込む、お高苦痛のこなしにて此體を見て、

お高 嬉しや是れで惡人の、滅びる時節が來りしか。（ト綱宗公向うへ思入あつて、）

綱宗 それに附けてもあの珍賀、首尾よく書面を屆けしか、はて氣掛りな事どもぢやなあ。

〽滴る紅糊の御佩刀、引提げたまひ綱宗が、返事如何にと待たるゝ、折柄、息をばかりに馳け來る珍賀、（トばた〳〵になり、花道より以前の珍賀走り出來り、花道にて、）

珍賀 はツ、我が君樣、只今歸りましてござりまする。

綱宗 おゝ珍賀か、待兼ねしぞ、して〳〵首尾よく屆けくれしか。

珍賀　へい、首尾よく高輪大木戸で、伊達安藝樣にお目にかゝり、是れへ御同道いたしました。

綱宗　なに、同道いたせしとな。

珍賀　只今是れへおいでにござりまする。

〽跡を指さし庭先きへ、近寄る間にも伊達安藝は、老の心のせはしなく、

ト珍賀舞臺へ來る、花道より以前の安藝足早に出來り、直に舞臺へ來り、四邊を見てびつくりなし、

ト綱宗公安藝を見て、

安藝　やゝ、こりや是れ、お庭の爰かしこ、血汐の滴る樣子といひ、苦痛に惱む一人の女。

綱宗　老人なるか。

安藝　はゝはッ。（ト下に居て平伏なす。）

綱宗　不審の仔細は跡にて申さん。苦しうない、進め〳〵。

安藝　はゝッ、何は然れ我が君樣には、其のお刀をお納め遊ばし、あれなる御座所へお越し遊ばせ。

綱宗　左樣いたさう。こりや珍賀、水を持て。

珍賀　はッ。

ト傍の突這の手水鉢の水を柄杓に汲み、氣味惡さうに持つて來り、綱宗公の刀へかける、綱宗公水を

切り、

綱宗　拭へ〳〵。

珍賀　はツ。（ト懐より手拭を出し刀を拭ふ、綱宗刀を鞘へ納めにつたり思入）

〽笑を含みて元の座へ、直りたまへば伊達安藝も、おづ〳〵進む緣の上、兩手をつかへ愼んで、（ト綱宗二重上手へ住ふ、安藝も二重へ上り、下手の緣先きへ住ひ、）

安藝　はツ、久々にてのお目通りに、何から先きへ申し上げんやら、老後の身にて前後も不揃、失敬勝ちにはござりますれど、先以て我が君樣には御健勝の體を拜しまして、安藝に於ても悅ばしう存じまする。

綱宗　そちも老後の衰へなく、健かなる樣子ゆゑ、予も滿足に思ふぞよ。

安藝　はツ、有難き其の仰せ、恐れ入りましてござりまする。

綱宗　さて、その方に面會なし、何から詫びをいたさうやら、此の綱宗が不覺の段々、（ト言ひ掛けるを、）

安藝　あいや、其儀も惡人共が君に婬酒を進めしことども逐一承知仕つれば、先刻の御紙面にて一事を打つて萬を知り、此度の御心勞左こそと推察仕つりまする、それは扨置き早速に、伺ひ度く存じまするは、是れなる女中が苦痛の體、又庭上に夥しき血汐の滴り居りまするは、如何なる仔細

にござりまするな。

綱宗　其の仔細聞いてくりやれ。（ト是れより横笛の入りし合方になり、）そちに申すも面伏せぢやが、それなる女は其の以前予が遊里へ通ひし頃、馴染を重ねし三浦屋方の高尾といへる傾城なりしが、根引きいたして妾となし、身近う使ひ樣子を見るに、流れの廓に身を沈め、賤しき勤めをいたせし者には、稀なる氣質に不便さまさり、其名も高と呼びかへて、予が介抱を申し附けしに、其の恩義を忘れずいたして、當分かゝる蟄居の身となり、日蔭者なる綱宗を見捨てずいたしてまことを盡し、朝暮の世話をいたしくれる、節義者にてありし所、今日又も惡人共の智略によつて欺かれ既に謀書の其爲めに、予が生害をなさんとせしを、其身にかへて押し留め、惡人甲斐が身内たる濱田玄蕃といへる奴、高に心を寄するを幸ひ色香を以て惡水を毒味いたして玄蕃に進め、命を以て忠を立て、首尾よく事を計りしゆゑ、只今不忠の玄蕃めは、あれなる井戸へ切込みて成敗いたせしかど、可惜忠義の此高を、毒死いたさす殘念さ、推量いたしてくりやれ。

〽仔細を語り綱宗も愁ひに沈む御有樣、お高は苦痛の顏を上げ、（ト お高こなしあつて、）

お高　左樣なればあなた樣が、伊達安藝樣でござりまするか、初めてお目見得いたしまする其の甲斐もなう此しだら、定めて是れまでお國許に居らせられても江戸表の、よからぬお噂お聞き遊ばし、

高尾とやらいふ傾城めが我が君様をおだまし申し、御不行跡にいたせしかと、狐狸も同然に憎うお思ひ遊ばしませうが、何卒是れにて私の罪はお許し下さりませ、假令死んでも我が君のお爲めになつて果てますれば、嬉しう成佛いたしまする。

〽名殘惜しげに御顔を、打ち守り居る、今際の別れ、見る伊達安藝も老眼に、浮む涙を押し留め、

ト此内お高よろしくこなし、安藝思入あつて、

安藝 はて天晴なる其心底、事の仔細は珍賀より是れへ參る道すがら、某具に承はりしが、謀書を構へ我が君を失はんとせし惡人を、そちが忠義の功にて、毒を喰はせ目前に御成敗とは心地よし、君傾城の身にも似ず命を以て忠を立て毒死なすとは見上げし女、やがてお家が安泰なさば身寄りの者を尋ね出し、御家來分に召抱へ高尾の名義絶えざるやう、當家に於て扶助いたせば、それを冥府の土産になし、心殘さず成佛いたせ。

お高 え丶有難い其のお詞、假令御扶助は受けずとも素性賤しき私を、見上げしものとの御一言、此身に餘りてお嬉しう、未來の土産にいたしまする。

〽悦ぶ體も四苦八苦、珍賀は側へ差寄つて、（ト珍賀愁ひの思入にて）

珍賀　これお高どの、死なつしやるか、我が君樣が此處へ御隱居なされし其後は、賴みに思ふ御家來も日に增し段々遠ざけられ、明けても暮れてもたつた二人、君のお側に居つたゆゑ親身の兄弟同樣にお世話になつた此の珍賀、是れが別れでござるゆゑ、よく顏見せて下さりませ。

お高　おゝ珍賀どの、何れにござる、最早お顏が見えませぬ。

〽顏が見えぬといふ内に、はやせぐり來る斷末魔、惜しや紅葉の全盛も盛り短く散りて行く、名殘りの井戶や袖ケ浦、淚の果てぞ哀れなる。

ト此内お高よろしく苦しみ落入る、是れにて皆々愁ひの思入よろしく。

珍賀　こりやもう事が切れましたか、不便なことをしましたなあ。

〽大聲あげて泣き沈む、果しなければ綱宗公、歎きを餘所に氣を勵まし、

ト綱宗公思入あつて、

綱宗　何は格別惡人の玄蕃を成敗いたす上は、又も惡事へ荷擔の者ども、兵部甲斐より指圖を受け、如何なる謀略なさんも知れず、是れを防がん手當が肝要。

安藝　其儀は此度國許より、伴ひ參りし勇士の一人、血氣の熊田甚五兵衛交代長屋に罷り居れば、是れへ呼び寄せ我が君の、お側へ附けおき惡人共の、一々詮議仕らん。

珍賀　其のお使ひに私が、もう一走り參りまして、お呼び申して參りませう。

綱宗　おゝ、今日よりして其方は、侍分に取り立て得させん。廐へ參つて乘馬を引出し馬上で芝まで使ひに參れ。

珍賀　すりや私を侍分に、お取り立て下さりますとな。

綱宗　おゝ幸ひ家名退轉せし、秋穗平八の家祿を與へ、千石取りにいたし遣はす。

珍賀　えゝ、あの千石にお取り立てとな、あの千石に、千石に、こりやまあ夢ではないか知らん。

〽天へも昇る其の悦び、

安藝　茶道の身にて惡人の圍みの中を切り拔け出で、君の危急をお助け申せば、斯くぞありたき此の御沙汰。（ト綱宗公件の刀を取り上げ）

綱宗　侍分にて使者に參るに、腰が明いて見苦しい、是れを汝に遣はすぞ。（ト刀を差出す。）

珍賀　えゝ、すりやお刀まで拜領とな。

安藝　いざ、有難く頂戴いたせ。（ト取次いで差出す、珍賀是れを取つて）

珍賀　君の賜、有難く頂戴いたすでござりまする。

〽押しいたゞいて帶刀し、三拜九拜なす折柄、

ト珍賀件の刀を腰へ差し、悦ばしき思入、爰へ下手より○△□◎の四人、法被三尺裝の廐中間のこしらへにて、竹箒を持ち出來り、

○　樣子は聞いた珍賀どの、侍分に出世はすれど、

△　馬の乘方供先きの其の法式を知つては居まい、

□　犬も朋輩鷹も朋輩、立身したる前祝ひ、

◎　今日のお使者の取巻きが、お師匠番に、

四人　敎へて遣らう。

珍賀　いや、いゝ所へ下司奴、慾に迷つて惡人へ一味荷擔の手前達、邪魔立てされぬ其の先きに爰で手並を見せてくれん。

○　さういふこんたを、

四人　疊んでやるのだ。

珍賀　なに、猪口才な。（ト中間四人箒にて打つて掛るを、珍賀ちよつと立廻り、きつと見得）

〽坊主々々と呼び捨てに、甘く見られたお茶道も、實る秋穗の明き株を繼いで千石取り立ての家は忽ち門構へ、槍一筋に二腰をたいした出世上下の、裝も三筋の諸手綱、はい はいだう

だうと四ッ辻を、曲る五行に供先きを、拂ふお使者の手始めと、勇み立つてぞ見えにける。

ト是れへ行列の鳴物をあしらひ、珍賀中間を馬に遣ひ、三尺を取り手綱にして、中間竹箒を持ち、行列の見得よろしく、トヾ珍賀中間四人を投げのけ、きつとなり納まる。

安藝　はて、勇ましき其の振舞。

綱宗　いそふれ平八。

珍賀　はやおさらば！

〽一夜千石逸散に、芝口さしてぞ。

ト珍賀花道へ行ききつとなる、綱宗安藝是れを見送る、床の三重曲撥にて珍賀花道へはひる。跡兩人引ばりよろしく、

幕

五幕目

伊達家奥殿の場

伊達安藝宅の場

【役名】―松前鐵之助、門番嘉兵衛、片倉小十郎、伊達安藝、熊田甚五兵衛、今村善太夫、蜂谷六左

衞門、渡邊金兵衞、若黨佐五平、忍び彌藤次、中間三人。乳人淺岡、嘉兵衞女房お豐、局澤田、同吳竹、同松島、同錦木、伊達龜千代、白川千代松、其他。」

(伊達家御殿の場)――本舞臺一面の平舞臺、正面上下とも中御簾の金襖、竹に雀の彩色畫前面同じ畫の大欄間、一面に御簾をおろし、爰に女形七人何れも腰元にて居並び、琴唄にて幕明く。

腰一　此度のお家の騷動、御國においでの方々と江戸詰の御家老方と、二別れになりしゆゑ、容易ならざる事なれば、

腰二　お內々で濟まざるゆゑ、公儀へ願ひ此の年月評定所とやらにて、御老中方も御出席にて度々の御吟味、

腰三　今にどちらがどちらとも白い黑いの分らねば、御家中の方々も大抵や大方の御心配ではござりませぬ。

腰四　然し江戸の御家老原田樣の、惡事が追々露顯いたすとやら、此程よりの噂とり〴〵、

腰五　さうなる時はお國家老伊達安藝樣が御勝利に、なる事でござりませうわいなあ。

腰六　何を申すも原田樣は、御一門たる兵部樣の御緣引きがよろしいゆゑ、なか〳〵油斷はなりませぬ、それゆゑ先殿樣もお下屋敷へ御隱居遊ばし、

腰七　御家來とても皆遠ざけ、座敷牢も同じやうだと申すこと。
腰一　皆それとても此程より、悪人蔓り色々の悪い噂があるゆゑに、私共も及ばずながら我が君樣をお案じ申し、片時心は許しませぬわいなあ。
腰二　然しながら我が君樣には、武勇勝れし松前樣や、又淺岡樣も共々に、
腰三　晝夜お側にお附添ひ、御大切に守護遊ばせば、不慮のあらうやうはござりませぬ。
腰四　いえ〳〵油斷はなりませぬ、斯ういふ時の事なれば、いつ何時曲者が忍び入らんも測られず、
腰五　若しもの時は私共が、其の曲者を取押へ、白狀させて悪人の、
腰六　詮議の手蔓に、
六人　いたしませう。
腰一　おゝ勇ましい其のお詞、お宮仕へをいたす身は、其心掛けが何より肝要。
腰二　さはさりながら此の末が、どうなる事とそれのみを、お案じ申しまするわいなあ。
腰三　ほんにさうで、
皆々　ござりますわいなあ。（トばた〳〵になり、花道より腰八腰元にて出來り、直に舞臺へ來り）
腰八　皆さまへ申し上げます、お局樣方只今是れへお上りでござります。

腰一　なに、お局方のお上りとな、此の由。

皆々　我が君樣へ。(ト此時御簾の内にて、)

淺岡　あいや、其お取次には及びませぬ。

腰一　あのお聲は、

皆々　淺岡さま。

鐵之　腰元衆、御簾をお上げなされい。

皆々　畏りました。

トみだれになり、腰元皆々總御簾へ手を掛ける、是れにて御簾捲上る。眞中に龜千代黒の紋附羽織着流しにて褥の上に住ひ、上手に鐵之助繼上下、下手に淺岡襠裝にて控へ、後に子役の小姓四人居並び居る、是れと一時に、花道より三立目の澤田ノ局先きに、吳竹、松島、錦木の局何れも襠裝、花筒へ櫻を入れ、銘々持つて出來り花道に住ふ。

淺岡　これは〳〵皆樣には、打ち揃うてようこそ御出仕、(ト龜千代に向ひ、)皆の者へ、お詞下し置かれませう。

龜千　皆よう參つた。

四人　はあゝ。(と辭儀をなす。)

鐵之　して何れもには銘々に、見事なる花を御持參ありしは、

澤田　我が君樣の御氣鬱をお慰め申さん爲め、何れもと申し合せ、

吳竹　上野飛鳥御殿山、隅田の櫻を取り揃へ、

松島　獻上なさんと銘々に、

錦木　持參いたしてござりますれば、

澤田　よろしく御披露、

四人　願ひ上げまする。

鐵之　それはよくこそお心附かれた、我が君には嘸かしお悦び、淺岡どの。君へ御披露いたされよ。

淺岡　澤田吳竹始めとして、名ある櫻を取り揃へ、お慰みの其爲めに獻上なさんと銘々に、持參いたしてござりまする。(ト龜千代四人に向ひ、)

龜千　其の櫻近う持て。

腰一　お局さま方、君のお許し、

腰二　これへお進み、

八人　遊ばしませ。

澤田　左樣なれば、

四人　御免なされて下さりませ。（と琴唄の合方になり、四人舞臺へ來り、下手に住ひ）

澤田　櫻は花の王とやら申しまして、此日の本の名木にて、其香は四方に馨しく、此程よりの御氣鬱を
今咲く花と諸共に、眉を開くのお悦び、祝して君へ捧げもの。

吳竹　又是れなるは飛鳥の花、飛ぶ鳥落す御威勢を、武士の身に譬へたる、盛り久しき櫻木は、やがて
黑白明白に、泰平諷ふ吉兆に、よそへて祝す此の一本。

松島　汐風あらき御殿山、其の丘に咲く櫻花、めげぬ色香の魁けて、後れを取らぬ勇ましさ、操を守り
色替らぬ此の松島が寸志の一枝。

錦木　假館又や結ばん庵崎の隅田河原にけふも暮しつと、詠じたまひし爲家公、其の御武德を慕ひつゝ
幾末祝す隅田の櫻木。

澤田　たゞ我が君の御武運の、開くを祝して何れもが、

吳竹　心を籠めし捧げもの、御前よろしくお執成し、

四人　偏に願ひ上げまする。

鐵之　何れもの御趣向、感心いたした、花は櫻木人は武士と、諺の譬の通り、潔白なる其俤
淺岡　腰元衆、其の花これへ。
腰元
四人　畏りました。（ト件の花を龜千代の左右へ並べる。）
鐵之　心を籠めし獻上もの、
淺岡　いざ御遊覽、
兩人　遊ばされませう。（ト兩人よろしく披露なす。）
龜千　おゝ、皆の者過分なぞよ。
四人　はあゝ。（ト平伏なす。龜千代小姓を招き、花を見て餘念なき思入、）
淺岡　あれ、皆樣御覽なされませ、我が君樣の餘念なく花にお見惚れ遊ばすは、餘程御意に叶ひしと、見えます事でござりまする。
澤田　左までもなき品を、獻上なせしが御意に叶ひ、私共の身に取つて如何ばかりかお嬉しう存じまする。
矣竹　これと申すも此程よりたゞ事ならぬお取込み、御幼少とは申しながら御發明なるお生れゆゑ、何となくお心に掛けさせられると見えまする。

松島　呉竹さまのおつしやる通り、先殿様御隱居この方、伊達安藝にも遙々と御出府ありし事柄を、お辨へのあるゆゑに。

錦木　お心の浮きたまはぬは御道理なれど、まだ頑是なき御身にてかゝる御苦勞遊ばすを、存じ上ぐればば上ぐるほど。

澤田　おいたはしう、

四人　存じまする。（ト愁ひの思入。）

淺岡　松前様も此程より晝夜お側にお附添ひ、數なりませぬ私も其の心配は如何ばかり、御推量なされて下さりませ。（ト皆々ぢつと思入、此時ばたばたになり、花道より腰元の六出來り、）

腰六　申し上げます、御國表より片倉小十郎様御到着遊ばし、只今お次までお上りにござります。

鐵之　なに、片倉氏がお着とな、取敢ず此處へ出仕あつても苦しうござるまいな。

淺岡　外ならぬ片倉様、少しも早く此處へ。

鐵之　それ、御案内申せ。

腰六　畏りました。（ト引返してはひる。）

淺岡　御家臣ながらお家柄、何れも方お出迎ひを。

皆々　畏りました。

ト皆々よろしく居並ぶ、是れより床の淨瑠璃になり、

へ銘々出迎ふその處へ案内に連れて入來るは、館を預る旗頭、青葉山の城主小十郎しづ〳〵と
立出づる、

ト以前の腰元六先に片倉小十郎繼上下にて一本差し、跡より茶道一人、誂への銘酒の徳利を黒塗りの
臺へ載せ、附添ひ出來り、花道に住ふ。

鐵之　片倉氏には、ようこそ御出府、

淺岡　一同お出迎ひ、

皆々　いたしましてござりまする。

小十　是れは〳〵我が君の麗しき御尊顏を拜し、大慶至極に存じまする。

龜千　小十郎よく參つた、近う〳〵。

鐵之　我が君のお許しなれば、

淺岡　いざ、先づ是れへ、

皆々　お通り遊ばしませう。

小十　然らば、御免、

ト然らば御免と片倉は、御側近く伺候なし、

淺岡　小十郎樣、役目の儀にござりますれば、上座御免下さりませう。

小十　何の／＼、その御挨拶には及び申さぬ。（ト本舞臺へ來り、）さて此度の大事件、疾くにも出府致すべき筈なれども、もし本國にて士民ども動亂いたす事あらば、是れも一つの大事ゆゑ、青葉山の御本城警固の爲に差控へ、思はざる出府延引、此儀は幾重にも御仁恕下しおかれませう。

鐵之　何の／＼、御出府延引いたせしを何とてお咎めござらうや、仰せの如く御在所にて、若し騷亂の起る時は、將軍家への申し譯、猶々以て立ち難し。

淺岡　小十郎樣にはお國詰ゆゑ、父伊達安藝にも安堵いたし、一ケ年が其間公訴に愚はござりませねど、

澤田　惡人原田甲斐どのが、手强きゆゑにかれこれと、一同心配いたすよし、

吳竹　なれども追々惡事の廉々、露顯に及ぶ由なれば、

松島　伊達安藝樣の御勝利に、おなりなさるといふ事は、元より知れしことながら、

錦木　如何なる野心のものあつて、忍び入らんとそれのみを、お案じ申すそれゆゑに、

淺岡　夜の目も合ぬ心配を、小十郎樣、御推量なされて下さりませ。

小十　其儀は豫て書面にて仰せ越されて逐一に、推察いたして罷り有る、出府いたせし上からは、共々御助力いたすでござらう、（卜茶道に持たせし銘酒の德利を臺の儘前へ出し、）是れへ持參の保命酒、鹽竈明神へ捧げし神酒、我が君の御壽命を祝して土産の獻上物、よろしう御披露下されい。

鐵之　保命酒とはよき銘なり、御壽命保つ是れ吉兆。

淺岡　殊にはお家を守護の神、鹽竈さまへ上りし御神酒。

澤田　我が君樣には此程より、何となくお氣鬱にて、

吳竹　餘所は賑ふ花の頃、彌生の空も御訴訟中、

松島　御遠慮ゆゑにお庭さへ、遂にお步ひ遊ばさず、

錦木　其徒然のお慰み、憂ひを拂ふ玉箒、

澤田　片倉樣のお土產ゆゑ、お心置きなく御酒宴を、

吳竹　是れにてお開き、

四人　遊ばしませ。

小十　拙者ことも久々の御目見得、いざお酌仕つらん。これ女中方、お杯の用意召され。

腰元八人　畏りました。（卜立たうとする。）

龜千　これ、待て〳〵。

八人　はあゝ。（ト下に居る。）

小十　九獻の御用意申附けしを、何故お止め遊ばしまするな。

龜千　其方の志過分には思へども、予は一生酒は呑まぬぞ。

小十　御幼年ゆゑ御酒などをお好み遊ばさぬは、こりや御尤もではござりまするが、神へ捧げし神酒なれば、

淺岡　少しなりとも召上り、跡は皆々打ち寄つて。

鐵之　お流れ頂戴。

皆々　いたしまする。

龜千　いや〳〵酒は一生涯、予は呑むまいと思ふぞよ。

小十　御酒を生涯召上らぬとは、そりや何ゆゑでござりまする。

龜千　父上樣が御壯年のお勤め盛りを御隱居遊ばし、老衰いたした安藝爺や其外忠義の家來の者に心勞さするも、皆酒から起りし事、それゆゑ予は酒などは一生涯呑むまいと、心で誓つて居るわいやい。

〽幼い心に先君の御あやまちを思ひやり、かこちたまへば人々も、共に涙を催せば、片倉實にもと感じ入り、

ト皆々顔見合せ、小十郎感心の思入にて、

小十　は、、栴檀は嫩葉より馨しくと、聰明叡智の今のお詞、御幼年の我が君が斯くまで御苦勞遊ばすも、是れ皆先君の御亂行、御酒に長じたまひしはお家の騷動醸す基、是れを思へば世の中に恐るべきは淫酒の二つ。

鐵之　御思慮も深き我が君に、自然と備はる御仁德、末頼もしき思召し。

淺岡　今の仰せを父安藝が伺ひました事ならば、嘸悦ぶでござりませう。

澤田　是れも常々淺岡さまの、お育てがよきゆゑと、憚りながら私共も、

兒竹　お嬉しう、

四人　存じまする。

〽悦び合ふぞ道理なる、片倉は御前に向ひ、（ト皆々よろしく思入、小十郎龜千代に向ひ、）

小十　然らば御酒をお進めは申し上げぬ、御隨意に遊ばされませう。（ト思入あつて、）此度の事件に附き松前淺岡御兩所へ、密々に申し入れたき儀がござる、暫時の間お人拂ひを。

鐵之　委細承知いたしてござる。何れもには、暫くお次へ。
澤田　御密談とござりますれば、皆樣と共々に、
吳竹　お次へ下るで、
皆々　ござりませう。
〽局は先に打連れて、お次へこそは入りにけれ、（ト鐵之助、淺岡、小十郎、龜千代殘り皆々上手へはひる。）〽跡に三人は摺寄つて、
鐵之　して、御密談と仰せられるは。
小十　餘の儀でござらぬ、惡人共を取挫ぐ、證據の品を得ましてござる。
淺岡　して〳〵それは、如何なる品でござりまするな。
小十　只今取出し御覽に入れん。（ト小十郎懷中より三幕目の連判狀を出し、）御兩所、篤と御披見なされ。
ト合方きつぱりとなり、三人にて連判狀を開き見る事よろしくあつて、鐵之助淺岡びつくりなし、
鐵之　これぞまことによき證據、
淺岡　如何いたして此の品が、
鐵之　貴殿のお手に、

兩人　入りましたな。

小十　此品計らず手に入りしは、兵部が家來と相成りし、神並三左衛門といへる者、惡事に一味の者なりしが先非を悔いて改心なし、竊に脱出で國許へ持參いたして我への訴へ、容易ならざる神文ゆゑ彼を一間へ止め置き、追々調ぶる荷擔の者ども、國許にて殘らず召捕り獄屋に繋ぎ嚴重に、張番のいたさせ、石川殿へ託し置き取敢ず神並を、證人の爲め召連れて、夜を日についで御當地へ則ち出府いたしてござる。

鐵之　其の神並といへる者、先頃原田が宅に於て、某出逢ひ見知り居る、よくぞ改心いたしてござる。

淺岡　少しも早く此由を安藝方へ告げ知らせ、悦ばせたうござりまする。

小十　それぞ何より肝要なるが、迂濶な者に此の使ひは。

鐵之　いや〳〵人手を賴むまでもなし、某參つて安藝殿へ、貴殿の仰せを逐一に書傳なして此の神文、竊に手渡しいたすでござらう。

小十　それは何より重疊なり、然らば是れより松前氏には、

淺岡　御苦勞ながら少しも早う、

鐵之　言ふにや及ぶ。我が君樣、暫時お暇下しおかれませう。」（ト辭儀をなし、立ちかゝるを。）

龜千　これ鐵之助、爺の宅へ參るなら、予が貰うた此の酒を、安藝爺に屆けてくりやれ。
鐵之　すりや、此の品を伊達安藝へ。
龜千　長の間の心勞にて、嘸かし氣力も衰へつらん、爺の命の保つやう、其の酒を呑ましてくりやれ。
鐵之　はゝ、恐れ入つたる思召し、これ淺岡どの、ようお禮を。
淺岡　何とお禮を申さうやら、有難う存じまする。（ト嬉し涙に暮れし思入、小十郎思入あつて、）
小十　御幼年より斯くまでに、臣下をいたはる我が君樣。
鐵之　かゝる仁慈の君ゆゑに、惡人ばらも悔悟なし、
小十　測らず手に入る惡事の證蹟、
鐵之　それも偏に神の加護、
小十　末頼もしき君の御諚、松前氏、
鐵之　片倉殿、
小十　まことに感服、
兩人　いたしてござる。（ト兩人感心の思入、）
淺岡　松前樣、我が君の有難き今のお詞、父伊達安藝へ逐一に、お傳へなされて下さりませ。

鐵之　委細承知いたしてござる、然らば是れより、

小十　御苦勞ながら、

鐵之　我君、御免。

〽一禮なして松前は、勇んでこそは出て行く。

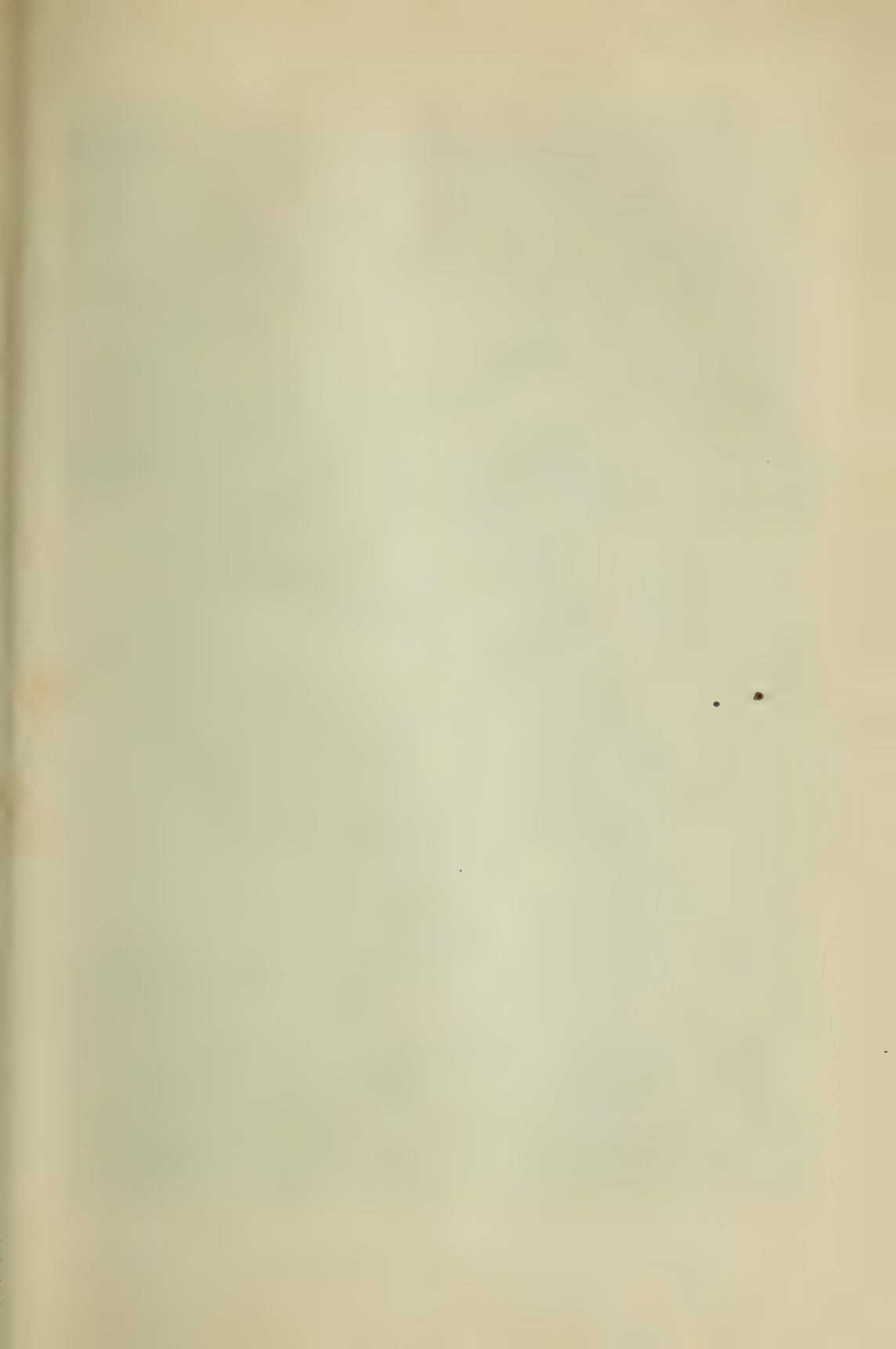
ト鐵之助は件の德利を持ち花道へはひる。淺岡思入あつて、

淺岡　あゝ嬉しや〳〵、松前樣が御持參のあの二品を拜見いたし、我が君樣の御上意を伺ひました事ならば、父安藝ことはどのやうに悅ぶことでござりませう、是れと申すも片倉樣の皆お蔭、有難う存じまする。

小十　何の〳〵、其の御挨拶には及ばぬこと、御手前親子諸共に、昨年以來の御心勞、なか〳〵以て凡人の及ばぬ所、天晴御家の礎とも申すべきは御親子と、心ある者は賞讃なし、感涙に袖を浸さぬものはござらぬ。

淺岡　冥加に餘る其お詞有難う存じまする。さはさりながら只今の連判狀の樣子では、忠義と思ひし汐澤も、惡事に同意と見えまする。

小十　如何にも連判狀に姓名あれば、惡事荷擔に相違ござらぬ。

淺岡　さういふ事なら今日より、丹三郎に御膳番を、申し附けてお毒味させ、彼れが底意を試し見ん。
小十　何さま、言はず語らず樣子を窺ひ、吟味を遂ぐるが何より肝要。
ト此内淺岡紙臺の上にある驛路の鈴を鳴らす、下手より腰元出來り。
腰元　何御用にござりまする。
淺岡　今日より御膳番は汐澤殿に仰せ附けられます、御毒味萬端念を入れ、差上げるやうお傳へ下され。
腰元　畏りました。
〽一間の内へ入りにけり。（ト腰元下手へはひる。）〽片倉は小膝を進め、
小十　いやなに、淺岡どの、改めて其許へ、ちとお賴みがござるが、何と聞き届けては下さらぬか。
〽餘儀なき賴みに淺岡は、
淺岡　これは〳〵片倉樣の改まりし其のお詞、此の身に叶ひしことなれば、
小十　すりや、聞き届け下されうな。
淺岡　如何にも、伺ひまするでござりませう。
小十　早速の御承知、小十郎祝着に存ずる。
淺岡　して、其のお賴みとおつしやるは。

小十　其頼みと申すは、我が君様へお目見得を只管に願ひ度き、小兒が一人ござるゆゑ、其許のお執成し、此儀お頼み申したい。

淺岡　ふむ、して、其のお子は、何人の御子息でござりまするな。

小十　其の父こそはさいつ頃、殿の御不興蒙りてお手討に相成りし、白川主殿の悴でござる。

淺岡　え〻。（トびつくりなす。）

小十　さ〻、其の驚きはさる事ながら、世にも哀れな因果咄し、ま〻お聞き下され。（ト床の合方になり）當歳の砌り父主殿は君へ御諫言申せしが、却つて御不興蒙りてお手討となり、家名は斷絶、母親諸共里方へ引き取られ居りしが、其後間もなく淺岡どの、いやさ、其母御には、御當地へ召出され、若君様のお傅役、祖父の手許で昨年まで成人はいたしたれど、其の祖父殿にも當地へ出府、緣家の事ゆゑ我が手許へ、預り置いて是れまでは養育なせど明け暮れに、江戸の母に逢ひたいとせがまれる身の不便さは、どのやうにあらうと思ふぞ、其の身共さへ又此度御當地へ出府いたすに附け、是非に同道いたしてくれと袖に縋つて頼むゆゑ、如何にも打ち捨て置き難く、是非なく今般伴ひて、連れて登りし少年が、心の内の不便さを推量あつて我が君へ、御目見得の儀を御身より、よろしく執成し頼み入る。

〽理を盡したる片倉の、諭しに流石淺岡も、子の恩愛に逢ひたさは飛び立つ程に思へども、なまじ逢うては猶更に、別るゝ辛さ思ひ遣り、

ト小十郎それと言はずに賴む、淺岡ぢつと思入あつて、

淺岡　折角の思召し、此方より願ひましても君へお目見得いたさせて、假令手許に置かずとも逢うて遣りたい、いやさ、逢つてはやはり恩愛の絆に引され我が君樣に、御奉公が怠りますれば、此の儀ばかりは幾重にも御免なされて下さりませ。又父安藝とても其由を承はれば孫の恩愛、如何なる事にて御奉公に、氣おくれが出ようも知れず、何卒祖父や母親は江戸表にて病死いたし、もう此世には居らざると仰せ聞けられ國許へ、お返しなされて此上とも、御養育下さるが、親子の對面いたすより、遙にまさる御高恩、それがお慈悲でござりまする。

〽立派に言ふも涙聲、泣くよりも猶哀れなり。（ト淺岡涙を隱しよろしく思入）

小十　すりや、如何やうに申しても、お執成しは下されぬか。

淺岡　なまじお目見得いたさせても、跡の別れが、いや、私よりはどうあつても、御不興受けし主殿が悴、お執成しは相成りませぬ。

小十　はて、是非もなき事どもぢやなあ。

〽手を拱きて歎息の、外に思案もあらざれば、（ト小十郎歎息の思入）

龜千　これ淺岡、そちが悴なら予が逢ひたい、早う爰へ呼んでくりやれ。

〽若君さかしく覺らせたまひ、（ト龜千代思入あつて、）

淺岡　あいや、御大切な御身にて、淺岡づれの悴などに輕々しうお逢ひの儀は、恐れ多うございますれば、御無用に遊ばしませ。

〽とのたまへば、

龜千　いゝや、苦しうない。小十郎、淺岡が悴を是れへ呼べ〳〵。

小十　はゝ有難き君の御諚、直樣これへ、召連れまするでございませう。（ト立ちかけるを留めて、）

淺岡　片倉樣、此の儀はどうぞ、御免なされて下さりませ。

龜千　いゝや淺岡、予が早く逢ひたいゆゑ呼ぶのぢや。片倉、早う。

小十　はゝ。（ト行き掛けるを、）

淺岡　それぢやと申して。（ト又留めるを、）

小十　淺岡どの、我が君の上意でござる。

〽支へる手先を振拂ひ、打ち悦んで片倉は、急いでお次へ走り行く。

ト小十郎淺岡の手先きを振拂ひ、思入あつて足早に花道へはひる。

淺岡　君へ仕へて此の年月、御奉公が大切ゆゑ我が子の事を思うては、忠義の道の妨げと、心で心を取直し、折角あきらめ居たものを、小十郎樣のお情や、我が君樣のお詞に、是非なく我が子に逢はねばならぬか。あゝ、義理は切ないものぢやなあ。

〽思案途方に暮れ居たる。（ト淺岡差俯向きゐる）

〽折柄一間押明けて、行儀正しく入り來る、千代松島の色替へぬ、操正しき相生の、一木は朽ちて哀れなる、小松の姿愛らしく、疊障りもしとやかに、遙か此方に手をつかへ、

ト花道より千代松、紋附袴一本差しにて出來り、花道よき所に住ふ。

〽一目見るより母親は、先立つ涙おし隱し物をも言はず控へ居る、若君遙に見たまひて、

龜千　そちや淺岡の悴よな、遠慮に及ばぬ、近う〳〵。

千代　はあゝ。

〽袴の襞も折目高、御前間近く進み寄り、（ト千代松舞臺に來り、淺岡の側に摺寄り）

母上樣、御機嫌よろしう。

〽言ふを打ち消し、

淺岡　あゝこれ、失禮な、どうしたものぢや。我が君樣の御機嫌を、伺ひもせで母とは何事、ちと嗜まぬかいなう。

〽叱られて御前に向ひ、

千代　我が君樣、御機嫌よろしう。

鶴千　おゝ、よう參つた。もそつと近う進め〳〵。

〽お詞あれど母の側、離れがたなく見えにけり。

ト淺岡もそつとお側へ行けと仕方にて敎へる、千代松頭を振つて居る。

淺岡　是れはしたり、そなたはわしが緣切つて此の江戶へ參りしからは、もう親子ではない程に、母樣など、いふことは、微塵も言つてたもんなや。

〽心で詫びて言ひ聞す、母の心を汲み兼ねて、千代松はしく〳〵泣き、(ト千代松泣ながら)

千代　え、情ない母上さま、片倉の伯父樣をお賴み申して遙々と、百里に餘るお國から、お目に掛るを樂しみに參りましたに、よう來たとも、おつしやつては下されず、

〽逢ふと直に其のお叱り、親子でないとはおうらめしい、

あなたが左樣におつしやると、親のない子になりまする、どうぞお慈悲に我が悴、よう來たとのお詞を、

〽お掛けなされて下されと、あやも涙に暮れ居たる。（ト千代松淺岡に縋り泣く、）

〽聞く母親はあるにもあられず、せきくる涙呑み込むを、若君心を察しやり、

鶴千　これ、其方の名は何と申すぞ。

千代　はい、千代松と申しまする。

鶴千　おゝ、千代松とは、予の鶴千代貰うたやうでよい名ぢやな。

淺岡　ても輕々しい其御上意、それでは君の御威光が、落ちますると申すもの。

鶴千　いや〳〵、此千代松も予の家來ぢやないか、其家來には情を掛けて遣はさねば、國の政事が出來ぬものぢやと、常々そちがいふではないか。

淺岡　さあ、それは。

鶴千　それゆゑ予が千代松を、いたはつて遣はすを、威光が落ちるなんぞとは。

〽常の敎へが嘘になり、予が心を惑はすかと、理の當然に淺岡は、返す詞のあらざれば、幼心に千代松も、有難涙に咽せかへり、

千代　有難い其のお詞、君のお爲めになる事なら、私は命も入りませぬ、是れから末はお側に居て、君へ忠義が、盡したうござりまする。

〽誰が敎へねど子心に、君を慕ふ顏をぢつと見詰めて母親は、猛き心も弱り果て、其儘我が子を引き寄せて、（ト淺岡悴へかゝれ、千代松を引き寄せて、）

淺岡　よう言うた出來しやつた、出來しやつたなあ。親はなくとも片倉樣の敎を守り人と成り、敵ない御最期遂げられし父主殿さまに劣らぬやう、忠義を盡さにやならぬぞよ。幼けれども侍の子ぢや、今此の淺岡が言ふことを、よう聞きや。（ト床のめりやすに横笛をあしらひ、）今此のお館には惡人蔓り、先殿樣綱宗公、袖ヶ崎のお屋敷へ御蟄居同樣御隱居させ、御分家たる兵部樣の御子息を以て、五十四郡の御跡目に立てんとの企てなし、我が君樣を失ひ奉らんと、或は毒害、忍びを入れ、そら怖しい巧み事、少しも油斷ならざる時節、女ながらも此の淺岡、松前殿と心を合せお側に附添ひ片時も、心を許した事もなく夜の目も寐られぬ御奉公、又祖父樣たる伊達安藝樣、其の惡人を罪に伏させお家の安泰計らんと、御老年にて遙々と江戸表へ御出府なされ、將軍家へ願ひ出て、去年この方今日までに幾度となく御吟味受け、此の二三日が大切な、お家の安危の境ゆゑ、孫が慕うて來たなど、お耳に入らばお心たゆみ、若し對決に後れをお取りなされなば、五十四

郡の一家中望を失ふのみならず、御領分の人民が惡人共の政事をうけ、塗炭の苦しみなすは必定、幼けれども其方も、忠義を思ふ心なら、爰の道理を汲分けて此の儘お國へ歸つてたも、お家の安泰見し上にて、母とも名乘らう子とも呼ばう、たゞそれまでの辛抱を、ちつとの間ぢや、ぢつと怺へてたもいなう。

〽言ひ聞かすれば、聞き分けて、

千代　事を分けたる其のお詞、如何にも合點が行きました、忠義ゆゑなら祖父樣に、逢はいでも大事ござりませぬ、其の替りお家が治まり、忠義をしてしまうたら、母上ぢやと、お名乘りなされて私を可愛がつて下さりませ。

〽幼心に辨への、ある程母はあられぬ思ひ。

淺岡　おゝ賢い子ぢや、よう聞き分けてたもつたなう、追着けわしの手許へ呼び寄せ、可愛がつてやる程に、少しも早く御殿を下りや。

千代　あい。（ト泣いて居るゆゑ、）

淺岡　是れはしたり、泣いて居ては果しがない、えゝ侍の子のやうにもない、未練者ではあるぞいなう。

〈褒むるを叱る心根は、五臟をしぼる思ひにて、齒を喰ひしばり怺ゆる切なさ、若君涙を催したまひ、

龜千　これ淺岡、千代松は予が側へ、置くことはならぬかや。

淺岡　子ゆゑに迷つて淺岡が、君へ忠義が怠つては、世になき夫に濟みませぬ。

龜千　それならどうでも、國へ歸さにやならぬかや。

淺岡　側に置きたいは山々、いや、置くことならぬお家の掟。これ千代松、きり〱と行かぬかいなう。

千代　あい、參りまするでござります。〈ト立ち兼れて泣き居る〉

龜千　そんなら千代松、もう行きやるか。

千代　我が君樣、御機嫌よろしう。〈ト是非なく立ちかゝるを〉

龜千　千代松、待て。

千代　はあ。

龜千　予はそちを、去しともないわいやい。

千代　私もいつまでも、御前樣のお側に居たうござります。

龜千　おゝ、予も置きたい。これ淺岡、いつまでも千代松を。
千代　爰へ置いて下さりませ。
龜千　これ、此の通り、
兩人　拜むわいなう。

〽拜むわいのと主從が、右と左りに取り附いて、松にしがらむ蔦かづら、ほぐれがたなき其の風情、男勝りの淺岡も、鐵石ならねば恩愛に、胸も張裂く思ひにて、歎きに時をうつしけり。

ト龜千代千代松淺岡に取附き泣く、淺岡悲歎の思入、此の時下手の襖を明け、小十郎窺ひ居て、

〽始終聞き居る小十郎、斯くては果てじと一間を立出で、（ト小十郎出來り、）

小十　御前邊の首尾、逐一お次に於て承知いたした。臣下をいたはる君の御仁惠、まつた主君を慕ふ彼が振舞、何れも劣らぬ仁義忠孝、感心なして小十郎、思はず涙に暮れてござる。
淺岡　小十郎樣、御推量なされて下さりませ。
小十　養ひ君と現在の我子の賢き此の體を、見られたならば此のまゝに、手放し兼ねることならんが、忠義故に氣強くも、はる〴〵參りし此の少年見捨てゝ國へ返さるゝ心の内はいかばかり、その歎

きを思ひやり、實に人事とは存じ申さぬ。

〽さすがに猛き武夫も、恩と義心を思ひやり、悲歎に暮れて居たりけり、淺岡は顔を上げ、

ト小十郎悲歎の思入、淺岡涙を拂ひて、

淺岡　此の上のお慈悲には、この淺岡が心の内、どのやうにござりませう。どうぞ此のまゝ千代松をお連れなされて下さりませ。

小十　おゝ、如何にも歎きに果しなき故、同道いたし退出なさん。これ千代松、お目見得相濟む上からは、拙者も共に退出なさん。

千代　はツ。（ト龜千代に向ひ、）左樣なれば我が君樣、もうお暇いたしまする。

龜千　これ千代松、假令國へ歸るとも、暇乞にま一度出や。

千代　有難う存じまする。

小十　是れほどまでに主従の、親しみ合ふも三世の奇縁。

淺岡　親子は一世といひながら、

小十　夫婦は二世の夫に別れ、

淺岡　便りに思ふ我子さへ、

小十　國をへだつる悲しみは、
淺岡　燒野のきゞす、
小十　夜の鶴、
淺岡　子を思はぬはなきものを。
小十　果敢なき親子の、
兩人　身の上ぢやなあ。
　　〽又も涙にくれけるが、（ト兩人愁ひの思入。）〽小十郎泣く眼を拂ひ、
小十　いつまで言うても詮なきこと、然らば共々退出なさん。我君には、益〻御健勝にて、御成長を祈りまする。淺岡どの、此の上とも御前の儀を。
淺岡　其の儀は必ず、御安堵下されませう。
龜千　二人とも、もう行くか。
小十　はツ、お暇仕りまする。
龜千　名殘りが惜しいぞ。
小十　はゝ、恐入り奉る。

〽あくまで敏き我君の仰せに力なく〳〵も、會釋をなして立上れど、心は跡に引かされて千代松は歩み兼ね、一足行ては振返り、又立戻るを片倉が心を鬼におしへだて、見返り見送る親子の別れ、母は絶え入る憂き思ひ、中に片倉是非なくも、泣く千代松の手を取りて、涙ながらに出て行く。

ト小十郎、千代松兩人に會釋なし立上る、千代松花道まで行き、又立戻るを小十郎おしへだて、別れを惜しむことよろしくあつて、千代松の手を取り、花道へはひる。

〽跡に若君千代松に、別れを惜しみ淺岡の、袖に縋りて御聲曇らせ。

龜千 これ乳母、今度千代松が參つたら、汝が余を可愛がつてくれるやうに、あの千代松も可愛がつてやりやや。

〽君の仰せに淺岡は、

淺岡 我君樣、御免遊ばせ。

〽こら〳〵し溜涙、一度にわつと取亂し、此の淺岡や爺樣に、たゞ逢ひたい一心に、百里にあまるお國から、はる〴〵尋ねて來たものを、やさしい言葉をかけもせず、叱つて返す此の母が、心の内はどうあらう。泣くより切ないものな

るぞ。

〽泣く蟬よりもなか〳〵に、鳴かぬ螢が身を焦がす、お家のお爲め思はぬならば一人子を手放して何のやらう、奉公の身のあさましやと、

必らず母を、怨んでばしたもんなや。

〽今別れても此後に、逢はれぬことのなきにもあらず、お家の治まりくれ〴〵も、祈る神樣佛樣、心願納受まし〳〵て君の御身二つには、我子の武運長久を、

〽守らせたまへと伏しをがみ、歎きの數をかぞへたて、前後不覺に泣き居たる。（ト淺岡よろしくあつて泣伏す。）〽折からこゝへ局達、打ち連れて出來り、

トばた〳〵になり、以前の澤田、吳竹、錦木、松島出來り」

澤田　淺岡樣、

皆々　一大事でござりまする。

淺岡　なに、一大事とは。（ト早めて合方になり、）

吳竹
澤田　先程お指圖により、汐澤丹三郎へ御膳番申附け、お毒味いたさせし所、見る間に顏も蒼ざめて、

語音の調子狂ひしは、心得ずと思ふうち、

呉竹　御別條はござりませぬ、お毒味いたしてござりますると、申す舌もかわかぬ内、早血を吐いてたッての苦しみ。

淺岡　して〳〵未だ存命なるか、又はお果てなされしか。

錦木　今日のお毒味をいたせし故に相果つるは、我君樣の御身替り、さりながら跡に殘りし一人の母は、何も存ぜぬものなれば、

松島　一命お助け下さるやう、今際の際の一つの願ひと、言ふを此の世の名殘りにて、御膳所におき果敢なくも、

四人　相果てましてござりまする。

淺岡　さては惡事に荷擔なりしか、ても怖しい巧みぢやなあ。

澤田　仕込みし毒の顯はれしも、鹽竈さまの加護なるか。

呉竹　追々惡人滅ぶれば、今にお家は萬代不易、こりや斯うなうてはならぬ筈ぢやて。

錦木　日頃から忠義と思ひし汐澤どのも、斯くの仕儀、

松島　油斷のならぬ此有樣、

澤田　斯くまで巧みし事なれば、何れいづくに曲者が、忍び居らんも計られず、

松島　引ツ括ツて吟味を遂けん。

澤田　それ、何れも方、

皆々　心得ました。（と立ち上るを、）

淺岡　あゝこれ、（と制するを木の頭。）竊に／＼。

ト淺岡は若君を守護し、皆々は息込む思入、淺岡眞中に双方へこなし、早舞にてよろしく、

幕

（返し、通用門の場）――本舞臺眞中より上手へ二間常足の二重門番所、向う兩褄簾を掛けし門の窓、上下白壁、屋體の隅膝隱しの衝立、上手一間中窓板羽目、眞中より下へ白木の門の裏を見せ、潛り門扉開き出這入り、此門より下手白壁の塀にて見切り、總て通用門の體。二重の前へ筵を敷き〇菖蒲革の袴足輕裝にて、打盤にて藁を打ち居る、傍に△□同じく菖蒲革の袴一本ざし、足輕裝にて立ち掛り居る、此の見得合方、時廻りの聲にて幕明く。

△　これ杢助、けふは二人とも非番ゆゑ、前町へ行つて湯へはひり、

□　一杯やつて來る氣だが、こなたも一緒に行かつしやらぬか。

〇　酒と聞いては目がないが、相役の木戸嘉兵衛が、今お目附まで行つたから、歸つて來ねえ其内は

御門を明けては行かれねえ。

△ こなたが一緒に行く氣なら、嘉兵衛どのゝ歸るまで、

□ 一服呑んで待つて居よう。

○ 御日附へ行つたのだから、直に歸るに違ひない、さうして前町へ行くといふは、盛切酒屋か何處へ行くのだ。

△ 貴樣は行つたか知らねえが、今度露月町の四ツ角へ山かけ豆腐の見世が出來たが、直が安くつて滅法うまい。

□ それに又他から見ると、酒がよくつて一合で、猪口に二杯はきつと多い。

○ まだ話しにも聞かねえから、行つた事は猶ないが、何にしろ一合で猪口に二杯多くつては、一年中では大きなことだ。

△ 酒呑み程世の中に、根性の汚ねえ者はねえ、猪口に一杯でも多い方へ、つい呑みに行く氣になるて。

□ あれで家に別品の娘でもありやア猶いゝが、いや、娘といへば嘉兵衛どのゝ娘は家へ歸つたかな。

○ なかく歸る所ではない、どういふ事か原田樣で、お梅をお頼みなされてから、少しもお歸しな

△されないが、常はお堅いお方でも思案の外でこつそりと、お手が附いたに違ひない。
□器量はいゝが門番の娘位に手を附けて、妾になさるなどゝいふ、そんな原田様ではない。
○噂を聞けばお料理方の汐澤どのと夫婦になる、固めがあつたといふ話し、何か仔細のある事だらう。
△それに附いてもお國から、伊達安藝様が御出府なされ、原田様の箇條を言ひ立て、上へ御出訴なされたので、一方ならぬお家の騒動。
□家中も今では二別れに、原田様に附く人は、伊達安藝様を惡く言ひ、
○又安藝様に附く人は、甲斐様を惡くいひ、どちらがいゝか上からは、さつぱり見えぬ人心。
何でもいゝから我々は、早く穏かにしたいものだ。
ト合方になり、藁を叩き二人は煙草を呑み居る、此内花道より、嘉兵衛小倉の袴一本ざし、門番のこしらへにて出來り、花道にて、
嘉兵　今の廻りはもう七つか、日は長い頂上だが、用が多いで内職も、けふは草鞋がたつた二足、是れでは鰯も買はれない、是れから歸つて暮れるまで、もう一仕事せねばならぬ、（ト合方にて平舞臺へ來り、）杢兵衛どの、今歸りました。

○　おゝ嘉兵衞どのか、大分遲うござつたな。

嘉兵　御目附樣から原田樣は、僅か四五軒先ゆゑに、ちよつとお臺所へ立寄つて、娘の樣子を聞いて來ました。

○　久しく話しも聞かないが、替ることもござらぬかな。

嘉兵　女中衆に聞きましたが、時候も惡いに負けもせず、替ることもないといふゆゑ、先づ安堵して歸りました。

△　嘉兵衞どのゝ祕藏娘お梅どのは、原田さまへ引揚げきりになつた上、

□　又お內儀のお豐どのは、以前勤めた緣により、伊達安藝樣の庖仕役、

△　嘸まあこなたは一人殘り、

□　朝夕困ることだらう。

嘉兵　お前方のいふ通り、どちらか一人居てくれると、左のみ困りもしませぬが、三度の飯も手ごしらへ、油揚一つ燒いて喰ふも、面倒ゆゑに此頃は、明けても暮れても煮豆ばかり、こんな難儀な事はない。

△　これといふのも、お家の騷動。

□　早く穩にしたいものだ。
○　時に嘉兵衞どの、今二人の衆に誘はれて、山かけ豆腐へ呑みに行くが、ちつとの內賴みます。
嘉兵　おゝ、ゆつくり行つて來るがよい、然し今夜は貴樣の番、づぶ六醉つてはおれが迷惑、たんと呑んで下さるな。
○　たんと呑めと言つたとて、盛切酒の切合ひ勘定、二合より餘計に呑めはしない。
△　そこはわし等二人が請合ひ、決してづぶ六にしはしない。
□　必ず氣遣ひさつしやるな。
嘉兵　さういふ事ならこれ杢兵衞、早く行つて來るがよい。
○　若し部屋頭が尋ねたら、誰ぞ呼びに寄越して下せえ。
嘉兵　おい〳〵、承知だ。
△□　それぢやあ杢兵衞、
○　どれ、一緒に行かうか。(ト合方にて○△□門の潜りへはひる。跡に嘉兵衞思入あつて、)
嘉兵　今原田樣のお臺所で、女中衆に尋ねたが、お梅も無事で居るといふゆゑ、先づ安心はして居れど、いつぞや女房が原田樣へお梅を迎ひに行つた時、お賴みなされた毒の事、一大事ゆゑ夫婦の外誰

にも今日まで言はないが、其のお頼みを叶へねば娘は當座の人質に、内へ返して下されず、こんな困つた事はない、原田様でおつしやる通り、伊達安藝様が御家のお爲めに、まことならぬお人なら、殺害しまいものでもないが、御家中内も二別れ、どちらが善いか悪いやら、高の知れたる門番ゆゑ、まことの事が知れぬので、どうしてよいか思案に餘り、夜るもろく〳〵寐られぬは、思へば因果な事だなあ。

ト嘉兵衛思入、やはり合方にて、花道より今村善太夫渡邊金兵衛羽織袴大小にて出來り、花道にて、

善太　渡邊氏御覧なされい、幸ひ嘉兵衛たゞ一人、門番所に居ります。

金兵　あれへ參つて兩人で、辯をふるつて說き附けなば、元より正直一途な者ゆゑ、

善太　實と思ふは疑ひなし、

金兵　首尾よく遣りたいものでござる。（ト兩人平舞臺へ來り、）

善太　こりや嘉兵衛、今日は其方當番か。

嘉兵　これは〳〵、今村さまに渡邊さま、久しくお目に掛りませぬ。

善太　此間より風邪氣で、久しく外出いたさなんだ。

金兵　何も替る事はないか。

嘉兵　毎度お尋ね下さりまして有難うございます、產れ附いて達者ゆゑ、風邪を一ツ引きませず、無事に勤めて居ります。

善太　それは何よりよいことだ。

嘉兵　先づ是れへお掛けなされませ。

兩人　然らば許しやれ。（と合方になり、兩人二重へ腰を掛ける、嘉兵衞は莚の上に住ふ）

善太　娘お梅が先達より、原田氏へ小間使に參り居る上又候や、女房お豐が伊達安藝殿へ、借りられしとやら申す事。

金兵　女房娘兩人も、宅に居らねば嘉兵衞にも、嘸不自由な事であらう。

嘉兵　あなた方と違ひまして、住居と申すも御門に續いて、僅二疊か三疊ゆゑ、掃除に手間も掛りませねば、どうなり斯うなり一人にて間に合しては居りますが、三度の食の菜ごしらへ、是れにはまことに困ります。

善太　原田氏は萬端に心をお用るなさるゆゑ、そちが困るをお察し下され、妻子が宅に居らざれば、思ふに任せぬ事のみならん。

金兵　三度の食も菜などは、拵へることがなるまいから、何ぞ口に合うたものを、料理屋から取寄せて、

善太　體の肥料をするがよいと、親身の如くそちをいたはり。
金兵　則ち料理代として金子十兩、原田氏より下されしぞ。
嘉兵　有難くお受けいたすがよい。（ト善太夫懐より水引を掛けし十兩包を出し、嘉兵衛の前へ出す、）
善太　すりや女房や娘が居らず、三度の菜にも困るであらうと、是れを私へ下さりますとか。
金兵　如何にもそちが不自由を、お察しあつて原田氏より、此の金子を惠まれしぞ。
善太　大身などゝいふものは、人の難儀を知らぬものだが、それを早くも御存じにて、
金兵　斯くまで下を哀れまるゝは、
嘉兵　なんと情深いお方でないか。（ト嘉兵衛嬉しき思入にて、）
善太　いやも、お情深いと申しませうか、お慈悲深いと申しませうか、こんなお方はござりませぬ。
金兵　定めて女房のお豐をば、庖仕にお遣ひなさるからは、
嘉兵　安藝殿よりも其方へ、お心附があつたであらうな。
善太　いえ〳〵、今日まで安藝樣より、十兩はおろか一分一ツ、お貰ひ申しはいたしませぬ。
金兵　すりや、安藝殿より其方へ、
善太　何の心附もあらざるとか。

嘉兵　へい、お心附けはござりませぬ。（ト是れを聞き思入あつて、）
善太　さういふ無慈悲な料簡ゆゑ、表に忠義を見せかけて、
金兵　お家を騷がす憎き伊達安藝。
嘉兵　え、何とおつしやります。（ト替つた合方になり、）
善太　御分家様の若殿を、御家の跡目に立てんとて、原田氏が一味を語ひ、謀叛の企てあるなどと、跡方もなき事を言ひ立て、上へ願ひ出しゆゑ、諸家中共に一同難儀。
金兵　これといふも安藝殿が、原田氏が執權職に登庸されしを遺恨に思ひ、龜千代君を毒殺の企てなせしと謀書を拵へ、罪に落さん計略も、
善太　老人といひ安藝殿は、見掛けが柔和溫順ゆゑ、我れ人共に叛逆の企てありとは思ひも寄らず。
金兵　されば忠義一途なる、原田氏を疑ひて、兎や角申す者多く、まことに氣の毒千萬でござる。
嘉兵　どちらがどうか私共には、深いことは分りませぬが、不斷足輕中間などをお惠み下さる原田様、お慈悲深いお心に、そんな事はござりますまい。
善太　無いのは元より知れた事、されども此度安藝殿より出訴されたる上からは、假令一命捨つるとも、惡人共を言ひ伏せて、江戶國ともに穩に、中間小者に至るまで、心を安くさせたいと、日夜心配

召さるゝ甲斐殿。

金兵 其の御苦心が通じてか四十八館の衆とても、過半は忠義を思はれて原田氏へ隨身なれど、名に負ふ古老の安藝殿ゆゑ、權に恐れて誰一人、是非を論ずる者はなし。

嘉兵 承はれば御國から、又候此度片倉樣が御出府なされてござりまするが、安藝樣方でござりまするか。

善太 如何にも、豫て同意ゆゑ、伊達安藝殿へ力を添へ、原田氏を叛逆の罪に落さん所存ゆゑ、既に今朝甲斐殿には、一命捨るは元よりしてお家のお爲めに惜しからねど、恐れ多くも御先祖たる正宗公より連綿と、榮えし御家の興廢ゆゑ、死すとも冥土へ行かれぬと、男泣きに泣かれたる、心中察してわれ〳〵も、共に落涙いたしたり。

金兵 これといふのも安藝殿が、數代の恩を忘却なし、お家を奪はん企てをなしたるゆゑに忠臣の、原田氏の一命にも、拘はる事に至りたり。

善太 これ皆滅する時節ゆゑ、是非なき事とは言ひながら、

金兵 御家の興廢計り難し、まことに殘念、

兩人 至極でござる。（ト兩人ちつと思入、嘉兵衞これを實と思ふこなしあつて）

嘉兵　左樣なれば伊達安藝樣と、片倉樣が心を合せ、お家を奪ふ巧みとか。ても恐しいお二人樣。どうか原田樣に御別條なく、お家が無事に納ります。よい御工夫はござりませぬか。

善太　む、、無事に納まる、

金兵　工夫があるぞ。

嘉兵　へゝえ、御工夫がござりまするか。

善太　先達ても申す如く、謀叛人の棟梁たる安藝を毒害いたしなば、一味徒黨の者どもは、賴む柱があらざれば、何人なりとも悔悟なし、改心なすは必定なり、此の密計を賴むのは、熹兵衞其方一人なるぞ。

金兵　妻なるお豐に言ひ含め、膳部の内へ毒を仕込み、安藝を害してくれまいか、事首尾よく成る上は、娘お梅を宿へ返し、そちは甲斐殿取立で、直に知行は五百石。

善太　是れ皆お家のお爲めにて、此の上もない忠義ゆゑ、

金兵　安藝を毒害いたしてくりやれ。（ト兩人思入よろしく、）

嘉兵　五百石のお取立ては、有難うござりますが、貧乏暮しに育つた私、知行に望みはござりませぬが、お家のお爲めにする事なら、假令命を捨てましても。

善太　すりや賴まれて。

金兵　くれるとか。

嘉兵　數なりませぬ門番ながら、お主へ忠義になりますなら、お賴まれ申しませう。

善太　お〻出來した嘉兵衞、そこへ心が附いたらば、女房お豐に言ひ附けて、

金兵　今夜の内に食物へ、仕込んで毒殺いたしてくりやれ。

嘉兵　畏りましてござりまする。

善太　成程そちは忠義な者ぢや、僅か五兩に三人扶持の、足輕の身でありながら、君のお爲めに一命を捨つる心になる中に、

金兵　名に負ふ涌谷の館持にて、何不自由なき元老が、慾に迷つて謀叛を企て、一家中はいふに及ばず民百姓に至るまで、

善太　今日路頭に迷ふやうな、巧みをなすは、

金兵　不屈至極。

嘉兵　さういふ巧みのあるお方と、今日の今まで存じませぬが、人は見掛けに寄らぬもの。

善太　此後何やう安藝殿が、申さうとても僞りゆゑ、

金兵　必ずまことゝ思はずに、眉毛を濡らして化されるな。
嘉兵　いえ、決して化されはいたしませぬ。
善太　承知の上はお豐を早く、
金兵　是れへ呼び寄せ、言ひ附けくりやれ。
嘉兵　幸ひお豐は前町へ買物に參りましたれば、歸りを爰で待受けて、とつくり申し附けませう。
善太　是れで我々兩人も、まことに以て安心いたした。
金兵　また〳〵後刻參るであらう。（ト兩人立上り、下手へ來る）
嘉兵　左樣なればお二人樣。（ト兩人顏見合せ）
善太　まんまと首尾よく、
嘉兵　え、
善太　いや、首尾よき返事を、
兩人　相待ち居るぞ。（ト唄になり、兩人旨くいつたといふ思入あつて、花道へはひる。嘉兵衛思入あつて）
嘉兵　さて〳〵油斷のならぬ世界、けふの今まで伊達安藝樣は、忠義一途なお方と思ひ、昔の御緣で女房を朝夕庵仕のお世話に上げるが、今々思へば止せばよかつた、お家を橫領仕ようといふそんな

心のお方なら、何でおれが不自由して、女房を上げて置くものか、是れといふも安藝様に、おれが化されて居たゆゑだ、これから人に附合ふにも、眉毛へ唾を附けねばならぬ。

ト嘉兵衛思入、此の以前門の潜りよりお豐やつし裝世話女房のこしらへ、小さな風呂敷包みと挽茶を入れし茶袋を提げ出て、

お豐　こちの人、お前何を言はしやんすのぢや。

嘉兵　や、女房か待つて居た。

お豐　何ぞ用でもござんすかえ。

嘉兵　おゝ、そなたに限る用がある。

お豐　その用と言はしやんすのは、旦那様へわたしに毒を。

嘉兵　あ、これ、（ト四邊へ思入、替つた合方になり、）どうしてそれを知つて居るぞ。

お豐　今前町へ旦那様がお樂しみに召上る挽茶を買ひに行つた歸り、何やら眞のお話しゆゑ、聞くともなしに御門へ立ち、最前からの此場の樣子、殘らずわたしや聞きましたわいな。

嘉兵　聞いたとあれば改めて、おれが言ふにも及ばない、そでない事と思ふであらうが、お家の爲めには代られぬ、そなたが今宵旦那様へ、…毒を上げてはくれまいか。

お豐　先達ても其事は原田樣からお頼みなれど、どうもわたしや實とは、思はれぬゆゑ今日までも、其儘にして置きましたが、今お二人の言うたのが、あれがまことでありませうか。

嘉兵　まことであらうと思ふのは、こんな事のない先きから、原田樣には下々を、よく目を掛けて下すつた、お慈悲深い旦那樣、取り分け娘が行つてから、何やかやお惠み下され、そなたの着物おれが着物、みんなお貰ひ申した品、その上今も此の十兩好きな物でも喰へというて下さいました御親切、物を貰うて言ふではないが、どうもおれは原田樣が惡い人とは思はれねば、お家のお爲めになる事ゆゑ、忠義を思はゞ遣つてくりやれ。

お豐　原田樣から此のやうに何やかや下さりますも、それが巧みの手段やら、上から知れぬ人心、迂濶な事はならぬわいな。

嘉兵　それではおぬしは實と思はず、おれが頼みを聞かぬ氣か。

お豐　どうも是れは聞かれませぬわいな。（ト嘉兵衞思入あつて、）

嘉兵　そなたが聞いてくれぬからは、今約束したお二人へ、何とおれが言はれうぞ、高の知れたる門番でも、帶刀なせば武士の端、命を捨てねばならぬわい。

お豐　え、そんならお前は言譯に、命を捨てると言はしやんすか。

嘉兵　おれが死んだと聞いたらば、娘のお梅も生きては居まい、亭主や娘を見殺しにするもそなたの心一つ、お主の御爲めになる事を、聞かれぬならば用はない、早くお小屋へ歸るがよい。

お豐　歸れと言はしやんしても、夫が命を捨てるのを、どうまあ見捨てゝ行かれませうぞ。

嘉兵　そんなら頼みを、聞いてくれるか。

お豐　さあ、それは、

嘉兵　但しは亭主を殺す氣か。

お豐　さあ、

嘉兵　頼みを聞くか。

お豐　さあ、

嘉兵　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

嘉兵　お主へ忠義となる事ゆゑ、おれが頼みを聞いてくりやれ。（トきつと言ふ、お豐ぢつと思入あつて）

お豐　さういふ事なら、頼まれませう。

嘉兵　そんならいよ〳〵、聞いてくれるか。

お豐　お主へ忠義とあるゆゑに、お前の賴みを聞きませうわいな。(ト お豐泣く)

嘉兵　おゝ忝けないく、どうぞ首尾よく遣つてくれ、さうさへすれば穩に、お家も無事に納ることぢや。

お豐　お前の賴みを聞くからは、いつぞや預けた毒藥を、

嘉兵　大事な品ゆゑしまつて置いた。(ト上手屋體へはひる、跡にお豐投首をなし、ほつと思入、嘉兵衞毒藥の包みを持ち出來り)それでは、慥に渡したぞ。

お豐　もうお歸りに間もなければ、納戶で仕込む支度をしませう。

嘉兵　今にも安藝樣がお歸りなされ、假令何とおつしやるとも、皆僞りゆゑ眉毛を濡らし、必ず實と思ふなよ、若し又そなたが化されて、大事を漏らす其時は、申譯におれは死ぬぞよ。

お豐　いえく お前に命をば、捨てさせはせぬ程に、必ず案じて下さんすな。

嘉兵　おゝ、そなたの便りを待つて居よう。

お豐　そんならこちの人、

嘉兵　女房ども、(ト お豐立上り、思入あつて)

お豐　是れが別れに、

嘉兵　え、

お豐　さあ、旦那樣には、今宵がお別れ。

嘉兵　必ず首尾よく、

お豐　合點ぢやわいな。（と唄になり、お豐是非なき思入にて、投首をなし花道へはひろ。嘉兵衞跡を見送り、）

嘉兵　お豐が請合ひ行つたからは、今夜か遲くも明日までに、毒を用ゐて殺してしまへば、それでお家も安泰に、枕を高く寐られるのみか、可愛い娘は家へ歸り、褒美に貰ふは五百石、早く明日にしたいものだ。

ト思入、合方になり、門の潛りより前幕の安藝、上下大小にて出來り、跡より甚五兵衞六左衞門、同じく上下大小、續いて羽織袴大小の若黨、紺の看板の中間出來る。嘉兵衞は是れを知らず、手眞似をなし居る。

安藝　嘉兵衞、何をいたして居るのだ。（ト嘉兵衞びつくりして、）

嘉兵　や、これは伊達安藝樣でござりますか。（ト今の獨言を聞かれはせぬかといふ思入、）

安藝　此間より其方に、ろく〳〵禮もまだ言はぬが、お豐を每日我が方へ食事の世話に引留め置き、嘸一人で困るであらう。

嘉兵　いえ、左のみ困りもいたしませぬ。（ト言ひながら眉毛へ唾を附ける。）

安藝　困らぬ事もあるまいが、以前の緣に夫婦とも、厚く世話をいたしくれるは、まことに以て忝けない。

嘉兵　其のやうなことをおつしやいましても。（トやはり眉毛へ唾を附ける。）

甚五　涌谷どの、仰せの如く、足輕内にも嘉兵衛位、正直正路の者はない。

嘉兵　お前樣まで同じやうに。（ト唾を附ける。）

六左　人に追從輕薄なく、是れがまことの人といふのぢや。

嘉兵　まだ、そんなことをおつしやりますか。（ト眉へ唾を附ける。）

安藝　惡人共は今に滅び、泰平諷ふ其の時は、そちは身共が取り立て〻、侍分にして遣るぞ。

嘉兵　いえ、有難うはござりますが、最早こちらに五百石。

安藝　や、何と申す。

嘉兵　いえさ、五百々々五百羅漢本堂建立、（ト言譯に困り、うろ〳〵する。此時以前の金包を落す。）

安藝　何かそちはそは〳〵と、心に掛る事でもあるか、合點の行かぬ詞の端。

甚五　斯ういふ時にうか〳〵すると、

六左　狐狸に化されるぞ。

嘉兵　滅多に化されてなりますものか。（ト眉毛へ又唾をぬる、此時甚五兵衞落ちてある金包みを取上げ、）

甚五　こりや嘉兵衞、此の金子は其方のか。

嘉兵　へい、私のでござります。

甚五　水引を掛け、折熨斗が附いて居るは貰ひし品、何れよりの到來なるぞ。

嘉兵　へい、其の金子は、

甚五　金十兩と記しあるは、御門番の其方へ近頃過當の賜りもの。

六左　誰からそれを貰ひしか、包みに姓名あらざれば、隱さずに其名を申せ。

嘉兵　その名はめつたに申されませぬ。

甚五　假令先きは誰にもせよ、何か賜はる譯あつてそちへ送りし金子ならん、不正な事にあらざれば、決して取上げはいたさぬから、心を置かずと其名を申せ。

嘉兵　取上げぬとおつしやつても、其名を言つたらどうだか知れぬ、滅多に油斷はなりませぬ。

　　ト唾を附ける。

安藝　當家中にて其方へ、十兩といふ金子をば、遣はす者は誰なるか。（ト安藝ちよつと考へる思入あつて、）

む〻。正しく是れは、原田甲斐ぢやな。（ト嘉兵衛びつくりして、）
嘉兵　え、そりやこそ狐を遣はれるわえ。
甚五　なに、狐を遣ふと、
兩人　申すのは。
嘉兵　包みに何とも記してないのに、此の金子をくれた者は、原田樣とおつしやるゆゑ。
甚五〱さては元老がお察し通り、
六左　原田が送りし金子なるか。
嘉兵　此の名をお當てなさるのは、狐の術でござりませう、うつかりすると化されます。
　　ト又眉毛をしめす、是れに構はず安藝思入あつて、
安藝　斯く金子にて人を懷け、味方を語らふ奸賊共、たゞ不便なは是れなる嘉兵衛、やがて其身を失ふも、知らで一時の慾に迷ひ、甲斐が富婁那の辯舌に、うか〳〵と化され居つたと見える。
　　ト嘉兵衛眉毛を濡らし、
嘉兵　いえ、私は此のやうに、眉毛を濡らして居りますれば、決して化されはいたしませぬ。
甚五　して、嘉兵衛が貰ひし、此の金子は。

六左　如何取計ひませう。
安藝　彼れが貰ひし金子なれば、其の儘返し遣はしめされ。
甚五　然し原田が贈りし金子、何ゆゑあつて貰ひしか、
六左　仔細を詮議仕りませうか。
安藝　いや〳〵、高の知れた門番、其の詮議には及び申さぬ。
嘉兵　然らば金子は返してくれるぞ。（ト金包を出す、）
甚五　是れで安心いたしました。（ト金包を戴き懐へ入れる。）
安藝　斯様なこともまだ外に、幾人となくあるであらう、はてさて奸智に長けた奴ぢや。
甚五　油斷のならぬ、
兩人　事でござる。
嘉兵　まことに油斷はなりませぬ。
安藝　こりや嘉兵衛、甲斐の狐に化されるな。
嘉兵　決して化されはいたしませぬ。（ト眉毛へ唾を附ける、）
安藝　はて、正直な者ぢやなあ。

ト唄になり、安藝嘉兵衞へ思入あつて、甚五兵衞六左衞門附添ひ花道へはひる、時の鐘床の淨瑠璃になる。

〽跡見送りて門番の、嘉兵衞はほうと息を吐き、（ト嘉兵衞跡を見送り、思入あつて、）

嘉兵　原田樣から貰つた十兩、取上げられると思うたゆゑ、心が顚倒してしまひ、何を言つたか覺えぬが、送つたことを言つたであらう、それに附けても安藝樣がお家を横領なす人とは、誰が見てもさうは見えぬ、是れだから化されるのだ、今日は思はぬお金をば、原田樣から貰うたゆゑ、もう內職をするにも及ばぬ、どれ、片附けてしまはうか。

〽造る草鞋も小判形、黃金色なる打藁を取り片附くる其折柄、息せき駈け來る若黨佐五平。

ト嘉兵衞以前の金包を出し、押戴いて內懷へ入れ、打臺と藁を片附ける、ばた／＼になり、花道より佐五平序幕の裝にて走り出で來り直に舞臺へ來て、

佐五　嘉兵衞どの、居さつしやるか。

嘉兵　おゝ、松前樣の佐五平どのか、何ぞわしに用でもあつてか。

佐五　今原田殿の庭先を用があつて通つた所、こなたの娘のお梅どのが、二階からわしを招き屆けてくれといふ仕方で、此文を簪へ結び附けて投げたから、直に拾つて上書を見れば御兩親樣と記して

あるゆゑ、ぐつと承知で持つて來た、慥にこなたへ渡しますぞ。

ト佐五平懷から簪に結び附けし文を出す、嘉兵衛取つて、

嘉兵 これは〳〵親切に、よく屆けて下すつた。(ト佐五平文へ思入あつて、)

佐五 や、今まで心附かなんだが、其の手紙は左り封じ、はて忌はしい事だな。

嘉兵 ほんに是れは左り封じ、どうしてこんな粗相をしたか。

佐五 何ぞ案じる事ではないか、早く中を見さつしやい。

嘉兵 どれ〳〵中を讀んで見ませう、

〽封じ目切つて繰り廣げ、端書讀んでびつくりなし、

「書置の事、」え、、、、。(ト泣き伏す。)

佐五 すりや其文は書置か、それでは左り封じの筈、道理で顏の色艶もたゞならないと思つたが、そんなら死ぬ氣であつたのか、どういふ譯か嘉兵衛どの、早く讀んで見さつしやい。

嘉兵 あまりの事でびつくりなし、何が書いてあることやら、滅茶苦茶で讀めぬわいの。

〽涙拭ひて繰返し、(ト嘉兵衛又書置を開き、床の合方になり、)

「今宵餘儀なき事ありて、死ぬる覺悟いたし候まゝ、此世の名殘りに涙ながら一筆書殘しまゐらせ候、

左候へば先達て母さま御出なされ候時、思ひ掛けなく原田さまのお取持にて私と女夫の杯なされ候御料理方の汐澤さま、脫れがたなき譯ありて原田樣の御謀叛へ一味なされ候て、龜千代樣の御膳部へ毒を仕込み候やう原田さまより御賴みに候へ共、御恩を受けしお主樣へ毒をお進め申す事そら恐しく心を改め、けふ御膳部の毒味をなし、我が入れ置きし其毒にて果敢ない最期を遂げまゐらせ候私事も母さまが伊達安藝樣へ毒害を、首尾よう成され候上は、命を取られ候ことゝ覺悟いたし候まゝ、一旦二世の約束せしゆゑ、汐澤さまの御跡慕ひ、今宵自害いたしまゐらせ候。」

〽半讀みさし書置を、嘉兵衛大地へ投げ附けて、

ト嘉兵衛此内よろしく思入あつて、書置を舞臺へ投げ附け、

そんなら娘と緣組んだ、汐澤どのが毒を呑み、果敢ない最期をしたゆゑに、冥土へ行つて添ふ心で共々自害を仕をつたのか、冥土で添ふか添はれぬか、それは知れぬが共々に、死んでそなたはよからうが、跡へ殘つた此親の、

〽歎きを思ひ居らぬかと、氣も半亂に取り亂し、悔し淚に咽せ入れば、

ト嘉兵衛足摺りをなして泣く、佐五平これを見て、

佐五　これ〳〵嘉兵衛どの、其歎きは尤もだが、跡に何が書いてあるか、殘らず讀んで見さつしやれ。

嘉兵　どんな事が此後に書いてあるかは知らないが、娘が死んだとあるからは、詮ない事ゆゑ讀まぬわい。

佐五　そなたが讀まずば其のあとを、おれが代りに讀んでやらう。

〽佐五平書置取り上げて、（ト佐五平書置を取り上げ見て、）

「跡々にての御歎きは左こそと存じ候へども、これも定まる約束事と御あきらめ下され候て、先だち死ぬる不孝の罪、お許し下され候やう願ひ上げ參らせ候、返す〴〵も原田さまは、御家を奪ふ惡人ゆゑ、如何なる事を申され候とも、皆僞りに候まゝ、必ず御油斷なされまじく候。」

嘉兵　なに、原田樣が惡人だと、其あとを見せて下せえ。（ト書置を取つて、）「返す〴〵も原田さまは、御家を奪ふ惡人ゆゑ。如何なる事を申され候とも、皆僞りに候まゝ必ず御油斷なされまじく候。」扨は最前のは嘘であつたか、成程油斷のならぬ世界だ。（ト又書置を見て、）「まだ〳〵申上げたき事は山々御座候へども、人目しげき其上に、涙に筆も捗らねば、あら〳〵書殘し參らせ候。」

〽文讀み終り、どうと坐し、（ト嘉兵衛よろしく書置を讀みじまひ、どうと下に居て、）

お、尤もだ〳〵、涙に筆もはかどらず、書盡されぬは尤もだ〳〵、人目の多い其中で、よく此位

書いてくれた、是れでおれの迷ひも晴れた。

佐五　何にもせよ、此趣きを、御主人樣へ申し上げん。

嘉兵　そんなら此方は、歸らつしやるか。

佐五　又出直して後に來ませう。

〽火急の知らせに佐五平は、とつかは長屋へ歸り行く。

トばた〳〵になり、佐五平思入あつて花道へ足早にはひる。嘉兵衞思入あつて、

〽跡に嘉兵衞は書置を、抱きしめて咽せび入り、（ト床の合方になり、）

嘉兵　便りに思ふ親に別れ、是れまで辛い思ひをして、原田樣の所に居たも、汐澤さまと末々は女夫になるを樂しみに、して居た事であらうのに、添ひたい夫が死んだと聞き、娘心の一途に迫り、

〽此世で添はれぬことならばと、死ぬる覺悟をしたであらうが、命を捨つるそれまでの、

そちが心の切なさは、どのやうな事であつたらう。

所詮取られる命なら、立派に死んだがまだしもまし、先立つ不孝を叱りはせぬ、母にはおれが悔まぬやう、とつくり言うて聞かすれば、迷はず冥土へ行つてくれ。

〽今更言うて返らぬが、せめて末期にたゞ一目、

娘の顔が見たかつた。

〽親が思へば子も思ひ、嘸や娘も兩親に、

逢ひたいことであつたらう、形見に殘る書置の、文字も朧ににじみ勝ち、

〽墨より薄い親子の縁、思へば果敢ない事なりと、人目なければ書置を、我が顏に當て泣き伏して、悲歎の涙に暮れたりしが、ふつと嘉兵衞は心附き、

ト此内嘉兵衞書置を持ち、よろしく愁ひの思入あつて、はつと泣き伏し、よき程に心附きし思入にてきつとなり。

娘が果敢ない自殺と聞き、つい恩愛に愚癡になり、返らぬことを言つて居たが、うか／＼して居る所でない、御家に拘はる一大事、思へばおれが愚から謀叛人の原田殿を、大忠臣と思ひ違へ、伊達安藝樣を殺さうと、女房お豐へ言ひ附けたは、どうした心の間違ひか、

〽濟まぬ事をばいたせしと、先非を悔いて身の詫びなし、

ト嘉兵衞手を突き詫びろ思入あつて、

もし女房がお茶へでも、仕込んだ日には後の祭り、こりや斯うしては居られぬわえ。

〽心も空に起つ居つ、以前の金を取出し、（ト懷より紙包の金を取出し、）

此の十兩の金ゆゑに、お慈悲深い原田殿と思ひ違へも我が正直、謀叛に與なす今村渡邊、二人に旨々欺されたか、今々思へば口惜しい、えゝ、此金見るも腹が立つ、

〽捨てんとなせしが天下の寶、勿體なしと懷中なし、

ト嘉兵衞金を捨てようとして、思入あつて懷へ入れ、

こんな事を言つて居る間に、少しも早く女房を止め、伊達安藝樣を助けにやならぬ、

〽身拵へして駈け出しが、（ト嘉兵衞思入あつて花道へ行きかけ、）

とはいふものゝ我が役目、御門を明けて行かれもせず、（ト跡へ返り、）行かねば女房が知らぬゆゑ若しお茶へでも仕込んだ時は、伊達安藝樣の御身が危ふい、御門を捨てゝ一走り、（ト又花道へ行きかけ、）捨てゝ行つてはお上へ濟まず、はてどうしたらよからうぞ。

〽行きつ戻りつ、兎やせんと暫し途方に暮れたりしが、

ト嘉兵衞どうしたらよからうといふ思入あつて、

よしや役目をしくじるとも、お家の要の伊達安藝樣、お助け申さにやならぬわえ。

〽勢ひ込んで駈け出す、向うへ遮る今村渡邊、

ト嘉兵衞きつと思入あつて花道へ行かうとする、此の時下手より、以前の善太夫金兵衞出で、嘉兵衞

を支へ。

善太　こりや〳〵嘉兵衛、何れへ參る。

金兵　御門を明けては濟まざるぞ。

嘉兵　や、こなたは原田甲斐殿へ、一味荷擔の佞人ども。

善太　やあ、佞人とは誰がこと、忠臣無二の我々が、

金兵　目に掛つたる上からは、汝が預かる門番所、

善太　玆一寸も、

兩人　動かさぬぞ。

嘉兵　お家の柱の伊達安藝樣、お助け申さにやならぬゆゑ、御門を明けても行かねばならぬ。

善太　役目を粗略になすからは、

金兵　繩打つて引く、

兩人　覺悟いたせ。

嘉兵　何を小癪な。

〽行くをやらじと支へる兩人。嘉兵衛は武術知らざれど、生れ附いたる野夫力、組んづ解れ

つ挑み合ひ、暫し勝負は、

ト嘉兵衛花道へ行かうとするを善太夫金兵衛支へる立廻り、三人よろしくあつて、引張りの見得、三重へ小鼓をあしらひ、此の道具廻る。

（伊達安藝宅の場）――本舞臺四間常足の二重、正面上手床の間、續いて違ひ棚、白地墨繪の襖、いつもの所綟張りの冠木門、伊達安藝小屋と記せし表札を掛け、下手黒塀、爰に誂への見越しの松、二重上手に風呂先屏風、風呂釜、二重棚、茶道具一式、本物の飾附よろしく、總て交代長屋の體、爰にお豐世話女房のこしらへにて、件の風呂へ炭をついで居る、稽古唄にて道具留る。と炭をつぎしまひ、釜をかけ思入あつて、

お豐　長の間のお取込みにて、お屋敷内はひつそりと三味線一つ彈く者なけれど、前町の豆腐屋では、娘が唄を習ふと見えて、機嫌らしうさらふのを聞くに附けてもわしが娘、二年越し原田さまへ誑られて引き揚げられ、汐澤さまと思はずも、祝言はさせたれど、彼の一條を仕遂げねば、親の手許へ返されぬと無理難題、とあつて是れまで一方ならず、御恩を受けし伊達安藝さま、何として毒害が、（トロを押へ、四邊へ思入あつて、）こりやもう娘を一人捨てようとも、思ひ留つて旦那さまへ、いつそ此事打明けて、何もかもお話し申さうか。いや／＼申し上げたりや旦那さまが、其の

お腹立ちは如何ばかり、皆打ち明けて雙方へあらはに知れた其の時は、娘も歸らずこちらもお暇、それよりほんの少しばかりお湯の中へ入れたとて、御病氣位でお命に拘はる事もありはせまい、さうしたならば娘も戻り、左のみ罰も受けまいか。したが大恩のあるお主樣へ、かりそめにも毒藥をおすゝめ申すとは、そら怖しい事ながら、義理ある娘の命の切羽。旦那さま、お許しなされて下さりませ。

ト拜む事あつて門口へ掛金をかけ、誂への文庫の内より藥包を出し、件の釜の中へ、簪の耳搔にて入れ、藥包を元の所へ仕舞ひ、ほつと思入あつて、

旦那さまのお命に、拘はる程の事はあるまいと、思うて居ても此胸が、どき／＼してならぬわいなあ。

ト思入、合方になり、花道より前幕の安藝先きに、甚五兵衛六左衛門中間附添ひ出來り、

安藝　御兩所には今日も、お附添ひ下され、千萬忝けなう存ずる。

甚五　先づは今日あら方御勝利と相成り、我々共が身に取つても、如何ばかりか大慶に存じまする。

六左　假令原田が辯才に長けて居ると申すとも、まことの道に叶ひませぬて。

安藝　此後お呼び出しの其砌り、いよ／＼甲斐を伏罪いたさす、宅へ參つて種々の相談。

甚五　如何さま、及ばずながら我々も、篤と工夫を廻らして、

三左　佞人共を取拉ぐ、何かのお談じ、

甚五　いざ、御同作、

甚五
六左　いたすでござらう。

安藝　さゝ、お越しなされ。（ト舞臺へ來る、中間門を明けようとして明かぬ思入）如何いたした。

中間　御門が明きませぬ。

安藝　えゝ、叩け／＼。

中間　旦那のお歸りでござります。（ト大きく言ふ。お豐びつくりして、）

お豐　はい／＼、只今明けまする。（ト掛金を取り、門を明けて、）これは／＼旦那樣、お早いお歸りでござ
ります。（ト安藝中間に向ひ、）

安藝　其方は大儀であつた。部屋へ參つて休息いたせ。

中間　はッ。（ト下手へはひる。）

安藝　さゝ、御兩所お通りなされい。

甚五
六左　然らば、御免下され。

ト此内お豊そは〳〵しながら、褥煙草盆など出すことあつて、皆々内へはひろ。

安藝　こりや豊、晝日中何ゆゑ門を閉して置くのぢや。

お豊　あれはあの、おゝそれ〳〵、一人お留守居をいたし居りまするは、心細うござりますゆゑ、それでしまりをいたして置きましてござりまする。

安藝　はて、用心のよい事ぢやな。（ト肩衣袴を取り。）着替の服を持つて參れ。

お豊　畏りました。（ト二重にある服臺に載せし衣類を持つて來る。）

安藝　御兩所、失敬御免。

甚五
六左　決して御遠慮には及びませぬ。

ト安藝着替へることあつて褥の上に住ふ、此内お豊着せ替へながらいろ〳〵そは〳〵する事あつて、

トゞ奥へはひろ、甚五兵衞見送り、

甚五　合點の行かぬ彼女の素振り、何か樣子のある事ならん。

六左　定めてお留守に粗相をいたし、お茶碗でも毀しはせぬか。

安藝　いや〳〵嘉兵衞めと、例の女夫いさかひをいたしたと相見える。若い者か何ぞのやうに、たはけた奴でござる、はゝゝゝ。

六左　如何さま、左樣な事じがなござりませう。(ト合方になり、甚五兵衞前へ出て、)

甚五　さて、此度の御裁斷も板倉侯の御丹精にて、九分九厘御勝利と相成り、大慶に存じまする。

六左　今日なども今一息申し詰めて、原田甲斐を恐れ入らする所でありしに、早や退散の御時計が鳴り出せしそれゆゑに、議論を殘して歸りし殘念。

安藝　いや／＼、假令如何やうに、原田が一類事を左右に言ひ曲げても、そこが世にいふ譬の通り、水は逆には流れませぬて。

甚五　日ならず黑白相分り、惡人退治は瞬くうち。

六左　是れと申すも御老體の御丹精、又二つには板倉侯の、お骨折りと申すもの。

安藝　御案内の通り拙者めは老衰なして氣力も薄く、舌も自由に廻り兼ね、何かに附けてまだるい勝ち、それゆゑにこそ御兩所を、杖柱とも存ずれば、此上ともによろしきやう、御助勢の程賴み入る。

甚五　必ずお氣遣ひなされまするな、われ／＼共もお家のお爲め、身命も惜しまぬ心底、粉骨碎身仕つり、及ばずながら御助力いたす所存でござる。

六左　猶此上が大事の御身、はや斯くまでに惡人の、一廉づゝも罪に落つれば、落着いたすは僅な日間。

甚五　深く御心配は、

兩人　御無用になされませう。

安藝　各方の其のお詞、承はつて老人も、近頃力を得ましてござる。

ト合方調べになり、花道より以前の鐵之助袱紗包の德利を、中間に持たせ出來り、鐵之助中間に目交をなす、中間門口へ來り、

中間　物まう〳〵。

安藝　誰やら案内があるわえ。

六左　はッ、（ト門口へ來り、）是れは〳〵松前樣、ようこそのお出で。

鐵之　安藝殿には、御在宿でござるかな。

六左　如何にも在宿仕つてござります。（ト是れを聞き、安藝立上り、）

安藝　なに、鐵之助殿がござつたか。（ト門口へ來て、）おゝ松前殿、ようこそ〳〵、さゝ是れへ〳〵。

鐵之　然らば、御免下され。

ト中間に持たせし件の保命酒の包を持ち、上手へ通る、甚五兵衛六左衛門煙草盆などを出す事よろしく。

安藝　此程は取紛れ御意得ませぬ、何時も御壯健にて、重疊に存じまする。

鐵之　其許樣には今日も、評定所へ御出頭、御老體の御身にて、一方ならぬ御心勞、實に恐察仕つる。

安藝　何として〳〵、其許も同じ晝夜の宿直、なか〳〵以て凡人の及ばぬ儀、それなればこそ君邊の儀は尊公へお任せ申して置くゆゑに、安心のいたして居ります。

鐵之　御懇情の其の仰せ近頃祝着に存じまする、何は然れ御裁斷の儀、追々邪正判然と承はつて、某も愁ひの眉を開いてござる。

安藝　お悦び下され、板倉侯の御丹精を以て、追々甲斐が非分に陷り、既に今日なども今一應にて彼れめに伏罪いたさす所、退散のお時計が鳴つたるゆゑに、先づ其儘退出はいたせしが、最早九分九厘の勝利、松前氏御安堵下され。

鐵之　それは何より以て重疊々々、やがて惡人滅びなば、萬歳謳ふ士民の喜び、全く以て其許樣のお骨折、又二ツには鹽竈明神の加護ならん、ちえゝ忝じけない、其の鹽竈明神の儀につき、某今日參りしは、先刻片倉小十郎殿お國許より到着いたされてござる。

安藝　なに、片倉氏が出府めされしとか。はて心得ぬ、御在所の儀を委ね置きしが、何ぞ火急の事どもがあつての儀か心許なし。

鐵之　出府ありしは仔細のある事、其儀は追てお話し申さん、何はさて置き取敢ず龜千代君へお目見得いたされ、お土産としてお國表鹽竈明神へ捧げられし、保命酒御持參あつて我が君へ、いざ一獻とお進め申せしかど、予は酒は喰べぬとの御意、そは何ゆゑと伺へば御父君には御壯年の御盛んなる御身にて、御隱居あつて老年の、其許はじめ御家臣へ、心勞掛くるも酒ゆゑなれば、予は一生涯酒は呑まぬと、未だ御幼稚の御身にて有難き思召し、御意承はつて列座の我々、實に感涙を流してござる。

安藝　はゝツ、御幼年にましませども、御發明なる御性質、實に大國を知し召す御器量備り、末頼もしき思召し、はゝ、有難き儀にござりまする。（ト安藝涙ながらに上手に向ひ辭儀をなす。）

鐵之　それに附き安藝爺は、長の間の心勞、殊に此程よりの雨天勝、嘸かし氣鬱いたして居らう、保命酒とは壽命を保つ銘なれば、安藝爺に頂戴させ、健に長生きいたすやう、祝うて彼れへ取らせいと、仁心深き御意ゆゑに、取敢ず某が、則ち是れへ持參いたした、有難く頂戴いたされよ。

ト件の徳利を出す、安藝押し戴き、

安藝　はゝ、恐れ多き其の御上意、譜代恩顧の安藝づれが、聊なる勤勞を御賞譽あつてお手づから、下し賜はる保命酒、幾萬石の御加増に勝つて老の身の大慶、心魂に徹し如何ばかりか、有難き仕合

せにござりまする。（ト安藝淚に暮れ、）御兩所、何と恐れ入つた儀ではござらぬか。
甚五　松前樣の今の仰せ、承はつてわれ〳〵は、驚き入つたる御仁心、
六左　御幼年の御身にて、臣下を憐れむ御性質、實に有難き思召し、
甚五　やがて成長ましまさば、五十四郡を靜謐に、治めたまふ御器量顯はれ、
六左　又有るまじき名君と、悅ばしさの身に染みて、
甚五　淚に袖を、
六左　浸してござる。（ト兩人有難淚に暮れし思入。）
鐵之　御懇情の此の賜、直樣是れにてお開きなされ。
安藝　何さま、左樣仕つらう。（ト奧へ向ひ、）こりや豐、杯を持ちやれ。（ト奧にて、）
お豐　畏りました。（ト臺附の杯を持ち出來り、鐵之助に向ひ、）これは〳〵松前樣、久々お目見得いたしませぬ。
鐵之　おゝ、誰かと思へば、嘉兵衞の妻の豐なるか、安藝殿御在勤中、朝暮の周旋大儀なるぞ。
お豐　かねて御存じさまの通り、行屆き兼ね勝にて、恐れ入りまする。
安藝　いや〳〵松前氏お聞き下され、拙者先年江戸表在勤の砌り、召使うたる小間使、至つて正直なる

者ゆゑに、心置なく留守を預け、安心いたして居りまする。（ト是れを聞き、お豐じゆつなき思入にて、）

お豐　はあゝ。（ト泣き伏す、）

安藝　こりや豐、何で泣くのぢや。

お豐　あの、これは、おゝそれ〳〵旦那樣のお詞を有難いと存じまして、思はず知らず有難涙がこぼれまして ござりまする。

甚五　兎角女と申すものは、涙脆いものでござるて。

六左　いやもう、嬉しいに附け悲しいに附け、とかく涙の先立つは、女の持前でござるて。

鐵之　さゝ、一獻頂戴いたされよ。

安藝　然らば頂戴いたすでござらう。（ト甚五兵衞に酌をさせ、押し戴き呑んで、）あゝ、甘露とも申さうか、御酒は一向下されぬ身共すら、實に長生の思ひをなしまする。熊田、蜂谷御兩所は、此の伊達安藝が兩腕と頼む御身分、我が若樣のお心を籠められし保命酒、一盞づゝ頂戴いたされよ。

甚五　はゝ、冥加に餘る其のお詞、孝を感ぜし養老の、瀧にも勝る保命酒、

六左　殊更鹽竈明神へ、捧げられし御神酒なれば、

甚五　是れにて頂戴、

六左　いたすでござりませう。（ト お豐に酌をさせ兩人よろしく呑むことあつて、）

甚五　有難く頂戴。

兩人　いたしてござる。

安藝　さて、松前氏へお持成しに、無骨の拙者が手前ながら、粗茶一服進ぜたい。

鐵之　それは何より忝けないが、最早夕景近ければ、女中ばかりの奧御殿、氣遣はしく存じますれば、先づ今日はお暇いたし、後日に頂戴いたすでござる。

安藝　何さま御殿が一大事、そこへ心の附かざりしは、老衰ゆゑと御容赦下され。

鐵之　いや、拙者に於ても好きの道ゆゑ、今日元老へ差上げんと、持參いたせし傳書がござる。

安藝　それは如何なる傳書でござるか、早く拜見いたしたい。

鐵之　世にも稀なる傳書ゆゑ、御兩所には四邊へ心を。

甚五
六左　はッ。

ト兩人門口と奧を見て、人は居ぬかといふ思入、鐵之助懷中より以前の連判狀を出し、三人に見せる。三人びつくりなし、

安藝　や、どうして是れが、

甚五 六左　貴殿のお手に、

鐵之　入りし仔細は。（ト お豊へ憚る思入にて、鐵之助扇にて疊へ書いて見せる、三人讀んで、）

安藝　すりや、神並が返り忠にて、

甚五　片倉氏へ、

甚五 六左　訴へ出でしか。（ト大きく言ふ、）

鐵之　これ、

三人　ちえゝ、忝けない。（ト安藝戴く、鐵之助思入あつて、）

鐵之　是れにて拙者の役目も濟めば、

甚五　すりや、松前氏にも是れより直に、

六左　御殿へお歸りなされまするか。

鐵之　如何にも、お暇いたすでござる。

安藝　男勝りにござれども、乳人淺岡は女のこと、萬事の御配慮お頼み申す。

鐵之　及ばずながら身命を、抛ちまして宿直いたせば、御心配下さりますな。

安藝　かゝる時節に、貴殿の如き英雄が、家臣の内にあるといふは、まことにお家の寶でござる。

鐵之　分に過ぎたるお褒めに預り、拙者恐縮仕つる。
安藝　左樣ござらば、
三人　松前氏、
鐵之　これにてお暇いたすでござる。（ト唄になり、鐵之助思入あつて花道へはひろ、跡合方にて）
安藝　こりや豐、今朝申し附け置きたる挽茶は、求めて置いたであらうな。
お豐　はい、前町の宇治屋で求め、お棗へ入れて置きました。
甚五　松前氏は御殿の宿直に、是非もない事ながら、
六左　どうか我々兩人へ、一服頂戴いたしたい。
安藝　それは何より易いこと、幸ひ今日求めたる、極昔を御風味下され。
甚五　然らばお立て下さりますとか。
六左　それは千萬忝けはい。
安藝　こりや豐、湯はたぎつて居るであらうな。
お豐　はい、よう沸つて居ります。
安藝　熊田氏を正客に、豐其方は詰をいたせ。

お豐　あの私も、御一緒に、
甚五　はて、風雅の道に隔てはない、
六左　遠慮いたさず、是れへ參れ。
お豐　そんならどうでも其のお茶を、呑まねばなりませぬか。
安藝　下々の者は茶の湯といへば、何か事の改まり氣の詰るやうに思ふが、何もむづかしい儀ではない、どりや立前に掛らうか。

ト謠への合方になり、安藝釜の前に住ひ、袱紗捌きをして、本行薄茶の手前よろしく、此内お豐思入、安藝釜の蓋を取ろ、湯氣立ち天井の蠅これに當り落ちたろ心、安藝心得ぬ思入、甚五兵衛目早く是れを見て、

甚五　今元老が釜の蓋を、取らるゝ途端に天井に、とまりし蠅の羽を縮め、是れへ落ちしは何とやら。

ト安藝釜の蓋をなし、

安藝　忘れても汲みやしつらん旅人の、高野の奥の玉川の水。
甚五　察する所、釜の湯に、
六左　正しく毒が、

お豐　え、(トぎつくり思入、)

安藝　こりや豐、燈火を點せ。

お豐　はい。

安藝　ともせと申すに。(トきつと言ふ。)

お豐　はゝい。

ト合方きつぱりとなり、安藝は羽箒で蠅を拂ひ捨てる。お豐短檠を持ち來り、火を點す。

安藝　こりや、此の釜の水は、其方が入れたのぢやな。

お豐　はい、左樣でござりまする。

甚五　何れの水を入れたるか、湯氣に當りて天井の

六左　蠅の落ちしは合點が行かぬ。

お豐　いえ、決して毒などはござりませぬ。

安藝　如何さま、さうであらうわえ。

トお豐へ目を附けながら茶を立て、茶碗を見て泡の立たぬをさてこそといふ思入、此時風の音になり、下手垣根の蔭より嘉兵衞の吹替頰冠りにて出る、是れにて差金の雀ぱつと立つ、お豐吹替を見て思入」

是れにて吹替は垣の蔭へはひる。

甚五　最早たそがれ過ぎたるに、俄に雀の鳴きたつは、

六左　若しや表に忍びの者でも、

お豐　いえ、あれは大方塒に迷ふ、雀でがなござりませう。

安藝　おゝ、雀といへば、そちが在所は、慥野州の雀の宮ぢやな。

お豐　はい、左樣でござります。

安藝　あの雀の宮の謂れは、どういふ事であつたな。（トお豐思入あつて、）

お豐　委しいことは存じませぬが、昔大きな長者があつて、毎日庭へ飛んで來る雀にお米を遣りましたが、其家來が慾心で、其の主人を殺さうと饅頭の中へ針を入れ、それを喰べさせましたゆゑ、たつての苦しみなせし時、雀が一羽飛び來り、これも轉げて苦しむ樣子、そこへ又もや一羽の雀が何か草を銜へて來て、苦しむ雀に喰べさせますと、忽ち白い物を吐いて、飛び行きまするを不思議に思ひ、其草を見ますれば韮ゆゑ、苦しむ主人も又韮を直に喰べまして、針を吐いて直りしゆゑ、それで祀りし雀の宮。

安藝　して、其の神に祀つた心は。

お豐　餌を貰うた恩を知つて、其の主人を助けしゆゑ。
安藝　むゝ、それで神に祀りしか、然し今時そんな雀は、
お豐　え、
安藝　鳥でさへ其の如く、主人の恩を忘れぬに、況や人と生れしからは、主人の恩を思はにやならぬが、悲しいかな末世に至れば、鳥はものかは人でさへ、恩を忘れて御家の騷動、上を學べば下々まで、肌許されぬ巧みの底意、そんな雀は御家中にて育むまでは飛びもせで、巣立をなせば恩を忘れ、小鳥の癖にちや〳〵くちやと、口には言へど心には、雀に劣る其の性根、はてさて人はないものぢやな。（ト思入、お豐はじゆつなきこなし、）益なき雀の話しにて、思はぬ延引許しめされ。
甚五　只今仰せられた、雀の宮のお話しは、
六左　まことに的中いたしました。
安藝　其の話しに異ならず、心得難き此の釜の湯。
お豐　え。
安藝　こりや豐、それへ出い。
お豐　はい。

安藝　用事がある、それへ出い。（ト　お豐もじ〳〵して居るゆゑ）ええ、出いと申すに。

お豐　はゝい。（ト合方きつぱりとなり、お豐前へ出る、安藝茶碗を取つて）

安藝　雀の話しでぬるみしゆゑ、此の茶は其方毒味いたせ。

お豐　え、（びつくりなす。）

安藝　何も驚く事はない、そちが汲んだ釜の水、怪しむ所もあらざれば、早う毒味いたさぬか。

お豐　はゝい。

安藝　何をうじ〳〵いたし居るのぢや。

お豐　はゝい。

甚五　呑まぬは怪しき事あるか。

お豐　はゝい。

六左　毒味いたすか。

お豐　はゝい。

安藝　こりやめつたには呑まれまい。

お豐　何とおつしやります。（ト合方きつぱりとなり）

安藝　此の風爐釜を留守中に取り扱ふは其方一人、最前蓋を取りし時湯氣に當りて天井の、蠅の落ちしはたゞならず、まつた茶碗へ點ぜし茶の、不思議に立たぬは毒氣の徵、それゆゑそちに毒味をさすのぢや。

甚之　察する所其方は、何者に賴まれてか、元老はじめ我々を。

六左　正しく毒殺なさん巧み。

お豐　何しに左樣な、

安藝　然らば、此場で、

三人　毒味いたせ。

トお豐是非なき思入、此の以前下手より嘉兵衛出來り、門口に窺ひ居て、

嘉兵　其のお毒味は嘉兵衛めが、いたしますでござりまする。（トつか〳〵と内へはひり茶碗を取上げる。）

お豐　あゝめつさうな、それを呑んでは、（ト留める。）

嘉兵　えゝ、われが知つた事ぢやアねえ。（トお豐を突き退け茶碗の茶をぐつと呑み、）お毒味いたしてござりまする。

お豐　や、お前は命を捨てる氣か。

嘉兵　おゝ、命を捨てねば安藝樣へ、身の言譯が、（ト言ひ掛け苦しき思入にて血を吐き、）ならぬわえ。
甚五　やゝ、嘉兵衞が吐血、
六左　なしたるは、
嘉兵　毒の效驗でござりまする。
安藝　さてこそ釜の此の中へ、豐が毒をば仕込みしか。
甚五　女の身にて毒害なすとは、
六左　思へば大膽不敵な奴。
嘉兵　其の毒藥を仕込ませたは、此の嘉兵衞めでござりまする。
安藝　何と申す。（ト竹笛入りの合方になり、嘉兵衞苦しき思入にて、）
嘉兵　斯くなる上は有體に、包み隱さず申し上げん。此の身の罪の一通り、お聞きなされて下さりませ。
（ト誂へ竹笛入りの合方になり、嘉兵衞苦しき思入にて、）原田殿へ人質に義理ある娘を引き留められ、
初手は非道と思つたも、それからこつちへ厚い惠み、下を憐む仁心に、御家を覘ふ奸賊と、神ならぬ身の露知らず、忠義一途な人と思ひ、我が愚さに今村渡邊、彼等二人にまんまと計られ、斯かるお家の騷動も皆伊達安藝が謀叛ゆゑ、片時も早く討取らねば、如何なる大事にならんも知れ

す、左ある時には御家にも拘はる程の事なれば、女房豐に言ひ附けて毒害いたしくれるに於ては、此上もない主君へ忠義、首尾よく行かば留め置きし娘を返し其上に、五百石に取り立てんと言はれし詞を實と思ひ、今この釜へ仕込んだる毒は嘉兵衞が女房へ、言ひ附けたれば我が罪科、毒と知りつゝ今の茶を、呑んで命を捨てますは、我が身の愚に惡人をまことの人と思ひしゆゑ、毒害なした申し譯。

ト嘉兵衞糊紅になり、苦しき思入にて言ふ、お豐もこなしあつて、

お豐 只今嘉兵衞が申せし通り、原田殿を惡人と知らざるゆゑに御恩のある、あなたへ毒を勸めしも、御家のお爲めになると聞き、忠義が立てたいばつかりに、此のお茶の湯の中へ毒を入れたは則ち私、勿體ない事いたしました。（ト泣き伏す。）

安藝 原田が手段に落入つて、此の伊達安藝を惡人と思ひ違へて此の釜へ、毒を仕込んで害せんとなしたる事も御家の爲め、上へ忠義になしたる汝等、罪は奸賊原田にあつて、汝等二人にあらざるぞ。

甚五 して又如何なる事あつて、さほどに思ひ詰めたる嘉兵衞、

六左 改心なして一命を、捨てるは何か仔細ぞあらん。

嘉兵 それぞ最前娘より、送り越したる此の書置、是れを御覧下さりませ。

ト嘉兵衞懷より以前の書置を出す、甚五兵衞取つて安藝へ出す。

安藝　熊田氏、披見召され。

甚五　はッ、(ト開き見て、)此の書置の文體では、夫婦の契約いたしたる汐澤丹三が先非を悔い、膳部の毒味に我が盛りし毒に當つて死したるゆゑ、二世の語らひなしたるお梅、自殺いたして果てたる樣子。

お豐　えゝ、それはまことでござりまするか。これ嘉兵衞どの、僞りならば嬉しいが、聟どのといひ娘といひ、まことの事でござんすか。

嘉兵　なに、僞りであるものか、汐澤殿も昨日まで一味徒黨であつたるが、先非を悔いて死なれたを聞いて娘も死んだのだ、おれが命を捨てる氣に、なつたも娘が書置ゆゑ。

お豐　そんなら娘の死んだのは、まことの事でござりましたか、さういふ事ならわたしも共に。

ト嘉兵衞の脇差へ手を掛けるを、嘉兵衞留めて、

嘉兵　こりや、何ゆゑあつてそちは死ぬのだ。

お豐　さあ、夫に別れ娘に別れ、心得違ひといひながら旦那樣へ毒を盛り、どうまあ生きて居られませう。

安藝　こりや〳〵必ず逸まるな、今其方が相果てなば、嘉兵衞や娘のなき跡を、誰が香華を手向けるぞ、死する命を存へて跡懇に弔ふが、死するに勝る貞實なるぞ。

お豐　夫や娘がなき跡を弔ふ者がないとても、此の儘存へ居りましては、旦那樣へ濟みませぬ。

安藝　濟むも濟まぬもあるものか、我れを毒殺なさんとせしも、惡人共が手段にて、安藝が謀叛を企てしと申しなせしをまことゝ心得、御家の爲めになしたる事、必ず死するに及ばぬぞ。

お豐　すりや、死ぬるにも死なれませぬか、はあゝ。（トお豐泣き伏す、）

甚五　斯くまで厚き元老の思召しに隨ひて、死を止りて夫をはじめ、聟や娘のなき跡に、華の絶えざるやうにいたせ。

六左　罪を憎んで其の人を憎みたまはぬ元老の、仁惠深きを忘るゝな。

嘉兵　はゝ、有難き其の仰せ、死ぬる心を思ひ止り、四十九日や七々日、跡懇に弔ひくれよ、必ず死なうと思ふなよ。

お豐　それぢやというて此儘に、

嘉兵　こりや旦那樣のお情を、そちは無足にする心か。（トきつと言ふ。）

お豐　はあゝ。（ト泣き伏す、甚五兵衞思入あつて、）

甚五　奸智に長けし原田甲斐が、巧みし事の顯れしは、伊達安藝樣の赤心を神も感應ましくて、

六左　やがて江戸國平穩に、萬歳謳ふ時節あらん。

嘉兵　匹夫なれども人一人、嘉兵衞が命を捨つるのも、原田甲斐が惡計ゆゑ。

お豐　お前ばかりか汐澤どの、娘が非業な死をなせしも、是れもやつぱり原田が計らひ。

嘉兵　死んでも一念此土に止り、甲斐を殺さで置くべきぞ。

安藝　天道誠を照したまへば、惡人滅ぶは遠からず、草葉の蔭で相待ち居れ。

嘉兵　お待ち申して居りまする。（ト嘉兵衞うつとりとなる、お豐耳へ口を寄せ）

お豐　これ、嘉兵衞どの。（ト大きく言ふ。）

嘉兵　おゝ、お豐か。（ト目の見えぬ思入）手前の顏も、もう見えねえ。

お豐　そんなら、是れが、

嘉兵　此の世の別れだ。

ト嘉兵衞よろしく疲れし思入、本釣鐘、此時下手松の立木へ、彌藤次忍び裝にて窺ひ居る、是れを見て、

甚五　や、松の梢に、

六左　怪しき人影、
安藝　えい。（ト手裏劍を打つ、彌藤次飛下り、拔身にて、）
彌藤　伊達安藝、觀念。（ト切つて掛るを突き廻して、投げ退けるを甚五兵衞直に引附け、）
甚五　こやつも正しく、徒黨の一人、
六左　引括つて、詮議を遂げん。（ト又本釣鐘、嘉兵衞弱りし思入にて、しやんと坐り、）
嘉兵　左樣なれば、旦那樣。
安藝　おゝ。冥土で吉左右、（ト衣紋をくつろげるを木の頭）待つて居やれ。
ト本釣鐘、嘉兵衞落入る、お豐はツと泣く、安藝不便だといふ思入よろしく、本釣鐘早き合方にて、
ひやうし　幕

六幕目
同返し

役邸評定所の場
伊達家玄關の場

〔役名＝＝原田甲斐、神並三左衞門、片倉小十郎、伊達安藝、熊田甚五兵衞、今村善太夫、蜂谷六左衞門、渡邊金兵衞、板倉内膳正、乳人淺岡、大老彦根少將、松前鐵之助、澤田ノ局、吳竹ノ局、松島ノ局、錦木ノ局、幼君龜千代、白川千代松、澤の井ノ局、其他。〕

（評定所の場）——本舞臺四間通し常足の二重、上段の蹴込み、襷欄間、正面銀地大紗綾形の襖、上下同銀地の襖、向う揚幕の所、杉戸の出這入、舞臺花道とも高麗縁の薄縁を敷詰め、總て大老お役宅評定所の體、二重眞中に白地黑塗緣横廣の大衝立あり、平舞臺に侍四人何れも繼上下にて居並び、此の見得鳴物なしに幕明く。

侍一　各々方にも今日の御出仕、御苦勞千萬に存じまする。

侍二　御同然に不意の儀ゆゑ、何事なるかと取敢ず、

侍三　出仕いたして御用の筋を、承はれば伊達家の事件、

侍四　俄に双方お呼出しは、何とも以て其意を得ず。

侍一　されば先頃御評定所御類燒に附き其後は、御大老の御邸宅に於て御裁斷と事極り、豫て伊達家の事件に附いては、板倉侯御一人が、取り仕切つてのお掛りなるに、

侍二　今般藝州廣島侯御參覲のお着に相成り、板倉侯は將軍家より御上使の役命ぜられ霞ケ關へお越しの當日、彼の裁斷も今日は休みならんと存じの外、

侍三　御大老より我々へ俄の出仕を仰せ出され、承はれば御自身にて、御裁斷を遊ばすとやら、

侍四　如何なる仔細あつての儀か、其の事柄は存ぜねど、是れと申すも甲斐方を、御贔屓遊ばす御樣子

ゆゑ、

侍一　あこれ、（ト皆々四邊へ思入あつて、）

侍二　どれ、御出席を、

四人　相待ち申さん。（ト此時後にて、）

呼ビ　御出席。（ト呼ぶ。）

侍三　なに、御大老の、

四人　御出席とな。

ト侍の一、二は上手、侍の三、四は下手へ別れよろしく住ふ。時計の音になり、二重上手の褄より彦根少將御大老好みのこしらへ、長上下馬手差し、小姓附ず、提げ刀にて出で、二重眞中へ住ふ、是にて四人平伏なし。

侍一　はッ、御大老にはお早い御出席、

侍二　承はれば今日は、

侍三　御白身にての御裁斷、

侍四　御苦勞千萬に、

四人　存じまする。

大老　抑々昨年の五月より、伊達家の事件出來いたし、裁斷の儀も數度に及べど、未だ理非分明ならぬは、善惡邪正を取捌く役目に依怙があると見ゆる、我大老の職たれば政道に私あつては、將軍家へ申譯なし、故に今日思ひ立ち、老中奉行の列座を省き、自身に裁斷遂げし上、總落着をいたさするは將軍家への御奉公と存じ、俄の裁斷觸れ出せしに、各々には早速の出仕、勤勞の程大儀に存ずる。

侍一　はッ、有難き其の御諚、

侍二　恐入りまして、

四人　ござりまする。

大老　して双方とも揃ひ居るかな。

侍一　只今屆けがござりましたれば、

侍二　最早双方相揃ひ、

侍三　詰所々々に差控へ、

侍四　罷り居ると、

四人　相見えまする。

大老　然らば是れへ、呼び出しめされい。

四人　はツ。（ト上下へ向ひ、）

侍一　それに控へし原田甲斐どの、

侍二　公訴人伊達安藝どの、

侍三　其外差添ひ一同の方々、

侍四　双方共に、

四人　罷り出ませい。（ト上下にて、）

六人　はあゝ。

ト上手より甲斐、善太夫、金兵衛、下手より安藝、甚五兵衛、六左衛門、何れも麻上下無腰にて、是れへ　侍十二人、何れも継上下にて、一人に二人づゝ附添ひ、左右の袂を押へ出來り、上下へよろしく住ひ、平伏なす。

侍一　はツ、罷り出でまして、

四人　ござりまする。（ト大老双方を見渡し、）

大老　伊達家の執權、原田甲斐。
甲斐　はッ。
大老　今村善太夫。
善太　はッ。
大老　渡邊金兵衛
金兵　はッ。
大老　公訴人伊達安藝。
安藝　はッ。
大老　熊田甚五兵衛。
甚五　はッ。
大老　蜂谷六左衛門。
六左　はッ。
大老　大法なれば、詞を改めますぞ。
六人　はッ。（ト平伏なす、）

大老　双方ともそれへ進め。
侍一　御大老の御吟味なれば、
侍二　双方共に、
四人　お進みなされい。
六人　はッ。（ト前へ進み、甲斐頭を上げ）
甲斐　主家の儀につき御役向へ種々お手數を相掛けまする段、恐入り奉つりまする。
　　ト安藝思入あつて、侍の二に向ひ、
安藝　恐れながら伺ひまする、今日の御裁斷には、御大老樣御一人にて、板倉侯の御出席は。
侍二　內膳正樣、今日ツた藝州侯參覲に附き、御上使の役命ぜられ霞ケ關へお越しに相成り、御大老樣御一人にて、列座を省き御裁斷。
安藝　すりやお掛りの御出席は。（ト立役三人顏見合せ、案じろこなしよろしく。大老思入あつて、）
大老　先年綱宗隱居によつて、幼年の龜千代を以て家督の願ひ出せしゆゑ、大國の家政向き幼年にては心許なく、分家たる兵部を以て番代を申し附けしに、伊達家に於て先例是れなく、番代の儀は不都合とやらにて、又候分家隱岐守を以て、兵部と相後見の願ひ聞き屆け遣し置きしに、何か一家

中不平なりとて、老年の安藝頭取と相成り、廿七ケ條の訴狀を以て將軍家へ御訴へに及び、願書を取上げ披見いたすに、捨て置き難き事のみゆゑ、執權たる甲斐を呼び出し、昨年中より評定所に置き、數度對決を申し附くれど、未だ理非分明ならねば、今日掛りの內膳を差越し、自身に裁斷いたす間、双方共に左樣心得い。

甲斐 はゝツ、御老中たる板倉侯へ、數度御苦勞を相掛けますさへ、恐れ多しと存じまするに、

善太 又候今日、御大老樣御自身にての御裁斷とは、

金兵 恐れ入りたる思召し、冥加の程も餘りありと、

甲斐 御禮申し、

三人 上げ奉つりまする。(ト辭儀をなす、大老安藝へこなしあつて、)

大老 こりや、安藝。

安藝 はゝはツ。

大老 其方事は老年の身にて、主家を思ひ種々の心勞、左こそと推察いたし居るぞ。

安藝 こは恐れ多き其の御諚、陪臣の安藝づれが、聊かなる忠義振り、重き御身の御大老樣、左までに御賞揚下されますとは、

甚五　御仁惠なる思召しと、物數ならねど、我々までゝ、

六左　身の面目と有難く、差添への者一同に、

安藝　御禮申し、

三人　上げ奉つりまする。（ト辭儀をなす。大老甲斐へこなしあつて、）

大老　こりや、甲斐、

甲斐　はゝはツ。

大老　豫ての訴訟に安藝方より願ひ出たる訴狀の表、廿七ケ條の其内にて、取り分け容易ならざる儀は大場道益といへる醫師を語らひ、主人を毒殺いたさんなどゝは、是れ重々の不屆きなるぞ、今日こそは罪に伏せ。

甲斐　はツ、仰せにはござりますれど、廿七ケ條の申し立て、皆一つとして實事にあらず、大場道益を相賴み、毒藥調合いたさせしなどゝは、思ひも寄らぬ儀でござりまする。

大老　むゝ、すりや毛頭存ぜぬとな。

甲斐　はツ、押して推察仕つりまするに、執權たる甲斐を卻け、大國の家政を一手を以て、自儘に橫領なさんと致す、安藝が惡計と存じまする。

大老　こりや安藝、それにて甲斐と對決いたせ。

安藝　はツ、（ト前へ進み、腹の立つこなしにて、）こりや甲斐、汝布婁那の辯を以て申し脱れんといたすとも、主君を毒殺なさんとせしこと明白なり、と申すのは、大場道益へ遣はしたる證書の一札、此方の手に入つて罷りある、浮說を以て將軍家へ、訴へ出づべき謂れあらんや。

甲斐　あいや、安藝殿お控へなされい、身不肖ながら手前事は亡主正宗公の御鑒識を以て、執權職に登庸いたされ、伊達家の政務を預り居れば、何不足あつて御主君を毒害なすべき謂れあらん、且又大場道益ことは、此程探索いたせし所、昨年中より何れへやら、行方知れずと承はる、其道益を證書ありとて、箇條の內へ差加へ、上へお手數かけるなどゝは、心得難き事どもばかり、忠義顏なる其許こそ、我が執權の職を妬み、無實の罪にて退役させ、主家を横領なさんといふ、深き巧みでござらうがな。

安藝　やあ、默り居らぬか、言はせて置けばよいかと心得、おのれが罪を脫れんと、樣々なる其の癡言此の伊達安藝は涌谷の館持、老後に及び主君の家横領なすべき謂れあらんや、まつたおのれに不足はないと、口賢くは申せども、兵部どのゝ嫡子たる、市正殿を家督に立て、五十四郡の國政を一手に握らん企てなる事、明白に調べあるわえ。

茜五　殊更以て道益こと、行方知れずと申せども、昨年四月我々が江戸表へ出府の途中、野州鍋掛の原に於て、人手に掛り相果て居つたり。

六左　其折是れなる熊田氏を、伊達安藝殿と心得て、狼藉なせし浪人共逃げ散る跡へ取り落せし、懐中物の其中より、出しは毒薬賴みの一書。

安藝　察する所、道益を人知れず失ひし上、此の伊達安藝の出府を待受け、途中に於て討果さんと、浪人共を相語らひ、巧みし事と覺えたり。

甲斐　はてさて、よくも申し合せ、左樣な虛言を構へられたるぞ。皆一つとして證據にならざるしるしは、旅中に於て殺害されしの、浪人者のと取り所なき其訴へ、左樣な巧みをいたす者が、浪士などを打ち語らひ、迂濶に大事を明かしませうや、道益とても死人に口なし、申し立てには相なりますまい。

善太　それで執權甲斐殿を、無實の罪に落さんと、謀書を構へ訴へ出づるに、不都合ゆゑに道益を、態態旅路へ上せし上、

金兵　殺害いたし其罪を、こちらへ塗附け兩斷の、策を廻らす底巧み、浪人者や死人など、何とて證據に相成らうや。

安藝　やあ、言ふな金兵衛、おのれ人らしき面をいたし、よくも天下の御評定所へ、のめ〳〵と出でたるよな、先年伊達安藝出府の節、袖ケ崎へ罷り出しに、惡人甲斐が身内たる濱田玄蕃と兩人にて佞辯を以て我を欺き、綱宗公へお目通りをさせまいなど〻計りし上、謀書を以て御主君に自殺させんと巧みしを、茶道珍賀が實を明かし、忽ち露顯に及びしゆゑ、玄蕃は御隱居綱宗公の御成敗に相成りしは、一家中にて知る所、過言を吐かず控へ居よ。

　トきつと言ふ、是れにて金兵衛ぐつと詰る、甲斐左あらぬ體にて、

甲斐　あいや、其の儀は此の甲斐、一向に存ぜぬこと、玄蕃は其身の罪ゆゑに、綱宗公の刃に伏し、相果てたるかは存ぜねども、此の宗輔は忠義第一、假令身内でござればとて、左樣な企みに加はりませうや。

安藝　然らば何ゆゑ此の安藝を、毒害なさんと娘を餌に、木戸嘉兵衛といふ門番の妻、幼き折より此安藝が、手許へ置いて使ひしゆゑ、心を許し賄を申し附け置く油斷を測り、惡計を申し附けしぞ、存ぜぬ知らぬと申し張れば、彼女を此場へ呼び寄せて、惡事の段々言上げさ〻うか。

　ト是れにて甲斐せ〻ら笑ひ、

甲斐　はて、其許も伊達家に於て、老臣の上席に着き、諸士の束ねも召さる〻身にて、賤しき女の詞を

證據に、恐れ多くも將軍家の御評定所にて左樣な儀が、よくも言はれた事でござる、取るに足らざる女の詞、お取上げになりませうや。

安藝　おゝ、女の詞が用ゐなくとも、毒藥調合いたさせたる、證書の言譯は脫れぬ所、いで速に罪に伏せ。

甲斐　證書と申すは僞書贋筆、何ゆゑ罪に伏さんや。

安藝　やあ、假令僞筆と申し張るとも、其分にいたし置かうか。

甲斐　然らば其許如何めさるゝ。

安藝　おゝ、證書を以て白狀させん。（トきつとなるゆゑ、）

甲斐　やあ、御場所にて尾籠でござる。（トきつと言ふ。）

大老　双方控へい。

甲斐安藝　はツ。（ト平伏なす、大老思入あつて、）

大老　さて〳〵不埒な者共なり、我が面前をも憚らず、僻論のみを申し募り、無禮の高聲見苦しい、天下の裁斷辨へ居らぬか。

甲斐安藝　はゝはツ。

大老　左はさりながら安藝方にて、願ひ出でたる訴狀の内に、分家たる兵部が嫡子、市正を以て世に立てんと隱謀を企つとあれば、我内緣のあるを以て、甲斐へ贔屓の沙汰せしなど〻思はれんも歎かはしい、今日こそは明白に、理非を分けんと心得居れば、證書の一札熟覽いたし、書合せの儀を申し附けん。

善太　すりや、甲斐殿に、

善太
金兵　書合せを。(ト案じる思入、)

甲斐　はて、假令如何ほど謀書を構へ、甲斐が手跡に似せたりとも、御大老の明らけき御鑒識なれば、それとあらはに、(ト兩人に案じるなといふ思入あつて、)僞書の巧みが、分るでござらう。

大老　こりや安藝、證書とやらを是れへ見せい。

安藝　は〻はツ、(ト出し兼ねて居る。)

大老　猶豫いたすは、謀書なるか。

安藝　あいや、全くもちまして。

大老　然らば早く、是れへ見せい。

安藝　は〻はツ。

ト懐中へ手を差入れろ、是れにて甚五兵衛安藝へこなしあつて氣遣ふ思入、安藝心得、懐中より書物を大分出し、一枚々々に改めて態と知れぬ思入にて、向うへこなしあつて、

何卒是れへ内膳様が。

大老　や。

安藝　いえ、内膳様へ御覧に入れしは、はて、どれやらでござりました。

ト態と手間取ることよろしく、大老ぢれ込む思入にて、

大老　早くいたせ。

安藝　はゝはッ。（トやはり悠々として取調べ居るゆゑ、大老きつとなつて、）

大老　えゝ、知れずば其の儘是れへ見せい。

安藝　はッ。（ト是非なく證書を出さうとする、此の時花道の揚幕杉戸の内にて、）

内膳　あいや、其の書物差上げること罷りならん。

大老　や、何と。

ト向うをきつと見る。ばた／＼になり、花道より内膳正長上下馬手差し、提げ刀にて、跡より近習一人、御用箱の革文庫を持ち、附添ひ出で花道へ留り、内膳正大老を見てハッと立身にて頭を下げ

ろ、侍皆々内膳正を見て、

侍一　思ひがけなき、

四人　板倉侯

大老　何ゆゑ披見を止められしぞ。

内膳　はゝツ、今日藝州廣島殿參覲の着により、御上使の役命ぜられ、霞ケ關へ罷り越せしも、滯りなく事相濟み、歸宅なさんといたす折から、何か俄の御裁斷と承つて驚き入り、服改むる暇もなく、直樣出席仕つる。然るにあれより見受けし所、陪臣の身も顧みず、御大老へ直々に書物を差上けるなどゝは、無禮至極のいたし方、見るに忍びずお次よりお止め申して斯くの仕合せ。はて、遠國武士と申す者は、禮儀を存ぜぬものぢやなあ。

大老　すりやそれゆゑに、はて、御念の入りし儀でござる。

侍一　何は格別、板倉侯には、

侍二　是れなるお席へ、

四人　お着きなされい。

内膳　然らば、御免下されい。

卜序の舞になり、內膳正近習附いて舞臺へ來り、二重下手へ住ふ。近習は件の文庫を置いて下手へはひる。

大老　昨年中より其許にも、御關係の伊達家の事件、數度對決を申し附くるといへども、未だ理非分明ならねば、將軍家への御奉公振り、今日こそは落着させ、事明白に分けんとせしに、思ひの外なる御用濟み、お早い事にて先は祝着。

內膳　仰せの如く裁斷も、兎角延引仕つれば、御大老までお手數かゝり、甚だ以て恐れ多し、此の裁斷に置きましては、某豫て願ひを上げ、落着までは掛りにござれば、先づ〳〵お任せ下されい。

大老　左はいへ調べの半なれば、先づ其許にはお詰所にて、御休息なといたされい。

內膳　して、お調べの其の箇條は、何れの邊にござりまするな。

大老　是れにて調べをいたし掛けしが、大場道益へ申し附け、毒藥調合いたせしなどゝは、容易ならざる一ケ條、只今證書を披見いたし、甲斐へ此の場で書合せを、申し附ける所でござる。

內膳　毒藥調合のお調べとは、それぞ大事の一ケ條、休息いたす場合ならねば、手前が代つて取調べん。

大老　すりや、御休息もいたされず、

內膳　はて、御奉公ゆゑ私の、休息などは役目の怠り。

大老　然らば御身に讓り申さう。

ト是非なき思入にて、上手へ寄つて住ふ、是れにて內膳正眞中へ出で、下手へ向ひ」

內膳　いやなに、妻木彥右衞門どの。

侍二　はツ。

內膳　只今安藝が御大老へ、差上げんとせし證書を是れへ。

侍二　はツ、其の證書是れへ。

安藝　はツ。

トいそがはしく書物の中より證書を出して侍の二へ渡す、侍の二取次ぎ內膳正へ渡す、內膳正開き見て、

內膳　「一札の事、一、此度毒害の儀首尾よく成就いたすに於ては、其方へ三千石、忰宇右衞門へ二千石宛行ふべき者也、寬文九年四月廿日、大場道益老へ、伊達兵部、原田甲斐、」（ト讀み終り、件の一札を甲斐の方へ向け、）甲斐、認めし覺えがあるか。（ト甲斐これを見上げ、）

甲斐　手前が見ても見紛ふほど、よく似せましてはござりますれど、認めましたる覺えなど〻は、思ひも寄らぬ儀にござりまする。

内膳　然らばそれにて、書合せをいたせ。

甲斐　はツ、委細承知仕りまする。（ト内膳正上手へ向ひ、）

内膳　大井新左衛門殿、

侍一　はツ。

内膳　甲斐へ料紙硯を、お與へ下されい。

侍一　はツ。（ト白木の硯箱に紙を取添へ持ち出で、）いざ、書合せをいたされい。

甲斐　はツ、（ト墨を摺り筆を取上げ、思入あつて、）恐れながら今一應。

ト内膳正以前の如く一札を甲斐の方へ向けて見せる、甲斐是れを見ながら一札を認める事よろしくあつて、侍の一へ渡す、侍の一件の一札を内膳正の方へ差向けて見せる、内膳正以前の一札と比べることあつて、

内膳　甲斐へ實印を押させい。

侍一　はツ、是れへ實印をいたされい。

甲斐　はツ。

ト懐中より印形を出し、件の一札へ押す事よろしくあつて差出す、侍の一取次ぎ内膳正へ渡す、内

膳實印を引合せて見ることあつて、

内膳　まことに是れぞ同筆同印、左すれば大場道益へ毒藥調合を相頼み、此の一札を其方より、遣はしたに相違ないな。

甲斐　あいや、全く持ちまして、左樣な覺えはござりませぬ。

内膳　默れ、そちは書物さへ見れば謀書なりと申し陳じ、又印形を見る時は、謀判なりと申し僞り、上役人を何と心得居る。

甲斐　こは片手打ちなる其仰せ、身不肖にはござりますれど、亡主正宗の鑒識により、執權職に登庸いたされ、家政取締の儀を勤め居れば、自然左樣な謀判などを巧む族もござりませうかと、豫て手前の實印へは、毛引いたしてござりまする、恐れながら其の實印、よく〱お改め下さりませう。

内膳　なに、毛引いたしてあるとな。

甲斐　御意にござりまする。（ト内膳正實印を改める事よろしくあつて、）

内膳　何さま只今其方が、押したる印は、文字の半はちぎれ〱に相成り居る。して又、是れなる宗輔の諱は如何なる譯にて名乘り居るや。

甲斐　其儀は亡主正宗より、宗の一字を頂戴仕り、亡父則輔の輔を受け繼ぎ、宗輔と名乘りをりまする。

内膳　むゝ、すりや亡主より頂戴なせし、宗の一字と、則輔の輔を受け繼ぎ名乘り居るとな。
甲斐　はツ、御意の通りにござりまする。
内膳　左すれば亡主と亡父より、貰ひ受けたる汝が諱、忠孝二ツの其の文字を、毛引いたして立ち割らば、忠孝二道が惑亂いたすが、其の儀を汝心得居るか。
甲斐　さあ、其儀は。
内膳　いやさ、心得居らば忠孝の道を失ふ人非人、心得居らねば不便な奴ぢやが、其の申し譯は如何なるぞ。
トきつと言ふ、是れにて甲斐思入あつて、
甲斐　はツ、心附かざる粗忽の段、お咎めに預り恥辱の至り、御容赦願ひ奉つる。
内膳　すりや、只今まで心附ぬとか。
甲斐　はツ。（ト是れにて内膳正思入あつて、）
内膳　いや、其方は伊達家に於て、執權職をもいたし居れば、大器量者と存じ居つたが、是れ等の邊を心得ざるとは、はてさて不便なものぢやなう。
甲斐　面目もなき次第にござりまする。

内膳　然らば、愚者にして申し聞けん。あゝ誰やらの雑話でありしが、さる瓜畑へ狐が出て、夜な〳〵瓜を取り喰ふを、百姓共が立腹いたし、竹槍などを手に手に携へ、狐狩りをいたさんと寄集つて居る所へ、行脚の僧が通り掛り、仔細を聞いて笑を含み、いや、それしきの事共に、斯く村中が動亂いたすは人間の身の恥づる所、よい〳〵愚僧が一句を認め、百姓衆に進ぜる程に、是れを狐の出る畑へ竹に挾みてさし置かれよと、何か一紙へさら〳〵と認め渡し別れしとか、すると翌朝瓜畑に狐が死して居りしゆゑ、百姓共は不審に思ひ、かの旅僧が認めくれし一句の表を讀み下せば、「おのが名のつくりを喰ふ狐かな」と認めありしとやら、狐ですらもおのが名のつくりを喰ふと恥しめられ、悔悟いたして死したるに、況や人間、其方もよも存命では居られまい。

ト甲斐思入あつて、

甲斐　切腹いたして相濟みますれば、いとより易き儀でござれど、只今拙者相果てますれば、御分家たる兵部殿まで虎穴に陷り候上、主家の安危も心許なく、惡人蔓る時節となれば、惜しからぬ一命なれど、假令恥辱を忍びましても、まだ一命は捨てられませぬ。

大老　こりや尤もなる甲斐が答へ、長々しき狐の雜談、手前も大いに退屈いたした。

内膳　いや、御大老の前をも憚らず　餘事の雜談御容赦下されい。

ト此內安藝懷中より前幕の連判狀を出し、

安藝　はッ、板倉侯へ申し上げます、昨日國許白石より片倉小十郎着に相成り、持參いたせし是れなる連判、何卒御披見下さりませう。（ト是れを見て善太夫金兵衛びつくりなし、）

善太 金兵　あの品は、（ト言ふを冠せて、）

甲斐　はて、又候、何か謀書を構へ、訴へ出づると相見える。

內膳　其の品これへ。

侍二　はッ。（ト取次ぎ內膳正へ連判狀を渡す、內膳正開き見て、）

內膳　こりや是れ兵部を筆頭に、五十餘人の姓名を認め、血判いたしたる、容易ならざる惡事の企て。

大老　して又是れなる一品は、如何いたして手に入りしぞ。

安藝　はッ、それぞ惡事に同意せし、神並三左衛門と申す小者、返り忠をいたしまして、昨年白石の小十郎方へその連判狀を持參いたし、訴へ出でしそれゆゑに、國許にても荷擔の者共、一々詮議仕り此度當地へ出府いたし、拙者へ讓りし其の連判狀。

甚五　かゝる證據の出る上は、最早脫れぬ惡事の段々、

六左　伏罪いたして速に、上の御處置を申し受けよ。（ト此內甲斐思入あつて、氣を替へ、）

甲斐　はて、淺々しき巧みごと、匹夫下郎の訴へなどを證據となして取用ゐ、國表にて詮議なすとも、伏罪なせし者共は、嚴しき拷問こらへ兼ね、無實と知つて白狀なさんが、それらは取るに足らざる族、連判狀と申すのも、正しく謀書に相違なし。

善太　はゝッ、只此上は御大老の、事明らけき御裁斷にて、

金兵　惡事を巧む謀書の連判、それと一目に分るやう、

善太　御吟味願ひ、

善太
金兵　奉つりまする。

内膳　して、神並三左衞門とやらも、當地へ同道いたせしか。

安藝　はッ、小十郎が同道せしゆゑ、今日召連れお腰掛に、疾くより控へ居りまする。

内膳　むゝ、然らば是れへ呼び出さん。（ト此時花道杉戸の内にて）

三左　お召しとあれば三左衞門、只今それへ參りまする。

トばたばたになり、花道より三幕目の三左衞門、着流しにて出來る、これを安藝見てびつくりなし、

安藝　こりやこりや、神並控へぬか、上御役人の御沙汰も待たず、御評定所にて無禮千萬、控へ居よ。

三左　はゝ、はッ。（ト花道へ平伏する、内膳正是れを見て）

内膳　いや、證人とあれば苦しからず、是れへ進め〳〵。
大老　あいや其の儀は相成りますまい。
内膳　とは何ゆゑでござりますな。
大老　假初ならぬ天下の裁斷、匹夫下郎を此處へ、呼び出し吟味召されなば、上の御威光落すも同然。
内膳　御大老の御仰せ一應は理に當れど、假令下賤の者たりとも、善悪邪正を取り調ぶる、手續きにより是れへ呼び出し、吟味を遂ぐるは私ならぬ將軍家への御奉公、貴賤を論じて裁斷の屆かぬ儀とてもこれある時は、却つて役目の越度と相成り、天下のお爲めに相成りませぬが、但し御批判ござりまするか。
大老　さあ、それは。
内膳　よも、御批判はござりますまい。（トきつと言ふ、大老思入あつて、）
大老　然らば手前は休息いたせば、是れにて御吟味勝手次第。
内膳　如何にも、吟味を遂ぐるでござりませう。
大老　はてさて入らざる、いやさ、如何なる裁斷めさるゝか、奥にて沙汰を待つでござる。（ト立上る。）
内膳　左樣ござれば、御大老、

大老　どりや休息いたさうか。

ト時の太鼓になり、大老甲斐へ思入あつて二重上手へはひる、是れにて内膳正席を改め、花道へ向ひ、

三左　はツ。

内膳　こりや、神並とやら、是れへ進め。

ト恐る〳〵舞臺へ來り、ずつと下手へ平伏する、是れにて善太夫金兵衞悪い奴が出たといふ思入。

内膳　すりや其方が返り忠をいたし、此の連判狀を所持いたして、白石へ名乘り出でしか。

三左　左樣にござりまする。

内膳　して又如何なる事柄より、返り忠をいたせしか、それにて具に申し聞けい。

三左　はツ、私事は其の以前鳴神峰右衞門と申しまする角力取でござりましたが、御隱居におなりなされました先殿樣の御寵愛受け、同じ仲間の兄弟分荒浪梶之助と申すものと、二人ながら伊達家のお抱へ、あれなる原田甲斐殿や、兵部樣に賴まれまして、花の廓へ殿樣を勸めて連れ出し女郎を買はせ、放埓者にしてくれろと。（ト言ひかけるを冠せて、）

甲斐　こりや〳〵神並、默り居らぬか、おのれ先君の寵を蒙りそれを忘却いたしながら、御場所柄をも

辨へず、お家に拘はる遊里の事ども出る儘に申し立て、殊更以て兵部侯や此の甲斐が賴みしなどとは、跡方もなき拵へごと、あゝ、こりや何かその身の罪を脫れんと、安藝へ荷擔いたしたな。こりややい、おのれ先君御隱居の砌り、舊惡露顯に及び扶持放れと相成りしを、御分家たる兵部侯御不便に思召され、向後心を改めよと說諭を加へ小者となし、お救ひありし其の御恩を又候忘れ惡心起り、兵部侯のお納戸金二百兩を盜み取り、出奔なせし人非人、生面さげて御評定所へよくもめ〳〵出でたるよな、えゝ、少しは心に恥ぢ入り居らぬか。

トきつと言ふ、是れにて三左衞門はッと思入れ。

内膳　甲斐、控へい。

甲斐　はッ。（ト是非なく控へる。）

内膳　假令如何なる者たりとも、此方に於て調べ半へ、口入れいたすは無禮なるわえ。

甲斐　はッ。（ト平伏なす。）

内膳　こりや神並、もそつと進め。

三左　はッ。（トもぢ〳〵して居るゆゑ、）

内膳　あいや、何も恐るゝ事はない、もそつとそれへ進んでよからう。

侍一　板倉侯のお許しなれば、
侍二　貴賤を論ぜず此の處へ、
侍三　御意に隨ひ、
侍四　進んでよからう。
三左　はッ。（下恐る〳〵安藝の前へ出る。）
内膳　昨年中より數度の對決、安藝に十分理のある上、證據等をも持參いたせど、甲斐は辯才勝れし者にてやゝともすれば安藝を言伏せ、其身の罪を脱れんとなし、かれこれ落着延引せり、見受けし所其方は、國訛り等も抜け居れば、定めて辯舌爽かならん、安藝に代つて今日ッた對決の儀を申し附くる、それにて甲斐と議論をいたせ。
三左　えゝ、すりや私めに對決を。
内膳　おゝ、下賤の儀ゆゑ粗言は許す、遠慮いたさず此處で、甲斐と對決いたしてよからう。
　　是れにて安藝思入あつて、
安藝　はゝッ、有難き其のお許し、こりや〳〵神並、身共に代り、それにて對決いたしてくりやれ。
三左　其のお許しの出る上は、勝つか負けるか知れませぬが、以前が角力の私だけ、上る土俵が上覽

の場所も天下の裁斷所、四本柱の年寄は伊達安藝樣をお賴み申し、板倉樣のお行司で、啊吽の息の仕切りから、立合ふ相手は不足なき、坂東一の橫綱どん、さらば議論とやらかしませう。(ト是れより誂への世話めいたる合方となり、)おい甲斐どん、何もそんなに濟まし込んで白ばツくれる事アねえ、如何にもこんたの言ふ通り、綱宗公が御隱居後は、扶持放されて出入りを留められ、惡事へ荷擔をした事が、誰いふとなく年寄衆の耳へはひつて仲間を構はれ、身のたゝずみにも困るから、惡事の元締兵部樣へ轉げ込んでの家來分、手先きを働き居るうちに、弟分の荒浪が鬮に當つて龜千代樣を、殺す積りで奧御殿へ、忍び込んだを松前殿に見咎められて忽ちに、繩目を受けた拷問も、奧州一の大力と呼ばれた人の鐵扇で、數限りなく引ツぱたかれ、砂で固めた力瘤が破れるほどに責められても男と見込んで賴まれた、爰が我慢の押切りと、怺へて殘る預りの其日の詮議もそれなりに、引かれて歸る牢の內、嘸ぞ空腹で居ようから忍んで行つて此の酒を、呑ましてやれと此のわたしに使ひを言ひ附け一德利、情と見せて毒のある酒とも知らず持つて行き、格子の外から入れて遣る酒は地獄で佛だと、呑めば忽ち荒浪が、胸は浪打つ七轉八倒、虛空を摑む苦しみの中に一期の金言を、殘して異見をしてくれたが肝にこたへて成程と、返り忠をする心になり一味徒黨の連判を首尾よく盜んで持ち出したが、こりやア此儘逃げた日にやあ、直に跡から追手

掛り引戻されゝば犬死にゆゑ、その憂ひをば脱れる爲め、金に目が暮れ盗みをして逃げたと見せて二百兩、持出したのがこつちの山、川を渡つて下總から常陸を廻り白石の小十郎樣へ訴へ出で今日まで姿を見せなんだが、事によつたら證人に是れへ呼び出し甲斐どんと、突き合はせると安藝樣が、おつしやつたのを樂しみに、腰掛けへ來てさつきから、今か〱と待ち草臥れ、尾籠なやうだがお次ぎまで、忍んで樣子を見て居たのだ。隙があるなら、おい、甲斐どん、何處からでも仕掛けなせえ、押手を強く逆の手で、四十八館取る氣でも、側に見張つてお行司の板倉樣がござるからは、本手でなけりやあ團扇は上らぬ、押しか捻るか、さあ〱〱、遺恨相撲だ、覺悟しろ。（トきつと思入れ、甲斐是れに逆らはぬこなしにて）

甲斐　盲目蛇におぢずと取るに足らざる匹夫ゆゑ、議論をなすも片腹痛く、言はせて置けばよいかと心得、悪人安藝へ取り入つて、よくも仕組みし拵へごと、然し議論が仕度いとあれば、いたしても遣はさんが、おのれ二百兩の金子を奪ひ、賊でないとの言ひ譯なすとも、其身の罪は脱れぬ所、まつた荒浪梶之助こと兵部侯の御家來となり、荒木和助と改名せし奴、賊を働き逐電なす、おのれと因みを結びしとは、是れ賊心のある證跡、いつぞや御殿へ忍び入り、金子を奪ひ立ち去らんと、いたせし折に鐵之助に取押へられ捕縛を受け、牢舍なせしは自業自得、察する所同類にて、

和助が白狀いたす時はおのれの身にも拘はる儀ゆゑ、毒酒を以て殺害致せしならん、謀書の連判取り拵へ、忠義顏にて白石へ訴へ出でしなんぞとは、跡方もなき僞り者めが。

三左　おい〳〵甲斐どん、そいつはいかねえ、幾らこなたが辯才で、謀書々々と言ひ張つても脫れぬ證據はこなたの手で書いて渡した賴み狀、兄弟分の和助からわしが預り、是れ爰に、（ト懷中より一札を出し甲斐へ見せる、甲斐ちつと思入）何と動きは取れめえがな。

トきつと言ふ、內膳正甲斐へ目を附け、

內膳　其の證書是れへ。

侍二　はツ。（ト取次ぎ件の一札を內膳正に渡す。內膳正開き見て、）

內膳「一、此度の一儀首尾よくいたしくるゝに於ては、百石の祿を與へ、永く當家の家來たるべく、家祿の望みこれなき時は、金子千兩を以て引替候也。寬文九年四月十六日、荒木和助どのへ、原田甲斐。」こりや甲斐、大場道益へ渡せし一札、今目前にて其方が認めたる手鑑と三左衞門が持參の證書、是れへ並べて見る所、何れも同筆同印にて、寸分違はぬ上からは、最早罪科は脫れぬぞよ。

甲斐　あいや、何やう仰せられましても、それ皆以て謀書謀印、毛頭覺えはござりませぬ。

内膳　むゝ、かゝる證據のありながら、知らぬと陳じ僞るは、獄卒どもの手に掛り、そちや拷問に掛りたいか。

甲斐　覺えなき儀を斯くまでに、片手打ちなる御吟味あらば、是非もない儀にござりまする。

三左　こりや面白い、おい甲斐どん、片手打ちだと思ふなら、こなたが死太く白狀せぬか、わしが謀書を構へたか、御前に於て根較べ、相拷問に掛らつせえ。

甲斐　やあ匹夫のおのれと何ゆゑに、相拷問に掛らんや。

内膳　然らば其身の恥辱を思ひ、眞直に罪に伏すか。

甲斐　でも、身に取りて覺えなき儀を。

三左　そんならやつぱり御前に於て、相拷問に掛らつせえ。

甲斐　やあ、何のおのれと。

内膳　然らば、それにて罪に伏すか。

甲斐　さあ、それは。

三左　相拷問に掛らつしやるか。

甲斐　さあ、

内膳／三左　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
内膳　こりややい、汝も大家の執權ならずや、武士らしく罪に伏せ。（トきつと言ふ、甲斐思入あつて）
甲斐　此上は安藝と某、相拷問の儀、仰せ附けられ下さりませう。
内膳　何ぢや、安藝と相拷問を願ふ。
甲斐　はツ。
内膳　こりや、神武以來珍らしい願ひぢや。（ト思入あつて）さては安藝が老體ゆゑ、おのれ相拷問を恷へ忍び、安藝相果てなば勝利ならんと、深くも巧む汝が底意。
甲斐　やあ。（トぎつくり思入）
内膳　こりやい、總じて侍たる者は、一度獄卒の手へ渡り、拷問などに掛る時は、弓矢取る身の穢れなれば假令此方より申し附くるとも、其の儀は平に御宥免を、申し出でねばならぬ所、それに自儘に相手を選び、相拷問を願ふとあれば、是れなる神並三左衛門と、相拷問を申し附けるが、貴賤を論ぜぬ天下の裁斷、片手打ちだと申し張るか。
甲斐　さあ、それは。

内膳　何ゆゑ相手を選み居るぞ。

甲斐　さあ、それは。

内膳　さあ、

甲斐　さあ、

甲斐
内膳　さあ〳〵〳〵。

内膳　爰を何處と心得居る、恐れ多くも將軍家の此裁斷所を辨へをらぬか。

トきつと言ふ、甲斐ぢつと思入あつて、

甲斐　はゝあ、恐れながら申上げます、まだ〳〵お答等もござりますれど、折惡しく持病差起り、お答へも成兼ねますれば、今日はお下げの儀を願ひ上げ奉りまする。

内膳　すりや、今日も急病なるとか、はてさてそちはやゝともいたすと、都合よき場合に臨み、持病の癪氣差起るとは、重疊なる病氣ぢやなう。

甲斐　天に風雨のうれひあり、人には不時の病ひありと、兎角持病に取りつめられ、お答へとても成り兼ねまするは、殘念至極にござりまする。

内膳　然らばそちが願ひに任せ、今日は下げ遣はすが、最早脱れぬ其身の非分、武士らしく申譯に、（ト切

腹せよといふこなしあつて氣を替へ、)いやさ、此度こそは、罪に服せ。

甲斐　申譯の相立ちませねば、罪に服すでござりませう。

内膳　こりや、さうなくては叶ふまい。(ト安藝に用ひて、)こりや安藝、非分に陷る甲斐が願ひ、内膳聞濟み得さするも、武士の情ぢや、左樣心得よ。

安藝　はッ、有難き御仰せ、既にあやふき其處へ、

甚五　實證現はれ何程か、

六左　是れも偏に、

二人　板倉侯の、

内膳　あ、こりや、双方共立て。

諸士六人　立ちませい。

甲斐安藝　はあ。

ト是れにて甲斐殘り、皆々下手へはひる。

内膳　然らば、この由お奥へ參り、御大老へ申上げん。

ト立上り思入あつて、

可哉古の訴を聽くものは、其の意を惡んで其の人を惡まずと、孔叢子の刑論に見えし明文なれば、其の意を取つて身が計らひ、最早罪科は（トにつたり思入あつて、）どりや、此の由を申上げん。

小姓　御大老より甲斐殿へ、お藥湯を下さる丶、服藥めされ。

ト諸士附添ひて奧へはひる。甲斐前後を見廻し、ぢつとこなし、奧より小姓藥湯を持ち出來り、

甲斐　なに、大老よりお藥湯を、は丶あ。

トこなしあつて、呑むことよろしく、此の内小姓脇差を取つて側へ置き、甲斐の呑みたる茶碗を持ち奧へはひる。甲斐あたりを見て脇差に眼を附け、不審の思入にて、

はて、心得ぬ是れなる一腰、唯今參りし小姓衆が置かれしか、はてさて、粗相千萬（トよく〳〵見ることありて、）はて、小姓に似合はぬ是れなる一腰、定めて中身は銘作ならん。（ト見て、）刃金色、あつぱれ業物。む丶、扨は是れにて。

トよろしく思入あつて、鞘へをさめるを道具替りの知らせ、甲斐こなしあつて、この道具廻る。

（評定所控所の場）――本舞臺一面の平舞臺正面白地中形の襖、上下折廻し、中程に細き透しのある

塗骨障子屋體、總て御評定所控所の體、上手に以前の安藝、左右に甚五兵衛六左衛門住ひ、下手に三左衛門控へ居る、此の見得調べにて道具留る。

甚五　いやなに安藝殿、昨年中より永々の御心勞の甲斐あつて、先づは今日勝利と相成り、

六左　物數ならぬ我々まで、悦ばしさは如何ばかり。今日といふ今日は、日本晴がいたした心地。

甚五　恐悅至極に、

兩人　存じまする。

安藝　是れと申すもあれに居る三左衛門の働きと、且は板倉内膳正樣、御大老を搔き退け、取仕切つての御裁斷に、流石大惡無道なる甲斐めも罪に伏し居つたは、此上もなき我が身の悅び、片時も早く龜千代樣や、袖ケ崎の御隱居樣へ言上いたして共々に、恐悅が申し上げたい。

ト三左衛門前へ出で、合方になり、

三左　安藝樣へ申し上げます、假令斯樣に返り忠を、いたすといへども私は、一旦惡事へ與いたし手先きを働き先殿樣を、廓へ連れ出し御放埓をお進め申せし大罪人、何卒御家の御法通り御仕置を願ひ上げまする。

安藝　いや〳〵それには及ばぬ事、假令惡事に與するとも、おのれと心を改めて返り忠をいたせし上、

今日甲斐と議論をなし、我が心勞を助けくれしは、一方ならぬ大功なれば、舊惡の儀は許し遣はす。

三左 すりや、大罪を働きましたを、此の儘お許し下さりますとな。

安藝 承はれば其方には、一人の親あるよし、宅へ歸つて其父に孝を盡して今日の、褒美の沙汰を相待ち居よ。

三左 え、有難い其のお詞、仰せに隨ひ花川戸の宅へ歸つて親仁にも、久し振りにて逢ひまして、悅び顏を見せました上、非業に死んだ弟分の、荒木和助が菩提をば訪ひ弔らつて遣りませう。

甚五 惡人ながら死に際に善に戻つて其方に、異見を殘せし和助とあれば、是れも主家へ對しては、一つの功のある者ゆゑ。

六左 跡懇に弔らうて、彼れの忌日の來りなば、佛事供養を營みて、墓參りでもいたしてやりやれ。

三左 それも千住の馬捨場へ遣られた切りで私がお國へ參つて居りましたゆゑ、跡を營む者もなく嘸や迷つて居りませうが、今日甲斐を罪に伏させ敵を取つて遣りましたれば、是れで成佛いたしませう。是れから參つて無緣寺で、戒名でも拵へて貰ひ、千人塚へ線香と塔婆を立て、やりませう。

安藝 然らば近日此方より、沙汰をいたすを樂しみに、歸宅いたして待つて居やれ。

三左　左樣なれば伊達安藝樣、御兩所樣にも御機嫌よろしう。

甚五　今日は終日、

六左　大儀であつた。

三左　どりや、お先きへお暇いたしまする。

ト合方調べにて、三左衛門下手障子屋體へはひる。爰へ上手より以前の近習出で、

近習　はツ、熊田蜂谷の御兩名へ、何か火急の御用あつて、御大老樣お召しでござりまする。

安藝　何かは存ぜず御大老の、お召しとあれば、御苦勞ながら、

甚五　とは云へ是れに御一人、

六左　お殘りあるも何とやら、

安藝　はて、帶劍法度の御評定所、其心配には及ばぬわえ。

甚五　左樣ござればわれ〳〵は、

六左　お奥へ行つて參りませう。

近習　いざ、御案內いたしませう。

ト右の合方にて、近習先きに甚五兵衛六左衛門上手の障子屋體へはひる。跡に安藝殘り思入あつて、

安藝　是れまで數度の對決にも御大老には甲斐方へ、兎角御最屓遊ばされ、それゆゑ理非の落着も今日まで延引せしが、首尾よく勝利と相成りしに、御大老樣我々に、何か火急の御用とは、はて心得ぬ事どもぢやなあ。

ト安藝がつかりとせし思入にて、差俯向き居る、爰へ下手の障子を明け、以前の甲斐拔身を持ちて窺ひ出で、安藝の側へ差寄り、

甲斐　伊達安藝、觀念。（ト脇腹へ突込む、安藝其手を捉へ、甲斐を見てきつとなり）

安藝　やあ、欺し討ちとは卑怯な奴。

甲斐　こゝ言申さず、くたばり居らう。（ト刎り居る、爰へ上手より六左衞門出來り此體を見てびつくりなし）

六左　おのれ狼藉、

ト甲斐へ組付く、甲斐ちよつと立廻り、六左衞門の脇腹を突く、是れにて六左衞門どうとなり、

狼藉者々々。

ト呼ばゝる、ばたばたになり、下手より侍六人出で、甲斐を取り卷き、

一　やあ、御場所柄をも辨へず、

二　狼藉いたす大罪人、

三　いで、われ〳〵が、
六人　手捕りになさん。
甲斐　當の相手の兩人は、深手を負はせ是れにて寂滅、奥へ踏み込み内膳めを。
四　やあ板倉倈を討たんなどゝは、
五　言語に絶えし不屈き者、
六　いで、其の儀なら、
六人　われ〳〵が、
甲斐　何を、
　ト是れより早舞になり、甲斐よろしく立廻り、引張りの見得にて道具廻る。
　（甲斐組留の場）――本舞臺元の上段の道具、しらべにて道具留る。と後と花道揚幕の方にて、
大勢　狼藉者々々。
　ト聲する、よき程に、花道より甲斐血刀を提げ出來り、花道にて思入あつて、舞臺へ來り、上の方へつか〳〵と行きかける。爰へ上手の襖を明け、侍六人襷鉢卷十手を持ち、固めて居る、甲斐びつくりして下手へ來り、下手の襖を明ける、内に同じく侍六人十手を持ち固め居る、甲斐舞臺眞中にてきつ

と思入、是れより誂への鳴物になり、仕拔きの立廻りよろしくあつて、トヾ甲斐刀を打ち落され、侍
○に組留められ、

○ それ何れも、お出合ひなされ〳〵。

ト荒れの鳴物になり、上下より、侍大勢出で、甲斐を組留める、此の引張りよろしく道具廻る。

（元の控所の場）――本舞臺元の控所の道具、爰に六左衞門氣絶をして倒れ居る、以前の甚五兵衞出で、
安藝を介抱して居る、此の道具しらべにて道具留る。

甚五 ちえゝ、今一足早く參れば、安藝殿といひ蜂谷氏にも、斯かる不覺は取らせまじきに、殘念な事
をいたしたなあ。

ト無念の思入、此の時時計の音になり、正面の襖を引拔く、後書割の座敷遠見、爰に以前の內膳正
眞中に銀の茶碗を持ち立身、左右に侍一、二、三、四附添ひ居て前へ出る、甚五兵衞此體を見てびつ
くりなし、下手へ下りはツと平伏する。

內膳 御大老には御休息中ゆゑ、落着の儀を申し入れんと、われ〳〵奥へ參りし後にて、張番の者の越
度より、甲斐が刃傷重々の不屆き、急所の深手も嘸かしならんと、內膳手製の積心丹、安藝へ藥
湯を與ふるぞ。

甚五　はッ、こは恐れ多き御手當、早速服藥いたさせん。（ト安藝の側へ寄り耳許へ口を寄せ、）こりや伊達安藝殿、恐れ多くも板倉侯より、お藥湯を下さりまするぞ。（ト是れにて安藝はつきりとなり、）
安藝　なに、板倉侯の御出席とな。（ト內膳正を見てびつくりなし下手へ下り、）は、はッ。（ト平伏なす。）
內膳　それ、用意の布を、（ト甚五兵衞へ白布を渡す、甚五兵衞安藝の疵口を結ぶことよろしくあつ。）それ、藥湯を。
侍二　はッ。（ト件の茶碗を甚五兵衞へ渡す。）
甚五　板倉侯よりお藥湯を。（ト出す。安藝手に取り、）
安藝　身に餘りたるお藥湯、有難く頂戴仕つりまする。（ト押戴いて呑む事よろしく、內膳正四邊を見て、）
內膳　見れば蜂谷六左衞門にも、深手を負ひし樣子なり、お次へ連れ行き手當をめされ。
侍三
侍四　はッ。（ト兩人にて六左衞門を抱いて下手の屋體へはひる、內膳正思入あつて、）
內膳　こりや安藝、痛み所は如何なるぞ。
安藝　恐れ多き其の御諚意、世にも稀なる御良劑にて、痛手の苦痛も忘れし如く、
甚五　蘇生の御恩如何ばかりか、有難く存じ、
安藝
甚五　奉つりまする。

内膳　おゝ、左樣か、滿足々々。
安藝　假令此身は惡人めに、切刻まれて相果てましても、聊か厭ひはござりませねど、
甚五　たゞ殘念なは御丹精にて、勝利となりし落着も、甲斐が狼藉いたせしゆゑ、
安藝　案じらるゝは、
甚五　主家の納り。
内膳　いや、其の儀は必ず心配いたすな、伊達家は本領安堵なるぞ。
安藝　すりや、お祟りは、
甚五　ござりませぬか。
内膳　御大老の御役宅に於て、甲斐が狼藉いたすといへども、其方共には御法を守り、劍戟を用ゐざるゆゑ、家安泰は身に代ても、内膳計らひ得さするぞ。
安藝　はゝッ、有難き其の御諚、既に昨年われ〳〵共箇條の訴狀を所持なして、お役向きへ願ひ出しに差戻され、お取り上げなき其處を、
甚五　板倉侯の御仁惠にてお取り上げ下されしは、旱魃に雨を得し農夫も斯くやと有難き、お惠みなりと心得しに、

安藝　斯く段々の御丹精にて、勝利と相成る落着は、
甚五　全く侯の御恩澤、伊達家の記錄に留めおいて、
安藝　決して忘却、
甚五　仕つりませぬ。
安藝　是れと申すもさいつころ、恩義を受けし天草の、
內膳
甚五　えゝ。
安藝
內膳　あいや、弓矢取る身は、（ト肩衣の衣紋を直すを木の頭）相互ひぢや。
ト宜しく思入、安藝甚五兵衞はツと平伏なし、
安藝　重々厚き御懇情、
兩人　有難う存じまする。
內膳　甲斐が如き奸惡あれば、汝が如き誠忠現はれ、邪正を照す天下の鏡、實に曇りなき其方は、あつぱれ伊達家の、
ト衣紋を繕ふを木の頭、
礎ぢやなう。

トよろしく感心の思入、此の模様時計の音にて、

ひやうし　幕

ト幕引附けると、どん〳〵にてつなぎすぐに引返す。

（返し、伊達玄關先の場）――本舞臺眞中三間の大玄關、破風造りの屋根、正面白地大形の襖、左右海鼠の杉戸、此前一面の式臺、此の上下筋塀にて見切り、よき所に松の立木、日覆より同じく釣枝、總て伊達家上屋敷玄關先きの體、式臺の上に五幕目の澤田、吳竹、松島、錦木、澤の井、是れへ腰元八人附添ひ、皆々長刀を持ち立ちかゝり居る、此の見得早舞にて幕明く。

澤井　モウシ澤田どの、思ひ掛けない大變が、出來いたしたではござりませぬか。

澤田　さればでござります、今日俄のお呼び出しにて、お役宅にての御裁斷、心ならねば善惡の、御沙汰如何と打擧り、お案じ申して居つたる所、

吳竹　惡人甲斐が非分となり、いよ〳〵此方の御勝利と、御評定所よりの知らせの注進、それぞお家の御安泰。

松島　我が君の御武運をお開き遊ばす幸先きと、淺岡さまを始めとして、數ならねども私共も一同に悅ぶ間もなう、

錦木　又候二度目の御注進、何事なるかと承はれば、惡人甲斐が伊達安藝樣へ、刃傷に及びしとの事

腰一　左樣な事のある時は、

腰二　お家の安危も心許なし、

腰三　多分は甲斐に安藝樣が、

腰四　お切られなされて敢なくも、

腰五　お果て遊ばしたと申すこと、

腰六　昨年中より御老體にて、

腰七　御心勞の甲斐もなう、

腰八　敢ない御最期遊ばすとは、

腰一　ても情ない、

八人　事ぢやなあ。

澤井　どうぞお家が安泰にて、納るやうに仕度いもの。

澤田　それに附けても熊田さま、蜂谷さまは如何なるか。

吳竹　是れも惡人甲斐の爲めに、御最期お遂げなされしか。

松島　鐵之助さまが途中まで、御樣子を見にお出でありしが、
錦木　今にお戻りなされぬは、心掛りな事ではある。
澤田　早う御樣子が、
皆々　聞きたいものぢやなあ、
ト案じる思入、有鳴物にて花道より、ばた〳〵になり、五幕目の鐵之助袴股立肩衣脱ぎかけ、大小にて出來り、花道にて舞臺を見て、
鐵之　女中方、それに居られしか。
澤井　や、あなたは松前鐵之助さま。
澤田　して御樣子は、如何なるか。
吳竹　お待ち申して、
皆々　居りました。（ト此内鐵之助舞臺へ來て、）
鐵之　只今某馬上にて、數寄屋河岸まで參りし所、伊達安藝殿の乘物に出會ひ、直樣樣子承はりしに、深手は負へど氣丈の老體、未だ落命召されぬ由にて、熊田蜂谷が前後に附添ひ、急いで是れへ立歸られゝば、先きへ駈け拔け我が君へ、御注進に參つてござる。

澤田　すりや、未だ御存命とな。
皆々　ちえゝ忝けない。（ト嬉しきこなし）
鐵之　然らば此の由、
皆々　我が君樣へ。（ト此時正面襖の內にて）
淺岡　あいや、我が君樣には、疾くより是れに。
鐵之　あのお聲は、
皆々　淺岡どの。

ト正面の襖を明け、五幕目の淺岡裲裝にて龜千代を誘ひ出ろ、是れにて皆々式臺の左右に下に居て、はッと平伏する、淺岡こなしあつて、

淺岡　はッ、我が君樣には松前殿へ、お詞下しおかれませう。
龜千　おゝ、早速の知らせ、大儀なるぞ。
鐵之　はゝはッ。
淺岡　お襖越しに承はれば、父伊達安藝には存命で居られますと申す事、して熊田どの蜂谷どのにも差したるお怪我はござりませぬか。

鐵之　左れば安藝の御老體には、餘程重手を負はれし御樣子、又差添ひし蜂谷氏も急所の深手に氣絶なせしを、板倉侯のお手當にてやうやく息を吹き返し、血氣の壯士に步行なし、駕籠に附添ひ熊田と諸共、苦痛を怺へ歸館の樣子。

澤井　御存命とは申せども、伊達安藝さまには御老體、

澤田　お駕籠に搖られ御屋敷まで、お歸り遊ばす途中にて、

吳竹　若し御落命でもある時は、我が君樣を始めとして、

松島　淺岡どのにも取り分けて、其のお歎きは如何ばかり。

錦木　是れへお越しになるまでは、少しも心は許されず、

澤田　ても案じられる。

皆々　事ぢやなあ。（下向うへ思入、此時揚幕の內にて）

足輕四人　えつさつさ〱。（下聲する、皆々向うを見て）

鐵之　あの人聲こそ、正しく乘物、

淺岡　最早御門へ、

皆々　近附きしか。

ト ばた〳〵になり、花道より足輕四人誂への乘物を舁き、前幕の甚五兵衛袴股立にて、六左衛門同じく袴股立にて、腹へ白布を卷き手負ひのこなしにて、兩人駕籠へ附添ひ出で、直に舞臺へ來り、式臺の眞中へ乘物をおろし、甚五兵衛六左衛門下手に下に居て、

甚五　はツ、我が君樣には此處に、

六左　はや御出座に、

兩人　ござりまするか。

龜千　おゝ、兩人とも大儀ぢやぞ。

兩人　はゝはツ。

ト 平伏なす、龜千代式臺へ駈下り、自身に駕籠の戸を明ける、内に前幕の安藝白布を腹へ卷き俯伏し居る、龜千代是れを見てびつくりなし、

龜千　や、こりや安藝爺には、落命せしか。

澤田　そんなら最早、

女形
皆々　はあゝ。（ト泣き伏す、淺岡は安藝に縋つて泣き居る龜千代を押し隔て、）

淺岡　我が君、おあきらめ遊ばしませ。（ト涙を怺へぢつと思入、）

鐵之　どれ御樣子を、

ト乘物の側へ行き安藝を駕籠の内より抱へて出す、是れにて足輕四人は乘物を擔いで下手へはいる、

鐵之助安藝を式臺の眞中へ直し、懷中へ手を入れ窺ひ見て、

我が君、お歎き遊ばすな、未だ腹内溫かなれば、急所の深手に駕籠に搖られ、氣絶なせしと覺えたり。

澤井　まだお命が、

女形皆々　ござりますとな。

龜千　それにて氣附を與へて見い。

鐵之　はッ。

ト腰の印籠より藥を出し安藝に含ませ活を入れる、是れにて安藝氣の附きし思入、鐵之助態ときつとなつて、

あいや、伊達安藝殿、君の御前で無禮千萬。

ト大きく言ふ、是れにて安藝びつくりなして目を開き、龜千代を見て下手へ下り、

安藝　はゝはッ。(ト平伏する。)

淺岡　して今日の落着は、御前如何にござりまするぞ。
安藝　おゝ、娘悅べ、我が君樣お悅び遊ばしませ、御家は御安泰にござりまする。
鐵之　すりや、お役宅を騷がせしも、
淺岡　當家へお祟り、
皆々　ござりませぬか。（ト是れより誂へ本調子の合方になり、）
安藝　帶劍法度の御場所柄とて、深手を負へど我々は無刀で彼れを相手となし、あしらふ折柄板倉侯お立會下されしゆゑ、惡人共は重罪となり、我々共は御賞譽に預り、お役宅のお玄關より恐れ多くも板倉侯の、お乘物まで頂戴いたし、立ち歸つたる身の面目、娘悅べ、松前殿お悅び下さい、今ぞ命は旦夕に迫るとも、伊達のお家の安泰を見屆けて死す身の本懷、此世に思ひ置く事なし、改め我が君樣へ、恐悅申し上げまする。（ト苦痛を怺へる思入にて辭儀をなす。）
甚五　同じ家中にありながら、長の年月敵味方、日頃呉越の思ひをなす惡人甲斐めに伊達安藝殿、むざむざお切られなされしは、嘸御殘念にござらうが、お家のお爲めと劍戟を用ゐずいたして扇子にて、彼れをあしらふお働き、
六左　拙者も其場へ立會て甲斐が無慚の刃に掛り、一旦氣絕いたせしかど、板倉侯のお手當にて積心丹

を服藥いたし、蘇生なしたる御高恩、伊達安藝殿にもお藥湯を、頂戴ありしそれゆゑに、

甚五　我が君樣へ恐悅を、申し上げるは是れ正に、

六左　板倉侯の御恩澤、お禮は詞に、

甚五
六左　盡されませぬ。

鐵之　實に先哲の教へにも、情は人の爲ならずと言ひ傳へしも宜なるかな、過ぎし昔京地にて君の祖父たる正宗公、板倉殿の御安危をお救ひありしと聞きつるが、今又當家惑亂の際に望んで板倉侯のお情ゆゑに本領安堵の、思ひをいたす我々、

淺岡　やがて荷擔の惡人を殘らず處刑に行ひて、いよ／＼お家安泰と相成りまする其の時は、先づ何事を差しおいても、我が君樣には板倉侯の、御恩をお謝し遊ばしませ。

龜千　おゝ、當家の爲めには板倉殿は、守り神ぢやと思ふぞよ。

安藝　上意の如く御家の守護神、鹽竈神社同樣に、

甚五　われ／＼共は、

六左　心得まする。

龜千　只殘念なは安藝爺に、昨日參つた千代松を、逢はせて遣らぬが殘念ぢや。

安藝　なに、千代松が國許より、

淺岡　はッ、參りましてはござりますれど、お逢はせ申さば御忠節の妨げにもと存じまして、異見を加へ戻しましたが、只今となりお父上に申譯がござりませぬ。（ト是れにて安藝思入あつて氣を替へ）

安藝　いや〳〵そちがあやまりならず、よくぞ其儘追ひ歸した、末期の際に逢ひたうない。

ト愁ひを隱す思入、女形皆々こなしあつて、

澤田　我が君樣の仰せの通り、昨日遙々お國許より、片倉さまがお連れ遊ばし、

呉竹　お祖父さまや淺岡どのに、逢ひたいばかりに江戸表へ、お尋ねありし千代松どの、

松島　御忠義のゐとはいひながら、無情ういうて其儘に、お戻しありし淺岡どの、

錦木　嘸やお跡で此由を、お聞きあつたら情なやと、其のお歎きはいかばかり、

澤井　お察し申して私共さへ、涙で袖を濡らしまするてもお愛しい、

五人　事ぢやなあ。

鐵之　あ、斯くと知りなば小十郎殿、歸國はおさせ申すまじきに、殘念な事いたしてござる。

ト皆々愁ひの思入、此時下手にて、

小十　あいや、末期の名殘り、安藝殿へ、千代松を御覽に入れん。

鐵之　や、あのお聲は、

皆々　片倉さま。

ト合方きつぱりとなり、下手より五幕目の小十郎、上下大小草履にて、千代松の手を引き出來る、鐵之助淺岡小十郎を見て、

鐵之　御歸國ありしと思ひの外、

淺岡　ても、思ひ掛けない、

皆々　どうして是れへ、

小十　其の御不審は御尤も、昨日御殿を退出いたし今朝歸國と存ぜしかど、今日俄にお役宅へお呼び出しと承はり、御裁斷の御沙汰をも承はりたく存ぜしゆゑ、御分家たる田村侯へ久々にて推參いたし、惡人退治の儀などを論じ、閑談數刻に及ぶ折柄、將軍家の御評定所にて、甲斐が刃傷知らせの注進、さてこそ大事と手配いたし、惡事の棟梁たる兵部殿の邸宅を田村侯の御手勢にて十重二十重に取圍み、上の御沙汰を待ちし所、いよ〳〵甲斐が重罪と極り、兵部殿には切腹めされ惡人殘らず召捕りゆゑ、お家の安泰祝さん爲め、取つて返せし御門内にて委細は具に承はる、いざ〳〵是れなる千代松に、末期の名殘りいたされよ。

龜千　おゝ、小十郎出來し居つた、よく千代松を連れて參つた。

鐵之　君のお許し、千代松どの、

甚五　いざ〳〵あれへ、

六左　お進みなされい。

千代　はッ。（ト安藝の側へ駈寄り、取縋り、）お祖父さま、お懐しうござりまする。

ト是れにて安藝千代松の顔をぢつと見て、

安藝　おゝ、孫か、忠義を盡せよ。

千代　はい。

淺岡　是れが此世のお別れゆゑ、ようお顔を見ておきませうぞ。

千代　左様なれば祖父様は、御養生が叶ひませぬか。

淺岡　何の急所の此の深手、御養生が叶はうぞいなう。

千代　わあゝ。（ト泣き伏す、是れにて皆々愁ひの思入よろしく、安藝きつとなつて、）

安藝　なに、これしきの痛手にて、落命いたす安藝ではない、お家の安泰目出度い際に、歎くは君へ失禮なり、必ず泣くな、えゝ、歎き居るな。

龜千　こりや安藝爺、此の千代松は予の側で召仕うてもよいな。

安藝　はヽッ、それぞ面目身に餘り、有難い儀でござりまする。

龜千　おヽ左樣か、それで予も悦ばしいぞよ。（ト是れにて皆々思入あつて）

小十　實に栴檀は嫩葉より、しるき上意の馨しく、

鐵之　臣下を愛す我が君に、深き御仁慈ある上は、

甚五　惡人どもの奸計にて、一度惑亂いたせしも、

六左　御代納りて先君の、汚名を雪ぐ青葉山、

淺岡　その陸奧の名所も、千代を壽く千代松島、

澤田　替らぬ色の御武運を、祈る社の鹽竈や、

吳竹　阿武隈川の水淸き、流れの底を宮城野に、

松島　壺の碑礎の、かたき堅固のいはほ山、

錦木　やがておだへの橋越えて、急げば道も千賀の浦、

澤井　寄する浪さへ穩かに、黃金花咲く金華山、

小十　實る五穀も大國に、

鐵之　泰平うたふは、
皆々　目の當り、
安藝　祝して一指、（ト扇を持ちて立上り）
ウタヒ〽東南西北の敵を安々亡ぼせり。
トよろしくあつてがつくりとなる。淺岡千代松これを見て、
淺岡　思へば是れが。（ト左右より安藝へ縋る。）
鐵之　お家は萬歳、
皆々　萬々歳、
小十　目出度い。（ト扇を開くを木の頭）
皆々　目出度い。
ト引張りよろしく、下座の謠ひにて。

幕

實錄先代萩（終り）

是は今日の新聞と街を呼で賣歩く次第は然も熊谷の宿屋の湯場で散切の書生と見られし乳房より明す女に御家直が横に車の強ねだり餘儀なく結ぶ夢さめて右膳へ貢の其金も位牌へ額み故郷を後に繁が伊香保にて追手の小助に捕へられ盗みの詮議に惣助が情け荒氣の折檻を留めて戀慕の神保氏罪を許して權妻にかはす小梅の枕橋うきに迫りて身を投げるおよしが迷ひさつぱりと晴れて悦ぶ利右衛門が噺しに知れし父の仇世を牛島で倉橋に恨みを返せし烈女おしげが本望遂げし雑報奇談

隅田川容寫

富士額男女繁山

「女書生繁」は明治十年四月、作者六十二歳の時、新富座に書卸された。作者が明治の新社會に着目して當時に於ける一種の現代劇、社會劇として描いた世話物の一つであつて、比較的初期の物に屬し、又佳作の一たるを失はない。田村成義編纂の「續々歌舞伎年代記」には「……女書生は當時假名垣魯文が主として發行なし居たる假名讀新聞に上州熊谷宿にて男装婦人が露顯に及び警察署へ引致されたり云々と記載しありたるを種とし河竹が筆を取て女書生妻木繁を菊五郎に勤めさせしが此繁はざんぎりあたまにて一見書生の形なれど何處やらに優しい情があり左團次の御家直に無理クドキに口說かれ止むを得ず其身を任す宿屋の場にて達磨合羽の裏の赤いのを見せるなどは女の色氣を失はざる注意にて他の優の及ばざる所なりと老劇通は等しく稱讃したりと」ある。最近大正九年に尾上梅幸丈と六代目菊五郎丈とによつて上演され、好劇家の印象を深からしめたものである。

書卸しの時の役割は、尾上菊五郎（書生妻木繁實は右膳娘おしげ）、市川左團次（人力車夫御家直事倉橋直次郎）、中村完十郎（神保正道）、岩井半四郎（戸倉屋の娘およし）、中村芝翫（神保若黨惣助）、中村仲藏（戸倉屋利右衛門、妻木右膳）、市川子團次（廏別當小助）、中村喜世三郎（神保の下女おたつ）、尾上梅五郎（書生牛窪角藏）、澤村清十郎（小松屋下女おせん）等であつた。

挿繪にしたのは、大正九年五月市村座に上場された時の寫眞で、梅幸の繁及び六代目菊五郎の車夫御家直である。

大正十四年十月

校訂者

富士額男女繁山（女書生繁――四幕九場）

序幕

筋違萬世橋の場
駿河臺神保邸の場
熊谷宿小松屋の場

〔役名――書生妻木繁實は右膳娘お繁、人力車夫御家直實は倉橋直次郎、同別當小助、書生牛窪角藏、同馬淵大藏、人力車猿雞、同豚吉、小松屋若い者與助、座頭玄龍、戸倉屋利右衛門、神保正道、同若黨惣助。戸倉屋娘およし、戸倉屋の下女お虎、神保の下女お辰、同お咲、女按摩お鍋、小松屋の下女お仙、其他。〕

（萬世橋の場）――本舞臺一面の平舞臺、上手萬世橋の袂、橋の袂に瓦斯燈を建て、眞中埒垣の内樹木の植込み、高札に諸木折取るべからずと記し、此後上手へ片漏斗に湯島より聖堂を見たる遠見、上手ペンキ塗西洋の柵矢來、此内租税局の屋根を見たる心、柵矢來の前に床几二脚、一人乘の人力車を置き、總て筋違萬世橋の體。爰に豚吉人力車夫のこしらへにて西洋の赤い玉を持ち、下手に長太の丁

稚持運びの手車を側へ置き立掛り居るを、猿兼やはり人力車夫のこしらへにて其中へはひり、留めて居る、此見得かつぽれの鳴物にて幕明く。

猿兼　いつまで手前が追つ駈けても、どうせありやあ取れねえから、もうあきらめろ〳〵。

長太　いや〳〵何でも捉えたら、おれにくれると言つたから、どうしても取らずにはおかれねえ。

豚吉　さあ、威張るなら取つて見ろ〳〵。

ト是れにて豚吉上手へ逃げる、玉は段々上へ昇る、長太は跡を追つ駈ける、猿兼思入あつて、

猿兼　待て〳〵、斯うしろ〳〵、手前に鬮を引かせるから、當つたら玉を取らせて遣らう。

豚吉　成程こいつあ面白い、さあ引いて見ろ〳〵。(ト猿兼木札の附きし細引の鬮を出し、)

猿兼　さあ此鬮に當つたら、手前に玉を取らして遣るが、もしあぶれたら其替り、拳骨を喰はせるぞ。

長太　そりやあおいらも合點だが、拳骨より此車を、お前達へたゞ遣るぜ。

豚吉　生利な事を言やあがつて、其車を取られたら、此れから旦那へ歸られめえ。

長太　それは言はずと百も承知さ、さうなるからには飽までもだ。

猿兼　えゝ惡く洒落やあがる、こいつも番頭にはなれねえ代物だ。

長太　さうさ、どうで始終は人力屋だ。

猿兼　え丶口の減らねえ小僧だぜ。
長太　え丶口の減らねえ人力車だ。
豚吉　成程毎日爰へ來て、油を賣つて居るだけあつて、惡い事を覺えるばかりだ。
長太　是れもお前達に仕込まれたのだ。
豚吉　え丶碌でもねえ事を言やあがるな。
猿兼　さあ鬮を引け〳〵。（ト猿兼出す、長太選取る思入あつて、木札の鬮を引く。）
長太　さあ當つたから、こつちへ出しねえ。
猿兼　や、こいつ何うして當てやがつたか。
豚吉　忌えましい事をした。（ト玉を出す、長太受取り。）
長太　毎日使ひの歸りがけ、油を賣つて居るうちに、お前達の當り鬮へおれが印をして置いた、是れから煮込でも奢つてくれ丶ば、直に種を敎へて遣るぜ。
猿兼　そんなら鬮へ印があつたか、酷い事をしやあがるぜ。
豚吉　まるで生馬の目を拔くやうだ。
長太　お前達は死んだ馬の目で、まるで節穴同然だから、おれが療治を賴んでやらう、さあ此車へ乘つ

て行きねえ。(ト件の荷車を出す。)
猿兼　人を馬鹿にして居やあがる。
豚吉　さうして何處へ連れて行くのだ。
長太　湯島の病院で、佐藤先生に見て貰ふのだ。
猿兼　惡く洒落る小僧だぜ。
　　ト此内長太玉の絲を車へ結び附け、
長太　おい車屋さん、此車で思ひ出したが、毎晩おいらが習ふ本に、お前達の事が出て居たぜ。
兩人　そりやあ何と出て居たのだ。
長太　車屋は百の玉を買つて、小僧の爲には損す。
兩人　そりや何のこつた。
長太　それ見ろ、何だか分るめえ、こりやあお前達のする事よ。
兩人　え。
長太　ゝゝゝどうじ教だといふ事よ。
猿兼　えゝ、何處まで白癡にしやあがる。

豚吉 忌えましい小僧だなァ。(ト此内下手へ車を引いて行き、)
長太 又明日遊びに寄るぜ。はい、玉です〳〵。
　　トやはり右の鳴物にて長太玉の附きし車を引いて下手へはひろ。兩人跡を見送り、
猿兼 まだ口の明かねえうちに、とんだ小僧のペテンに掛り、飯屋の殘りの三百を、棒に振つてしまつたが、こいつがほんの玉なしだ。
豚吉 どうかあいつの埋草に、小僧は懲りたが大店の、いゝ若い衆でもつらめえて。
猿兼 持込みの仕事でもしてえものだ。
　　トやはり右の合方にて、花道より牛窪角藏・散髪流着し下駄がけ書生のこしらへ、馬淵大藏同じこしらへにて、蝙蝠傘を突き出來り、
角藏 日に増し暖氣の時候に移り、追々薄衣の身輕となりて、大きに安堵の思ひでござる。
大藏 其暖かに引替へて、君も僕も御同樣に、甚だ囊中淋しいには、ほとんと恐縮仕つる。
角藏 それは心配したまふな、諸事は僕の權にある事、たゞ弱りますは車道の塵埃、是れには大きに恐怖いたすが、兎に角あれへ行きたまへ。
大藏 オーライ〳〵。(ト兩人舞臺へ來る、猿兼豚吉兩人を見て、)

猿傘　もし旦那、御都合まで參りませう。

豚吉　えもし、旦那々々。（ト是れにて兩人車屋を見て、）

角藏　おゝさう言ふはいつも乘る、馴染の顏の車屋だな。

猿傘　旦那お久し振りでござりました。新宅へ入らつしやるなら、お供をさせて下さいまし。

豚吉　綱引を附けて威勢よく、直に吉原へ持込みませう。

角藏　いや、どうして今から白晝に、吉原などへ行かれるものか、先づぶら〳〵と遊步がてら、紋左衞門の溫泉から、花岡町の火除地で見世物を見物するのだ。

大藏　それから先きはお成道の梅月へ行き、天麩羅で數杯喫した其上で、如何に成行くか未だ確證は得ざれども。

猿傘　そんな事をおつしやらずと、時が早うござりますから、是れから奧山へお供しませう、別品さんの顏を見ながら、楊弓でもお引きなされませ。

豚吉　此頃新子で、滅法いゝ新造が出ましたぜ。

角藏　先々月の日曜より、久しく山へ行かぬから、運動ながら赴きたいが、何にしろ囊中錢なしには恐縮いたす。

大藏　過日より當今は、煙草さへもない始末、幸ひ車屋一服貸したまへ。
猿彌　さあ〱お上りなさい、煙草は惡うござりますが、煙管は今通しました。
　　ト叺煙草入れにマチの箱を出す。
大藏　酒は我慢が出來るけれど、煙草ばかりは我慢が出來ぬ。
角藏　君うまくのたまふな、酒なら我慢が尙出來まい。
大藏　是れは眞に當てられました。
角藏
大藏　はゝゝゝ。
　ト端唄の合方になり、花道より妻木繁、散髪鬘シヤツポを冠り、羽織着流し駒下駄がけ、書生のこしらへにて洋杖を突き、片手に蟇口の胴亂を提げ出來る、少し跡より御家直逆熊の鬘、人力車夫のこしらへにて、毛布を腰に卷き出來り。
直　もし旦那、御都合まで如何でござります、お安くまゐります、もし旦那々々。
　ト呼びかける、是れにて繁跡を振返り、
繁　おゝ丁度よい、是れから乗らうと存ぜし所、ちと遠方だがよろしいかな。
直　よい所ぢやあござりませぬ、何處までゝも參ります。

繁　そんなら是れから熊谷まで、直ぐ遣つて貰ひたいが、代價は何程で參るな。
直　お高い事は申しませんから、一圓二分下さいまし。
繁　よいとも〳〵一圓二分が二圓でも、急いでさへくれるなら、其邊に厭ひはない。
直　二圓下さいますならどんなにも急いで參りますから、車を取つて參りますまで、ちよつとお待ちなすつて下さりませ。
繁　そんなら僕は目鏡の袂に、待合はして居るぞ。
直　直ぐ取つて參ります。
ト御家直足早に引返してはひる。繁舞臺へ來る、角藏等兩人見て、
角藏　それへござつたは妻木氏。
大藏　君は何れへお出でゝござる。
繁　どなたかと存じたら、牛窪氏に馬淵氏、今日は休暇で御遊歩かな。
角藏　如何にも近邊でありながら、未だ見物をいたさぬから、馬淵氏と兩名で、花岡町の見世物場を見物いたす目的でござる。
大藏　然し君に出會の上は花岡町でもござるまい、是れから直に北廓か乃至は假宅へ登樓いたし、愉

角藏　快を極めようではござらぬか。
繁　成程是れはよい思し立ち、妻木氏一つ出掛けませう。
角藏　折角のお誘ひながら、今日は遁れぬ私用にて、是れより直ぐに淺草邊へ是非參らねばならぬゆゑ、君のお供はいたし難く、殘念の至りにござります。
大藏　御同作が出來ぬとは、折角目的が附いたのに、はて扨困つた。
角藏　これ。（ト制す。）
猿兼　近頃殘念にござります。
豚吉　いらつしやいますなら、丁度五大區の車が居ります。
繁　お供をさせて下さいまし。
猿兼　いや只今是れへ參る途中で、約束をいたし參つた。
直　ほい、是れも近頃殘念の至りだ、はゝゝゝ。
トやはり右の合方にて、花道より以前の御家直、御免なさい〳〵と人力を引き足早に出來り、
旦那、大きにお待遠でござりました。
ト下手へ車を置く、提灯桐油などを纏め臺箱へ仕舞ひ、草鞋を二足こしらへ居ろ、猿兼の兩人見て

猿雞　誰がこせえた仕事かと思つたら、御家直の旦那か。

直　おれの所へうたひ込みで、やうく口が明けたのだ。

豚吉　見りやあ燈火や雨具まで支度をして、何處へ行くのだ。

直　おらあ是れから押通しで、熊谷まで引ツ張るのだ。

猿雞豚吉　なに、熊谷まで行くのだ。（ト繁これを打消し）

繁　あこれく、僕が熊谷と申したのは、淺草の熊谷稻荷へ參るのぢや。

ト御家直へ言つては惡いといふ仕形にて呑込ませる、御家直思入あつて、

直　へい、熊谷稻荷は承知して居ります。兼、やつぱり七曲りから新堀端がいゝの。

猿雞　熊谷さまなら、其道だ。（ト角藏大藏思入あつて、）

角藏　君は開化の書生に似合はず、熊谷稻荷を信仰めさるか。

大藏　新聞紙にも見えたる如く、神佛を祈るとは、さりとは不開化と見受けますて。

繁　いや御尤もにはござれど、僕が國許の親仁と申すは、大の頑固でござるゆゑ、賊除けを稻荷へ祈りくれと郵便狀が着いた故、據なく參詣いたすが、まだ陰暦を用ゐる輩、なかく舊弊を脫しませぬに、ほとんと恐縮いたしまする。

大藏　いや恐縮と申せば、僕等二名がちと恐縮の至りながら、君に折入つて歎願がござるが、何と
お聞屆け下されぬか。
繁　して我輩に依賴の件とはな。
角藏　外の事でもござらぬが、先年中は島原跡の新富町に下宿なし、馬淵氏と兩名で日々讀書に勉強な
せしが、月に叢雲花に風と土地の繁華に氣を奪はれ、夏は麥湯の茶店に憩ひ、夜露に濡れる事を
忘れ、婦女が床几に夜を更かし、冬は牛店の定客に下女を相手に暇を費し。
大藏　夜更けて歸宿に翌日は、睡眠ゆゑに讀書も出來兼ね、晝は寐ね夜は冴え、只婦人のみに勉強せし
ゆゑ、當今疲弊の貧書生。
角藏　今日の休暇に運動がてら、斯く遊步はいたすものゝ、囊中十錢の札もなく、ほとんと違却いたし
た所。
大藏　計らず是れにて出會せしは、是れ則ち天の賜、何卒一時の會計に二圓程借用したし、眞に我
輩賴み入る。
角藏
大藏　どうぞ御承知下されい。
ト兩人繁に賴む、此內御家直は草鞋を拵へ、猿兼兩人は煙草を呑み居る、繁思入あつて、

繁　新富町の下宿にては、先づ十名が九名までは大學校にあらずして、昔噺しの大學屋諸客床に入るの門なりと、多分は婦女の勉強にて、君達もそれへ入學でござりましたか。

兩人　誠に汗顏の至りでござりまする。

繁　全體婦人の勉強なれば、日本よりもいつその事、サントウイスへ洋行して、婦人の窮理學へ入門なさりませ。

角藏　はゝあ、サントウイスと申すのは。

大藏　どういふ所でござりますな。

繁　日本より海上僅に千五百里足らずの島にて、男女の間馴れ易く、極野蠻國と申すこと、君達如何でござりまする。

角藏　早速塾を出門して、どうかサントウイスへ參りたいものぢや。

大藏　いや、助平な牛窪氏だ、はゝゝゝゝ。

角藏　又僕の恥を申さるゝか、いや恥と申せば妻木君、どうぞ二名の願ひの件をば。

兩人　お聞屆けを願ひます。（ト繁思入あつて、）

繁　如何にも御兩名のお賴みは、只今是れにて御用達申す、其替り君達に、爰にて願ひ置きまするは

角藏　本日面會いたせし事は、密々にお願ひ申す。
大藏　金圓お調へ下さる上は、如何にも口外いたしませぬが。
繁　定めて何處ぞへ穴ッぱひりでござらうな。
角藏　いや、聊かも左樣な事はござりませぬ。（ト此内繁懷中より紫の袱紗包を出し、中の紙入より一圓札を二枚出す、此時手紙を一通落す。）然らば二圓お渡し申す。（と角藏受取り、）
大藏　早速のお聞濟み、眞に忝うござる、何れ近日國許より、學費が參らば其時は。
角藏　正に返上仕つる。
繁　御返金は御都合次第で、決して苦しうござらぬが、くれ〴〵も面會の儀を。
角藏　聊かも心配したまふな、斯く貧書生に此場にて、お惠み下さる恩返し。
大藏　君の信義は我輩始め、なか〳〵餘人の及ばぬ所、此儀厚く謝しまする。
　　ト兩人繁に禮を言ふ、御家直思入あつて、
直　旦那、よろしくばお召しなされませ。（ト繁立上り、）
繁　然らば君達。
角藏
大藏　何れ近日。

繁　失敬許したまへ。（ト繁車に乘る、御家直毛布を掛ける、猿兼豚吉思入あつて、）

猿兼　直公しつかり、

豚吉
猿兼　稼ぎねえ。

直　みんなも早く上げて來ねえよ。（ト御家直梶棒を上げる。猿兼豚吉ちよつと後を押して遣る。）はい、頼みます〳〵。

　　トやはり右の合方にて、御家直繁を引いて上手石橋を渡りはひる、跡合方引流し、

角藏　思ひ掛けなく繁に逢ひ、當てにいたさぬ金札が二圓手に入る上からは、是れより直ぐに同伴して。

大藏　花園町の秋葉へ赴き、運動巡りの杉林、絹綿渡りを一見なし。

角藏　御成道の梅月で、天で一杯きこし召さう。（ト兩人立上る。）

豚吉　旦那、御成道の天麩羅なら、帳場の側に娘が見えますぜ。

猿兼　えゝ、助平な事を言ふなえ。

大藏　是れも僕等と同輩ぢやな。

豚吉　サントウイスへ行きませうかね。

猿○　それよりは梅月へ行きてえものだ。

角藏　一緒に連れて行きたいが、今見る通りの始末ゆゑ、今日の所は願ひ下げだ。

大藏　然し煙草を借りた替り、殘は必ず持つて來て遣はす。

豚吉　それは有難うござります。（ト角藏大藏上手へ行きかける。）旦那殘を忘れちやあいけませんぜ。

角藏　それは僕の懷中時計だ。

豚吉　なぜでござります。

角藏　はて、胸にあると申すのぢや。

猿○　時計がありもしねえくせに。

角藏　何だと。

猿○　いえ、時計を忘れないやうに願ひます。

角藏　どれ、花園町を。

大藏
角藏　遊歩いたさう。（ト端唄の合方にて兩人上手へはひる。）

豚吉　殘りを持つて來るといつたが、冷てえ天麩羅は眞平だ。

猿○　あの二人も牛鍋と、矢場へ學費を入揚げる、年中鮓臭え生利連だ。

豚吉　それに引替へ御家直が、乘せて行つた書生さんは、男も好けりやあ裝もよし、錢放れがよさゝうだが。

猿兼　熊谷稻荷といつたのは、何か差合でもあると見えて、何でも直の支度を見るに熊谷へ行くに違えねえが、うたひ込みとは言ひながら朝ツぱらから一人占めで、いゝ仕事をしやがつた。（ト前に落ち散る手紙を見附け、）や、爰に手紙が落ちてるるぜ。（ト拾ひ上げ豚吉思入あつて、）

豚吉　そりやあ今の書生さんが、袱紗包みを開ける時、落したに違えねえ。

猿兼　何と書いてあるか讀めねえが、手前は元が士族だから、此上書を讀んで見ろ。

ト出す、豚吉受取り、

豚吉　「東京駿河臺神保樣御内にて、妻木繁殿、同苗右膳」としてあらァ。

猿兼　それぢやあ今の書生さんは、神保樣に居るお人か。

豚吉　そんなら手前は神保樣と、心易くして居るのか。

猿兼　二三度仕事を賴まれて、心易くなつたから、おれがそれを屆けて遣らう。

豚吉　たゞの手紙ぢやあ詰らねえが、もしや札でもありやあしめえか。（ト大きく言ふ。）

猿兼　これさ靜かに言へ。（ト立上り四邊へ思入あつて、）一番目方を、（ト床几へ腰を掛け、）引て見ろ〳〵。

と兩人頻りに手紙の目方を引く、此模様よろしく、寄席の鳴物にて道具廻る。

(神保邸庭口の場)——本舞臺三間の間中足の二重、上手一間床の間、此脇三尺の地袋戸棚、眞中太鼓張りの出這入口、下手腰張りの茶壁、上手の棲掃出しの腰窓、平舞臺上手紅梅の立木、四つ目垣石燈籠突這を置く、下手ペンキ塗西洋開き門の裏を見せ、上下建仁寺垣の張物にて見切り、いつもの所枝折戸、總て駿河臺神保邸庭口の體。爰に惣助袴裝若黨のこしらへにて、徳利と茶碗を盆に載せ、酒に醉ひし思入にて臂を枕に寐て居る、お辰下女の裝にて箒と采配を持ち、掃除をして居る、此模樣鞠唄にて道具留る。

お辰 又極りで惣助さんが、旦那のお留守を幸ひに、臺所で呑口を捻り、所もあらうにお座敷で、やれ梅がよく咲いたの敷松葉が感服だのと、とう／＼爰で呑ん倒れ、正體なしに大鼾き、呆れて物が言はれぬわいな。(トお辰惣助の側へ行き、)もし惣助さん、今に旦那樣がお歸りゆゑ、掃除をせねばならぬから、ちよつと起きて下さんせ。もし惣助さん／＼。(ト搖起す、惣助目を擦りながら、)

惣助 もう呑めねえ／＼、是れから呑むと留守居が出來ねえ、堪忍してくれ／＼。

お辰 そんなに爰であやまらずとも、誰がお前に呑ませるものかいな。

惣助　何だ、呑ませるから聲色を遣へ。

お辰　是れはしたり、何を寐言を言ひなさんすのぢや。（ト是れにて惣助釆配を取つて振りながら）

惣助　さあ新橋と京橋へお乘りなさい、さあどうでござい〳〵、エヽヨイ〳〵。

お辰　それは何の眞似でござんすぞいな。

惣助　分らねえ人達だ、聲色を遣へと言つたから、千里軒の馬車の聲色だ。

お辰　何を寐言を言ひなさんす、ほんに不斷は好い人だが、お酒に醉ふと此位困る人はないわいな、もし惣助さん〳〵。

惣助　むう〳〵。

ト搖り起せども惣助其儘に寐る。誂への合方になり、花道より神保正道羽織襠高袴、シヤツポを冠り、駒下駄にて出來る、跡より小助紺の印附の法被、同じ股引、足袋跣足にて人力の毛布を抱へ附添ひ出來り、花道にて、

正道　去年と違つて一月から、今年は寒さが薄いゆゑ、凌ぎよい替りには霜解けで道が惡いな。

小助　下町と違ひまして、山の手は赤土ゆゑ、車の齒が吸附いて、日蔭の所は困り切ります。

正道　それゆゑ今日は骨折りであつた。（ト兩人舞臺へ來り、小助駈拔け、）

小助　お歸り。（ト言ふ、是れにてお辰びつくりして、）それ、旦那樣のお歸りぢや、惣助さん〳〵。

ト搖り起してお辰は下手へ出迎ふ、惣助びつくり飛び起き、上手へ向ひ、

惣助　はツ、お歸りでござりまするか。

お辰　是れはしたり、こちらぢやわいな。（ト是にてびつくり向直る、此内正道は内へはひる。）

惣助　是れはよくお出でなされました。

小助　又惣助さんは寐惚けたのか。

ト正道は笑ひながら二重上手へ來る、お辰褥に手あぶりなどを出す、正道よろしく住ふ、惣助は寐て居たを隱さうと思ひ、下手へ手を支へ、

惣助　今日は嘸お寒うござりましたらう。

正道　宅は寒かつたか知らぬが、外は殊の外暖氣であつた。

惣助　いえ、お寒いのではござりませぬ、お暑うござりましたらう。（トもぢ〳〵して居る。）

小助　惣助さん、もう何時だらうね。

惣助　さうさ晩飯を喰つたツけか、喰はなかつたけか、ドンを聞かねえから分らねえ。

小助　まあ臺所へ行つて顏でも洗つて、寐惚け目をば覺して來なせえ。

惣助　何をおれが寐惚けるものか。
小助　それでも時を知らねえぢやあねえか。
惣助　何知らねえ事があるものか、言ふだけ遲いといふのを差引け、今日は昨日の今時分だ。
　　ト此内お辰は正道の懷中物シヤツポを片附け茶を出す、正道茶を呑みながら、
正道　成程惣助が申す通り、今日は昨日の今時分、是れより慥な時計はない。
惣助　どうだ、おれが勝ちだらうな。
小助　成程こいつア理窟詰めで流石のおれも一番跣足だ。どれ、裏へ行つて足でも洗はう。
　　ト小助正道の駒下駄を持ち、下手へはひる。此内正道地袋の戸の明いて居るに目を附け、
正道　今日は留守に何れよりか、誰ぞ人が參つたか。
惣助　いつもは少し居睡りますが、今日ばかりはお玄關に、ちやんといたして居りましたが、どなたもお出ではござりませぬ。
正道　いや、そちが申すは當てにならぬ。辰、誰も參りはいたさぬかな。
お辰　はい、いつもお出でになりまする、碁のお相手も今日は、どなたもお出でなさりませぬ。
　　と正道地袋の内にある、用箪笥の引出しを拔き中を見て、

正道　在宅いたす折とても、是れへ錠前しかと下し、慥に中へ入置きしが。（ト思入。）それとも圍碁に心奪はれ、外へ仕舞ひ置きたるを、我が失念いたしたるか。（トぢつと考へる、惣助思入あつて、）

惣助　もし旦那樣、何ぞ紛失いたしましたか。

正道　如何にも見失うた物がある。して、妻木が見えぬが宅に居るかな。

お辰　妻木樣は今しがた、急な御用があるというて、町へお出でゝござりまする。

正道　むゝ、すりや外出せしとか。

　ト考へる思入、合方きつぱりとなり、下手の門より以前の小助案内して、猿粂豚吉の人力屋おづ〳〵と附き出來り、平舞臺下手へ控へ、

小助　旦那樣へ申し上げます。

正道　おゝ、何の用ぢや。

小助　外の事でもござりませぬが、是れへ連れて參りましたは、萬世橋に居りまする人力屋でござりますが、此手紙を拾ひましたと、態々屆けてくれました。（ト正道の前へ出す、正道取上げ上書を見て）

正道　こりや妻木繁方へ親右膳より參りし手簡、何れで是れを拾ひしぞ。（ト猿粂前へ出で、）

猿粂　へい、私共が目鏡の袂へ仲間の者と寄り集り、客待ちをして居りますと、今日は日曜に引替へ朝

から車がから隙で、こぼして居ります所へ、御家直といふ友達の車に乘つてお出でなすつた年の頃は、左樣さ、吉幾歳だらうな。

豚吉　廿四五位に見えましたが、痩ぎすな書生さんが多分落した此手紙、直ぐに追ッ駈けて屆けようと出掛けて見ると上書に、神保樣とありましたから。

兩人　それでこちらへ持つて參りました。（ト此內惣助兩人を見て）

惣助　おゝ、さういふ貴樣は此間、仕事に賴んだ車屋だな。

猿傘　左樣でござります、それゆゑお名前を存じて居りますから、早速持つて參りました。

惣助　何しろ親切によく屆けて下すつた。（ト禮を言ふ、正道思入あつて）

正道　して其書生は車にて、何れの方へ參りしか、其行先は知るまいな。

猿傘　その行先は淺草の、熊谷稻荷と申しましたが、

豚吉　それはほんの表向きで、何でも詞の樣子では、中仙道の熊谷へ、

兩人　行つたやうでござります。

正道　なに熊谷の方へ參りしとか、むゝ。（トちつと思入あつて氣を替へ、）いや、其方も心に掛け、忙しい中を駿河臺まで、大きに御苦勞であつた。

小助　よく新聞の廣告にも、落し物が出て居るが、お前のやうな車屋に拾はれゝば世話なしで、斯うして直ぐに屆けてくれるが、左もない日には手紙なぞア、所詮出ッこはありやあしねえ。

正道　惣助、二人の者に禮を遣はせ。

惣助　へい、畏まりました、一錢づゝも遣りませうか。

正道　えゝ、心の利かぬ奴ぢやわい。

惣助　左樣なら、二錢も遣はしませうかな。

正道　其方では取計ひが出來ぬ。（ト お辰を呼び囁く、お辰心得奧へはひる、正道手紙を開き讀む。）

猿兪　そんな御心配などには及びませぬ、毎度御贔屓になりますお家、

豚吉　駿河臺と申したとて、目鏡からは僅かの道程、決してお禮には及びませぬ。

惣助　えゝ、うまく嘘をついて居るぜ。

小助　これさ惣助さん、默つて居なせえ。（ト 爰へ奧よりお辰紙包みを持ち出來り）

お辰　是れは少しばかりだが、旦那樣がお前方へ、お禮の印に上げますわいな。

猿兪　お禮を戴かうといつて、持つて參つた譯ではござりませぬ。

豚吉　決してこんな事をなすつちやあいけませぬ。

小助　これさ〳〵、そんな義理を立てねえで、下さるものなら夏もお小袖、お貰ひ申して置くがいゝ。
猿兼　まことに是れぢやあ濟みませぬが、
豚吉　左樣なら、お貰ひ申しておきませう。
正道　甚だ些少ぢやが、遠慮なく取つてくりやれ。
猿兼豚吉　大きに有難うござりまする。（ト受ける。）
惣助　それ見た事か、貰つたくせに、そんなら先刻から斷らなければいゝに。
お辰　これさ、默つて居なさんせいな。（ト正道思入あつて、）
正道　又是れを緣に、其方達に賴む用があらうも知れぬが、宅は何れに居られるか、ちよつと承はつておきたいものぢや。
猿兼　大抵は筋違に居りますが、家は下谷の山崎町十五番地の棟割長屋、齋藤兼吉と申します。（トお辰正道の前へ硯箱を出す。）吉、手前もお話し申しておけ。
豚吉　私も同長屋で込山吉之進と申します。
小助　人力車に吉之進は、豪勢不都合な名前だ。
豚吉　今でこそ人力車、是れでも元は茨城縣で槍一筋の士族でござる。（トちよつと侍の思入。）

小助　自慢らしく言ひなさんな、先祖が涙をこぼして居よう。

豚吉　違えねえ、こいつァ大きに閉口だ。（ト此内正道兩人の名前を書留め、）

惣助　禮をお貰ひ申したら、もう用はあるまいから、早く仕事に行くがいゝ。

猿參　左樣なら私共は、お暇いたしますが、

豚吉　何ぞ御用がござりましたら、ちよつとお人を下さりませ。（ト立上る。）

小助　御用があつたらお前の所へ、おれが知らせて行つて遣らう。

兩人　どうかお賴み申します。（ト枝折戸の外へ出て兩人紙包みを探り見て、）

猿參　今日は朝から三百の、玉を小僧に卷揚げられて、法が附かねえ所であつたが、

豚吉　是れで緣起がすつかり直つた。

ト鞠唄にて兩人下手の門へはひる。跡合方になり、正道思入あつて、

正道　こりや惣助、過日より其方が周旋いたして此方へ寄留いたさす妻木が在所は、慥上州と申したな。

惣助　妻木繁の在所と申すは、上州の伊香保在で、蓮華寺村と申します、邊鄙な所でござります。

正道　むゝそれにて思ひ當りしは、妻木が親の右膳より送り越したる此一封、只今篤と一見せしに繁が

旅行も正しく其件、失せたる品の目的が、こりや判然といたしたわえ。（ト是れにて小助前へ出て）

小助　して旦那樣のお留守中に、何ぞ無くなりものでもござりましたか。

正道　如何にも、用箪笥に入置きし、金貨二百圓紛失いたした。

皆々　え。（トびつくりする。）

お辰　そんなら、もしや妻木さまが。

正道　はて、人は見掛けに寄らぬものぢや。（トちつと思入、惣助は面目なき思入にて、）

惣助　是れと申すもお留守のうち、一杯遣つて前後も忘れ、とろ〳〵したのが此身の誤り、盗みひろいだあの妻木が親仁は頑固者ゆゑに此惣助と心合ず、不斷絶交同樣なれど、實の妹の悴ゆゑ、便つてこられて仕方なく、碁のお相手に旦那樣へ、お目見得させたが御緣となり、塾の入費の御苦勞やら町の下宿も爲にならぬと、厚い旦那の思召で百も入らずにお家に泊り、今では御家來同樣に一方ならぬお世話になつた、御恩を仇で返すとは、言はうやうない憎い奴、何と申してよからうやら、濟まぬ事をいたしまして、面目次第もござりませぬ。

お辰　私共もお留守をしながら、よもや〳〵と油斷せしゆゑ、斯ういふ事になりまして、申譯もござりませぬ。（トよろしく詫びる。）

小助　女中方も濟むまいが、先づ第一に惣助さんが、周旋をした繁さん、又二つにはお留守居を怠るからこんな事を仕出來して、只面目次第もないと、そんな曖昧な言譯ぢやあ、こりやあなかく濟むまいぜ。

惣助　さうお前に言はれると、わしは穴へでも這入りたいが、定めし傍の料簡では手引でもしたと思はうが、なかくさういふ譯ではない、其證據といふは今爰で旦那樣へ潔白に、命を捨てゝ言譯します、さうぢや。（ト有合ふ手焙りの火箸を取り、咽喉を突かうとする、小助止め。）

正道　狼狽たか、こりや惣助、そちが日頃の正直は、某常から存じ居るぞ。

惣助　ではござりまするが命をば、捨てねば知らぬといふ事が。

小助　はて一途に命を捨てずとも、まあ氣を落着けて話をしなせえ。

お辰　旦那樣の仰せもあれば、まあ慌てずと待たしやんせいな。（ト皆々留める。）

正道　未だ妻木が二百圓を、盗みしといふ確證を、得たと申すわけでもなければ、決して心配せぬがよい。

惣助　それぢやと申して、此儘では。（ト死なうとするを。）

正道　はて、犬死いたすか狼狽者めが。（トきつと言ふ、是れにて小助火箸を捥ぎ取る。）

惣助　二百圓といふ金を、紛失さした罪のある此惣助をそれ程に、お助け下さる思召し、何と申してよからうやら、有難涙がこぼれまする。（ト惣助涙を拭ふ、正道思入あつて、）

正道　其料簡に引替へて日本は愚西洋の、飜譯物を學ぶ身に、斯樣の事件はあるまいと思へど知れぬ人心。

小助　もし此事が探訪の、耳へはひつた曉は、直ぐに明日の新聞紙。

お辰　直きにお名前の出る事ゆゑ、迂濶に人にも話されず、

正道　それゆゑ我も心配いたす。（トぢつと思入。）

惣助　それぢやによつて申譯に。（ト死なうとするを小助これを留める。）

正道　はて、正直な、（ト件の手紙を懷中するを道具替りの知らせ。）男ぢやなあ。

ト惣助死なうとするを小助お辰留める、此模樣合方にて道具廻る。

（小松屋奥二階の場）――本舞臺一面の平舞臺、上手一間塗骨障子屋體、正面四季の花を畫きし袋張りの襖、下手一間の臂掛窓、障子を建て、腰張り茶壁、欄間に火の用心と記せし丸い掛行燈、下手へ二階の上り口を出し、總て熊谷宿小松屋奥二階の體。爰にお鍋丸髷鬘着流し、前掛按摩のこしらへ、手

探りにて錢勘定をしながら緡へ通して居る。此模樣宿場騷ぎにて道具留る。

お鍋　昨夜は深谷の近彥で思ひの外療治をしたから、今夜は定めし暇だらうと熊谷へ出掛けて來たら、いゝ時にはいゝもので、まだ日が暮れて間がないのに、今ので丁度五人目でお負けに東京者ばかり、四百の療治も一朱になつて、こんな旨い事はないわいな。

トお鍋錢勘定をして巾着へ入れる、此内下手より玄龍坊主鬘着流し、座頭の裝にて探りながら出來り、窺ひ居て、唐突にお鍋に抱き附く、

えゝ、びつくりする、誰だえ。

玄龍　おれだ、靜かにしねえ。

お鍋　おゝ玄龍さんかえ、びつくりしたよ、常談もいゝ加減におしよ。

玄龍　これさ、さう無情言はねえものだ、疾うからおぬしにあつ盛で、どこぞで逢うたら口說かうと思ふ所も熊谷の、宿で逢つたは緣の端、さつきも見世で呼び戻さうと、思つたけれどいつその事直ぐ組打に掛らうと思ひは深き盲目同士、二度とは言はぬ一の谷で、わしに功名さして下され。

トお鍋の手を取るを振拂ひ、

お鍋　止してもおくれ、斯う見えても歷然とした亭主のある身、去年の暮に三河から二人手に手を鳥が

鳴く東を指して登つて見ると、やれはあ萬歳なんぞはまつちやらこで、國へ行くにも路銀が盡きとう／＼鼓も賣拂ひ、其日に困る安泊りに二人相談納得づく、才藏さんは三十になるやならずで鴻の巣の陸軍會社の持運び、わたしは宿々療治をして、夫婦中よく暮す身を、無法無禮に後から抱き附くなんぞはまつちやらこ、はい才藏の女房でござんす。(ト大きな聲でいふ。)

玄龍　これさ、靜かにしなせえ、あゝ萬歳樂々々。

お鍋　それ程女が戀しくば、宿で押しつくらでも買ふがいゝ。

玄龍　さう無情く言はないで、おい才藏のお上さん。(ト又寄らうとするを、)

お鍋　えゝ何をするのだ。(ト振拂ふ、此機會にお鍋件の巾着を落す。)ほい、しまつた、巾着を落した。

玄龍　え。

ト是れにて兩人段々と探りながら前へ出で、互ひに鉢合せをなし後へ下る。可笑味の合方になり、爰へ階子口より與助小松屋の若い者のこしらへにて、棕櫚箒を持ち出來り、此中へはひり、兩人の鼻の先きへ箒を出す、是れにて兩人嚔をする、此間に與助箒の柄に巾着を結び附け、兩人の顏の先きへ出す、賑かな鳴物になり、與助巾着でしらす、兩人是れを探りながら起ちつ居つ洋犬の思入にて跡を追ひ三人下手へはひる、此時障子の內にて、

お仙　お客さま、御飯が濟みましたら、こちらへ入らつしやりませいなあ。

トやはり宿場騷ぎの合方にて、上手の障子を開け、お仙着流し前掛、下女のこしらへにて丸行燈を提げ案內して出る、跡より繁小楊枝を遣ひながら出來る、お仙直屋體の內より座蒲團胴亂などを持つて來り、繁よき所に住ふ、お仙下手に手をつかへ、

爰は見世二階と違ひまして、お馴染樣の外お合宿は一切家ではいたしませんから、お着物などは御心配はござりませぬ。

繁　いろ〱今宵は其方の、大きに世話になりまする。

お仙　よろしければ只今の內、直ぐにお湯に入らつしやいまし。（ト繁思入あつて、）

繁　いや新らしき湯は體の毒ゆゑ、ずつと跡にいたさうわい。

お仙　東京のお湯と違ひまして、宿屋の風呂は汚れますから、お先きへおはひりなされませ。

繁　いや汚れても苦しくないゆゑ、旅人が殘らずはひつたら、大儀ながら知らしてくりやれ。

お仙　左樣なら皆さんが、おはひりなされましたらば、直ぐにお知らせ申しまする。（ト立上り、）何ぞ御用がござりましたら、奥二階で聞えませんから、廊下にござります針金を、ちよつと引いて下さりませ。

ト お仙は二階の口へはひろ。繁思入あつて、

繁　流石は名代の旅籠屋だけ、諸國の者と合宿せず、此奥二階に一泊いたすは、五月蠅くなくて至極よいわい。(ト合方になり、階子口より以前の御家直着流し半纏がけにて出來り。)

直　旦那、嘸お草臥でござりましたらう、もう御飯を上りましたか。(ト下手に住ふ。)

繁　お丶車屋か、今しがた食事はいたした。

直　へい左樣でござりましたか、さつき一口召上つたお殘りものをそつくり貰ひ、二本御馳走になりました。

繁　二本と申さずもつと呑めばよいに、然し十時でなければ着くまいと、思つて居たが早かつたな。

直　吹上の饂飩屋から綱ッ引を頼んだので、一時間早うござりました。

繁　是れと申すも其方が、一方ならぬ骨折ゆゑぢや。(ト蟇口より一圓札を三枚出し、)萬世橋から二圓で極めたが、酒手ぐるみ一圓増して三圓そちに遣はすぞ、終日大きに御苦勞であつた。

ト御家直思入あつて、

直　それは有難うござりますが、旅籠を持つてお貰ひ申し、二圓でも多い所へ其上酒手を戴いては、誠にお氣の毒でござりますが、實は此頃人力も顏が多くなりましたので、いゝから隙で居ります所へ

旦那様のお供をしたので、久し振りで三圓といふ、金の顔を拜みまして、生返つたやうでござりまする。

繁　明日は歸りの仕事を見附け、早く東京へ歸つたがよい。

直　いえ三圓お貰ひ申しますれば、歸り仕事を捉まへずと、ぶら〱乘りに歸りますが、斯うして色色お世話になつた上は、とてもの事に、旦那のお出でなさいまする先までお供をいたしませう。

繁　其親切は厚く謝するが、是れから僕の行く先きは熊谷の在方にて、車のきかぬ細道ゆゑ必ず一緒に行くには及ばぬ。

直　それぢやあ車を爰へ預け、せめてお荷物でも持ちまして、お供をさせて下さりませ。

繁　荷物と申しても蟇口だけゆゑ、決して行くには及ばぬわえ。（ト二階口よりお仙出來り）

お仙　お客様、お湯がよろしうござります。

繁　先刻頼みおきしが、旅人は殘らず濟んだのか。

お仙　へい皆さんは、最う濟みましたから、直ぐ裏階子からいらつしやいまし。

繁　然らば一風呂はひつて參らう。

　トやはり右の合方にてお仙附いて階子の口へはひる、御家直札を財布へしまひながら、

直　一分の酒手は假宅か、元地へ持込む仕事でなけりやあ人力などにはくれねえが、一圓といふ酒手を出し旅籠までもしてくれる、こんな種はありやあしねえ、明日もどうか供をして、もう一圓も貰ひてえが、何にしろごま摺りに、是れから湯殿へ出掛けて行つて、背中でも流して來よう。

ト御家直立上り、思入あつて奥へはひる。合方になり階子口よりお仙茶盆に土瓶茶碗を載せ持ち出て來る、跡よりお芳世話娘旅裝のこしらへ、お虎同じく旅裝下女のこしらへにて附添ひ出來り、

お虎　もし女中さん、わたし共のお座敷は、どちらへ行くのでござんすえ。

お仙　はい、此お座敷の廊下づたひで、一番先きでございます。（ト下手へこなし。）

お虎　さうでござんすかえ、さうして爰のお座敷は、書生さんのお座敷かえ。

お仙　はい、左樣でございます。

お虎　もしお孃さん、今爰においでなさつた、書生さんを御覽じましたらうね。（トお芳恥しさうに。）

お芳　さつき途中でお目に掛つた、よいお方でござんすかえ。

お虎　今夜爰へ御一緒に、泊らうとは存じませなんだが、嘸あなたお嬉しうござりませうね。

お芳　こんな嬉しい事はないわいな。

お虎　もし女中さん、あの書生さんを知つておいでかえ。

お仙　今夜初めてのお泊りゆゑ、一向に存じませぬが、もし御用なら見世へ參つて、宿帳を見て上げませうか。

お虎　どうぞ後で知れたらば、内證で敎へて下さんせ。

お仙　あのお客は、東京の、菊五郎に似ておいでなさいますな。

お芳　お前よく菊五郎を知つておいでだねえ。

お仙　一昨々年高崎へ、大芝居の出來ました時、私共へお泊りなさいましたわいな。

お虎　さうして其時のお座敷は、何處のところでありましたえ。

お仙　今晩あなた方がお休みなさる、お座敷がさうでござります。

お虎　おやまあ、嬉しいねえ。（ト大きな聲をする。）

お芳　えゝも、びつくりするわいな。

お虎　さうしてあの書生さんは、今湯殿へお出でなすつたが、定めてどこもかも綺麗でござんせうが、
　ちよいと覗いて見たうござります。

お芳　そんなはしたない事をしやると、父様に叱られるわいな。

お虎　なに、あなた覗く位は大丈夫でござります。もし、湯殿はどこで見えますえ。

お仙　そこの窓から見えますわいな。

お虎　おやまあ嬉しい、どれ助平をやりませうか。（ト下手窓の障子へ穴を明け、お虎向うを覗き）もしお孃さま、ちよつと覗いて御覽じませ、風呂場がすつかり見透しで、まるで芝居の二階座敷か、三井の五階のやうでござります、あのまあお體の白いこと、爰から舌が屆くなら、べろ〳〵甜めたいやうでござります。（ト お芳心遣ひの思入にて）

お芳　これさ靜かにせぬか、聞えるわいな。（ト是れにてこちらを向き）

お虎　はい〳〵畏りました、どれもう一遍覗いて見ませう。（ト又覗き）いつの間にか悪い所へ、ランプの火屋が邪魔に出て、ちら〳〵して見憎くなつた、えゝ氣のきかないランプだねえ。（ト思はず柱を打ち）あいたゝゝゝゝ。

ト此時奥より繁湯上りにて出來る、お虎びつくりして飛退く、繁はお芳と顔見合せ、お芳は恥しさうに下手へ來り、お虎の側へ住ふ、お仙茶をつぎ繁へ出す。

お仙　お湯はお熱うござりましたか。

繁　いや、丁度入り頃であつた。

お仙　それはよろしうござりました、お手拭を掛けませう。

ト お仙手拭を取つて後の掛竿へかける、繁蟇口を明け中を尋ねる思入あつて、

繁　櫛を入れて置いた筈だが、こりや何れへか失念せしと見える、はて困つた事をいたしたわえ。」

ト此内お虎お芳に櫛を貸せといふ仕形する、お芳恥しき思入ゆゑ、お芳の挿して居る蒔繪の櫛を取つて、

お虎　お頭髪をお梳きなさいますなら、櫛をお貸し申しませう。

繁　是れは御挨拶もいたさず、甚だ失敬でござつた、折角の思召しは忝けないが、綺麗な櫛が汚れますれば、拝借には及びませぬ。

お芳　いえ〳〵大事ござりませねば、どうぞお使ひなされて下さりませ。

お虎　もしお客様え、私共のお嬢さまは、こちらから願ひましても、汚してお貰ひ申したいのでござります。」

お仙　あのやうに仰しやいますから、お梳き上げなされませ。

繁　左様なら仰せに任せ、暫く拝借いたしまする。

ト繁頭をかく、お芳是れに見惚れて居る、お虎思入あつて、

お虎　お嬢さま、お頭髪を分けてお上げなされませ。

お芳　それぢやと言うて。（ト恥しきこなし、お虎無理にお芳の手を持添へ、繁の側へ行き、）

お虎　御遠慮には及びませぬ、こちらへお出しなされませ。（ト繁の櫛を取てお芳に持たせ髪を分けさせる。）

繁　是れは計らずお世話になり、誠に悍りでござりまする。（ト後を向きちよつとお芳と顔見合せ、思入あつて其櫛を取り紙で拭ひ、）大きに有難うござりました。

お芳　いえ、其櫛は其儘にどうぞお手許で、お使ひなされて下さりませ。

繁　有難うはござりまするが、初めて面會いたしたこなたに、斯樣の品を貰つては。

利右　いえ御心配には及びませぬ、其儘お納め下されませ。

ト階子の口にて、

ト合方きつぱりとなり、階子の口より戸倉屋利右衞門旅裝好みのこしらへにて出で來る、皆々見て、

お芳　や、さう仰しやるは。

お虎　旦那さま。

繁　さてはこなたは、娘御の。

利右　へい、親共にござります。（ト下手に住ふ、繁利右衞門を見て、）

繁　おゝ、こなたは先刻上尾の宿にて、お目に掛りしお方ならずや。

利右　成程左樣にござりましたが、測らず今宵もまた爰で、

お芳　斯うしてお目に掛りますも、

お虎　それもやつぱり盡きせぬ御縁。

利右　あゝ、娘の思ひが、

繁　ええ

利右　いえ、思ひの外お早うござりました。

繁　こなたも定めし人力で、熊谷までお出でござりませう。

利右　ちと時刻が廻りまして、餘程道は手張りましたが、明日を乘附にいたしませうと、やう〳〵是れまで乘り附けました。

繁　見れば東京のお方のやうだが、何れへお出でなされまするな。

利右　私共は淺草の花川戸でござりますが、元上州の高崎から出ました見世ゆゑ、今度も實家に法事がござりまして、娘を連れて參りまするが、さうしてあなたは何の邊までお出でなさるのでござりまする。

繁　僕は上州伊香保在に、知邊の者がござるゆゑ、それへ使つて參りまする。

利右　それでは定めてお歸りには、伊香保で湯治をなさいませうな。

繁　如何にも先方の用辨次第、一兩日も逗留なし、湯治をいたしたく存じ居ります。

利右　それは丁度よい御都合、私共も戻りには廻る積りでござりますれば、又候其節あなた樣へお目に掛るかも知れませぬ。（トお芳お虎に向ひ、）

お芳　成らう事なら伊香保とやらへ、わたしや御一緒に行きたいわいな。

お虎　ほんにお孃さまの仰しやる通り、御法事は旦那さまへお願ひ申して、明日からあなたと御一緒に行きたうござりまする。

利右　これはしたり、そちまでが何をづか〳〵申すのぢや。（ト繁思入あつて、）

繁　何もお愛想はござりませぬが、煙草を上りませぬかな。

利右　決してお構ひ下さいますな、煙草は持參いたして居ります。いや、煙草と申せばあなた樣は、もしや先刻上尾の原で、煙草入を落しはなされませぬか。

繁　如何にも粗末な煙草入を、失ひましてござりまする。

利右　左樣ならお落しなされましたか、それは丁度よろしうござりました、實は先程天神橋の立場で拾ひし煙草入、家の女中に聞きますと、今方車でお立ちになつた、書生さんだと申しますゆゑ、段

段樣子を聞いて見ますと、何でもあなたと思はれますから、供の者に申し附け、假令車でお出でなさつても、僅か時計で十分か十五分の違ひゆゑ、追附くには違ひないと申し附けて遣りましたが、そちらは急ぎの人力車、こちらは疲れた旅の足、追駈けますうち御案内のうねりし道の上尾の原、とう〳〵影を見失ひ空しく歸つて參りましたが、嘸まあ是れを落したお人は困つておいでなさるだらうと、お案じ申す私は片時も煙管を置く事の出來ない大の煙草好きに、申し暮して居りましたが計らず今晩お目に掛り、爰でお返し申しますれば、大きに安心いたしまする。

繁　それは餘計なお手數掛け、お氣の毒にござりました、いやもう煙草を呑み附けまして、急に呑まずに居ると申すは、とんと手持無沙汰なもので、實は當家で煙管をば借用いたして呑んで居ります。

利右　それに附いてあなた樣へ、ちと折入つて私が、お願ひがござりまする。

繁　むゝ、して僕にお頼みとはな。（ト合方きつぱりとなり、）

利右　外の事でもござりませぬが、親の口から娘の事を、申すは我が子に甘いやうで、お話し憎うござりまするが、此お煙草入を拾ひし時、これが一目見ますると、是非ともあれを欲しいものと、口へ出しては申しませねど、自然と樣子に知れますゆゑ、どうか望みを叶へて遣り度く存じますゆ

ゐお見掛け申し、粗末な品を替りに差上げ、あなた樣のお煙草入を、娘へお讓り下さりますやう、どうか願ひたうござりまする。（トよろしく思入あつて言ふ。）

繁　何事かと存ぜしに、それはいとより易きこと、然しながら旅行中、持ち古したる煙草入、却つて失敬にござりまする。

利右　いえ〳〵其御遠慮は大きな違ひ、御所持なされて汚れたのが却つて娘の望む所。（ト言掛けるを、）

お芳　あ、もし。（ト利右衞門の袖を引く。）

利右　なに、望むと申すは手前こそ、却つて失禮と申すもの、定めてお持ち憎うござりませうが、持參いたせし替りの品と、お替なされて下さりませ。（ト繁思入あつて、）

繁　いや決して替りを受けませいでも、いはゞ一旦落せし品ゆゑ、其儘お遣ひなされたとて、聊か差構ひござりませねば、其品にてよろしくば、御遠慮なくお用ゐ下され。

利右　左樣なら此煙草入を、娘にお讓り下さりまするか、それは早速のお聞濟み、有難うござりまする。（トお芳に向ひ、）そちが欲しがる煙草入を、お客樣から頂戴したから、よくお禮を申したがよい。

ト繁の煙草入をお芳へ渡す。

お芳　是れも全く父さまのお蔭、こんな嬉しい事はないわいな。
お虎　お嬢さま、早くお禮をおつしやりませ。（トお芳思はずお虎に向ひ、）
お芳　もしお客様、誠に有難う存じまする。（トお芳と向ひ合ひ、兩人顔見合せ、）おや、是れは失敬、只今は有難う存じまする。
お虎　私も有難う存じまする。
利右　定めしお氣味が惡うござりませうが、此煙草入に只今の、櫛を添へて差上げますから、お使ひなされて下さりませ。
お芳　又逢つたわいな。（トお芳嬉しき思入、利右衛門は風呂敷包より煙草入を出し、）
繁　煙草入は頂戴いたすが、櫛までお貰ひ申しては、却つて氣の毒千萬でござる。
利右　其心配には及びませぬから、どうか是れをお間に合せに、お納めなされて下さりませ。
繁　折角の思召し、强ひて申すも如何ゆゑ、左樣なれば二品とも、お貰ひ申すでござりまする。
ト櫛と煙草入を受ける。此内お仙は掛行燈の心を搔き立て、
お仙　かれこれ十時前でござりますから、皆さまお休みなされませ。
利右　ついうかうかと話し好きに、思はぬ長居をいたしまして、嘸お睡うござりましたらう。

繁　一人旅にて徒然の所、お蔭で退屈を忘れました。
お芳　左樣なれば、あなたさま。
お虎　一人でおよるは、惜しいものだ。
利右　これ。
お虎　いえなに、おッつけ十時でござりますから、御ゆつくりとお寢みなされませ。
繁　然らば親御、御緣があらば又重ねて。
利右　伊香保でお目に掛りませう。
　ト合方にてお仙先きにお芳煙草入を抱へ、跡へ心の殘る思入、利右衞門無理に急き立てお虎も見返りながら下手へはひる、繁思入あつて、
繁　思はぬ旅人の長話しに、大層湯ざめがいたして參つた、幸ひ借りたさつきの褞袍、これなと掛けて居ようわえ。（ト有合ふ褞袍を引つ掛ける、爰へ襖を明け、御家直手を拭きながら出來り）
直　旦那は大層お早いお湯で、直にお上りなさいましたな。
繁　車屋まだ下に居つたか、僕は逆上性だから、長湯は出來ぬその上に、百度以下の熱さでなければなか／＼はひつて居られぬわえ。

直　道理で滅法お早うござりました、全體書生さん方は皆溫湯好きでござりまするが、私共は朝湯に行つて熱いのにはひり附けて居りますから、實に遲くははひれませぬ。

繁　遲いと申せば今夜は最う、大分世間が靜かになつた。

直　それに取り分け百姓や上り下りの道者なざア、不斷入れない奧二階、隣座敷も寐ましたさうで、見世とは違ひ別段に、いゝしんとして參りました。

繁　大層靜かになつたなう。（ト時の鐘誂への合方になり、繁立上り、四邊へ思入あつて、）車屋、爰へ來やれ。

直　へい。

繁　はて遠慮せずに、來やれと申すに。

直　へい。（ト御家直側へ來ろ、繁進み寄り小聲にて、）

繁　今入湯をいたした時、何か其方見たらうな。

直　え。

繁　はて、隱さず爰で言うてくりやれ。

直　いえ、何も私は見たものがござりませぬ。

繁　なに、見ない事があるものか、見たら見たと隱さずに、どうぞ爰で明してくれ。

直　假令旦那が見たらうと、何をお疑ひかは存じませぬが、風呂の中は湯氣が籠り、何が何やらぼんやりと、さつぱり分りやあいたしません。

繁　なに見ないとは申させぬ、慥に見たに違ひあるまい、丁度世間も寐靜まり、誰も四邊に聞手がなければ、決して漏れはいたさぬゆゑ、見た通りを言うてくりやれ。（ト御家直思入あつて、）

直　別に風呂場で見たといふ慥なものもありませんが、旦那の背中を流す時、ちらりと見たのはあなたの乳房、はてなと思つたばかりの事、外にやあ何も氣に附きませぬ。（ト繁ぎつくり思入あつて、）

繁　それぢやあ、そちは氣が附いたか。

直　あんまり大きうござりますから、もしや旦那は。（トいふを冠せて、）

繁　あゝこれ、何にもいふな。（ト繁はつか〳〵と障子の口、御家直は四邊を窺ひ、元の所へ來り、）さう氣が附いたらば隱しはせぬが、實の所は、おれは女だ。

直　え。（トびつくりする。）

繁　これ。（ト制す、時の鐘、合方きつぱりとなり、）

直　もし、そりやあ本當でござりますかえ。

繁　そちに見られた上からは、何しに嘘をいふものだ、斯ういふ姿になつて居るのも、此身に志願があつての事、貫くまでは隱したいから、必ず他言をいたすまいぞ。

直　旦那の口から女だと、言はれてさへも氣が附かないから、わしが他言をしませんければ、決して誰も存じませぬ。況してあなたのお爲ゆゑ、必ず御安心なされませ。

繁　そちのやうに申してくれゝば、大きに是れで安心いたす。（ト繁蟇口より十圓札を出し、紙に包み、）是れは甚だ些少なれど、口留め金にそちに遣はす。（ト出す、御家直受取り開き見て、）

直　や、こりや十圓ござりますね。

繁　それで何にも申してくれるな。

直　お貰ひ申しては濟みませぬが、是れをお返し申したら、きつと人に言ふだらうとお疑ひがございませうから、言はぬ證據に此十圓お貰ひ申して置きまする。（ト札を戴き、叺煙草入の中へ入れる。）

繁　納めてくれゝば此方も、安心いたすと申すものぢや、何れ其内歸京いたさば、直と尋ねて遣はすが、所は何れに住ひ居るのぢや。

直　お尋ねなされて下すつちやあ面目次第もござりませぬが、御徒士町一丁目十五番地の大長屋で、人力車の御家直とお聞きなされば直に知れます。（ト繁鉛筆にて書留め、）

繁　斯様に判然と分り居れば、必ず尋ねて參るぞよ。

直　うつかり人にも話されぬ事を聞いても仕方がないが、どういふ譯でお前さまは、姿をお替へなされまするな。

繁　其尋ねは尤だ、斯うして男に姿を替へ學問修業いたすのは、まあ斯うぢや。（ト合方きつぱりとなり、）子育ちがたく幼少より名まで男で育つた體、當今開化の時世には學がなければ人にはなれぬ、それゆゑ市中に女學校も立つては居れど今更に、女になるよりいつその事、書生となつて塾に入り勉強なして一廉の腕に力を得た上で、心に望む志願を貫き、江湖へ其名を賣る所存、先づそれまでは男にて、勉學なさんと思ふゆゑ、必ず他言はいたしてくれるな。

ト御家直感心せる思入あつて、

直　成程譯をお聞き申すと、色々深い望みのある事、さうして世間へ氣を配り、學問修業なさるのも、容易な事ぢやあござりませぬね。（ト此時宿屋のぼん〳〵時計の音する、）勘定するのを忘れましたが、最う何時でござりませうな。（ト繁懷中時計を見て、）

繁　今打ちしは十一時だ。

直　九時か十時と思ひましたら、もう十一時でござりまするか、餘程夜は詰りましたねえ。

繁　嘸おぬしも草臥れたらう、早く行つて寐るがいゝ。

直　有難うございます、あなたもお休みなされませ。

繁　さ、構はずと行くがいゝ。

直　左様なら又明朝、お目に掛りませう。

ト御家直會釋して階子口へ下りる、繁手を叩く、是れにてお仙廣蓋の上へ二つ物、德利すましの丼を載せ二階口より出來り、

お仙　これは先程のお女中さまより、お遣ひ物でござりまする。（ト繁の前へ置く。）

繁　是れは見事な酒肴、然し氣の毒千萬な、よろしく禮を申してくりやれ。

お仙　畏りましてござりまする。

繁　序に床を延べてくりやれ。

お仙　はいく。（トお仙上手屋體より夜具蒲團を出し、よろしく敷き、）又御用がござりましたら、何時でも起きて居りますから、お呼びなされて下さりませ。

繁　いろく大きに世話であつた。

お仙　左様なら、御機嫌よろしう。

ト　お仙上手へ行燈を直し、階子口へはひる。時の鐘合方になり、繁思入あつて、

繁　四邊に旅人の話しも絶え、晝の疲れに高鼾、是れから先きが不用心、うつかり枕に附かれぬは、肌に附けたる二百圓、此程故郷の親仁より屆いた狀の封じ目も、心に掛る左り前、先祖の代から持ち傳へた田地も今度人手へ渡し、僅な米も金を出し買はねばならぬ痩世帶、日々の煙りも立兼る燃ぬ生木に咽せ返り、涙の絶えぬ老の愚癡、終には長の病氣となり、僅か五人や七人の世話も屆かぬ私學校、顫へる筆に細々と書き送つたる郵便の、手跡がかたみにならぬ內、逢うて不孝の詫びもなし、死する命を取り止める獨參湯の金策に、奔走なせど整はぬ矢先きに目に附く二百圓弓より曲る惡心に盜み取りしも親の爲、よしや此身は縛に附き如何なる處刑に逢ふとても、親の一命助けたく厚恩受けし神保氏へ、それも謝さずに難儀をば、掛りや繫がる惣助どの、嘸や恨んでござらうが、どうぞ許して下さりませ。

ト向うへ思入あつてよろしく詫びる、此時階子の口より、御家直出來り、下手に手を突きうづくまり居る、繁透し見て、

そこへ來たのは、誰だ。

直　へい、私でござります。

繁　おゝ、さういふ聲は車屋か。
直　左樣でござりまする。
繁　何ぞ用で參りしか。
直　ちと、お話しがござりまして。
繁　むゝ、何用なるか爰へ來やれ。
直　左樣なら、眞平御免下さりませ。（ト誂への合方になり、跡へ思入あつて進み出で、）
繁　疾うに寐たと存ぜしに、何用あつて今時分、此處へ參りしぞ。
直　先刻頂戴いたしました、口留金の十圓を、お返し申しに參りました。（ト紙に包みし札を出す。）
繁　一旦そちに遣はした、金を又候返すとは、一向其意を得ざる事だが。
直　さあ、其御不審をなさいますのは、御尤でござりますが、先程三圓酒手までお貰ひ申した其上へ又此金を頂戴しては、濟みませぬからお返し申します。
繁　それは入らぬ義理立てぢや、先刻三圓遣はしたは萬世橋から熊谷まで、乘つた車の代と酒手、又十圓の其金は、密事を包む口留めゆゑ、聊か辭退に及ばぬ事ぢや、遠慮いたさず取つて置きやれ。

ト御家直思入あつて、

直　其口留めの金よりか、外にお願ひがござります。

繁　なに、外に願ひとは。

直　さつきあれから下へ行き、此街道の車引が寐込み座敷へどしこみに、膝を抱へて寐て居りましたが、さて寐附かれぬは旦那樣を、女と聞いて謀叛が兆し、此十兩の口留めを返して一晩お情を、受けたく是れへ參りました。（ト御家直よろしくこなしあつて俯向きゐる、繁思入あつて、）

繁　おぬしも目から鼻へ拔ける、狡猾者に似合はざる、左樣な無駄な口を利くな、ちらりと湯殿で乳房を見られ餘儀なく隱さず話したが、さつきも爰で申した通り、女の所行をするがいやさに、眞の男で今日までも、不審を受けし事もなく書生で暮した此體、今更となり馬鹿げた事が、何で出來やう譯がない、一人で淋しく寐られずば宿へ賴んで車を置き、深谷へ行けば娼妓もあり、何でも自由の足りる事、然しそれより此金を、抱いて寐るのが上策だらう。

直　それぢやあ是れほど手を下げて、お賴み申すにお前さんは、聞かれぬと言ひなさるのか。

繁　此件ばかりは不得心ぢや。

直　假令お前がいやだと言つても、無理にも抱いて寐にやあならねえ。

繁 何と。（ト誂への合方になり、御家直思入あって、）

直 目鏡の袂で朝から晩まで、口を酸くして客を引き、負けずに仕事をした所が、馬車に煽られ此頃は、一里の丁場も五錢か六錢、滅多にならねえ端た錢、一日藻搔いて歩いても、一分か二分が關の山で、見附けもしねえ十圓札は三拜なして飛附くほど、欲しいが返すといふ譯は、運せえありやあ一錢で十圓取れる取拔け無盡、手に入らねえ事もねえが、お前のやうな別品は、どうして一生手に入らねえ、然し高の知れたわつち共ゆゑ、其身の程を知らねえ奴と、定めて思ひなさらうが、斯う見えても辻駕籠から肩を替へてなつたといふ人力車とは譯が違ふ、元は舊幕德川家で、御徒士を勤めた士族の果、其頃近所の茶屋小屋で疫病神よりいやがられた、倉橋直次郎といふ御直參だ。（ト御家直思入あって言ふ。）

繁 其大小をたばさみし、身分を以て一新後、何故官途につかざるぞ。

直 さあそこが名代の頑固連で、二君に仕へぬ心底だとか、何處が何處までお供をするとか、理窟を附けて靜岡へ行つた所が茶畑の、世話さへ出來ねえ怠けもの、只賣喰ひに遊んでしまひ、二進も三進も行かねえとこから、又東京へ出掛けて來て、とう〳〵家祿も奉還なし、資本を貰つた其金で紅梅燒や鹽煎餅を賣るのもあんまり氣が利かねえから、當時世間が肉流行に、鍋へ切り込む葱

よりか五分もすかねえ料簡で、始めたしやも屋ですつかり耗り、首の廻らぬ借金に身代限りをしてしまひ、とう〳〵果が人力車、それから先きが脚氣を踏出し、養育院の御厄介と、覺悟を極めて居る所、思ひ掛けねえ幸ひは、ちらりと風呂場で見た乳から、心が變つて口留めの十圓札を返したのは、おれが思ひを晴らしたさ、酒手替りの無理口説き、決して跡はねだらねえから、惡い車に乘つたと思つて、うんと言つてくんなせえ。（トよろしく思入、繁思入あつて、）

繁　暴言醜語もそちのやうに、無理にも理窟を並ぶれば、どうやら道理に聞ゆれど、又此方とて長の年月、聊か人にも悟られず、斯くして居るには容易では、開化の世界は渡られぬが、そこらの邊も其方は、定めて知らずに申すのだらう。（トきつと言ふ。）

直　どうしたと。（ト合方きつぱりとなり、繁氣を替へ、）

繁　貴樣のやうに強面におつウ凄味で持ち掛けずと、外の事なら身の大事を、聞かれたそちの事だから、聞いて遣るまいものでもないが、子供の折から色氣をば捨てた天窓の散切りに、二重廻りの兵兒帶でしつかり腹を締めて掛り、身の勉強にこゝかしこ、試驗の折も及第して、彼處や此處へ下宿を借り數多落込む書生の附合、君の僕のと口では言へど、心の内はうぬのわれ、學費も遊里で遣ひ捨て懷中錢なき懶惰の友が、誘ひに來れば散歩と名を附け、牛肉店で胡坐をかき、些細の

直　事にも權をつけ身のすき鍋で茶碗酒、男も及ばぬ所行をして來て、今更女になられるものか、口留金が不足なら、色氣を附けまいものでもないが、此身の色氣は眞平だ、幸ひ貰つた酒肴、その十圓を肴にして、是れでも吞んで寐るがいゝ。(ト繁思入あつていふ、御家直進み寄り、)

繁　さあ、さう色氣なく言はねえで、出來ねえ無心をいふぢやあなし、つい出來る事だから、うんと言つて聞いてくんねえ。

直　何といつても是ればかりは、氣の毒ながら斷りだ。

繁　それぢやあどうでも聞かれねえかえ。

直　まあ、きゝ憎いの。(ト是れにて御家直むつとして、)

繁　聞かれねえと言やあ仕方がねえ。(トずつと立つて下手へ行きかゝるを、)

直　車屋何處へ行くのだ。

繁　どこへおれが行くものか、此宿の屯所へ行くのだ。

直　むゝ、そりや何しに。

繁　はて知れた事、男女姿を替へるのは、お布令のあつた天下の禁制。

や。

直　拘引されるを待つて居ろ。（ト又行き掛ゝる、繁思入あつて、）

繁　いや、行くには及ばぬ、まあ待ちやれ。

直　むゝ、それぢやあ頼みを聞いてくれるか。

繁　さあ、それは。

直　よもや、いやとは言はれめえ。（ト繁もう是れまでといふ思入あつて、）

繁　隱す素性が顯はれゝば、親の貢も心に任せず。

直　や。

繁　こいつァ心を入替へて。（ト有合ふ酒を茶碗へつぎ、ぐつと呑んで、）さあ一杯呑みやれ。

　トさす、御家直受けて、

直　思ひ掛けねえ此酒は。

繁　心に隨ふ固めの　杯。（トついで遣る。）

直　そいつァ何より有難い。（ト酒を呑む、繁は天窓の痒き思入にて以前の蒔繪の櫛を取上げ、天窓をかき其儘横へさす、御家直四邊へ思入あつて、）それぢやあ今夜は、おれと一緒に。

　ト側へ寄る、繁顏を見て忌々しい奴だといふ思入あつて、氣を替へ、

繁　何だか極りが、（ト女のこなしにて兵兒帶を前へ廻すを木の頭、）わりいねえ。

トぢつと思入、御家直はしめたといふこなし、時の鐘、割竹の音にてよろしく、

ひやうし　幕

二幕目

蓮華寺村閑居の場

伊香保湯治場の場

駿河臺神保邸の場

【役名――妻木繁、人力車御家直、庭別當小助、湯場の若い者喜助、人力車猿兼、同豚吉、醫者山井養仙、中間杢助、同專平、妻木右膳、戸倉利右衛門、神保正道、同若黨惣助。戸倉屋娘お芳、神保の下女お辰、湯場の女お山、其他。】

（妻木右膳内の場、）――本舞臺一面の平舞臺、上手一間反故張りの障子屋體、正面上の方一間の押入戸棚、此内三尺を佛檀に仕切り、中に佛具よろしく並べ、前面へ四枚の小障子を建切りあり、此下手一面鼠の破壁、此前に手習机大分積み上げてあり、下手の棲半窓のある鼠壁、正面の柱へ私立學

校妻木と記したる札を掛けあり、いつもの所藁屋根附きの門口、此外一面玉椿の生垣、よき所に榎の大樹、總て片田舍私立學校休業中の體。上の方に蒲團を敷き、此上に右膳惣髪、切繼ぎ裝にて、上へ搔卷を引掛け住ひ居る、眞中に山井養仙胡麻鹽の惣髪、羽織着流しの醫者にて住ひ、傍に古びたる手水盥ある事、下手にお倉雇ひ婆のこしらへにて、穴だらけの古き手拭を膝の上にて皺を延し疊んで居る、此見得在鄕唄にて幕明く。

養仙　いや、四五日跡に診察いたしたとは大分腹力が附いて參つたから、此分では遠からず杖でも突いて近所位は、歩けるやうになるでござらう。

右膳　是れと申すも先生の御丹精、それにて安堵いたしまする。

お倉　一體こちらのお師匠さんは、何時見てもお若いお人で、御丈夫なお方であつたが、今年はいつより餘寒が強く御持病の足が痛み、歩く事がならぬといふは、ほんに〱お氣の毒な。さうしてまあ此病氣は、何といふ病でござりまする。

養仙　されば此病症は風毒の滯りで、あがきの筋を縮めるゆゑ、それで斯樣に兩足とも引きつッて痛み出し、歩行が自由にならぬのぢやて。（ト件の盥にて手を洗つて居る。）

お倉　はい、お手をお拭きなさい。（ト手拭を出す、養仙手に取り見て、）

養仙　婆さん、是れはあなたの手拭か。

お倉　はい、東京土産に貰ひました、誂へ染めでござります。

養仙　大分時代が附いて居るが、何時こなた貰はしつた。

お倉　左様さ、いつでございましたか、何でもわしが新造ッ子の時分、新屋の小旦那に貰ひました。

養仙　それでは彼れ是れ六十年にもならうに、物持のいゝ婆アさんだ。

お倉　三年程あと餘所行きにしましたが、もう取る年で先きがないから、思ひ切つて下しました。

養仙　斯ういふ手拭は東京へ持つて出て、內國博覽會へでも出したらよからう。

お倉　錢儲けにでもなりますかね。

養仙　はて、餘りぼろ〳〵して珍らしいから。

お倉　えゝもう、口の惡い養仙さまだ。

右膳　いや〳〵、養仙さま、晝は左のみではござらぬが、夜分になると引ッ切りなく咳が出て難儀いたしますが、どうか此咳の止ります御配劑はござるまいか。

養仙　それでは加減をして進ぜよう、婆さん藥を煎じさつしやつたか。

お倉　いえ今朝一帖煎じたきりで、まだ跡は煎じませぬ。

養仙　そんなら加減をいたすから、其藥を出さつしやい。

お倉　はい〳〵畏りました。（ト手文庫より藥の入りし袋を出す、養仙受取り。）

養仙　今日は藥籠を持參せぬゆゑ、宅で調合をして届けませう。これ婆さん、用がなければ一緒に行つて下さい。

お倉　左樣なら、御一緒に參りませう。

右膳　それは早速の御配劑、何分よろしくお賴み申す。

養仙　いやもう斯樣に御不快では、教授をなさる譯にも行かねば、定めて生徒も休みでござらう。

右膳　此間まで半日づゝ教授をいたして見ましたが、皆六歳から十歳までを、頭にいたす子供等ゆゑ、角角に世話が成兼ねまして、それ〴〵宅で稽古するやう、申し含めて歸してござる。

養仙　いや皆幼年の子供のみゆゑ、お世話のやけた事でござらう。いや、子供と申せば右膳殿にも、お娘御がござるさうなが、今は何れにお出でゝござるな。

右膳　仰せの如く一人の娘はござれど、是れとても幼年よりして文事を好み、女教師にでもなる所存か五ヶ年以前修業の爲に東京へ出て只今では、然るべき教師の方に寄留いたして居るとやら、行末何になりまするか、知れたものではござらぬて。

養仙　いや〳〵それは結構でござる、何藝にても勵みまするには名に負ふ天下のお膝元ゆゑ、東京に限りますて。

右膳　先頃手前が病氣の事も、東京表へ書翰に認め、郵便にて出しましたれば、近い内には娘方より多分便りがあるでござらう。

養仙　それは何よりお樂しみな事ぢや。（ト此時七輪の土瓶煮えたつゆゑ、）

お倉　もし養仙さま、藥土瓶が煮たちますが、まだお歸りなされませぬか。

養仙　おゝ、餘談で大きに遲くなつた、どれ〳〵お暇いたしませう。

右膳　先づよろしいではござらぬか。

養仙　何れ又明後日、お見舞申してお話し申さう。

右膳　病中ゆゑ粗茶さへも獻じませいで、甚だ失禮。

養仙　いや、こちらの茶なら呑まぬが勝手、いやさ、却つて御配慮なされぬがよろしい。

ト此内お倉門口へ履物を直し、

お倉　さあ養仙さま、參りませう。

養仙　右膳どの、お大事になされい。

ト在郷唄、時の鐘になり、養仙先きにお倉附いて花道へはひろ、時の鐘打上げ、床の淨瑠璃になり、

〽春の日も身に秋を知る山里の、蓮華寺村の侘住居、妻木といへど連合は、三年以前に世を去りて、淋しく暮す年の坂、越えて病の足惡く、右膳はひとりかこち言、

ト此内右膳膝行ながら、そこらを片附ける事などよろしくあつて、

右膳　人を使へば使はるゝとは、はてよく言うたものぢやなう。(ト床の合方になり、)一人の娘が東京へ修業に出でし其後に、女房めは病死なし、不自由の上に又候や、年々惱みし足痛も今年は強く發せしゆゑ、隣家の者を雇ひしかど、兎角に世話の行屆かず、かてゝ加へて此程は、溜飲癪にて難儀せしが、養仙老が配劑の藥が適當いたせしやら、一兩日は痞も薄らぎ、次第に氣分もよろしくなりしは、是れも開化の蔭なるか、かゝる邊土の山里を見舞うて歩く藪醫さへ、免許を受けて配劑なせば、以前に替る藥の効驗、どうぞいたして今一度、全快したいものぢやわえ。

〽惱む病苦も良藥の、效驗に足のたつか弓、矢よりも早き人力の、便利に旅も書生裝。

ト此留り在郷唄になり、花道より前幕の繁、書生羽織、兵兒帶、下駄がけに シヤツポを冠り、天鵞絨の襟卷にて、蟇口の胴亂を提げ出來り、花道にて、

繁　久方振りにて故郷の空、歸りて見れば以前とは樣子の替る家屋の築造、分けて田野は改正に道路

の修繕行届き、開化に進む土地の狀、只替らぬは年經りし我が家の軒のあの榎、どりや御病氣を見舞はうか。

〽我が家の門に佇みて、樣子如何にと差覗き、（ト繁舞臺へ來り、門口より內を窺ふ事あつて、）

お床の上にござるのは、如何と案ぜし現の父上、思ひの外に御病氣も、御重態ではなき樣子、先は是にて安堵いたした。

〽威儀を改め外面より、

お頼み申す〳〵。

〽音なふ聲に、（ト右膳聞き耳を立て、）

右膳　はい〳〵、どなたのお出でか存じませぬが、只今雇ひの老婆も居らず、手前はかゝる病中にて、步行も心に任せねば、お構ひなくとお通り下さい。

〽客と思へば居ながらに、斷りいふも禮なれや。（ト繁門口を明け、）

繁　お父上、繁めでござりまする。

〽ずつとはひりて門口を、締る姿を見てびつくり、（ト右膳思入あつて、）

右膳　や、そちや娘、やれ〳〵よく參つた。さゝ、是れへ來やれ〳〵。

ト合方になり、繁襟巻にて塵埃を拂ふことなどよろしくあつて下手へ住ひ、

繁　御重態と心得まして大きに心痛いたせし所、先は御安泰の尊顏を拜し、僕に於ても恐悅に存じまする。

右膳　おゝ、そちも無事にて目出たいぞよ、さて先頃郵便にて、知らせ遣りしが居きしゆゑ、我が病氣をば心配なし、立歸つて參りしか。

繁　御紙面を拜見いたし、取る物も取り敢ず、立歸りましてござりまする。

右膳　おゝ左樣か、實は久しう逢はぬゆゑ、どのやうに成り居つたかと逢ひ度う思ひ居つたるに、以前に替らぬ男子の行ひ、いや堅苦しくなり居つた。

繁　先年お暇を賜はりまして學問修業の志願により、東京へ出てまして後、母上にはあへない御死去、その時一度立ち歸るべきを、入學中にて寸暇を得ず、存じながらの不孝、跡御疎遠の段幾重にも御赦罪願ひ奉りまする。

右膳　何の〳〵修業中ゆゑ暇のなきは、左こそと推察いたし居れば、疎遠の詫びには及ばぬぞ、して其方が世話に相成りし、東京の惣助どのも息災で居らるゝかな。

繁　伯父上事も御壯健にて、御精勤で居られまする、何は扨置き伺ひ度きは、御不快の御容態、當今

如何にござります。

右膳　そちが當地に居つた時分も、毎年起りし持病の足痛、今年は餘寒の强きゆゑか例より念が入り、其上餘病の溜飲積にて晝夜差込み難儀せしが、漸く昨今快氣に赴き、痛みも少しく薄らぎたれど未だ歩行が叶はぬゆゑ、是れにはほとんと當惑いたす。

繁　それは嘸かし御難儀ならん、して御病中の御介抱は誰がいたし居りまするな。

右膳　幸ひ隣家に作男の太郎助後家と申す老婆が、其日に迫り居りしゆゑ、それを雇うて病中の、世話を萬端賴みおくのぢや。

繁　すりや其ものが御病中の、御介抱をいたしまするとか、して其老婆は何れへか參りましてござりまするか。

右膳　只今醫者へ藥取りに、遣はしたれば宅に居らぬ。

繁　左樣にござりまするか。

〽他見のなきは豫てより、望む所と打ちうなづき。

丁度幸ひ。

右膳　や。

繁　いえ、丁度左樣なお雇ひがござりまするので、御病中よい御都合でござりました。

〽言ふ物ごしは現在の、父が見てさへ女とは見えねど案じる親の常、

ト右膳思入あつて、合方きつばりとなり。

右膳　今開明の世の中に公然人には話せぬが、我等夫婦は子に緣薄く、そちが產れぬ其前に、男女で三人死亡なし、其後そちが出產せしゆゑ、女子に男の名を附けて男子となして育つれば成長なすと聞きしゆゑ、まだ其頃は禁厭や陰陽博士の敎へなど人の信ずる時なれば、終に男子の姿となし、幼同士の遊びにも、女子と交りせざりしゆゑ、眞の男子も同樣にて六歲の折學に入り、敎へ賢しく覺ゆるは天晴父の子程あると、褒めそやされし我が悅び、とてもの事に洋學をも學ばせたしと思ふ折、東京へ出て入學なし、勉强したいと望むゆゑ、男子の姿を幸ひに道ならざれど書生と僞り、我とは心合ずして不和なる妻が一人の弟惣助どのを便りとなし、學問修業に東京へ出府なしたき望みに任せ、五年跡に遣せしが、嚴しき布告もあるものを、女子を男子と僞りしは、今々思へば子の愛に溺れしまゝの違式の罪、危い事でありしよなあ。

〽過ぎ越し方の物語り、聞くに繁も胸の雲、晴れぬ夕の仇嵐。（ト此内繁思入あつて、）

繁　其身の上をも、誰一人悟りし者はあらざりしが。

右膳　や。

繁　いえ、猶も女と悟られぬやう、心を用ゐてござりますれば、隱し果せて故鄕へ、お尋ね申してござります。

右膳　さゝ隱す事ほど漏れ易しと、誰知るまいと思ふは愚なり。其間違ひのなき内に、蕾の花も早や年頃、男姿を改めて、女教師となり今日より、父の側にて手助けなし、故鄕へ錦を飾つてくれ。

繁　そりやはや、父上御一人かゝる邊土へお置き申し、子としてお側に居らざるは不孝の至りにござりますれど、今一年も勉強なさねば、此身の志願を貫きまする期に至らねば歸縣の儀は、何卒今より一ヶ年、御猶豫願ひ上げまする。

右膳　そりや一年が二年にても待つのは易き事ながら、たゞ案じるは違式の罪、事なきうちに生來の女子に返りて形を改め、父に安堵をさせてくりやれ。

繁　仰せに任せ近々に、姿を替るでござりませう。

右膳　おゝそれでこそ我が安堵、必ず猶豫をいたすまいぞ。

〽案じるも猶子を思ふ、親の慈悲こそ有難き、こゝぞ機嫌のよきしほと、繁は所持の胴亂より、何か一品取り出し。(ト件の蟇口より金包を出し、)

繁　さて久々にて、土産の品と存じましたが、火急の出立心に任せず、こりや御病氣のお見舞かたがた、心ばかりの僕のお土産、何卒御受納下さりませう。

〽父が前にと差出せば、

右膳　なに、土産をくれるとな、無用にいたせばよい事を。

〽打ちほゝ笑みて手に取上げ、見る間にかはる父の顏。（ト右膳不審の思入にて、）

これ娘、病氣見舞の土産と申すは、こりや金貨にはあらざるか。

繁　失敬にはござりますれど、御病氣のお手助けと心得まして持參いたせば、お心置きなく御費用にお遣ひなされて下さりませ。

右膳　むゝ、して此金貨は何程ある。

繁　はツ、二百圓でござりまする。

右膳　なに、二百圓とな。

〽聞くもびつくり手に取りて、見るも我が子にふさはしからぬ、土産の金の出所を、糺さんものと何氣なく、（ト右膳思入よろしくあつて、）

父の病苦を助けんと、貢の金の二百圓、其眞情は忝けないが、此土産は受取れぬ。

繁　え〵、そりや何ゆゑでござりまする。

右膳　そちや東京で何れへか、拜命なして出仕いたすか。

繁　さあ、それは。

右膳　いやさ、學問修業に自宅を出しより、教師の月謝下宿の食料、書籍を求むる價まで、既に去冬の始めまでたしなきながら我が力より、月々送りし其方が、僅か半年立たざるうち二百圓の此金貨、如何いたして手に入りしぞ。

繁　さあそれは。

右膳　身分相應二分か三分、菓子料なりと持參いたさば、悦ばしく受納いたすが、不相應なる二百圓、不義の富貴は望みでないぞ。

〽今まで機嫌の父右膳、金の包みを投返し、怒る胸さへせき入れば、直ぐな氣質も横道へ、言ひ紛らして納めんとゝ。（ト繁思入あつて、）

繁　父上、こりや斯樣でござりまする。（ト合方きつぱりとなり、）そりや早や只今仰せの如く、昨年まで國許より學資を送つてお貰ひ申し、修業いたせし身の上に、其御疑念もござりませうが、計らずかゝる金圓を得たる仔細は去年の末、親友の周旋により米國の、ある異人の許へ日本語學の

教授に雇はれ、一日種々の談話中故郷に殘る一人の父へ貢をいたしたきが、寒生ゆゑに心に任せず、不孝の至りと歎息せしを、流石は世界隨一の文明國と稱されし異人の度量大にして、僕が悲歎を憐みしか是れにて父へ孝養を心の儘に盡されよと、惠みくれたる二百圓、誠に天の賜なるかと異人が厚き信義を謝し、折がなあれば國許へ送らんものと存ずる折、火急の御紙面到來にて御病氣の由承知いたし、爰ぞ御恩を報ずる期なりと、三日の間の暇を乞ひ受け、取敢ず持參いたせしことなれば、不正不義なる金圓を、父へ呈上いたすにあらず、斯かる次第の二百圓、お心置きなく御費用に、お使ひなされて下さりませ。

〽淸くはいへど濁江の、水は淀みて底知れず。（ト此内右膳思入あつて、）

右膳　して其異人は米國にて、何と言はれる異人にて、居館は何れいづくなるぞ。

繁　さあそれは、（トちよつと思入あつて。）卽ち米國サンフランシスコ、テイフルドといふ異人にて、居留地は築地に居られまする。

右膳　すりや、其異人に。

繁　左樣にござりまする。

右膳　はてなう。（ト是れより床のメリヤスになり、右膳思入あつて、）故郷を出でゝ五年が間、假令いかほ

ど勉強なすとも、未だ二十に滿たざるそちが、文明國の異人へ對し、教授をいたす學力は、まだあるまいと思はれる。さ、それも父への孝道を、不便に思ひ異人どのが、さしたる役にも立たざるそちに、二百圓といふ金貨を惠みくれしとあるなれば、徒には思はぬ忝ない。恩義は恩義此方より書翰を以て謝せし上、金貨は受けぬと申し送れば、それは其儘返納いたせ。はて、斯く閑靜なる住居はなせど、所に古く居る上に正路を守る我なれば、區戸長始め四隣の者まで、厚く世話をばいたしてくれるが田地田畑貯への金子を持ちしに勝りし強味、假令財寶なきとても生徒の世話をいたし居れば、彼等の親より貢を受け、今日煙りを立つるに困らぬ。いや、なまじ黄金を得る時は火難賊難心に掛り枕を高くふせられぬ。矢張り貯へなき方が心易くて夜も寐られう。

〽貧苦に寒き懷を見せじと親は小搔卷、身に引き掛けて諭しける。（ト右膳宜しく思入）

繁　すりや、父上には斯程まで、事明白に申し上げても、御疑念あつて此金圓、御受納なされて下さりませぬか。

右膳　父は受けぬ。戻してくりやれ。

〽それと言はねど白浪を、諭すは深き慈悲の海、さては淺瀬を知られしかと、思へば汐に逆らはず。（ト繁思入あつて、）

繁　左程に父の仰せあるを、是非にと申すは却つて御不興、此趣きを異人に語り返納いたすでござりませう。

右膳　おゝ、それでこそ我も安堵ぢや。然らば是れより片時も早く、歸京いたして異人どのへ、慥に返納いたすがよい。

繁　左樣いたすでござりませうが、せめて今宵はお側にて御介抱なと仕り、明朝未明に出立がいたしたうござります。

右膳　我れも今宵は留め置いて、篤と教諭もいたしたけれど、娘と流布なすそちが姿、斯かるさまにて居る時は布告に悖る他見の虞、雇ひの歸らぬ其うちに、片時も早く歸京いたせ。

繁　成程他見を厭ひますれば、左樣いたすでござりませう。

右膳　宅を出でなば村内を、面體隱して通り拔けよ。

繁　はい。

〽急き立てられて兎や角と、思ひ當りし佛の日。(ト繁思入あつて、)

父上今宵は母人の、お逮夜にござりまするな。

右膳　誠にかゝる病人ゆゑ、とんと失念いたし居つた。

繁　御死去の節も在合さず、又も是れより一ケ年程立たねば歸縣をいたしませねば、せめては母の御靈前へ、參つて行きたうござりまする。

右膳　然らばなるたけ早くいたせ。

はッ。

〽いそ〱立つて佛檀の、障子はさつと明くれども、明けて言はれぬ山吹の、色香を包む二百圓、殘し行くとは氣も附かず。

ト此内繁上手の佛檀の障子を明け、線香を上げることよろしくあつて、件の金包をそつと香爐の前へ置く、右膳は是れに心附かず思入あつて、

右膳　あゝ、申すも愚なる事ながら、斯く成長せし姿をば、世に亡き妻が見るならば、

繁　御靈前にて御回向を、いたすより猶勝りたる、

右膳　其悅びは如何ばかり。

繁　それも草葉におく露と、

右膳　消えて空しき玉の緒の、

繁　繰る珠數よりも憂き事を、

右膳　積る山家に花もなく、
繁　細き煙りが名のみの香、
右膳　世にも侘しき、
兩人　回向ぢやなあ。
〽見ぬ間としめる破れ障子、中に包みも入相の、早暮近き鐘の音に、
ト此內繁佛壇の障子をしめる、時の鐘になり、
右膳　おゝ、あの鐘は最早五時、暮れては道も不都合ゆゑ、
繁　車で急がせ行く時は、高崎までは日のあるうち。
右膳　さゝ、回向が濟んだら早く行きやれ。
繁　左樣ござればお父上、隨分共に御機嫌よろしう。
右膳　おゝ、そちも達者で勉强いたせ。
繁　お暇いたすでござりませう。
〽急ぐ心はありながら、名殘惜しげに悄々と、出行く姿見るに附け又も樣子を案じやり、
ト此內繁愁ひの思入にて身支度をなし、下駄を履き出ようとするを、

右膳　娘、待ちやれ。

繁　はッ。何御用でござりまする。（ト後へ返り下に居る。右膳思入あつて、）

右膳　返す〴〵も其金を、元へ戻して姿を改め、父に安堵をいたさせよ。

繁　畏りましてござりまする。

右膳　はや行け。

繁　おさらばでござりまする。

〽さらばといへど去り兼ねる、親子の縁恩愛に、引かれて戻る心根は、流石に女こなたにも見送りたさの足立たず、悩む病苦に咳入る聲、聞くに堪らず門の戸を、明ける途端に見合す顔。

ト此内繁門口にてよろしくこなし、右膳立たうとして足の痛む思入にて咳入る事よろしく、繁是れを聞いてつか〳〵と後へ戻り、門口を明け、兩人顔を見合せ、

右膳　まだ行かぬか。

繁　お大事になされませ。

〽故郷を跡に出でゝ行く。（ト繁シヤツポを冠りながら胴亂を提げ、逸散に花道へはひる。）

〽跡にやう／＼父右膳、門の口まで這ひ出でゝ、

ト右膳膝行ながら門口の所へ來り、向うを見送り、

右膳　物ごしといひ氣質といひ、男子に勝る彼れが所行、女でなくば力とも我が片腕ともなるべきに、何で女子には生れしか、はて殘念の事ぢやなあ。（ト床の合方になり、右膳門口をしめ元の所へ來り、）さるにても心得ぬは書生の身にて、二百圓といふ金を所持し參りしは、よもや賊をば働いて親に難儀を掛けるやうな、生來にてもあらざるゆゑ、左樣な事はあるまいとは、思へど受納いたされぬは、

〽人の非道を正道へ、導く爲の私學校。

教師の端をもいたす身が、今開明の聖代に斯く曖昧なる出所の、故なき金貨を二百圓娘の手より受取りしと、人に口外いたされず、萬一あれが不正なる金にてあらば親の身にて、

〽却つて事を荒立てゝ、彼れに罪科を負はするも。

不便と思ひ餘所ながら說諭を加へ戻せしが、異人の手より貰ひしといふは僞りにて、跡の難儀を辨へず盜みをなして二百圓、持參いたせしものなるか。何に附けても久々にて別れし娘が尋ね來て、悅びあれば悲しみと、苦勞の絕えぬ事ぢやなあ。

〽よきに附けてもあし挾みの、案じ煩ふ折からに。

ト又在郷唄になり、花道より以前のお倉、薬袋と椿の枝を持ち出來り、花道にて、

お倉　ほんに〳〵お醫者といふ者は、外に藥取りも居ないくせに容體振つて人を待たせ、僅か二貼か三貼の藥を調合して居るうちも、えへん〳〵の咳拂ひを、幾つ聞いたか知れやあしない。（ト言ひながら舞臺へ來り、門口を明け、）お醫者さまで待たされまして、大きに遲くなりました。

右膳　いや、其遲いのがこつちの幸ひ。

お倉　えゝ。

右膳　いやさ、幸ひ今日は快いゆゑ、其心配には及ばぬて。

お倉　左樣ならば此お藥は、加減いたしてござりまするると、養仙さまが仰しやいました。

〽藥袋を差出す、皺枯れし手に花の枝、（ト右膳件の花へ目を附け、）

右膳　見れば見事な椿ぢやが、どこからこなたは取つてござつた。

お倉　はい、養仙さまの庭にござりましたから、お師匠さまがお足が不自由で、花を見たうも出られぬから、一枝折つて參りたいと、お貰ひ申して參りました。

右膳　それはよくこそ心附いて、親切に忝けない。

お倉　どこぞ其處らへ挿して置きませう。（トあちこちと搜す思入、此時仕掛にて椿の花落ちるゆゑ、お倉びつくりして、）おや、此花は障りもせぬに、ころりともげて落ちました。

右膳　なに、落花せしとな。

〽案じる矢先きぎつくりと、胸にこたへる玉椿に。（ト右膳思入あつて、）椿は花の散り易き、脆いものとは知りながら、はて忌はしい。

お倉　何とおつしやります。

右膳　いやさ、今わしも心附いたが、今日は佛の逮夜であつた。佛壇へ供へて下さい。

ほんに花がございませんと、とんと樒でございます。

〽一本花も氣にかゝる、此方は何か目にかゝり、

トお倉上手の佛壇より花立を出し、件の椿を挿し元の所へ直しながら、金包みに目を附け、

おや、爰にあるのは何だ知らん。

右膳　はて、どんな物がそこにあるな。

お倉　お金のやうでござります。

右膳　なに、金がある、どれ〱。

お倉　はい、是れでござります。
〽差出す包み見覺えの、紛ふ方なき以前の金。
ト お倉金を持つて來て渡す、右膳手に取りびつくりなし、
右膳　おゝ、扨は母への回向と言ひなし、竊に置いて行き居つたか。
お倉　へえゝ、誰が置いて參りました。
右膳　えゝ、跡追掛けて行かうにも、歩行叶はぬ此業病、
お倉　お使ひなら、參りませうか。
右膳　行方知れねば屆ける事も。
お倉　何だかさつぱり分らない。
右膳　はて、困つた事が。（ト立たうとして足の痛む思入にてどうとなるを、道具替りの知せ、）出來たなあ。
〽又も苦勞の。（ト此模樣時の鐘、床の送りにて道具廻る。）
（湯治場の場）――本舞臺四間通し中足の二重、本庇本緣附き、眞中に一間程の石の沓脱ぎ、軒口一間角がらの欄間、正面上の方九尺の床の間、此下手違ひ棚、地袋戶棚下の方一面白地へ唐畫の襖、

上下の棲塗骨の障子を建切り、二重の上手風呂場の心にて、中窓のある板羽目の建物、下手いつもの所枝折戸、此外正面藁屋根附の門、左右板塀、門の柱へ伊香保溫泉と記したる札を掛けてあり、よき所に梅の立木、日覆より同じく釣枝、總て湯治場客間の體。爰に○△の湯場の下女二人、緣端に立ちかゝり、お虎町家の下女のこしらへ湯上りの心にて濡れた手拭を持ち、立ちかゝり居る、此見得、賑かなる流行唄にて道具留る。

お虎　さあ〳〵大變だ〳〵。

○　もし〳〵お女中さま、大變とおつしやりまするは、

△　お湯へおはひりの內、何ぞ紛失でも、

△○　いたしましたか。

お虎　さあ紛失も紛失、人間一人なくなした。

○　あなた方はお三人連れ、旦那さまはお湯にいらつしやいますし、お孃さまはお湯から上り、

△　お顏を直しておいでなさいまするが、外にお連は昨晩から、ない筈でございますが。

お虎　いえわたし共三人が、お湯にはひつてゐる內に、お隣り座敷の書生さんが、何處かへ紛失したわいなあ。

○　おゝ、あのお湯のお嫌ひな、よい男のお客さまは。
△　蓮華寺村まで御用があるとて、先程お出掛けなされました。
お虎　あれ、それだからお立ちになるなら、ちよつとわたしに教へておくれと昨夜頼んで置いたのに。
○　いえ、お立ちになつたのではござりませぬ、まだお預かりの品もあれば、
△　大方又程なくこちらへ、お歸りになるに違ひござりませぬ。
お虎　そんなら又お歸りになるのかえ。
△○　左樣でござります。
お虎　やれ〳〵それで落着いた、わたしやお立ちになつたかと思つて、大きなお腹が浪を打つて、どきどきとしたわいな。
○　それではあなたは、御懐姙でござりまするか。
お虎　あれさ、孕んだのではない、是れで地腹さ。
△○　左樣でござりまするか。（ト合方になり、正面の襖を明け、お芳前幕の娘にて出來り）
お芳　これ虎や、そんならまだお立ちではなかつたかいなう。
お虎　お悅びなされませ、まだお立ちではござりませぬといなあ。

△　左様ならあなた方は、あのお客さまのお馴染さまでござりまするか。

お虎　あれさ、お馴染といふ程でもないが、此伊香保へ來る道すがら、上尾の立場でお目に掛り、それから又其晩に熊谷の宿で、思ひがけなく一つ宿屋へ泊り合せ、翌朝お別れ申したのが、又もや爰で同じ宿へ泊るといふのも、不思議な御緣。

お芳　ほんに熊谷へ泊つた折、お上げ申した煙草入を、捨てもなされず其儘に、お持ちなされておいでゆゑ、わたしや嬉しくてならぬわいなあ。

お虎　あなたもお貰ひなされましたあの煙草入は大事にして、持つてお出でゞござりませうな。

ト お芳袂より切の煙草入を出し、

お芳　是れをなくしてなるものかいなう。（ト お虎に見せる。）

○　左樣ならお孃さまは、あのお客さまとお煙草入を、

△　お取替なされまして、お持ちなされてゞござりまするか。

お虎　そればかりぢやない、お頭髮をかく櫛までお上げなすつたのさ。

○　道理でお裝に不相應な、

△　お櫛を御所持と思ひました。

お芳　そんなら櫛も其儘に、お持ちなされてゞおいでかいなあ。（ト嬉しきこなし。）

お虎　それといふのもお孃さまが、あのお方に思召しがあつてさ。

お芳　あれ、もう氣障な、其やうな事は。

お虎　それではおいやでござりますか。

お芳　いえ〳〵さうでは無いわいの。

お虎　それ御覽じませ、お前さまは矢ッ張り思召しがござりませう。（トお芳向うへこなしあつて）

お芳　何れへお出でなされしやら、早うお歸りになればよいが。

○　蓮華寺村と申しまするは、爰から直でござりますれば、

△　もう程なく此宿へ、お歸りでござりませう。

お虎　さあ〳〵これから碁石を摑んで、來るか來ないかをして待ちませう。

お芳　ほんに、それがよいわいなう。

ト皆々上手の床の間にある碁盤を出し、碁笥の中より石を出し算へて居る、是よりしつとりとした端唄になり、花道より以前の繁しなを〳〵として出來り、花道へ留り跡へこなしあつて、

繁　御病氣ゆゑに親人の、困苦をお助け申さんと、思へど任せぬ金策に道ならぬとは知りながら、神

保氏の金貨を掠め、持參なせしが物堅き、父にはそれと悟られしか元へ返せと餘所ながら、お諭しあつてお受けなされず、とあつて最早元々へ返す譯にもならざれば、詮方盡きて佛前へ竊に供へて參りしが、跡にてあれを御覽あつて、お取り納めになればよいが、あれが却つて御苦勞の種となつては寸孝を、盡せし事も水の泡、是れを思へば道ならぬ、事はせまじきものぢやなあ。

ト右の唄にて繁しを〳〵として舞臺へ來り、枝折戸を明け内へはひる、下女二人是れを見て、

○　や、あなたは昨夜のお客さま。

△　ようまあ、お歸りなされました。（ト是れにてお芳お虎も繁を見て）

お虎　ほんにあなたは、妻木さま。

お芳　ようまあ、お歸りなされましたなあ。（ト二重より跣足で下りるゆゑ、お虎びつくりして、）

お虎　もしお孃さま、跣足でござりまする。

お芳　下駄を履いては、勿體ないわいなう。（ト繁思入あつて）

繁　何か僕に各々方には、至急の御用がある樣子。

お虎　はい〳〵、御用が大ありでござりまする。

繁　それへ參つて承はりませう。

お芳　さあ〳〵、あれへ入らつしやいまし。

繁　然らば、御免下されい。（ト繁二重へ上る、お芳も續いて上らうとするゆゑ、）

お虎　もしお孃さま、おみ足を。（ト手拭を出す。）

お芳　いえ、もうそれでは勿體ないわいなう。（ト其儘二重へ上り、繁は上手お芳は下手へ住ふ、跡皆々よろしく住ひ、）あなた、ようお歸りなされましたなあ。

お虎　あなた、ようお歸りなされました。

○　あなたようお歸り、

○へ　なされました。（ト皆々辭儀をなし、お虎有合ふ煙草盆を持つて行かうとするをお芳留めて、）

お芳　あれ、わたしがするわいなう。（と煙草盆を引取り、恥しさうに繁の前へ持ち行きこちらへ下り、）あなた、ようお歸りなされました。（ト辭儀をなす、繁合點の行かぬ思入にて、）

繁　何か仔細は存じませぬが、僕をお待兼ねの御樣子は、何か書物を飜譯の御用向きでもござるかな。

お虎　いゝえ、ほんやくやら膏藥やら、私には分りませんが、お孃さまには蒟蒻のやうに、ぐにやりとなられてでござりまする。

お芳　あれ又虎の差し出口、ちと嗜んだがよいわいなう。
お虎　いえ嗜むことは。
○　何にいたせお客さまが、お歸りなされて御安心、
△　私共はお邪魔ゆゑ、どれお次へ參りませう。
お虎　もし女中さん。（トちよつと囁く。）
○　畏まりました。（ト下女二人奥へはひる。繁思入あつて、）
繁　何は然れ此お座敷に、親御がおいでなされねば、僕も長居は無遠慮ゆゑ、何れ後程伺ひませう。
お芳　いえ〳〵あなたに父さんが、お願ひの儀もござりますれば、御迷惑でも最う少々おいでなされて下さりませ。
繁　親御が僕にお頼みとは、はて何用でござるやら。
お虎　どれ、私は旦那さまを、お呼び申して參りませう。（ト立ち掛るをお芳留めて、）
お芳　そなたが居ねば、心細いわいなう。
お虎　はて、お差向ひの其内に、思ひのたけを仰しやりませ。
繁　なに、思ひのたけとは。

お虎　さあ、其たには、おゝそれ〳〵、耳から耳へ通じまする、去年流行つた電信の、玩具のやうな竹でござりまする。

お芳　えゝもう、何を言やるぞいなう。

繁　はて、お氣輕な女中である。

ト爰へ奥より利右衛門、前幕の親仁にて布子の下へ浴衣を重ね、湯上りの心にて濡れた手拭を持ち出來り、繁を見て、

利右　おゝ妻木さま、お歸りでござりまするか。（ト皆々利右衛門を見て、）

お芳　てもよい所へ、

お虎　旦那さま。

繁　先づ〳〵是れへお出で下され。

利右　只今御挨拶をいたしまする、眞平御免下さりませ。

ト　お虎に手拭を渡し、羽織を引掛ける事などよろしくあつて、下手へ住ふゆゑ、

繁　それでは僕が高上り、先づ〳〵是れへ。

利右　いえどうぞ、それにおいで下さりませ。（ト是れより合方きつぱりとなり、繁思入あつて、）

繁　私用ござつて蓮華寺村まで、立越しまして歸宿の所、何か至急の御用向きでも、ある御樣子にて各々方が、僕を頻りにお待兼は、何等の御用でござりますな。

利右　ちとお願ひがござりまする、ゆつくりお話しいたしませんでは、御相談が成り兼ねまする、御迷惑ではござりませうが、さしたる御用がござりませずば、まあお話し下さりませ。

繁　何か仔細は存じませねど、只今私用を辨じましたれば、別に用事もござりませぬ。

お虎　それがこつちの丁度幸ひ。もし旦那さま、申し附けませうか。

利右　今おれが誂へて來たが、成るたけ早くと急いで來てくれ。

お虎　畏りました。（ト立上り）もしお孃さま、こりや御相談が整ひますぞえ。

お芳　え〻もう、默つて居やいなう。

お虎　あれ、痩我慢をなされまする。（トお虎奥へはひる、繁思入あつて、）

繁　して御親子にて此伊香保に、御逗留なされまするは、何か遁れぬ御用向きか、又は御持病御養生の爲、御湯治をなされますかな。

利右　いえ、養生やら用向きやら、色々譯がござりまして、時候違ひに梅の咲く時分、斯樣な山家へ參りまして、逗留をいたしまする。

繁　樣子ありげな其お詞、さあ世の中にはさま〴〵なる事件も往々ある習ひなれば、袖振り合ふも御緣とやら、今宵はゆる〳〵お話しを承はるでござりませう。

お芳　あれゆる〳〵と、お話しをお聞き下さると、仰しやるわいなあ。

利右　えゝ仰山な奴だ。

ト同じやうに悅ぶこなし、爰へ奥よりお虎先きに、下女二人廣蓋へ肴の皿を載せ、燗德利を持ち出來り、

お虎　はい、お誂へが參りました。

利右　おゝ大分早かつた。さあ妻木さま、召上るものもござりますまいが、お一つお上り下さいまし。

繁　昨日といひ今日まで、重ね〳〵の御馳走に預り、近頃恐縮いたします。

お虎　さあ〳〵どうぞお杯を、お取上げ下さりませ。

繁　いや〳〵それは御親父から、何卒お始め下されい。

利右　左樣なれば年役に、御免を蒙つて始めませう。（ト猪口を取上げる。）

お虎　どれ、お酌をいたしませう。（ト利右衛門一口吞み、）

利右　妻木さま、御免下さりませ。（ト猪口をさす。）

繁　いや、御酒はとんと不得手にござれど、折角の思召し、頂戴いたすでござりませう。」

○　どれ、お酌をいたしませう。（ト徳利を取らうとするを）

お虎　おつとどつこい、お酌はわたしが持ち切りだよ。

○　左樣なら、お誂への、

△　お跡を急いで參りませう。

ト下女二人奥へはひる。お虎酌をして繁一口呑む、お虎別の猪口を取上げ、

お虎　さあお孃さま、お上りなされませ。

お芳　それでもわたしや不調法ゆゑ。

お虎　はて、さう仰しやらずと今日は、召上るものでござりまする。

お芳　そんならどうぞほつちりと、つぐ眞似をしてたもいなう。

ト猪口を取る、お虎酌をしながらお芳の手を押へ、

お虎　あれお孃さま、お待ちなさい、三度つぐ眞似をしませんでは、今日はいけませぬ。

トよろしく注ぐ、お芳うれしきこなしにて呑干す、利右衞門こなしあつて、

利右　妻木さま、頂戴いたしませう。

繁　然らば御返杯いたしまする。（トお虎酌をする事よろしく、お芳こなしあつて、）

お芳　此お猪口は、何うしようわいなう。

お虎　はて知れた事、お聟さまへ。

繁　え〻。

お虎　いえ、お向うの妻木さまへ、思ひざしとなされませ。

お芳　左様なら、憚りながら。（ト恥かしさうに猪口をさす。）

お虎　どれ、お取次をいたしませう。

と酒盛りよろしく、此以前奥より喜助若い者着流しにして、燗徳利を持ち出來り、此體を窺ひ居て、

喜助　千秋萬歳千箱の玉を奉る。（ト謠曲をうたひながら前へ出る。）

お虎　おや喜助どん、大きに御苦勞。

利右　いや、今の謠曲は感心々々。

喜助　あんまり役が好過ぎまするが、親方手合の眞似をして、こは〳〵ながら遣りました。先づお目出度うございまする。

繁　なに、目出度いとは、そりや何が。

喜助　へい、お目出度いと申しまするは、斯うお見受け申した所は、あなたが差詰めお舅さまで、お嬢さまがお嫁さま、旦那さまが舅御で、お虎さんと私は待女郎媒人役、御夫婦さまのお釣合は、至極よろしうござりまするが、只不足なのは私にお虎さんの女房役、不釣合ではござりますが押しツくらの牛だと思へば、肉のあるのを取得にして、所柄ゆゑ我慢をします。何は兎もあれ三三九度のお杯をなされまして、跡はしつぽりお床入り、それから半でお湯へはひり、又二番目のお床入り、それからお湯へおはひりなされて。

利右　あゝこれ〳〵、喜助どのとやら、そこらで留めて貰ひませう。

喜助　へい〳〵、先づお目出度うござりまする。

ト辭儀をなす、是れにて繁合點の行かぬ思入、お芳恥しきこなし、利右衛門思入あつて、

利右　さて妻木さま、つかぬ事を伺ひますが、あなたは御獨身でござりまするか。

繁　御覽の通りの若輩者、學問修業の其爲に東京へ出て居りますれど、未だ獨立に至りませねば、中中以て妻などを、迎へる力はござりませぬ。

喜助　それで猶々お目出度うござりまする。

繁　なに、獨身で目出度いとは。

喜助　はて御獨身とあれば、御得心の地口で、猶々お目出度うござりまする。

利右　して又あなたは此伊香保に、長く御逗留をなされまするか。

繁　只今申す修業中ゆゑ、なか〳〵長く此處に逗留もいたされませねば、是非明朝は暗きうちに出立いたす積りてござる。

お芳　そんならあなたは、あの明朝、御出立でござりまするか。（ト本意なきこなし。）

利右　餘事はさて置き、あなたには、全く御細君はござりませぬか。

繁　いやもう、迎妻などゝは以ての外、今一兩年東京で勉强いたす所存ゆゑ、何れ其内東京にてお尋ね申して貴面を得、此お禮を申すでござるが、してそこ許の御尊宅は、何れの區にて何番地、御姓名は何と仰せられますな。

利右　私宅は淺草の、花川戸にて三番地、書物を渡世いたしまする、戸倉屋利右衞門と申しまする、平民でござりまする。

繁　すりやそこ許は聞き及ぶ、戸倉屋の御主人なりしか。

利右　それゆゑどうか東京へお出での節は手前宅へ、下宿をお取り下さいまして、失禮ながら御入用の御書物などは何なりとも、見世にあるだけ御遠慮なく、御用にお立て下さりませ。

繁　何れ其内御尊宅へ、願ひに出るでござりませう。
お芳　どうやらそれではお詞のみで、わたしや安心せぬわいなう。
お虎　いえ〳〵是れから肝腎の、お話しになる大事な所、まあお聞きなされませ。
繁　して又何かお頼みでも、ござるやうに仰せられしが、如何なる儀でござりまするな。
利右　其お頼みと申しますは。（ト四邊へ思入あつて、）これお虎、誂への物を急いでくれ。
お虎　はい〳〵畏りました。
喜助　いえ、急き立てゝ參りませんでも、只今直きに參ります。
お虎　あれさ、お前も察しの悪い、それ、急かねばならぬわいなあ。（ト呑み込ませる。）
喜助　へい成程、どれ〳〵急いで參りませう。（ト利右衛門紙入より札を取出し、紙に包み、）
利右　お虎、これを若い衆に。（トお虎に渡す。）
お虎　はい、喜助どん、よろしくお禮を。（ト渡す、喜助受取り、）
喜助　是れは有難い、山吹の黄金に換る札切手。
お虎　あれ、切手などゝ縁起の悪い。
喜助　いえなに、御縁のつながり手、お次へ參つて紙包みを、どれお開きといたしませう。

お虎　無駄を言はずと、早くお出で。

喜助　左樣ならお孃さま、先づお目出たうござりまする。

お虎　さあ〳〵早くお出で。（ト お虎喜助奧へはひる、利右衞門四邊へ思入あつて）

利右　なに妻木さま、其お賴みと申しまするは、餘の儀でもござりませぬが、不束ながら此娘、お連合にお持ち下さりませぬか。

繁　何と言はる〻。（ト是れより合方替つて、）

利右　斯樣申せば私が年甲斐もなく御昨今の、あなたを捉へ差附けた御相談とも思召さうが、家内に死なれ私もはや段々と取る年に、是れなる娘も年頃ゆゑ、よい聟あらば貰ひ受け、家督を渡し樂々と孫の顏でも見せうと、諸方へ賴んで置きますが、外生業と事替り、書物を渡世にいたすゆゑ、讀めぬ者では間に合はず、どうか書生のお方をとお出入り先きの先生方へ、賴んだ事もござりますが、扨ないものは聟養子、その癖書生のお方も多く東京にはござりますれど、十に八九はお酒好きやお遊び好きで學問の道へは勉强なさらないで、遊里の道へ御勉强と聞いて御緣も結ばれず、此度本家の法事に附き此上州へ參りまする、途中で計らずお前さまに、上尾の立場でお目に掛り、お忘れなされしお煙草入が御緣となつて又候や、此旅籠へ泊り合せ、段々との御樣子を

見れば見るほど御發明、あゝ斯ういふお方をどうぞして、娘の聟に欲しいものと、思へば娘は猶一倍、あなたに焦れてゐる樣子。

お芳　あゝもし。（ト利右衞門の袖を引くゆゑ。）

利右　はて言はねば譯が分らぬわえ。そりやもう、自分は町人ゆゑ高の知れたる平民ながら、住居の所は所有地にて、外に少々地面もあれば、假令火難に逢ひましても、普請位は差支へる瘦身代でもござりませぬゆゑ、どうかそれなる娘の聟に、お成りなされて戶倉屋の、家名をお繼ぎ下さりませぬか。さ、お賴み申すといふ譯は、此御相談でござります。

ト此内お芳繁に見惚れて居る事よろしく、繁じゆつなき思入にて、

繁　こは何事のお賴みかと、存じの外なる貴君のお詞、物數ならぬ僕が身を、左程にまで御所望下されたお家をお讓り下されんとは汗顏の至りながら、男子にあらねば、いやさ、男子といへど若輩者、未だ未熟の修業中ゆゑ、思ひも寄らぬ儀でござる。

利右　さゝ、其御修業は私方で何ケ年でも、御隨意御勝手におさせ申せば、どうか戶倉屋利右衞門の家督におなり下さりませ。

繁　左樣に仰せ下さるを、否と申すも片意地ながら、どうも只今即答に御挨拶がなり兼ねまする。

利右 そりやはや斯樣な旅中といひ、まだ昨今の我々共、しかと身許も知れぬ者に、御卽答は成兼ねませうが、それを承知で此樣に、無理をお賴み申しまするも、餘儀ない譯がござりまして、取急がねばなりませぬ。

繁 して、其餘儀ない譯と申すは、如何なる仔細でござりまするな。

利右 さあ別儀でもござりませぬが、何をお隱し申しませう、私事は先代の目鏡で家督に直りました見世の手代でござりまする、其恩義のある主人の弟に破落漢がござりまするが、先代の存生中は家へ出入りもさせませず、兄弟なれど音信不通、又現在の姪に當れど死んだ家内の居るうちは、寄附かずに居りましたが、今は義理ある私の、弱身へ附込む破落漢、おのれの悴を此娘の聟にいたして行く〳〵は、兄の仕出せし身代を搔き廻さうとの底巧み、主人の鑒識で讓られました家督をむざ〳〵潰されては、先祖の位牌へ濟まぬ譯、それゆゑ今度の法事を幸ひ、本家へそれらの相談に參りましてはござりますが、外に養子と定めたるお人が無ければ第一不都合、兎やせん角やと思ふ折、計らずあなたにお目に掛り、娘は元より私がお見込み申して此お願ひ、實はお跡を慕ひまして此の湯治場へも參りましたっさ、御昨今にて斯樣な事を、お願ひ申すは氣の早い、親仁とお思ひなされませうが、早く極めねばなりませぬ、苦痛をお察し下さりまして、親子二人を

繁　妻木さま、どうぞお助け下さりませ。（ト思入にていふ、繁こなしあつて、）

御尤なる其お賴み、そりや早や昨今旅行中にて、御面會はいたすといへど、僕もかねがね東京にて聞き及び居る戸倉どの、此身に取つて言分なけれど、手前方にも言ふに言はれぬ、深き仔細がござるゆゑ、此儀は承引なり兼ねまする。

利右　むゝ、扨はあなたは御家祿のお望みあつて平民ゆゑ、御相續はなりませぬか。

繁　いや全く以て左にあらず、平民ゆゑに相續の成兼ぬるなんぞとは、開化を知らぬ昔にして、當今四民同權の世に至つては何として、左樣な差別はござらねども、外に仔細がござるゆゑ、此儀は承引成り兼ねまする。

利右　外に仔細があるとばかり、仰しやりましては私に、どうも合點がまゐりませぬ。

ト是にてお芳扨はといふこなしあつて、

お芳　あゝもし父さん、分りました、あなたは外にお許嫁の、お方があるのでござんすぞえ。

利右　いや、若い者は若い者だけ、こりやいゝ所へ氣が附いた、扨は御修業中の御保養に、御朋輩のお附合でお遊びにでも入らつしやつて、深い馴染でも出來まして、其女中へのお義理立てかな。

繁　いやいや全く左樣なる、浮いた事ではござらぬて。

利右　して又仔細とおつしやりますは、どういふ譯でござりまする。

繁　さあ、それは。

利右　何ゆゑ御返事なされませぬか。

お芳　お包みなされず妻木さま。

利右　お聞かせなすつて。

兩人　下さりませ。

ト詰寄つて言ふ、是れにて繁困る思入にて差俯向いて居る、爰へ奥より以前のお虎喜助出て、

お虎　こりやお目出度いお話しも、どうやら風が替りまして、

喜助　兎角お手間が取れまするが、何は兎もあれ御酒をはやらせ、陽氣になつて御覧じませ。

ト お芳本意なきこなしにて、

お芳　女子の口から恥かしい、此やうな事を申し出し、人の手前も面目なうて、御酒どころではないわいなう。

利右　おゝ尤もだ、そちよりも好い年をした此親仁、人一倍に面目ないわえ。

喜助　いえ〳〵何で私共に面目ない事がござりませう、幾ら豪家の大分限で、金はあつても娘さんが

此お虎さんを見るやうに、虎河豚のやうな顔附きでは、こりや御相談もむづかしいが、斯樣な頗る別品の飛切りのお孃さま、忠臣藏の九段目なら、欲しがる所は山々あると、親御が威張らにやならぬ所を、それを嫌ふといふ事が、いやさ、それを兎やかく仰しやるには、何か仔細がござりませう。

お虎　もし／＼喜助どん、大概にしておくれ、お孃さまに假託けてわたしの顔の棚卸しは、何ぼ伊香保の湯治場で、洗ひ方をするといつても、聞き流しにはして居られぬ、さういふお前の顔色は目尻が下つてちよんぼり鼻、おまけに形がちんちくりんで、ちよこまかするのが見られた態か、それに引替へ妻木さまは、何處に一つ言ひ分のない御器量人ゆゑ東京で、定めて藝者か女郎衆にお馴染でもござりませう、さういふ事なら金錢づくで、濟ませておしまひなされませ。憚りながら此お虎が掛合方になりませうわいなあ。

利右　失敬ながら妻木さま、もしお馴染でもござりまして、其方へお義理立てなら、又如何樣とも御相談の調ふ工風にいたしませう、どうぞ仔細を打ち明けて、お聞かせなされて下さりませ。

ト言へども繁默つて居るゆゑ、お芳こなしあつて、

お芳　もし父さも、もう／＼何にも仰しやりまするな、御返事のござりませぬのは、不束な私ゆゑ、

お氣に入らぬのでござりますわいなあ。

利右　成程そちの言ふ通り、娘がお氣に入りませぬか。

繁　あいや全く左にあらず、此身に過ぎたる御息女を、何ゆゑ僕が嫌ひませうぞ。

お虎　そんなら何でお聟さまが、不承知でござりまするぞ。

喜助　何か仔細がござりませうに、其譯とても仰しやらず。

利右　たゞお斷りなされまするは、

お芳　ちとお恨みでござりますわいなあ。（ト皆々にて詰掛けて言ふ。此内繁思入あつて、）

繁　さあ其仔細と申しまするは、老後に及ぶ一人の、病に臥したる親ある身ゆゑ。

利右　なに、親御樣が御病氣で。

お芳　それでお斷りを仰しやりますとな。（ト是れより合方きつぱりとなり、）

繁　此度當地へ立越えましたも、其親人へ見舞の爲、先刻當所の裏手にある蓮華寺村まで尋ね行き、病氣の見舞をいたせし所、追々快氣に赴くとは申せども所謂老病、明日をも知れぬ父が一命、もし萬一の事あつては他家へ養子の身となりて、親の家名を絶すの不孝、それゆゑ餘儀なく御返事が成兼ねまして斯くの仕儀、中々以て御息女や平民が不足にて、兎やかく申す次第でござらぬ、

尤も學問修業の上、官へ勤める志願など昨年まではござつたれど、方今江湖の景況にては、一度過分の祿を得るとも、廢官の列に入り其職を免ぜらるれば、一時目途を失ひて狼狽いたす者多し、されば生涯安全は商家に越したるものあらじと、僕も決心いたし居れば、二言と申さず承諾なし、お返事いたす筈なれど、兄弟とてもござらぬゆゑ、父の家名を立てませねば不孝に相成る身の上ゆゑ、緣邊の儀は幾重にも、御容赦なされて下されい。

ト是れを聞き利右衞門思入あつて横手を打ち、

利右　いや、したり、此利右衞門が目利は違はぬ、御孝心の程感心いたしました、そりやさうなくては叶はぬ事ぢや。

繁　すりや、お聞き濟み下されしか。

利右　御孝心の程戸倉屋利右衞門、承はりましてござりまする。

ト是れにて繁先づは安堵といふ思入、お芳氣の揉めるこなしにて、

お芳　もし父さん、わたしやあなたと添はれねば、不孝なやうぢやが、此世には。

利右　はて、何にも言ふな是れまでの、御緣と思つてあきらめろ。

お芳　いえ〳〵わたしや。

利右　えゝ未練な奴めが。（トきつと言ふ。お芳ハツと泣伏す、利右衛門こちらへ向ひ、）扨妻木さま、して其親御と仰しやりまするは、蓮華寺村にて何御家業、御姓名は何とおつしやりまするな。

繁　卽ち父は私立ながら、小學校の教師をいたす、妻木右膳と申すもの。

利右　それ承はつて先は安堵、これ娘悦べ、この緣邊は整つたぞ。

お芳
繁　えゝ。（とびつくり思入）

利右　さあ、御孝心なる妻木さまゆゑ、御病氣でござる親御さまを、見捨てゝ養子に行かれぬと仰せあるは御尤も、さういふ譯なら是れから直に、蓮華寺村へお尋ね申し、其親御にもお目に掛り、お賴み申した其上で、もしも養子に下されずば、そちを嫁に遣つてなりと、見事一緒に添はしてやるぞ。

ト是れにてお芳嬉しきこなしにて、

お芳　父さんのお情お慈悲、有難いやら嬉しいやら。もし、此通りでござりまする。

ト手を合せて拜む、繁はよしなき事を言つたといふ思入あつて、

繁　それと知つたら曖昧に。

利右
お芳　えゝ。

繁　いえなに、それと存じたら、必ず父は逢ひますまい。
利右　所を程よく私から、申し入れるでござりませう。
お芳　そんならあなたと御一緒に、少しも早く蓮華寺村へ。
繁　あいや、是れよりは山續き、暮れては甚だ物騒ゆゑ。
利右　成程最早入相ゆゑ、明日の事にしようわえ。
お芳　それでは早く夜が明けて、明日の朝になればよい。
利右　まだ今日の日が暮れもせぬに。
トお芳いそ〳〵するこなし、此時風の音烏笛になり、日覆より下手へ合引にて烏三羽舞ふ、繁思入あつて、
繁　春とはいへど山里は、繁る木の間に蔭闇く、
利右　夕日も早く入相に、塒に迷ふむら烏、
お芳　只さへ旅は物憂きに、聞くも淋しきあの啼く音、
繁　其烏より烏羽玉の、
利右　戀の闇路に迷ふ身の、

お芳　願ひが叶ふ知せなるか。

繁　心に掛る我が身の上。

利右お芳　どうぞ首尾よう。（ト案じる思入、爰にお虎燗徳利を持ち出で）

お虎　はい、出來ました。（ト大きくいふ、皆々驚くを道具替りの知らせ）

繁　あゝ、びつくりした。（トよろしく思入、追分節にて此道具廻る。）

（伊香保道の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う山組の張物、後同じく山の遠見、裾通り一面の藪疊み上下山組の張物にて見切り、下手は杉林、日覆より同じく釣枝、霞附の半月をおろし、よき所に是れより伊香保湯治場道と記したる榜示抗、爰に前幕の小助、股引法被装にて立ちかゝり、猿廉、豚吉人力車夫にて、側に車を置き立ちかゝり居る、此見得山おろし木魚入りの合方にて、道具留る。

猿廉　もし小助さん、入費を掛けて遠方まで、出掛けて來た甲斐あつて。

豚吉　斯ういふ工合に追込みものも、足が附いたらこつちのもの、まあ安心を。

兩人　なせえまし。

小助　お前方のいふ通り二三十里もある所を、物を遣つてやつて來たのだ、是れなり行方が知れねえと

言つて歸るのも氣が利かねえが、そこは蛇の道はへびとやらで、立場々々で人力車に、聞いて爰まで追込んだが、伊香保の湯場に居ると知れりやあ、籠の鳥も同然だ。

猿兼　それぢやあ直に湯治場へ、

豚吉　三人連れで仕掛けませうか。

小助　いや、此儘三人踏込んだら、向うが素早い散切だから、風を喰つて逃げるも知れねえ、それよりおれが先きへ行つて、とつくり樣子を見て來るから、突き留たら二人とも規模をするから一緒に行き、若し手向ひでもしやがつたら、助鐵砲に出てくれろ。

猿兼　そりやあお案じなせえますな、こつちやあ腹から平民で、喰ふに困つて人力車、なんの役にも立たねえが、こいつあ元が士族だから、少しやあ腕も利いて居りやす。

豚吉　あんまり自慢も出來ねえが、弓馬槍劒柔術まで、武藝は大抵習つたから、高の知れた生利書生一人や二人は何でもねえのさ。

小助　それぢやあおれは一足先へ、探りに行つて突留めるから、二人は爰に待つて居てくれ。

猿兼　知れねえやうに、見え隱れに、

豚吉　跡からそろ／＼行きませうか。

小助　そんなら跡から附いて來やれ。

兩人　承知しやした。（ト三人花道へ行きかける、猿兼揚幕の方を透し見て、）

猿兼　もし小助さん、月はあつても湯煙りで、判然とは分らねえが、向うから來る散切りは、目鏡橋で此間見掛けた書生に似て居ますぜ。（ト小助向うを透し見て、）

小助　成程身形が似て居るやうだ、こいつは向うへ行かうより、爰等あたりに隱れて居て、いよ〳〵あいつに極つたら、捕ッ捉めえて掛合ふから、二人は後に聞いて居てくれ。

猿兼
豚吉　えゝ、承知しました。

ト三人は後の藪蔭へ忍ぶ。花道より以前の繁出來り、跡を見返りほつとこなしあつて、直舞臺へ來る、此時上手の藪蔭より以前の小助出で、繁を透し見て、

小助　おい、妻木さん待ちなせえ。（ト聲を掛ける、繁びつくりして小助を透し見て、）

繁　や、こなたは小助、どうして此處へ。（トぎつくり思入、小助前へ出て、）

小助　どうして爰へ來るものか、お前の親が上州の、伊香保在にあると聞き、大方こつちと足を附け、跡から追込む道々も、立場々々で人力の仲間に聞いてやつて來たのだ。爰で逢つたは丁度幸ひ、おれと一緒に歩びなせえ。（ト此内繁思入あつて氣を替へ、）

繁　そりや何ゆゑに態々と、僕を爰まで追掛けて。

小助　えゝしらばつくれるなえ。（ト合方きつぱりとなり、）どういふ譯と聞かねえでも、こなたの胸に覺えがあらうが、知らざあ言つて聞かせよう、旦那の居間の用簞笥に、仕舞つてあつたお手許金、然も金貨で二百圓、こなたが盗んで逃げたらう、さあ素直に一緒に行きやあよし、厭だと言やあ腕づくでも、駿河臺まで連れて行くから、性根をすゑて挨拶しなせえ。

繁　こりや〳〵小助何を申す、父の病氣を見舞の爲、一兩日の暇を乞ひうけ、故鄕へ參りし此繁、どの道是れより東京へ立歸らねばならぬゆゑ、一緒に行けなら參りもしようが、金貨を奪ひしなんぞとは、此身に取つて覺えはないぞ。

小助　いや、覺えがねえと言張りやあ、出る所へ出て調べを受け、こなたに白狀させにやあならぬが、さうする日にやあ表向き、旦那のお名の出る事ゆゑ、穩便にして連れに來たのだ、兎やかう言はずとおとなしく、素直に一緒に行きなせえ。

繁　いや、惡名を附けられては汝と同道いたされぬ、僕一人にて勝手に歸る。

小助　膈に疵持つこなただから、こいつあ一緒に歸られめえ。こう二人とも遣ッ附けろ。
ト此以前より後へ猿兼豚吉出て、窺ひ居て、

猿兼 豚吉　うぬ、覺悟しろ。（ト左右より繁に組附くを、繁ちよつと立廻つて左右へ投げのけ、きつとなり）

繁　扨は大勢語らつて、繁に無禮をいたすのぢやな。

小助　おゝ、どうで素手ぢやあ歸るめえと。まさかの時の助鐵砲、玉を逃さぬ其爲に跡押附きの人力車、わざ／＼雇つて東京から、伊香保まで連れて來たのだ。

猿兼　生業づくぢやあ客足も、見りやあ遁さぬ目鏡橋、しかもこなたがお徒士町の御家直といふ人力車に乘つた其時落したる、こなたの手紙を拾ひ取り。

豚吉　名宛を證據に駿河臺の、神保樣のお屋敷へ、わざ／＼屆けて行つたので、横筋違の道を行き、追込み者と足が附き、突留められたが百年目だ。

小助　厭だと言やあ簀卷きにして、此人力車へ括り附け、引いて行くから、

三人　覺悟しろ。

繁　扨はそれゆゑ此狼藉、賊を爲したる覺えはなけれど、手籠めにするとあるからは、今廢刀の世の中に、廢りし劍道柔術も、少しは覺えの妻木繁、わいらの自由に相成らうや。

小助　えゝ面倒な、疊んでしまへ。

猿兼 豚吉　合點だ。

ト是れより禪の勤めになり、小助、猿兼、豚吉の三人縫包みにて打て掛る、繁これを相手に無手の立廻りよろしくあつて、猿兼、豚吉を投げ退ける、小助打つてかゝり兩人立廻り、左右へ別れきつと見得、此時知せに附き月隱れて闇黑になり、探り合になり、繁は思入あつて後の藪蔭へ隱れる、三人は是れを知らず、猿兼、豚吉起上り、左右より小助に打つてかゝる、小助其手を捉へ、

小助　おれだ〱。

兩人　小助さんか。

小助　これ。

ト兩人に囁き、三人は探りながら後の藪へ隱れる。跡本釣鐘凄き合方になり、正面の藪を押分け繁出で、四邊へ思入あつてほつとこなし。此時ばた〱になり、上手より前幕の御家直、頰冠りにて左の手の小指を血に染みたる紙にて結へながら出來り、繁に突當り、双方びつくりして跡へ下り、互ひに透し見て、繁は今の者ではないかといふ思入、御家直は南無三といふ思入にて、そつと摺拔け、花道へかゝる、繁これを透し見て、

繁　今のは、どうやら。

直　えゝ。

ト ぎつくり思入、此時後の藪蔭より以前の三人出で、猿兼後より組附くを繁振り解いて投退ける。爰へ又豚吉窺ひ寄つて組附くを、繁突廻し手を捻ぢあげ、向うを見込む。花道の御家直は思入あつて小指の紙の解けかゝりしを口にて銜へきつと結ぶ。双方見合つて木の頭、小助は舞臺上手にて、繩捌きをする。御家直逸散に花道へはひる。繁是れを見送る仕組み、山おろし、双盤の責めにてよろしく、

ひやうし幕

ト 幕引き附けると、道具蔭廻しにて、直に引返す。

(神保屋敷の場)――本舞臺三間の間中足の二重、本庇本椽附き、眞中に石の沓脱ぎ、二重の上手後へ下げて椽側續きの厠、石の手水鉢、葉蘭など植込み、鉢前の模様よろしく。二重下手板塀にて見切り、二重正面上手、一間の床の間、是れへ唐畫の掛物、此下手一間、地袋戸棚、違ひ棚、下手銀地の襖、いつもの所枝折戸、諸所に飛石、雪見形の石燈籠などよろしく、よき所に梅の立木、日覆より同じく釣枝、總て東京駿河臺神保屋敷内庭先の模様、二重にお辰の下女、煙草盆を掃除して居る、平舞臺に○△の中間二人、竹箒、水手桶を持ち、庭掃除をして居る、此見得調べにて幕あく。

ト中間あちこちを掃除する事あつて、

○おいお辰どん、金を盗んで逃亡した、繁さんが捕つたさうだが、

△よくそれでも早く知れたが、まだ歸つては來ないではないか。

お辰捜しに出た小助どんから、昨日伊香保の湯治場で、突留めたといふ電信が掛つたから、晝夜車で急いだら、今日あたりは歸りませうが、新聞にでも出てはならぬと旦那さまには御心配、必ず世間へ言はしやんすな。

○それは口塞げを貰つて居るから、世間へ出ては言はないが、あの物堅い繁さんが。

△どういふ事で顔に似合はず、あんな事をしなすつたか、人の心は知れねえものだ。

お辰さあ繁さんは心柄ゆゑ、捕つても仕方がないが、只氣の毒なは惣助どの、自分の甥だと旦那さまへ、碁のお相手に繁さんを連れて來たのが始りで、身許を請合ひお屋敷へ住込ませた證人ゆゑ、申譯がないといつて、既に命を捨てる所、旦那様のお聲掛りでやうく死ぬのは止めになつたが、何でも遠くへ逃げぬ樣にと、走り大黑さまを逆さに吊して、針をさしたり何かして、氣を揉んで居なさんすわいなあ。

○聞けば惣助どのは此間から、柳原だの兩國だので、占ひを見て貰つたさうだが、そんな無駄な事

はねえ。
△　まあ其錢があるならば、煮込の牛で立ちながら盛切り酒でも呑む方が、餘つぽど増しといふものだ。
お辰　お前方はさう言はしやんすが、占ひだとて一概に、當らぬとばかりは言はれぬわいなあ。
○　そりやあ當るも八卦當らぬも八卦で、何の何某といふ占ひ者なら、十に一つは紛れ當りに當らねえとも言はれねえが、
△　大道中で玉をあふぎ、天眼鏡を捻くり廻して、間抜な奴の面を見ると、呼び掛けて居る占ひ者が何で當てになるものか。
お辰　そりやお前方の悪口といふもの、わたしなども迷ひ性で、よく往來で見て貰ふが、當らぬ事はござんせぬ。
○　それぢやあ矢ッ張りお辰どんも、亡者の仲間にされた方か。
お辰　なに、亡者の仲間にされたとはえ。
△　はて占ひ仲間の符牒では、客を亡者といふさうだ。
お辰　まさかさうでもござんすまいわいなあ。（ト此時花道揚幕の内にて。）

惣助　えゝ、きり〳〵と歩びやがれ。
小助　まあ〳〵惣助どの、靜かにしなせえ。
　トやはり合方調べにて、花道より惣助袴股立若黨のこしらへにて、腹の立つ思入にて出る、其れを前帶の小助宥めながら出る、跡より前帶の繁着流しにて褄れて出る、其後より猿鎌、豚吉の人力屋、繁の羽織、胴亂、シヤツポなどを持ち附添ひ出來り、花道にて、
惣助　えゝ、よくもうぬは此惣助に、酷い煮湯を呑まし居つたな。
小助　これ〳〵惣助どの、いふ事があつたら後で言ひなせえ、腹を立てたとて仕方がねえ。
繁　必ず逃げはいたさぬから、さう大聲を發せずと、先づ〳〵靜かにいたされい。
惣助　えゝ、是れが靜かに言へるものかえ。（ト側へ寄らうとするを、）
小助　はてまあ、跡で分ることだ。
猿鎌　お屋敷内のお庭先。
豚吉　まあ〳〵靜かになさいまし。（ト皆々舞臺へ來る、お辰此體を見て、）
お辰　おゝ、小助どん、歸りなさんしたか。
小助　繁さんを連れて戻つたと、旦那樣へ申し上げて下せえ。

お辰　あい〳〵、合點ぢやわいなあ。（トお辰奥へはひる。）

惣助　これ中間衆、御門の口を固めて下せえ。

△○　畏まりました。（ト中間二人件の竹箒と水手桶を跡へ殘して下手へはひる。）

小助　さあ繁さん、爰へ出なせえ。

繁　承知いたした。（ト平舞臺の眞中へ下に居る、惣助腹の立つ思入にて）

惣助　えゝ、よく洒蛙々々とお庭の先きへ、恐れ氣もなく出られたものだ。（ト繁の側へ詰寄り、）これ繁、おのれはなあ〳〵。（ト下に居る、是れより合方になり、）此惣助が改めて、今言はずとも知れた事だが、おのれはおれが血を分けし實の姉の忘れ筐、しかも娘で、いやさ、娘ではない姉の子だ、親仁は田舍で私學校の師匠をしてゐて幽な暮し、學問修業の其爲に東京へ出て勵みたく、五年跡から出て居る所、下宿を取つても月々に多分の入費が掛るゆゑ、身貧な親の仕送りを、助ける工風はあるまいかと、相談掛けられ去年の秋、こちらのお屋敷の旦那さまへ、お願ひ申して兎も角もと、碁のお相手に出した所、御意に叶つてお屋敷へ置いて下さる有難さ、其大恩も打忘れどういふ心で大それた二百圓といふ大金を、おのれは盗んで逃げ居つた。こりややい、此惣助は數年來若黨奉公して居るが塵ッ葉一本人の物を掠めた事はなきゆゑに、正直もの　と名が通り、

其お蔭やら此やうに、以前と替りお屋敷も狹くなつたるお住居にお人減らしの其中で、お使ひ下さる御高恩、身の面目もおのれゆゑ、若し手引でもしはせぬかと、旦那樣に思はるゝが、口惜しいやら悔しいやらで、夜の目も碌々寐られぬぞや。さあ二百圓の其金をば、何處へ隱した、それを吐かせ、あの胴亂にもないといへば、何の爲に遣つたか、それをきりきり吐かしてしまへ。

ト きつといふ、此内繁差俯向いて居て、此時顏を上げ、

繁　そりや早や僕が奪ひしなら、伯父上にも御迷惑が、掛るまいとも申されぬが、其儀は毛頭覺えのなき事、只今それにて旦那樣へ、申し開きを仕つれば、先づ先づお控へ下されい。

惣助　えゝまだまだそんな事を申して、しらばツくれるか。こりややい、幾らそんなにしらを切つても、おのれより外盜んだ者が、ないといふのが知れて居るわえ。さあ旦那さまの前へ出て、なまじ知らぬと言ひ張つて拷問にでも掛る時は、白狀ばかりか身の素性、いやさ、見す見す知れて居る事だ、現在伯父の惣助に、包み隱さず言つてしまへ。

繁　あいや伯父上、お案じあるな、假令拷問受けませうとも、存ぜぬ事を何ゆゑに、白狀がいたされませうぞ。開化に進む世の中ゆゑ、旦那さまにも舊弊な野蠻な事は仰せられまい。

惣助　えゝ何ぞといふと不斷から、おれを捉へて舊弊だの、やれ頑固だのと吐かし居るが、人の物を斷

りなしに掠め取つてそれが開化か、正直正路にするのが開化か、開化競べをして見よう、あゝまだまだおのれに言ふ事がある。此おれなぞは今以て、神や佛を拜むのに、穢れと思へば牛肉などはついまだ喰つた事はないが、此日本に生れながら目玉の青い外國人の、眞似をするとは何の醜態だ。先づ第一に氣に喰はぬは、散切天窓が癪に障る。

小助　これ〳〵惣助どの、めつたな事を言ひなさんな、旦那も矢つ張り散切りだぜ。

ト是れにて惣助心附いて、氣を替へ、

惣助　いや、旦那樣も散切りだが、おのれと違つて形がいゝ。さあ繁、有體に言つてしまへ、言はずば斯うして言はせて遣るのだ。（ト胸倉を取てこづき廻すゆゑ。小助始め車夫二人惣助を留めて、）

小助　これ〳〵惣助どの、待たつしやい、腹の立つのは尤もだが、旦那の御詮議ない内に、疵でも附けちやあ不都合だ。

猿兼　まあ〳〵靜かに、

豚吉　なさいまし。

惣助　えゝ、無口な乃公にこんなに喋らせ、何を言つても馬の耳へ、念佛程も聞き居らぬ、おのれ伯父をば馬鹿に仕居るな。（ト腹の立つ思入よろしく、）

猿兪　どうせ二百圓といふ金を、望むくれえの肚胸だから、
豚吉　こなたが兎やかう言つたつて、何とも思ふ氣遣ひなし。
惣助　それゆゑ爰でしめあげて。（ト又立ち掛る、此時奥にて）
正道　惣助待て。（ト聲をかける）
惣助　や、あのお聲は、
小助　旦那さま。
猿兪　まあ〱靜かに、
豚吉　なさいまし。（ト是れにて惣助思入あつて）
惣助　旦那さまのお聲とあれば、腹が立つても仕方がない。
　　ト是非なく控へる、爰へ正面の襖を明けお辰出で、よき所へ褥を敷く、正道散髪羽織着流しにて
　　出來り、眞中へ住ふ。是にて皆々下に居る、繁も差俯向いてゐる、正道思入あつて、
正道　いやなに小助、よくぞ繁を連れて歸つた。
小助　へい、昨日ちよつと電信で、申し上げて置きましたが、伊香保の湯場でやうやつと捕り、押へま
　してござりまする。（ト惣助前へ出で、）

惣助　扨旦那樣、斯樣な奴とも存じませず、お手許へ差上げまして、只今となり私も面目次第もござりませぬ、その申譯に惣助めが、白狀をさせ御覽に入れゝば、何卒詮議の役目をば、仰せ附られ下さりませ。

正道　いや我が思ふ仔細もあれば、其方は先づ控へて居よ。こりや小助、同道なせし車屋兩人、定めて如在もあるまいが、他へ此事を漏さぬやう、申し附け置いたであらうな。

小助　其儀は豫て兩人に、申し含め置きましたれば、漏れる氣遣ひはござりませぬ。

正道　おゝ然らば是れを褒美に取らせい。

（ト懷中より目錄包みを二つ出し、小助に渡す、小助受取り此方へ來り、）

小助　さあ、旦那樣から二人へ御褒美、是れで一杯呑まつしやい。（ト渡す、猿兼受取り包みの上書を見て、）

猿兼　や、こりや二人へ五圓づゝ。

豚吉　これは澤山、有難うござります。

正道　おゝ、大儀であつた。休息しませい。

猿兼　それではシャツポと胴亂は、

兩人　そちらへお渡し申します。（ト小助受取り、）

小助　早く歸つて休まつしやい。
猿兼　左樣なら私共は、
豚吉　是れでお暇いたします、（兩人花道へはひる、正道思入あつて緣端へ出で、）
正道　こりや繁、それへ出い。
繁　はッ。（ト前へ出る、是れより本調子の合方になり、）
正道　事新しく申さずとも、こりや其方の身の上ながら、學問修業の其爲に、五ヶ年以前國を立出で、旣に是れまで有名の教師に附いて東京にて、勉强なせし程あつて、なか〳〵以て某などが遠く及ばぬそちが學才、天晴何れの學校にても教師になるべき器量あれば、我が學問の友となし、側近く召使ひしに、斯く聖賢の道を學び人に教諭もなすべき身にて、何ゆゑ斯かる所行をなせしぞ、それとも又聖賢の域に至りて非義非道を行ふ事の例あるや、われは素より淺學ゆゑ、それ等の邊を辨へざるが、愚昧の心に了解なすやう、此場に於て諭し聞かせよ。
（ト思入にて言ふ、繁じゆつなきこなしにて、）
繁　まことに左樣仰せられましては、二言と申し上げやうもなく、只々恐縮仕りまする。
正道　いや、恐縮とばかりにては、更に其意が相分らぬ。尤も諸校の塾となる書生は十が八九まで、學

事に勉強いたすべき職を忘れて酒色に溺れ、或ひは北廓柳橋などの娼妓や歌妓に魂奪はれ、學費に充つる定額を皆遊興に遣ひ捨て、買整へし書籍まで賣代なすに至りては、其身を寄する所もなく、路傍に迷ふ者多し、かゝる懶惰の輩とはそちが行ひ大いに反し、我が邸宅へ來りても日夜書籍に心を委ね、勉強衆に勝れしゆゑ、見所あつて寄宿を許し、盡力なして世話なせしが、如何なる天魔が魅入れたるや、案に相違の所行をなし、わが用簞笥へ入れ置きし金貨の内の二百圓、何等の趣意にて掠奪なせしや、さ、有體に申し上げよ。

　トきつと言ふ、是れにて繁思入あつて氣を替へ、

繁　こは案外なるお疑ひ、其儀は毛頭此身に取り、覺えぬ所行にござりまする。

正道　むゝ、然らば何ゆゑ斷りなく、其日汝は旅行なせしぞ、それにも何ぞ謂れあるや。

繁　はツ、其御不審も左る事ながら、君には豫てお手に觸れしと承はりし父の書翰、在所表より到來なし披見いたせば先頃より、持病發して當今にては、兩足ともに立たざる程に、難儀の由の知らせの文面、見るに心中混亂いたし、取る物も取り敢へませず、出立いたしてござりまする。

正道　そりや早や父の病氣とあれば、止むを得ざる事ながら、假令心中混亂なすとも、日頃恩義にあづかり居る伯父惣助へ其由を、託して置いてなぜ立たぬ。

繁　折惡く其砌、伯父惣助は他行いたし、居合はせませぬそれゆゑに。

ト此内惣助自烈込む思入あつて、

惣助　えゝ、どういへば斯ういふと、旦那の御前でふてぐしい。こりややい、よしんばおれが居ぬにもせよ、無人のお宅といふではなし、なぜ辰どのか小助どのに、譯を話して立たねえのだ。

繁　さあ、それは。

小助　斯ういふ譯で行つて來ると、たつた一言この小助に、言つても手間は取れめえに、それをこつそり沙汰なしで、在所へ行くとは合點が行かねえ。

正道　日頃愚昧の匹夫ならば、粗忽とのみにて聞き捨てんが、教への道に勉強なす、博學多才の其方が申譯には相成らぬぞ。（ト此内繁いろ〳〵思入あつて心附き、氣を替へ）

繁　其儀はそれなるお辰どのへ、申し置きましてござります。

お辰　えゝ。（トびつくりなし）

正道　なに、是れなる辰へ言ひ置きしとな。

お辰　いえ〳〵何で私へ。（ト言ひ掛けるを、繁冠せて）

繁　はてこなたも覺えの惡い、あれ程僕が賴み置きしに、失念されては。（トちよつと思入あつて、それ

頼まれたでござらうがな。（ト思入にていふ、お辰扨はと呑み込み、）

お辰　ほんにあの折のお頼みを、つい忘れて居りましたわいなあ。

惣助　えゝ、其間に合せはまことにせぬ、扨はこなたは繁めを、まことの男と、いやさ、誠の奴と心得て、心を掛けて居るのだな。

お辰　いえ／＼、何でいやらしい、そんな事がござりませう。

小助　いや／＼それに違ひねえ、戀人ゆゑに庇ふとしても、其手は喰はぬ御前の面晴れ、但し不義をして居ずば、有様に言ふがいゝ。

お辰　さあ、それは。

惣助　何で繁を庇ふのだ。

お辰　さあ、それは、

小助　有體に言つてしまふか。

お辰　さあ、

惣助
小助　さあ、

三人　さあ／＼／＼。（ト詰め寄る、是れにてお辰困つて居るゆゑ、）

正道　こりや繁、何科もなき此辰に、難儀を掛けるは卑怯なるぞ。（トきつといふ、繁ちつと思入、正道こなしあつて、）實に朋輩の誼とて、目交で悟り是非なくも、それと言ひしは辰が信義、假令如何程其方が、黑きを白きと言ひなすとも、豫て先手の圍みをなし、兩眼共に明らかなるに潰すとしても最う叶はぬ、無益の中手は未練なるぞ。

ト是れにて繁ぐつと詰つて差俯向くを、惣助襟首をとつて引起し、

惣助　さあ繁、旦那樣のおつしやる通り、もう盤面は作れぬから、恐れ入つたと白狀しやれ、言はずば伯父の惣助が、拷問に掛けて言はすぞ。

繁　いや、假令如何程糺問の責に逢ふとも此繁、覺えなければ白狀いたさぬ。

惣助　えゝさりとては死太い奴、言はずば斯うして、（ト下手にある竹箒を取つて）こう〳〵、（トよろしく打する、）是れでも白狀仕居らぬか。（トきつとなる、正道思入あつて、）

正道　惣助、待て。

惣助　でも、白狀いたしませぬば。

正道　いや、是れと申すもあの砌り、番をいたせし其方が、熟醉なせしゆゑの事、そちも罪科は遁れぬぞ。

惣助　それゆゑ拙者は申譯に、切腹なさんといたせしが、お聲掛りに今日まで、命を延はり居りました
が、遁れぬ科ゆゑ此場に於て。（ト有合ふ柄杓の柄を拔取り腹へ突立てようとするを小助留めて、）

小助　これ惣助どの、早まらつしやるな。

惣助　いや〱留めて下さるな、是れには段々譯あつて、義理ある兄の右膳より繁が身分を頼まれし、
此惣助ゆゑ死なねばならぬ。

正道　こりや繁、そちやあれなる現在の、伯父惣助に自殺させても、白狀せぬ所存なるか。

繁　さあそれは。

正道　但しそれにて罪に伏すか。

繁　さあ。

惣助　腹を切らうか。

繁　さあ、

小助　言つてしまふか。

繁　さあ、

皆々　さあ〱〱。

正道　伯父に無實の罪を負はせ、それにて敎師の名義が立つか。
　　トきつと言ふ、是れにて繁是非なき思入にて、
繁　はゝッ、御推察の通り二百圓、掠奪いたしてござりまする。
正道　おゝ、しかと左樣か。
繁　はッ。（ト平伏なす、惣助きつとなつて、）
惣助　主人の金を盜みし大罪、他人の手にて殺さんより、幸ひ是れなる竹の柄にて。（ト立掛るを、）
正道　こりやく、惣助暫く待て。
惣助　えゝ、又お止めなされまするか。
正道　人命を斷つ所存なれば、斯樣に我も心を勞し、事穩便にはいたさぬぞ。
惣助　でも此儘に、置かれぬ仔細が。
正道　はて、主の詞を用ゐぬか。
惣助　はゝはッ。（ト餘儀なく控へる、正道思入あつて、）
正道　惣助始め小助、辰、用事があらば呼ぶ程に、暫く次へ遠慮いたせ。
小助　でも罪人を、是れへ置き、

お辰　旦那様には御一人。

正道　はて苦しうない、次へ立て。（ト惣助思入あつて、）

惣助　あゝ是れと知つたら疾くより素性を。

正道　や。

惣助　いえ、お次ぎへ立つでござりませう。

ト惣助は上手、小助は下手、お辰は奥へはひる、跡正道、繁残り正道こなしあつて、

正道　こりや繁、近う進め。

繁　はゝ。（トおづ／＼として居るゆゑ、）

正道　はて、苦しうない、進め／＼。

繁　はツ。（ト恐る／＼前へ出る。）

正道　日頃博學秀才なる、そちに似氣なく金子を奪ひ、立去るなどゝは其意を得ず、そりや早や若氣の至りゆゑ、遊里の金子に差支へ、賊心の發するなどは古今往々ある例ながら、婦女に心を寄せざる事は、活眼を以て見拔き置いたり、何等の望みで二百圓掠奪なして立去りしか、次第によらば此儘に見遁しやるまいものでもない。委細をそれにて言ひ聞かせよ。（ト物柔かに言ふ。）

繁　はゝツ、恐れ入つたる其お尋ね、君の御恩を顧みず、金貨を掠奪いたしましたる、餘儀なき次第を旦那樣、お聞きなされて下さりませ。（ト是れより誂への合方になり）世の諺にも申す如く、貧の盗みに戀の慾と、學問修業をいたす身が、かゝる所行を働きまするは、心苦しき事ながら、故郷に殘る我が實父、不幸續きて三年前妻に別れて又候や、今年持病の足痛發し家内も歩行の叶はぬ程難儀の由を書翰にて、申し越せども救ふべき、力及ばぬ書生の身、千々に心は碎きしかど、先刻仰せのありし如く、知己はあれども懶惰の輩、頼みになるべき親友なく、ふッと浮みし賊心も御恩を仇と存じながら、お手許金の二百圓掠奪なして國許の、父方へ持參せしかど、不正の金貨と覺りしか、悦ぶ氣色更になく、それと言はねど餘所ながら、教諭を加へ元々へ、返納せよとの父の言附け、とあつて一旦犯したる此身の罪科は遁れじと、思ひ餘つて佛前へ、竊に供へ其儘に、立歸つたる伊香保にて、計らず追手の捕縛を受け、お調べ受くるも身の大罪、遁れぬ所にござりますれば、是非なき事にござりまする。

ト愁ひの思入にていふ、正道これを聞き、扨はといふこなしにて、

正道　むゝ、我も先日父方より、屆きし書翰が手に入りて披見いたせば斯くあらんと、疾より遠察いたしたり。

繁　只此上の願ひには、此場に於てお手討に、御成敗なし下さりませ。

ト覺悟の思入、正道合點の行かぬこなしにて、

正　はて心得ぬそちが言ひ分、孝心厚き身の上に、父なき後まで一命を、助けくれよと願ふべきに、此場で成敗いたしくれとは、未だ分別至らざるか。

繁　其一命を差出しますとも、お情厚き君ゆゑに、假令此儀を御内分に、なされまするも世の人口、惡事千里を走るの諺、いつかは此身の犯せる罪、世上へ流布なす其時は、伯父が迷惑二つにはお目違ひとなりますゆゑ。

正道　なに、目違ひと相成るとは。

繁　かゝる書生の姿となり、妻木繁と申しまするも、此身は女でござりまする。

正道　何と申す。（トびつくり思入、是れより替つた合方になり、繁形を改め、）

繁　何をお隱し申しませう、私父母は子に縁薄く、先へ產れし子供等は皆幼少にて病死なし、せめて此身は息災に育てんものと呪禁や人の敎へを信じまして、男姿で何事も男子の積りで育てしゆゑ、いつか男の所業となり、女の身には憎らしき高慢顏も田舍では、させる修業も出來ませねば伯父を便りて東京へ、學問修業に出でましたが、年月經ちて早や五ヶ年、何卒男女同權になり

たき事を希望なし、是れまで身の上を包みましたが、犯せる罪のいつか又、露顯とならば違式の罪、此身ばかりか旦那樣の、お鑒識違ひとなりし上、恩ある伯父も御主人を、欺く罪は免れず、其恥辱のなき内に少しも早くお手討に御成敗なし下さりませ。只此上のお願ひにはお情お慈悲と思召し、最期の跡の死骸をばお隱しなされて下さりませ、女子の身にて大膽にも是れまで男子に成り果せ、お上の布告もあるものを、僞り居りしそれのみでも、此身の罪科は遁れませぬわいなあ。

ト繁愁ひの思入にて女のこなしよろしく、此内正道扨はといふ思入にて、繁に見惚れろこなしよろしくあつて、

正道　すりや、いよ〳〵其方は、眞の女に相違ないか。

繁　君に命を差上げまするに、何僞りを申しませう。

正道　すりや、あのいよ〳〵。

繁　はい。(ト女のこなし。)

正道　むゝ。(ト思入。是れにて媚いたる合方になり、)然らば繁、これへ參れ。

繁　でも、罪人の私ゆゑ。

正道　はて大事ない、是れへ参れ。

繁　御免なされて下さりませ。

　ト恐る〳〵二重へ上り、正道の側へ恥かしさうに手に支へる。正道四邊へこなしあつて、

正道　まこと女に相違ないか。

繁　はい。

正道　思ひ掛けない。（ト正道繁に見惚れる思入、繁顔を上げ思入あつて、）

繁　さあ、御成敗なし下さりませ。（トぢつと思入。）

正道　いや、成敗はいたすまい。

繁　え〻、そりや何ゆゑでござりまする。

正道　はて、よくも女であつたなあ。（ト餘念のなき思入、爰へ上手より以前の惣助出で、）

惣助　旦那さま、どうぞお許し下さりませ。

正道　なに、許せとは、そりや何を。

惣助　死んだ妹の賴みにより、現在お主をお欺し申し、女を男と申し上げた罪をお許し下さりませ。

正道　疾くより女と申しなば、此詮議にも及ぶまいに、其詫言には及ばぬぞ。

惣助　すりや此儘に繋めを、お許しなされて下さりますするか。

正道　おゝ許さいで何といたさう、女であらば疾よりか思ひを掛けし妻木繁、よくぞ推擧をいたしくわた。（ト此時下手より以前の小助出で、此體を見てびつくりなし。）

小助　こりや罪人がいつの間に、旦那のお側へ參りしは。

正道　おゝ紛失せしと思ひしは、我があやまりにて、取られはせぬぞ。

繁　すりや親共へ贈りましたは。

正道　ありや其方の、支度金ぢや。

惣助　扨は繁を、旦那さまには。

正道　我が權妻にいたしたぞ。

繁　えゝ。（トびつくり思入、小助扨はといふこなしにて。）

小助　そんなら男と思ひしも、

惣助　今日よりしては、お妾さま。

繁　せめては髮の延びるまで。

正道　其斟酌には及ばぬわえ。（ト此時薄く雷の音になる、皆々空へ思入あつて。）

惣助　や、春の習ひとはいひながら、
小助　俄に空が替つたのみか、
正道　遠く聞ゆる雷鳴は、
繁　思はぬ御縁を、
惣助　結ぶのかみなり。
正道　今宵はしつぽり、（ト繁の手を取り引寄せるを木の頭）雨になるわえ。

ト につたりと思入、繁恥かしきこなし、惣助小助は空を見て態と見ぬ振りをする、此引張り、雷の音、なまめいたる合方にてよろしく、

ひやうし　幕

三幕目

小梅別荘の場
向島枕橋の場

〔役名〕――神保の權妻お繁、倉橋直次郎、庇別當小助、牛窪角藏、馬淵大藏、戶倉屋利右衞門、神保
女　書　生

正道。戸倉の娘お芳、女髪結おれん、神保下女お辰等。）

（小梅別莊の場）――本舞臺一面の平舞臺、四間通しの欄間、向う一間床の間好みの掛物、籠花活へ椿をいけ、眞中太鼓張りの襖、上手一間銀張り地袋戸棚、此上茶壁、上の方一間茶壁、下地窓腰張り下の棲、木地障子、よき所に誂への鶯籠、いつもの所枝折戸、下の方屋根附の門二枚開きの戸、此左右建仁寺垣、見越しに本物の松、總て小梅別莊の體。上手に角藏、大藏序幕の書生にて、短き煙管で煙草を呑み居る、下手にお辰前垂れ掛け、下女のこしらへにて小さな摺鉢で鶯の餌を摺つて居る、此見得端唄にて幕開く。と右の合方彈流しにて、

角藏　いや此別莊も上下では、五六名の人員だらうに、よく其摺鉢で間に合つたものだ。

大藏　今お辰が摺つて居るのを、君は何と見られたぞ。

角藏　あれは明日の汁であらう。

お辰　何ぼ皆さんがお小食でも、此摺鉢では間に合ひません。

角藏　さうしてそれは何を摺るのだ。

お辰　こりや鶯の餌でござります。

角藏　はゝあ鶯の餌は摺つてやるのか、それは手數で面倒だな。

大藏　どうで斯ういふ樂みは、權君などの持遊びた。
お辰　それはさうとあなた方は、どちらへお出でなさいました。
角藏　今日は例の日曜ゆゑ、馬淵氏と兩名で、東照宮へ參詣かた〴〵公園地の花盛りに、ぶら〳〵遊歩いたせし所、
大藏　何れの茶店も吸筒やさゝえを開けて風雅連が、てにはも合はぬ歌を詠み、櫻の枝に無性に下げ花の眺めを失ふは、實に殺風景な族でござる。
角藏　ときにお辰、御主人は御閑室で、例の閑碁かな。
お辰　いえ旦那樣はお午過ぎから、瓦町の溫泉へ、小助がお供でお遊びがてら、お出でなされましてございます。
角藏　瓦町の溫泉といふのは、佐竹邸の後へ出來たカルヽスといふ溫泉だな、淺草邊へ遊歩の度毎、入湯なすが極淸潔だ。
大藏　それに隣家が梅林ゆゑ、滿開の折は風呂場へ香り、あれで庭前から墨水の眺望があれば東京一だ。
お辰　私などもお繁さまの、お供をいたして參りましたが、水が綺麗でございますから、底まで透いて見えますな。

大藏　そんなに透いて見えるなら、お辰と一緒にはひりたいものだ。
お辰　又そんな事を仰しやいますが、入込みは御法度でござります。
角藏　いやお繁さんといへば、まだ今日は、艶顏を拜さぬが、何處へかお出でなすつたかな。
お辰　今日は髮をお洗ひなさいましたが、今髮結さんが參りましたので、髮を結つてお出でなさいます。
角藏　洗ひ髮は又一段、嘸や美なる事であらう。然し、お庭の櫻で仕方がない。
大藏　貴妃にも勝る別品を、市中を放れて圍つて置く、當家の主人にあやかりたい。
お辰　そんな事は存じませぬわいな。
大藏　なに、存ぜぬ事があるものか。（ト此時奥にて、）
お繁　辰や、おれんさんがお歸りだよ。
角藏　や、あの聲は。
兩人　お繁の君。
お辰　今の事を申しませうか。
大藏　あゝ、それを言はれて、

兩人　なるものか。

ト端唄になり、奥よりお繁好みの結び髮、着流し、權妻好みのこしらへにて出て來る、跡よりおれん女髮結のこしらへ、櫛箱を入れし風呂敷を持ち出で來る。

お繁　是れは牛窪馬淵の御兩氏、久しくお目に掛りませぬなア。(ト男のやうに言ふ。)

角藏　此頃囊中錢なきに依つて、據なく二週間、金を得る爲著作に掛り、大勉强をいたしました。

大藏　所が意中は深川か柳橋あたりで遊んで居るゆゑ、文中疎漏に書林から賣物品にならぬと言はれ、

角藏　誤謬遺漏の校正も、面倒ゆゑに文庫を投じ、

大藏　今日は愉快を極めんと、運動かたぐ〜出掛けました。

お繁　それでは歸路は向うへ渡り、廓中に登樓の思召しかね。

角藏　君の活眼見拔かれました、何れ明朝昇堂して、

大藏　佳境に入りし御物語は、僕が證言いたしませう。(トお繁女の思入にて)

お繁　それぢやあわたしの察し通り、これから登樓なさるのか、甚だ失敬極まるが、一體君達お二人とも造化の細工が精巧ならねば、歌妓や娼妓に散財なさるは、まことに無駄な事だねえ。

角藏　普く天下に比較なすべき、好男子はあるまじと、思ひ居るに豈計らんや。

大藏　造化の細工が精巧ならねば、歌妓や娼妓に散財は、無駄とは酷い激言だ。
お連　さつきから私は默つて聞いて居りましたが、あなた方の仰しやるは、只一言も分りませぬが、造化の細工とおつしやりますは、なんの事でござりますかね。
お辰　お前ばかりぢやござりませぬ。わたしもさつぱり分りませぬが、どうか了解いたしますやう。
角藏　えゝ、どうか了解いたすやうと、漢語などで生利な。
角藏　爰らが夫の俗諺にいふ、習はぬ經を讀む所だ。
お辰　そりやあお家に居りますから、私だつて因循や曖昧位は知つて居ります。
お連　おゝ、にんじんの和たのとは、此頃來る煮染屋かえ。
お繁　又おれんさんの分らぬことを、ほんにお前では抱腹するよ。
お連　私の顏がへこんで居るとて、炮碌とはひどうござりますね。
角藏　成程顏のへこみ鹽梅、炮碌とは適當だ。
大藏　これも造化の不細工だな。(トおれん思入あつて、)
お連　はゝあ、それぢやあ造化とおつしやるのは、顏の事でござりますね。(ト角藏大藏の顏を見て、)これは君達御兩氏も、精巧ならぬ不細工だ。

お辰　おや、何時の間にかおれんさんまで。
お連　團子を遣ふは今の流行さ。
角藏
大藏　なに團子とは。
お連　それ、皆さんの仰しやるちんぷんかんさ。
角藏　はゝあ、團子といふは漢語の事か。
大藏　僕は言問の土産と思つた。
兩人　はゝゝゝ。
お繁　それはさうと君達は、旦那樣のお歸りまで、何處ぞそこらを一廻り、散步しておいでなさいな。
角藏　いや、瓦町の溫泉なら、最う今に御歸館だらう。
大藏　土手をぶら〳〵歩くより、お庭先の花でも見せう。
お繁　丁度昨今滿開ゆゑ、詩でも吟じてお待ちなさいよ。
角藏　過日參つて頂戴した、御主人のお呑料、
大藏　宇治から參つた別品を、どうか一煎頂戴したい。
お繁　いや、煎茶よりも君達には、唐茶の方が適當だらう。

角藏　又活眼で見拔かれました、唐茶と來ては極の至り。
大藏　最早僕が喉などは、ぐび〳〵響きを生じました。
お繁　これ辰や、何ぞお肴を見繕つて、お燗をつけて上げてくりや。
お辰　はい、白魚がござりますから、お椀でもこしらへませう。
角藏　なに、肴などの手數は無駄だ。
大藏　たゞ酒さへあればよい。
お辰　左樣なればお二人さま。
角藏　君の御厚意、
兩人　頂戴します。（ト右の合方にて角藏大藏お辰附いて奧へはひる。）
お連　書生さんといふ者は、よくお酒を上りますね。
お繁　あの衆二人は其內にも、酒といふと目がないのさ。
お連　鼻のないのは私かね。
お繁　なに、お前の鼻は立派だよ。
お連　いえ〳〵造化の不細工で、有るといふのはほんの名ばかり。

お繁　おゝ造化といへば此頃出た、造化機論といふ本は、女が見なくてならない本だよ。
お連　そりやあどんな本でござります。
お繁　先づ夫婦の仲の事からして、男の子でも、女の子でも自由に出來る敎への本さ。
お連　それがお內にござりますか。
お繁　お出入りの書林から、此間持つて來たゆゑ、旦那さまがお求めなされて、わたしにお見せなされました。
お連　それはお樂しみでござりまするな。今更言つても仕方がないが、さういふ本が早く出たら、こんな中低な顔は出來まいもの。（ト此內お繁傍にある反物を取つて、）
お繁　そんな愚癡を言はないで、是れを持つて早くお出で。（トおれんに渡す。）
お連　おや、是れを私に下さいますか。
お繁　不斷着にでもしておくれ。
お連　どうして〳〵不斷着どころか、立派な餘所行になります、是を持つて歸りますれば、低い鼻が高くなります、誠に有難うござります。（ト風呂敷へ包み、）
お繁　おれんさん、洗ひ髪だから、又明日來ておくれよ。

お連　おゝ參りますとも〳〵、造化とやらの御本があつては、お髮はだいなしに毀れませう。
お繁　えゝ餘計な事をお言ひでないよ。
お連　はい左樣なら、又明日。
　　ト端唄になり、おれん花道へ行く、此時花道より御家直の直次郎、着流し長半纏、下駄がけにて出來り、花道にて、
直次　もしちよつと、物が聞きたうござります、向うの寮は駿河臺の、神保樣の別莊かね。
お連　はい左樣でござります、御用ならば其木戸が、お庭の入口でござります。
直次　あすこの家にお繁さんといふ、お妾がありませうね。
お連　あゝありますとも〳〵元書生さんで居たとやらいふ、別品さんが居ります。
直次　それをお聞き申したいのだ。
お連　それぢやあ最うようござりますか。
直次　大きに有難うござります。（トおれん少し行きかけ、）
お連　はて、あの人は人力だつたが。
直次　えっ（ト振り返る。）

お連　これは失敬、御免なさいまし。

ト端唄になり、おれん足早に花道へはひる、直次郎は舞臺へ來り、枝折戸から内を覗く、お繁ちよつと見て、

お繁　そこへお出でのは、どなたゞえ。

直次　誰でもねえ、おれだっ（内へはひる。）

お繁　や、お前は。（トびつくりする。合方になり、）

直次　何もびつくりする事はねえ、人力車の御家直だ、久しくお前に逢はねえから、態々今日は尋ねて來たのだ。

ト下手よき所へ住ふ。お繁惡い奴が來たといふ思入にて、

お繁　駿河臺から此小梅へ、こつそりと忍んだ來たわたしを、どうして知つて來たのだえ。

直次　そりやあ蛇の道はへびだ、芝の果から淺草まで、顏を知られた人力車、仲間の者の話しに聞き、疾から知つちやあ居るけれど、半股引に筒ッぽぢやあ、お前の恥にならうと思つて、鳥羽の算段の出來るまで、我慢をして來ねえのだ。

お繁　此間筋違ひの待合茶屋へ呼び出され、お前に逢つた其時に、二度と再び來ないから貸してくれと

お言ひだから、そんならさうと言ふなりに、金を持たして歸したのに、何で今日又來なすつたのだ。

直次　さあ、あの時はなくてならねえ金を借りようばつかりに、再び來ねえと言つたけれど、短い髮も段々延び、男姿に打つて替り、洗ひ髮の達磨返し、九年面壁坐禪をする和尚も迷ふお前の姿、氣障な事を言ふやうだが、實の事は顏が見たさに、のろい奴だが出て來たのだ。

お繁　味に搦んでお言ひだが、何もお前と末始終の約束をしたといふではなし、ほんの一晩熊谷で餘儀ない譯で一つに寐たれど、跡で兎や斯う言ふまいといつて別れた二人が仲、そんな氣障を言はないで、一旦來ないと言つたらば、男らしくお出でないよ。

直次　來るなといふのはそりやあ無理だ、お前の方ぢやあ此おれを、氣障な野郞と思ふから、さう無情くいふだらうが、おれが方ぢやあ一晚でも、お前が思ひ切られねえから、無けなしの中で算段して身裝をこせえて逢ひに來たのも、實は顏が見てえからだ、いやでもあらうが煙草位は、吸附けてくれてもいゝぢやあねえか。

お繁　折角のお賴みだが、わたしやあ此頃口が荒れて、煙草を呑むことが出來ないから。呑みたければ爰にあるから、勝手についでたんとお上り。（ト煙草箱と煙管を突出す。）

直次　自分でついで呑む位なら、附けてくれろと言やあしねえ。

ト　お繁思入あつて地袋戸棚から札を出して紙に包み、

お繁　人目に立つと面倒だから、是れで歸りに淺草で、一口呑んで早くお歸り、

ト　札包みを出す、直次郎見て、

直次　なに金を貰ひに來やしねえ、萬人講の無盡へはひり、思ひ掛けねえ金を取つて、身裝を拵えた其殘りが、まだ四五圓こゝにあるから、此心配にや及ばねえ、今日わざ〳〵おれが來たのは、假令一晩でも抱寐をした、お前が旦那の世話になるなら、一言禮が言ひてえのだ、ちよつと逢はしてくんなせえ。

お繁　それは折角のおいでだが、今日は旦那はお留守だから、お前に逢はす事は出來ませんよ。

直次　旦那が家に居なさらねえのか、お留守ならお歸りまで、爰にお待ち申して居よう。

お繁　碁がお好きだからお出先きは、いつお歸りになるか知れないよ。

直次　官員方の車を引きやあ、九時に出て三時まで、御門前に待たにやあならねえ、人力車だから待つのは平氣だ。

お繁　まあ、そんな事を言はないで、少なからうが小遣ひに、是れを持つて歸つておくれ。

直次　さう何も歸れ〳〵と、歸したがらねえでもいゝぢやあねえか、何百圓といふ金を一月に取るこつちの旦那と、日に一圓拵いだところが、たつた月に三十圓、慾を知らねえ者はねえから、いやがられるのは當りめえ、お前ゆゑなら旦那を捨て、喰ふに困りやあ出稼ぎを、しても一緒になりてえと言はれるやうな役は附かねえ、そこはおれも苦勞人、貧の上から見えるから、とんだ琴責の阿古屋だが四三を語つて未練らしく九二も附かねえ事は言はねえ、旦那に逢つて禮を言ひ、一六勝負に惡足の、處分を附けて貰ひてえのだ。

お繁　さういふお前が心では、わたしが兎や斯う言つたとて、所詮聞きはしまひから、日が暮れたらばお歸りに、ならうかも知れないから、又出直して後にお出で。

直次　待つて居るのが邪魔になるなら、又出直して後に來るから、留守を遣ふときかねえぞ。

お繁　お歸りなさらにや知らぬ事、誰が留守を遣ふものかな。

直次　それぢやあきつと逢はせるな。

お繁　ほんにお前もしつこい人だね。

直次　碁が好きだといふ事だから、きつと駄目を押して置くのだ。

ト立上る、此時小指を白き切で結へて居るを、お繁目を附け、

お繁　左の小指をどうしたのだえ。

直次　え、此小指か。（トびつくりして手を隠し、）こりやあ此間こしらへ附けねえ、しやもをこしらへた其時に、はずみで小指を一本切つた。

お繁　いゝえ、それは鳥ではあるまい、大方どこぞへ色が出來、指を切つて遣つたのだらう。

直次　何ぼ以前が士族だつて、そんな野暮な事をするものか。

お繁　ほんに今では指などを、心中に切る者はないねえ。

直次　そりやあ五十年も昔のことだ。

ト懐から小指を切りし手を出して思入、此時懐が明いて鬱金木綿の財布をばつたり落す、お繁財布を取つて、

お繁　財布が落ちたよ。（ト出す。）

直次　こいつを落しちやあ大變だ。（ト思入あつて懐へ入れる。）

お繁　お前大層持つて居るね。

直次　なに、大層持つて居るとは。

お繁　重みは金貨で二百圓ほど。

直次　え、（トぎつくりなし、）馬鹿な事をいつたものだ、こりやあ一錢の赤錢だ。（ト門口へ出る。）

お繁　お前是れを、持つて行かないのかえ。（ト包んだ金を出す。）

直次　五圓ばかりの金は入らねえ、貰ふ件になつたらば、纏めて千圓貰ふ氣だ。

お繁　え。

直次　どれ、出直して又來ようか。

ト時の鐘端唄になり、直次郎懐の中で財布を見て、思入あつて花道へはひる。お繁門口から向うを見て、男の思入にて、

お繁　あゝ人の身の災厄は、いつ受けるか知れぬもの、至急の道に壯健の車夫を選んで雇ひしが、見るから一癖あるものと、目を附けたるが案に違はず、舊幕臣の士族の果て、其夜泊りし熊谷の宿の風呂場で我が乳を認めしゆゑに隱しがたく、包む素性を明せしに、それを言立て無理口說き、得心せねば天下の掟、違式解諭の條例に、觸れし科をば訴へられなば、直に屯所へ拘引され、詰問されなば懷中に、所持なす金の二百圓、如何なる事件にならんも知れず、父が貧苦を救はんと思ひし念も水となる、それのみならず厚恩ある神保氏の名まで出で、本意ならざる事なれば、百計盡きて餘儀なくも、其場を遁れん其爲に身を任せしが我が誤り、これといふのも道ならぬ所業

をなせし天の罰、今にも爰へ立歸らば今日まで包み隱したる此身の恥も露顯なし、新聞紙上に載せらるゝは心苦しき事ぢやなあ。（トよろしく思入、よき程に、奥よりお辰出來り、下手へ來て、）

お繁　はい、お風呂がよろしうございますが、直にお召しなされますか。（お繁女の思入にて、）

お辰　おゝ、きよかと思つたら辰か、最うお湯が沸いたのかえ。

お辰　丁度よい加減でござります。（トお繁思入あつて男のこなしにて、）

お辰　あゝ、其風呂ゆゑに。（トぎよつと思入、）

お辰　え。（ト顏を見る、お繁心附き、女のこなしにて、）

お繁　どれ、一風呂、（ト立上るを道具替りの知らせ、）はひらうかいな。

ト女のこなし、端唄にて此道具廻る。

（向島枕橋の場）――本舞臺眞中より上手へかけて丸物の橋、出入りあり、上の方町家の張物、柳の立木にて見切り、下の方草土手、松の立木、向う八百松より隅田川を見たる夜の遠見、日覆より柳の釣枝、總て枕橋夜の體、波の音にて道具留る。と波の音打上げ、本釣鐘誂への獨吟になる。

〽東風にちぎれ〳〵の雨雲も、一つになりて影闇き、繁る柳の幾筋か、よれてもつれてもつ

れてよれて、解け心の春の宵。

卜本釣鐘かすめて波の音を冠せ、花道よりお芳前幕の娘世話裴にて紅絹の切を持ち目を拭ひ、目病みの思入にて出來り、花道にて、

お芳　ふとした人を思ひ染め、道ならぬとは知りながら、心に染まぬ其人と女夫になるのが厭なゆゑ、死ぬる覺悟で家を出で、東橋から大川へ此身を捨てんと思うたれど、往來の人の多いので、隙がなければ是非なく〳〵、咽ぶ涙を呑込みて、短い命をやう〳〵と、長い橋をば跡になし、爰まで忍んで來はしたが、往來の人も稀なれば、家より追人の掛らぬうち、少しも早う、さうぢや〳〵。

〽昨日に今日と綻びて、雲か雪かと疑ひの、花の色香も仇嵐。

卜本釣鐘やはりかすめて、波の音を冠せ、お芳物思ひのこなしにて目を拭ひながら、平舞臺へ來る、此唄のうち向うより正道散髮鬘書生羽織着流し、駒下駄にて出て來る。跡より小助紺の着附、同じく腹掛股引尻端折り草履にて、浴衣を包みし風呂敷包みを持ち出來り、花道にてお芳の素振を見て身投げに違ひないといふ思入あつて、そつと舞臺へ來り、下手松の蔭に窺ひ居る、お芳は是れを知らず思入あつて、

空も雲りし雨雲に、ふさがる胸の薄闇がり、枕橋から其先きは、道も淋しき水戸樣前、今身を投げて死ぬる身に、怖いことはなけれども、もし惡者に見咎められ、どんな憂き目に逢はうも知れぬ、人目に掛らぬ其うちに、枕橋から身を投げん。

〽盛り短く散りて行く、身の末淸き水の上。

ト お芳は石を拾ひ袂へ入れ、橋の上へあがる、正道いよ〳〵身投げに違ひないといふ思入あつて小助に囁く。

母さまには五つの年お別れ申したそのまゝゆゑ、お顔も碌々知らねども、父さまには此年まで、一方ならぬ御恩になり、それも送らず先立ちます不孝は存じて居りますが、覺悟を極めし上からは、只何事も是れまでの約束と思召して、お許しなされて下さりませ。（ト手を合せ向うを拜み）南無阿彌陀佛。

〽若蘆生ふる川の瀨に、浮寐の鳥の騷立ちて、ぱつと立つたる水烟り、

ト お芳思入あつて身を投げようとするを、小助つか〳〵と行つてお芳を抱き留め、

小助 姉さん危ねえ、まあ待ちねえ。

お芳 死なねばならぬ身の上ゆゑ、どうぞ放して下さりませいな。

小助　いや〳〵お前は放されねえ。

ト振放さうとするを、小助捉へて本舞臺へ來る、正道側へ寄り、合方にて、

正道　定めて身をば投げるには、深い仔細もあるであらうが、我が目に掛りし上からは、最早そなたは殺さぬぞ。

お芳　お留めなされて下さりますは、有難うはござりまするが、其お慈悲より此儘に、お見遁しなされて下さりまするが、遙かにお慈悲でござりますわいな。

小助　取り逆上て居なさるから、お前の目には見えまいが、お留めなされた旦那さまは、神保さまとおつしやつて、御身分のあるお方さまだ、今温泉からお歸りがけ、お前の素振がをかしいから、若し身でも投げるなら、どうぞ助けて遣りたいと、見え隱れに附けて來たのだ。

正道　如何なる事でも取扱ひ、望みを叶へて遣らうから、何れの誰が娘なるか、包み隱さず身を投げる仔細を我に話して聞かせよ。

お芳　御親切におつしやつて、下さりますは身に取りまして、有難うはござりますが、命を捨てます其譯は、どうも申されませぬわいな。

正道　娘心の一途に迫り死なうといふは惡い料簡、知らぬ先きは兎も角も、斯う某が留めたからは、

何うでもそなたは助けにや置かぬ。

小助　悪い事は言はねえから、仔細を早く言ひなせえ。

お芳　さあ其仔細を申しますと、直に家へ知れますから、堪忍して下さりませいな。

ト お芳泣き伏す、正道思入あつて、

正道　はて扨年が行かぬとて、さりとは聞き分のないことぢや。

小助　こりやあ旦那いつその事、交番所へ訴へて、渡した方がようござりませう。

正道　それは何より易い事だが、どうかさうせず説諭を加へ、住所を聞いて親許へ引渡して遣りたいものぢや。（ト又お芳に向ひ、）こりや娘、今其方を交番所へ身投げの者と引渡さば、何やうそちが隠すとも人民保護の役目ゆゑ、問ひ訊さねば置かぬぞよ、さすれば仔細を言はねばならぬ、人目に掛らぬ其内に、早く仔細を申さぬか。

お芳　それ程までに仰しやつて下さりますを無になしては、済みませぬことながら、どうも申されませぬわいな。

小助　事を分けて旦那さまが、為を思つておつしやつても、それでもお前は言はねえのか。

お芳　はい、嘸お腹も立ちませうが、お許しなされて下さりませいな。（ト又泣伏す。）

正道　是れは困つたことぢやなあ。

ト正道困りし思入、此時橋の上より、以前のおれんぶら提灯を提げ出來り、正道を見て、

お連　そこにおいで遊ばすは、小梅さまではござりませぬか。

正道　おゝ、そちは髮結のおれんなるか。

小助　こりやあよい所へ來てくれた。

お連　見れば小助さんが娘を捉へて、こりやどうしたのでござります。

正道　今此娘が枕橋から、身を投げようとせし所を通り掛つて留めしが、何れの者か仔細を申せと、繰返して尋ぬれど、其住所さへ未だ申さず、

小助　たゞ堪忍してくれとばかり、まことに困つて居る所だ。

お連　へゝえ、それぢやあ身投げでござりまするか。（ト提灯でお芳を見てびつくりなし、）や、お前さんは戸倉屋の、お孃さんではござりませんか。

お芳　あゝもし、其名をいうて下さんすな。

お連　どうして〳〵私が、あなたと知つて此儘に、是れが言はずに居られませう。

正道　すりや其方が存ぜし者か。

お連　存じたどころではござりませんヽ此お孃さんはお得意先きでござりましてヽつい川向うの花川戸で、戸倉屋といふ本屋の家の、お孃さんでござります。

正道　扨は書林で名の高い戸倉屋の娘であつたか、いやそちに逢はぬと知れぬ所ヽ住所が知れゝば此娘は、宅へ連れて行く程に、そちは先方へ仔細を知らせ、迎ひに來るやう申してくりやれ。

お連　畏まりましてござりまする、嘸お知らせ申したら、お家でびつくりなさるだらう。

小助　どうでびつくりする話しだ、早く知らせてくんなせえ。

お連　はい〳〵、提灯は是れへ置いて參ります。（ト松の枝へぶら提灯をかける。）

正道　道が闇くて困るであらうに。

お連　いえ、水明りで明るうござります。（ト波の音ばた〳〵になり、おれん花道へ走りはひる。）

正道　さあ、家へ知らせて遣つたれば、今に迎ひが來ようから、先づ我が宅へ參るがよい。

お芳　有難うはござりまするが、どうぞお慈悲に私を、お見遁し下さりませ。

小助　一旦助けたお前をば、何で此儘見遁されよう、そりやあ姉さん無駄な事だ。

正道　如何なる仔細か存ぜねど、是れが子供といふではなし、十八九に見ゆる其方が藁の上より今日まで育てし親の其恩は、滄海よりも猶深し、それを送らず先立つは、此上もなき不孝なるぞ。

お芳　はあゝ。（ト泣く。）
正道　濟まぬと心が附いたらば、先づ我が宅へ一緒に來やれ。
お芳　はい。
小助　惡い事はおつしやらぬから、仰せに隨つて行きなせえ。（トお芳思入あつて、）
お芳　はい、參りますでござります。
正道　いや、向う川岸は淋しいから、瓦町を廻つて行かうか。
小助　それがよろしうござりまする。（ト波の音を打込み、正道思入あつて、）
正道　運動がてら溫泉から、東橋へ廻つたゆゑ、味な素振が目に附いて、
小助　お助けなされし此娘御、
正道　あの時逢はずば今頃は、
お芳　最早この世に無い私、
正道　危ない事であつたなう。（ト獨吟になる。）
〽心土筆や蒲公英の、草の葉に置く忘れ霜、あゝ忘れがたなき戀ゆゑに、月はあれども薄曇り、空も朧の夜の道、深き田の面へ淺草の、鐘の音おくる雨催ひ、鳴音忍びて歸る雁金。

ト此内かすめて波の音、時の鐘を冠せ、小助包みと提灯を持ちて先きに立ち、お芳せり立てられて泣く〳〵立上り、正道附添ひ、東の假花道へ廻り、お芳跡へ歸らうとするを、正道留めてよろしく思入此内舞臺は知せなしに廻る。

（元の別莊の場）――本舞元の別莊の道具。お辰行燈を附けて居る、此見得にて道具留る。と唄一杯に門口へ來り、

小助　お歸りでござります。（ト お辰 前へ出で、）

お辰　旦那さま、お歸り遊ばしましたか、大分お遲うござりましたな。

正道　途中に手間取る事があつて、思ひの外遲くなつた。

小助　さあ姉さん、お前も內へはひんなせえ。

お芳　はい、お許しなされて下さりませいな。

ト端唄の合方になり、お芳小腰を屈め內へはひる。正道は上手、お芳は下手に住ふ。

正道　今に迎ひが來ようから、まあ氣を落着けて居たがよい。

お芳　有難うござります。（ト辭儀をする。右の合方にて、奧より以前の角藏大藏出來り、）

角藏　是れは御歸宅でござりましたか、先刻よりお留守へ上り、

大藏　唐茶の御馳走になりまして、大酩酊いたしました。

正道　おゝ、牛窪馬淵の御兩名、久しくお出でがなかつたな。

角藏　さる書林の依頼を受け、著作に掛つて二週間程御無音に過ぎました。

正道　御著述は何でござるな。

角藏　小學生徒が作文の、自由自在になるといふ、一小册を綴りました。

大藏　斯樣申すは外裝にて、其内實は妓樓へ登り、大愉快をなした報いで、長く謹愼いたしました。

正道　それは餘程の御散財、學資を水になされたな。

角藏　いや、見れば頗る別品を、御同伴なされしは。

大藏　お繁の君のある上へ、又御愛妾のお抱へ入れかな。

正道　いや〳〵、左樣な浮いた譯ではない、今此娘が枕橋から、既に投身なす所、通り掛つて助けたのだ。

角藏　はゝあ、それではお連れなされた別品は、身投げでござるか。

大藏　定めてそれは戀情に、迫つた上の事でござらう。

お辰　それはまあ、危ない事でござりましたな。（ト正道お芳に向ひ、）
正道　こりや娘、測らず其場へ通り掛り、死する命を助けしは是れも宿世の奇縁なり、假令如何なる事なりとも、力を盡して某が取計らうて其方の、望みを叶へて遣らうから、斯かる事ゆゑ是非なくも、命を捨てると有體に、包まず仔細を言うて聞かせよ。
お芳　見ず知らずの私を、それ程までにおつしやつて下さりまするお志し、身に餘りたる事なれば申し上げねばなりませぬが、此事ばかりはどうあつても、お話し申されませぬわいなア。
正道　定めてそれは言ひにくい、事もあらうが言はざれば、取計らうて遣りたくも、どういふ事か譯が分らぬ。
小助　餘計な口を旦那さまに、お聞かせ申さず、これ姉さん、早く譯を言ひなせえ。
お芳　分らぬ者と思召しませうが、どうぞ堪忍して下さりませ。（トお芳俯向き泣く。）
角藏　是れほどまでに事を分け、お慈悲深くおつしやるに。
大藏　默して居るは、頑固な娘。
小助　そんならどうでも言へないのか。
お芳　はい、申されませぬわいな。（ト泣伏す。）

正道　あゝ、女子と小人養ひ難し、はて困つた事ぢやなあ。

ト正道持て餘せし思入、やはり合方にて、花道より以前のおれん戸倉屋といふ弓張提灯を持ちて先きに立ち、跡より前幕の利右衛門羽織着流しにて、足早に出來り、花道にて、

利右　これ〳〵おれんどの、神保さまの別荘は、まだ餘程でござりますか。
お蓮　表口は此田圃を、ぐるりと廻らねばなりませぬが、お庭口はつい向うでござります。
利右　それでは向うのお家でござるか。
お蓮　さあ、早くお出でなされませ。（ト合方にて兩人舞臺へ來り、おれん直に內へはひる）旦那さま、其お娘御の親御さんを、お連れ申して參りました。
正道　おゝ、おれんか、待つて居た〳〵。
お蓮　さあ、こちらへおはひりなされませ。
利右　御免なされて下さりませ。（ト合方きつぱりとなり、利右衛門腰を屈め內へはひるをお芳見て）
お芳　父さま、堪忍して下さりませいな。
利右　おゝ娘か、よく達者で居てくれたな。（と嬉しき思入にて側へ寄り、）書置殘して出て行つたゆゑ、必定是れは東橋から、身を投げた事と思ひ、再び親は見られまいと、覺悟極めて居つた所、こん

な嬉しい事はない。（ト利右衞門我を忘れ嬉しき思入。）

正道　すりや、其許が助けたる、娘の親御でござるよな。（ト利右衞門心附き後へ下り、）

利右　これは〳〵、旦那さまでござりましたか、死んだと思ひし娘よしが、無事な顔見て嬉しい餘り、御挨拶も申し上げず、失禮の段は幾重にも、御免なされて下さりませ。（ト手を突き辭儀をなし、）始めまして御意を得まするが、私事は花川戸で、書籍を渡世にいたしまする、戸倉屋利右衞門と申しまして、お助けなされて下さりました、娘の親にござりまする。

角藏　はゝあ、それでは娘は花川戸の、書林の娘であつたるか。

大藏　書物を求めに一兩度、見世へ行つたが知らなんだ。

利右　只今是れなるおれんどのより、委しい事を承はりましたが、あなた樣のお蔭にて、たつた一人の娘をば拾ひましてござりまする、何とお禮を申しませうやら、有難うござりまする。

ト辭儀をする。

正道　定めて親御の事なれば、死する譯を知つてゞござらう、包まず話して聞かされよ。

利右　お尋ねなくとも娘をば、お助けなされて下さりました、大恩のあるあなた樣、お話し申し上げまする。

お芳　あゝもし父さま、其仔細をあなたへお話し申しては。

利右　いや仔細をお話し申さねば、如何なるそちが道ならぬ事を仕出して言譯なく、それゆゑ川へ身を投げて死ぬであらうと思召せば、ありし次第を打明けて、お話し申さにやならぬわい。

お芳　假令何と人さまに、思はれましても身の不幸、今更いうて返らねば、どうぞ言はずに下さりませ。

利右　いや／＼お話し申すのも、そちを不便と思ふゆゑ。

お芳　それぢやと言うて。

お連　あゝ、これはしたりお嬢さま、委しい譯を包まずにお話しなさらにや分りませぬ、默つておいでなさりませ。（トおれんお芳を留める。）

正道　して、其仔細と言はるゝは。

利右　先づ一通り旦那樣。お聞きなされて下さりませ。（ト誂への合方になり、利右衛門思ひ入あつて、）何をお隱し申しませう、元私は戸倉屋の召仕ひでござりますが、主人の鑒識で聟となり、家督相續いたしまして、是れなる娘を儲けましたが、五つの年に母に別れ男の手にて此年までやう／＼育て上げましたが、三月跡に我が實家、高崎宿に年囘の法事があつて娘を連れ、故郷へ參る其途中上尾の宿の立場にてお目に掛りし旅のお方、姿は書生と見受けましたが、丁度娘に似合の年配、

斯ういふお方を聟養子に欲しいものぢやと思つたが、縁の端にて其立場へ、お忘れなされし煙草入が媒介となり其晩も、熊谷宿で同じ宿、それから伊香保の湯治場でも又もやお目に掛りしゆゑこれ幸ひと四方山の話しに寄せて押附けに、聟になつては下さるまいかと、強てお頼み申しましたが、娘がお氣に入らぬのか其夜の内にこつそりと、伊香保を立つておしまひなされ、詮方なさに東京へ歸つて是れまで諸所方々、お尋ね申しましたれど、未だに於てお行方知れず、娘は元より私もまことに本意なく思ひまして、心の迷ひに占や又は御鬮のお告を願へど、手掛りとてもあらざれば、無い縁なりと娘にも思ひ切るやう申しましたが、爰に一つの難儀と申しますは、今も申し上げます通り元私は奉公人、目上と崇む家附の心良からぬ親類より娘も嫌へば私も嫌ふ養子を達てと言はれ、何をいふにも先代の弟御ゆゑ斷り難く、兎やせん角やと親子して顔を合す其折柄、娘心の一途に迫り命を捨てんと覺悟を極め、書置殘して暮方から家出いたしてござりますゆゑ、東橋から身を投げたと思ひまして最前から、船を頼んで川下を尋ねさがして居りました。娘が命を捨てまする仔細と申すはあなた樣、斯樣な事でござりまする。

　　トよろしく思入にて言ふ。

正道　扨は左樣な事あつて、一途に迫り娘には、其身を投ずる心になりしか。

角藏　それは如何なる好男子か、かゝる優れし別品に、死ぬほどまでに思はるゝは。
大藏　此上もない果報者、さりとは女に富みたる事だ。（ト小助お芳を見て、）
小助　今まで心附かなんだが、見ればお前は目も腫れて、どうやら惡い樣子だね。
お芳　はい、今父さまの申せし通り、思ふお方に別れし後、心に濟まぬ親類より聟を達てと勸められ、切ない譯ゆゑ明け暮れに淚の絕える隙もなく、遂には斯樣に目も泣き腫れ、見えぬといふにはあらざれど、霞んで物のいろ〳〵も分らず、なまじ此身がござりますので、餘計な御苦勞父樣に、お掛け申さにやならぬゆゑ、早う死にたうござりましたわいな。（ト泣伏す。）
利右　又其やうな事いうて親に苦勞をさせるのか。多い子供といふではなし、天にも地にもそなた一人、わしは養子の身なれども、女房は家の娘ゆゑ、數代傳はる戶倉屋のそなたは大事の血筋なるぞ、命を捨てればわしばかりか、世になき母が冥土にて、嘸や嘆く事であらう、惡いやうにはせぬ程に、必ず死なうなどゝいふ、無分別を出してくれるな。
お連　今旦那さまのおつしやる通り、あなたがお死になされますると、お血筋が絕えまする。惡いやうにはなさらぬと仰しやりますればお孃さま、御苦勞お掛けなされまするな。
正道　利發なやうに見ゆれども、まだ其年が行かぬゆゑか、死なうといふは愚なる事、我が身に迫る事

のみ思ひ、斯くまで親が悲しむを、思はざるのは何よりか、子として親に不孝なり、これ、人倫の道ならぬぞ、いや斯うばかりでは合點行くまじ、そちが會得いたすやう、說諭を加へて遣はさん。

利右　えゝ有難うござります、とてもの事の御情に、娘が迷ひの晴れますやう、お諭しなされて下さりませ。

正道　如何にも諭して進ぜませう。（ト此時奧にて、）

お繁　いえ、其娘御は私が、それへ參つて諭しませう。

利右　や、あのお聲は、

角藏　この旦那の御愛妾、

大藏　彼の權てきの、

小助　あこれ、

お速　お繁さま。（ト合方になり、奧より以前のお繁出て來るを、利右衞門お芳見て、）

利右　や、あなたはどうやら、

利右
お芳　伊香保にて、

お繁　測らずお出合申したる、妻木繁でござりまする。

利右
お芳　え〻。

トびつくりなし、合方きつぱりとなり、利右衛門お芳お繁の顔をとつくり見て、合點の行かぬ思入にて

利右　そんならあなたは其時の、

お芳　書生さまでござりましたか。

お繁　疑はしくば熊谷で、下さりました蒔繪の櫛、これを御覽下さりませ。

トお繁さして居た序幕の櫛を取つて出す、利右衛門お芳見て、

利右　まことに是れは熊谷で、差上げました蒔繪の櫛、それでは男と思ひました、

お芳　あなたは女子でござりましたか。

お繁　お恥しうござりまする。

正道　扨こそ斯くと思ひしが、娘が思ひ焦れしは、

お辰　書生姿でおいでなされし、

お連　お繁さまでござりましたか、

利右　あなたが女子でござりますとは、

お芳　思はぬ事でござりましたなあ。（ト兩人ほつと思入。正道こなしあつて、）

正道　戀焦れた其男が、女であれば娘御が、思ひ迫つて身を投じ、命を捨てるに及ぶまじ、今日測らず

某が枕橋へ通り掛り、死すべき命を助けしは、則ち天の助けにて、是れも繋がる奇縁なり、最

早是れにて娘御も、今より心入替て、良き聟迎へ身を全う親御へ孝行盡されよ。

利右　え丶有難き其お詞、娘ばかりか私も、是れで思ひが晴れました。

お芳　それも焦れし此身には、まだ實とは思はれず。

利右　思へば夢に夢見たやうな。

お芳　父さま、

利右　娘、

お芳　本意ない事で、

兩人　ござりました。（ト兩人本意なき思入）

角藏　日々進歩の開化の世に、斯かる事はあるまいと、思ひの外に舊習の未だに去らぬ男女の情慾、早

く斯樣な事のないやう、文明國にしたいものだ。

大藏　など丶はいへど我輩も、やはり脫せぬ情慾に、年中學資を失ひます。（ト利右衛門思入あつて、）

利右　今更言つて返りませぬが、あの折あなたが私へ女といふ事内々で、お明しなされて下さらば、娘も疾くに思ひ切り、斯様な事にもなりますまいに、なぜお明し下さりませぬな。

ト お繁思入あつて、

お繁　あの折切なるお頼みゆゑ、打明さんと思ひましたが、明さば直に人に知れし身の禍になる事ゆゑ父に逢うて其事をお頼みあれしと申せしは、お逢ひなされし其時に、女といふ事打明けて申しまするか左もなくば、結び難なき縁なれば、よしなに申すと存ぜしゆゑ、切ない時に親を出せと、世の諺に基いて其場を遁れん其爲に、お明し申しませなんだが、あの折あなたは我が父の在所へお出ではなされませぬか。

利右　いや參らぬどころではござりませぬ、夜の明けるのを待兼ねて、湯場をお立ちなされました、あなたも大方親御様の、所においでと存じまして、直にお尋ね申しました。

お繁　其折あなたへ我が父は、何と御返事いたしました。（ト是れにて利右衛門合點の行かぬ思入にて、）

利右　合點の行かぬ其詞、親御様の御身の上を、あなたは御存じござりませぬか。

お繁　其後絶えて父上より、何の便りもござりませねば、たゞ御無事とばかり思ひましたが、變りし事でもござりましたか。

利右　さあお尋ね申してびつくりなせしは、其前夜に賊が這入り、金子を盗んで親御樣を、殺害なして逃げ去りしと、お世話をなさるお方の話し。

お繁　えゝすりや父上には賊の爲、非業な御最期なされしとか、えゝゝゝゝ。（トお繁びつくりなす。）

正道　扨は繁が父なる者は、賊に殺害されしとか。

角藏　して御親父が强賊に、

大藏　奪ひ取られし金子といふは、

お繁　五年此方家出せし我身の不孝を詫びの爲、父の貧苦を貢がんと持參なしたる二百圓、それが却つて害となり、非業な御最期なされしは、取りも直さず我が身の科、是れといふも道に缺けたる、いやさ、心に掛けし孝行も、今では不孝となりました。（トお繁ぢつと思入。）

角藏　扨々これは計らざる、哀れな話を承はり、

大藏　お繁の君の御愁傷、僕等も心中お察し申す。

お辰　いつも立派にお結ひなさるを、今日に限つてあのやうに結び髪になされましたは、こんな知らせでござりましたか。

お連　まことに承はつて私も、驚き入りましてござりまする、不斷お世話さまになりますから、斯

ういふ時は御恩返し、お葬式には内の人をお手傳ひに上げますが、何時でござりますな。

お辰　是れはしたりおれんさん、是れはお國であつた事、今の事ではござんせぬ。

お連　おや〳〵お國であつた事かえ、それではお饅頭を喰べ損なつたか。

小助　いや其お話しでは旦那樣が、お惠みなされし二百圓は、賊が盗んで行きましたか。

正道　二百圓の其金貨は、假令一度失ふとも、又得る事は易けれど、再び返らぬ一命を、失ひたるは遺憾の至り。

お繁　して何者の仕業なるか、父を殺せし其賊の、何ぞ證據になるべき事を、其折お聞きなされませぬか。

利右　委しい事は他の者ゆゑ、承はりもいたしませぬが、殺害されし御親父の死骸の口に喰切りし、小指が殘つてありましたと。

お繁　すりや死骸の口に喰切りし、小指が殘つてありましたとか。（ト お繁是れを聞きつゝと男の思入にて、）扨は小指のなき者が。（ト向うを見込みきつとなつて心附き、女のこなしにて、）父の敵でござりましたか。（ト優しくいふ、正道思入あつて、）

正道　思ひがけなく娘御が身を投ぜんとなしたるを、我が助けたる緣により、今日まで繁が知らざりし

利右　父の横死を聞くのみか、敵の手掛り知れるといふは、思へば不思議なことであつた。
お繁　疾くにも御存じあるべきを、蓮華寺村から其時に、なぜお知らせがござりませぬな。
利右　繋がる縁にてありながら、惣助どのとは絶交同然、とんと便りをなさゞる上、我が子ながら其時分男姿で居る事を、父には深く世間に恥ぢ、住居を人に隠せしゆゑ、誰も知らぬと存じまする。
利右　さういふ事で今日まで、御沙汰がないのが測らずも、斯ういふ事から知れましたは、冥土にござる御親父さまの、お導きでござりませう。
　　ト此時下手より○△の手代二人散髪鬘にて、戸倉屋といふ弓張提灯を持ち出来り、
○　はい、御免下さりませ、神保様はこちらでござりまするか。
お辰　はい、こちらでござりますが、お前さん方は。
△　私共は花川戸の、
お連　おゝ戸倉屋さんの若い衆か。
△○　お迎ひに参りました。
正道　迎ひの者が参りしとは、それぞ幸ひ利右衛門どのには、嘸かし宅で案じてござらう、少しも早く帰られよ。

利右　此場の御様子承はり、歸りまするも本意ならねど、宅でも案じて居りますれば、仰せに任せ私はお暇いたすでござりまする。これ娘、よくお禮を申しやいの。(ト是れにてお芳前へ出で、)

お芳　繁様を眞實の男と存じて戀焦れ、終には此身を大川へ沈むる心になりましたも、神保さまのお蔭にて危い命を助かりまして、何とお禮を申しませうやら、詞で申し盡されませぬ、えゝ有難うござりまする。(ト手を突いて禮をいふ、此時本釣鐘を打込む、)

お連　ほんに最前どんぶりと、なされし跡で女と知れても、返らぬ事でござりましたが、お命助かるのみならず戀に焦れしお心も、さつぱり晴れて此やうな、お目出度いことはござりませぬ。

お繁　それに引替へわたしが身は、少しは孝を盡さうと思ひし事も水となり、憂きを重ねる今日の仕儀、悲しい事でござりまする。

利右　娘が入水いたしますれば、其悲しみを私がいたさねばなりませぬゆゑ、お察し申し上げまする。

お芳　是れを思へば私が、身を投げようといたさずば、親御様の事も知れず、此お歎きを掛けますまいもの、お氣の毒でござりますわいな。

利右　お氣の毒とはいふものゝ、親御様の事なれば御存じなければならぬ譯。そちが事からお繁さまへ測らずお知らせ申したは、まことにこれが過ちの功名とやらでござりまする。

ト皆々愁ひの思入、時の鐘、

お連　おゝあの鐘は最う八時、小梅通りは淋しいゆゑ、更けぬ内に參りませう。

利右　御免を蒙りお暇いたさう。(ト正道に向ひ、)左樣なれば旦那さま、何れ明日改めて今宵のお禮に上りまする。

正道　いや、決してそれには及びませぬぞ。

利右　いえ〳〵あなたのお蔭にて、娘を拾ひましたれば、お禮をいたさにやなりませぬ。

ト お繁思入あつて、

お繁　よしない事でお二人に、是れまで御苦勞掛けましたが、たゞ何事も此仕儀ゆゑ。

利右　切ないあなたのお胸の內、

お芳　お察し申し、

兩人　上げまする。(ト三人涙を拭ひ、愁ひの思入)

正道　いや野道は人の往來も少なし、

小助　女中連ゆゑ少しも早く、

お芳　左樣なればお繁さま、

お繁　お二人さま、
利右　明日お目に掛りませう。（ト利右衞門お芳おれん門口へ出で、）
お連　もし、大暦空が曇りました。
お芳　どうやら今宵は、
利右　降らねばよいが。
　ト唄になり、若い衆提灯を持ち、先きに立ち、利右衞門、お芳、おれん、跡に附き花道へはひろ、跡にお繁俯向き、ぢつと泣き居る。
正道　今更千悔なすとても、返らぬ事をくよくよと、日頃のそちが氣にも似合はぬ、奥へ參つて佛前へ香でも手向けて囘向をしやれ。
お繁　仰せに任せ私は、奥へ參つて父上へ今日まで知らで過したる、不孝のお詫びをいたしませう。
お辰　御靈前へ御囘向をなさいますなら私が、お水を汲んで上げませう。
お繁　左樣なればお二人さま。
角藏　ゆるりと亡父へ、
大藏　御囘向めされ。（トお繁立上り、思入あつて、）

お繁　これといふのも金ゆゑに。（トきつと男の思入にて、彼れが殺せしといふこなし、）

お辰　え。（トお繁の顔を見る、お繁氣を替へて、）

お繁　あ、夢の浮世でござりますなあ。（ト唄になり、女のこなしにてお辰附いて奥へはひる。）

角藏　今宵我輩北廓へ登樓なさんと存ぜし所、遲刻せしゆゑ御當家へ一泊願ひ夜と共に、圍碁のお相手いたさんと思ひの外に此椿事。

大藏　何ぼお好きなあなたでも、今宵は盤は出されますまい、更けぬ内にお暇いたさん。

正道　圍碁の勝負は兎も角も、今兩名に歸られては愁ひに沈む家内の者、跡が淋しくて仕方がない、繁が父の通夜心、今宵は夜と共に呑み明さん。

角藏　それは何より有難い、お酒と聞いては立所に、

大藏　下宿へ歸る方角を、忘れる書生の劇酒黨。

正道　これ小助、八百松へ行つて肴をば、申し附けて來てくりやれ。

小助　畏りましてござりますが、最う賣切つてしまひましたらう。

正道　何はなくとも鯉はあらう、ちよつと洗ひに玉子燒、なんぞ見繕つて來てくれろ。

小助　畏りましてござりまする。

角藏　夜中大きに、
兩人　御苦勞でござる。
小助　なに、造作もござりませぬ。（ト合方になり、小助下手へはひる。）
角藏　扨々椿事が出來いたし、公にも嘸かし御心配、
大藏　愁ひを掃ふ玉箒、斯かる時には酒に限る。
正道　今に肴が參らうから、暫時是れにて四方山の、雜事をお談じ申すでござらう。
ト端唄の合方になり、花道より以前の直次郎、袴下駄がけにて出來り、花道にて、
直次　瓦町の溫泉から、日の暮方に此寮へ、歸つた事を聞いたから、是れから行きやあ丁度汐合、一網ばつさり打込んで、大きな獲物をしてえものだ。（ト本舞臺へ來り、門口の側にて思入にて、）賴まう賴まう。
角藏　はて、舊弊な案内だが。
大藏　どうれ。（ト大きな聲して門口へ來り、）何れからござられしぞ。
直次　拙者は徒士町より參つてござるが、當家の御主人神保氏に、御面謁がいたしたい。
大藏　只今お取次いたすから、暫くそれにお控へなされい。

直次　承知いたしてござる。

大藏　お聞きなされましたか。

正道　何御用なるか、通し召され。

大藏　いざ、お通りなされい。

直次　然らば御免下され。（ト合方になり、ずつと內へはひり、眞中へ住ひ、）拙者事は舊幕府の、徒士役を勤めたる倉橋直次郎と申す者、以後お見知り置かれ下されい。

正道　手前ことは神保正道、何御用にて此處へ御入來なされしぞ。

直次　今晚推參いたせしは、貴君へお禮を申し度く。

角藏　扨は最前助けられし、

大藏　娘の貴殿は御緣家か。

直次　あいや、左樣な者ではござらぬ。

正道　して某へ御禮とは、

直次　只今貴君の愛妾となり、榮耀榮華をいたし居る、繁がお禮に參つてござる。

角藏　それでは貴殿はお繁の君の。

大藏　身寄りの衆でござつたか。
直次　如何にも彼とは疾くよりして、拙者は深く言交し、末々妻にいたさうと存じ居るうちお手が附きかゝる美麗な御別莊に、圍妾と相成りしは、此上もなき仕合せゆゑ、厚く御禮申し上げます。
正道　扨は貴殿は我が妾の、繁と言交し居らるゝか。
直次　君のお手が附かぬ先きより、言交して居ります。
角藏　これは思ひも寄らぬ事、お繁の君は先頃まで男子の姿で居られしからは、左樣の事のあらうやうなし。
大藏　公より先きと言はるゝが、我輩一圓合點が參らぬ、何時頃こなたは言交されしぞ。
直次　三月跡に上州の、故鄉へ赴く其途中、熊谷宿の小松屋へ泊つた晚に一つ寐して、しつぽり其夜言交した。
正道　すりや上州へ趣きし、途中で繁と言交せしとか。
角藏　最前より何れでか、見た顏なりと存ぜしが、今の詞で思ひだした。
大藏　妻木氏が筋違で、雇つたこなたは人力車夫、何と相違はござるまい。
直次　各々方の仰せの通り、拙者は人力車夫でござる。

角藏
大藏 何と。(ト誂への合方になり、)

直次 何を隱さう今日の、生活の爲め恥を捨て、萬世橋で人に知られた、御家直といふ人力車、思ひ掛けねえ旅仕事で熊谷宿まで曳いて行き、其夜泊つた小松屋で、味な事から情事になり、それから再び東京へ歸つてお手が附きたれば、假令三日が五日でも、先きへ抱寐をしたけれど、上と下ゆゑ生中な事を申し出したとて、及ばぬ事と存ぜしゆゑ、今日まで控へて居りましたが、これが我れ〳〵同士なら、我が女房と思ふ女を、斷りなしに引き揚げられゝば、たゞ此儘にやあいたしませぬ。いはゞ間男同然に、無法な事もいたしますが、斯く開明な世の中に、まだ半髮ではござりますが、そんな事は致しませぬ、今日推參いたしましたは、御禮かた〴〵折入つて、お願ひの筋がござりまする。

正道 成程先頃上州へ、參りし事はあつたれど、途中に於て其許へ言交せしといふ事は、未だ噂に聞かざりしが、それは兎もあれ折入つて、我へ願ひと言はるゝは。

直次 世俗に申す士族の商法、資本も盡きて生活の道を失ひ止むを得ず、人力車夫とまで成り下り、襤褸半纏に切れ股引、あれが情人かと言はれなば繁が恥ゆゑ今日まで、差控へて居りましたが、天道人を殺さずと思はぬ金を得ましたから、早速身裝をこしらへて、以前の士族で上りました、生計

の道を得ましたゆゑ、長々お世話になりました、何卒繁を拙者方へ、お返しなされて下さりませ。

角藏　いや、こなたが情人か存ぜぬが、お繁どのは御家來の、惣助どのゝ身寄りにて、お抱へなされし圍者。

大藏　これをこなたは請判の、惣助どのへ掛合はず、直ぐに返してくれといふは、それでは道が違ふであらう。

直次　道が違ふか違はぬか、我が言交した女をば人に取らるゝ間拔だから、何も知らずに出ましたが、定めてお繁は是れまでに、斯ういふ男がありますと、申さぬ事もあるまいが、高の知れた人力車夫打捨つて置けと今日まで、只の一言斷りなく、人の女をぬく〳〵と、抱寐をなされる神保氏、道の違ふはどちらだか、其筋へ出て分けようと、それゆゑ今日は裝を替へ、元の士族で參つてござる。

正道　如何なる約束あるかは知らねど、繁は家來の惣助が身寄りによつて抱へし我が妾、左樣な事は今日まで枕交せし床の内寐物語りにせし事も、遂になければ存ぜぬ某、まこと約束あるとても請判なせし惣助へ、引渡すのがこれ順道、こなたに繁は渡されぬ。

直次　渡されないと仰しやれば、闇黒の恥を明るみへ出して事を計らひますが、さうした日には事柄を

「これは今日の新聞」と往來中を讀賣や繪入の賣子に賣られたら、貴殿の恥でござりませう、拙者も元は士族だが、今職業の人力車夫、恥を恥とも思ひませぬ、お繁も今日まで我家で、女房になつて居たならば、汚れた袷に半纏がけ、膝の切れた前垂でしがを隱して朝夕に、一升買ひの貧乏暮し、それをあなたの權妻になつたばかりに苦勞もなく、此別莊でお蠶包み、雪の降る日の寒さも知らず、厚いお世話になりました、御恩を思つて言ひたい事も、申しませねば此儘に、綺麗にお渡し下さりませ。

角藏　斯うして判然言交したと、立派に言つてござるからは、まさか形のない事を、士族の貴殿が言はれはしまい、然し渡せと言はれても、又渡される譯でもない、どうで詰りは手切金、

大藏　長くごた〳〵言はずとも、早くそこへ基いて、談判をした方がよからう。どうで此場に我輩も居り合すれば關係なし、どうか程よく取扱はう。

直次　貴殿方も御親切に、お詞お添へ下すつて、忝なくはござれども、失敬ながら御兩所に、此お取扱ひは出來ますまい。（ト是れにて兩人むつとなし、）

角藏　なに、出來ぬといふがあるものか、天下の諸罰諸規則は、何くれとなく諳記なし、免許を受けて代言を勤めようかと思ふ我輩、さりとは失敬千萬だ。

大藏　何ぞといふと舊幕時代と、袖手坐食に甘んずる、今日不明の士族輩とは、比較にならぬ開化の先導、窮理に長けし書生だぞ。

直次　是れは砂村窮理先生、失敬御免下されい、頑固の士族がお詫を申し、お取扱ひをお賴み申す。御心得の爲御兩所へ、額を申し置きますが、手切を下さる思召しなら、千圓お貰ひ申したい。

角藏　え、千圓手切が。

兩人　貰ひたいとか。（ト兩人呆れし思入。）

直次　一圓缺けても不承知だが、お取扱ひは出來ますまい。

角藏　物には法のあつたものだ、手切といへば十か二十、五十が極の至りだ。

大藏　千圓などゝは法外千萬、此取扱ひは出來るものか。

直次　それだから最初から、出來まいと申したのだ。

角藏
大藏　む丶。（ト詰る。）

直次　さあ此扱ひが出來ぬなら、お繁を拙者へお渡し下さい。（ト正道此内思入あつて。）

正道　我が妾繁と其許は言交してござるゆゑ、返してくれと言はるゝが、片口にては證と仕難し、繁を尋問なせし上、まこと言交せし事ならば、如何にも上げまいものでもなし、仕儀によりなば手切

金、望みの通り千圓出すまいものでもあらざるが、篤と實否を糺さねば、否やの返事はいたし難い。

直次　御尤もなる其仰せ、此直次郎が實言か又虛言かは此のところへ、繁をお呼出しなされた上、一應お糺し下さりませ。

正道　如何にも呼出し糺すであらう。

角藏　然らば是れへお繁どのを、

大藏　お呼び申して參りませう。（ト立ち掛る、奥にて、）

お繁　いえ、お出でなさるには及びませぬ、只今それへ參りまする。

ト合方替つて、奥より以前のお繁出來り、直次郎と顏見合せ、思入あつて、正道の側へ住ふ、

正道　こりや繁、樣子は奥で聞いたであらうな。

お繁　はい、大きな聲ゆゑ何事も、襖の蔭で逐一に承はりましてござりまする。

角藏　熊谷驛の旅店にて、言交せしと彼れは申すが、

大藏　我輩どもが臆測では、正しく事實と保證し難し。

正道　今御兩名の言はるゝ通り、其方我が妾にならぬ先き、是れに居らるゝ倉橋殿と、言交したる事あ

るか。

お繁　はい。（ト俯向き居る。）

正道　虛實に依つて某が、取計らふべき旨あれば、包み隱さず有體に、此場に於て申し聞かせよ。

お繁　はツ。（トやはり俯向き居る。）

正道　默して居ては事實が分らぬ、猶豫いたさず疾く〳〵申せ。（トきつと言ふ、お繁思入あつて、）

お繁　まことに申し兼ねましたが、あなたのお情受けませぬ、其前方に倉橋殿と、熊谷宿の旅籠屋で申し交してござります。

角藏　やあ、すりや、人力車夫の倉橋氏と、

大藏　さて扨、それは物好きな。

お繁　それも遁れぬ譯あつて。

正道　や。（と聞き咎める。お繁思入あつて、）

お繁　月下の神の媒介に、風呂から上つてまだ汗も乾かぬ内にしつぽりと、味な事から一つ寐なし、初めて男と枕を交し、思はぬ夢を結びました。

角藏　扨はまことの事であつたか。

大藏　これは驚き入つてござる。（ト直次郎思入あつて、）

直次　何と嘘ぢやあござるまい。言交したる當人が、何より證據。さあ此上は先約ゆゑ、拙者に唯今下さるか、それ共に御愛妾ゆゑ御執心なら相談づく、手切を千圓下さらば、綺麗にあなたへ差上ませう。

ト正道思入あつて、

正道　倉橋氏の申す如く、熊谷驛の旅店にて、言交せしとあるからは、僞りならぬ事情ゆゑ、そちが心次第にて、何れへなりと取計はん。先約ゆゑに道を立て、倉橋氏へ參る心か、又是れまでの義を捨てず、我が妾となり居る心か、そちも此場で決定なし、如何いたすか所存を申せ。

お繁　此御返事は今爰で、申し難なうござります。

正道　そりや申難なうあらうけれど、言はねば我も計らひ難し、先づ打明けて申さうならば、倉橋氏へ執心あるを無理に引留め置いた所、心替りし其方を妾となしても面白からず、附いては長き其內に、苦情の起るは必定ゆゑ、此儘暇を遣はさん、又さはなくて我が妾とならん心の其方を、暇を出すは不便の至り、左すれば手切の金を以て、生涯身儘にいたさせん、不思議の緣にて今日まで、我が心をば慰めし其方ゆゑに如何やうとも、心任せにいたさうから、遠慮いたさず事實を

申せ。

ト正道思入にていふ、お繁ぢつと思入あつて、

お繁　不束な身を斯程までに思召し下さりまする、深き惠みのお志し、實に涙の溢れます程、有難うござりまするが、どちらなりとも私の心任せにいたせよとの、仰せに甘えてお願ひ申すは、今日を限りに私へ、何卒お暇を下さりませ。

正道　むゝ、すりや先約の義を立つて、倉橋氏へ身を任す所存に決して今日限り、暇をくれと申すのか。

お繁　定めて恩を辨へぬ犬に劣りし者なりと、お憎しみもござりませうが、お許しなされて下さりませ。

角藏　お繁どのには取り逆上、こりや發狂でもいたされたか、此結構な旦那を捨て、暇をくれと言はれるのは。

大藏　何ぞ外に目的が、あつての事でござるかな。

お繁　外に目當はござりませぬが、假令一夜の契りでも、先きに此身を任せたる、直次郎さんと夫婦になるが、女子の操でござりまする。

角藏　それが操か存ぜぬが、馬車手俥にも乘れる身を以て、人もあらうに人力車夫に、乘り替へるとは

どうしたことか。

大藏　產れは麻布か知らないが、餘りといへば氣が知れぬ。

お繁　旦那を捨てゝ直さんと、添ふのは深い譯あつて、いや、深い中ゆゑお暇を、貰ふわたしが胸の内、色には闇いお前方の、知らぬ事でござりまする。（トお繁よろしく思入にていふ。）

直次　それぢやあお繁は旦那を捨て、見る影もねえ此おれと、夫婦になつて暮す氣か。

お繁　初めてお前に此身をば任したゆゑに末始終、わたしや添ふ氣でござります。

直次　こいつあ運が向いて來たわえ、是れと知つたら兩國の、無盡にはひつて五百圓。濡手でおれが取らうもの、惜しい事をしたぢやあねえか。

　　ト此内よき程に、下手より以前の小助出來り、門口にて樣子を窺ひ、腹の立つ思入よろしくあつて、ずつと内へはひり、お繁の側へ坐り、

小助　樣子は門で聞きましたが、御恩になつた旦那樣を捨てるといふはお繁さま、そりやあ平氣でござりまするか。こんな事は言ひたくないが、只とは違ふお前の身の上、持逃げをした二百圓、表沙汰になる時は、いはずと知れた懲役だ、それを何とも仰しやらず、支度金を下すつて、直に小梅の此寮へ、男女を使はせて何不自由のない權妻さま、そりやあ器量が十人並に勝れて居るから仕

方もないが、今旦那さまが手切まで、出して遣らうと仰しやるに、それも聞かずにびいつくの、御家人上りの人力車夫の、女房になるとはあんまりだ、旦那さまの御恩になれば、腹が立つて堪えられねえ。

ト小助腹の立つ思入、お繁こなしあつて、

お繁　あゝ靜に言つても分ることを、口やかましい小助どの。（ト誂への合方になり、惡婆の思入にて）お前方に結構な身の上などゝ言はれるが、わたしやそれが大嫌ひ、斯うして旦那に圍はれて、男女を遣つて居れば、此上もない身の仕合せ。（トぢつと思入あつて、又言葉を替へ）月々出入りの呉服屋から、仕立おろしの着物が出來、簞笥の數の殖えるより、着て居るものを減らしても、好きな酒を勝手に呑み、樽もころりと横になり、寐たい時には晝までも寐られる體がわたしの望み。（ト濟まぬといふこなしあつて、ちよつと書生の思入にて、）此惡弊を脫せぬも、情慾の目が覺めぬゆゑ（ト又女の思入にて、）是れから爰を出て行けば、此直さんと夫婦になり、氣も相乘りに共挊ぎ、亭主が車を引きに出れば、女房は內で鼻緒を縫ひ、針より細い暮しをしても、氣兼のないのが體の藥、毒と知りつゝ氣兼して、旦那の側に居る時は、長い月日の其內に。（ト難儀を掛ければならぬといふ思入あつて、又男の思入になり、）身の健康を害すゆゑ、止むを得ずして退身なす。（ト氣を替

へ〕いやな所に榮耀して、長居するより短い命、好いた男と共々に、苦勞するのが女の樂しみ、色戀知らぬお前達の知つた事ぢやァありませんよ。(トよろしく思入にて言ふ。)

小助 いや、おれだといつて若い身だ、一人や半分言交した女のないでもねえけれど、そんな不實な者はねえ、書生の折から學力は、人に勝れた妻木さま、論語讀みの論語知らずと、譬にいふはお前の事だ、孔子の敎へにあるかは知らぬが、旦那を捨てゝ出て行くとは、義理を知らねえ恩知らずだ。

ト小助詰寄り、腹の立つ思入。

正道 こりや〳〵小助控へて居よ、そちが律義な料簡では、腹の立つのは尤もだが、繁は愚な生れでなく、英才男子に勝りし者、是れには定めて深い樣子が、いや、深い仔細があつても無くても、そこが譬の思案の外、主人はおろか現在の、親さへ捨てるが色の道、いくら說諭を加へたとて、牛に經文無駄なことだ。

小助 成程旦那樣のおつしやる通り、人に勝れた才智もあり、義理人情を知りぬいて、居ながら斯ういふ事をするのは、魔のさしたのでござりませう。

角藏 然し條理に背いたる、斯かる行ひなすからは、始終は天の罰を蒙り、長煩ひか災難事不幸の續い

た其果は。

大藏　身の活計を立兼ねて持つて產れた賊心に、ちよつくら持ちか板の間稼ぎ、懲役人になるのは必定。

お繁　大きにお世話な苦勞性、先きを枯らしておくれでない、所も廣い六大區名に負ふ本所深川へ餅を配つた三野村さん、三井組の楠と言はれる程になつたのも、是れも一つは人の運、明日が日どんな身の上にならうも知れぬわたしら二人。

直次　是れから一先づ旅へ出て、お繁を玉に一稼ぎ、やつてそれから小金貸、憎まれ口の烏から、一足飛びに日歩を貸し、米商會所の賣買で、巨萬の金を儲けたら、末は國立銀行でも官許を受けて立てる氣だ。

お繁　立派な旦那を臂にして、暇を取つて出るからは、右の腕とも思ふのは、直さんお前一人だから、必ず見捨てゝおくれでないよ。（ト直次郎に寄添ふ。）

直次　そりや何で見捨てるものだ、斯ういふ事に行かうとは、實の事は知らなんだ、どうで手切と思ふから、千圓と脅して、人がはひつて七十か百、一割取る氣で損料を借りて出て來た厄介士族、思ひがけねえおぬしが寐返り、夢かと思ふ今夜の始末、旦那を捨てゝ出るからは、生涯見捨てる事ぢやあねえ。

お繁　さういふお前の心なら、願ひも叶ふわたしの本望、（トきつと直次郎を敵といふ思入あつて、氣を替へ優しく、）それでは旦那私に、どうぞ暇を下さりませ。

正道　斯かる所存と知らずして、今日まで妾となしたるは、我が眼力の屆かぬ所、望みの通り暇を遣はす、心任せに出て行きやれ。

お繁　すりや私へお暇を、え丶有難うござりまする。（ト手を突き禮をいひ、）とはいへ是れまで長々の、厚い御恩を仇にて返す。（ト正道へ濟まぬといふ思入あつて、）返す〲も長居は恐れ、昨夜までも百萬年お側に居ると氣休めに、言つたわたしが極りが惡い、早く爰を立退いて、宿屋へ行つて今夜は泊らう。

直次　初めて逢うた其晩が、熊谷宿の宿屋だつたが、又もや今宵宿屋へ寐るのか。さう極つたら早く行かう。（トお繁思入あつて正道に向ひ、）

お繁　それでは旦那、御機嫌よろしう。

正道　む丶。（ト顔見合せ、兩人思入あつて、）

お繁　牛窪馬淵の君達も、その內僕が弊屋を、郵便を以て報知するから。

直次　これ、そんな女があるものか。

お繁　つい昔が出てならない、牛で一杯上げたいから、休暇に必ず出ておいでよ。

　　ト角藏大藏腹の立つ思入にて、

角藏　年中襟の汚れた羽織に、白で買つたは一昔、鼠に汚れた兵兒帶で、腰に挾んだ手拭と、共にぶらぶら遊歩はするが、元より嚢中錢なき貧生。

大藏　いつでも犬の川端だが、恩を知らねえ畜生に、如何に酒が呑みてえとツて、尻尾を振つて行くものか。

お繁　來いといふのもほんの世辭、來られないのが嬉しいのさ。

直次　これ、お歷々な書生さんに、そんな失敬な事をいふな。（ト侍の思入にて、）左樣ござらば神保氏、仰せに任せ是れなるお繁は、拙者が連れて參りますが、申し分はござらぬな。

正道　望みに任して遣はすからは、何申し分がござらうぞ。

直次　それは千萬忝ない。

お繁　それぢやあ直さん、出掛けようかね。

直次　おゝ、御兩所失敬。（ト辭儀をなし立上る、正道思入あつて、）

正道　こりや、繁待て。

お繁　はツ。（ト下に居ろ、正道見て、）
正道　何も忘れものはないか。（トお繁うなづき、）
お繁　衣類手道具何やかや、山ほどあれど出て行くに、まさか持つても行かれまい。
小助　え丶、誰が持たして遣るものだ。
お繁　こつちも邪魔だ、置いて行くよ。（ト正道へ濟まぬといふ思入あつて、つか〳〵と門口へ行く。此時雨車になり、）おや、ばら〳〵降つて來たよ。
直次　濡れるといふは嬉しいな。
お繁　小助どん、遣ひ納めだ、傘を一本取つておくれ。
小助　え丶、旦那の息が掛らにやあ、うぬ等に遣はれる覺えはねえ。
お繁　よく、動き泣きをする男だ。
直次　これ、傘を借りるにやあ及ばねえ、土手へ行きやあ車がある。
お繁　それぢやあ是れから相乘りで。
直次　幌をかけさせ、ゆつくりと、
お繁　話しながら行かうねえ。

ト　お繁内を覗くを直次郎隔てる、これをきツかけに端唄になり、お繁直次郎よろしく思入あつて花道へはひる。此内小助は身拵へして、

小助　うぬ畜生め、待ちやあがれ。(ト跡を追ひかけようとするを、)

正道　これ小助、行くには及ばぬ、捨てゝ置け。

小助　爰であいつを打ちのめさば、旦那さまの御厄介ゆゑ、歸るを待つて居りました、跡から追掛け大川端で、息の根留めにやあ腹が癒えねえ。

正道　その腹立は尤もだが、譬にもいふ癩病に棒打ち、益なき事だ捨てゝ置きやれ。

小助　それだと申して。

角藏　はて、御主人がお留めなされば。

大藏　腹も立たうが、まあ〳〵待つた。

小助　えゝ忌々しい事だな。(ト腹の立つ思入にて下に居る。)

正道　最早臺所へ八百松より、肴が參つて居るでござらう、御兩名には奧へござつて、一獻上つて下されい。

角藏　それは我輩、何より好む所でござれど、

大藏　先づ御主人と御一緒に、
正道　手前は此小助に、申し附ける用事あれば、お構ひなくとお開き下され。
角藏　然らば仰せに隨つて、
大藏　お席を開いて置きませう。
正道　さゝ、御猶豫なさらず。
角藏　どれ御馳走に、
兩人　なりませうか。（ト合方になり、角藏大藏奥へはひる、小助思入あつて、）
小助　若し旦那さま、餘りといへば御恩を忘れ、不人情な仕方ゆゑ、腹が立つてなりませぬに、よくまあなたはお妾を、人に取られて其儘に、お腹をお立てなされませぬな。
正道　心の替りし上からは、兎やかう言ふは益ない事だ。
小助　私ならば二人とも、只返しはいたしませぬに、御勘辨强うござりますな。
ト正道ぢつと思入あつて、
正道　これ小助、今日まで繁を正道が、愛して居つたと思つて居るか。
小助　え、何とおつしやります。（ト誂への合方になり、正道思入あつて、）

正道　先達て手が手許金二百圓を盜みし折、彼が伯父たる惣助が正直一途な料簡に、繁を縛して罪條を逐一官へ訴へんと、以ての外の憤り、是れ人倫の道なれど盜みし金もおのが身の、榮耀に遣ひし譯にもあらず、貧苦に迫る父の爲、道ならねども其父へ對して孝の端なれば、官へ訴へ其律に行はん事不便ゆゑ、如何はせんと思ふ折包み隱せし身の素性、女といふ事明せしゆゑ、彼れが容貌勝れしに懸想なしたる體に持てなし、盜みし罪條問はずして二百圓は支度金と、名義を替へて妾となし、此別莊へ圍ひ置きしも、學事に秀でし博識を空しくなさんは遺憾の餘り、既に古語にもいへる如く、罪を憎んで人を憎まず、養ひ置きしは髮の毛が延びなば父の許へ返し、小學生徒の女教師になさんと思ふ我が所存、されば家内の者までに色に溺れし體に見せ、此別莊へ泊る夜も建廻したる屛風のうち、媚く事は露ほどなく、和漢の談話に夜を明かし、今日までそちにも悟られぬ我が心配は如何ばかり、斯くまで彼を庇ふのも數千人の其内に、又と女子にはあるまじき其秀才を惜しむゆゑ、末々官のお役に立てば、假令一人なればとて、皇國へ盡す我が忠節。

トよろしく思入にて言ふ。

小助　すりやお妾と思ひしに、旦那樣には色氣を放れ、お世話なされてござりまするか。

正道　彼れを愛する其時は、情を以て助けしも、色ゆゑなりと世の人に言はれん事はこれ必定、さすれ

ば水の泡ゆゑに、一夜の枕もかはさぬぞ。

小助 左程御恩を蒙りながら、愛想づかしを旦那へ申し、お暇を取つて參りましたは。

正道 これにも深き仔細ぞあらん、必ず明日は知れるであらう。(ト此時奥より角藏大藏出で、)

角藏 驚き入つた御心底、小蔭で伺ひ我輩も、

大藏 まことに感服仕りました。

正道 聞かれし上は是非もなけれど、他家へお話し下さるな。

角藏 神へ誓つて此事は、

大藏 決して他言は、

兩人 仕らぬ。(ト此時奥よりお辰上包みをせし書附を持ち出で、手を支へ、)

お辰 お繁さまが旦那樣へ、後にお渡し申してくれと、仰しやり附けてござります。

正道 むゝ、そちへ申し置きたるか。(ト書附を取り開き見て、)

角藏 して、置土産の、

大藏 一通は、

正道 此正道へ後難を、掛けまい爲の則ち謝狀。

小助　そんなら若しや。

お辰　お繁さまは。（ト此時鶯鳴く、是れを聞きて）

正道　燈火の明りに惑ひしか、

角藏　籠中に囀る、

大藏　經讀鳥。

正道　これぞ無常の。（ト考へる思入、ほうほけきやうと鶯の鳴く音の留りを木の頭）むゝ。

ト よろしく思入、鶯の谷渡りにて、

ト 波の音にてつなぎ直に引返す。

ひやうし幕

四幕目大切　隅田川道行の場

（淨瑠璃）朧の空に雲流す墨田川　夕立碑春電（淸元連中）

〔役名――倉橋直次郎、柴又講中妙法蓮七、庭別當小助、植木屋ひよろ松、同藪竹、同ぼく梅、柴又講中題目七兵衞、若黨惣助、神保の妾お繁。〕

（向島土手の場）――本舞臺一面の平舞臺、上の方に藁屋根葭簀圍ひの出茶屋、床几と茶道具の臺のみ片附けたる體。下の方同じく葭簀圍ひ、出茶屋の張物打返し淨瑠璃臺、向う諸所に櫻の立木、此後隅田川山谷堀今戸河岸を見たる灯入り夜の遠見、日覆より松櫻の釣枝、總て向島土手の體。爰にやぶ竹ひよろ松紺半纏、同じく腹掛股引草鞋植木屋のこしらへ、鋤鍬鋸を一つに結へ、是れをかつぎ、一人は辨當箱を肩へ掛け立掛り居る。此見得時の鐘、波の音にて幕明く。

松　此四五日の暖かいので、花がちらほら咲いて來たから、餘程人が出て來たな。

竹　出て來た所か昨日などは、八百松でも魚十でも、大層な客だつた。

松　今度柳畑へ出見世を出した、木母寺の植半も、嘸客があつたらうな。

竹　何といつても古いから、お馴染の客はたんとあるし、それに又新見世だから、どんなだか行つて見ようといふ、振りのお客とお馴染で、座敷がなかつたといふ事だ。

松　向島でもあすこらが、毎日どん／＼する日にやあ、言問ひ團子はいふに及ばず、茶見世の慈姑も餘計に賣れ、幾ら錢が落ちるか知れねえ。

竹　それに今日は庚申で、竹筒ッぽうや德利を、ぶら／＼提げた法華宗が、帝釋樣へ出掛けたから、向島は賑かだ。

松　喰物見世でも神佛でも、流行るといふは別ものだ、先づ水天宮さまに金毘羅さま、それに續いて帝釋さまだ、曲り金の渡しから粟餅屋や鹽煎餅、けふ一日でどの位錢儲けをするか知れねえ。今しがたのばら／＼降りで、人力車も思ひ掛けねえ餘計な錢を取つたらう。

竹　何にしろ下々へ、錢の廻るはいゝこツた。

ト此時上手よりぼく梅紺半纏着流し、下駄がけにて、板へ附けしお觸書を持ち出來り、

梅　おゝ、其處に居るのは松公に竹公か、今歸りか、遲かつたな。

竹　今日は旦那場の仕舞仕事で一杯御馳走になつたので、いつもより遲くなつた。

松　さうしてお前はどこへ行くのだ。

梅　今差配人の權兵衛さんから、是れは急なお觸ゆゑ、早く廻せといはれたから、喜三公の所へ持つて行くのだ。

竹　急なお觸といふのは、何のお觸だえ。

梅　聞かれてまことに面目ないが、忰は牛島學校へ六つの年から上げたお陰で、どんなむづかしいお觸でもさつさと讀めるけれど、おれは少しも讀めねえから、忰が居ねえ其時は、只判を押して廻すばかりだ。

竹　おれの所もやつぱりさうだ、娘が居ねえとお觸は讀めねえ、これを思ふと子供を持つたら、早く學校へ上げにやあいけねえ。

竹　よく戸長さんが其事を、村の者に諭すけれど、困つて見にやあ學校の有難い所が分らねえ。

梅　おら達と違つて竹公は、少しは目が明いて居るから、何のお觸か讀んで見てくれ。

竹　此頃のお觸には、大概假名がふつてあるから、讀めない事はねえ筈だが。

梅　其假名からして讀めねえから、まあ手前讀んでくれ。

竹　どれ〳〵、それぢやあ讀んでやらう。（ト觸書を取り、）「淨瑠璃名題――。」

ト太夫連名役人替名を讀む、

松　こう、お觸にしちやあ可笑しいな。

梅　こりやあ何か間違つたのだらう。

竹　新富町の番附を書く、粂さんの所で違つたのだらう。

梅　それぢやあ内へ持つて歸らあ。

松　おら達も湯へはひつて、早く夜食にあり附かう。

梅　然し爰まで無駄に出て、只引込むのも氣が利かねえ、「イヨ〳〵此處、淨瑠璃始まり。」

松「其爲口上左樣。」

竹　これでお役が濟んだ。

三人　さあ、行きやせう。

ト波の音にて三人上手へはひろ、知せに附き下手葭簀張の張物を打返す、爰に清元連中居並び、直に淨瑠璃になる。

〽卯月とはいへど櫻も莟勝ち、川風寒き隅田堤、筑波おろしに花よりも、更けて往來の人散りて、空に殘りし朧月。

ト本釣鐘合方になり、花道より前幕の直次郎、頰冠り尻端折り番傘を提げ出で來る、跡より同じくお繁片褄を端折り出來り、花道にて直次郎へ息込むを、直次郎振返り見る故、胸を押へ癪の痛む思入。

直次　どうした、胸でも痛えのか。

お繁　あい、さつきからきや〳〵と、癪が差込んでいけないのさ。

直次　それぢやあ向島を止しにして、廣小路へ行つて泊らうか。

お繁　なに、きつい事はないから、植半の方が知つて居てよいよ。

〽誰を待乳の山蔭へ、漕ぎ行く船の艪の音も、絕えて中洲へ落つる雁、なれし女夫かこれも

ト また、塒へ急ぐ二人連。

ト 繁瘧の痛む思入、直次郎跡へ歸らうといふを、構はず行くといふこなし、是れにて直次郎先きへ行くを、繁今に見ろといふ思入にてきつとなる、直次郎まだ來ねえかと振返る、繁氣を替へ、連立つて舞臺へ來る、直次郎躓き、ひよろ〳〵として下駄の前緒を切る。

直次 あゝ、危ない、躓いたのかえ。木の根がこゝへ出て居たんで、すんでの事轉ぶ所だつたが、踏みこたへる其はずみに、忌えましい鼻緒を切つた。

お繁 そりやあ困つた事をしたね。

直次 梅川が居りやあ立つてくれるのだが、何ぞ立てるものが欲しいものだ。

お繁 今わたしが鹿島で借りた傘の天窓に、二枚絲が掛ける爲に附いて居るから、それを取つてお立てな。

ト 直次郎傘を見て、

直次 これがありやあ譯はねえ、少し爰に待つて居てくれ。

ト 茶見世の床几を出し、是れへ兩人腰を掛け、直次郎傘のあたまの絲を解く、

お繁　いつもは爰等に車屋が、客待をして居るけれど、今の降りで歸つたと見えるね。

直次　それに今夜は十時過ぎ、今時分まで居やあしねえ。

〽岸に枝垂れし青柳の、絲の根〆も川水に、さえし端唄の障子船。

直次　あの三絃は向う河岸か。

お繁　いゝえ、上手から歸る屋形船だよ。（ト端唄模樣になる。）

〽香水の薫り床しき鬢の毛も、搔き上げしまゝ横櫛に、さすや窓もる月の影、どれが女か男やら、分かぬ姿の梅柳、憎い仲ではないかいな。

ト此内直次郎は床几へ腰を掛け、傘のあたまの絲を取る、此時端唄を聞く思入あつて、下駄の鼻緒を立てる、繁は直次郎の方へ背中を向け、下締の紐を結び直し、身拵へをする思入。

直次　べらぼうにいゝ聲だな。

お繁　藝者かと思つたら、男だね。

直次　濱町の家元が、上方から歸つたといふが、太夫に聲がよく似て居るな。

お繁　ほんにお前がさういへば、家元かも知れないね。

直次　今の端唄は誰の作だか、豪氣に書生を當て込んだな、香水の薫り床しき鬢の毛を、搔上げしまゝ

横櫛にさすや窓もる月の影、忘れもしねえ熊谷で、湯からあがつた其時に、毛を掻分けて其儘に鬢へさした横櫛にやあ、ぞつとする程惚れこんで、とう〳〵思ひは晴らしたが、今の端唄で思ひ出し、何だかをかしな氣になつた。

お繁　月日の經つは早いもの、昨日今日のやうだつたが、算へて見れば三月跡。

〽まだ其時は如月に、山家は雪に故鄕の、便りに急ぐ旅の空、思はぬ人に合宿の、人目忍びし風呂あがり、つい綻びし梅ならで、包む素性を香に知られ、中を隔てし垣越えて、結びし夢の草枕。

ト繁は過ぎし話しの心、直次郞は繁を捉へ、なまめいたるこなしにて、口說模樣よろしくあつて、

何だなお前、せわしない、今夜泊つてゆつくりと。

直次　それまで待つて居られねえ。(ト此時上手で題目太鼓になる。)や、あの太鼓は何だらう。

お繁　庚申だから柴又へ行つた、法華宗の歸りだらうね。

直次　それぢやあ今日は庚申か、そいつァ今夜はいけなんだな。

〽見返るこなたへ柴又から、歸る法華の講中が。

ト題目太鼓になり、東の假花道より七兵衞、井桁に橘、稻妻菱の派手なる着附、脚絆尻端折、草履

肩へ水を入れし德利を割掛けに掛け、吸筒の大きな瓢箪を持ち出來り、よき所へ留る、

連れに四つ木の藤屋から、はぐれて一人畦道を、肩に掛けたる吸筒の、瓢を友にぶら〳〵と、土橋を跡に隅田村や、里の子供が鄙びたる、唄に興じて來りける。

ト此内よろしく振りあつて舞臺へ來り、

七兵　おゝ、そこに居るのは講中の衆か。

直次　いゝえ、講中ぢやあございませぬ、往來の者でございまする。

七兵　あゝさうでございましたか、わたしや兩國講中だが、あんまり酒が好きなので、連に途中でまかれました。

直次　それぢやあお前は酒が好きかね。

七兵　いや、好きも〳〵大好きで、此瓢箪は五合入りだが、今朝から三度詰替へました、時に相手がなくつて困つて居るが、一つ受けてくんなさらないか。（ト茶碗と吸筒を出す。）

直次　そいつあ何より有難い、酒と聞いては見遁せねえ。（ト茶碗を取る。）

七兵　さあ〳〵、遠慮なくやんなさい。（ト吸筒からついでやる。）

直次　あゝ溢れます〳〵。（トぐつと呑む、）こいつあ大層いゝ酒だ、最う一杯頂戴しませう。（ト又ぐつと

呑む。）お繁、どうだ御馳走にならねえか。（トお繁幸ひといふ思入あつて、）

お繁　それぢやあ半分頂戴しませう。

七兵　半分ぢやあ心持が悪い、一杯呑んでくんなさい。（トついでやる。）

お繁　いゝえたんとは行けませぬ。（トお繁酒を呑み、胸を撫でおろす。）

七兵　これはお前のお上さんか、但し情婦か知らないが、何にしろ別品だ、是れぢやあ酒がうまく呑める。

直次　駈附け三杯も舊弊だが、もう一杯頂戴しませう。

七兵　さあ〳〵たんと呑みなせえ、又無くなりやあ注ぎ足すから。（ト瓢箪を渡す。）

直次　それぢやあ、遠慮なく御馳走になります。

七兵　世の中に酒位早く心易くなるものはねえ、お前方に初めて逢つたが、おらア百年も馴染んだやうだ、是れといふのも皆歸妙法、偏に高祖の御利益だ。

直次　ほんにお前さんの仰しやる通り、こんな有難い事はない。（ト酒を呑む。）

お繁　思ひ掛けない此酒で、お前が醉へばこちも御利益、（ト酒を呑して醉はさうといふ思入あつて、）何ぞ有難いお話しを、お聞かせなすつて下さいな。

六兵　おゝ話さうとも〳〵、御難の話をして聞かさう。

直次　こつちは其内この酒を。

七兵　どれ、辰の口から話さうか。（ト七兵衞前へ出る、）

〽抑法華經弘通の行者、高祖日蓮大聖人は、大難四ヶ度小難は數白浪の龍の口、させる罪なき御身さへ、遁れ片瀨の土の牢、引出す駒を松の葉へ、飯盛姿が志、厚き涙の汐曇り、磯端近く着きたまふ。〽情を知らぬ北條が、命令受けて太刀取りが、後へ廻り振上ぐれば、〽不思議や一天磨る墨を、流すが如く雲覆ひ、〽電光はげしくぴか〳〵、〽鳴る雷はぐわら〳〵〳〵、〽忽ち太刀は三段に、權威も折れて、わな〳〵〳〵、〽響きにひよつくり目が飛出し、俄盲目に探るもあれは、〽又腰がぬけ躄るもあり、〽呼べど叫べどきよろもろと、聞えぬ耳のかな聾、〽えゝ憎い賣僧といきまきて、檢使がくわつと腹立てば、〽膝や腕を摺こはし、痛さに士卒は泣き出す、〽てもよい氣味と諸見物、どつと笑うてハハヽヽヽ、腹をハヽヽヽ抱へてムヽヽヽヽ、えゝ堪らぬとハヽハヽハヽヽヽヽ、〽是れも偏に妙法の利益と天を拜しける。

ト此内七兵衞よろしく振りある、お繁は直次郎を醉はせる氣で酒を吞ませる、此時上手より蓮七七兵衞

同じ拵へにて團扇太鼓を二本持ち出來り、

蓮七　おゝ七兵衞さん、爰に居たか、跡だと思つて搜して居た。

七兵　おれは又お前方が先きだとばかり思つて居たが、いゝ所へ來てくれた、おれと一緒に踊つてくんねえ。

蓮七　何でまた踊るのだ。

七兵　あすこに居る二人の衆に、弘宣流布の御利益を仕形話しで聞かせるのだ。

蓮七　そんならおれにも踊れといふのか。

七兵　さあ〳〵一緒に遣つたり〳〵。（ト兩人團扇太鼓を持ち出で、）

〽上總濱邊は七里の法華、爺さまござれや婆さまもござれ、葛籠背負うて千ケ寺參り、太鼓叩いて題目唱へ、どこどんどがやれどがやつしよ、叩く拍子の面白や。

ト七兵衞蓮七太鼓の拍子になる、此内お繁直次郎囃き合ひ、葭簀の蔭へはひる。拍子よろしくあつて是れより早き振になる。

〽祖師のえゝ祖師の眞筆帝釋天王、利益はあふるゝ井筒の淸水、庚の申ほで七杯呑んだら、腹がだぶ〳〵だゞぶだぶ〳〵、野掛半分女中の一群、きやつきやと騷げや、お猿の緣日、賑

はしいではないかいな。（トよろしく振あつて納まり、四邊を見て）

七兵　や、今の衆はどこへ行つたか、爰は所も三圍堤。

蓮七　もしや二人は狐ぢやないか。

七兵　こいつは彼奴に、

兩人　化されたか。

〽ぞつと怖氣も立つ鳥の、羽音におぢて跡も見ず、眉毛濡らして急ぎ行く。

ト七兵衞よろしく眉毛を濡らし、花道へはひる、本釣鐘を打込み、凄味の淨瑠璃になる、

〽折しも告ぐる淺草の、鐘の音沈む雨催ひ、水に寫りし星影を一つ二つと算ふれば、三つは浮世の捨鐘と、心せはしき十二時に、堀の火影も影薄く、闇き堤へ立出でゝ。

ト此内本釣鐘、薄き波の音をあしらひ、葭葮の蔭より直次郎、お繁出て、

直次　五合足らずあつた酒を、空腹へ呑んだので晝間の醉を引出して、何だか足がふら附くやうだ。

お繁　そんなにお前醉つたのかえ。（トお繁直次郎の樣子を見る、）

直次　こいつあ所詮歩けねえ。車屋へ行つて乘つて行かう。

お繁　なに、乘らずとも此土手を、少し歩くと川風で、直に醉ひが醒めてしまふよ。

直次　何にしろ水が呑みてえ、喉が渇いてこてえられねえ。

お繁　おゝ、水が呑度くば丁度幸ひ、今の人が忘れて行つた、これをお前呑んぢやあ何うだえ。

トお水の徳利を出す。

直次　むゝ、帝釋さまのお水か、そいつあ何より有難い。（ト獨吟の題目になる。）

〽南無妙法蓮華經々々。

ト此題目のうち徳利の口から酒を呑む、お繁は懐からちよつと匕首を抜きかけて見る、兩人思入よろしく、

あゝうめえ〳〵、醉ひ醒めの水ばかりは、こりいつあ下戸の知らねえ味だ。

ト凄き合方になり、お繁きつと思入あつて、

お繁　うまけりやあたんと呑みな、それが末期の水だから。

直次　えゝ、縁起でもねえ、末期の水とは。

お繁　わたしやあお前と心中する氣だ。

直次　何でそんな事をいふのだ。如何に所が三圍だつて、此結構な世を捨てゝ心中などをしようといふは、あんまり馬鹿げて居るぢやあねえか。

お繁　そんな未練な事を言はずと、覺悟をして命を捨てな。
直次　何も命を捨てる程、義理の惡い事はねえ。
お繁　いゝえ無いとは言はさない。命を取らねば孝が立たぬ。
直次　え。（トぎつくり思入。）
お繁　伊香保在の蓮華寺村で、二百圓の金を盗み、妻木右膳を殺したらうな。
直次　どうしてそれを。（トびつくりなす。）
お繁　何と死なずばなるまいが。
直次　どうして〳〵人などを、何でおれが殺すものか、そんな覺えはありやしねえ。
お繁　いゝえ覺えがないとは言はさぬ。左の小指はどこで切られた。
直次　え、むゝ、しやもをこせえて切つたといふは、實はありやあ僞りだ。こりやあ千住の中田屋で、女に切つて遣つたのだ。
お繁　其言譯は愚なことだ。身の健康を辨へて月々醫師の檢査を受け、開化に進む今の娼妓、野暮といふのは舊弊に、彫物さへもせぬ世の中、誰が指を切るものか。喰切られたといふ確證は、さつき落した財布の重み、二百圓程あるゆゑに、どうして持つて居る事か不思議に思ふ其處へ、非命

に死せし我が父の、死骸の口に喰切りし、小指のありしといふ事を、娘が緣に戸倉屋の親仁が委細の物語り・扨こそ父を害せしは、落せし金の員數といひ、おのれが仕業と認めしゆゑ深きお惠み蒙りし神保樣へ御恩も送らず、御難儀掛けては濟まざるゆゑ、お詫びの狀を殘し置き、おのれを爰まで連出したは、人家離れた此土手で父の敵を討つ所存、元が士族とあるからは、卑怯未練に包み隱さず、名乘り合して勝負しや。（トお繁匕首を持つて詰寄る、直次郎きつと思入あつて、）

直次　扨はあの折熊谷で、泊り合した戸倉屋の、親仁が始終を話したか、それを知られた上からは、手前の緣も最う是れまで、色氣を捨てゝ名乘つて聞せる。（ト合方になり、）あの折おれを熊谷で、まいて行くのは怪しいから、車を預けて見え隱れ伊香保の湯場まで跡を附け、蓮華寺村の親仁の所へ行つた其晩裏口に、隱れて手前が二百圓、置いて行つたを慥に認め、日割れの戸から窺へば昔を忘れぬ一腰が、床に飾つてあつたを幸ひ、裏からそつと忍び込み、金より先きに一腰を取るより早く無慚にも、妻木右膳を切り倒し、蒲團の下へ入れてあつた二百圓を引出す折、手負ながらも武者振り附き、爭ふ機み左の小指を喰切られ、忌々しさに刺殺し、逃げる其折出會つたが、見咎められぬを幸ひに、素知らぬ振りで車を引き、東京へ歸つたが、うつかり遣へば足が附き、御用の聲と諸共に直に繩が掛るから緣の下へ埋めて置き、丁度足掛け三月越し、日數がたつ

てこつそりと、今日掘出した二百圓、さつき落した其時に目を附けられたが天の網、遁れぬ所と覺悟して、殘らず言つて聞かせるから、手前も此儘安穩に、最う生かしちやあ置かれねえ。

〽傘おつ取つて立上れど、風に追はれる鷺ならねど、ふらつく足を踏みしめれば、

ト直次郎傘を持つて立上り、醉ひたる思入にて、ひよろ／＼となりきつとなる、お繁思入あつて、

お繁　流石は惡い性根だけ、よく隱さずに言つてしまつた、おのれが盜んだ二百圓は、親の貧苦を救はんと、道ならざれど大恩ある、神保氏の所有を掠め、竊に送りし其金ゆゑ、おのれが非道の刃にかゝり、

〽盡せし孝も不孝となり、水のあはれや父上は、果敢ない最期をなしたまふ。

敵を取つて手向けねば、よしや此身を捨つるとも、冥土へ行つて言譯なし、今日の今まで其事を露聊かも知らざりしが、測らず聞くも導きなるか、思ひ掛けない柴又の歸りに信者が勸めたる酒は此場の助太刀に、醉はして殺すに如くはなしと、無理に呑まして醉ひ醒の、水の替りにひいやりと、冷たい白刃を振舞ふから、覺悟をなして往生しやれ。

直次　以前が書生の男姿に、さりとは色氣のねえ事だ、强淫同樣熊谷で無理往生に抱いて寐た、可愛い手前も斯うなりやあ親仁と共に殺して遣る。たゞ悔しいはうか／＼と、酒を呑んだがおれが誤

り然し四合や五合の、端た酒に醉ふやうな、そんなけちな奴ぢやあねえ。

お繁　非命に死する父上の、仇を報ずる所さへ、櫻に埋む隅田川。

直次　流るゝ水の淀みなく、人足しげき茶屋小屋も、更けでは土手に火影なく。

お繁　船の往來の三味線も、

直次　絶えて車の音もなく、

お繁　夜學にふける牛島の、

直次　生徒が讀書の聲ばかり、

お繁　四邊に憚る事なければ、

直次　梢の花の落花微塵に。

お繁　小癪な事を。

〽覺悟をせよと振上ぐる、白刃の光り川水に、きらめく春の稻光、夕立塚の三囲に後の浮名ぞ。

トお繁懐劍を拔き、突いてかゝる。直次郎身を躱しちよつと立廻つて傘にて留める、是れにて清元連中を張物で消し、時の鐘誂への凄き鳴物になり、兩人立廻りよろしくあつて、トゞお繁直次郎の

肩先きを一刀切る、糊紅になり、

直次　うぬ、切りやあがつたな。

お繁　父の無念を晴らさにやおかぬ。

ト又立廻りになり、立身にて直次郎の脇腹へ突込む、直次郎苦しむ、お繁白刃を拔く、直次郎ばつたり倒るゝ、お繁乘つ掛り、

天命思ひ知つたるか。

ト止めを刺す、ばた／＼になり、上手より惣助二幕目の若黨、小助別當にて出來り、

惣助　こりやお繁、よくぞ親の敵を討つた。

小助　お出來しなされましたな。

お繁　おゝ、よき所へ二人の衆、父を害せし直次郎が、盜み取つたる二百圓、再び我手に入つたれば神保樣へお渡し下され。（ト直次郎の財布を取出す、惣助受取り、）

惣助　慥にお渡し申すであらう。

お繁　是れにて思ひ置く事なければ。（ト短刀を取直し、死なうとするを小助留める、）

惣助　やれ早まるな、これお繁。

小助　何ゆゑ死なうとなさるのだ。
お繁　人を害せし上からは、縄目に逢はぬ其うちに、
惣助　死なうといふのも尤もだが、元より人を殺せし上、
小助　金を盗みし直次郎、あなたの科にはなりますまい。
お繁　親を害せし者なれど、敵討は天下の法度、それを犯せし我が身の上、先非を悔いて自殺いたせば
　　必ず留めて下さるな。(ト覺悟の思入、惣助も思入あつて、)
惣助　さう又覺悟を極めたなら此趣きを自訴なして、お上の御處置を受けるがよい。
小助　惣助さまのお詞に、附くのが何より上分別。
お繁　成程伯父が意見の如く、罪を犯せし此身ゆゑ、上の御處置を受けるが道。
惣助　そこへ心が附いたならば、
小助　少しも早く。
お繁　おゝ、さうぢや。(トお繁立上る。此時幕明きの植木屋やぶ竹出で、)
竹　　人殺し、動くな。(ト組附くを振解き、引附け、)
お繁　いで、身の科を、(ト投退ける。竹ぽんと轉るを木の頭、)訴へ出でん。

トきつと見得、波の音、佃の合方、水鳥を日覆へ引きあげる、三人、引張りよろしく。

ひやうし　幕

女書生繁（終り）

軍書家御指圖

以古新敷劇場脚色甲越軍記

抑〻天文年間に信濃の領主村上が　戰破れて討死と覺悟の白柄も紅に染る血汐の大身槍鎧に立し矢代源吾が敵を欺く身代りの最期を歎く更科田毎哀れを餘所に落人の頼む小影の春日山綺羅を飾りし出陣に斷鎧の鬼小島は酒にたわいも内儀が貞節適れ烈女の鑑の一首恥辱を忍ぶ額岩寺が恨みは深き千曲川林を討つて我手の斬首娘小笹は川向う涙の雨に暮果て越後の陣の亂舞の調和田が仕舞も田村の切薩埵にまさる敵國へ鹽を贈りし慈悲心に夜討を報す間者の駒澤身の言譯の蔭腹を五音に悟る三郎が疑ひ晴し朝霧に裏をかゝれて山本が一命捨る一世の働き三世の主に大藏があの世の供に立つか弓矢竹に諫む高坂が詞を用ゐぬ信玄の陣所へ切込む謙信が出合を則狂言の結局

音聞芳年武者揃

川中島東都錦画

「川中島合戰」は明治九年三月、作者六十一歳の時、新富座に書卸された。當時の「語り」の中にも明らかに示されてある通り、大蘇芳年の武者繪に暗示を得た時代物である。新富座全盛時代の作で評判もよく、其後も屢〻上演されて成功した作である。彥三郎の額岩寺光氏、菊五郎の山本勘助、左團次の鬼小島彌太郎及び旗持大藏等、何れも適役でもあり、其演出に成功した。此作でも左團次は鬼小島に扮して、忠彌のやうな醉人の性格に扮して好評を博した。八幡河原の討死の場は特に好評であつたといふ。

書卸しの時の役割は、坂東彥三郎（上杉輝虎入道謙信、額岩寺光氏）、尾上菊五郎（山本勘助入道、古鐵買七兵衞）中村芝翫（武田晴信入道信玄、和田喜兵衞正行）、市川左團次（鬼小島彌太郎、駒澤三郎、旗持牛窪大藏）、澤村訥升（村上左衞門義淸、光氏の娘小笹）、坂東しう調（義淸の內室更科、駒澤七郎妻おしづ）、中村喜世三郎（村上の侍女田每、鬼小島妹お雪）嵐大三郎（鬼小島妻お谷）、市川子團次（矢代源吾、內藤修理之助）、坂東喜知六（相木市兵衞）中村荒次郎（飯富三郎兵衞）、市川幸藏（布下左衞門）、尾上梅五郎（林三郎兵衞）等であつた。

挿繪にしたのは、武田の城內へ鬼小島が使者に來た所と山本勘助で、何れも豐原國周の筆である。

大正十四年十月

校訂者

川中島東都錦繪（川中嶋合戰――五幕十四場）

序幕

信州村上本城の場
同上田原合戰の場
同武田家本陣の場

〔役名――額岩寺駿河守光氏、村上左衞門義淸、矢代源吾淸春、相木市兵衞、小山田兵衞尉高重、布下左衞門、鳥居兵三郎、八木惣八、和田修理大夫、飯富三郞兵衞、武田大膳大夫晴信。義淸の奥方更科、侍女田每、其他。〕

（村上家本城大廣間の場）――本舞臺三間の間中足の上段、正面金襖、上下杉戶襷欄間、置て信州村上家本城大廣間の體。爰に女形四人腰元にて住ひ居る、管絃にて幕明く。

腰 もうし皆さん、今お表より御注進の樣子では、甲州の武田信玄、どういふ事にや不意に御當家を攻めるとて、大軍を以て、お國境まで押寄せ來たとのこと。

腰二 ほんにそれゆゑお表にては、御出陣の御用意にて上を下へとお取込み。

腰三　若し御本城まで押寄せ來らば、爰に斯うしては居られますまい。
腰四　御臺樣の御供をして何れへか落ち延びねばなるまいが、いやな事でござんすなあ。
腰一　いえ〳〵假令甲州から、何程の大軍にて押寄せ來るとも、額岩寺光氏樣が采を取り御先陣をなされますれば、御本城まで攻寄せて來るやうな事はござりますまいわいなあ。
腰二　澤野さんの仰しやる通り、總じて軍といふものは勝つも負けるも時の運とやら、決して油斷はなりませぬ。
腰三　ほんにさうでござんす。今日の味方は明日の敵とやら、どうならうも知れませぬ。
腰四　今にも軍が始まつたら、三重のお櫓へあがり見物したなら、嘸面白い事でござりませう。
腰一　譯もないこと言はしやんせ、お祭りか何ぞではあるまいし、見物などがなるものかいなあ、それよりは少しも早く所持の品を取纏め、
腰二　逃げ支度が何より肝要。
腰三　ほんにさうで。
腰四　ござんすなあ。
腰三
腰四

ト合方になり、奥より田毎島田臺腰元の裝にて出來り、平舞臺眞中へ住ふ。

腰一　田毎さまには、只今お上りで、
四人　ござりますか。
田毎　思ひも寄らぬ椿事にて、お案じ申すそれゆゑに、御臺樣の御機嫌を伺ひ、お襖越しに承はれば、澤野さんを始め皆さんが、寄ると觸ると軍話し、今殿樣の御出陣遊ばす折柄、忌はしい逃げ支度が肝要などと、如何に年端が行かぬとて、其やうな事は言はぬもの、私なればこそよけれ、若しお上のお耳に入つたなら、どのやうに叱られうも知れませぬ。此上ともにちとお嗜みなされませ。
腰一　成程田毎さまの仰しやる通り、祝ひに祝ふ御出陣、今のやうな事を申しましたは、足らはぬわたしの不調法。
腰二　衣類や調度を常々から、大事に思ひまするゆゑ、淺慮にも申しましたは。
腰三　今にも敵が來たならば、それを背負つて逃げる心。
腰四　それゆゑうつかり、今のやうな事を申しました。
腰一　是れから心を用ゐますれば、
腰二　只今の事は此座ぎり。
腰三　お聞き流しにして。

四人　下さりませ。

田毎　そりやもう衣類調度を大事に思ふは女子の人情、決して無理ではなけれども、是れからもある事、幸先祝ふ御出陣、逃ぐるの負けるのといふ事は、餘所事にも必ず言うてはなりませぬ。若侍の衆達は皆氣の立つて居る時節、若し忌はしいこと言うた者は出陣の血祭り。

四人　え。

田毎　いやさ、ひよんな事にならうも知れぬゆゑ、そこを思うて私が、お留め申した事なれば、必ず惡う思うて下さんすな。

腰一　何として惡う思ひませう、御親切なるお心添へ。

腰二　いゝはすはな女子の身を恥ぢて、

腰三　是れからきつと私共も、

腰四　心を附くるで、

四人　ござりませう。

田毎　さう言うて下さんすりや、わたしも嬉しう思ひますわいなあ。それはさうと、御臺樣の御用があらう、早くお奥へ皆さん方。

腰一　左様なれば田毎さま、後程お目に、

四人　掛りませう。（トやはり合方にて、四人田毎に會釋なし、上手杉戸の内へはひる。田毎殘り）

田毎　思ひ掛けない今日の軍、二萬餘騎の大軍にて、お國境まで寄手の人數押寄せ來たとの知らせゆゑ幼い時より親々が許嫁せし源吾さま、先陣をお願ひなされ五百騎の人數を引連れ、最早御出陣とのこと、どうぞお怪我のないやうに、目出度く凱陣なさるやう、神や佛へお願ひ申せど、女子の狹い心からお案じ申すそれゆゑか、最前からの胸騷ぎ、身も世もあられぬ思ひぢやなあ。

ト氣の揉める思入、此時奧より矢代源吾鎧下馬手差、太刀を提げ出來り、

源吾　それに居るは田毎どのか。（ト是れにて田毎心附き、源吾を見て嬉しきこなしにて、）

田毎　源吾さま、あなたにお目に掛りたく、最前より此處にお待ち申して居りました。

源吾　すりや、身共を待受けしとは、何ゆゑでござるな。

田毎　思ひも寄らぬ今日の戰、何やかやお話しも承はりたし、又お顏も見たし、それゆゑお待ち申しましたわいなあ。したが最早程なく御出陣でござりますか。

源吾　如何にも拙者に先陣を命ぜられ、伯父額岩寺殿の指揮を受け、甲州勢に泡吹かせ、比類なき手柄をなし、美名を末世に殘す所存。

田每　戰場にて功名手柄顯はしたまふと聞くならば、嘸お嬉しい事でござりませう。さりながら弓鐵砲の中なれば、若しもお怪我でも遊ばしたら何といたしませう。それを思へば私はあなたのお身が案じられ、成らう事なら今日の御先陣は幾重にも、お止め申したうござりまする。

ト氣遣ふ思入、源吾思入あつて、

源吾　こは武士の娘に似合はぬ詞、日頃俸祿たまはるは何の爲と思うて居るぞ。斯かる時に敵を防ぎ、敵はぬ時は御馬前にて、討死なすは武士の勤め、元より君へ捧げし命、討死なせしと聞くならば、喜びこそすれ何悔む事のあるべきぞ。

田每　すりやあなたには戰場にて、甲州勢の勢ひ強く、防ぎ兼ねし其時は、討死遊ばすお心なるか。

源吾　そりやいふまでも無きこと、卑怯未練に後を見せ、逃げ歸る所存はない。戰ひ利あらぬ其時は討死いたすかねての覺悟、今此處でそちに逢ふが今生の別れとならうも知れぬ。若しさうなる時は我がなき跡、香華とつて弔ひくれよ、是れが此世の賴みなるぞ。

田每　えゝ忌はしい事おつしやつて下さりますな。すりや何うあつてもあなたには、敵はぬ時は後を見せず、討死遊ばすお心なるか。そりや御短慮でござります。常々父樣のおつしやるには戰は勝たうと思ふより、負けまいとするを第一に、逃ぐるが手段の此上なしと、女子ながらも武士の娘、

よう聞き及んで居りまする。幼い時より親々が許嫁せし此田毎、まだ婚禮の杯もいたさぬ内にお別れ申さば、冥土へ行つて添ふことならず、どうぞ祝言の杯するまで、卑怯者と言はれても討死なされずお命全う、お歸りなされて下さりませ。（ト源吾に縋り泣く。）

源吾　えゝ、たはけたことを言ふまいぞ、假令祝言の杯せずとも、不義密通といふではなし、親と親が得心にて許嫁せし上からは誰憚らぬ夫婦中、御身と杯なさんとて寄せ來る敵に後を見せ、卑怯未練の名を取らうや、今出陣の幸先きに穢はしい其繰言、聞きたうないわえ。（トきつと言ふ。）

田毎　そりや敵はぬ時はどうあつても、討死遊ばすお覺悟なるか。

源吾　如何にも、味方敗北なす時は、生きて再び歸らぬ心。

田毎　どのやうに申しても、お聞き入れは下さりませぬか。

源吾　いつかな變ぜぬ武士の魂、詮なき繰言申さうより、奧へ參つて御臺樣を、大切に守護いたせ。

田毎　はあゝ。（ト泣伏す。）

源吾　兎やかういふ內、早や出陣の時刻ならん、片時も早く支度をなさん。（ト立掛るを田毎留めて、）

田毎　諄いやうではござりますが、せめて杯するまでは、どうぞ御無事にお怪我なく、お歸りなされて下さりませ。

源吾　甲州勢を切りまくり、凱陣いたすを相待たれよ。

田毎　左樣なれば源吾さま。

源吾　田毎どの。

田毎　必ず吉左右待ちまする。

源吾　おゝ。（ト行き掛けるを、）

田毎　もし。（ト源吾の裾に縋るを振拂つて、早舞にて逸散に花道へはひる、田毎跡を見送り、）まだお年若な源吾さま、血氣にお逸りなさるのは、更々御無理にあらねども、さま〴〵お諫め申しても聞き入れずして御出陣、戰場の事なれば若しもの事のある時は、わしやどうせう何としたらよからうなあ。（ト泣伏し、心附いて氣を替へ、）おゝさうぢや、爰でお案じ申さうより、源吾さまの伯父上額岩寺樣へお願ひ申し、多い御家臣の事なれば先陣を繰替へて、源吾さまにはお城へお殘りなさるお役目を、仰せ附けられ下さるやうお願ひ申さん、さうぢや。

ト立つて下手へ行きかゝる、此時上手杉戸の内より、以前の腰元四人出來り、

腰一　田毎さま、御臺樣が、

四人　召しまする。

田毎　なに御臺様の御用とな、只今上りまする程に、暫く御猶豫下さるやう、皆さんからよろしう願うて下さんせ、わたしは是れよりお表へ。〔ト行き掛るを皆々留めて〕

腰一　急な御用でござりますれば、

腰二　少しも早う田毎さま。

腰三　お奥へお出で、

四人　なさりませ。

田毎　それぢやというて、みすく源吾さまを。

四人　なに、源吾さまとは。

田毎　あいや、是非に及ばぬ、そんなら奥へ。

腰一　さあお出で、

四人　なされませ。

ト四人にせり立てられ、田毎是非なき思入にて、腰元附添ひ奥へはひる。ばたくになり花道より、相木市兵衞鎧下籠手臑當にて太刀を引提げ出來り、直に舞臺へ來り奥へ向ひ、

市兵　火急の儀にて相木市兵衞、出仕いたした、我が君様へお取次下されい。御近習衆々々。

ト呼ぶ、是れにて奥より和田修理大夫、布下左衛門同じこしらへにて出來り、

修理　相木市兵衛殿、慌だしい、

兩人　何事でござるな。

市兵　一大事の儀出來いたせしゆゑ、お訴へに參つてござる。

左衛　して一大事とは。

修理　如何なる儀で、

兩人　ござるな。

市兵　計らず只今味方の者に、變心あつて甲州方へ内通なす、密事の書狀が手に入りました。

修理　味方の内に變心あつて敵へ内通いたすとは、容易ならざる一大事。

左衛　して〳〵それは何者なるぞ。

市兵　其姓名は我君へ、密事でござれば直き〳〵に、申し上げたうござります。（ト此時奥にて）

義清　樣子は聞いた、村上義清それへ參つて承はらん。

ト中の舞になり、正面の襖を開き、義清鎧下大口籠手臑當にて出來り、續いて鳥居兵三郎、八木惣八鎧下、軍卒二人、義清の太刀を持ち出來る、義清褥を敷き、二重眞中に住ふ。

相木市兵衛、至急の出仕大儀なるぞ。

市兵　はッ。（ト平伏なす。）

義清　して、變心なせしは何者なるぞ。

市兵　他聞を憚る一大事、武田へ送る密事の一通。（ト市兵衛懐中より一通を取出し、義清へ渡し、）いざ御直覽下し置かれませう。（ト義清開き、よく〳〵見てびつくりなし、）

義清　やゝ、額岩寺光氏は我を見限り、武田方へ隨身なせし此文體。

市兵　重臣たる光氏殿、斯かる逆意を企つ上は、お家の安危計り難く、打捨て置かれぬ大事ゆゑ、推參なして斯くの訴へ。

修理　そりや武田方へ内通せしは、光氏殿とは思ひも寄らぬ。

左衛　忠臣無二の額岩寺殿、變心あらうやうはなし。

兵三　察する所敵方にて、密書を拵へ、君臣の、

惣八　中をば裂かん慥に計略。

修理　御賢慮あつて、

四人　然るべう存じまする。（ト此内義清件の密書を繰返し見て、）

義清　如何にも、其方共の申す如く、忠心他なき光氏ながら、紛ふ方なき彼が手蹟、計り難きは此程より何事に寄らず我が詞を用ゐざるは、心得難く思ひ居つたる折なれば、變心なしとも言ひ難し。

市兵　仰せの如く我が君を、輕蔑なせし額岩寺、縱令智勇は勝れたりとも、君の仰せを一々にもどくは即ち野心の證據、林三郎右衞門殿と申し合せ、彼れが樣子を此程より竊に窺ひ居つたる所、計らず密書が手に入りしは、天に口なし人を以て言はしむる是れ道理、御出陣の幸先きに、斯く變心の顯れしは、君の御武運強きゆゑ、さすれば今日の戰爭も、必ず勝利疑ひなし、臣等が身に取り如何ばかりか、祝着に存じ奉る。

義清　何にもいたせ其方が、心を附けしゆゑにこそ、斯かる密書が手に入りしは、弓矢神にも林相木が忠義の心を感應あつて、知らせたまふと思ふなり。兎にも角にも詮議は後にし、先づ差當る今日の先陣、如何なる計略あらんも知れず、さすれば彼れめは出陣の供を省きて當城の、留守居役を申し附け、跡にて篤と事を糺さん。和田布下兩人は矢代源吾諸共に、今日の先陣申し附けるぞ、人數を引き具し出張いたせ。

修理　すりや、拙者布下兩人へ。

左衞　矢代源吾諸共に。

修理　先陣仰せ。

修理左衛　附けられますとな。

義清　隨分共に奇計を回らし、甲州勢を追ひ退けよ。

修理左衛　委細畏つてござりまする。

義清　少しも早く用意いたせ。

修理左衛　はッ。(ト立ちかゝる、此時花道揚幕の内にて、)

光氏　其御出張暫くお待ち下され。

市兵　あの聲は額岩寺、

皆々　光氏殿。

義清　なに、光氏是れへ出仕せしとな。(トきつとなる、早舞になり額岩寺光氏鎧下好みのこしらへにて出來り花道に住ふ、)其方は額岩寺駿河守、和田布下兩人へ、今日の先陣申し附けしを、暫く待てと止めしは。

左衛　如何なる仔細、

皆々　あつての事ぞ。

光氏　先陣の儀は某が、それへ參つて申し上げん。

義清　猶豫ならざる火急の場合、これへ參つて疾く〳〵申せ。

光氏　然らば御免下され。（ト舞臺へ來り、眞中に住ふ。）

修理　光氏殿には出張を、

左衛　何ゆゑあつて、

皆々　お止めありしぞ。（ト中の舞になり、）

光氏　其仔細餘の儀にあらず、間者を以て寄手の虚實竊に窺はせし所、馬場小山田を先陣に、名ある武士三手に別れ、軍師は名に負ふ山本勘助、後陣は大將武田信玄惣勢合せて二萬餘騎、上田ヶ原を前になし、魚鱗鶴翼に陣を取り、短兵急に當城を討滅さん結構は、如何なる手段あらんも和れず、機に臨み變に應じ接戰なさねば防ぎ難し、烏滸がましくは候へども、斯くいふ光氏先鋒なし、縱令山本何程の智勇あつて奇計を廻らし、項羽の勇を振ふとも我も多年心魂を凝らせし孫呉が奥義を用ゐ、寄せ來る敵に泡吹かせ、追ひ退けんは手裏にあり、何卒拙者へ先陣を仰せ附られ下さるやう、偏に願ひ奉つる。（ト市兵衛義清に目配せなす、義清思入あつて、）

義清　光氏が願ひ左る事ながら、此義清が鑒識を以て、和田修理大夫布下左衛門矢代源吾へ先陣を、一

旦申し附けたる上は、假令其方重臣たりとも、今更申し附け難し、汝事は當城に罷り在り、留守居役を仕つれ。

光氏　すりや某に今日の、御供は仰せ附けられませぬとな。

義光　如何にも、汝を供に召連れぬも深き所存あつての事、予が意に隨ひ留守いたせ。

光氏　御諚を悖くは恐入れど、今日大事の戰爭に腰拔け同樣安閑と、何とて留守居がなりませうや。平に拙者へ先陣を、仰せ附けられ下さりませう。

義清　假令何やう願ふとも、汝は供に召連れぬぞ。

光氏　すりや何ゆゑに此光氏、御出陣のお供は叶ひませぬぞ。

義清　是れには深き仔細のあること。

光氏　して其仔細は。

義清　一時を爭ふ火急の場合、其儀は追つて申し聞かさん。

光氏　どうあつても某に、お供は仰せ附けられませぬ。

義清　如何やうに申すとも、出陣の儀は叶はぬわい。

ト きつと言ふ、光氏是非なく控へる、修理大夫思入あつて、

修理　我が君樣へ申し上げます、軍慮に秀でし光氏殿、殊に今日は大事の戰、一人たりとも味方のほしき時なるに、

左衞　斯かる軍師を安閑と御城に殘したまふとは、如何にも殘念至極ゆゑ、

兵三　われ〳〵共が斯くまでに、申し上げるは恐入れど、何卒お供に召連れられ、

惣八　軍配取つて士卒の掛引、お任せ下さるならば、

修理　戰士も一同奮發なし、

左衞　勇氣も一倍增す道理。

兵三　爰の所を御會得あつて、

惣八　光氏殿に御供を、

修理　仰せ附けられ下さるやう、

四人　偏に願ひ奉つる。（ト四人義淸に向ひ、よろしく執成す。）

義淸　予が所存あつて殘し置く額岩寺光氏を、達て出陣願ふのは、和田布下を初めとして、敵の勇氣に怯ぢ恐れ、卑怯未練に逃ぐる覺悟か。

市兵　如何にも君の仰せの如く、御兩所を初め何れもには、臆病風に誘はれて、出陣召さるゝが怖いと

見えるわ。人の武勇を頼みにめさるは、武士たる者の大きな恥辱、失敬ながら笑止千萬な儀でござる、はゝゝゝ。(ト嘲笑ふ、修理大夫きつとなり、)

修理　全く以て左にあらず、斯かる大事の場合に至り、武勇勝れし御家臣を、老人女子同様に、御城に殘し置かるゝは、如何にも殘念至極ゆゑ、

左兵　君のお爲を深く考へ、達てお勸め申せどもお聞入れなき上からは、是非に及ばぬ此場の仕儀。

兵三　われ／＼卑怯に何として、敵に後を見せませうや、日頃俸祿たまはりし、御恩を報ふは今此時。

惣八　叶はぬ時は御馬前にて、討死いたす。

四人　所存でござる。

義清　和田布下は光氏を、頼みにいたさず先陣いたすか。

修理
左衛　如何にも、先陣いたすでござりませう。(ト兩人平伏なす、市兵衛思入あつて、)

市兵　こりや斯うなうては叶はぬ儀ぢや。いやなに御兩所、拙者は遊軍の儀なれば、御難戰の其時は必ず御加勢いたすでござらう、御安堵あつて先陣を、お心置きなくお勸めなされ。

修理　御厚志の段は忝けなけれど、貴殿を頼みに存じ申さぬ。

市兵　何と。

左衛　入らざる追從仰せられずと、
修理　御自分のお役々、
兩人　お守りなされい。（ト是れにて市兵衛思入あつて、）
市兵　然らばどうなと勝手に召され。（ト憎體にいふ、義清思入あつて、）
義清　次第に街の騷がしく騷ぎ立ちしは敵勢の、間近く來ると覺えたり、和田布下は甲冑着し出陣いたせ。
修理
左衛　委細畏まつてござりまする。
義清　疾く〳〵急げ。
兩人　はツ。（ト兩人早舞にて足早に花道へはひる。光氏思入あつて、）
光氏　御詞返すは恐れあれど、日頃の忠勤今此時、心中の程御賢察下し置かれ、何卒今日の戰爭微臣に先陣仰せ附けらるゝやう、偏に願ひ奉つる。
義清　假令幾度申すとも、今日の先陣相成らぬぞ。
光氏　すりや如何やうに願ひましても、お聞き濟み下されませぬか。
義清　如何ほどに申すとも、いつかな聞かぬぞ、跡に殘つて留守いたせ。

光氏　そこを只管。

義清　え丶諄いわい。

トきつと言ふ、光氏是非なく控へる。此時奥より更科打掛奥方にて出來り、二重下手に住ひ、義清に向ひ、

更科　先程より一間にて、始終の樣子承はりしが、如何なる事にて我が君には、今日に至り光氏を、お供にはお連れなされませぬ、御家來多き其中にも智勇勝れし額岩寺、武田に山本、織田に木下、當家に於ては光氏と、軍法奥義を心得て、是れまで數度の合戰にも遂に後れを取りし事なく、類稀なる剛の者、衆に勝れしゆゑにこそ、日頃よりして理解を說き、君に御異見申すのが、御氣に入らぬか知らねども今日のお供に額岩寺を、お召連れなされぬは、如何なる事でござりまするか憚りながら我が君の、お心得違ひかと存じまする。

義清　軍事に入らぬ女の差出で、我も信濃の一國を領せし身にて何として、女の異見を用ゐようぞ。今日彼れを召連れざるは、深き所存あつての事ぞ。

更科　して其御所存と仰しやるは、如何なる事か私へ、お聞かせなされて下さりませ。

義清　斯かる火急の際に臨み、餘事を申す暇はない、吉兆祝ふ出陣の妨げ、重ねて申すな、相成らぬぞ。

更科　假令お叱りあるとても、衆に勝れし武士を、まざ／＼是れへお殘しあるは、必勝の理を失ふ道理。それゆゑ強いて光氏を、お供にお連れ遊ばすやう、偏に願ひ上げまする。

義淸　如何ほど我に申すとも、叶はぬ趣意があればこそ、殘して置くを何でおのれが。

更科　今日大事の戰爭を、お案じ申すそれゆゑに、斯くまでお勸め申せども、お聞き入れはござりませぬか。

義淸　大事の戰と思へばこそ、此城內へ光氏を殘し置くわえ。

更科　すりや又何で、どういふ譯で。

義淸　女のおのれに論は無益ぢや。

更科　ではござりませうが、此身の願ひを。

義淸　えゝ、聞く耳持たぬわ。（トきつと言ふ、更科是非なく控へる、此時かすめて遠寄せを打込む）

市兵　風のまに／＼吹き送る、武田方の貝鐘太鼓、次第に間近く聞ゆるは、油斷ならざる事どもゆゑ、君には早々御物具御召あつて、御陣觸れ、仰せ出され然るべし。

義淸　おゝ言ふにや及ぶ支度なし、是れより直ぐに出張なさん、兩人出馬の用意いたせ。

兵三 惣八　畏つてござります。（ト義淸立上り、行き掛ける、光氏義淸の裾を捉へ）

光氏　すりや、どうあつても拙者めは。

義清　おゝ、供は叶はぬ。其方は腰拔役の留守居をいたせ。

光氏　それ程までに某を、何ゆゑあつて疎みたまふぞ。

義清　仔細は其身に覺えあらん。

光氏　やあ、此身に覺えある事とは、如何なる仔細か承はりたし。

義清　火急の場合ぢや、申す暇はないわえ。（ト裾を拂ふ。）

光氏　でもござりませうが。（ト又縋るを。）

義清　妨げいたすな。（ト陣扇にて拂ふ。）

光氏　はゝはッ。（ト控へる。）

義清　續け。

皆々　はあゝ。

ト足早に義清先きに市兵衞、兵三郎、惣八軍卒大勢附いて花道へはひる。光氏更科殘り本意なき思入にて、

光氏　如何なる事にて斯くまでに、君の御不興蒙りしか、今日大事の戰場へ、數度お供を願へども、お

聞濟みあらざるは、よく〳〵武運に盡きたる某、老人女子同樣に御本城に相殘り、何安閑と手を組んでお留守居がなりませうや、御臺樣御推量なし下さりませう。

ト愁ひの思入、更科思入あつて、

更科　忠臣無二のそなたゆゑ、さう思やるは尤もながら、どういふ事か我が君の御心が自らにも、一圓合點が行かぬわいなあ。

光氏　察する所佞人共、如何なる事をか我が君へ、讒言なせしに疑ひなし、君の御供叶はぬのみか斯く御疑惑を蒙る上は、死して此身の潔白を、立つるより外思案なし、我が一命を捨つるのは最より易き事ながら、斯く甲州の大軍を引受けての戰爭に、假令雜兵小者なりとも、一人死なば一人だけ味方の缺けとなる事ゆゑ、たゞそれのみが拙者めは、殘念至極にござりまする。

更科　如何にもそなたのいふ通り、佞人あつて我が君へ讒言せしに疑ひなし、日頃に似合はず我が君が、それをお用ゐ遊ばすは、斯かる大事の折なれば御心迷ひしものなるか、何は兎もあれ村上家の柱と頼む額岩寺、今其方が相果てなば所詮勝利は思ひも寄らず、斯かる御不興蒙りて軍のお供が叶はねば、嘸殘念にあらうけれど、わらはに免じ死を止まり、假令お許しあらざるとも、君御大事と聞くならば、其場へ駈附けお救ひ申し、忠義を顯はし讒言の、汚名を何うぞ雪いでくりやれ。

光氏　はゝあ有難き其御諚。身の潔白を立てんとて、故なく一命捨てんとせしは、此光氏が身の過り、仰せの如く死を止まり、よしや御留守居なすとても味方敗北と聞く時は、御臺様の仰せを力に、其場へ馳せ附け我が君の、御馬前に於て潔く討死なすは豫ての覺悟。

更科　それでこそ我が悦び、多年の功も水となり、嘸殘念にあらうなれど、死を止まつて我が君の大事と聞かば救うてくりやれ。

光氏　言ふにや及ぶ其時は、必死を極め敵を防ぎ、君の危急を救ひ奉らん、必ず御安堵遊ばされませう。

更科　返すぐも自らが、力と頼むは其方ばかり、萬事よしなに頼むぞよ。

光氏　只今も申す通り、粉骨碎身仕り、日頃の御恩を報ずる心底。

更科　おゝ、それ聞いて落着いたわいなあ。（ト安堵せし思入）

光氏　拙者は是れよりお櫓にて、戰の樣子を窺はん。左樣ござれば御臺樣。

更科　額岩寺光氏。

光氏　後刻吉左右申し上げるでござりませう。

ト光氏本意なき思入にて花道へはひる。更科跡を見送り思入あつて、

更科　斯かる忠臣光氏を疑ひたまうて出陣の、お供にお連れなされぬは、全く讒者の申す詞をお用ゐあ

りし事ならん。村上家の礎と頼みしものを遠ざけたまふは、國家の亡ぶる時節なるか、味氣ない世の有樣ぢやなあ。（ト歎息の思入）何は兎もあれ弓矢神、正八幡へ供物を供へ、御勝利あるやう祈念なさん。さうぢや〳〵。

ト唄になり、更科奧へはひる。跡調べにて、下手より以前の市兵衛出來り、上下を窺ひ思入あつて、

市兵　かねて山本勘助殿より林三郎右衛門殿への頼み、首尾よく讒言仕果せなば、甲州方にて兩人へ五百貫の高祿を與へんといふ約束ゆゑ、日頃額岩寺が手跡を學び、よく筆法を覺えし某、僞筆を拵へ我が君へ、斯く讒言仕果せしが、おのが才智を鼻に掛け君の仰せある事は、斯うといへば否と答へ、よしや萬事が條理にもせよ、一々御異見申すゆゑ、御心中に光氏を憎みたまふを幸ひに、甲州方へ內通すると謀書せしが首尾よく行き、今日の先陣遠ざけられしは、此上もなき武田の仕合せ、殊には又若輩者の矢代源吾和田布下が先陣なすとも、山本氏が軍略にて、馬場小山田が釆配取り、勢ひ破竹の甲州勢、いかで彼等が及ばうぞ、敗軍なすは瞬くうち、先陣崩るゝ其時は、かねての合圖某が此本城へ火を掛けて、殘りし者は鏖殺し、斯く計略圖に當れば林氏も某も、一足飛びの立身出世、はて悅ばしい事だわえ。それはさうと林氏は、北條まで早馬にて、敵勢の樣子物見に行かれしが、今にも歸城召されし上、此趣きを申し聞けなば、嘸かし悅ばるゝ事であ

らう。(ト此前方より以前の田毎奥より出て立聞きをなす。市兵衛は知らず。)何にもせよ少しも早く、火の手を揚ぐる用意をなさん。

ト市兵衛上手へ行き掛けるを、

田毎　相木様、ちよつとお待ち下さりませ。(ト是れにて市兵衛びつくりなし、)

市兵　誰かと思へば腰元田毎、何用あつて某を。

田毎　お留め申しましたは、容易ならざる一大事、聞き捨て置かれぬそれゆゑに。

市兵　すりや、最前からの様子をば。

田毎　残らず是れにて承はりました。

市兵　何と。

田毎　林様とお前様が申し合せて、武田家へ内通なせしと偽つて、光氏様が業なりと君へ讒言なせし由言はうやうない人でなし、打捨て置かれぬお家の大事、一部始終を少しも早く、我が君様へ申し上げん。(ト向うへ行きかゝるを市兵衛留めて、)

市兵　うか〳〵喋べりし一大事、聞かれし上は此儘に、田毎おのれは生かしちやおかれぬ、観念なせ。

ト身構へなす。

田每　女ながらも武士の娘、おのれ等如き變心なす不忠不義の者共に、やはか闇々討たれうぞ。さあ、汝を生けてはおかれぬ、覺悟しや。（ト長押に掛けたる長刀を取り身構へなす。）

市兵　しやら臭え其一言、見事おのれが身共を切るかよ。

田每　切つて見せう。

市兵　何を小癪な。

ト早舞になり、兩人立廻りあつて左右に別れきつと見得、やはり右の鳴物にて此道具廻ろ。

（辻堂の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中に松の大樹、上手畫心に九尺中足の辻堂、萱葺屋根折廻し本緣附さ、正面に狐格子出這入りあり、上下椎木の張物にて見切り、藪疊みを置き後在體の遠見、下手に石の手水鉢、日覆より松の釣枝、爰に以前の源吾、鎧附太刀大童にて軍兵六人を相手に立廻りの見得、寄せ太鼓にて道具留ろ。と源吾六人を相手によろしく立廻りあつて、トヾ上手へ追込んではひろ。どんちやんばた〳〵になり、花道より以前の義淸甲冑にて陣立て甲州勢六人槍にて取卷き、義淸は太刀にて是れを相手に出來り、花道にてちよつと立廻りあつて舞臺へ來り、

甲一　一際目立つ出立は、名ある武士と覺えたり。

甲六　何者なるか。
六人　名を名乗れ。
義清　汝等如き匹夫下郎に、名乗り聞かせる名は持たぬ、避けて此場を通せばよし、支へ立てする其時は、命がないぞ覺悟せよ。
甲一　名を名乘らずとも緋縅の、鎧を着する上からは、
甲二　慥に汝は敵の大將、
甲三　士卒ならねば其やうに、
甲四　未練な振舞なさずとも、
甲五　其名を名乘つて潔く、
甲五　先非を悔いて、
六人　降參なせ。
義清　やあ穢らはしい降參呼はり、左言ふ汝等一々に、刀の錆と觀念いたせ。
六人　何を小癪な。
ト六人槍にて突いてかゝり、松の立木辻堂を遣ひ、存分立廻りあつて、トゞ皆々に突き立てられ危く

なる、此時ばた／＼になり花道より、以前の光氏好みの鎧附太刀槍を掻い込み、逸散に出來り、此中へ突いてはひり、義清を圍ひ六人を相手に烈しき立廻りあつて、トヾ六人を左右へ追込む、此内義清は後にて太刀を杖に息をつき居る、光氏義清の側へ來り、

光氏　我が君、御無事にござりましたか。

義清　額岩寺光氏なるか、汝が是れへ參らずば、敵勢數多に取圍まれ、既に討死なさん所、今に初めぬ其方が忠勤、過分なるぞ。

光氏　君の御許し蒙らねど、味方敗軍と聞きしゆゑ、たゞ安閑と城内に、手もつかねて居られねば、御不興蒙る合點で、押して出陣いたせしが、折よく此場に參り合せ、君の御危急救ひ奉りしは、未だ武運の盡きざる所、此上もなき身の大慶、推參なせし拙者が罪何卒御許容下さるべし。

トよろしく詫びる。

義清　何とて汝を咎めようぞ、よくぞ是れへ駈附け參つた。今の今まで其方を不忠者と思ひしは、豫て申し合せ置きたる、我が軍法の裏をかゝれ、合詞まで敵勢心得、されば味方と思ひし者皆敵の間者にて、數口の合戰悉く味方敗北となつたるは、皆これ汝が武田家へ内通いたせしゆゑなりと思ひ居りしが此場へ駈附け、我が危急を救ふといひ、面に忠義顯れしは汝が仕業にあらざる事、

只今義清悟り知つたり。

光氏　さるにても先刻は、如何なる事にて某を、疎みたまふと存ぜしが、二心あつて武田家へ内通せしと我が君には、思召しての事なるか、是れと申すも讒者の仕業、君の軍法敵へ漏れ鼬となりし敗北は、林景政相木市兵衛、彼等二人は豫てより、武田方へ心を寄すれば、内通せしに疑ひなし。

義清　それにて思ひ當りしは、飼犬に手を喰はるゝ世の諺に異ならず、常々彼等兩人は、おのれが二心を押隱し、額岩寺光氏は變心なして武田家へ心を寄すると數度の訴へ、既に今日其方より武田へ送る密書なりと、相木が持參の書狀を見れば、正しく汝が手跡ゆゑ、扨は左樣の事なるかと存ぜしゆゑに先刻も、强ひて先陣望みしを、許さゞりしは我が誤り、心得難きは其密書、手跡の似たるは訝し。（ト義清鎧の間より以前の密書を出し光氏に渡す、光氏取つて見て、）

光氏　是れぞ慥に相木が手跡、彼は日頃某の筆意を、學び居るゆゑに、斯くまで似せしものならん、左すれば僞筆は市兵衛が、正しく仕業に相違ござりませぬ。

義清　返すぐも某が、忠臣無二の其方を疑惑なせしは愚ゆゑ、千悔なすとも返らぬこと、此義清が一生の誤り、其我れを見限らず是れまで參つて危急を救ひ、斯くまで忠義を立て通す、汝は家來と思はぬぞ、源家を守る氏の神正八幡の再來と、我は汝を思ふぞよ。

光氏　こは冥加に餘る其仰せ、微臣が無實も只今晴れ、此身に取つて如何ばかりか、大慶至極にござりまする、何は兎もあれ味方のもの斯くまで敗走なす上は、所詮勝利は思ひも寄らず、某これにて殿なせば、君には一先づ引揚げたまひ、時節を待つて旗揚げなし、天下に美名を顯はしたまひ、今日の恥辱をお雪ぎあれ。

義清　假令一旦落ちるとも、再び武田と戰爭なす、味方の勢のあらざれば、村上の家滅亡の時到れりと覺悟なし、此場に於て討死なさん、忠義を思はゞ其方も我と共に討死いたせ。

光氏　元より拙者が一命を、捨つるは易き事なれど、此場に於て我が君が、味方を見限り討死あるは、近頃以て御短慮なり、一先爰を引揚げたまへ。

ト此時花道の揚幕にて遠寄せ、えい／＼おう／＼と聲する、義清心附ききつと見て、

義清　あれ見よ光氏、本城の方に當り、數多の煙り立ち昇るは、正しく敵兵乘り入りて、火を掛けしと覺えたり。

光氏　如何にも、御本丸より二の丸へ掛け、一圓の焰立ち昇るは、早や落城となつたるか。

義清　言ひ甲斐なき味方の者共、時を移さず此やうに、脆くも落城なしたるは、

光氏　如何に時節といひながら、

義清　思へば無念口惜しい。

光氏　我が君樣、

義清　光氏、是非もなき世の、

兩人　有樣ぢやなあ。（ト兩人愁ひの思入）

義清　是れといふのも此義清、かゝる忠臣光氏を疑惑なせし天罰と、思へば我が身を恨むのみ、左はさりながら此儘に雜兵葉武者の手に掛り、見苦しき死を遂げんより潔く生害なさん。介錯頼む駿河守。

光氏　はゝ御尤もなる事ながら、最前も申す如く、一先此場を落ちたまひ民間に御身を潛め、時節を待つて義兵の旗揚げ。

義清　いゝやそれは僻事なり、所詮義清が武運は是れまで、若し生捕りにでも逢ふ時は、恥辱の上の恥辱なるぞ。

光氏　すりや如何やうにお諫め申すも、お聞き入れはござりませぬか。

義清　猶武者と笑はゞ笑へ、身共は覺悟いたして居るわえ。

光氏　あゝ是非もなき事どもぢやなあ。

ト光氏歎息の思入、此時ばた〳〵になり、上手より以前の源吾出來り、兩人を見て

源吾　我が君是れに御座ありしか、口惜しうござります。（トどうと坐す。）

義清　矢代源吾よくぞ無事にて居つたるぞ。

光氏　先手の樣子は如何なるぞ、疾く〳〵是れにて演說いたせ。

源吾　如何にも始終を申し上げん。林相木が敵方へ内通なせし故により、不意に味方の横合より甲州勢五千餘騎、襲ひ來る横槍と前後の敵に味方の苦戰、討死なす者數知れず、味方の士卒は右往左往に逃げ失せたり、最早人數は僅にて所詮敵し難ければ、少しも早く我が君には、此場を落延びたまふべし。

義清　今光氏が勸むれども、落ちて名もなき雜兵の手に掛らんより主從三人、敵を引受け潔く討死なして美名を殘さん。

光氏　其御短慮ゆゑ我が君には、目前敗北なしたるに御心が附きませぬか、叶はぬ戰に長追ひなすは、石を抱いて淵に臨む危き譬へと同じこと、今某が計略を思ひ附きたる事こそあれ、逸る御心落着けて存意の程をお聞き下され。

義清　此期に臨んで何事か、早く我に申し聞けよ。

光氏　直に君には此場より、姿を替へて越後へ落ち、春日山の城主たる上杉謙信殿へお頼みあらば、隣國の誼あるのみか、元より義強き大將なれば必ず引受けたまふべし、越後勢を味方に頼み、再び今日の恥辱をば、お雪ぎあるが肝要なり。

源吾　とはいへ、此儘我が君か、落行きたまはゞ敵勢の、いかでか君を見遁さん。

光氏　それこそは最屈竟、汝が面我が君に似たるを幸ひ此場にて、其方君の甲冑を拜領なして身に着し敵勢來らば我が君の、御名を名乘り討死せよ、さすれば敵の大將を討取つたりと勝鬨舉げ、引揚げんは是れ必定、其間を見合せ我が君には、源吾の鎧を御身に纏ひ、姿を變へて間道を竊に越後へ落延びたまへ。

源吾　誠に是れはよき手段、其昔和州にて、九郎判官義經公の御着長を忠信たまはり、御名を名乘り衆徒を相手に、殿せしと聞き及ぶ、よし忠信に劣るとも某御名をたまはらば、是れにて止まり討死なし、うまく敵を欺くやう、必ず殿仕らん。

光氏　ほゝお、勇ましくも申したり。如何に我が君、何卒源吾へ御鎧下し置かれたまはるべし、恐れ多くは候へども、彼れが鎧を召したまひ、竊に越後の上杉方へ間道傳ひに落ちさせたまへ。

義清　左はさりながら壯年の、源吾に一命捨てさすは、近頃以て殘念至極。

源吾　君の御名を賜はりて、討死なすは武門に取り、此上もなき身の仕合せ、御配慮あるは無益の至り。
義清　然らば汝等兩人が、詞に任せ落延びん。
光氏　すりや、微臣が願ひお聞き濟み下され、一先づ此場を落延びたまふや。
義清　如何にも汝が諫めを用ゐ、源吾が物の具身に纏ひ、隣國越後へ罷り越し上杉殿を味方と頼み、再び今日の恥辱を雪ぎ、甲州勢と一戰なさん。
光氏　ほゝお、勇ましき其御諚、身不肖なる某が申し上げしをお用ゐあつて、今日の恥辱を雪がんと斯かる所へ御心の、附かせられしはいツかないかな、未だ御運の盡きざる所。
源吾　臣等が身に取り如何ばかりか、
光氏　大慶至極に、
兩人　存じまする。(ト兩人悅ばしき體にて辭儀をなす、義清思入あつて、)
義清　かほどまでに我が身の上思ひくれる汝等に、何時の世にかは此恩義、報ずる事のあるべきぞ、便り少ない事どもぢやなあ。(ト愁ひの思入、)
源吾　して伯父上には某と、共に討死したまふか、但しは君の御供なし、越後へ落延びめさるゝか。
光氏　いゝや身共は討死もいたさず、又君の御供も仕つらぬ。

義清　して光氏には、如何いたすぞ。

光氏　某事は恥辱を忍び、武田方へ降參なし、媚び諂ひて信玄が密事を聞出し我君へ、逐一を申し上げ、いで合戰の其時は、武田の後陣に加はつて、既に先陣矢合せに、早及びしと聞くならば、虛を討つて機に臨み、不意に後陣を討つて出で、再び此身に汚名を取るとも、末は美名を世の中へ輝さん我が所存。

義清　すりや其方は恥辱を忍び、武田方へ降參なし、彼の地の樣子を内通なすとか。

光氏　如何にも武田へ降參なし、漆を呑んで敵を覗ふ、故事に倣ひし苦肉の計略。

義清　天晴光氏、左程まで深く巧みし計略の、よも遂げられぬ事あるまじ、死するに勝る忠義なるぞ。

源吾　潔き伯父上の神變苦肉の謀事、承はつて某も、一層勇氣が增してござる、是れにて敵を待受け御名を名乘つて花々しく、一戰なして死を遂げん。

義清　源吾は死して忠義を盡し、又光氏は存へて我に忠義を盡しくれるか、斯かる忠臣持ちながら今日の戰に敗北せしは、皆これ身共が頑愚ゆゑ、許してくれよ二人の者。

光氏　こは勿體なき君の御諚、幾年月を安穩に妻子を養ふのみなるか、

源吾　不束な身に高祿たまはり、榮華に誇りし境涯は、

光氏　滄海よりも猶深き、其御恩に比べなば、

源吾　身は八ツ裂きになるとても、命は少しも惜しからず、

光氏　そこを思へば我が君には、必ず御配慮、

兩人　遊ばしまするな。

義清　それ程までに兩人は、此義清を思ひくれるか、死しても厚意は忘れぬぞよ。

ト義清悲歎の思入、此時どんちやん烈しく聞える、光氏思入あつて、

光氏　次第に近づく武田勢、是れへ來らぬ其先に、君には疾く〳〵源吾が鎧、召替へられて落延びたまへ。

義清　幸ひなる此辻堂、人目を厭へば堂內にて、互ひに鎧を脫ぎ替へん。

光氏　召替へられる其間、身共は是れにて張番なさん。

源吾　左樣なれば我が君樣。

義清　源吾來れ。

ト義清源吾、光氏に會釋なして、堂の內へはひる、光氏上下を窺ひ、物の具を片寄せ、辻堂の緣へ腰を掛け手を拱き居る。どんちやんばた〳〵になり、花道より以前の田每、手疵を負ひ長刀を持ち、軍

兵二人と立廻りながら出來り、直に舞臺へ來る、光氏此體を見て、

光氏　敵勢なるかと思ひしに、汝は腰元田毎なるか。

田毎　さうおつしやるは額岩寺樣。

軍兵　何を。

ト切つて掛るを、光氏は田毎を圍ひちよつと立廻つて軍兵二人を見事に切倒す、此内田毎苦しき思入にてどうとなる、光氏田毎を介抱なし、

光氏　追ひ來る敵は仕留めしぞ、氣を落着けて休息いたせ。

田毎　光氏樣、思ひも寄らぬ御介抱、有難う存じまする。

光氏　して〳〵御臺樣には、何れへ落行きたまひしぞ。

田毎　林相木兩人が敵の武田へ心を寄せ、一味の者を語らひ置き、不意に御城へ火を掛けてどつと揚げたる鯨波の聲、敵か味方か分らねば右往左往に狼狽へ騷ぎ、私ことは御臺樣のお供をなして落延びしが、途中で敵に支へられ遂に御臺樣を見失ひ、御跡慕ひこゝかしこお尋ね申す其うちに、斯かる深手を負ひしゆゑ、所詮存命思ひも寄らず、どうぞ今際に御臺樣と源吾樣に只一目、逢うて死にたうございます。

光氏　幼き折より親々が、許嫁せし其方ゆゑ、逢ひたく思ふは尤も至極、此世の別れにたゞ一目逢はせて遣りたきものなれど、(ト光氏逢はせたらば未練が起らうかといふ思入にて。)そちが尋ぬる矢代源吾は、君の大事に御馬前にて、比類なき働きなし。

田毎　すりや源吾様には比類なき、お働きをなされしとや。(ト嬉しき思入あつて、)若しもお怪我はなかりしか。

光氏　さあ、其源吾は。

田毎　御無事でおいでなされまするか。

光氏　さ、それは。

田毎　但しは手を負ひたまひしか。

光氏　手負所か甥源吾は、はや討死を遂げたるぞ。(トきつと言ふ。)

田毎　えゝゝゝ、(トびつくりなし、)すりや源吾様には、討死をなされしとか、はあゝ。
　ト取詰めしこなしにて、がつくりとなる。光氏びつくりなし、

光氏　すりや、事は切れたるか、ほゝほい。(ト不便の思入、此時辻堂より義清源吾互ひに鎧を着替へ出來り、)

義清　始終の樣子は堂内にて聞いたるゆゑ、是れなる源吾に此世の別れ逢うてやれと申せしかども、足

源吾　手纏ひは斯かる場合の妨げと、對面せざる心の内、武夫の身の切なさは、義清疾しに推察なせしぞ。

は丶有難き君の御意、許嫁とは申せども未だ杯いたさゞるに、既に先刻出陣の折打ち歎き掻き口說き、喚き悲しみ泣き入る聲、耳に殘つてそれのみが、不便の至りにござりまする。(ト愁ひの思入。)

義清　假令婚姻なさずとも、主人たる義清が許せし上は夫婦の固め、杯なせしも同じこと。

光氏　斯くお許しある上は、末期の水を其方より手向けて遣るが千僧の、供養に勝る追善なるぞ。

源吾　然らば御免下され。(ト源吾立つて手水鉢の水を柄杓に汲み取り、田每の死骸を抱起し水を手向け、)これ田每、只今君の御諚をば魂魄あらば承はれ。心迷はず冥土へ行き、我が參るのを待つて居よ、此世からの夫婦なるぞよ。(ト死骸を寢かし合掌なして回向をなす。)

義清　田每が最期を見るに附け、奧更科が再應の我へ異見を聞かずして、か丶る忠臣光氏を疑惑なせしが誤りにて、不覺を取りし今日の仕儀。

光氏　是れと申すも林景政、相木が逆意のなせる業、思へば憎き彼等兩人、今にぞ思ひ知らしてくれん。

源吾　まだ其上に和田布下、共に先陣蒙りしが、いつしか敵に降りし樣子。

義清　斯くまで瓦解なしたるも、國家を治むる某が、皆不德より起りしこと。

光氏　悔んで詮なき事ながら、上田ヶ原の景色も、元見しさまに替らねど、

源吾　變り果てたる君のお姿、園生に植ゑて隱れなき、

義淸　其紅を脫ぎ替へて、身幅も狹き間道を、

光氏　越えて越後へ落ちたまはゞ、

源吾　又來ん春に逢ふことも、

義淸　ありなんものと思へども、

光氏　計り知られぬ人の身は、

源吾　實に邯鄲の夢ならで、

義淸　生れ落つると死するまで、

光氏　盛衰榮枯はある習ひ、

源吾　如何に時運といひながら、

義淸　思へば果敢ない、

三人　身の上ぢやなあ。（ト三人歎息の思入、此時どんちやん烈しく、えい〳〵おうの聲する。）

光氏　敵勢これへ參らぬ先き、君には早く間道より、

義淸　如何にも越後へ落延びて、謙信殿を力と賴み、味方を集めて義兵を揚げん。

源吾　我は此場で御名を名乘り、敵勢引受け花々しく、討死なして、君の殿。

光氏　又某は恥辱を忍び、武田の陣所へ降參なし、後の譽れを顯さん。

源吾　君には益々御安泰にて、上杉殿を味方と頼み、今日の御恥辱をお雪ぎあるを某は、草葉の蔭より拜見なさば、名僧知識の供養より、勝つて成佛仕りまする。（ト愁ひの思入、義淸も泪を拭ひ、）

義淸　そちも無事でと申したけれど、是れ今生の名殘りなるか、可惜若木の武夫を、むざ〳〵討死遂げさするは如何にも殘念至極、よしなき主を持ちしゆゑ、斯かる事に成行きしと、定めて我を恨みつらん。

光氏　こは有難き御諚ながら、源吾は君の御物の具拜領なして御名を名乘り、花々しく討死なすは、古への忠信にをさ〳〵劣らぬ忠勤ゆゑ、此上もなき身の面目、此伯父などは甥源吾が、今日の戰死は實以て、羨しうござります。（ト源吾に向ひ、）源吾そちは嘸本望であらうな。

ト泪を隱し、源吾をいさめる。

源吾　伯父上の仰せの通り、斯かる折なればこそ、斯く緋縅しの鎧を着し、潔く戰死なすは、先立ちたまひし父母へ、冥府へ參り鼻高く自慢話しがいたしたさ、悦び顏を見るやうにて、少しも早く黃泉へ赴きたうござりまする。

光氏　斯くの如く源吾めは、御身代りに相成るを悦び居りますれば、お心置きなく我が君には、片時も早く落延びたまへ。

義清　其雄々しさにいとゞ尙、彼れに不便が彌增して、何うも此場は落ちられぬわ。

光氏　えゝ情ない我が君には、源吾が斯かる忠勤を、無足に召さるゝお心なるか。

義清　左にあらざれど幼少より、朝暮身近く使ひしゆゑ、それを思へば此儘に、何うも見捨てゝ行かれぬわえ。

光氏　えゝ腑甲斐ない我が君樣、猶豫なすうち敵勢が、押寄せ來る其時は、召し替へられし物の具は何の爲になりまするぞ。

義清　さ、それは、

光氏　但し拙者が諫言を、御胡亂に思召すか。

義清　いや、全く以て、

光氏　疾く〳〵此場を落ちさせたまへ。（トきつと言ふ、義清是非なき思入にて、）

義清　然らば最れにて三方へ、心々に立別れん。（ト是れにて光氏落着きしこなし、）

光氏　此上は我が君樣、拙者が吉左右申し上げるを、御心長くお待ち遊ばせ。

義清　そちが便りを相待つぞよ。
光氏　こりや源吾、必ず敵に悟られぬやう、未練な振舞いたすなよ。
源吾　委細承知いたしましてござります。
光氏　左樣ござれば我が君樣。
義清　光氏、源吾。（ト愁ひの思入）
源吾　是れが此世の。（ト前へ出るを、）
光氏　これ。
ト制す、三重模樣の合方にて、義清は陣扇にて顏を隱し、上手へはひる。光氏は源吾に別れを惜しむこなしにて花道へはひる。源吾双方見送り、愁ひの思入あつて氣を替へ、
源吾　最早我が君落延びたまへば、心に掛る雲もなし、此處にて敵を待受け、御名を名乘り潔く討死なして後の世へ、此清春が美名を殘さん、はて心地よき事どもぢやなあ。
ト源吾につたり思入、太刀を拔き水を注ぎかけ身支度をなす、此時どんちやん烈しく下手より小山田兵衞尉、陣立にて槍を持ち先へ立ち、以前の軍卒六人附添出來り、兵衞尉源吾を見て、
兵衞　正しく汝は村上勢の大將ならん、何者なるか名を名乘り、此處にて、

皆々　勝負なせ。（ト兩人立廻りあつて、トヾ源吾の首を打落し、切首を取り上げ、）

兵衛　敵の大將村上左衛門光清が首級、小山田高重討取つたり。勝鬨々々。（ト下手にて、）

大勢　えい〳〵おゝ。

ト是れにて兵衛尉先きに、皆々上手へはひる。花道より以前の更科戰ひ疲れし體にて、槍の折れしを杖になし、よろぼひ〳〵出來り花道にて、

更科　今敵方にて我が君を、討取つたりと呼はりしが、嘘か誠か心得ぬが、味方の者に出逢ひなば、慥に實否も分るであらう、何にもせよかしこにて、暫しの間休らはん、さうぢや〳〵。（ト舞臺へ來り源吾の吹替の死骸に躓き見てびつくり、）やゝこりや、我が君の御遺骸、さては誠であつたるか、淺ましい此お姿、情ない事におなりされしなあ。

ト更科よろしく悔み泣く。爰へ上手より、以前の軍兵四人出來り、此體を見て、

軍兵　この大將の屍に縋り附いて泣き居るは、慥に敵の奥方か、又は手かけに違ひない。

更科　穢らはしき其詞、取るに足らざる軍兵ながら、武田の家來とあるからは、敵の片割れ汝等が、命を取つて味方へ手向けん、さあ尋常に覺悟せよ。（ト立廻つて二人を押へきつとなり、）又もや軍兵葉武者に出逢ひ身の憂き恥を晒さんより此場に於て自害なし、討死ありし我が君の冥土のお供いた

すが操、又もや障りのない内に少しも早う、さうぢや。

ト又立廻つて一人を膝へ引き敷き、一人を切倒し、返す刀を乳の下へ突き込むを道具替りの知らせ、寺鐘にて此道具廻る。

(信玄本陣の場)――本舞臺武田信玄本陣、玄關先の體。陣立の武者一、二、三、四、五、六、七、八の八人居並び、時の太鼓にて道具留る。

一　此虚に乘つて越後路へ攻入りたまふ事ならば、年を重ねず一天下を、握る武田の御運勢。

二　四海に輝く御武徳は、忠臣義臣の御功し、名將の旗下に弱卒なしとの譬の通り、

三　天晴勝れし御家臣の、日に増し殖ゑるも我が君の、御仁徳と申すもの。

四　自然と天下を知しめす是れぞ誠の吉兆なれば、我々共も武藝を勵み、此末武功を顯はす心底。

五　猶此上は殘黨を、嚴しく探索なせとある、只今陣觸あるからは、

六　油斷いたさずそれ〴〵に、手分けをなして警衞なさん。

七　如何にも左樣、世の譬にも申す如く、勝つて兜の緒を締めろと、枕を高くは寐られませぬて。

八　隨分共にぬからぬやう、時を計つて巡檢なし、

一　怪しき者と見たならば、合圖の呼子を吹き立てゝ、
二　取り逃さぬやう捕縛なし、
三　軍目附へ引渡し、糺問あつた其上で、
四　誅戮なして武威を示さん。
五　何れも御油斷めさるゝな。
七人　如何にも、承知してござる。（ト花道より軍兵走り出來り、花道にて、）
軍兵　はツ申し上げます、村上家の降人額岩寺光氏、飯富三郎兵衞殿召連れられましてござります。如何取計らひませうや。
一　降人なれば帶劍を取上げ、
二　定法の通り繩を掛け、
三　此處へ召連れられよと、
四　飯富氏へ、
四人　申さつせえ。
軍兵　心得ましてござります。

ト引返してはひろ、時の太鼓を打込み、正面の襖を左右へ開き、武田信玄陣立好みのこしらへにて、左右へ上下の小姓四人附添ひ出來り、二人は誂への首桶を白木の臺に載せ持ち出來り、二重上手へ置く、眞中へ敷皮を敷き陣床几をすゑ、是れへ信玄よろしく住ふ、平舞臺の八人床几を放れ、何れも平伏なし、

一　今日の戰十分の御勝利、

八人　恐悅至極に存じ奉つる。

信玄　今に始めぬ臣下の軍功、追て恩賞の沙汰に及ぶであらう。

一　こは有難き君の御諚。祝着至極に、

八人　存じ奉つる。（ト合方になり、）

信玄　只今あれにて聞きつるが、村上の家臣額岩寺光氏、當家へ降參なせし由、智勇勝れしものなりと此信玄かねて聞き及び罷り在る、我が旗下に附かんとは悅ばしき事ながら、大器量ある光氏が主人の最期を餘所になし、恥辱を忍び武田家へ降參なすは心得ねど、衆に勝れし武夫の命を絕つも殘念なり、さすれば彼れが望みに任せ臣下となして虛實を探り、まこと本心に相違なくば、一方の役に立つべき者、相應の知行を與へんが、先づそれまでは其儘に、高坂彈正が手へ預け、彼れ

が所存を試し見ん。如何に汝等所存あらば、腹藏なく此信玄へ異見いたせ。

一　何さま君の仰せの如く、最初に降參いたしたる、和田修理大夫布下左衛門、彼等は取るに足らざれども、

二　智勇勝れし額岩寺、繩目の恥辱も厭はずに、

三　鎬を削りし武田家へ、降參なすは心得ず、

四　如何なる計略あらんも知れず、善惡分らぬ其うちは、

五　味方にして味方にあらず、

六　篤と實否を糺すまで、

七　上意の如く氏房殿へ、

八　お預けあるが然るべきかと、

八人　存じ奉つる。

信玄　其英名は聞き知れども、未だ面を知らざれば、如何なる者か降人の額岩寺を是れへ引き出し、必ず心の善惡は面體に顯はるれば、信玄是れにて試し見ん、光氏を是れへ引き出せ。

八　畏まつてござりまする。（ト八前へ出で、向うへ向ひ、）やあ／＼村上の降人額岩寺駿河守光氏、急い

三郎 で是へ引き連れめされ。（ト向うにて、）

軍兵 はあゝ。

ト時の太鼓になり、花道より以前の光氏、鎧下無腰にて繩に掛り、繩取りの軍兵四人附添ひ内二人光氏の太刀馬手差を持ち、跡より飯富三郎兵衞陣立にて附添ひ出來り、花道にて光氏舞臺を見込み、思入あつて舞臺へ來り、下手に住ふ、

三郎 村上の降人額岩寺光氏、召連れましてござりまする。（ト信玄、光氏を見て、）

信玄 すりや其方が、額岩寺光氏なるか。

光氏 はツ。

信玄 今日計らず村上義清戰ひ利あらず討死なし、汝事は信玄が家來にならんと家臣たる飯富が手へ降參なせし趣き、かねて智勇の聞えある其方、主人の戰死を餘所になし、鎬を削りし敵陣へをめをめ繩目の恥辱を受け、降參なすは心得ず、さ、其返答が承はりたい。（ト光氏思入あつて、）

光氏 こは御尤なるお尋ねなれども、君々たらざれば臣々たらずの本文、御賢察下し置れませう。

一 すりや光氏殿には故主たる、村上家を見限つて、

二 武田の御家へ實以て、

三　降參めさる、

皆々　御所存なるか。（ト一挺の入りし誂への合方になり、）

光氏　當時天下に並びなき名將の聞えある武田公、疾くより御旗下に屬したけれど、時至らねば是非なくも徒に月日を過せしが、今日舊主村上義清烏合の衆に取圍まれ、遂に落命ありし上は最早因みも今日限り、かねて某望みたる武田のお家へ降參なしたり、御旗下にお加へ下さらば、此上もなき身の大慶、忝けなく存じ奉つる。（ト光氏思入にていふ。）

信玄　然らば汝二心なく、此晴信が旗下に屬し、家臣となつて末長く忠勤盡す所存なるか。

光氏　仰せまでも候はず、恥を忍んで斯くまでに降參なせし額岩寺、毛頭僞りは申し上げぬ。

信玄　いよ〳〵以て相違ないな。

光氏　弓矢八幡誓ひに立て、決して違背はござりませぬ。

信玄　左程に我を慕ふとあれば、今日より此信玄が家臣となさん。

光氏　すりや、御家臣にお加へ下されますとな。

信玄　如何にも、行末長く予に仕へよ。

光氏　多年の心願成就なし、此上もなき我が喜び。

信玄　知行は追つて沙汰に及ばん。それ、光氏が縛めを解け。

三郎　はッ。（ト光氏の縄を解き、太刀差添を渡す。光氏手をつかへ、）

光氏　返す〴〵も身の冥加、大慶至極に存じ奉つる。（ト信玄に向ひ平伏なし、三郎兵衛に向ひ、）是れと申すも貴殿のお蔭、忝けなう存じまする。（ト辭儀をなし、皆々に向ひ、）斯く御家臣の列に加はる上は、何れもにも今日より、御入懇になし下さるやう、只管願はしう存ずる。

ト皆々へ挨拶をなす、三郎兵衛信玄に向ひ、

三郎　降人額岩寺光氏御家臣の列に加はり、拙者に於ても如何ばかりか、有難き仕合せに存じ奉つる。

信玄　一騎當千の臣下を得、我に於ても滿足なるぞ。

光氏　重ね〴〵御懇の御意、有難き仕合せに存じまする。

信玄　如何に光氏、去んぬる戸倉の合戰に、家臣たる甘利備前、横田備中兩人とも、汝が爲に討たれたり、あはれ其方を生捕つて家來の仇を報ぜんと思ひしが、降人を切る謂れなし、殊に信州第一の武勇勝れし額岩寺、予に於ても甚だ惜しく思ふなり、暫く高坂彈正に預ける間堪忍の二字を守りて青雲の、空に再び美名を揚げよ、降參なせる其ものは、是れまで後陣に使へども、光氏ばかりは先手に使はん、今にも村上の殘兵ども再び是れへ攻め來らば、光氏には我が兵の先手に加はり、

二心なき忠義の程を顯はし見せよ。

光氏　すりや我が君には此光氏を、先手の兵にお加へあつて忠勤勵めと仰せあるか、流石は天下無双の名君天晴なる御賢慮、憚りながら光氏め感服仕つてござりまする。

ト光氏是非なき思入、信玄首桶に思入あつて、

信玄　討死なせし村上が面體、しかと覺えし者なければ、幸ひなるかな光氏に、義清が首目利させよ。

三郎　畏まつてござりまする。（ト件の首桶を白木の臺へ載せし儘、平舞臺眞中へ置く。）

信玄　こりや光氏、義清が首級なるか存ぜし者は其方一人、若し身代りにてはあらざるか、此場に於て目利いたせ。

光氏　すりや義清が首級、某に檢査仰せ附けられまするとな。

信玄　疾く〳〵これにて實檢いたせ。

光氏　はゝはツ。

ト膝行り寄り、平舞臺眞中にて正面を向き、首桶の蓋を取る、内に以前の切首ある事、光氏見て思はず落涙なす思入、

三郎　何故あつて光氏殿には、斯く落涙を。

皆々　召さるゝぞ。（ト光氏涙を拂ひ、）

光氏　勝敗により淺ましき、斯かる姿になられしも、是れ大將の淺智ゆゑ、只一人の心より數千の士卒命を捨てしが歎かはしく、それゆゑ思はず、落涙仕つてござります。

信玄　して其首級は義清が、誠首級が相違ないか。

光氏　はツ。

三郎　但しは又贋首なるか。

光氏　はツ。

三郎　眞僞を定むは、そこ許一人。

一　して此首級は。

八人　誠でござるか。

光氏　さ、それは。

皆々　但しは贋か。

光氏　さあ。

皆々　さあ〳〵〳〵。

信玄　額岩寺光氏、返答如何に。（トきつと詰寄る。）

光氏　はゝはツ。（ト思入あつて氣を替へ、）如何にも誠と申すとも、相違あらざる首級ながら、此光氏が目利なせば、よく似たる首と申すまで、誠なりとは申し難し。

皆々　やあ。（ト此内信玄、光氏に目を附け、）

信玄　流石は智勇勝れし光氏、我が見てさへも義清が首級ならずと思ひしに、誠と言はぬ心の内。

光氏　やあ。（ト信玄の額を見る。）

信玄　はて天晴な、（ト信玄陣扇にて膝を打つ、光氏首桶の蓋をする双方見合つて木の頭、）武士ぢやなあ。

ト信玄は油斷のならぬといふ思入、光氏は辭儀をなす、太撥の時の太鼓にてよろしく、

ひやうし　幕

二幕目

鬼小島住居の場

上杉家御殿の場

同城内上覽の場

〔役名〕――上杉輝虎入道謙信、古鐵買七兵衞實は駒澤七郎忠文、鬼小島彌太郎一忠、石川傳藏信吉、長

尾平八郎久景、大岡常五郎種長、松原逸平近政、本庄彌九郎照秋、安田門兵衞周直、醫者藪野竹庵、村上左衞門尉義清、和田幸兵衞正行。彌太郎女房お谷、同妹お雪、家中女房お光、同お咲等。」

（鬼小島住居の場）――本舞臺三間常足の二重、向う石摺の襖、上手一間塗骨障子屋體、下手の褄三尺の中窓、いつもの同屋根附繰張り扉附の門、表札に鬼小島と記し、此外黒塀にて見切り、總て上杉家中鬼小島住居の體、爰にお雪島田髷振袖好みの裝にて、葛籠より古き模樣物小切れなど出して居る、側にお光、お咲着流し家中女房のこしらへにて、筒差しの煙草入にて煙草を呑み居る、此模樣合方調べにて幕明く。

お光　若しお雪さん、此間から毎日々々お姉えさまとお二人で、お家の始末をなさいますのは、

お咲　此節お屋敷で噂のある、村上樣のお賴みで、いよ／＼戰が始まるといふとり／＼の評判ゆゑ、

お光　それでお荷物を其やうに、

兩人　お片附けなされますか。

お雪　いえ／＼さうではござんせぬが、御存じの通りお兄いさまが、人並勝れてお酒好きゆゑ、内にさへ在らつしやると朝から御酒で用が多く、繼物一つ出來ぬゆゑ、まだ家中が去年のまゝ取り散らかつて居りますから、仕事の相間に方々を片附けるのでござります。

お咲　ほんに此方の彌太郎さまは、御家中一の大酒ゆゑ、あのやうにも呑めるものかと、不斷お噂いたしまする。
お光　常の人なら一銚子か二銚子といふ所を、ちよつとしても二桝召上らねば、呑んだやうでないと、常々仰しやりますのは、
お咲　同じ人間のお腹の内でも、どういふ違ひでござりませう。
お雪　御番の時は斯うやつて家の用も出來ますが、非番の時は朝からして一日お酒を呑み續け、又折惡くさういふ時は、御酒家のお客が入替り立替りしてお出でゆゑ、お兄いさまは幸ひに相手替れど主替らず、日がな一日御酒浸しで、お姉えさまと二人して、實に困り切りまする。
お光　御酒が嫌ひになるといふ、よいお呪禁でもありますなら、お教へ申して上げようもの、實にお察し申しますが、
お咲　御酒を惡くはいふもの丶、彌太郎さまの御器量は、武藝一通りはいふに及ばずお力は人に勝れ、何一つ御不足ないのは、お羨しい事でござりまする。
　　トやはり右の合方にて、奥よりお谷家中女房好みのこしらへにて、風呂敷包みを持ち出來り、
お谷　是れは皆さん、ようお出でなさいました、御挨拶もいたしませぬが、鬼の留守に洗濯とやらで、

連合の下らぬうち片附物をいたして居るので、つい失禮をいたしました。御免なされて下さりませ。

お光　その御挨拶はお互ひのこと、此間からお話しに上りたいと存じますれど、お聞きの通り戰騷ぎにやれ明日は勢揃ひの、明後日は始まるのと、とり〴〵の噂ゆゑ。

お咲　陣羽織の仕立直しや鎧直垂の繕ひで、毎月一六を樂しみに、町のお湯へ參ります其暇さへもない位で、やう〳〵今日は仕上げまして、是れから骨休めをいたしませうと、

お光　お咲さんと連立つて、御無沙汰廻りに、

兩人　參りましたわいな。

お谷　すりや皆さん方はお支度が、最う調ひましてござりますか、それはお羨しい、まだ手前方などでは何一つ支度もなく、是れなる妹と二人して、夫へ度々進めましても、御存じの通り御酒ばかりで、等閑勝ちでござりまする。

お雪　此間もお姉えさまと口を揃へて申し上げれば、それはおぬしの入らざる世話、すは戰場と申せばとて、何の支度に及ばうぞ、今からやきもき氣を揉んで鎧兜を捜さうより、戰に出れば敵方の好きな兜や鎧をば分捕りなしてそれを着れば、おれは素肌で構はぬと、取つても附けぬ挨拶に、つ

い其儘でござりまする。

お咲　それはあなたの仰しやる通り、素肌でよいと仰しやつても御上へどうも濟みますまい、餘計があらば私共よりお貸し申して上げたいが、御重役なら知らぬこと、我々風情で二領といふ鎧を持つて居るものは、只の一人もござりませぬが、籠手が一組餘計があれば、若し御入用なら御遠慮なくお貸し申すでござりませう。

お光　また私共にも臑當が一組明いて居りますから、品にさへお好みなくばそれをお貸し申しませう。

お谷　多く御家中ある中に、ある事ない事打明けて、お話し申すお二人さん、其お詞に甘えまして只今仰せの二品を、お貸しなされて下さりませ。

お咲　さうして鎧や兜の手當は、お間に合ふのでござんすかえ。

お谷　はい、鎧兜は計らずも、よい賣物が出ましたれば、都合いたして其品を、求める積りでござりまする。

お光　さうさへなされぱいつ何時、戰のお觸が出ようとも御安心でござりまする。おゝ戰のお觸といへば、若しわたし共の留守の間に、お觸の來まいものでもない、最うお暇いたしませう。(ト立上る。)

お雪　まあ、よろしいではござりませぬか。

お谷　何から何まで御親切に、

兩人　有難う存じまする。（ト兩人門の外へ出て、）

お光お咲　左樣なればお二人さま、

お谷お雪　何分ともに二品を、

お光お咲　後程お屆け申しませう。（トやはり右の合方にて、お光お咲下手へはひる。お谷跡を見送り、）

お谷　人に人鬼はないもので、多く御家中ある中に、取分け懇意の今のお二人、籠手臑當をお借り申せば跡は昨日賴んでやつた古鐵買が鎧と兜を、持つて來てくれさへすれば、先づ一通りは揃ふといふもの、是れで安心しましたわいの。

お雪　まだ安心の出來ませぬは、二品求める五兩のお金に、何を賣代なさうかと葛籠の內を搜せども、値打のあらぬ古物ばかり、是れが差當つて一つの苦勞。

お谷　是れといふのも彌太郎殿か、好める酒に呑み盡し、僅か五兩の金にさへ、差詰つたる今の身の上。

お雪　酒は百藥の長なりと、世間の人は譬にいへど、

お谷　又呑み過すと裏だとへに、酒よく人を呑むものぢやなあ。

ト合方調べになり、下手より竹庵羽織一本差し、醫者のこしらへにて出來り、門の外より、

竹庵　まだ御主人には、御歸宅はないかな。
お谷　是れは竹庵さま、ようお出でなさいました。
兩人　まあ〳〵お通り下さりませ。
竹庵　なに、疾に御歸宅なされたとか。
お雪　いえ、こちらへお通り遊ばしませ。
竹庵　あゝあれへ通れとおつしやるのか、愚老は又疾うにお歸りと聞き違ひをいたしました、年を取るとそゝツかしくツてなりませぬ。（ト竹庵上手へ通る、お谷下手へ住ひ、お雪茶を出す。）
お谷　して竹庵さまには、何御用で。
竹庵　別に用事といふではないが、彌太郎殿へ愚老から御異見をいたしに參つた。
お谷
お雪　そりや又何ゆゑ。
竹庵　只今御家中の川村どのへ見舞に參つて話しに聞けば、こちの主人の彌太郎殿は好める酒に先祖より讓り受けたる具足まで、皆賣り盡して酒とかへ鎧一領なきとの事、愚老も御親父彌左衞門殿より御懇意にいたせしゆゑ、我が子のやうに思ひしが、此度村上殿のお頼みにて、武田を相手に晴れの戰、其時になり具足がなくば、御前の御供は出來ぬといふ、そこへ心の附ぬといふのは、餘

り業が沸るから、藥箱を病家へ預け、當家へ異見に參つてござる。（ト竹庵疊を叩いていふ。）

お谷　親身も及ばぬあなたの御氣質、どうか夫の戻りますまで、お待ちなされて、あなたより、

兩人　御異見なされて下さりませ。

竹庵　御在宿なら彌太郎殿に、噛附くやうに異見を言はうと、氣を張つて參つた所、お留守と聞いて氣拔けがいたした。

ト誂への合方になり、花道より七兵衞吉原冠り達附、麻裏草履古鐵買のこしらへにて丸い屑屋の籠へ古びたる鎧、兜、秤などを入れ、是れを擔ぎ出來り、花道にて、

七兵　古鎧古兜は入りませぬか、古鐵買ひませう。（ト呼びながら舞臺へ來り、表札を見て、）鬼小島樣といふは、昨日お約束をしたお家だ。（ト門の外へ荷を下し、）へい、御免下さりませ、昨日の古鐵屋でござります。（トお谷七兵衞を見て、）

お谷　おゝお前は昨日の古鐵屋さん、最前から待つて居ました。

七兵　左樣でござりましたか、つい參る道で問屋へ寄つて、話し込んで居りましたので、大きに遲くなりました。

お雪　さあ／＼此方へはひつたがよい。

七兵　左樣なら眞平御免下さりませ。（ト荷を門の傍へ寄せ手拭を取つて內へはひり、下手へ住ふ。）
お谷　昨日そなたに約束した、具足を持つてござつたか。
七兵　へいお約束でございますから、今朝心當りの所へ寄つて、取つて參りましてございまする。
お谷　さういふ事なら、見せてくりやれ。
七兵　へい〳〵畏まりました。（ト荷籠の內より具足を出し、お谷の前へ持つて來り、）是れが則ちお約束の鎧兜でございます。（ト谷お雪具足を見て、）
お谷　昨日の話しと相違して、大層これは汚ない品、縅の絲も方々切れ、兜の錣がこんなにちぎれ、何ほ安値がよいというて、是れはどうも出しにくい。
七兵　縅は少々切れて居りますが、成るたけ直印の折合ふ所を持つて參らうと存じまして、色々と尋ねましたが先づ是れならば、繕ひもきくし、鐵の性がよろしうございますから、それで御覽に入れました。
お雪　して具足の代物は、如何程と申すのぢや。
七兵　へい、鎧兜揃ひまして、昨日申し上げた通り、五兩にいたして置きませう。
竹庵　これ御內室、こなたは具足を買はつしやるのか。

お谷　見苦しくとも一領求め、着せます積りでござります。

竹庵　それはよいお心掛け、假令縅の絲は切れても、鎧兜の形があれば、明日にもお供が出來るといふもの。

お谷　左樣なれば此品でも、見苦しくはござりますまいか。

竹庵　よい共〱、結構でござる、こなたが幾ら張込んで、よい具足を求めた所が、又候直に賣代なし酒にするに違ひない、それには是れは大丈夫、賣らうといつても此品なら、買人のあらう筈はないから、是れと極めるがようござる。

お雪　竹庵さまのお詞に附き、是れとお極め遊ばしませ。

お谷　それでは是れを求めませう。

竹庵　ちと直段が高いやうだが、先づ鎧が二兩二分と踏んで、兜の方が一兩で三兩二分なら負かるだらう。

七兵　どういたしまして、そんな相場はござりませぬ、此節町の噂では御當家から武田家へ御使者が行つて、談判の樣子次第で戰になると、そんな噂をする度に市の相場は氣を持つので、いゝ掘出し物は出ませぬが、其替り下るのは道具類に古着類、これなら幾らも恰好ものがござります。

竹庵　道具や古着は入らないが、具足の代を負けるがよい。
七兵　外品と違ひまして、當節は羽根が生えて飛びますから、實に直印は引けませぬ。
お谷　さういふ事なら五兩でよいが、只今手許に金子がないから、拂ひ物をいたしたいが、そなた引取つてはくれまいか。
七兵　古鐵には限りませぬ、何でも直をよく戴きます。
お谷　それでは爰へ其品を。
お雪　はい〳〵。（ト是れにてお雪古小袖帶櫛笄などを七兵衞の前へ出し、）此四品で幾何になるか、直踏みをしてくりやいの。
七兵　へい〳〵畏りました。（ト懷中より算盤を出し一々代物を當る事あつて、）此品物は當節少しだれて居りますから、精々踏込んで、いゝいゝころつと三兩三分と申したいが、毎度御贔屓になりますから、丁度に戴いて置きませう。
お谷　丁度といやるのは、五兩にとつてくりやるのか。
七兵　いえ何ういたしまして、三兩三分と申したいが、一分奮發で四兩に戴きます。
お雪　四兩というては、まだ一兩兜の代に不足ゆゑ、何ぞ外に拂ふものが。

お谷　というた所が、最う是れ切り、手放す物は外になし、はて扨困つた。

兩人　ものぢやなあ。（ト兩人ぢつとこなし、竹庵思ひ入あつて）

竹庵　これ〳〵古鐵屋、折角こなたも重荷づらしに持つて來た此鎧、拂ひ物の折合はぬので、賣らずに行くのも詰るまいから、愚老が居り合したが幸ひだ、お前も一番奮發して、最うちつと買ふがいい、わしも口を出すからには、一分金を出さうから、それで負けて置くがいゝ。

七兵　思召しは有難うござりますが、外の商人と違ひまして、決して懸直は申しませぬ、何度古鐵ばかりでなく紙屑を買ふ時分から、外の屑屋が參りますと襤褸はみんな選り出して、自分の籠へ押込んで目方の內へは入れませぬが、私におきましては襤褸は別に退けて置いてちやんと目方でお貰ひ申し、漉紙屋へ賣ります位、又下鐵買ひになりましても燒釘の中の針金まで、ちやんと目方で取りますので、お得意さまの評判よく、諸方の御贔屓になりますから直引き懸直は申しませぬか、折角あなたの思召しゆゑ、最う一分引きますから、あなたも最う二分はずんで貰つて四兩三分といたしませう。（ト竹庵びつくりして、）

竹庵　一分でさへも顏づくゆゑ、うにこうるを飛ばした氣で、爰へ出さうと言つたのだ、どうして最う二分出せるものか。

ト此内お谷上手屋體の內より、櫛箱を持ち出し、中より古い鏡を出し思入あつて、

お谷　是れは親の讓りにて、手放し難き品なれど、此場に詰る鎧の代、夫の大事に替へ難ない。

お雪　その鏡を手放さずと、何ぞ外にありませんか。

お谷　何ぞと思へど是れといふ、目星しい品は賣盡し、殘つた物は是ればかり、これ古鐵屋、直踏みなして見てくりやいの。（ト件の鏡を出す、七兵衞受取りながら、）

七兵　旦那が一分お出しなさるから、二分に踏めればいゝのだが、所詮この鏡ぢやあむづかしい。（と手に取りよく〳〵見て、）こりやあ見掛けによらぬ鏡、餘程古物と見えますから、二分にお貰ひ申しませう。

お谷　そんならそれで其具足を、こちへ讓つてくりやるとか。

七兵　よろしうござります、ひどい商賣でござりますが、是れで差上げて置きませう。

竹庵　いよ〳〵直段が折合つたかな、それでは一分も出さずとよいのか。

七兵　いえ、それで四兩三分でござります。

竹庵　はゝあやつぱり一分は助からぬか、どうもそゝッかしくてならぬ。

お谷　是れで今にも御出陣の、御觸があつた其時は、殘らず揃ひし表道具、先づ安心はするものゝ、（ト

お谷鏡を取上げ、)親の形見に貰うたる此鏡をば手放すは、殘り惜しいことなれど、是れも時節で是非がない。(ト鏡の蓋を取りぢつと見て、)「けふのみと見るに淚の十寸鏡、見馴れし影を人に語るな、」(トほろりと愁ひの思入あつて鏡の蓋をなし、)大きに世話であつた。

ト七兵衞の前へ置く、七兵衞思入あつて、

七兵　流石はお武家の御新造さま、鏡は女の魂とお女中方の大事がる、其品までも賣拂ひ鎧兜をお求めなさるは、ても感心なお心掛け、失禮ながら只今のお歌を爰で最う一遍、お聞かせなされて下さりませ。

お谷　問はれて名乘るも烏滸がましいが、「けふのみと見るに淚の十寸鏡、見なれし影を人に語るな、」夫の身持に姉妹が、積る苦勞に此頃は、其よみ歌もてにはさへ。

お雪　足らはぬ字數の暮しゆゑ、遂に淚のます鏡。

お谷　必ず人に此事を、どうぞ言うて、

兩人　下さるな。(ト兩人愁ひのこなし、七兵衞感心せし思入にて、)

七兵　其お歌を承はりましては、假令損がゆきましても、是れはお貰ひ申しますまい。

お谷　え、それでは望みの。

兩人　鎧兜が、

七兵　いえ、鏡の代の二百疋は、お負け申して置きますから、それはお置きなされませ。

竹庵　それではわしの一分の金も、出さずに濟むといふ事か。

七兵　いえ、あなたの一分は貰ひます。

竹庵　ほい、是れはしまつた。

七兵　段々とのお話しを昨日から承はり、旦那樣が御酒好きで、表道具の甲胄まで酒に替へておしまひなされ、御新造さまやお妹御が、衣類調度を賣拂ひ、此甲胄をお求めなさる其お心根がおいとしく、貰ひ涙を溢しました、實は一錢も取りませぬでも只でも上げたうござりますが、私とても其日稼ぎ元手も薄き古鐵買ひ、上げる譯にも行きませぬから、初手のはお貰ひ申しますゆゑ、鏡はどうぞあなたの方へ、お納めなすつて下さりませ。（ト七兵衞鏡を戻す、竹庵感心なし、）

竹庵　成程猛き武夫の心も和らぐ歌の德、僅か五兩の商ひで二分の鏡を取らぬといふは、賣人も賣人買人も買人、人は斯くこそありたきものだ、斯ういふ事は新聞社で、直ぐに雜報へ出すであらう。

お谷　親の形見の鏡ゆゑ、手放しともなかつたが、今日に迫りし此場の仕儀、據なく拂うたもこなたの蔭で手放さず、こんな嬉しい事はない。

お雪　御扶持が渡らば其時に、きつとこなたに返さう程にどうぞそれまで二百疋、わしに貸して置いてくりや。

七兵　いえ其御心配には及びませぬ、失禮ながら其二分は、御進上申します。

お谷　それでは却つて氣の毒ゆゑ、御扶持の渡る其時まで、

兩人　暫く貸してくりやいの。

竹庵　然し折角古鐵屋が志しの二百疋。お受けなさるが先方でも、心が屆くとも申すもの、愚老も爰へ立合つて鐺兒がお手に入れば扱ひました甲斐がある、是れで大きに安心しました。序に川村へ行つて話しをして安心させませう。（ト竹庵立上り門へ出る、）

お谷　色々お心添へ下さりまして、

お雪
お谷　有難う存じまする。

竹庵　いや、近所ゆゑ送るには及びませぬ。

七兵　送らうとも言はないに、成程そゝッかしい旦那だ。

竹庵　古鐵屋どの、小島氏が戻つたら、どうぞよろしく言つて下され。

七兵　ほい、又間違つた。

竹庵　おゝ成程是れは失禮、近日御見舞ひ申す。（ト端唄になり、竹庵足早に花道へはひる。七兵衛見送り、）
七兵　よつぽどそゝツかしい旦那と見えて、とう〳〵終ひまで間違ひどほしだ、はゝゝゝゝ。いや私も最うお暇いたしませう。
お谷　竹庵さまのお忙しないので、いつも大笑ひしますわい。
お雪　今も態々お兄い樣へ、御異見を遊ばすと爰へお出でなされながら、默つてお歸りになりましたもやつぱりそゝツかしいのでござりませう。（ト此内七兵衛小袖櫛笄を風呂敷に包み、）
七兵　そゝツかしいので思ひ出したが、今お歸りの旦那から、一分取るのをすつかり忘れた。
お谷　ほんにさうであつたが、今見る通りのお方ゆゑ、全く忘れておいでと見える。
お雪　誠に氣の毒な事をしましたわいの。（ト七兵衛手を打ち、）
七兵　よろしうござります。とてもの事に最う一分、お負け申して置きませう。
お谷　色々世話になつた上、又候こなたに心配掛けては、どうも心が濟まぬゆゑ、
お雪　其内寄つて下されば、きつと返濟、
兩人　しませうわいの。
七兵　いえ決してそれには及びませせぬ、其替り是れを御緣に、時折お宅へ上りますから、時分時には辨

當のお茶でも振舞つて下さいまし。

お谷　いつ何時でもこちらへ來たら、遠慮なく寄つて下され。

七兵　有難うござります、何分お願ひ申します。（ト古着の包みを籠の中に入れて、）左樣なれば御新造さま又その內に上ります。（ト門の外へ出る、內の兩人思入あつて、）

お谷　何から何まで親切に惠んでくれし古鐵屋どの、物ごしといひ取りまはし、若しや由緒ある。

七兵　え。

お谷　いえ、何もお構ひ申しませぬ。

七兵　どういたしまして、大きに有難うござります。（ト荷を擔ぎ花道へ行き思入あつて、）山家に名士泥中に蓮のあるは爰の事、貧に迫りし其中で夫を思ふ貞節に、衣類を拂ひ、甲冑の、用意をいたす妻が心根、其彌太郎は知らねども好める酒に放蕩懶惰、なれどもすはといふ時は、力量勝れし腕とやら、是れといふも當城の上杉殿の政事がよいゆゑ、こりやうつかりと甲州でも、（ト思はず舞臺を振返り、兩人と顏見合せびつくりなして氣を替へ、）古鐵買ひませう。

ト合方になり、七兵衞呼びながら花道へはひる、兩人具足を取上げ、

お谷　今日は如何なる吉日か、日頃よりして心掛けし、鎧兜が手に入るも、よい商人の皆お陰、

お雪　是れといふのもお姉えさまの、お心立てが直なるゆゑ、神々さまのお助けにて、
お谷　ちぎれし鎧は古くとも、淸き心を姿見に、うつして晴れの戰場は、
お雪　忠義も厚き鉢がねの、結ぶ兜の忍びの緖、
お谷　籠手臑當は味方より、かりの浮世と御馬前に、
お雪　命惜しまぬ働きも、襖に張りし石摺の、
お谷　堅き心の智仁勇、
お雪　其忠臣の名を擧げる、
お谷　功名手柄は、
お雪　戰のお達し、
お谷　少しも早う、
兩人　聞きたいものぢやなあ。（ト兩人よろしく思入、此時、時の太鼓を打込む、兩人聞耳立てゝ）
お谷　ありや御城内の、櫓の太鼓、
お雪　折も折とて戰場の、
お谷　手柄話しの其中へ、

お雪　よい辻占のあの太鼓、
お谷　ても幸先きのよき。（トお谷は兜、お雪は鎧を持つて立上るを道具替りの知せ、）
兩人　事ぢやなア。（ト兩人嬉しき思入、合方にて此道具廻る。）

（上杉館の場）――本舞臺一面の平舞臺。向う銀地へ荒波を畫きし襖、上下同じく銀襖の出這入り、日覆より黑塗りの襷欄間を下し、舞臺一面高麗緣の薄緣を敷詰め、總て越後春日山上杉館の體、爰に石川傳藏、長尾平八郎、大岡彌五郎、本庄彌九郎、安田門兵衞、杉原逸平、何れも袴一本ざしにて住ひ、此見得調べにて道具留る。

彌九　今朝上より我々へ、
門兵　御達しありし趣きは、
逸平　如何の次第で、
三人　ござりまする。
傳藏　御達しありしは外ならず、豫て當家に匿ひある信州葛尾の城主、村上左衞門義淸殿、我が君樣へお賴みにて、いよ〳〵此度大軍を千曲川まで押出し、先づ其處に備へを立て、

平八　軍中より人選なし、甲州武田晴信方へ當家の使者が參つた上、返答によつて一戰に及ぶ、我が君樣の思召し、

常五　なか／＼以て此使者は、餘程奮發いたさねば、所詮和議にはなりますまい。

傳藏　若し又示談行き屆かず、いよ／＼合戰ある時は、先年再度檢査のありし五尺以上の兵士を、先手の隊に繰出して、味方の勇氣を顯はしくれん。

平八　それゆゑ家中一般へ、先づ甲冑はいふに及ばず、武器の用意をいたすやう、

常五　先刻上より、

傳平
常五　布告でござる。（ト是れにて彌九郎等三人思入。）

彌九　それで樣子が分りました。先刻松のお廊下で、鬼小島彌太郎殿が、各々方に傳言には、今日の御番引けに同役の者集會なし。

門兵　申さば出陣の前祝ひ佳肴の手當をいたす程に、各々方は不參なく彌太郎殿の御宅まで御出張下さるやう。

逸平　其節上酒を二升づゝ、御持參なされいとの仰せでござる。

傳藏　なに、上酒を二升づゝ持參いたせと仰せられしか。

平八　大酒と名代の鬼小島、酒呑童子同樣な守りをいたすは甚だ難儀。
常五　然し缺席いたしなば、家中で名代の捻ぢ上戸、
彌九　跡にてくだを卷れるが、誠に以て迷惑ゆゑ、
門兵　各々方も二升づゝ、散財いたして出張なし、
逸平　佳肴と申すは何を喰はすか、
傳藏　前祝ひに、
六人　同伴いたさう。（ト爰へ下手襖を明け、以前の竹庵出來り。）
竹庵　何れも方お靜になされませ、只今我が君御入りでござる。
傳藏　なに我が君の、
六人　御入りとな。
ト皆々左右へ別れ平伏なす、時計の音になり、下手より近習兩人袴、脇息、刀掛を持ち出來り、よき所へ直す、此時正面の襖を左右へ開き、謙信好みの拵へ子役の小姓兩人太刀と短册箱を持ち附添ひ出來り、謙信よき所へ住ふ。
傳藏　我が君樣には此處へ、

平八　俄の御入りは如何なる儀か、
常五　一綜お伺ひ、
六人　申し上げ奉つる。（ト謙信皆々へ思入あつて、）
謙信　予が此處へ參りしは、先刻申し渡せし通り、村上氏の賴みに依り、いよ〳〵信州千曲川まで出張なして武田家へ、舊村上家の領地を渡すか、但し素直に渡さゞるか、上使を以てそれを問ひ、返答に依つては其場より一戰に及び、村上の領地をこなたへ乘ッ取つて、義淸殿に渡す所存、各々承知いたせしか。
傳藏　御諚の趣き一同に、
平八　委細畏つて、
六人　ござりまする。
謙信　只今是れにて村上氏に、密談いたす儀もあれば、暫く此座を退出いたせ。
平八　左樣ござらば仰せに任せ、
逸平　退出いたすで、
六人　ござりまする。（ト六人辭儀をなし、下手へはひる。）

謙信　こりや小姓ども、村上氏を此處へお作ひ申せ。
小姓　はツ。（ト小姓兩人下手襖の內へはひろ、謙信四邊へ思入あつて）
謙信　竹庵近う。
竹庵　はツ。（ト竹庵下手に平伏する。）
謙信　先刻其方話せしには、鬼小島彌太郎が妻でありしと申したな。
竹庵　はッ、御意にござりまする。（ト謙心思入あつて、）
謙信　夫が具足を求めんと、親の形見の鏡まで、賣代なさんといたせしは、女に稀な心立て、はて感心な事ぢやなあ。
竹庵　それに引替へ彌太郎殿、日夜大酒に性根を亂し、妻が苦勞も白川夜船、水に流して高鼾、實に驚き入りまする。
謙信　おのれが衆に勝れたる力を賴みに有るまじき、所行をいたす鬼小島、折がなあらば懲らしてくれん。
竹庵　實に酒さへ呑みませぬと、及ぶ者なき劍術力量、誠に玉に疵と申すは、彌太郎殿でござりませう。
謙信　猶も此後家臣の者に、惡しき所行の事あらば、早速に知らせくれよ。

竹庵　はッ、畏つてござりまする。

謙信　其方も退出いたせ。

竹庵　はッ。（ト竹庵辭儀をなし下手へはひる、謙信有合ふ短册箱より短册を出し）

謙信　竹庵よりの話しにて、認め置きし彌太郎の妻が一首の此よみ歌「けふのみと見るに淚の十寸鏡、見なれし影を人に語るな、」天晴貞女の鑑なる夫を思ふ苦心の程、是れも誰が爲數年來與へし家祿の舊恩を、報ぜん爲の志し、はて女子には稀な詠歌ぢやなあ。

ト短册を見て感心の思入、此時下手の襖を明け義清袴一本差し、以前の小姓刀を持ち附添ひ出來り下手へ住ふ、謙信は褥を下りる、小姓辭儀をなし下手へはひる、義清思入あつて、

義清　こは上杉公には、是れに御出でなされしか。

謙信　ちとそこ許に、御密談申上げ度き儀がござつて、是れへお迎へ申してござる。

義清　某こともそこ許へ、御禮申上度く存じ居つたる其處。

謙信　何は兎もあれ、お進みなされい。

義清　必ずお構ひ下さるな。（ト誂への合方になり、義清進み出で、）扨今般はそこ許へ、餘儀なき事件を賴み入りしが、早速お聞濟にて甲州武田晴信方へ、使者をお立て下さる段、義清身に取り此上の悦

びや候はん。

謙信　晴信なり某なり斯く隣國を領し居れば、互ひに盡力いたすのが武士の誼と申すもの　然るに晴信我意を揮ひ貴殿と一戰いたせしが、勝負は時の運にして假令名將勇士たりとも、和漢に例往々あること、なれども武田が鋒先にて隣國までを奪ひしは、信義を知らぬ憎き振舞　お頼みなくとも日頃より一戰なさんと思ふ折柄、よき幸先の貴殿の仰せ、日頃自讃の大言ながら、甲州一國位にて何程の事あらんや、領地を素直に渡せばよし、若しも彼れが否むに於ては我が北越の武勇をば、天下の諸侯へ知らする所存、必ず共に御安堵召され。

義清　武田に引替へ隣國の誼も深き上杉殿、我敗軍の其時より、心はいたく勞すれども、及び難きは甲州勢、如何はせんと存ぜし所、計らず貴殿の御助力にて、盲龜の浮木に逢ひし如く、一戰なしても我が領地、御取り返し下されんとは、斯く亂世に比類なき、智仁兼備の思召し、近頃感服仕つる。

謙信　左までの仰せ面目なし、總じて武道の極意と申すは、弱きを助け強きを挫き、今目前の利を得ずとも、始終の勝利を肝要と、先づ千曲川まで押出し、萬一使者の返答の屆かざる其時は、是非もなき事なれど、若し戰はずして舊城を素直に渡さば是れ重疊。

義清　返す〴〵も深き御所存、いつの世にかは此御恩、何をか以て謝し申さん、只此上の御禮には一旦奪ひ取られたる、舊領再び手に入らば、信州半國そこ許へ、御禮の印に進上いたさん。

ト謙信思入あつて、

謙信　其お志し忝けなけれど、そこ許左樣な御所存なら、お頼みの儀、改めて謙信お斷り申しまする。

トきつと言ふ、義清じり〳〵と詰寄り、

義清　こは何ゆゑに上杉殿には、一旦承引ありたる儀を、再び破談召さるとは。

謙信　某所存に相違いたす。

義清　何と言はるゝ。（ト合方替つて兩人きつと思入）

謙信　上田ヶ原の一戰に運拙くして甲州へ、領地を奪はれ其場より、此越後へ落られしをお氣の毒に思ふがゆゑ、二言と申さずお頼みを承引なして既に今日、出馬の觸を出せしも、義を見てせざるは勇みなしと古語を守る此謙信、然るにそこ許舊領の信州半國此方へ謝儀に贈らん志し、聊か我が意に違ひしゆゑ、此儀お斷り申しまする。

義清　そりや半國を贈らんと、申せしゆゑにお斷りとな。

謙信　如何にも信州半國を、欲しさに上杉、村上の戰を買ひしと言はれん事、瑕瑾ゆゑに違約いたす。

義清　只某は隣國の誼を思ひお賴みを承引なせしも日本の義といふ文字を捨てざる所存、領地が欲しくば晴信の前に貴殿と一戰なし、信州一國奪ひ申す。（トきつと言ふ、義清思入あつて、）

義清　貴殿の恩義に報ぜん爲、我が淺智なる心より、信州半國贈らんと愚かなる事を申せしは、重々此身の粗忽、平に御宥免下されい。（トよろしく詫びる、謙信思入あつて、）

謙信　謝禮を我に下さらずば、如何にも甲斐と一戰なし、例へば時の不運に會し此越後を奪はるゝとも義に依つて何厭はん。

義清　驚き入つたる貴殿の御所存、今日本に威を爭ふ凡そ廿八將の内に勝れし御心底、かゝる賢者が又一人六十餘州にござらうか、窮鳥懷に入る時は獵師も是れを取らずと、敗走なせし某を斯くまで憐み下さる段、貴殿の義心に義清も、袖に淚を浸してござる。

ト義清俯向きぢつと思入、謙信も愁ひのこなしにて、

謙信　心得難きは御家臣に、名ある勇士もありながら、甲州勢の鋒先きに、何ゆゑあつて落城ありしぞ。

義清　語るも無念の事ながら、上田ケ原の一戰に敗走なせし大略を、只今此場でお聞き下され。（ト誂への合方になり、義清思入あつて、）申さずともの事ながら、天正十六年八月廿四日の辰の刻に味方は報國盡忠の志を頭にいたゞき、比類なき戰ひにあぐねさせたる甲州勢、その虛に附入り駿足に

一鞭當てゝ敵陣へ乘込んだる其處、あはよく武田が旗下へ切入つて戰ひしが、我が臣林三郎左衛門相木市兵衛兩人がかねて敵へ心を寄せ、反間苦肉の計策を廻らし、敵に內通いたせしゆゑ何かは以て堪るべき、忽ち前後を取圍まれ、賴みに思ふ額岩寺は降參なして居り合さず、只一騎にて太刀引提げ、おのれ晴信遁さじと、十死一生を極めし所へ哀れ乘馬の平首を横合より貫かれ、馬よりどつとおちこちの隙を窺ひ晴信は、其場を去つて行方知れず。

謙信　むゝ、して又御身が恩顧の臣、器量勝れし額岩寺も、卑怯未練に死を延はり、何故武田へ降伏せしぞ。

義清　それぞ彼の地の樣子をば探索なして某へ、告げ知らさん爲にして、誠に降參なせしにあらず、なれども時の至らざるは林が佞辯を誠と思ひ、忠臣額岩寺が再三願ひし先陣を、許さゞりしが我が誤り、林相木の二股武士に策をかゝれて敵し難く、只一戰に敗走なし矢竹に逸りし弓弦も切れ、割腹なして討死と覺悟を極めし其折に額岩寺走り來り、我を助けて其場を落し、甥源吾を身代りに觀音堂にて討死させ、惜しからざりし一命を生延はりし今日まで、片時無念を忘れざる心の內を上杉公、御賢察なし下されい。（ト義清無念の思入にて言ふ。）

謙信　御尤なるお歎きながら千悔なすとも返らぬ繰言、然し天理に從はざる戰爭ならば兎も角も、道理

村上氏

に叶ひし一戦ゆゑ、貴殿の恥辱は謙信が、必ず雪ぐ所存なるが、（ト有合ふ陣扇を取つて、）先づ是れを見られよ。（トさつと開いて出す、義清不審の思入にて、）

義清　なに、此陣扇を見られよとは。（ト肥前節模様の合方になり、謙信きつと思入、）

謙信　先づ陣扇は戦場にて味方を指揮する采に等しく、表に書きし日の丸は烏滸がましけれど越後勢、又片面の銀の丸は貴殿の舊領更科の、田毎の月を是れに表す。（ト義清扇面をぢつと見て、）

義清　むゝ面白き其譬、太陽東に出づる時は、月魄光りを失ふといへども、再び闇夜に光りを顯す。

謙信　此理を以て貴殿と某、天地日月合體なし、只一心の要を的に、甲州勢の親骨を、取挫がんな手裏にあり。

義清　ても勇ましき其仰せ、（ト思入あつて、）然し信濃の村上も、雪に凋みし冬木立。

謙信　其舊領の田毎なる、月に覆ひし叢雲も、

義清　さつと一吹き秋風に、

謙信　晴れて輝く夏日影、

義清　其時こそは會稽の、

謙信　花咲く春を、（ト義清と顔見合せ陣扇を構へるを道具替りの知せ、）お待ちなされい。

ト此見得太鼓入の唄にて道具廻る。

（元の鬼小島内の場）――本舞臺元の鬼小島住居の道具、上手に以前の傳藏、平八郎 常五郎、彌九郎門兵衞・逸平、銘々二升樽を前へ置き、下手にお谷住ひ、お雪茶を出して居る、此見得合方にて道具留る。

傳藏　未だ御主人彌太郎殿には、

六人　御歸宅はござらぬかな。

お谷　先刻御番引けて歸宅いたし、皆樣方がお出での前に、御酒の肴を求めて參ると、何れとも申さずに、直ぐに出ましてござりまする。

傳藏　實は先刻御詰所にて、御約定をいたせしゆゑ、御番引けを待兼ねまして、

平八　互ひに好む御酒ゆゑに、取るものも取り敢ず、各々連立ち罷り出ました。

常五　來る道々も牛肉か、鮪の土手でも求めようと、心配はいたしたが、

彌九　先刻主人の仰せには、酒さへ持參いたしなば、佳肴はこちらに趣向があると、

門兵　仰せに從ひ各々が、一人前に二升づゝ上酒を持參いたしてござる。

逸平　何ぼ大酒の彌太郎殿でも、一斗二升ござつたら、
傳藏　今日は酩酊、
六人　なさるでござらう。
お谷　それは何よりのお土産にて、今にも戻つて參りましたら、嘸悦ぶ事でござりませう。
お雪　然しこんなに上つたら、いつものやうに正體なく、御上の御用が勤りますまい。
傳藏　いや左樣に御心配遊ばすな、手前達も酒家なれば、御主人ばかりに上げはいたさぬ。
平八　手前達も御一緒に、お持せの御相伴を、
六人　いたす心得。
お谷　どうぞ左樣遊ばして、餘り深くたべぬやう、
お雪　お助けなされて、
兩人　下さりませ。

トやはり合方にて花道より彌太郎、袴大小中拔き草履にて鐵砲の先きへ雁と鴨を繩にて結び附け、是れをかつぎ出來り、花道に留り、

彌太　今日朋友と約定せし、出陣の前祝ひに、宅で酒宴を催す積り、最う打揃うて見えたか知らぬ。（ト

舞臺へ來り、）今戻つたぞ。
お谷　おゝお歸りでござりますか、先刻から皆さんが、お待兼ねでござりました。（ト彌太郎内へはひり、）
彌太　是れは／＼何れもには、約定違へずようこそ御入來、嘸お待兼ねでござつたらう、甚だ失敬御容赦下され。（ト六人の眞中へ住ふ。）
傳藏　お招きゆゑに先刻より、申し合して出張なし、是れから貴殿と我々共、出陣いたす前祝ひ、酒で一戰いたす心得。
平八　大江山へ賴光が、鬼神退治に行く積りで、酒呑童子の貴公を醉はすか、但しはこつちが先へ醉ふか。
常五　今日は各々奮發して、酒の勉强いたす所存。
彌九　總隊進んで先刻より、
門兵　酒隊長の御歸陣を、
逸平　打揃うて、
六人　待ち受け申した。
彌太　いや、それは近頃恐縮いたす。然し先刻お話し申した、土產は御持參めされたらうな。

彌九　如何にも貴公の仰せの通り、一人前に二升づゝ、

門兵　上酒を持參、

六人　いたしてござる。（ト彌太郎の前へ樽を並べる、彌太郎樽を見て悦び、）

彌太　然らば先刻申せし通り、名々二升づゝ下されしか、工度六樽ござるから一斗二升、先づしつかり呑めますな。

傳藏　してお話の珍味といふのは、

平八　何を御馳走、

六人　下さるか。

彌太　珍味と申すは則ち是れに。（ト鐵砲のまゝ雁と鴨を皆々の前に出し、）今打ちたての無鹽の雁鴨、燒鳥にして何れもへ、御馳走いたす心得でござる。

平八　それは何より忝けない、斯樣な珍味のある所へ牛や軍鷄を持參したら、とんだ恥辱を取る所。

常六　一刻も早く燒鳥の御馳走に、

六人　あづかりたい。

彌太　これ雪も谷も、早く毛を引き料理方してくりやれ。

お谷
お雪　はい、畏りましてござりまする。
彌太　先づ三番叟に有合せの、加賀の鹽鰯と柚べしいを切つて、早く一杯附けてくりやれ。
お谷
お雪　はい／＼。（ト　お谷お雪酒肴の支度する。）
彌九　いや、流石は御酒家だけあつて、のつけの肴が鹽鰯に柚べしと來ては又格別。
門兵　一猪口氣附けに戴くうち、今御持參の燒鳥で、きこし召したら又一倍。
逸平　いや、話しのうちからぐび／＼いたす。
傳藏　燒鳥といへば彌太郎殿、其雁鴨は何れにて、お求めに相成りました。
彌太　いや、求めはいたさぬ、今鐵砲で打つて參つた。
平八　此近邊に雁鴨の、下りる場所はござらぬが、
常五　していづくにてお打ちなされた。
彌太　御本城のお濠の中に、下りて居る雁鴨を、只今　某　打つて參つた。
傳藏　なに、御本城のお濠に居る、
平八　鳥を貴殿は、
六人　打たれしとか。

彌太　如何にも、左樣でござる。

六人　えゝゝゝ。(ト皆々びつくりする、お谷彌太郎の側へ行き、)

お谷　これ彌太郎殿、まだ御酒も上らぬ先きから、そんな戲言を仰しやらずと、何れでお求めなされたか、是れで皆さんへおつしやりませ。

彌太　いや戲言でない、誠の事だ、早く毛を引き料理つてくりやれ。さ、燗が附いたら是れへ出しやれ。

(ト お雪廣蓋へ杯洗德利を載せ持つて來る、お谷は呆れしこなし、) 先づ毒味に一杯つぎやれ。

ト有合ふ茶碗を出す、お雪酌をする、此内六人顏見合せ思入あつて彌太郎の左右より詰寄り、

傳藏　これ彌太郎殿、貴殿はいよ〳〵御濠の鳥を、

平八　鐵砲にて、

六人　打たれしか。

彌太　これは諄いものゝ聞きやう、只今打つたばかりゆゑ、極く取りたての雁と鴨、直に料理つて差上げますが。

傳藏　いやさ、貴殿は御制禁を御存じないのか、豫てお濠の雁鴨は、要害の一つにて、打ち取る事は相成らぬ。

平八　もし制禁を犯すものは、重き咎めの御規則なる事、定めし御存じでござらうに、それを自身に打つて濟まうか。

常五　是れが百姓町人なら、申譯も相立たうが、武士たる者が御制禁を、存ぜぬとは、

六人　申されまい。

トきつと言ふ、此内彌太郎手酌にて茶碗で酒を呑む、お谷お雪は氣を揉むこなし、

彌太　御制禁の趣き心得居らぬにはあらざれども、みす〳〵喰へる雁や鴨を、無駄に置くのが惜しいゆゑ、それで拙者が打ちましたが、もし此事が御耳に入り、お咎めのあつた其時は、速かに申し開きの仕つる、各々心配召さるゝな。先づそれよりは此處で、一杯あがるが上分別。（ト徳利を振つて見て、）毒味をいたす積りであつたが、何時か徳利がお替り目、燗をいたすも面倒ゆゑ、冷で一つ召し上られませう。（ト茶碗を彌九郎へさす。）

彌九　いや御酒所ではござらぬわい、好事必ず門を出でず、惡事千里を走るの譬へ、今にもお咎めあるは必定、

門兵　爰に長居をいたす時は、各々方まで掛り合、

逸平　ちつとも早く此處を、歸宅いたすがよろしうござる。

彌太　折角御馳走いたさうと、打つて參つた此鳥を、喰はぬといふは如何でござる。
傳藏　どうして／＼其鳥を、一箸なりとも喰つた日には、言はずとて我々も貴殿と同罪。
平八　匂ひを嗅ぐのも、
三人　いやでござる。（ト お谷お雪件の鳥を持ち來り、）
お谷　あのやうに皆樣の仰しやつて下さるのも、みんなあなたのお爲ゆゑ、御酒の上なら仕方もないが、まだ今朝から一滴も、呑まぬに生醉同樣な、こんな事をなさるといふは、あなたは氣でも違うたか。
お雪　まだ毛を引かねば少しも早く、御濠へ逃した事ならば、跡で咎めもござんすまいから、何うぞ是れから此鳥を、
お谷　お逃しなされて下さりませ。（ト 彌太郎は樽より茶碗へ移し、冷で呑みながら、）
彌太　いや、手前達は何れもと、同じやうに心配するが、打ち殺して參つたものを、濠へ逃して何といたさう、手前達では埒が明かぬ。どれおれが拵へてやらう。
ト 鳥を引つたくり毛を引かうとするをお谷留めて、
お谷　いえ／＼何と言はしやんしても、是ればつかりは拵へさせぬ。

彌太　殺してしまつた上からは、拵へようが拵へまいが此身の科は同じことだ、どの道規則の律に逢ふなら、やつぱり喰ふのが、（ト鳥を取つて、）德用だ。

ト酒を呑みながら鳥を拵へる、傳藏六人呆れし思入にて、

傳藏　かう無鐵砲の我強い所に、長居をいたさば是れから先き、どんな無法を言はうも知れぬ。

平八　今日は折角休暇ゆゑ、藝妓幇間の相手はなくとも、呑み明かさうと存じたも、馳走の鳥でちやちやむちやく。

常五　然し參つて一杯も、呑み始めない其先きに、

彌九　斯かる椿事の出來せしは、誠に以て殘念ゆゑ、

門兵　是れへ土產に持參した、二升樽を持つて歸り、

逸平　大闕氏の御宅にて目出度く一杯、

六人　汲み交さう。

ト皆々樽を持つて立上るを、彌太郎酒に醉つたる思入にて、此中へ割つてはひり、兩人の裾を捉へ、

彌太　是れはしたり各々方、其酒を如何召さるゝ。

平八　はて、知れたこと、土產の酒は持つて歸り、

逸平　我々共が、
六人　開きますのだ。
彌太　土產に持つて來たものを、提げて歸るといふ事が人附合ひにござらうか。
平八　でも、當家にて、
六人　呑まれぬゆゑ。
彌太　なぜ呑まれませぬな、無鹽の鳥まで馳走なすに、呑まぬと申すはそつちの勝手、貰つた酒は返されぬ。
六人　でも一滴も呑まざれば、
彌太　拙者は呑むなと申さぬから、いざ燒鳥で召しあがれ。
傳藏　いや、其燒鳥は、
六人　眞平御免だ。
彌太　そんなら酒は置いてござるか。
六人　それぢやと申して、
彌太　然らば是れにて召しあがれ。

六人　さあそれは、

彌太　さあ、

七人　さあ〳〵。

彌太　達て此酒持つて歸らば、片ツ端から捻り殺すぞ。（トきつと言ふ、是れにて皆々樽を置いて門の外へ逃出す、彌太郎皆々を見て、）など〻脅しは申すもの〻、やつぱり酒が呑みたいゆゑ、樽はこつちへ貰ひ德、何れも勝手にお歸りなされい。

ト頻りに茶碗で呑み居る、お谷お雪氣の毒なる思入、皆々門の外にて、

傳藏　酒は二升損をしても、茲にうか〳〵長居して、燒鳥よりもお咎めを、喰はぬ内が增しでござる。

平八　それでも、まる〳〵、

五人　あの酒を。（ト五人内へはひらうとするを、）

彌太　置いて行くことは、出來ませぬか。（ト傳藏樽へ指をさし、）

傳藏　いえ一斗二、升、（一統に承。）

六人　ち（知）でござる。（ト六人花道へ行く。）

傳藏　酒呑童子を退治る氣で、

平八　苗字に附いた鬼小島の、
常五　角を酒にて拉がんと、
彌九　思つた策も燒鳥と、
門兵　酒の匂ひと勢ひで、
逸平　呑まぬうちから、
六人　滿腹いたした。
傳藏　どれ運動を、
皆々　いたさうか。（ト合方にて六人花道へはひる、お谷お雪は跡を見送り、）
お谷　折角おいでの方々へ失禮申すのみならず、御酒まで置いて行けなど〻、無法無體の今のお詞、
お雪　お氣の毒でならぬわいな。
彌太　臆病未練の腰拔武士、おれが脅しに捻り殺すと、言つたばかりで一斗二升、殘して逃げ出すへろへろ侍、思ひ掛けなく土産の酒を、今日はそつくり呑めるわえ。
お谷　今の衆が腹立紛れ、お濠の鳥を打つた事を、訴へるに違ひないゆゑ、
お雪　少しも早くこつちから、お訴へにお出で、

兩人　なされませいな。

彌太　なに自訴するに及ぶものか、若し上より咎めを申さば、立派に身共が言譯いたす、それより早く鳥を拵へ酒の肴にしてくりやれ。

お谷　いえ〳〵それでは濟まぬゆゑ、

お雪　直ぐ訴へて下さりませ。

彌太　おのれは亭主の申す事を、妻の身として用ゐぬか。

お谷　假令何と言はしやんしても、是ればかりは用ゐませぬ。

彌太　おゝ、さう言やいつそ。

ト握り拳を振上げ、ひよろ〳〵と立ち上るを、お雪中へはひり留める、此時花道よりばた〳〵になり和田平兵衞背割羽織袴大小にて足早に出來り、直ぐ舞臺へ來り、

平兵　彌太郎殿は、在宿なるか。（ト此内お谷下手へ來て、）

お谷　兄樣お出でなされましたか。（ト此聲を聞附け彌太郎どんと尻餅を搗き、兩手を突いて、）

彌太　なに和田氏がお出でとな。それは〳〵ようこそ御入來、先づ〳〵こちらへ入らつしやい。

平兵　御免下され。（ト合方になり、平兵衞眞中へ通る、彌太郎茶碗を出し、）

彌太　何は然れ、一つ獻じませう。

平兵　知つての通り某は、一滴も喰べませぬ。

彌太　おゝ左樣であつたか、是れは失敬、然らば御名代仕らう。（ト手酌で又呑む、平兵衞酒かといふ思入）

お谷　お茶を一つ召上りませ。（ト茶を出す、平兵衞彌太郎へ思入あつて、）

平兵　早速ながら承はるが、只今家中の風聞には、そこ許お城の外濠にて、鐵砲を以て水鳥を打ちしと
やら申す事ぢやが、それは誠の事でござるか。

彌太　もう其事が知れましたか、それは誠に新聞でござる。

平兵　え、（ト思入あつて、）これお谷、彌太郎殿が鐵砲を打ちしと申すは誠なるか。（トお谷ぢつと俯向いて
居る）これ默つて居ては譯が分らぬ、彌太郎殿は酩酊ゆゑ其方打つたら打つたと申せ。

トお谷思ひ切つて、

お谷　實は夫が鐵砲を打ちましてござります。

平兵　すりや全く打ちしと申すか、えゝゝゝゝ。（トびつくりなし彌太郎の側へつか／＼と行く、彌太郎兩手を
突いたまゝ寐て居る、平兵衞此體を見てこちらへ來り）谷、それへ出い。えゝ出いと申すに。

お谷　はあい。（ト合方になり、）

平兵　妻の身として彌太郎が、打ちましたとは何の事だ、いやさ、お上の規則を辨へ居らぬか、御要害の水鳥を濫りに打つは曲事たりと、御制禁の高札が建つて居るのを存じながら、放發なすとは怪しからぬ。よしんば打たうと申したとて、なぜ其方が差止めぬ、夫の所行のよからぬ時は、異見をなすが妻の役、斯かる事柄辨へさせんと、幼少より母上が御教訓なされしを、其方存じ居らうのに、あの爰なうつけ者めが。（トきつと言ふ、お谷兩手を突き、）

お谷　其場へ參つて存じ居れば、止めますでござりますが、一向知らぬ事ゆゑに。

平兵　えゝまだ〳〵言譯申すのか、存ぜぬならばなぜ早く、我等方へ知らせぬのぢや。

お雪　今も今とて二人して、自ら訴へ出でましたら、少しはお上の御慈悲もあらうと、お姉えさまと勸めますれど、酒の上とは言ひながら、何をいつてもうはの空、少しもお聞きなされませぬ。

平兵　それぢやに依つて熟醉せし、彌太郎殿を差し置いて、兄に相談いたしなば、又よい工夫もあらうのに斯く世間へ流布なす上は、今更となり詮ないわい。（ト立上り彌太郎を見て、）家内の苦勞も知らずして、酒に性根を奪はれし彌太郎殿の此姿、あゝ妹の胸を察しやる。（ト兩人に向ひ、）いつその事に某が、此醉漢の名代に、斯くの始末を訴へ出で、上の御處置を承はらん。

ト平兵衞つか〳〵と下手へ行かうとするを、お谷お雪すがり留め、

お谷　御尤なるお詞ながら、何事も御酒の上ゆゑ、生醉本性違はずと、假令醉つて居りましても、只今あなたが御異見あれば、聞えぬ事はござりますまい。

お雪　どうぞ只今お兄い樣へ、御異見なされて、

兩人　下さりませ。

平兵　所詮いうても分るまいが、そち達が不便ゆゑ、如何にも承知いたした。（ト平兵衞彌太郎の側へ行き刀の鐺にて彌太郎を引起し、）これ彌太郎殿、長い事は申さぬが、父彌左衞門より讓り受けし小島の家をお手前は、立てぬ所存でござるかな。（トきつと言ふ、彌太郎顏を上げ、）

彌太　和田殿御心配下さるな、かやうに酒を呑み續け、其日々々を暮しますなら、立たぬ所もきつと立ちます。

平兵　いやさ、斯く泰平なら兎も角も、明日にも一戰ある時は。（トきつと言ふ、彌太郎むつくと起き、）

彌太　其時こそは某も、（ト思入あつて氣を替へ、）酒と討死仕つる。

平兵　いや其前方に御上より、お濠の鳥を打つたるを、御沙汰にならば何といたす。

彌太　立派に言譯仕つるが、若し御主君の御氣に逆らひ、お手討にでもなつたなら、人間僅五十年定りのある命ゆゑ、先づ喰つただけが則ち德。

平兵　鳥に一命引きくらべ、役にも立たぬ虚氣の性根、見下げ果てたる其許故、斯樣な者に我が妹を女房には遣はされぬ、只今引取り參るから、離緣狀を認めさつしやい。（ト お谷お雪兩人平兵衞に縋り、）

お谷　是れほどあなたが仰しやつても、取つても附かぬ御挨拶、所詮今の所では前後も知れぬ位ゆゑ、せめて醉の覺めるまでお待ちなされて下さりませ。

お雪　實の兄ゆゑ私も醉ひが覺めればとつくりと、あなたの御異見申しまして、自身に訴へ出ますやういたしますればそれまでを。

兩人　どうぞお待ち下されませ。（ト兩人平兵衞に賴む。）

平兵　そち達二人が不便ゆゑ、此儘にいたし置くが、若し御上よりお咎めあらば、又其時は心添いたせば、必ず共に心配いたすな。

お谷　何卒お願ひ、

兩人　申し上げます。

平兵　最早身共も御番の刻限、登城いたさにやならぬゆゑ、醉ひが覺めなばとつくりと、身が傳言をいたしてくりやれ。

兩人　畏つてござりまする。（ト平兵衞立上る、彌太郞性體なく俯伏しになつて寐る、是れを見て、）

平兵　あゝ見下げ果てたる、（ト兩人を見て氣を替へ）よく氣を附けよ。（トずつと門の外へ出て花道へ行き、）あの醉漢の見せしめに、妹に小言はいふものゝ、女の身にて夫を案じ、便り少なく思ふであらう。あゝ思へば不便な。（ト振返るを兩人見送り、）

兩人　え。

平兵　いやなに、思ひの外遲刻いたした。（ト合方にて平兵衞足早に花道へはひる。彌太郎起上り、）

彌太　和田を早く返さうと、さつきから狸寐入りに、ぐう〳〵鼾を聞かしても、何だかぐちや〳〵と分らぬ事を並べ立て、酒を呑むにも呑まれぬゆゑ酷く閉口いたしたが、やう〳〵の事で歸つたので大風の吹いた跡のやうだ。どれ、新規まき直しといたさう。

ト彌太郎樽を引寄せ、茶碗へつがうとする、其手をお谷押へ、

お谷　お前寐たのではござんせぬか。

彌太　どうして〳〵寐る所か、二升樽が五つも六つも、こんなに爰に居てくれるので、嬉しくて〳〵堪へられぬ。

お谷　まあ呆れ返つて物が言へぬ。

お雪　さうしてお前は、まだお酒を。

彌太　おゝ吞むとも〳〵、吞むは瀧の水、酒はへると本望。（ト明樽をとつて、）やあ、ぽん〳〵。

ト樽の底を打つ。兩人呆れし思入。ばた〳〵になり、花道より○△□◎の近習四人大小袴股立にて十手をさし走り出來り、直に内へはひり、彌太郎の左右を取巻き、

○　彌太郎殿、お調べの筋あつて、

△　我が君より火急のお召し、

□　いざ御同道、

四人　仕らん。

彌太　なに、我が君のお召しとな。（トしかつめらしく膝へ手を載せ、）只今出仕仕つると、左樣仰せ下されい。（ト言ひながら又ばつたり倒れる、お谷お雪此體を見て彌太郎を引起し、）

お谷　もし、我が君樣のお召しとあつて、

お雪　お迎ひでござりまするぞ。

彌太　えゝ、只今出仕つかまつると、申してくりやれ。

○　いや暫時も猶豫相成らぬ。

△　もし參らずば引立て參れと、

□　嚴しき上の仰せゆゑ、
◎　いざ御同道、
四人　なされい。
ト四人無理に彌太郎を引立てようとする、是れを振拂つてひよろ〳〵とする、此機會に□◎ぼんと轉る、彌太郎又どうと倒れる、四人兩手を取つて肩にかけ、やう〳〵に門の外へ出るを、お谷お雪四人に縋り、
お谷　如何なる御上のお咎めか、存じませねど何分共に、
お雪　あなた方のお執成しにて、
兩人　偏にお願ひ申しまする。（ト四人彌太郎を肩に掛け、）
四人　さゝ、お立ちなされ。
彌太　立つては居れど歩けませぬ。
○　えゝ面倒な。それ、引立てめされ。
三人　心得た。
ト四人彌太郎を肩に掛けて無理に行かうとする、彌太郎歩けぬ思入、やう〳〵に引きずりながら花道

へはひる、跡兩人向うを見送り、

お雪　もし姉さま、どうしたらようござりませう。

お谷　賴みに思ふ兄さんも、夫の大酒に呆れ果て、歸らしやんした上からは、假令詞は殘して行つてもどの顏下げて行かれもせず。

お雪　只この上は信心なす、神々樣のお力より、外に仕方もござんすまい。（ト兩人こちらへ來り、）

お谷　どうぞ夫の身の上に、凶事のないやう守らせたまへ。

お雪　南無不動さま、觀音さま。

お谷　偏にお願ひ。（ト兩人手を合して、）

兩人　申し上げます。（ト向うを案じる思入、合方にて此道具廻る。）

（上杉家奧殿庭先の場）――本舞臺三間中足の二重、本庇本緣附き、向う一面の御簾襖、平舞臺の眞中に御影の沓脫ぎ、上下後へ下げて網代塀、此前紅葉せる楓の立木、四つ目垣石燈籠、總て上杉家奧殿庭先の體、二重の眞中に以前の謙信褥の上に住ひ、後に太刀掛を置き此傍に以前の小姓兩人控へ、下手に平兵衞上下にて住ひ、此見得本調子の合方にて道具留る。と謙信思入あつて、

謙信　こりや正行、そちが登城を待兼ねしは餘の儀にもあらざるが、汝とは因みある鬼小島彌太郎事、日頃の大酒に亂暴なすは、是れまでに數度なれど、衆に勝れし武道に免じ差許し置きたるが、先刻又候注進には豫て御制禁申し附けし、予が城外の濠に居る水鳥數多鐵砲にて打ち取りしと申すこと、要害の爲飼ひ置く鳥を、以ての外の事なれば、只今直き〳〵呼出し、詮議いたせし其上で、返答に依つては此場に置き、予が成敗をいたす程に、汝も左樣心得よ。

平兵　驚き入つたる彼れが振舞、是れまで再度の亂行も寛仁大度の御處置を以て、其身も無事に相濟みし其舌の根の乾かぬ内、嚴禁の場所を存じながら、殺生いたせし不屆き奴、我が君御直に御詮議を遊ばしますに及びませぬ、拙者へお任せ下さらば、きつと詮議仕り、重ねて御制禁を破らざるやう、禁獄申し附けまする。

謙信　汝に任せてよき事なれど、如何なる所存あつての事か、予が直き〳〵に詮議なし、申譯相立ちなば、いやさ申譯の仕儀により、嚴しく刑に行はん。

平兵　其仰せ一理あれど、彼等如きの御詮議に、お手下さるゝまでもなし。諸人の見せしめ此處で拙者取り計らひの仕らん。

謙信　いや予に深き所存のあれば、先づ其方は控へて居やれ。

平兵　でも餘りそれでは。

謙信　はてさて、控へいと申すに。

平兵　はあ〻。（卜平兵衞平伏なす。ばた〳〵になり、花道より以前の◎走り出來り、）

◎　はツ申し上げます、上意に依つて鬼小島彌太郎、召連れましてござりまする。

謙信　お〻、それ待兼ねた、引立て參れ。

四人　きり〳〵とお出でなされい。

卜やはり右の合方にて、花道より以前の彌太郎を、四人にてやう〳〵に引立て出來り、花道に留る、平兵衞彌太郎を見て、

平兵　こりや〳〵彌太郎、我が君の御前なるぞ、立ちはだかつて無禮至極、控へ居らう。（卜きつと言ふ。）

彌太　なに、我が君の御前だえ、いやもう、ヽヽヽ、ごぜんは澤山でござる。

四人　御前でござる、お愼みなされい。

彌太　え〻ごぜんは喰はぬと申すに。（卜四人無理に引立て舞臺の下手へ來り、ひよろ〳〵しながら、）やあ是れは大變、地球が廻る〳〵、お〻我が君も和田氏も、大層大勢おいでなさるな、誠にお馴染の方ばかりでお賑かな事だ、序に家の二升も、持參いたせばよかつたわえ。

トひよろ〳〵し居る、平兵衞氣を替へ、

半吾　これ彌太郎、立ちはだからずと下に居らぬか。

彌太　いや裸では參らぬ、裸は眞平御免でござる。

平兵　えゝ下に居らぬか。（ト扇で疊を叩き）無禮者めが。

彌太　へえゝ。（トぐにや〳〵と下に居る、謙信思入あつて）

謙信　こりや、彼れを引起せ。

四人　はツ。（ト四人彌太郎の手を持ち引起す。）

彌太　えゝい。（ト息を吹き掛ける、是れにて臭いといふ思入、謙信前へ進み出で）

謙信　こりや彌太郎、面を上げい。

彌太　はツ。（ト彌太郎顏を上げる、四人後に控へる、謙信思入あつて合方きつぱりとなり、）

謙信　醉人本性違はずと、予が申す事よく承はれ、汝當城の外濠にて鐵砲を以て鳥を打ち、我が家へ持參いたせし事、報告あつて慥に知る、かねて制禁の觸を出せしを、其方存じ居らうが。

彌太　へい、存じて居ります。

謙信　其制禁を存じながら、何ゆゑ今日外濠に飼置く鳥を彌太郎が、鐵砲を以て打ちたると風聞なれど

傳はりしぞ、察する所家中の者が鐵砲にて打ちしと申すは、こりや流言と相見ゆるな。(ト彌太郎へ思入あつて、)よもや、左樣な事はあるまいな。

ト彌太郎兩手を突いたまゝ俯向いて居る。平兵衞早くお受けをしろといふこなしあつて、

平兵　こりや〳〵彌太郎、有難い我が君の御詞、早く左樣でござると、いやなに、左樣か左樣でないかお答へいたさぬかい。(ト氣を揉む思入、彌太郎顏を上げ、)

彌太　へい、制禁の御場所ゆゑ、鳥を取つては惡いといふそこの所は心得居るが、拙者は全く鐵砲で、御濠の鳥を打ちました。

謙信　なに、打つたと申すか。

平兵　これ〳〵、只今君の仰せの通り、打つたと申すは嘘であらうな。

彌太　いえ、決して嘘でござらぬ、全く拙者が打ちました。(ト是れにて謙信平兵衞びつくりなし、)

平兵　すりや御制禁を知りながら、打ちしは誠と申すのか。

謙信　こりや彌太郎、何ゆゑ汝は制禁を犯し、發砲なして鳥を取りしぞ。

彌太　別に仔細はござりませぬ、食す爲に打ちました。

謙信　やあ我が制禁を犯すのみか、食す爲に打ちたるとは、返す〴〵も不屆奴めが。

彌太　其御制禁を破りまして、雁鴨を打ちましたは、喰ひたいばかりでござりませぬ、君の御爲を思ひますゆゑ。

謙信　何と。（ト誂への合方になり、彌太郎しかつめらしく兩手を膝へ載せようとして落し、舌甜ずりをして、）

彌太　申し上げずと御存じながら、總て武士の身の上は、力がなくてはなりませぬ、其力を附けるには魚鳥を喰ふが身の肥し、されども不斷是れを求める金錢がござらぬから、段々人間が愚になります、所ですは一戰と陣令のあつた其時は、それ身體に肥しがないから眞魁に敵勢に、精進物の南瓜同樣ちよきんと首をやられた日には、假令張良孔明の智慧があるとも胴ばかりでは、どうしていゝか分らぬから、そこでお濠の雁鴨を、自身に打つて喰ひましたは、戰場に於て後れを取ぬ、養生の爲でござりまする。

謙信　酒興の上とは申しながら、嘲弄いたす其詞、我一國の領主ゆゑ、家臣の者は我が子と思ひ、皆それぞれに相當の家祿を遣はし置きつるに、魚肉を求むる價がなきとは、恩を知らざる申分、承はれば其方は好める大酒に甲冑まで、賣代なせしと申す事ぢやが、今にも一戰に及びなば、何を着して敵に向ふぞ。（ト彌太郎びつくりなし、）

彌太　え、拙者が甲冑を賣りましたを、何者が申しましたな。（ト平兵衞を見て、）はゝあ、和田氏貴殿お

喋べりをいたされたな。
平兵　我が申さずとも其方が、甲冑を賣代なし、酒の價にいたせし事を、知らざる者はあらざるわ。
彌太　御存じの上は申しますが、縅の絲の色も褪め錣の鐵の性がぬけ、餘り見苦しうござるゆゑ取り替へませうと存じまして、不斷出入りの紙屑屋へ、拂物にいたしてござる。
平兵　むゝ、して其取替へし甲冑は、何れに求め置かれしぞ。
彌太　それは宅の鎧櫃に、ちやんとしまつてあると申し度いが、實はござらぬ、なれ共武田と一戰なさば眞ツ魁に打つて出で、我が氣に入つた甲冑を着せし敵を討つて取り、分捕りなして着用いたす、先づそれまでは素肌にて、敵勢へ向ふ所存。
平兵　やあ出放題なる其雜言、弓鐵砲の降る中へ、只の衣類一重で戰つて、敵の防ぎが出來ると思ふか。
彌太　さあそこでござる、假令上部は素肌にせよ、心に鎧を着て居れば、なに敵兵の千や二千、どれ程の事あらん、入らざる心配御無用になされ。(ト謙信思入あつて、)
謙信　やあ返す〴〵も憎き奴、醉漢ゆゑに不便を加へ、情をかくれば附上り、人を人とも思はぬ彌太郎、予が制禁を破りし上は、庭前に於て手討にいたす。それ、彼れを引すゑい。
四人　はッ。

ト四人して捕縛なし彌太郎を引立てに掛る、彌太郎ひよろ〳〵と立上つて、侍の押へたる兩袖を拂ふ、是れにて兩人見事に轉る、又後より繩を掛けるをたぢ〳〵として、どんと尻餅をつく、後の一人此下になり苦しむ、謙信きつとなつて、

謙信　やあ、予が面前にて手向ひいたすか。

彌太　いえ手向ひは仕らぬが、各々方も拙者同樣、きこし召してござると見えて、觸ると直ぐに轉びます。

謙信　何れも退け。

四人　はツ。

ト皆々辭儀をなして下手へはひる。合方きつぱりとなり、謙信小姓の太刀を取り、つか〳〵と平舞臺へ下りる、平兵衞續いて下手へ下り、謙信彌太郎の側へ行く、

謙信　こりやよつく承はれ、數多家臣のある中にも、其方ばかりは武藝といひ、力量といひ人に勝れし天晴なる者ゆゑに深く目を掛け許し置きしが、最員の沙汰と諸臣等に思はれなば我が爲ならず、一人愛して萬人の恨みを受くる其時は、必ず其國治まらず、さるに依つて此度は、不便ながらも其方を國家の爲に手討にいたす。(ト謙信下緒にて襷を掛ける、平兵衞思入あつて、)

平兵　汝が親は酒を好まず、堅固な者であつたるが、其胤として大酒を好み、上を恐れぬ科により、君の御手に掛ること、此上もなき武門の恥辱、嘸や冥府で彌左衞門殿、齒嚙をなしてござるであらう、妹が緣に繫がれば、斯くいふ和田正行も、誠に殘念至極なるぞ。（ト平兵衞愁ひの思入）

彌太　國家の亂を招かざる爲、拙者をお手討遊ばすのは、如何にも承知仕つる、どの道君へ捧げし一命、差引勘定いたしても、別に損の行かぬ事、何卒此場でお斷ち下され。

謙信　おゝ、一命斷てとはよい覺悟だ。

彌太　惡いと申しても是非がござらぬ。

謙信　いで、謙信が國政の、正しき所を見せてくれう。

ト すらりと太刀を拔き放し、振上げ切らうとする、彌太郎座を改め振返つて謙信をぢろりと見る、謙信は不便だといふ思入あつて切り兼れ、平兵衞と顏見合して又切らうとしては切り兼れる。

平兵　我が君、なぜ御猶豫を遊ばします。（ト謙信きつとなつて、）

謙信　むゝ。覺悟。（ト刀を振上げ切らうとするを、）

彌太　御前暫く。

謙信　待てとは、卑怯に。

平兵

謙信　命が惜しいか。

彌太　如何にも、惜しうござります。

兩人　何と。（ト謡への合方になり、彌太郎生酔の氣を去り、きつと思入あつて）

彌太　君恩に依つて斯くまでに、登庸せられし拙者ゆゑ、戰場に置き御馬前にて、討死いたすは豫ての覺悟、一命を君に差上げるは、少しも惜しくはござらねど、假令制禁犯すとも、在つて益なき雁鴨を、此彌太郎と取り替へては、ちと御損ではござりませぬか。

謙信　むゝ。

彌太　今にも武田信玄と鎬を削る其時は、衣を裂きて恨みを晴らせし晉の豫讓が例に倣ひ、村上侯の御無念を一太刀なりとも信玄に、交さぬ内は奴僕に等しき、假令拙者一人たりとも、迂濶に命は捨て難し、なれ共此身を惜しむにあらず、越後勢の武勇を顯はし、戰場に於て討死なさば、聊か御恩を報ずる道理、聰明叡智の我が君ゆゑ、是れ等の利害得失は、必ず御存じでござりませう。（トきつと言つて又生酔になり）などゝくだをば卷くものゝ、身共は酒さへ呑めばよいのだ、はゝはゝゝゝ。さあすつぱりと遊ばしませ。

ト首を前へうな垂れ、生酔の思入、謙信ちつと思入あつて太刀を鞘へ納め、

謙信　正行來やれ。

平兵　はッ。(ト二重へ平兵衞附いてよろしく住ひ、)

謙信　彼れを手討になさんとせしが、前後も知らぬ熟醉ゆゑ、全く濠の鳥を打ちしも、酒興の上と相見える、今般は許し遣はす、以後をきつと愼しむやう、其方よりきびしく說諭いたせ。

平兵　すりや彌太郎が一命を、酒興の上と思召され、あの御許容下されんとな。はッ、寛仁大度の其御諚、緣に繫がる拙者まで、御恩は詞に盡されず、有難く存じ奉つりまする。猶此上は當人が、本性になり次第、以後は禁酒いたしますやう、篤と申し聞かすでござりませう。

謙信　いや、假令本性になればとて、禁酒いたすに及ばぬから、やはり此儘、いやさ、此後大酒を愼めと其方より申し聞かせい。

平兵　返す〴〵も御慈悲のお詞、有難う存じ奉る。

ト謙信立上り、俯伏しになりし彌太郎を見て思入あつて、

謙信　信言美ならず美言信ならず、輕薄ならぬ彼れが一言、はて美しき心立て、頓て武田と一戰なさば、其時こそは天晴働き、(トにつたり思入あつて、)和田、後に逢はうぞよ。

ト誂への合方になり、謙信小姓附いて奧へはひる、合方彈流し平兵衞謙信の跡を見送り、つか〳〵と

平兵　彌太郎殿々々、未だ醉ひが覺めざるか。(トきつといふ、彌太郎思はず顏を上げ愁ひの思入、平兵衞見て、)何ゆゑ御身は落涙せしぞ。

平舞臺へ下り、彌太郎の側へ行き、

彌太　是れまで再度我が君へ、御苦勞掛けし拙者めを、憎しとも思召されず、御仁慈深き今のお詞、熟醉なして俯向きし面も再び上げ兼ねて、有難涙に暮れました。(ト落涙なす。)

平兵　よく〳〵御身を我が君が、惜しみたまへばこそ今の御沙汰、肝に徹して有難く落涙なす程思ふなら、御恩送りは戰場にて、必死の働きいたされよ。

彌太　仰せにや及ぶべき、いで一戰といふ時は、元より君に捧げし一命、何の惜しむに足るべきや。

平兵　潔き其の詞、一國領せし村上殿も憂きを信濃の敗軍に、

彌太　勝鬨揚げし陣鐘や、吹き立つ螺の甲斐の國、

平兵　武田が破竹の猛勇も、沖を越路の上杉勢、

彌太　やがて勳功顯はしくれん。(ト此時向うにて遠寄せになる、兩人聞耳立て、)や、時ならざるに陣太鼓、螺の音色の聞ゆるは、むゝ。(トきつとなつて下手へつか〳〵と行く、)

平兵　いや氣遣ひあるな彌太郎殿、先刻上より陣令にて、今日先手組の大隊が、甲冑を着用なし君へお

目見得なすとの事。（ト彌太郎つか〳〵と戻り、）

彌太　然らば今日大隊が、君へ御目見得いたすとな、扨は人數を集むる知せ。

平兵　御身は先手の人數ならずや。

彌太　如何にも先手に與なせば、人數に加はりお目見得なさん。（トきつとなつて、）和田氏、御免。

ト遠寄せ早めの合方にて、彌太郎逸散に花道へはひる。鳴物ばつたり止み、平兵衛跡を見送る思入、段々に遠くなるこなしにて色々思入あつて、後退りに見送り、トヾ沓脱ぎの上へ立上り、ぢつと向うを見とれ、思はず本緣へ腰を掛けるを道具替りの知せ、向うを見て感心せし思入、本調子の合方へ戻り、此道具廻る。

（上杉城内桝形の場）――本舞臺四間高足、棕櫚伏せの土手、裾通り二尺石垣の蹴込み、眞中中足の石段、向う一面深山の遠見、此前柵矢來、是れへ五三の桐の陣幕を張り、上下城の石垣にて見切り、此前同じく五三の桐の幕張、日覆より杉の釣枝を下し、二重の眞中へ金屛風敷革を置き、總て上杉城内桝形の體。爰に以前の近習〇△□の三人、何れも鎧下陣羽織にて控へ居る、此見得時の太鼓にて道具留る。

○今日俄の御達しにて先手の大隊此處で、勢揃ひがあるに附き、我が君御上覽あらせられ、

△　此度晴れの合戰ゆゑ、鎧兜は言ふに及ばず、綺羅を飾つて罷り出ると、

□　味方の勇氣盛んにて、上を下への亂騷ぎ、

○　それに構はず酒を呑み平氣で居るのは鬼小島、況して先手に加はりながら、鎧の支度もないと申すが、

△　まだ先刻のまゝお庭先きに、大鼾で居るかも知れぬ。

□　あれがほんの喰はず貧樂でなうて、呑んで貧樂でござるて。

三人　はゝゝゝゝ。

ト遠寄せばた〳〵になり、花道より以前の◎やはり鎧下陣羽織にて走り出來り、

◎　何れも御苦勞千萬、先手組の面々が、一統君へ御目見得に是れへ參つてござる。

○　然らば此儀我が君へ、

△　進達いたすで、

四人　ござりませう。（ト皆々石段へ上らうとする、此時後にて）

呼び　御出座。

□　最早我が君、

四人　御出座とな。

ト遠寄せ大小の鳴物になり、二重の上手より以前の謙信先きに、義清平兵衛子役の太刀持近習大勢後を守り出來り、謙信は眞中義清上手、兩人敷革の上へ住ひ、平兵衛二重下手近習役に居並び、是れと一時に花道より以前の傳藏、平八郎、常五郎、彌九郎、門兵衛、逸平何れも陣立のこしらへ、銘々指物得物を持ち、跡より軍兵大勢附添ひ出來る、平兵衛は此内彌太郎は居らぬかといふ思入、色々氣を採むこなし、何れも舞臺へ來り上手に居並び床几に掛る、軍兵上下後に控へ、皆々はツと平伏して、

傳藏　命令に依つて先手の大隊、石川傳藏信吉、

平八　長尾平八郎久景、

常五　大岡常五郎種長、

彌九　本庄彌九郎照秋、

門兵　安田門兵衛周直、

逸平　杉原逸平近政、

傳藏　後詰は大手の桝形に、備へを立て繰込ませ、

常五　我々君の御前まで、
彌九　一同出張、
六人　いたしてござる。（と謙信皆々を見渡し思入あつて、）
謙信　譜代恩顧の面々が、綺羅を飾りし此出立、予も滿足に思ふぞよ。
六人　はあゝ。
謙信　村上氏の鬱憤を晴らさん爲に甲州へ、當家の使者を遣はすが、晴信猛威を鼻に掛け、多分和議にはいたすまじ、左すれば直ちに其場より一戰なさん手配りゆゑ、各々忠勤勵みくれよ。
傳藏　御諚までも候はず、數年家祿を頂戴せしは、今此時の際にあたり、
平八　すは戰場の御布令出でなば、各々粉骨碎身なし、命は塵埃より輕んじ、
常五　武田が陣所へ切入つて、敵の首級を數多取り、甲州籠で運ぶ所存、
彌九　槍玉ばかりで足らぬ時は、甲州勢を踏潰し、打栗同樣拵げてくれん。
門兵　命限り腕限り、切つて〳〵切りまくり、歸陣の時まで箱詰めに、甲州首の砂糖漬。
逸平　又頭上より眞ッ二つ、土產に敵のころ柿を、獻上いたす心組。
傳藏　何れも血戰仕つれば、

平八　御安堵あれや、
皆々　我が君様。（ト是れにて義清悦ぶ思入。）
義清　流石越後の御家族だけ、大磐石なる其魂。
平兵　村上侯の御存意も、今般上使の趣きにて和になるにせよ一戦に、なるに附けても御無念の、晴れるは則ち今此時。
義清　是れといふも上杉殿の、厚き情の志、忝なう存じ奉つる。
ト義清謙信に禮をいふ、謙信思入あつて、
謙信　何の〳〵、互ひに救ひ救はるゝも、武道の本意と申すもの、必ず心配めさるゝな。
ト平兵衛六人へ思入あつて、
平兵　して鬼小島彌太郎殿は、先手の隊に加はりながら、未だ出張いたしませぬか。
傳藏　彌太郎殿は例の大酒に、
平八　君の御不興蒙れば、
常五　先手の隊には、
六人　漏れてござる。

謙信　いや彌太郎事は既に先刻、手討になさんといたせしが、酒興の上にて前後を亂し、取るに足らざる振舞ゆゑ、今日の所は許して遣りしぞ。

平八　そりや制禁破りし鬼小島、

常五　君には御赦免、

六人　遊ばしましたか。（ト皆々顏見合せ思入、此時向う揚幕にて、）

彌太　やあ〳〵方々、鬼小島彌太郎一忠、只今出張いたすでござる。

六人　何と。

ト遠寄せ大小の鳴物になり、花道より彌太郎幕明きのちぎれ鎧を着込み、籠手臑當ともちぐにて古びたる甲冑のこしらへ、右に兜を持ち、左りに鐵の棒を搔込み出來り、花道に平伏なし、

彌太　恐入つたる事ながら、未だ甲冑の用意これなく、遲刻の段は幾重にも、平に御免下さりませ。

謙信　おゝ、彌太郎か近う。

平兵　先刻より心配いたした、さゝ是れへ〳〵。

彌太　はツ。

トやはり右の鳴物にて彌太郎舞臺へ來り、少し眞中より下手へ住ふ。平兵衞は安心せし思入、謙信

は彌太郎の裝を見て、

謙信　こりや其方が鎧の縅、所々切れて見苦しいが、察する所父彌左衛門より、傳來の品なるか。

彌太　いえ是れは今朝古鐵買より、妻が求めし古具足、お目立ちまして彌太郎一忠誠に恐縮仕つる。

義清　扨はお手前が噂に聞きし、當家の忠臣鬼小島彌太郎殿でござつたか、見るから猛士の其振舞、某感服いたせしぞ。(ト彌太郎はつと辭儀をなす、平兵衛思入あつて、)

平兵　其お詞にて、拙者まで、共々鼻が高うござる。

彌太　綺羅を飾りし列座の中へ、斯く見苦しき甲冑にて、出張なせし失敬の段、眞平御免下されい。

ト義清に詫びる、上下の六人思入あつて、

傳藏　各々晴れの戰場に、所持の具足を一洗なし、

平八　籠手臑當に至るまで、奮發なして新規にしつらへ、

常五　越後の勇氣を見せてくれんと、

彌九　備へを立てし其中へ、

門兵　品もあらうに古鐵屋の、

逸平　ちぎれ鎧で出張なすとは、

傳藏　いやはや見にくい、

六人　ざまでござる、はゝゝゝゝ。（ト皆々嘲り笑ふを、彌太郎ぢろりと見やり、）

彌太　何れも左樣にお笑ひあるが、鎧で軍はいたさぬぞ。假令素肌で一戰なすとも、此鐵の棒一本あれば何の厭ひはござらぬが、貧苦の中で求めたる、妻が苦心を思ひ遣り、着用なした古鎧有つても無くても同じ事、當にいたす品ではござらぬ。（トきつと言ふ、六人顏見合して控へる、義清思入あつて）

義清　して其方が鐵の棒は、何程の目方なるぞ。

彌太　百貫目にござります。

義清　なに百貫目ござるとな。

平兵　それ、村上侯へ御覽に入れよ。

四人　はツ、（ト○等四人鐵の棒を持たうとして持てぬこなし、）なか〳〵是れは上りませぬ。

義清　それを自在に遣ふとは、計り知られぬ希代の大力。

謙信　村上氏へ其棒を、此場で遣うて御覽に入れよ。

彌太　はツ、畏つてござります。

ト是れにて○等四人下手にて立身にて後へ下る、彌太郎鐵の棒を片手に取上げ、ぐる〳〵と振廻し、

ト ゞ どんと舞臺を突く、此響きに四人、一時にぽんと轉る。義清膝を打ち、

義清　はて鬼小島とはよき姓なり、誠に鬼とも謂つべき、力量勝れし彼れが振舞。

謙信　そちに褒美を遣はすぞ。

彌太　はッ。

謙信　申し附けし品是れへ。

△○　はッ。

ト始終遠寄せ大小の合方にて、○△上手幕張りの内より白臺の上へ鎧兜籠手臑當、白地へ子持筋の指物を添へ、持ち出來り、謙信の前へ置く。

謙信　正行、彼れに取らせい。

平兵　はッ。（ト平兵衞辭儀をなし、指物を持ち平舞臺へ下りる、○△白臺を荷ひ、舞臺眞中へ置く、）我が君お褒めのお詞あつて、指物甲冑下し置かるゝぞ。有難く頂戴いたせ。

ト平兵衞彌太郎の前へ指物を出す、彌太郎ハッと受取り、

彌太　再三御恩の重なる上、又候お褒めのお詞あつて、思ひ掛けなき御賜。有難く頂戴、（ト 跡へ下つて）仕つりまする。（ト謙信思ひ入あつて、小姓の持ちし短册箱を出し、）

謙信「けふのみと見るに涙の十寸鏡、見なれし影を人に語るな、」
義清 して、其一首を詠ぜし者は、
謙信 則ち彼れが妻の詠歌。
彌太 え、（ト聞き咎める。）
謙信 謙信感心いたせしと、立歸らば妻に申せ。
彌太 はあ、——。（ト辭儀をなす。）
謙信 こりや正行、汝が妹なるさうなが、松の操の正しくして、天晴女の鑑なるぞ。
平兵 はツ、御懇の御意を蒙りまして、拙者身に取り何程か、大慶至極にござりまする。
ト平兵衞辭儀をする、彌太郎ぢつと考へ居て、此時思ひ入あつて、
彌太 すりや此武器を賜はりしも、妻が一首を聞し召し。（ト言ひ掛けるを冠せて、）
謙信 こりや、彌太郎に杯取らせよ。
□◎ はツ。（ト大杯を三方へ載せ、長柄の銚子を二つ持つて來り、彌太郎の前へ置く。）
傳藏 すりや鬼小島へ、
六人 お杯を、

謙信　予が許す、呑め〳〵。

彌太　有難うはござりますれど、愼み中にござりますれば。

謙信　構はぬ、過せ〳〵。

彌太　はッ。（ト彌太郎杯を取上げて平兵衛を見る、平兵衛氣を揉みながら）

平兵　これ〳〵、お許しなれば、せめて半盞。

謙信　未練千萬、なみ〳〵つげ。

◎□　はッ。

ト□◎銚子を持つて左右よりなみ〳〵とつぐ、彌太郎大杯を控へ一息にぐつと呑みほす、義清これを見て、

義清　天晴見事。（ト陣扇にて膝を打つ。）

謙信　むゝ。（トにつたり笑ふを木の頭。）も一つ過せ。

彌太　はッ。

ト杯を出す、平兵衛側で是れを留める。謙信義清感心せし思入。此模樣一せいカケリにて、

ひやうし　幕

三幕目

信州村上古廟の場
同武田方本陣の場
同千曲川急流の場
同鳥打麓斬首の場
千曲河原梟首の場

同返し

〔役名――額岩寺駿河守光氏、山本晴行入道道鬼、鬼小島彌太郎一忠、林三郎右衛門景政、內藤修理之助正豐、相木市兵衛、窪田右膳、和田修理大夫、布下左衛門、武田臣廣瀬郷右衛門、同飯富三郎兵衛、同仁科藤太郎、同甘利左衛門、同井上文八郎、同飯島長左衛門、同雲助駄々八、茶道珍才、非人岩松、同虎松、船頭浪助。光氏息女小笹、武田晴信入道信玄、下部松平、其他。〕

（村上古廟の場）――本舞臺四間通し常足の二重、岩組の蹴込み、眞中二間苔蒸したる石の玉垣三方へ折廻し、內一間石の扉出這入りあり、此內に片蓋の五輪の塔、後黒幕、左右杉林、日覆より同じく釣枝、銀張り霞附きの月を下し、諸所に下草の土手板、總て信州村上古廟の體。爰に修理大夫、左衛門背割羽織達附大小切緒の草鞋にて立ち掛り居る、此見得山颪にて幕明く。と谺の入りし合方にて、

修理　いやなに布下氏、未だ額岩寺殿には、參られぬと見える。

左衛　左樣でござる、今宵も最早丑滿過ぎ、四邊に憚る者なければ、風に落ち散る枝を集め、焚火をなして相待ち申さん。

修理　何さま、それがようござらう。

（ト兩人四邊の杉の枝を拾ひ來り、修理大夫懷中から火打袋を出して火打道具にて焚附け、兩人岩臺へ腰を掛け焚火にあたりながら、）

左衛　あいや和田氏、改め申すに及ばねど、先達て當國上田ヶ原の一戰に舊主村上義淸殿には、林景政が讒言を實正なりと思召し、額岩寺殿を疑ひたまひ、出馬のお供許されず遂に武田の手段に陷り、敗走なせし其上に、本城にては味方と思ひし、景政めに火を掛けられ、一時に落城いたせしは、殘念至極な儀でござる。

修理　それゆゑにこそ額岩寺殿、深き智略を廻らされ我々共と諸共に、武田方へ降人となり敵の機密を窺ひては、人跡途絶えし山林の、舊主の古廟へ參集なし、夜な〳〵語ふ密事の計策。

左衛　最早隊長光氏殿が、參られるに間もあるまい。

修理　是れにて我々。

兩人　待合さん。（ト兩人は有合ふ枯木を火にくべ、よろしくあたり居る。）

ト本釣鐘入りの合方になると、花道より光氏、黒の頭巾黒の背羽織野袴大小草鞋にて、跡より窪田右膳達附大小草鞋にて附添ひ出來て、

右膳　いやなに光氏殿、古廟の前に火影の見ゆるは、慥に和田布下の兩名、最早參られ居りますれば、少しも早くかしこへ參り、何かの密計。

ト右膳が案内に光氏は古廟を見て、

光氏　如何にも左樣いたすでござらう。

ト右の鳴物にて兩人舞臺へ來る、修理大夫左衞門光氏を見て、

修理　それへ見えしは、

修理
左衞　光氏殿か、先づく是れへ。

ト光氏を上手へ遣る、光氏上手の岩臺へ腰を掛ける。右膳前へ出て、

右膳　各々御苦勞に存ずる。

修理　誰かと思へば窪田氏、

左衞　して、御同道召されしは。

右膳　されば額岩寺殿の仰せには、村上殿には上杉の兵を借受け、御出陣あるとの由、彼の地へ入込む

間者共より竊に通達ありしゆゑ、武田方にも手配りなし、名に負ふ軍師は山本晴行、智勇を以て途中にて、不意に討たんと評議一決、再び敗軍なす時は村上家の恥辱に恥辱、それゆゑ上杉謙信殿と共に御出馬あるやうに、其内通を某へお賴みゆゑ、是れまで同道申してござる。

修理　それは何とも御苦勞千萬、額岩寺殿の仰せの如く、義清公御一人にて、御出馬あるは危き大事。

左衛　當時天下に勇猛轟く謙信殿が御一緒なれば、假令不意を打たるゝとも、敗軍なすべき謂れなし。

ト光氏懷中より密書を出し、

光氏　御兩所同意の上からは、御苦勞ながら右膳殿、竊にお屆け下されい。（ト右膳へ渡す。）

右膳　委細承知仕つる、各々方と諸共に、降伏なせし某なれど、是れぞと申す能もなく、勳功とてもござらねど、產れ附いての早足ゆゑ、日に三十里の道を步けば、夜明けまでには六七里、明日中には春日山へ到着いたして此密書、義清公へお渡し申さん。

ト件の密書を懷中なす。

修理　光氏殿を始めとして、我々斯くまで心勞なすも、

左衛　何卒舊主村上家を再興なさん爲ばかり。

右膳　然らば手前は片時も早く。

光氏　遠路の所を御苦勞ながら、

右膳　どれ、夜の内に取り急がん。

ト山おろしになり、右膳花道へ行き跡を見返り、ちよつと思ひ入あつて花道へはひる。跡三人四邊へこなしあつて、

修理　先づは是れにて、一つの安堵。

光氏　拜禮なして御兩所と、豫ての密計お談じ申さん。

修理　左樣ござらば、

兩人　光氏殿。

光氏　お先きへ御免下されい。

ト右鳴物にて光氏塵手水を遣ひ、正面の扉を明け、三人古廟の内へはひる。是れにて鳴物打ち上げ、唄淨瑠璃になる。

〽信濃路は花咲く頃も消え殘る、雪の肌や谷の戶の、凍りて運ぶ爪先を、踏みしめ登る山の端に、木の間を漏るゝ朧月。

ト是れへ本釣鐘を打ち込み、花道より小笹、人柄よき島田鬘振袖裝、屋敷娘のこしらへにて短刀をさ

し、火繩を振りながら出る。跡より駄々八雲助のこしらへにて、窺ひながら附けて來る、小笹花道へ留まりこなしあつて、

小笹　御主君盛んの其折には、御先祖の御廟所ゆゑ、見事でありしも僅かのうち、草生ひ茂り誰あつて、掃除を一つするものなく、替り果てたるあの御靈屋、ても情ない事ぢやなあ。

〽障りの雲に世を歎ち、夜の歩みのそこはかと、忍ぶ深山に仇嵐。

ト小笹四邊を見廻して舞臺へ來る、此時雲助やにはに後より抱附く、小笹びつくりして是れを振拂ひ、

雲助　扨は汝は最前より、わらはを附けて來りしよな。

小笹　おゝ此山中へ只一人歩みを運ぶぼつとり者、目に掛つちやあ見遁せねえ。

雲助　やあ女と侮り其雜言、慮外しやると許さぬぞ。

小笹　許さなけりやあ斯うするのだ。

ト山颪になり、雲助小笹を捉へる、小笹ちよつと立廻つて短刀を拔き、雲助を見事に切倒す。此物音に正面の扉を明け、以前の光氏出でゝ窺ふ、小笹は懷より持紙を出し刀の血糊を拭ひ鞘に納め、こなしあつて上手へ行く、双方行き逢ひ左右に別れきつと思入、此時知らせに附き月の霞とれて兩人顏見合せ、

小笹　や、あなたは父上。
光氏　娘小笹か。
小笹　ても、よい所で。
光氏　是れはしたり。
〽解けて水増す春の谷川。
ト兩人よろしくこなし。唄淨瑠璃の上げにて、古廟の内より以前の修理大夫、左衞門出で、
修理　思ひ掛けなき小笹どの、
左衞　如何なる仔細で、此處へ。（ト是れより谺の合方になり）
小笹　今宵是れへ參りましたは、父上樣が御廟前へ、夜な〳〵お出で遊ばして、御密談をなされまする と、仄に聞いてお懷しく越路を立つて長の旅、麓へ宿を取りまして道の嶮岨も女子の一心、竊に 忍んで參りました。何卒わらはをお手許へ、お置きなされて朝夕の、御用をおさせ下さるやう偏 にお願ひ申しまする。（ト是れにて光氏きつとなり）
光氏　やあうつけ者め何を申す。先頃あれ程文通にて申し送り置いたるに、父の手許に居たいなどゝ便 つて參る不覺者、こりやい忠臣無二と呼ばれたる、此御兩所まで恥辱を忍び、今武田家へ降參

なし不忠の汚名を受けて居るも、再び信濃の御領地を主君のお手に入れん爲、明日にも密計成就いたさば裏切りいたす覺悟なるに、足手纏ひとなるをも思はず、慕ふなどゝはうつけた奴、疾く疾く越路へ歸り居らうぞ。

小笹　さあ其御不興を受けまするは、元より覺悟にござりますれど、味方にお出で遊ばせば何御不自由もござりませず、御安泰の御身分を忠義の爲とは申しながら、敵へ降參遊ばしまして御家來とても皆敵方、定めて朝暮の御用向き、御不自由勝と存じまして、元より命は捨てまする覺悟で是れへ參りました。若しもの事がござりますれば直と自殺をいたしまして、決してあなたの御恥辱になりますやうな御迷惑は、神へ誓つて掛けませぬ。何卒不便と思召してお側にお置き下さりませ。

ト是れを聞き修理大夫、左衞門思入あつて、

修理　はて、天晴なる御息女の命惜しまぬ其お覺悟、流石勇士のお育て柄、手前に於ても感心いたす。

左衞　其御心底を聞く上は、陣所へお置きなされずとも、せめて今宵は御同道にて、お物語りをいたされい。

光氏　いや〱其儀は益なき事、此期に及び其方に、申附けべき用事はない。早々越路へ立歸れ。

小笹　すりやどうあつても、お手許へ、お置きなされては下さりませぬか。

光氏　入らざる願ひ聞く耳ない。

小笹　すりやあの何うでも、(ト思入あつて、)さうぢや。(ト短刀にて死なうとする、修理大夫、左衛門留めて、)

修理　こりや小笹どの、

左衛　何ゆゑに。

小笹　さあ越路へ參り人知れず、忍ぶ知邊の隱れ家を、家來と共にお暇なし立ち出でまする其折に、書置までお殘しまして最早命はなきものと、覺悟いたせし上からは、陣所へお連れ下さりませずば、此場で死んで彼の世へ行き、亡き母上にお仕へ申し、父上樣の御武運を、草葉の陰より祈りまする。

光氏　やあ其料簡は愚なり、未だ主家の興廢も相分らざる其内に、死して彼の世へ參りなば冥府の母へ土産があるまい、死する一命延はりてお家の安泰見し上にて、再び父へ孝行を盡して死するか、但し又、事の露顯となりし時、忠死なしたる人々の、跡を問はんと思はぬか。

小笹　さあそれは。

光氏　不忠不孝の名を取りても、あの世へ急ぐ所存なるか。

小笹　さあ、

光氏　さあ、

兩人　さあ〳〵。

光氏　えゝ、死するばかりが忠義でないわえ。（トきつと言ふ、小笹成程といふこなしあつて、）

小笹　左樣なれば仰せに隨ひ、越路へ戻るでござりませう。

修理　とはいへ、夜陰に此山を、

左衞　女儀一人では何とやら。

光氏　あいや、只今是れにて見受けし所、狼藉者を一刀に切つて捨てたる彼女めが大膽、其心配にも及びますまい。

小笹　殊に家來の松平も麓の宿に居りますれば、明日は早々越後路へ、戻りまするでござりませう。

修理　然らば夜明けぬ其うちに、

左衞　早く下山をいたされい。

小笹　とはいへ遠き越路より、尋ねて來たる甲斐もなう、

光氏　すげなく言つて別るゝも、受けし汚名を又雪ぐ、

小笹　文字も由緣と見上ぐれば、峯に殘んの雪多く、

光氏　積る越路を志し、
小笹　戻りて憂きを信濃路に、
光氏　照りそふ月はありながら、
小笹　晴れぬ心の憂き別れ。
光氏　あ、思へば不便な、（ト思入あつて氣を替へ）いや、思はぬ不所存、愚者めが。（トきつと言ふ。）
小笹　左樣なれば父上さま、御兩所さまにも御機嫌よろしう。
修理　早々下山を、
左衞　いたされよ。
小笹　お別れ申すでござりませう。
ト悄々として立上り、花道の方へ行く。此時本釣鐘 烏笛になり、正面の古廟の左右へ指金の烏大分に群がる。
光氏　やゝ、あの鐘は最早曉。
小笹　里を離れし深山に、鷄の啼く音は聞えねど、
光氏　告ぐる烏のかしましく、古廟の邊へ群がるは、

小笹　若しや凶事でもなければよいが。

光氏　是れが別れに、

小笹　えゝ、

光氏　まだ行かぬか。

小笹　いえ、參りまするでござりまする。

ト谺の合方、山おろしにて小笹しを〳〵と花道へはひる。光氏是を見送り不便だといふこなしよろしく、

修理　いざ我々も、

左衞　下山いたさん、

光氏　どりや、御同道、（ト袴の塵を拂ふを道具替りの知らせ）いたすでござらう。

ト此模樣山おろし本釣鐘、烏笛にて道具廻る。

（武田方本陣の場）――本舞臺四間通し中足の二重板羽目の蹴込み、左右同じく板戸の出這入り、正面金地武田菱の紋散らし襖、軒口へ同じ紋を染めたる白地の幕を張り、舞臺一面に薄縁を敷詰め、總て

武田方本陣假屋の體。爰に廣瀬郷右衞門、飯富三郎兵衞、仁科藤太郎、甘利左衞門、井上文八郎、飯島長左衞門、何れも義經袴大小にて弓に弦を張り、砥石にて矢尻を研いで居る、眞中に珍才茶道の裝坊主鬘へ後鉢卷をして、子役縫包みの猿を相手に木太刀にて試合をして居る、此見得白囃子にて道具留る。と兩人よろしく立廻りトヾ珍才子役の猿に木太刀を打ち落され、散々に打ちすゑられ、

珍才　あッ參つた〳〵。

猿　キヤツ〳〵〳〵〳〵、（ト珍才へ指をさして笑ふこなし、）

三郎　左樣でござる、犬と猿と申したいが、是れが卽ち猿とちん才。

藤太　毛が三本足りぬと聞く、猿に一本參られるとは、

左衞　餘程足りない茶道の珍才、

文八　何うでも茶道は甘口ゆゑ、

長左　料簡までが甘いと見えます。

珍才　えゝ忌々しい山猿め、今度は本氣で立合つてくれう。

猿　キヤツ〳〵〳〵〳〵。（ト珍才へ指をさして笑ふ。珍才むつとして、）

珍才　えゝおのれ茶道を馬鹿に仕をるな。（と有合ふ小弓に矢を番ひ猿を射ようとするゆゑ、）

郷右　こりや〳〵珍才何をいたす、君御祕藏の其猿に、
珍才　手疵を負はせる其時は、
藤太　信玄公のお怒りゆゑ、
左衞　必ず矢などを向けてはならぬ。
文八　先づ〳〵其儀は、
長左　止しにしやれ。
珍才　でも三度まで負けましたから、此儘置くと馬鹿にします。
郷右　はて、試合に負けたは、
六人　未熟ゆゑだわ。
珍才　さるとは〳〵忌々しい、御朱印附きの猿ではある。（ト此内子役の猿木太刀を持つて、珍才の後へ窺ひ寄り、珍才の足を拂ふ、是れにて珍才どうとなり、）えゝ、何をしやあがる。
ト木太刀を持つて立ちかゝる、猿は是をあしらひながら、あちこちと逃げ廻る、此時花道より、ばたばたになり、袴侍一人走り出來り、花道下に居て、
侍　はツ、申し上げます。

鄉右　何事ぢや。

侍　只今上杉謙信公より、當家への御使者として、鬼小島彌太郎殿、陣中へ御入來にござりまする。

鄉右　なに鬼小島が、

六人　入來とな。

珍才　鬼ヶ島なら桃太郎だが、鬼小島とはどんな人だか。

三郎　無駄を申さず此由を、

左衛　信玄公へ申し上げい。

珍才　はッ。（ト木太刀を捨て奥へ行かうとする、此時正面襖の內にて、）

勘助　あいや、知らせに及ばぬ道鬼齋、使者のお迎ひ仕つる。

文八　すりやお出迎ひを、

六人　山本氏が。

ト正面の襖を明け、山本勘助坊主鬘好みのこしらへにて鐵扇を持ち、跛を引きながら出て平舞臺へ、おりる。

勘助　お使者を是れへお通し申せ。

侍　はッ。（ト引返して花道へはひる。）

鄕右　思ひがけなき使者の入來、

三郞　如何なる儀にて、

六人　ござりませうな。

勘助　君に代つて晴行が、是れにて仔細を承はらん。（ト此時花道の揚幕にて、）

呼び　お使者。

ト觸れ込む、是れより序の舞になり、花道より彌太郞、好みの鬘上下大小にて出來り、花道へ留る。舞臺皆々よろしく出迎ひ、

勘助　謙信公より御使者として、鬼小島氏には御苦勞千萬、當家の重臣山本晴行お出迎ひの仕つる。

彌太　これは〳〵山本氏には、お出迎ひ御苦勞千萬。

勘助　何は格別、先づ〳〵是れへ。

彌太　然らば御免下されい。（ト右鳴物にて彌太郞上手へ通り、平舞臺へよろしく住ふ。）

勘助　こりや珍才、お持成の用意いたせ。

珍才　はッ。（ト奥へはひる、勘助彌太郞の樣子を見て、）

勘助　未だ戰場の往來にてお出逢ひ申した事はなけれど、初見參の彌太郎殿、聞きしに勝る天晴御器量
失敬ながら感服仕つる。

彌太　これは〳〵山本氏の痛み入つたる其仰せ、手前に於てもそこ許に、面會いたすは初めてながら、
甲陽方に隱れなき大元帥と呼ばるゝだけ、自然と備はる英士の形相。左こそと感心仕つる。

勘助　鬼小島氏とは事替り、五體不具なる手前ゆゑ、英士などゝは思ひも寄らず、御賞譽に預かり痛み
入ります。

彌太　いや〳〵、假令不具なりとて、數度戰場にて大功を顯はされし山本氏、甲州一の英傑と世に轟き
しそこ許ゆゑ、信玄公の御愛臣、御智略の程思ひ遣らるゝ。

勘助　いや〳〵左いふそこ許こそ、越後方にて鬼と呼ばれ、數度大功を擧げられし謙信公の御愛臣、見
るから筋骨逞ましく自然と備はる英雄豪傑、御手練の程思ひ遣らるゝ。（ト爰へ下手より珍才書院煙
草盆を持つて出で、彌太郎の前へ直す、勘助思入あつて、）して今日の御使者の趣き、如何なる仔細か
某へ、仰せ聞けられ下されい。

彌太　使者の趣きそこ許へ、只今申し述ぶるでござらう。（ト此時奥にて、）

信玄　あいや、上杉家よりの使者とあれば、信玄直き〳〵承はらん。

勘助　あのお聲は、

皆々　我が君樣。

　　ト是より管絃になり、正面の襖を左右へ明け奥より信玄、小忌衣小さ刀中啓を持ち出る、此れへ袴小姓二人太刀を持ち附添ひ出て、信玄二重眞中へ住ふ、彌太郎此體を見て、

彌太　これは〳〵信玄公には、御老體のお厭ひなく、御直談を下されんとは、使者に立つたる手前の面目、祝着至極に存じまする。

信玄　御身に於ても遠路の所、使者に參りし役目大儀、して隣國の謙信殿より、申し越されし其仔細は、

彌太　はッ、只今演舌仕つらん。（ト管絃きつぱりとなり、）此度主人謙信儀、本國を出馬なし、當地へ勢を向けんと欲す、仔細と申すは先達て上田ケ原の一戰に、敗北なしたる村上殿、春日山へ落ち延びられ助力を乞うて舊領へ歸城なしたき加勢の頼み、迷惑とは存ずれども弓矢取る身に候へば、武門の情は相互ひと、軍馬の用意も義に依つて承諾なせし上からは、何卒村上義清殿を、舊領へ、元の如く歸城いたさせ申したく、戰に及び候なり、然し元より好まざる戰爭の儀に候へば、隣國の誼を思はれ、先づ此度は謙信にお免じあつて義清殿を、葛尾へ歸城の儀お許しあらば、主人に於ても出馬を止まり信甲越互ひに疎意なき睦をなし、和親の儀を取り結ばんが、一旦勝利を得ら

れしゆゑ御不承知に候や、和戰の否やを承はり、立歸れとある申し附け、使者に參りし其仔細、斯くの通りにござります る。

ト是れにて信玄思入あつて、

信玄　すりや、それ故の御使者とな。

勘助　して我が君のお答へは、如何遊ばす。

六人　御賢慮なるか。

信玄　御念の入りし御使者の趣き、一通りは承知いたす、申さば當時日蔭者の落武者たる村上義淸、弓矢の義理を思はれて、お取上げの段感心いたした。

勘助　すりや我が君には謙信殿の義心に愛で、村上氏の歸城をお許しなさるゝとな。

信玄　いや其歸城は許し難し。

彌太　なに、歸城の儀は御不服とな。

信玄　然れば其儀も餘人より申し越されしことならば、早速村上義淸に歸城の許容もいたすべきが、今日の本にて猛將の聞えを取られし謙信殿ゆゑ、其鋒先きにおぢ恐れ、承諾せしと言はれなば、末代までの家の恥、此儀は承引いたされぬ。

勘助　誠に君の上意の如く、應仁以來世の中は蜂の如く散亂なし、其國々に一天下を掌握なさん名將のある中にても北國の、謙信殿と聞く時は隣國にても恐れをなし、手出しをなさぬ猛將ゆゑ敵に取つては望む所。

彌太　すりや御承引ござらぬとな。

信玄　折角のお扱ひながら、戰爭なせし其上にて、否は勝負に任すべしと、謙信殿へ傳へられよ。

彌太　委細承知仕つる。(ト勘助珍才に向ひ、)

勘助　それ。用意の酒肴是れへと申せ。

珍才　はッ。

ト下手へはひろ、直に下手より近習二人、三方へ七五三の杯を載せ持つて出ろ、一人は干肴を入れし折臺を持ち、珍才鐵の銚子を左右に持ち出來り、皆々彌太郎の前へよろしく並べろ、彌太郎是れを見て、

彌太　こは折角のお持成ながら、遠路の使者にござりますれば、御酒の儀ばかりはお預け申す。

信玄　いや〱それは入らぬ辭退、鬼小島には上杉家にて、大酒なりと聞き及ぶ、寸志の馳走ぢや過して立ちやれ。

彌太 ではござれども餘り大杯。

勘助 いや其杯に一獻位は、呑んだやうにも思はれまい、折角主人の饗應ゆゑ、辭退めされずお過しなされい。（ト此内彌太郎酒の呑みたきこなしよろしくあつて、）

彌太 左樣に仰せ下さるを、御辭退申すも何とやら、とても頂戴いたすなら、是れにて一獻頂戴いたさん。

ト三組の下の杯を取上げる、諸士六人是れを見て、

鄉右 すりや三組の七合入りにて、

三郎 鬼小島殿には、

六人 お過しあるとな。

彌太 何卒是れへなみ〳〵と、溢るゝ程におつぎ下さい。

珍才 はツ。（ト銚子を持ち酌をなし一つにて足りぬゆゑ二つの銚子をあけてしまふ、）どれ、お替りを急いで參らう。

ト銚子を持つて下手へはひる、此體を見て皆〻呆れし思入、彌太郎酒の泡を吹く事などよろしくあつて、

彌太　いや、此匂ひが鼻へ入ると、腹の蟲めが待兼ね居るてっ（ト一息にぐつと呑み干し、舌打ちをなし、）はて、よい御酒でござるなあ。

勘助　それ、お替りを早くいたせ。（ト下手にて、）

珍才　はッ。（ト答へて件の銚子を二つ持ち出來り、）いざ、お酌をいたしませう。

彌太　是れは度々憚りでござる。（ト右の如く酒を呑む、珍才銚子を持つて下手へはひる。彌太郎跡を待兼る思入にて、）いや〳〵、少々燗が通りませいでも、溫いので苦しうござらぬ。

勘助　それ、お替りを早く〳〵。

珍才　はッ。（ト答へて廣蓋へ銚子を七つ程載せて持つて出で來る、彌太郎是れを見て、）

彌太　いや、流石は太守の御陣屋だけ、差支へのなきお持成、有難い仕合せでござる。駈け附け三獻とやら申さば、今一杯頂戴いたさう。

珍才　はッ。（ト銚子を持ち酌をする、彌太郎よろしく呑み干し、）

彌太　いや、太守と申さば信玄公にも、定めて御酒をお好みならん、逆ながら差し上げまする。

ト懷紙にて杯の口を拭ひ、三方へ載せ信玄の方へ差出す、信玄思入あつて、

信玄　こは折角の杯なれど、信玄此程仔細あつて、諏訪明神へ願酒いたせば、其儀は平に許しくりやれ。

彌太　なに太守には御願酒とか、はてさて話せぬ、いやさ、酒も話しも同じ事で、相手がなうては過せませぬ。然らば山本道鬼殿、お相をお願ひ申したい。
勘助　いや折角の儀でござるが、性得手前下戸なれば、其お相の儀は御免下され。
彌太　なに、そこ許には下戸でござるか。
勘助　いかにも百萬騎の强敵にも、後を見せぬ心得なれど、酒ではとんと閉口でござる。
彌太　是れもやつぱり信玄殿と同じやうにお預けか、何さま山本道鬼殿と、お名前にいはるゝだけ、是れ等がどうき相求むると、申すのでがなござらうて、はゝゝゝ。
ト嘲笑ふゆゑ、信玄殘念なるこなしにて、
信玄　列座の内に此相をいたすものはないか、何うぢや。
鄕右　はッ、一合二合の御酒なれば、隨分お相も仕つれど、
三郎　一盞うけても七合入り、二杯呑めば一升四合、
藤太　駈附け三獻重ぬる時は、三七二升一合入り、
左衛　その三獻を一息に、呑んで動ずる氣色もなく、
文八　大丈夫なる彌太郎殿、それに太刀打ちいたす時は、

長左　酒で前後を忘却いたせば、斯く亂國の陣所にて、
鄉右　此お相手は、
六人　出來ませぬ。
信玄　然らば珍才相をいたせ。
珍才　えゝ、どういたして私に。
信玄　はて首途を祝す出陣の、血祭りになす其方ゆゑ、命替りぢや相をいたせ。
珍才　どういたして此やうな底拔け上戶と、いやさ、そこの所に拔け目のない、鬼小島樣でございますから、お相がなうても今一獻、お過しなされて下さりませ。
　　　トがたがた顫へて居る、彌太郞思入あつて、
彌太　いや、扨々當家の御陣中には、手前のやうな英雄が、いやさ、手前のやうな醉漢が、只の一人もないと見える、然らばお相と二ぜんごみに、もう二三杯かけ附けませう。
珍才　ても呆れかへる。
彌太　や。
珍才　いえ、有難い思召しでござりまする。（ト銚子を持つて彌太郞の側へ行く。）

彌太　どれ、なみ〳〵と引受けようか。（ト件の杯を取上げる、此時額岩寺光氏花道の揚幕にて、）

光氏　あいや、其杯暫く。（ト聲をかける、皆々向うへ思入あつて、）

三郎　何者なるか、暫くと。

勘助　只今聲を、

皆々　掛けたるは。

光氏　それへ參つて駿河守、御酒のお相手いたすでござらう。

彌太　なに、相をして下さるとな。

郷右　すりや額岩寺、

皆々　光氏殿が。

ト是れより序の舞の入りし合方になり、花道より以前の光氏、上下無腰にて出來り、直ぐに舞臺へ來り、下手にはツと平伏なす、彌太郎光氏を見る、

光氏　ハツ、君の御前も顧みず、押して推參いたせしは、近頃無禮に似たれども、日頃好める大酒のお相手、望む所にござりまするゆゑ、罷り出ましてござりまする。

ト是れにて信玄悦ばしきこなしにて、

信玄　おゝ額岩寺光氏には、よくぞ推參いたせしぞ。
勘助　扨は貴殿は日頃より、御酒がお好きでありしよな。
光氏　如何にも手前は大酒を好むが、父の代より讓りでござる。（ト彌太郎思入あつて、）
彌太　額岩寺光氏殿とは、葛尾の城主村上殿の元御家臣でござらうな。
光氏　仰せの如く手前事は、元村上の附屬ながら、先頃當家へ降人となり、幕下に屬す駿河守、此末ともに彌太郎殿、お見知り置かれ下されい。
彌太　聞きしに勝る天晴骨柄、いやさ、天晴詞に違ひなく、手前の相をなさるゝか。
光氏　いやもう、元より好める御酒のお相手、其太刀打なら何處までも。
彌太　それは千萬忝けない、然し主家の滅亡を餘所に見なして降參なす、二心では覺束ない、いやさ覺束ないと主家を見限り、威勢盛んの甲陽方へ、降參を召さるゝとは、未然を悟る當世武士、誠に感服仕る。
光氏　仰せの如く舊主義淸、我が軍法を用ゐずして益なき戰ひを好みまするゆゑ、我また主人を見限りまして、退身なすもやはり未然を、（ト彌太郎へ思入あつて氣を替へ、）未然を計り名君たる當家へ降伏いたせしは、子孫の榮えを思ふがゆゑ、當世武士とは忝けない。

彌太　然らば酒の滿願寺ではない、大酒の額岩寺殿、早速ながらさしまするぞ。
光氏　其御念には及ばぬ事。
彌太　いや、こりや面白く、
兩人　なつて參つた。（ト是れより誂への合方になり、珍才酌をなし、彌太郎酒を呑み、）
彌太　いざ、光氏殿御免下され。
光氏　なみ〳〵と頂戴いたす。（ト眞中へ出で杯を引受け、珍才酌をして光氏一息にぐつと呑干す、皆々是を見て、）
信玄　額岩寺には斯程まで、大酒なりとは思はざりしが。
勘助　智勇ばかりか何事にも、後れを取らぬ光氏殿。
鄉右　我々感服。
六人　いたしてござる。
光氏　いや其やうに御賞美あつては、手前に於ても身の面目、どうぞ今一獻重ねませう。
珍才　いや、世の中に底拔けも。
光氏　や。
珍才　いえなに、そこで珍才めも危い所を脫けられます。（ト酌をする、光氏件の酒を呑み干し、）

光氏　どうぢや、お燗はよろしいかな。

珍才　いえ、只今直きに參りまする。（ト銚子を載せし廣蓋を持ち下手へはひる、此内彌太郎光氏へ思入あつて、）

彌太　いや改め申すに及ばねども、貴殿のやうな豪傑が、當家へ降參なされずば、上田ヶ原にて村上殿むざ〳〵敗は取られまじきが、やはり故主の義清殿も、下戸の仲間と見えまするな。

光氏　御推察の如く故主義清とんと酒を好みませぬゆゑ、兎角手前を忌み嫌ひ、讒者の詞を用ゐまするゆゑ、既に居城も攻落され、承はれば上杉殿へ逃込みしとやら申す事、それを弓矢の義に依つてお世話下さる謙信公、お禮は詞に、いやさ、お禮を此場で申す筈ぢやが、下世話にいへる他人の天窓、おのれの天窓の蠅を追ふのが、此亂國の習ひなるに、扨々貴殿の御主人には、世界を知らぬ儀でござる。

ト思入にていふ、信玄勘助は是れへ目を附ける、彌太郎こなしあつて態ときつとなり、

彌太　やあ默らつしやい光氏殿、我が主人たる謙信公を醉狂人と言はぬばかり、入らぬ世話だと言つしやれど其村上は御身の爲には恩義を受けし故主ならずや、如何に當今武田方へ降人となり隨身するとも、主家の誹謗をいたすのみか、名義を立てぬく我が主人を、嘲りめさるは不忠不義、聞くも中々穢はしいわえ。

光氏　いや鬼小島殿には御立腹かな、何さま是れは御尤、お氣に障らば御容赦下されい、此通りお詫びいたす。（ト酔ひたるこなしにて辭儀をなす、）大酒はすれど強い片意地、いやさ、堅いを止めて打解けめされい、あはゝゝゝゝ。

珍才　へい、お替りがつきました。

光氏　おゝ左樣か、いや替り目なれば今一獻、改めて返杯いたさう。

彌太　いや〳〵貴殿の杯は、最早手前受け申さぬ。

光氏　是れはきついお見限り、先づ兎も角も呑むといたさう。（ト珍才に酌をさせ。光氏酒を呑み干し、）いや野暮は打捨て此やうに、好める酒を十分に過し、賞美に預かる當家の主人、貴殿も故主を見限りて甲陽方へ隨身召されい。

彌太　えゝ左樣な事は嫌ひでござる。

光氏　いや嫌ひとあれば今一獻、好物故に重ねませう。

ト珍才に酌をさせ、酒を呑み居る。彌太郎思入あつて、

彌太　いや思はざるお持成に、大いに酩酊仕つた、手前は最早お暇申さん。

信玄　さしてもない馳走にて、お引留めをいたすも如何、御隨意にいたされい。

彌太　是れにてお暇仕つる。（ト辭儀をなす。）

勘助　此晴行も計らざる貴殿に面會いたす上は、是れを御縁に又近日、戰場におきお出逢ひ申さん。

彌太　それぞ手前も望む所、信玄公を始めとして、是れに列なる方々は、きつと近日戰場にて、我が手のうちを一太刀づゝ、御返禮にお見舞ひ申さん。（ト言ひながら下手へ來る。）

鄕右　然らば此場で、

六人　我々も。（ト立たうとするを、）

勘助　あこれ。（ト思入にて押へる、光氏杯を持ちしまゝ彌太郎の袖を控へ、）

光氏　然し、是非とも今一獻。

彌太　えゝ不忠の杯欲しくござらぬ。

ト袖を振拂つて花道の方へ行く、此内始終子役の猿二重へ上り、信玄の側に木太刀を持ち遊び居る、此時信玄猿へ思入あつて彌太郎を打据ゑろと呑込ませる、猿は是れを呑込み、木太刀を持ち二重より下りて、彌太郎の後へ窺ひ行き、

猿　キヤア、（ト木太刀を振上げる、是れにて彌太郎後をきつと見返る、猿は是れに恐れてたちたち跡へ下がる。彌太郎につたり思入あつて花道へかゝる、猿又後へ進み寄り、）キヤア。

ト木太刀を振上げる、是れにて彌太郎後を見返り、猿をはつたと睨める。是れにて怖れて猿は其儘猿返りをする、彌太郎思入あつて嘲笑ひ、

彌太　失禮御免。

ト袴の塵を拂ひしやんとなる、是れを切つ掛けに唄になり、よろしく花道へはひる。是れにて信玄きつとなつて、

信玄　こりや珍才、猿めを是れへ連れ參れ。

珍才　ハツ。（トつか／＼と花道へ行き、猿を引立て信玄の前へ連れ行く、）

信玄　予が寵愛の甲斐もなく、恥辱を取らせし憎い奴、それにてきつと打ちすゑい。

珍才　はツ、丁度さつきの返報に。

ト木太刀を持つて立ち掛る、猿は手を合せて信玄を拜む、勘助此體を見て、

勘助　あいや其儀は我が君樣、御容赦あつて然るべし。

信玄　すりや畜類ゆゑ此儘に、打捨て置けと申すのか。

勘助　お止め申すは打ち得ざる、猿めに無理がござらぬゆゑ。

信玄　何と申す。（ト合方きつぱりとなり、勘助前へ進み、）

勘助　此奴が君慮に違ひしは、不屆きの至りながら、流石名智の謙信が、人ある中に人を選み、使者に立てたる鬼小島彌太郎、鬼と呼ばれし程あつて自然と面に英傑の勇氣を含む剛のもの、打つべき隙のあらざれば、中々以て畜類の及ぶ所に候はず、何卒御賢慮廻らされ、彼れめが咎をお許しあるやう只管願ひ奉つる。（ト是れにて信玄思入あつて、）

信玄　何さまそちが言へる如く、左樣な儀にてありつらん。然らば咎は許しくれん、次へ引立て遠慮させい。

珍才　はツ、猿めきり／＼歩み居らう。（ト引立にかゝる、此時猿は珍才の油斷を見すまし、）

猿　キヤツキヤ。（ト珍才の顏を引つかき逸散に下手へ逃げてはひる。）

珍才　えゝ畜生め、待ちやあがれ。（ト追掛けてはひる、光氏思入あつて、）

光氏　扨今日は思はざる御酒を頂戴仕り、駿河大いに酩酊いたし、有難い儀にござりまする。

信玄　いや其方が參りしゆゑ、鬼小島めが大言の鼻を挫きし我が大慶、酒の恥辱は雪ぎしかど、猿めが後れを取りしゆゑ、只それのみが殘念なり。

光氏　其儀は只今山本氏が、君へ言上いたせし如く、敢て猿めが不覺にあらず、人間なりとて並の者では彼れめが不意は打たれまじ。左はさりながら我が君樣には、何ゆゑあつて日頃より、猿をお愛

しなされまするな。

信玄　それにも仔細あつての事、織田の臣下にさるものありと豫て噂に聞き及ぶ、彼の木下藤吉といへる古今獨歩の軍師が、面體猿によく似て居るとやらにて、人呼んで猿といふ、彼れを始終は我が幕下へ手懷け使はん所存、それゆゑ猿を寵愛いたし居るのぢや。

光氏　何さまそれはよき御賢慮、上意の如く御幕下に山本眞田がある上に、木下藤吉隨身なさば龍に翼を得たるも同然、甲陽方は大磐石。

勘助　實に萬卒は得易くして一將は得難きものゆゑ、此程當家へ隨身めされし額岩寺殿のありしゆゑ、日頃大酒の聞えを取りし、鬼小島彌太郎と酒の太刀打ち後れを取らず、戰場なれば一騎駈けの、勝負も同じ大手柄。

鄕右　鎬を削る御馬前にて、

三郎　功名手柄をめさるゝも、

藤太　大杯を引き受けて、

左衞　酒と討死いたすのも、

文八　君へ盡せし忠義は一つ、

長左　誠に感心、

六人　いたしてござる。

信玄　降人以來衆に勝れ忠勤勵む額岩寺、此程よりして折あらば恩賞を遣はさんと、道鬼齋に申し附け襃美の手當ていたし置きたり。こりや晴行、彼の感狀を與へてよからう。

勘助　委細承知仕つる。

光氏　何、すりや、斯ばかりの寸功を、御賞美あつて御感狀とな。

ト此時勘助懷中より奉書の上包みのある立文を出し、件の杯を載せし三方へ載せ、

勘助　光氏殿、君より賜はる御感狀、有難く頂戴めされ。（ト光氏の前へ差出す。）

光氏　ハツ、思ひ寄らざる君の賜、有難く頂戴仕つる。

ト三方のまゝ取つて押し戴く、信玄は勘助と顏見合せ思入あつて、

信玄　心を込めし其感狀、それにて篤と披見いたせ。

光氏　はツ、何かは存ぜず、（ト件の立文を取り押戴き上包みを取り中を開き見て、）やゝ、是れは。

ト びつくり思入、

信玄　それにて汝讀み上げい。

光氏　はッ。（ト讀み兼ねて居る。）

信玄　えゝ、讀めと申すに。（トきつと言ふ、是れにて光氏ぢつと思入、勘助此側へ立つて來り、）

勘助　讀まずば手前が、（ト件の立文を引取り、三人顏見合せ氣味合の思入、是より横笛の入りし合方になり、勘助上手にて件の立文を開き立身にて、）「一、其方儀先頃當國上田ヶ原に於て村上左衞門義清と戰爭の砌り、當家へ降伏いたすといへども、深き所存のこれある儀にて、舊主村上義清方へ竊に通達いたす條、重々不屆至極に付き斬首申し附る者也。」

六人　やゝゝゝゝ。（トびつくり思入、光氏も思入あつて態と氣を替へ、）

光氏　此身に取つて露聊か左樣な覺え嘗てなし、何ゆゑあつて我が君には、忠臣無二の某を斯くお疑ひなされまするぞ。

勘助　やあ何ゆゑとは愚々、先達てより暗夜に及び、竊に陣所を脱出し、舊主の古廟へ會合なし軍議を合し味方に裏切り。

光氏　や。

勘助　覺えないとは申されまいがな。（ト光氏思入あつて、）

光氏　そは何者が左樣な儀を、君へ讒言いたせしか、察する所某へ遺恨を含む阿諛の佞臣、林相木の

兩名が偏執の心より斯かる讒をば構へしか、餘人は扨置き晴行殿まで、斯く御疑念を起さるゝは
何とも以て心得ず、但し是れには證據あつてか。
信玄　おゝ證據なき儀を疑はんや。それ晴行、密書を見せい。
勘助　はッ。（ト懐中より幕明の書狀を取出し、）證據と申すは此一封、御身が自筆でござらうがな。
ト光氏の前へ投出す。
光氏　やゝ、是れは、（トびつくりして氣を替へ、件の書狀を取上げ見て、）何さま是れは我が手跡に、よくも
似せたる書狀ながら、手に取り見れば正しく謀書、こは何者の仕業なるか。
勘助　やあ、さりとては卑怯未練、それでも知らぬと陳じめさるか。
光氏　假令未練と言はるゝとも、覺えなき儀を何ゆゑに、無實の罪に伏さんや。（ト信玄下手に向ひ、）
信玄　やあ〳〵窪田、早や參れ。
右膳　はッ。
ト答へて下手より幕明きの右膳、十手捕繩を持ち出來る、光氏南無三といふ思入あつて、
光氏　やゝ、扨は汝は裏返つたな。
右膳　降參仲間に裏切の、徒黨と見せて其密書、易々取り得て我が君へ、言上なせし此右膳。

信玄　先頃當家へ降人となり、味方と見せて我々を、計れば我又汝が胸中を、計り知つたる天眼通、

勘助　林相木の兩名により、御身の行跡問糺せば、二君に仕ふる武士ならず心得難く存ぜしゆゑ、態と君にはお心許し、其場で先陣申し附けしに、案に違はず先手の旗色自然と備への亂れしは、是れ降人にあらざる證據、なれども流石大智略、首實驗の時に臨み、鷺を烏と言はざるは手強き御身と推察なし、手段を廻らし降人のうちで誠を顯はせし、窪田右膳を說諭なし、篤より附置く隱し目附、最早遁れぬ隱謀露顯、何と是れでも陳じめさるか。

光氏　さあそれは。

右膳　以前の誼某の、捕縛を受けて伏罪めさるか。

光氏　さあそれは。

信玄　飽くまで知らぬと申し張るか。

光氏　さあそれは。

三人　さあ、

光氏　さあ、

四人　さあ〳〵〳〵。

勘助　罪に伏して光氏殿、疾々それへ直りめされい。
　　トきつといふ、是れにて光氏是れ迄といふ思入あつて、
光氏　もう此上は、信玄覺悟。（ト懷中より短刀を出し信玄へ切つて掛る、勘助右膳是れを支へる。）
信玄　者共、それ。
六人　はッ。
　　ト立上り、有合ふ弓に矢を番ひ、左右へ別れ光氏を矢衾にて取巻く、此れより誂への早き鳴物になり勘助は鐵扇、右膳は十手にて光氏へ打つて掛る、光氏是れを相手になし勘助は跛の立廻りよろしくあつて、トゞ右膳光氏の隙を窺ひ後より組附き羽がひじめにする、勘助は鐵扇にて光氏の眉間を打つ、光氏片手にて眉間を押へながら件の短刀を信玄へ打附ける、狙は外れて上手の柱へ仕掛けにて白刃立つ、信玄は二重眞中にて太刀を持ちきつとなる、跡皆々引張りよろしく、どん〳〵にて此道具廻る。
（千曲川の場）――本舞臺一面の平舞臺、向うに遠山を見たる河原の遠見、裾通り一面砂地の手摺、諸所に蛇籠を並べ上下蘆原、よき所に柳の立木、日覆より同じく釣枝、下手に信州千曲川と記せし榜示杭、此處に幕明の修理大夫、左衞門立ちかゝり居る、此見得浪の音にて道具留る。

左衞　いやなに和田氏、最早是れまで逃け延びますれば、越路へ續く千曲川、先は安堵と申すもの。
修理　手前も左樣存ずれど、只殘念なは窪川右膳が、敵へ與して居つたるを、心附かぬが一世の誤り。
左衞　只今隊長光氏殿には陣所に於て縛せられ、承はれば此向うの、鳥打峠の麓にて、斬首せられて梟木に掛けられると申す事。
修理　それのみならず殘念なは、先頃舊主へ讒を構へ、額岩寺殿を遠ざけたる、二股武士の林景政、それに同意の相木めと、兩人にて檢使の役目。
左衞　彼等が主君へ讒言なし、光氏殿を遠ざけずば、葛尾の城は落ちまじきに、是れも山本晴行が智計によつて語らはれ、其奸曲の佞人が、忠臣無二の光氏殿の、檢使に立つとは殘念至極。
修理　其刑罪を餘所に見て、逃ぐるは卑怯に似たれども、一先づ越路へ落延びて、時節を計り此鬱憤晴さうではござらぬか。
左衞　何さまそれがよくござらう。
修理　片時も早く立退きませう。
左衞　左樣いたさう。

ト兩人上手へ行き掛ける、此時ばた〳〵になり、上手より番卒六人鎖を持ち出來り兩人を取卷き、

六人　動くな。（ト立ち掛るを兩人びつくりなし）
修理　やあ、何ゆゑの此狼藉、
左衛　無禮いたさば手は見せぬぞ。
○　何ゆゑとは未練千萬、
△　惡事の棟梁光氏が、
□　召捕はれたる上からは、
一　それに荷擔の和田布下、
二　君の御前へ引立て行く。
三　覺悟いたして。
六人　それへ直れ。
修理　さう聞く上は、最う是れまで。
左衛　片ツ端から撫で切りなるぞ。
六人　何を小癪な。
ト是れよりどん〳〵になり、皆々よろしく立廻り、修理大夫は上手、左衛門は下手へ此人數を追込み

てはひる。鳴物打上げ、時の鐘合方になり、花道より以前の小笹走り出來り、直に舞臺へ來り、四邊へ思入あつて、

小笹　あの松平は何れへ行きしか、今朝方宿を立ち出しまゝ、今に戻つて見えぬゆゑ、早う越路へ立ちたうても供がなうては何かに不都合、在所を搜しに出たれども、勝手の知れぬ此信濃路、はて何としたものぢやなあ。（ト當惑のこなし、こゝへ上手の蘆原を押分け、松平中間の拵へ、一本差しにて出で、）

松平　お孃さま、爰に居りまする。（ト小笹松平を見て、）

小笹　そなたは松平、どうしやつたぞいなう。（ト是れより浪の音、合方きつぱりとなり、）

松平　お前樣には此程のお勞れかしてすや〳〵と、今朝はお睡りなすつておいでゆゑ、お起し申すもお氣の毒と、宿を立ち出で諸所方々、見物をして居る内に、ひよんな事をば聞き出しましたが、あなたもお聞きなされましたか。

小笹　なに、聞いたかとは、そりや何を。

松平　さあ殿樣の豫ての密計、窪田右膳が變心より、露顯となつて召捕られ、お仕置におなりなさるとやら。

小笹　えゝ、そりやまあほんの事かいなう。

松平　ほんの嘘のと今爰で一味荷擔をなされて居た、和田布下の兩所にも數多の士卒に取卷かれ大騷ぎでござりましたが、下手を賣つたら此方も命に拘はる大事ゆゑ、あの蘆原の蔭へ隱れ、段々聞けば殿樣には、今日川向うの鳥打峠の麓に於て首を切られ、お果てなさると申す事。

ト是れを聞き小笹こなしあつて、

小笹　さう聞く上はわらはの役、其刑罪の場所へ近附き、警護の武士を切散らし、父上樣を易々とお助け申さにやならぬわえ。

松平　いや〳〵それも迂濶には、刑罪の場へ近寄れませぬ。譯と申すは先頃まで、味方でありし佞人の林相木が殿樣の、檢使の役に立つとやら。

小笹　すりやあの林三郎右衞門が、今日の檢使に立ち居るとな。

松平　それゆゑ滅多に仕置場へ、顏出しなどはなりませぬぞ。

小笹　いや〳〵それなら猶の事、恨みを晴らさにやならぬわいの。

松平　そりや又なぜでござります。

小笹　林の爲に御主君のお家が沒落せし上は、積る恨みの三郎右衞門一太刀なりと恨までおかうか。

トきつとなる、此内松平始終小笹の顏を見て居て、見惚れる思入よろしくあつて、

松平　いやお出來しなされたお孃さま、さう聞く上は下郎めも、及ばずながらお助太刀を、いたしまするでござりませう。

小笹　そんなら早う此川を、向うへ越して待たうわいなう。

松平　さあ越して待たうと仰しやつても、水勢早き千曲川、どうして〳〵女の足で、此水中が渡れませう。

小笹　そんならそなたわしを背負ひ、向うへ越してはくれまいか。

松平　そりやもうあなたの事だもの、命を賭けて助太刀まで、いたす心の此松平、向うへ越すのは造作もないが、たゞぢやあ何うも越されませぬ。

小笹　えゝ最う、かゝる大事の其中で金錢づくの事ではない。禮は跡にて何なりと、望み通りに遣るわいなう。

松平　いえ、金錢のお禮をばお貰ひ申す望みはない。其お禮ならお孃さま、自由になつて下さりませ。

小笹　えゝ、自由になれとは、そりや何を。

松平　さあ、わしにあなたの身を任して。

小笹　え、何と言やる。（ト是れより誂への合方になり、松平捨石へ腰を掛け。）

松平　利口なやうでもまた手入らず、流石おぼこに色氣の所は、遠いと見えて長の月、そつちに心は附くまいが、こつちは疾から首ッたけ、惚れて主人の介抱も親切づくから取り入つて、日頃の思ひを遂げようと屋敷育ちの片意地を、擦つて勤むる此松平、名にも由縁とまつ折も天の與へか今此川、向うへ渡つてしまはねば仕置の場所へ近寄れずと、頼む淺瀬を踏み外せば深みへはまる首ッたけ、その前方にお孃さま、あなたも濡れてしつぽりと、情のほどをこのわしに測量させて下せえまし。（ト是れを聞き小笹、呆れし思入よろしくあつて、）

小笹　そんなら是れまで親切な忠義者ぢやと思ひしも、斯かる戀慕の下心で、介抱をして居たるとか、難儀を見込んで否應なし、日頃の望みを遂げんとは、見下げ果てたるそなたはなう。

松平　もし〳〵お孃さま、男の味を御存じないから、見下げ果てたと仰しやりますか、欺された氣でたつた一度自由になつて御覽じろ。果ては見下げた松平も、見上げた亭主に可愛くなり、堪つたものぢやあござりませぬ。

小笹　えゝ穢らはしい其やうな、何で肌身を穢さうぞ。

松平　穢らはしいと仰しやつて、わしを嫌へばお前樣は、現在父御の仕置の場へ、立寄る事が出來ませぬが、それもいやだと仰しやるか。

小笹　さあ、それは。

松平　それより爰でたつた一度、わしに思ひを晴らさせて、あなたも望みをお遂げなさい。

小笹　えゝもう、何でそんな。

松平　そんならわしを、お嫌ひなさるか。

小笹　さあ、それは。

松平　但しはうんと仰しやるか。

小笹　さあ、

松平　さあ、

兩人　さあ〳〵。

松平　若しお孃さま、どちらになせえます。（トきつと言ふ。此途端に時の太鼓になる。松平小笹びつくりして後を見返り、松平後へ指をさしながら。）あれお孃さま御覽じろ、三郎右衞門が先きに立ち、繩に掛つた殿樣を、士卒が引立て仕置場へ、あれ〳〵、連れて參りました。

小笹　えゝお傷しい父上樣、しを〳〵として敷革の、上へお坐りなされし樣子。

松平　さあ自由にさへおなりなされば、直に渡して上げますから、蘆間の陰へおいでなさい。

小笹　えゝ、人でなしに何で此身を。

松平　そんならやつぱり父御樣を、見殺しにするお心か。

小笹　さあ見殺しにする心はない。向うへ渡してくれたなら、跡でどうともならうから、早く川をば越してくりや。

松平　いや〳〵跡でといふ詞は、苦し紛れの捨て詞、其約束はけんのんだ。

小笹　とあつて、あれを見掛けながら、どう落着いて居られうぞ。

松平　それゆゑ早く得心して。（ト小笹の袖を捉へるを振拂ひ）

小笹　えゝ、言はうやうない、おのれはなあ。

ト口惜しきこなし、此時浪の音になり、下手より誂へ丸物の小船一艘流れ來る、小笹是れを見て嬉しき思入にて、砂手摺の所へ駈寄り、船の艫綱を手早く捉へきつと思入、松平此體を見てびつくりなし、

松平　やあいづくよりかは其小船、何うして爰へ流れて來たか。

小笹　危急の難儀を日輪の憐みたまひ此小船を、わらはへお授け下されしか。

松平　假令そいつへ乘らうとも此急流に押流され、どうして向うへ渡れるものか。

小笹　そこを渡るが女子の一心、やはか越さいでおくべきか。

松平　さう言や、いつそ艫綱を。

小笹　妨げなさば、容赦はないぞ。

松平　所を斬うして。

卜刀を拔いて、小笹の持つて居る毛綱を切らうとする、小笹是を切らせまいといふ立廻り、此内始終浪の音早き合方にて、小笹松平の刀をもぎ取り、肩先きを切下げる、此れにて松平たぢ〳〵となる、此間に小笹件の船へ飛乘る、松平よろぼひながら毛綱を捉へ船を引き戻さうとする。是れにて小笹短刀を拔き毛綱を切る。浪の音烈しく、船は上手へ流れ行く。松平綱を持ちどうとなり、起上つて是れを見送り殘念なる思入にて、

松平　えゝ思はぬ小船が來たばつかり、仕組んだ事もぐれ蛤に、大事な玉を逃したが、何でも船は水下へ矢を射る如くに流れ行き、川霧深く見えわかねば、其行方さへ白浪に揉まれてあせる戀の淵、はて忌々しい。（卜蛇籠へ足を踏掛け、伸び上つて上手を見ようとして肩の疵が痛む思入にて、こちらへ來り肩を押へ）あいたゝゝゝゝ。（卜下に居る、爰へ下手より船頭、船を尋ねる心にて出來り、）

船頭　何でも船はこつちの方へ、流れて來たに違えねえ。（卜言ひながら松平に行當る。）

松平　えゝ、氣を附けて歩け。（卜船頭松平を見てびつくりなし）

船頭　や、こりや血だらけだ。

松平　早打肩をば、（ト手拭を出して肩へ當てるを、道具替りの知らせ）切つたのだわえ。

ト血糊を拭ふ、此模樣浪の音にて道具廻る、

（鳥打峠麓の場）――本舞臺後一面鳥打峠の書割、上下岩組の張物にて見切り、此裾へ武田菱の紋附いたる幕を張り、よき所に松の立木、日覆より同じく釣枝、總て信州鳥打峠麓の模樣、舞臺雨落より浪打際、砂地の張物を出し、眞中に以前の光氏、着流しお仕着と見ゆる御納戸の紋附にて菱繩に掛り、敷革の上へ住ひ、後に士卒二人繩取りにて附添ひ、上手に三郎右衞門、袴ぶつ裂き羽織大小にて陣笠を冠り、床几にかゝり、下手に序幕の市兵衞袴股立襷がけにて白鞘の刀を持ち控へ居る、左右の後に士卒六人棒を持ち控へ居る、此見得山おろし時の太鼓にて道具留る。

三郎　こりや光氏、面を上げい。いやさ此期に及び千悔なし、假令如何程詫び入るとも最早罪科は遁れぬ所、とても死ぬなら武士らしく辭世の一句も申し殘し、首を差延べ潔く鬼籍の數に入るがよい、そこが以前の誼甲斐、暫しの猶豫はいたしくれん。

市兵　然し葛尾の村上家で軍師と呼ばれた額岩寺、心柄とて縛り首討たれて最期を遂げるとは、扨々み

じめな此死にざま、冥土へ行ても極樂の佛の側へは行かれまいが、せめて三途や六道に迷はぬ用心したる上よく見當を附けて置きやれ。（ト此内光氏兩眼を閉ぢぢつと差俯向き居て、此時顏を上げ、）

光氏 默らう、こやつ等阿諛諂佞の奸賊どもに詞を交すも穢はしければ、只恭順の他念なく、默念として控へ居ればよいかと心得鼠輩の雜言、わが金言を殘せしとて、汝等如き恥辱を存ぜぬ蒙昧無道の曲者の、必ず耳には入るまいが、今身が坐したる敷皮に等しきながら人倫の、形をなせし獄卒ども性根があらば某が、今際の遺言承はれ。（ト此れよりかすめて浪の音、誂への合方になり、）瓦となつて全からんより玉となつて碎けよとは、是れ先哲の譬ながら、左まで古言を守らずとも、せめて四民の上に立つ武士の身は義を重んじ、忠を守りて一命を輕んずるのが末代まで、死しての後の名を惜しむ皇國人の魂なるに、正しく三代相恩の主君を捨てるのみならず、當座の私慾に心迷ひ敵へ内通なせし上、讒を構へて良士を遠ざけ、敗軍の虚に乘じ城内一時に放火なし、數代續きて連綿たる主家を滅亡させたるは、言語に絶せし不忠不義、見よ〳〵今に汝等は天罰の報い來て、野外に屍を晒すこと鏡にかけて現然たり。我にも惡徒を取挫ぐ手段はあれど、舊主の家危き事を悟りしゆゑ、表に不忠の汚名を取り、假に降伏なしたるも呉王に隨ひ越王を再び世に立て忠を顯はす、彼の范蠡が例に倣ひ、會稽山の旗揚げを待ちし甲斐なく赤心も、畫ける餅と空しく

なり、露顯に及び縛せられ、今斬害の刃に伏すとも忠義の美名は末世に朽ちじ、汝等如き奸賊と席を列ぬる光氏ならず、過言を吐かずと謹んで、切損ぜぬやう首級を擧げい、無益の舌頭默し居らうぞ。

トきつと言ふ、三郎右衛門是れを聞いてせゝら笑ひ、

三郎　いや引れ者の小唄とやら、さりとは哀れ憫然の末期に至り其戲言、如何にも汝がいふ如く、甲陽方にて武田家の礎なりと呼ばれたる山本氏の賴みにより、それなる相木市兵衛殿を、同志に語らひ、先達て暗愚の將たる義清に、附添ふ軍師の汝をば、讒言なして遠ざけさせ、味方の指揮が拙いゆゑ忽ち戰に負色の、立ちしを見極め城内より、出火させたるそれ故に、僅か一日掛らずして、葛尾城は落去となり、今武田家にて信州を掌握なすも我が働き、其恩賞に降人の、某ながら五百貫知行を取りて此登庸、それに引替へ目前に見るも不便な縛り繩、扨々頑固と申すものは、取合ひ難きものぢやてなあ。

市兵　仰せの如く某も其周旋をいたしたゆゑ、三百貫に取立てられ思ひ掛けなき立身出世、爰が世界の見ゆる所、何時がいつまで愚將の側にこびり附いて居る時は、其身ばかりか妻子まで、無慚な死をばさせた上、末代愚の汚名を取り、死後の恥辱は雪げまい。

三郎　それを美名が殘るなどゝ、おのれ一人道理を附け。
市兵　盛んなものを譏るとは。
三郎　はてさて、たはけた儀でござる。むゝはゝはゝゝゝ。(ト嘲笑ふ、光氏無念の思入よろしくあつて、)
光氏　美名が殘るか殘らぬか、後日に至り思ひ知れ。
三郎　おゝ、其姓名を捨札へ、罪の次第と諸共に、書き記したる其上に、
市兵　千曲川原へ梟木に掛けられたなら此末に、定めて美名が殘らうわえ。
光氏　假令斬首に逢ふとても、我が一念は此土に止まり、恨みを晴らさで置くべきか。
三郎　首を刎ねられ死んだものが、此土に念が止まつて無念の恨みを晴らすとは、切でがあつて面白い。
市兵　それが所謂佛家の方便、何で恨みが晴らされよう。
光氏　恨みを晴らすか晴らさぬか、いで〳〵斬首いたして見よ。
三郎　おゝ面白い相木氏、首打落して御覽なされい。
市兵　いで成敗を行ひくれん。(ト件の白鞘を抜放し下手にて刃へ手桶の水を掛け、素振りをなして光氏の後へ廻り、)今が最期だ。
ト刀を振上げる、此時光氏後をきつと見返る、是れにて市兵衞ぶる〳〵と顫へ出し、切兼ねて居るゆ

ゑ、三郎右衞門是れを見て氣を焦ち、

三郎　相木氏如何めされた。

市兵　いや、何ともござらぬ。（トやはり顫へて居るゆゑ、光氏後を見返り、）

光氏　切損ぜぬやう、すつぱりいたせ。

市兵　いふにや及ぶ。（ト刀を振上げる、是れにて光氏きつと見返るゆゑ、市兵衞顫へ出し切兼ねて居る。）

三郎　やあ、其御猶豫は見苦しい。手前が代つて切りませうか。

市兵　それには及ばぬ。（トやはり顫へて居るゆゑ、）

光氏　えゝ、大腰拔めが。

トはつたと睨める、是れにて市兵衞思ひ切つて刀を打下す、光氏身を躱す、此途端に太刀先き狂つて光氏の左の腕にかゝりし繩を切る、光氏腕弛みてすつくと立上る、市兵衞南無三といふ思入にて光氏に切つて掛る、光氏手早く白刃を捥取り、市兵衞を切倒しきつとなる、三郎右衞門是れを見てびつくりなし、

三郎　扨こそ繩拔け、それ者共。

士卒八人　心得ました。

ト棒を持つて光氏へ打つて掛る、是れよりどん〳〵になり、光氏大勢を相手に立廻り、トヾ花道へ追込む、爰へ三郎右衛門下緒の襷掛け、刀を抜いて切つて掛かる、光氏これを相手に兩人早き立廻りよろしくあつて、トヾ三郎右衛門を切倒し、のしかゝつて止めを刺し、

光氏 是れにて思ひ知つたるか。（トよろしく刳る、是れより東西の揚幕にてどん〳〵を打込む、光氏血振ひをなし、體の繩を切拂ふ事などよろしくあつて、）當の敵たる兩人は、思ひ掛けなく討留めしが、斯く八方を十重二十重、取卷かれたる上からは、遁るゝ道なし早や是れまで、舊主の怨敵信玄を討ち漏らせしは殘念ながら、是れにて割腹仕つらん。（ト爰へ市兵衛起上り、よろぼひながら後より組附く、光氏ちよつと立廻つて、きつと引附け思ひ入あつて、）左はさりながら我娘、今曉別れを惜しみしが、思へば一世の名殘りなりしか。

ト又立廻つて市兵衛を切倒し、膝に組敷き刀を腹へ突き立てる、此途端向う揚幕にて、

小笹 父上樣いなう――。

ト呼ぶ、是れにて光氏腹へ突き立てしまゝ、思はず舞臺前へよろ〳〵と出て聞耳立て、

光氏 はて心得ぬ、遙かあなたの川下にて、今父上と呼びつるは、娘の聲に相違なきが、是れも心の迷ひなりしか、思へば耻ぢる子ゆゑの闇。（ト此時又揚幕の内にて、）

小笹　父上樣いなう——。（ト呼ぶ、光氏向うへ思ひ入あつて、）

光氏　はて、何者が迷はせ居るか。

ト氣に掛るこなしにて後へ下り、市兵衞の死骸の上へ腰を掛けるを木の頭、光氏よろしく引廻し刀を拔いて我が手に首へ掛けるを二度目の木の頭、寺鐘の送り、引取り三重にてよろしく、

ひやうし幕

ト幕引附けると浪の音にて繋ぎ、道具出來次第に引返す。

（川原梟首の場）——本舞臺四間通し常足の二重六枚飾り、砂地の蹴込み、後奧深に前幕の河原を見たる夜の遠見、下の方切破りの蘆原よき所に柳の立木、日覆より同じく釣枝、上手に一間筵張りの番小屋、眞中へ三股の青竹へ、誂への額岩寺の首を載せ獄門に掛けてあり、此傍に捨札、上手の番小屋の前に焚火をして、岩松、虎松非人のこしらへにて、一升德利筒茶碗にて酒を呑み居る、此模樣浪の音禪の勤めにて幕明く。

岩松　こう虎松醉つて言ふぢやあねえけれど、今日爰へ出た獄門は、いゝと思ふか惡いと思ふか。

虎松　馬鹿な事を言やあがれ、首を切られるくれえだから、惡いにやあ違えねえ。

岩松　それ、それだから手前なんざあ、無學文盲で話せねえといふのだ、あの捨札に書いてあるにやあ、信州葛尾の城主であつた村上義清樣といふ人の、家來の內でも重役の額岩寺光氏といつて、豪氣な人だといふ事だが、それが甲州の武田家へ僞つて降參して、信玄公を殺さうとしたのが露顯をして切られたのだ、そんな忠義な侍が、こんな目に逢ふかと思やあ、おらあ氣の毒で堪らねえ。

虎松　假令氣の毒であらうとも、おら達の知つた事ぢやあなし、惡い事をして首を切られるのは自業自得といふものだ。こつちやあ夜通し番をして、酒の一杯も餘計に呑むのが、當所番人の役德だ、ちつとも氣の毒な事はねえ。

岩松　手前は人情を知らねえから、そんな事を言つて居るが、定めてこんな立派な人だから、妻子眷族もあるだらうし、家來も澤山あつたらうが、其人達が噂を聞いたら、嘸悲しい事だらうと思やあ、おらあ一緒に悲しい。

虎松　極りで手前は泣上戶で、酒せえ呑むと愚癡をこぼすが、何とやらも釣り方で、此信州へ他國から來て村上領を荒されると思やあ、あんまりいゝ心持はしねえのよ。

岩松　時に酒がなくなつたが、今度行くのは手前の番だ。

虎松　おらあ此頃頭の前を、しくじつて居て面が出せねえ、手前行つて貰つて來てくれ。

岩松　そんな事を言はねえで、おらばかりぢや極りが惡い。手前も行つて貰つて來い。

虎松　そんなら二人一緒に行つて、頭の顏が見えなかつたら、姉御にねだつて貰ふとしよう。

岩松　丁度焚物がなくなつたから、一緒に行つて取つて來よう。

虎松　それがいゝ〳〵。

ト右鳴物にて虎松德利を提げ兩人連立つて上手へはひる、鳴物打上げ、是より床の淨瑠璃になる、

〽更渡る鐘の音霞む春の夜も、千曲川原の梟木に、かゝる歎きの雨催ひ、哀れ無慚や亡き跡を、問はんと忍ぶ蘆原の、小蔭を出づる一人の娘、四邊見廻し聲潛め、

ト此内本釣鐘を打込み、下手の蘆原を押分け前幕の小笹、手拭にて顏を隱し出で四邊へこなしあつて、

小笹　此身の歎き父上の哀れ無慚な御最期を、天も憐れみたまひしやら、晴れぬる空も暮れてより、雨を催す眞の闇、幸ひ番の人達が二人連れにて行つたのも、こちらの爲にはよい仕合せ、歸らぬうちに、さうぢや〳〵。

〽消ゆる焚火に探り寄る、斬首の下はあらはには、見え分かねども豫てより、それと覺えの手ざはりに、取り附く竹のふし沈む、歎きも四邊憚りて、

ト此内小笹探りながら件の梟木の下へ來り、竹に縋り愁ひのこなし、此時下座にて一つ鉦を打込む、

若し父上樣、娘小笹でござりまする、ても淺ましいお姿にあなたはおなりなされましたなあ。(トよろしく泣き沈む、是れより床のめりやすになり、)申すも愚癡な事ながら、佞人林三郎右衞門相木市兵衞兩人が、讒言ゆゑに父上には、御主君より疑ひ蒙り、御不興うけて先頃の御出陣のお供も叶はず、すご〳〵お宅へお歸り遊ばし、蟄しておいでなされしかど、次第々々に城内へ櫛の齒をひく注進も味方の負けと聞きたまひ、假令御不興うければとて君の大事ををめ〳〵と、餘所に見做して居られうぞと、鎧着る間もせはしなう君の御前へ駈附けて、一旦危い御難儀をお救ひ申せど落城は近きにありと推量り、其日の軍に敵方へ、降參ありしも一つの手段、

〽それと知らねば世の人は、現在主を見限りて、

あの額岩寺光氏は敵の勇氣におぢ恐れ、降參なせし臆病者、未練者よと言はるゝも厭ひたまはず今日までも、恥辱を忍び信玄に媚び諂うて機嫌を取り、

〽澄みし心を濁り江に、交りたまふ無念さも、

内通なして村上家を、再興するが樂しみと、來る時節の旗揚げをお待ちなされし甲斐もなう、窪田右膳が變心より露顯となりて捕縛を受け、斯かる非業な御最期をお遂げ遊ばすお胸の内、嘸御無念にござりませう、最前わらはが川下の蘆間の陰に忍び居て、父上樣と二聲までお呼び申せば

其念が、屆いたやらして此方をば、御覽なされしあのお顏が、早や今生のお暇乞。

〽あの折敵の圍みがなくば、遲ればせにもお側へ行き、せめて最期は御一緒とお詞交して死なうもの、供に連れたる松平が不義の戀慕に父上の、無慚の御最期目の前に見ながら隔つ千曲川、人目の關にお側へも行くに行かれぬ悲しさを、お察しなされて下さりませ。

〽聲を忍びて憂き事を、繰返してぞ歎きしが、斯くては果てじと心附き、

ト此内小笹よろしくこなしあつて、

こりや泣いて居る所ぢやない、人の來ぬ間に此首級、竊に取り得て寺院へ葬り、死後の耻辱をお隱し申さん。

〽小褄搔いとりかひぐしく、探りて延せど背丈足らず、屆かぬ手先き兎や角と、心あせりし折からに、

ト此内小笹件の首級を取らうとして、背丈の屆かぬこなし、浪の音になり、上手より以前の非人兩人一升德利と焚付を提げ出來り、此體を透し見て、

岩松　や、どうやら胡散な一人の娘。

虎松　扨こそ身寄りの首泥坊。（ト小笹びつくりしてきつとなり、）
小笹　見られしからは最う是れまで、妨げしたら身の上なるぞ。
岩松　おゝ身の上でも當用でも、
虎松　それを渡してなるものか。
小笹　不便ながらも兩人覺悟。
ト腰に差したる短刀を拔き、切つて掛る。是れにて非人兩人件の焚付を打ち付け、小屋の前に立て掛けてある鍬を取つて小笹へ立ち掛る、小笹是れを相手によろしく立廻り、トゞ岩松を投げ返し其上に乘り件の首級を取り、小脇に抱へ向うへ行かうとする、岩松虎松これを見、遣るまいと支へる、小笹立廻つて兩人を後の川へ打込む、是れにてどんと水の音、水煙りぱつと立つ、小笹短刀を拾ひ腰に差し首を抱へ、
此間にさうぢや。
ト上の方へ行かうとしてびつくりなし、下手蘆原の蔭へ隱れる。此時上手より○△等供廻り大勢箱提灯を持ち出て來る、よき程にて内藤修理之助ぶつ裂野袴大小にて出て來る、是れにて供廻り大勢左右下に居る、修理之助四邊へこなしあつて、

修理　こりや番人が居らざる上、斬者の首級も見えぬ樣子。
○　扨は早くも盜賊あつて、
△　是れなる首級を、
皆々　奪ひしか。（ト是れにて修理之助思入あつて）
修理　忠義一途の額岩寺も山本氏の策に落入り、無慚の最期を遂げしゆゑ、せめて首級は君へ願ひ寺院へ葬り遣はしくれと、拙者へ賴みに取敢へず、是れへ參りし甲斐もなく、首級のなきは殘念至極、はて何者が奪ひ行きしか。
ト此時下手蘆原の蔭より、以前の小笹手拭にて顏を隱し首を抱へ出で、差足にて花道へ遁れ行く、供廻り大勢これへ目を附け、
○　あれへ參るは、
皆々　正しく少女。（ト此聲を聞き、）
小笹　えゝ。（トびつくりして花道にべつたりと下に居る、修理之助扨はといふ思入あつて）
修理　いや、詮議に及ばぬ。（ト頷くを木の頭）捨てゝ置きやれ。
トにつたりと思入、此模樣浪の音にて、

ひやうし　幕

ト幕引附けると、花道の小笹立上り、ほつと思入あつて、手拭を取り件の首級を包み、是れを見て愁ひのこなし、此時下座にて時の太鼓の頭を打込む、小笹びつくりして首を隱し、きつと思入。是れより送り三重になり、小笹首を見て愁ひのこなし、又氣を替へて二足三足歩み、愁ひのこなしよろしくあつて、花道へはひる。留めの木にて、跡シヤギリ。

四幕目

信州篠井村藁屋の場
同會村上杉本陣の場

〔役名――上杉輝虎入道謙信、古鐵買七兵衛實は駒澤七郎忠友、石川傳藏、長尾平八郎、大岡常五郎、本庄彌九郎、百姓畑作、同田五右衞門、駒澤三郎忠國、和田平兵衞正行。七兵衞女房お賤等。〕

（七兵衞内の場）――本舞臺三間の間平舞臺、向う暖簾口、上手一間押入戸棚、下手鼠壁此前に古鎧、弓、鐵砲、太刀、馬手差など積んであり、軒口に槍を立て掛け、上の方一間障子屋體、いつもの所門口、柱に古鐵賣買といふ札を掛け、下手生垣後在體、千曲川を見たる遠見、總て信州篠井村古鐵買七兵衞内の體。爰に畑作田五右衞門百姓裝の股引草鞋にて、門口の内に足を出し煙草を呑み居る。お賤前垂

掛け世話女房のこしらへにて、鎧の縅の切れしを繕ひ居る、此見得臼挽唄、かすめて波の音にて幕明く。と右の合方彈き流しにて、

畑作　時にお内儀、お前方は近い頃、越後から越してござつたが、さうだのんしなどゝいふ、

田五　お國訛りが少しもないが、いつたい生れは何處でござるな。

お賤　こちの人は駿河の府中、わたしは越後の高田の產れ、知邊があつてこちの人が、越後へ參つて居ります內、人の世話で夫婦になり、春日山の御城下に幽に暮して居りましたが、生業都合で此信濃へ越して參りましたわいな。

畑作　それで樣子が分りましたが、越後といへば又近々、珍らしくもない甲州と軍が始まるといふ事だ。

田五　よい鹽梅に和睦になり、双方國へ歸ると聞き、やれ嬉しやと思つたら、

畑作　和睦の時に信玄殿が馬上で居たのが失敬だと、謙信殿が腹を立て、

田五　今度は遺恨に遺恨が重なり、一六勝負に遣るとの事だ。

お賤　それはまあいやな事でござります、どうぞ早う和睦になり、穩かにしたうござります。

畑作　それはわし等のいふ事だ、折角作つた田畑を戰の度に蹈み荒され、肥料の錢にもならぬ上、

田五　兵糧方が遲いから飯を一杯喰はせろの、酒があるなら呑ませろのと、實に戰は眞平だ。

畑作　わしらと違つてこちの内は、戰場へ行て分捕した鎧兜や弓鐵砲、陣笠までも買込んで、

田五　人の損する其中で、金儲けをばするといふは、年中戰があるからだ、いやと言つては濟みますまい。

お睦　金儲けならよいけれど、賣人ばかりで買人がなく、元手の金が寢るばかりで、とんと儲けがござりませぬ。一先づ戰が鎭りませねば、賣口がござりませぬから、まことに困り切りますわいな。

畑作　岡目で見るとこつちの内は、毎日しつかり金儲けがあるやうに思はれますが、

田五　成程戰最中では賣人ばかりで買人があるまい、内證を聞かねば知れぬものだ。

畑作　さうして今日も七兵衛どのは、買出しに行かれたかな。

お睦　はい、買出しに參りましたが、今日等は戰がござりませぬから、内で案じもしませぬが、叩き合ひのある時はいつ何時外れ玉か流れ矢に當りまして、怪我を仕ようも知れませねば、内へ歸つて參りますまでは、案じられてなりませぬわいな。

畑作　如何さまそれはけんのんだ、どんな怪我をしようとも、

田五　相手の知れぬ戰場ゆゑ、疵を受ければ受け損だ。

お睦　最う大概に此戰も、どちらか負けて貰ひたいわいな。

畑作　此戰もさう長く叩き合ひをしまいといふは、今度東海道の諸大名が、信玄殿の威勢を憎み、言ひ合せて甲州へ鹽を一切送らぬので、酷く困るといふ話し。
田五　成程これは困るであらう、米があつても鹽がなければ、人の體に力が附かず、何ぼ強い甲州勢でも今に負けるに違ひない。（トこれを聞きお賤思入あつて、）
お賤　そりや甲州の人達は、嘸困る事でござりませうが、斯ういふ戰のある時には、流言とやらいふ事で、無い事をあるやうに言ふものでござりますが、ほんまの事でござりますか。
畑作　いや〱決して嘘ではない、昨日甲州の親類から、わしの所へ知らせて來たのだ。
田五　如何に強情な信玄殿でも、今度ばかりは降參して、越後と和睦をせずばなるまい。
お賤　どうぞ早う和睦になつて、越後から甲州へ鹽を澤山送るやうにしたいものでござります。
畑作　信玄殿が謙信殿に負けさへすれば越後から、直に鹽は送るであらう。
田五　人助けゆゑよい加減に、早く負けてしまへばよいに。
お賤　そこが名に負ふ兩方とも、負けず劣らぬ大將ゆゑ、どちらも負けるといふ事は出來ない筈でござります。
畑作　何にしろ何時までも、爰で戰をされるとは、こんな難儀な事はない。

田五　始まらぬうち畑の物でも、早く拔いて置きませう。（ト兩人立上る。）

お賤　もうお歸りでござりますか。

畑作　おゝ肝腎な事を忘れて居た、竹を割るのに遣ひますから、刀の折れがあつたらば、退けて置いて下さりませ。

田五　わしは獵にも出ますから、よい鐵砲があつたらば、安く賣つて下さりませ。

お賤　こちの人が歸りましたら、左樣申して置きませう。

兩人　そんならお内儀。

お賤　お二人さん。

畑作　どれ一仕事。

兩人　爲て來ませうか。（ト臼挽唄になり、鍬を擔ぎ銜へ煙管にて兩人花道へはひる。お賤跡を見送り、）

お賤　今百姓衆がいつたのが、ほんの事なら甲州では、嘸や鹽に困るであらう、斯うして居ても戰があるので、今日は事なく暮しても、明日の知れぬ世の中ゆゑ、我が身であつたら何うあらうと、人の事とは思はれぬわいな。

ト臼挽唄波の音になり、花道より二幕目の七兵衞、やつし裝脚絆、おしよぼからげ、草履にて、鐵物

を入れし二幕目の籠を擔ぎ出來り、跡より駒澤三郎、同じくやつし裝、三尺帶の上帶、一本差し、脚絆草履菅笠と柳行李の小さなのを割掛けに肩へ掛けて出來り、花道にて、

三郎　そこへ行くのは、七兵衞ではないか。

七兵　はい、七兵衞でござりますが、わしを呼ぶのは。（ト振返り顏を見合せ、）や、思ひ掛けない、お前は兄貴か。

三郎　さつきから後姿が、どうも弟に似て居るから、足早に來て呼び掛けたが、似て居た筈だ、やはりおぬしだ。

七兵　大方内へござつたのだらうが、よい所で逢ひました。

三郎　ちとおぬしに頼みがあつて、それで此方へ出掛けて來たのだ。

七兵　何の用か知らないが、まあわしが家へござらつしやい。

三郎　しておぬしの家といふは、

七兵　向うの藁屋でござります。

三郎　それぢや是れから一緒に行かう。（ト右の鳴物にて舞臺へ來り、七兵衞籠をおろし門口から、）

七兵　お賤今歸つた。（ト門口をはひろ。）

お賤　おゝ、こちの人歸らしやんしたか。
七兵　珍らしい客があるから、蓙でも早く敷いてくれ。
お賤　珍らしいお客さまとは。
七兵　今引合せるから、早くしてくれ。
お賤　あいく。（トお賤花蓙を上手へ敷く。）
七兵　さあ此方へ這入らつしやい。
三郎　どれ、草臥を休めようか。（ト合方になり、内へはひる。）
お賤　これへお通りなされませ。
三郎　いや、蓙などには及ばぬのに。
お賤　いえ、汚穢しうございますから、御遠慮なされずどうぞ是れへ。
三郎　それぢやあ、御免を蒙らうか。（ト三郎蓙の上へ住ふ。）
お賤　若しこちの人、あなたはどなたでござります。
七兵　おぬしに不斷話して聞かした、國に居られるおれが兄貴だ。
お賤　え、そんならお兄い樣でござりましたか。

三郎　かねて噂に聞いて居たが、國を隔てゝ逢ふは初めて、わしは七兵衞が實の兄、三郎助といひます者、心安く頼みます。

お賤　私はしづと申しまして、不束者にござりまする、どうぞ是れから末長く、お目を掛けて下さりませ。

ト辭儀をなす。

三郎　女房を持つたといふ事は、手紙で知らせて寄越したゆゑ、近附きがてら去年から、尋ねて來ようと思つて居たれど、甲斐と越後の戰爭で、少し靜になつたらばと、つい延び〳〵になりました。

お賤　汚穢しうはござりますが、初めてゆるゆつくりと、御逗留なされて下さりませ。

三郎　どうでこつちの厄介に、なる積りで出て來ました。

お賤　何は兎もあれ駿河から、貰うたよい茶がありますれば、あれを入れてあげませう。

七兵　いや、それよりか昨日買うた、鹽鰮がうまいから、早く一杯出したがよい。

お賤　お兄い樣は御茶よりか、御酒がお好きでござりますか。

七兵　おれと違つて酒好きだから、ちよつと買つて來てくりやれ。

三郎　酒は何より忝けないが、まあゆつくりと後にしませう。

七兵　後がよければさうしませうが、爰から酒屋が遠いから、今から行つて調へたがよい。
お賤　どれ、一走り行つて來ませう。（トお賤門口へ出る、七兵衞も出て、）若し、どの位取つて來ませう。
七兵　おれもおぬしも呑めねえから。五合あつたら澤山だらう。
お賤　肴は鹽鰮でようござんせうか。
七兵　よくもないが生魚は、藥に仕度くもない信濃。
お賤　玉子でも買つて來ませうわいな。（ト臼挽唄になり、お賤花道へはひる。）
七兵　これ、急いで行くには及ばぬぞ。（ト跡を見送り、時の鐘、門口をしめ、合方になり、侍の思入にて、）兄者人、わざ／＼お出でなされしは、何ぞ密事でござりますかな。（ト三郎も侍の思入にて、）
三郎　如何にも火急の密事あつて、姿を替へて尋ね參つた。
七兵　大方左樣と存ぜしゆゑ、酒を求めに女房を遣はしますれば一軒家、他聞を憚る氣遣ひなし、お心置きなくお話しなされい。（ト三郎思入あつて、）
三郎　實に光陰は矢よりも早く、君命受けて其方が、上杉家の樣子を探りに、間者となりて越後の國へ、入込みしは早や十年、月日の經つは早いものぢや。
七兵　少しの知邊を便りとなし、駿河の者と僞つて古鐵買に身を窶し、傳手を求めて上杉家の、家中へ

廣く出入をなし、敵地の様子を探るうち、疑ひ受けぬ其爲に、人の進めを幸ひと今の女房を持ちしゆゑ、我れを間者と知るものなく、此信州へ出陣の兵士と共に當國へ、轉住なして朝夕に、立入りますれば今にては、馴染も多く上杉家の鑑札受けて陣中へ、自由に出入が出來まする。

三郎　それと申すも其方が、姿は元より物言ひまで、士族と知れぬ平民風、誠商人と思ふゆゑ人も心を許すならん、味方に取りては戰場の働きよりも勝つた事ぢや。

七兵　產れ附いての非力ゆゑ、戰場に於て人並の、所詮働きの出來ぬのを、御存じあつて御主君が、間者の役を命ぜられしは、恐入つたる御眼力。

三郎　そこは天下に無双の名將、强弱を見てそれ〴〵に、人をお用ゐなさるのは、餘の大將の及ばぬ所、是れが筋骨逞ましく鬼をも挫ぐ者ならば、上杉家にても怪みて、心を許す者はあるまい。

七兵　言はるゝ通り兵士にも、寸の足りない體ゆゑ、役に立たぬと見なされて今日まで疑ひ受けませぬ。して今日兄者人が、態々拙者をお尋ねなされ、火急の密事と仰しやりますは。

三郎　他聞を憚る一大事、此家に隣家はあらざるか。

七兵　人家を離れし一軒家、其お氣遣ひはござりませぬ。

ト合方きつばりとなり、四邊へ思入あつて、三郎膝を進め、

三郎　定めて噂に聞いたであらうが、先達てより織田を始め、東海道を領する諸侯、擧つて武田の威勢を憎み、申し合せし者なるか甲斐の國へ鹽を送らず、それゆゑ貴賤押しなべて一國のもの難儀なし、半月過ぎなば鹽無くなり、人命にも拘はる大事、なれども鹽を送りくれよと手を下げ頼むも殘念なり、此上は謙信を短兵急に攻滅し、越後を武田の領地となせば、東海道より送らずとも鹽に困る事なければ、德川織田を始めとして、佐々木齋藤攻め亡し御上洛あらん思召し、されども名譽の謙信ゆゑ所詮尋常の戰爭にては、容易に滅すこと難し、それゆゑ今宵夜討を仕掛け、大將謙信討ち取れば、日ならず越後一國は君の御手に入る事必定、そちに密事の頼みといふは、今宵陣中へ忍び込み、敵の油斷を窺ひて火藥を以て火を掛けくれよ、狼狽いたす其處へ味方一時に討つて入り、上杉家を滅す手段、首尾よく勝利となる時は汝が勤功顯るれば、立身出世疑ひなし、心を用ゐて相勤めよ。

七兵　其儀はお案じなさるゝな、十年この方出入をなし、誰も間者と某を、疑ふ者のござりませねば、今宵陣所へ入込んで、首尾よく事を計らひませうが、して火を掛ける刻限は。

三郎　其刻限は子の刻より丑の刻を限りとなし、其内汝が折を窺ひ火藥を以て火を掛くれば、煙の立つを合圖となし、本陣目掛けて討入る手筈。

七兵　すりや九つより八つまでに、折を見合せ陣中へ火を掛けよと仰しやるか、委細承知いたしてござる。して火藥を御持參なされしか。

三郎　則ち旅の荷物となし、是れへ一行李持參いたした。（ト以前の荷物を出す。）

七兵　慥にお預り申しまする。

ト七兵衞受取る、此以前下手より以前のお賤德利と竹の皮包みを提げ出來り、門口へ來り兩人の樣子を見て窺ひ居る、此時門口から內を覗く、三郎見て、

三郎　や、表へ誰やら。

七兵　南無三大事を。（トつか〳〵と門口へ行き、戶を開けお賤を見て、）や、そちはお賤か。

お賤　あい、今歸りましたわいな。

七兵　それでは今の話しをば、

お賤　思はず門で、

七兵　や。（トぎつくり思入。）

お賤　いえ、何にも聞きはしませぬわいな。（ト合方替つてお賤內へはひる。三郎氣を替へ、）

三郎　おゝ、お賤どの歸られたか。

お賤　大きに遲うなりましたわいな。
七兵　何ぞ肴を見て來たか。
お賤　あい、越後から來た鹽鯛か、肴屋にありましたから、是れを燒いて上げませうと、お肴に買うて
來ましたわいな。
七兵　それはよい物を買つて來た。
三郎　越後の鯛を燒くといふは、幸先きのよい其肴。
七兵　如何さま、鯛には隊の響きもあつて。
三郎　時に取つて忝けない。
お賤　どうあらうかと思ひましたが、お好みなれば此鯛を、直に燒いて上げませう。
三郎　いや早く馳走になりたいが、まだ近邊に據ない用事があれば暮れぬうち、それをば足してゆつ
くりと、後に馳走になりませう。
七兵　さういふ事なら少しも早く、用事を足してござらつしやい。
お賤　お草臥れでござりませうに、御近所でござりますなら、明日おいでなされませいな。
三郎　いや明日といはれぬ急な用事、一走り行つて來ませう。

七兵　それぢやあお前の歸るのを、わしは内に待つて居ります。（ト三郎門口へ出で、）
三郎　然し先きで留められたら、遲くなるかも知れぬゆゑ、さつきの用はおれに構はず。
七兵　もし遲ければ出掛けませう。（ト兩人よろしく思入。）
お賤　左樣なれば、お兄い樣。
三郎　後程馳走になりませう。
　ト臼挽唄になり、三郎七兵衞氣味合の思入あつて、三郎花道へはひる。お賤門口で見送り居る、七兵衞は戸棚より達附を出し、手早く是れをはき刀を出す、お賤これを見て、
お賤　若しこちの人、お前御陣中へ行きなさんすか。
七兵　おゝ兵隊衆に用があるから、今夜ちよつと行かねばならぬ。（トお賤思入あつて、）
お賤　愚癡な事を言ふやうぢやが、緣あつて夫婦となれば、此世ばかりか彼の世まで、わしや添ふ氣でござんすのに、なぜ隱しては下さいます。
七兵　何をおぬしに隱すものか。
お賤　いえ〳〵お隱しなさいます。
七兵　隱すとは、そりや何を。（トきつと言ふ。）

お賤　今宵御陣中へ行かしやんすは、武田方の夜討の合圖に、火を掛けるのでござりませう。

七兵　あこれ、（ト押へ、時の鐘。）そんならおぬしは、一部始終を。

お賤　酒を買うて歸りし折、何やら竊なお話しゆゑ、聞くともなしに門口で、樣子は殘らず聞きました。

ト是れを聞き七兵衛侍の思入にて、

七兵　聞いたとあれば、命は貰つた。

ト刀を拔き切つて掛る、お賤身を躱し、立廻りよろしくあつて、有合ふ雜兵鎧にて刀を押へ、

お賤　あゝこれ待つて下さりませ、命は惜しみはいたしませぬが、お前がわたしを殺すのは、餘所へ大事を漏らさうかと、それゆゑでござんせうが、今日の今まで故郷を隱し、越後の者といひしは僞り、誠は甲斐の產れにて、元は武田の家來の娘。

七兵　何と言やる。

お賤　父さま事は故あつて、わたしが五つの其年に浪人なして國を立退き、越後高田の笹飴屋五左衛門といふ人が知邊ゆゑにそれを便り、暫く足を留めるうち病の爲に果敢ない最期、便りない身に笹飴屋の世話にてお前と夫婦になりし、其前方より戰が始まり、武田は敵ゆゑ素性を隱し越後の者

といひましたが、元は武田の家來ゆゑ、悦びこそすれ一大事を、何しに人に漏らしませうぞ、疑ひ晴らして下さりませ。（ト鎧を取る、七兵衞思入あつて、）

七兵　今日の今まで越後の產れと、言つたるそちが此期に至り、俄に甲斐の產れといふは、何とも以て合點がゆかぬ。

お賤　お前を甲斐の產れと知らねば、今日まで隱して居たれども、僞りならぬ其證據は、守りの內の臍の緒書。

七兵　すりや、臍の緒書に記しあるとか。

お賤　親の自筆の此書附、とつくりと見て下さりませ。

ト守袋より臍の緒書を出し、七兵衞へ差附ける、七兵衞開き見て、

七兵　天文元壬辰年三月三日誕生、甲斐の國武田家の藩坪內左司馬娘靜江。さてはそなたは坪內の、忘れ遺兒であつたるか。（ト是れにて七兵衞刀を鞘へ納める。お賤思入あつて、）

お賤　父樣ことは同藩の嫉みを受けて浪人なし、越後の國に居るうちも、再び歸參の叶ふやう、明け暮れ願ひし甲斐もなく、病の爲に果敢ない最期、今日まで互ひに隱したる素性を明かせば同家中、今々思へば計らずも、お前と夫婦になつたのは、深い緣でござりました。

七兵　そなたも敵の國ゆゑに素性を隱せば我もまた、姿を窶して上杉家へ間者に入れば素性を隱し、駿河の者と言ひしは僞り、誠は武田の臣下にて、駒澤七郎忠友と申す者。

お賤　互ひに包み隱したる素性を明せば産神も、替らぬ甲斐の產れにて、一つ御家に仕へし身の上。

七兵　疾にも斯くと知るならば、互ひに素性を打明し、昔語りを仕ようもの。

お賤　夫婦となれば亂世に、迂濶に素性を明し兼ね、

七兵　長の年月國を替へ、

お賤　僞り言うて暮せしも、

七兵　今日計らずも此やうに、

お賤　名乘り合ひしは父さまの、

七兵　實にお引合せで、

兩人　ありしよなあ。（ト兩人よろしく思入、時の鐘。）

お賤　おゝ何時の間にやら日が暮れた。どれ、行燈を點けませう。（トお賤行燈を出し灯りを點け、七兵衞は柳行李をあけ中を見て、以前の雜兵鎧の中へ火薬を入れ、是れを風呂敷へ包み支度をする、お賤思入あつて、）他聞を憚る大事ゆゑ、若しわたくしに疑ひあらば、命惜しみはせぬ程に、お手に掛けて行て下さ

りませ。

七兵　同じ武田の家臣とあれば、何しにそなたを疑はうぞ、言はゞ味方故此事が、敵地へ漏るゝ事もなく、此上もなき悦びながら、名乘り合ひたる甲斐もなく、今宵限りにならうも知れぬ。

お賤　え、そりや何ゆゑに。（ト合方替つて、）

七兵　是れより陣所へ忍び込み、事十分に整へば我が手柄ゆゑ立身なし、目出度くそちを本國へ伴ふ時もあらうけれど、事ならずして捕へられ間者に入りしが顯はれなば、再び生きては歸られず、是れが別れにならうも知れぬ。

お賤　さう聞く時は陣中へ行くのをお留め申したけれど、味方の爲とあるからは、お留め申すに申されず。

七兵　今謙信を亡ぼさねば、鹽に困りて甲州の民の難儀は如何ばかり、事ならずして捕へられ、我が一命を捨つるとも、多くの人には替へ難し。

お賤　とはいへ、物は案じるより產むが易いといふ譬、思ひの外に首尾よくも、

七兵　見咎められぬ其時は、此上もない我が手柄。

お賤　幸ひ酒も買うてあれば、目出度くこれで門出を祝して。

七兵　何さま物は祝ひがら、常は呑まぬが今日ばかりは、

お賤　一つお過しなされませ。

ト合方きつぱりとなり、八寸の膳へ杯を載せて出す、七兵衛杯を取りお賤徳利の酒をつぐ、七兵衛呑んで、

七兵　そなたも目出度く一つ呑みやれ。

お賤　頂戴いたしませう。（ト お賤杯を取る、七兵衛ついでやる、お賤呑んで咽せる）

七兵　何を其やうに咽せるのだ。

お賤　さあ、此お杯が今生の。（ト愁ひの思入）

七兵　や。

お賤　目出度くお納めなされませ。（ト七兵衛へさす、七兵衛呑む。時の鐘、思入あつて）

七兵　夜更けぬうちに片時も早く、陣所へ入込み、時刻を待たん。

ト七兵衛きつとなり、件の包みを抱へ立上る。

お賤　そんなら是れが。（ト包みを捉へる、七兵衛お賤を見て）

七兵　こりやお賤。

お賤　七兵衞殿。

ト兩人顔を見合せ、是れが別れかと愁ひの思入よろしくあつて、七兵衞氣を替へ振拂つて、

七兵　我が吉左右を、待つて居やれ、（トつか〳〵と門口の外へ出るを、）

お賤　あゝもし。（トお賤追掛け出て、包みを捉へるを、）

七兵　未練者めが。

ト振拂つてきつと見得、時の鐘の送りばた〳〵にて、七兵衞逸散に花道へはひる。お賤は門口にてハア、と泣伏す。右の鳴物にて道具廻る。

（謙信本陣の場）＝＝本舞臺三間の間前へ出して六枚飾り、中足の二重、向う大紗綾形の襖、軒口に桐の紋の附し幕を張り、上手後へ下げて一間障子屋體、此上柵矢來、下手後へ下げて廊下後板羽目、下座の脇柵矢來松の立木、日覆より同じく釣枝、二重後に松の畫の金屏風を立て、平舞臺上下に篝火を焚き、總て謙信本陣の體。二重上手に謙信、鎧下錦の直垂小さ刀褥の上に住ひ、後に若衆鬘茶筅袴裝の小姓、袱紗にて太刀を持ち、此脇に常五郎彌九郎、鎧下のこしらへにて控へ居る。後に囃子連中烏帽子素袍にて居並び、平兵衞鎧下直垂のこしらへにて扇を持ち立身、田村の謠鳴物にて道具留る、

平兵〽天に響き地に滿ちて、萬木千草動搖せり。（ト此謠道具中程より謠一杯に納り、）〽いかに鬼神まさに聞きつらん、千方といつし逆臣に仕へし鬼も、王位を背く天罰にて、千方を捨れば忽ち亡び失せしぞかし。

謙信〽ましてや間近き鈴鹿山、ふりさけ見れば伊勢の海、伊勢の海。（ト下座へ取り、）〽阿野の松原群立ち來つて、鬼神は黑雲鐵火を降らしつゝ、數千騎に身を變じて山の如くに見えたる所に、

平兵〽あれを見よ、不思議やな。あれを見よ、不思議やな。〽味方の軍兵の旗の上に、千手觀音の光りを放つて、虛空に飛行し。

ト此内平兵衞はよろしく舞ふ、謙信は鳴物の音に耳を立て、始終物を考へる思入あつて、

謙信　正行待て。

平兵　はツ。（ト下に居る。鳴物を打つて居る。）

謙信　囃子止めい。

小姓　はツ。お囃子暫く。（ト是れにて鳴物ぱつたり止む。）

謙信　こりや大關、敵陣の樣子を見て參れ。

常五　はッ、畏つてござりまする。

と常五郎草履をはき、ばた〳〵にて逸散に花道へはひるを、謙信跡見送りながら謠をうたひ出す、是れにて又鳴物になり、

謙信〽千の御手毎に、大悲の弓には智慧の矢をはめて。〽一度に放せば千の矢先、雨霰と降り掛つて鬼神の勢に亂れ落れば、悉く矢先に掛つて鬼神は殘らず討れにけり。

ト此内謙信は向うへ思入、平兵衛はよろしく舞ふ。ばた〳〵になり、花道より以前の常五郎走り出來り、舞臺下手に控へる。

常五　おゝ見て參りしか。（ト是れにて平兵衛控へ、鳴物止む。）

常五　只今物見の櫓より敵陣を窺ひまするに、夥だしく煙り立ちまするは、正しく俄に兵糧を炊きまするかと存じまする。

謙信　白き煙りが立昇るか。

常五　はッ、仰せの如くにござりまする。

謙信　むゝ、左こそあるべし。（ト頷き、）〽誠に呪詛諸毒藥、念彼觀音の力を合せて、

〽則ち還着於本人の敵は亡びにけり、是れ觀音の佛力なり。

ト平兵衛段切を踏み納める。是れにて囃子の人数は下手へはひろ。平兵衛其儘下に居て、

平兵　夜中俄に敵陣にて、兵糧の支度なすは、心得難く存じまする。

謙信　察する所武田勢、今宵の内に我が陣へ、夜討をなすと覺えたり。

平兵　何さま明日の兵糧を、今より炊がん謂れはなし、御賢察の通り夜討の支度にござりませう。

彌九　すりや武田勢には、兵糧炊ぎ今宵の内に御陣中へ、夜討を仕掛けに來るとや。

常五　かねて君の嚴命にて、夜討の防ぎはいたしあれど、猶も諸隊へ油斷なきやう。

謙信　其方共より通達いたせ。

常五
彌九　畏つてござりまする。（ト調べにて、兩人下手へはひろ。謙信むゝと思入、誂への合方になり）

平兵　さるにても我が君には、如何いたして敵陣に、夜討ある事をお心附かれて、大關に遠見をおさせなされしぞ。

謙信　今其方が仕舞の內、鼓の音色に殺氣あるは常事ならずと思ひしゆゑ、敵陣の樣子遠見をさせしぞ。

平九　斯く長々の御對陣にも君には御酒を好ませたまはず、時折鬱を散ずる爲未熟の拙者が仕舞の御好み、御餘念もなき體なりしが御遊興の內でさへ、御心中御油斷なく、鼓の音色に敵陣の計略ある

を知りたまふは、我々共の及ばぬ所、誠に感心仕りまする。

謙信　今足利の世とはいへど、天下の諸侯は一致せず、やゝともすれば威勢を爭ふ、されば戰爭の止む時なし、尾張の織田を初めとして美濃に齋藤、近江に佐々木、又越前に淺井淺倉、凡そ廿八將の中にも智者といふべきは彼の遠州の德川家、續いて智勇勝れしは當時甲斐の武田にて臣下に名ある者多く、軍師は名に負ふ山本勘助、敵に取つて此上の强敵はあらざるゆゑ、いつ何時我が陣を襲ひ來るか計り難く、そも對陣の始めより枕に附けど一夜さも、心を安く寐ねし事なし、それゆゑ仕舞の其内も、忘るゝ事のあらざれば、自然と鼓の調べにさへ、殺氣の知れるは予が心に、片時油斷あらざるゆゑぢや。

平兵　斯かる御苦心なされまするも、隣國村上義清殿の御賴みゆゑに舊領たる、信濃の國を取返し義清殿へ與へんと、信義に依つての此戰爭、中々以て亂世の浮薄な人の及ばざる儀。

謙信　直江を始め臣下の者が、何遺恨なき信玄と、戰爭なすは益なき儀思ひ止まれと勸めしが、義を見てせざるは勇みなし、賴みに依つて村上が舊領信濃を取返さんと、力を盡して戰爭なすも我が神國の習はしにて、義を失はざる日本魂。只不便なは是れにつき民が塗炭の苦しみなれど、よしそれとても遠からず神明誠を照したまへば、冥助に依つて信玄を、亡ぼす時節のある事ならん。

平兵　仰せの如く義に依つて、村上殿を助けんと思召しての此戰爭、天の惠みのなき事は必ず共にござりますまい。

ト此時下手より傳藏、平八郎鎧下のこしらへ、彌九郎、常五郎と共に出來り、下手へ控へ、

傳藏　恐れながら只今の、君の仰せを我々ども、

平八　お次に於て逐一に、承はりましてござりまするが、

常五　味方に於て此上なき、

彌九　天の惠みが、

四人　ござりまする。

謙信　なに、味方に天の惠みがあるとは、如何なる事か疾く申せ。

傳藏　先達てより街におき、專ら噂いたしまするが、東海道の諸大名武田が暴威を振ふを憎み、申し合せて甲斐の國へ、鹽を一切送らざるよし。

平八　それゆゑ市民農民共味噌醬油も造り難く、難儀に及んで領主へ願へど貯へ置きしは戰場へ用ゐるゆゑに賣買なく、鹽がなければ力が拔けて、

常五　旱りに雨を乞ふごとく、今十日の内近國より、運送なければ弱り果て、

彌九　田畑も耕す事ならず、遂には一揆徒黨を結び、亂の起るは是れ必定、

傳藏　又陣中にても貯へし鹽が盡きれば力抜け、働き得ざる所へ附近み短兵急に攻め入れば、武田の勢は敵し難く、必ず敗軍仕つらん。

平八　誠に以て東海道の、諸侯が加勢をなすも同然、是れぞ則ち天の惠み、大慶至極に、

四人　存じまする。（ト謙信思入あつて、）

謙信　武田を憎んで東海道より、甲斐へ鹽を送らぬとは、流言ならぬ實情なるか。

傳藏　甲斐へ間者に遣はせし、三條衛門が立歸り、注進致してござりまする。

平八　如何程武田に勇士あるとも、鹽がなければ大丈夫。

常五　味方の勝利疑ひなし。

彌九　誠に君の御高運、

傳藏　恐悦申し、

四人　上げまする。（ト謙信これを聞き思入あつて、）

謙信　五穀は元より人命を、保つは則ち鹽が第一、武田の一族市民農民甲斐一國に住する者、嘸や難儀いたすであらう。早々領地越後より、甲斐へ鹽を送るやう、濱奉行へ申し附けん。

彌九　すりや我が君には敵と目指す、武田の領地甲斐の國へ、鹽をお送りなされまするか。

謙信　如何にも人命に拘はるゆゑ、早々送り遣はす所存。（ト四人心得ぬ思入にて、）

傳藏　こは仰せとも覺えませぬ。鎬を削る敵の國、

平八　甲斐にて鹽に困るのは、願うてもなき事なるに、

常五　御領分の越後より、鹽を送りたまふのは、

彌九　弱りし敵に力を附け、攻滅ぼすに味方の難儀、

傳藏　憚りながら御賢慮が、違ひますかと、

四人　存じまする。

謙信　我を咎むる其方共が、近頃料簡違ひなるぞ。（トきつと言ふ。）

傳藏　君には何ゆゑ我々共を、

平八　料簡違ひと、

四人　仰しやりますぞ。（ト謙信きつと思入あつて、合方替り、）

謙信　我隣國の誼を思ひ、村上殿の頼みにより、舊領信濃を取返さんと、是れまで數度の戰爭も、敵と目指すは信玄一人、それに隨ふ臣下の者は扶持する主の命により、敵ともなれば味方ともなる、

それゆゑ狙ふは信玄一人、ましてや市民農民ども鹽に乏しく困苦なすを、快しと思はるゝか、假令武田の領地にせよ、波濤隔てし外夷にあらず、同じ日本に産れし者、領主は時の領主にして民は則ち天下の民なり、其人命に拘はる事を救はずんばあるべからず、信玄こそは憎しと思へ、臣下を始め市民農民何ゆゑ憎しと思はうぞ、明日にも和睦なす時は、同じ四海の兄弟なり、領地の鹽を遣はして人命を救ふこそ誠の道、鹽に乏しく力落ち弱りし所を附込んで、戰爭なして勝たうといふは、近頃卑怯未練にして、仁義を守る謙信が好まざる所なり、心得違ひなんぞとは、我へ向つて失敬なるぞ。

ト謙信きつといふ、四人はハツと思入りたるこなしあつて、

傳藏　よしなき事を申し上げ、君の御機嫌損ぜし段、

平八　何卒和田氏貴殿より、粗忽の段を幾重にも、

常五　我が君樣へお執成し、

彌九　よしなに願ひ、

四人　奉つりまする。（ト平兵衞思入あつて、）

平兵　誠に以て君の御賢慮、類稀なる御仁情、凡そ世界の人情は先づ百人が九十九人まで、戰爭をなす

敵の領國鹽に乏しく難儀なすは悦びこそすれ憐むものなし、さすれば是れなる同勤も此虚に附入り武田勢を討滅さんと申せしなり、君へ粗忽を申し上げし、失敬の段は幾重にも、某お詫び仕つれば、御宥免下されますやう、偏に願ひ奉つりまする。（ト是れにて謙信面を和らげ）

謙信　正行汝が挨拶ゆゑ、今日は許し遣はす、以後は粗忽のなきやうに、よく〳〵彼等に申し附けい。

平兵　委細畏り奉つりまする、先づは御宥免下さりまして、斯く申す某始め一同有難く、

皆々　存じ奉つりまする。

謙信　早々明日國許へ、飛脚を立て、卽刻に、甲斐へ鹽を送るやう、其方きつと申し附けい。

平兵　はツ、早速明日濱奉行へ、申し附けますでござりまする。

傳藏　又もや申し上げるのは、憚り多き事ながら、

平八　鎬を削る敵國へ、鹽を送りて人を助け、

常五　其上戰爭なしたまふ、

彌九　恐入つたる御仁情。

謙信　假令敵國なればとて、民の難儀は見て居られぬ、よしや領地の鹽を送り弱りし兵士が力を得、此後戰に我が勢が、武田勢に敗北なすとも、それは時の運にして悔む所にあらざるぞ、以後は仁義

を厚くいたせ。

四人　はあゝ。

ト四人辭儀をなす、時の鐘かすめて風の音になり、下手より以前の七兵衞窺ひ出るを平兵衞目早く見て、

平兵　やあ、御本陣の小蔭より、窺ひ出しは正しく曲者。

傳藏　いで、我々が、

四人　搦め捕らん。

ト四人つか〱と行き、七兵衞を引伏せようとするを突廻し、ちよつと立廻つて、

七兵　如何にも私は忍びの者、斯く見咎められし上からは、繩をお掛け下さりませ。

四人　言ふにや及ぶ。（ト七兵衞の手を左右より取りて、引附け顏を見てびつくりなし）

傳藏　や、何者なるかと思ひしに。

平八　汝は陣所へ出入なす、

常五　古鐵渡世の、

彌九　七兵衞なるか。

七兵　あなた方が越後からの御出張に、信濃まで御供をいたした古鐵買、七兵衞めにござります。

平兵　して其方は何ゆゑに、お出入り嚴しき陣中へ、今宵忍び入つたるぞ。

七兵　今は何をか包みませう。元私は武田の家臣、駒澤七郎と申す者。

傳藏　すりや其方は、

四方　間者よな。

平兵　御本陣の庭先へ忍び入りしは我が君を、弑さん爲であつたるか。さあ、有體に白狀いたせ。

ト七兵衞四人に向ひ、

七兵　只今申し上げますゆゑ、暫く御猶豫下さりませ。

平八　やあ、間者とあれば、

四人　猶豫はならぬ。

平兵　間者に入りしを自訴なすは、何か仔細のある事ならん、何れも暫く許しめされ。

四人　はツ。（ト七兵衞を放す。）

平兵　さあ疾く〳〵白狀いたせ。

七兵　主人の命を蒙つて、御本陣の床下へ、忍び入つてござりますが、先刻よりの一部始終承はつて

ございまするが、驚き入つたる御仁情、武田は正しき敵なるに、其領國の甲州へ鹽を送りて人民をお救ひ下さるお志し、世に有難く涙にくれ、忍び入つたが空おそろしく御陣中へ間者に入つた我が身の科を訴へて、御刑罰を蒙らんと、名乘り出ましてございまする。

平兵　名乘り出しは神妙なるが、して其方は何時頃より、當家へ間者に入つたるぞ。

七兵　間者に入りしは十年前、然も越後の御城下で鬼小島彌太郎樣へ、ちぎれ鎧を賣りましたが御緣となつて、信濃まで、御軍勢と共々參り、分捕りなされし品々を買ふので段々お馴染多く、御陣中へ日々入込み、何かの樣子を武田家へ、注進なせし間者の私、今となつては勿體なく、御法通りの御刑罪を、受けねばどうも濟みませぬ。

平兵　扨は其折彌太郎が妻が惜しみし鏡をば、一首の歌の德により其儘妻に返したる、古鐵買の志し、利益を計る商人には、稀なる者と思ひしが、武田の間者であつたるか。

七兵　其鏡をば返せしゆゑ、奇特なものと名を取つて、終には御門の鑑札までお貰ひ申してございまする。

傳藏　今日の今まで汝をば、武田の間者と知らざりしは、

平八　返すぐも殘念至極。

謙信　して其方が主命受け、今宵陣所へ忍び入りしは、如何なる計策あつての事ぢや。

七兵　今は何をかお隱し申さん、御領國より鹽を送り、甲斐一國の人民をお助け下さる御仁情に替へて主人の計略を君にお明し申しまする、今宵御陣所へ火を掛けるを合圖に、武田勢夜討を仕掛ける豫ての計略、必ず御油斷なされまするな。

傳藏　扨こそ夜討を、

四人　仕掛けるとな。

平兵　敵の夜討のある事は、仕舞の折に鼓の音色殺氣立ちしに物見をさせ、疾より君には御存じなるわ。

傳藏　すりや我が君には武田家の、夜討を疾より、御存じなるとか。

謙信　暮れて間もなく陣中に、兵糧を炊く煙りの立つは、正しく夜討の支度と察し、防ぎの用意をいたせしぞ。

七兵　御仁情に忍び難く、味方の密事を漏らせしは、濟まざる事と思ひしが、それとお察しありし上は合圖に拙者が火を掛けても味方の夜討は鶍となり、敗軍なすは目の當り、名乘り出しが返つて幸ひ。いざ私を如何やうとも、御成敗なし下さりませ。

傳藏　言ふにや及ぶ、敵の間者。

平八　死罪になして梟首に掛けん。
謙信　いや、其成敗には及ばぬぞ。
七兵　とは又なぜに。
謙信　一命取るは無益なり、此儘歸し遣はさん。
平兵　返す〴〵も御仁情、是れに引替へ武田では、村上殿の家臣たる、額岩寺光氏を間者と知つて斬首なし、千曲川の川端へ梟首に掛けしは情を知らず、君とは雲泥萬里の相違。
ト七兵衞感心せし思入あつて、
七兵　誠に以て上杉公の、御仁情は比すべきものなし。たゞ此上のお情には片時も早く私を御成敗下さりませ。
謙信　何やう汝が申すとも、謙信成敗いたさぬぞ。
七兵　とは又何ゆゑ。
謙信　汝が間者たる事は、十年前より存じ居れど、其儘に打捨て置きしは、我が計略を流言させ、汝が口より武田家へ注進させて裏をかき、味方の勝利となりし事幾度となくあつたれば、假令敵の間者とて何ゆゑ成敗いたさうぞ。（ト七兵衞びつくりせし思入）

七兵　すりや上杉公には、十年前より、我を間者と御存じとか。

平兵　鼓の音にさへ夜討のあるを知しめさるゝ御名君、御存じなきと思ふのは、七郎汝が愚なるぞ。

七兵　我が愚さを顧みず、首尾より計り果せしと、思ひの外に御存じとは、恐れ入つたる御眼力、恥ぢ入りましてござりまする。（ト面目なき思入）

傳藏　助命の御沙汰ある上は、

平八　長居は恐れ片時も早く、

常五　有難いと事と三拜なし、

彌九　疾く〳〵此場を、

四人　立ちませい。

七兵　はツ。（ト悄々と立上らうとするを見て）

謙信　然し主人信玄より、言附かりし其役を、勤めずしては歸られまい、何れへなりと火を掛け行きやれ。

七兵　勿體なき其お詞、假令主命なればとて、斯くまで厚き御仁情に、何ゆゑ火をば掛けられませう。

謙信　かねて防ぎの用意あれば、決して遠慮に及ばぬぞ。

七兵　返すがへも御配慮ながら、此儀は御免を蒙ります。
謙信　然らば汝の勝手にいたせ。
七兵　有難うござりまする。
平兵　お許し出でし上からは、片時も早く歸られよ。
七兵　はツ、お暇いたすでござります。（ト謙信を見て、）恐れながら賢君の、お面拜すも今宵限り。
謙信　や。
七兵　いやさ、間者に入りしが顯はれますれば、御陣中へは參られませぬ。
傳藏　やあ、我が君の仰せがなくば敵より入込む間者の其方。
平八　縛り首は當り前、生けて歸しはいたさぬが。
常五　さりとは、命冥加な奴、
彌九　有難い事と三拜なし、
四人　歸り居らう。
七兵　たゞ此上のお願ひは、甲斐一ヶ國の人民を。
謙信　おゝ、鹽を送りて助け得さすぞ。

七兵　えゝ有難うござりまする。

平八　きり〳〵と、

四人　立ちませい。

ト時の太鼓になり、七兵衞しを〳〵と立ち上り、包みを抱へ花道へ行き振返り思入あつて、逸散に花道へはひろ。謙信跡を見送り、

謙信　彼は武田の家來といへど、未だ其名も聞き及ばねば、定めて小祿の者ならんが、十餘年が間姿を替へ敵地へ間者に入込みしは、はて天晴なる忠義者、流石は甲斐の武田なり、よき家來のある事ぢや。

平兵　殊には仁義の道を辨へ、我が君甲斐へ鹽を送り、命に拘はる人民を、お助けあると承はり、我と間者を名乘り出で、御成敗を受けんとは、誠に以て奥床し、人は斯くこそ有りたきもの。

傳藏　奥床しきか存ぜぬが、我々共の料簡では、一旦主人の命を受け、

平八　忍び入つたる上からは、如何なる情を蒙るとも、我が役目を盡さぬは、

常五　申さば主人へ不忠でござる、何と言譯なす所存か、

彌九　のめ〳〵命助かつて、陣所へ歸るはたはけた奴。

謙信　やあ誹謗いたす汝等こそ、物の情を知らざるなり、彼は我が鹽を送る情に感じて訴へ出で、成敗受けて死する所存、天晴なるゆゑ死を止め、事なく歸し遣はせしか、宅へ歸らば自殺せん。

ト平兵衞膝を打ち、

平兵　御賢察の通り歸宅の後、彼は自殺と某も、推量いたしてござりまする。

謙信　其方も推量せしか、あたら一命捨てさすが近頃不便に思ふゆゑ、子の刻過ぎなば火を掛けて、彼れが忠義にいたしくれん。

平兵　さはさりながら火を掛けなば、夜討の合圖と心得て、待ち設けたる武田勢、不意に討たんと來るは必定。

謙信　味方はかねて用意をなし、前後左右に兵を伏せ置き、一時に敵を取圍まば、網裏の魚を取るも同然。

平兵　さすれば敵の計略が、取りも直さず味方の計略、此上もなき御名策。

傳藏　然らば是れより、

四人　我々共は、

謙信　夜討を防ぐ用意をいたせ。

四人　畏つてござりまする。

謙信　凶と思ひしも吉となる、味方の幸ひ正行祝せ。

平兵　はッ。（ト平兵衞扇を持つて立上る、下座の謠になり、）

〽千秋樂には民を撫で、萬歲樂には命を延べ、相生の松風颯々の聲を樂しむ、

ト鳴物になり、平兵衞扇を指して舞ふ、此見得よろしく道具廻る。

（元の七兵衞内の場）――本舞臺元の世話場の道具、お賤神棚の燈明皿を下し、火打箱にて火を打ち居る、此見得時の鐘、床の三重にて道具留る。

〽行客の小夜吹く風に蘆の葉の、音も若しやと胸に波、打つ火打さへ川霧に、濕るお賤が物案じ。（ト此内お賤火を打ち附けると消えるゆゑ思入あつて、）

お賤　常には陣屋へ行かしやんしても、左のみ心に掛らねど、今宵は一世一度の大事、首尾よくお役が勤まるやう、無難を祈りて神棚へお神酒を供へ燈明をあげて間もなく消えたのは、風のせるかと思うたが、是れで丁度三度まで、消えたは油が惡いのか、但しは物の知らせなるか。

〽案じに又も搔立てる、燈心の火も消えがてに、心細くも神棚へ上げる痞へを撫でおろし、

トお賤燈明皿を神棚へ上げ思入あつて、

それはさうとお兄い樣も、あれぎりお出でなされぬのは、遁れぬ御用があつての事か、未だに陣所へ火の手も見えず、ひよつと火藥を持つて居たので、見咎められでもなされはせぬか、案じるせるか胸騷ぎ、あゝ心ならぬ事ぢやなあ。

〽夫に恙ないやうに、神々樣へ柏手を合せて願ふ其折柄、我が家へ歸る七郎が、思案途方に暮れ果てゝ、道にさまよひ立留り、

トお賤神棚へ手を合せて拜む、時の鐘、花道より以前の七兵衞思案の思入にて出來り、花道に留り、

七兵　現在敵の甲州へ鹽を送つて人民を、助くる慈悲に忍び難く、間者と名乘つて成敗を、受ける心も又候や、謙信公に助けられ、是非なく我が家へ歸つて來たが、兄者人より頼まれし夜討の合圖に火を掛ける大事の役を勤めねば、今宵を過さず死なねばならぬ、女房賤にも餘所ながら諦めさせて切腹なさん。

〽死ぬる覺悟を我胸へ、包み抱へて七郎が、我が家の門へ立歸り。

ト七兵衞思入あつて門口へ來り、

お賤今歸つた。（ト内へはひる。）

お賤　おゝ、お歸りなされましたか。（ト四邊へ思入あつて、）首尾は如何でござりまする。
七兵　まんまと首尾よく仕果せた。
お賤　それはよろしうござりましたが、まだ火の手が見えませぬな。
七兵　子の半刻には燃え上る、仕掛を陣所へいたして參つた。
お賤　ようまあ人に見咎められず、お手柄な事でござりました。
七兵　して、最前見えた兄者人は、まだお出でなされぬか。
お賤　まだお見えになされませぬわいな。
　　へいふ女房の顏を見て、不便と思へど是非なくも。（ト合方になり、七兵衞思入あつて、）
七兵　思はぬ手柄をしたゆゑに、折角夫婦となつたれど、暫くそなたと別れにやならぬ。
お賤　え、そりやまあどういふ譯あつて。
七兵　十年この方間者となり、勝手を知つたを幸ひに、首尾よく火藥を仕掛けて來たが、最早間者は今宵限り、是れから兄と諸共に、御本陣へ出張なし、兵士の數に加はれば、是非なくそなたと別れにやならぬ。
お賤　お兄い樣と御一緒に、御本陣へ御出張は、此上もない事なれば、わたしも武士の娘ゆゑ、お留め

申しはいたしませぬが、戰が終らば少しも早う、家へ歸つて下さりませ。

七兵　明日にも兩家和睦になり、戰終れば直に歸るが、互ひに鎬を削るうちは、名に負ふ敵は越後勢、仕儀によつたら御馬前で。

お賤　え。

七兵　向う敵に後は見せず、討死なすが武士の本望、再び逢ふは盲龜の浮木、先づ逢はれぬと覺悟せよ。

〽死後の歎きを掛けまいと、諭す詞に女房は、（ト七兵衞思入）

お賤　それではお前は討死を、なさるお心でござりまするか。

七兵　死ぬる覺悟で戰場へ、出ねば人に勝れたる、功名手柄がならぬゆゑ、十が九つ死なねばならぬが、それも運よく遁れゝば、そちも仕合せ我も仕合せ。

お賤　功名手柄をなされまして、目出度くお歸りなされればよし、若し討死をなされましたら、わたしも共に自害して、冥土へ行つて二世三世、替らぬ契りを結びませう。

七兵　それは女子の愚な料簡、我戰場で討死なすは、君のお爲に死ぬる命、有無をも知れざる冥土を當てに、死ぬるといふは不料簡、我なき後は若き身の上、再縁なして百年の、壽を保つのが其身の德、必ず死ぬるなどゝいふ、惡い料簡を出すまいぞ。

お賤 悪い料簡か知らねどもあなたに別れて何樂しみ、存らへ居れば若い身に再縁せよと人毎に、勸められるが切ないゆゑ、どうぞ死なして下さりませ。

〽涙に暮れて女房が、縋り歎くは尤もと、思へば態と聲勵まし、

トお賤七兵衞に縋り泣く、七兵衞切なき思入あつて、

七兵 斯程に申すに聞き入れずば、是非に及ばぬ死なば死ね、夫婦の縁は今日限り、未來はあかの他人なるぞ。

お賤 二世と結びし女夫中、何科あつて今日限り、縁を切るとおつしやりまする。

七兵 夫婦の縁を切るといふは、留めるを聞かず死すとあるゆゑ、夫婦の縁が切りたくなくば、我がなき後に再縁なすか。

お賤 さあそれは、

七兵 但し夫婦の縁を切らうか。

お賤 さあ、

七兵 再縁なすか。

お賤 あ、

七兵　さあ、
兩人　さあ〳〵、
七兵　いやか應かゞ緣の切目。
お賤　假令何と言はしやんしても、わたしや一緒に死にまする。
　へ言ふに七郎氣をいらち、
七兵　得心なければ最う是れまで、夫婦の緣は今日限り、家へは置かぬ出て行きやれ。
お賤　便りない身と知りながら、出て行けとは情ない、わたしや去られる覺えはない。
七兵　なに、無い事があるものぞ、二言目には詞を返し夫を夫と思はぬ奴、實は疾うから愛想が盡きた。
　ト言ひ憎さうにいふ。
お賤　え、そりやあのほんまに、わたしに愛想が。（トお賤七兵衞に縋る、七兵衞顏を見て、）
七兵　おゝ愛想が盡きた、此顏を見るのもふつ〳〵いやになつた、早く此家を出て行きやれ。（ト突放す。）
お賤　すりや、それ程にお前はわたしが。
七兵　急にそなたがいやになつた。（トきつと言ふ。）
お賤　そりやあんまりでござりまする。（ト七兵衞に縋り泣く、七兵衞振放し兼ねる思入）

七兵　えゝやかましい、行けといふに。

〽口と心の裏表、門へ突出し戸をぴつしやり、掛金かけて咽せ返る涙呑込み七郎は、是非も納戸へ入りにける、跡にお賤は門の戸へ、涙ながらに取縋り、

ト此内文句の通り、七兵衞切なき思入にて、お賤を門の外へ突出し、戸をしめ掛金をかけ許してくれといふ思入あつて、涙を拭ひ奥へはひる、お賤ハア、と泣き伏し、起き上りて門の戸へ縋り叩きながら。

お賤　これ、こちの人、爰明けて下さりませ、何がわたしに愛想が盡き、お前は去る氣にならしやんした。

〽里というては爰からは、遙に遠い山坂を、越路の里の五右衞門どの、元より血筋といふではなし、

便りない身を不便に思ひ、お世話なされて下されば、悪い耳を聞かせともない。

〽越度があらばどのやうにも。

誤りますからこちの人、内へ入れて下さりませ。

〽拜みます〳〵。（トよろしく拜み）

これ程いふに只一言、物を言うて下さんせぬは、それ程までに愛想が盡き、わたしが憎うござんすか、最前までも機嫌よう、勇み進んで行かしやんしたに、

〽男の心と秋の空、かうも心が替るものか。

え〻情ない事ぢやなあ。

〽門の柱にまつはりて、顔は照葉の蔦葛、涙に暮れて居たりけり。

ト此内お賤よろしく思入あつて門の戸に縋り、泣き居る。

〽折から爰へいきせきと、兄三郎は馳來り。

ト時の鐘、花道より以前の三郎達附大小にて出來り、花道へ留り、

三郎　最早子の刻過ぎたるに、敵の陣所に火の手の見えぬは、弟七郎が仕損ぜしか、何にもせよ心許なし、宅へ參つて樣子を見ん。

〽軒を目當に三郎が、立寄る門に泣伏すお賤、戸の隙間もる火影に見やり。

ト三郎つか〳〵と門口へ來り、お賤を透し見て、

や、そなたは七郎が妻ならずや。

お賤　お〻、お兄い樣でござりますか。

三郎　夜も更けたるに門端に、何をいたして居らるゝぞ。
〽いふに涙を押し拭ひ、
お賤　もし、お聞きなされて下さりませ、こちの人が今しがた家へ歸つてござんしたが、何が心に障り
しか愛想が盡きた出て行けと、門へ突出し掛金かけ、わたしを内へ入れませぬわいなあ。
三郎　すりや七郎には歸宅なし、年來添ひし女房を愛想が盡きた出て行けと、門へ突出し入れぬとは、
何とも以て心得ぬ。（ト門口を叩きながら）こりや七郎、兄三郎だ、爰を明けい〳〵。内にて有無の
返事のなきは、返す〴〵も心得ぬ。これ七郎、爰を明けい〳〵、
〽割れるばかりに打叩けど、内には何の答へもなく、心急かれて三郎が足下に掛くれば、ば
ら〳〵、破るゝ格子を幸ひに、火影をよすがに内に入り、
ト此内三郎門口を叩き、内にて返答なきゆゑ、心のせく思入にて、足にて戸を蹴る、格子ばら〳〵と
破れ、三郎お賤内へはひる、
七郎は何れに居るぞ。兄が參つた。是れへ出い。
〽是れへ出よと呼はれば、此方の一間に聲あつて、（ト上手障子屋體の内にて）
七兵　只今それへ參るでござる。

〽破れし障子を押明けて、刀を杖に七郎が、物思ひげに座に直れば、兄三郎は氣をいらち、

ト上手障子屋體より、以前の七兵衞袴裝、刀を杖に突き、靜々と出來り、思入あつて眞中に住ふ、三郎は上手に住ひ、お靜は下手に泣き居る。

三郎　最早子の刻過ぎたるに、未だに於て敵陣に、何の氣色もあらざるが、最前汝へ頼みたる放火の一儀は如何せしぞ。（ト床の合方になり、七兵衞思入あつて、）

七兵　宵に陣所へ參りしが、常に替つて守り嚴しく、遂に仕掛ける事ならず、手を空しく歸つてござる。

ト三郎きつとなつて、

三郎　あれ程最前其方が、請合ひしゆゑ某は、かゝる事とも存ぜずして、再び陣所へ取つて返し、七郎事は十年以來間者となりて陣所へ入込み、既に出入りの鑑札まで所持なし居れば諸將を始め、士卒の者まで知らぬものなく、見咎められる愁ひなければ、必ず仕果せ申すべしと、君へ申し上げし所、殊の外御悦喜にて、御賞美のお詞たまはり、列座の諸士も口々に三郎殿は仕合者、よき弟を持たれしと褒め囃されて某も、汝ゆゑに思はざる肩身を廣ういたせしが、今となつては面目ない、何ゆゑあつてあれ程に、最前堅く請合ひながら、頼みし事を仕果せざるぞ、陣所へ歸つて某が、君に申譯があらざるわ。

〽拳を握り三郎が、齒嚙みをなせば七郎は面目なげに差俯向き、

ト三郎きつと詰寄る、七兵衞思入あつて、

七兵　誠に以て兄者人へ、申譯なき事でござる。

三郎　申譯なきとは何の事、君を始め諸士の面々、今や〳〵と相待ち居るに、頼みし放火が事ならずば、一刻も早く御陣中へ、なぜ知らせには參らぬのだ、宅へ歸つて安閑といたし居るのは何事なるぞ、間者となりて十年餘り、平民となりて暮せしが、心までが平民におのれはなりしか、これ七郎。（ト七兵衞の襟上を取りて引附け、）見下げ果てたるうつけ者めが。

〽怒りに堪へかね三郎は、骨も折れよと扇にて、打つを止むる女房お賤、邪魔いたすなと拂ひ退け、粒々發止と打ちすゑれば、

ト三郎軍扇で六兵衞を打つ、お賤留めるを振拂ひ、打ちすゑ突き放す、七兵衞は俯向き居る。

お賤　お腹の立つは無理ならねど、他人にあらぬ御兄弟、もうよい加減にお兄い樣、お許しなされて下さりませ。

三郎　斯樣な弟はあつて益なし、却つて他人が增しなるぞ。

〽口には言へど親身の兄弟、涙に誠ぞ見えにける、七郎は顏を上げ、

ト三郎きつと思入あつて目をしばたゝき、涙を隱す思入、七兵衞は顏を上げ、三郎に向ひ、

七兵　現在實の兄にさへ、心までが平民に、なりしと言はるゝ殘念さ。

三郎　何と言やる。

七兵　姿は人に悟られじと、古鐵買に窶せども、心は銹びぬ所存でござる。

三郎　やあ口賢こき其一言、汝の心が銹びぬなら、兄が槍先き受けて見よ。

へ軒に立てたる槍押取り、粒々扱いて突き掛くれば、有合ふ陣笠おつ取つて構へし體に隙のなく。

ト此内三郎軒口に立掛けありし槍を取り、扱いて七兵衞へ突ッ掛ける、七兵衞傍の陣笠を取つて差附ける、誂への床の合方になり、兩人暫く躊躇ひ互ひに窺ひ居る、七兵衞坐つた儘ちよつと立廻つて、

へやあと聲かけ突き出す槍を、片手に受け留め、吐息つくぐ、三郎は弟の顏をきつと見て、

ト三郎やあと突つ掛ける槍を、七兵衞片手で捉へ肩で息をなし苦痛の思入、三郎是れに目を附け、

今其方の面を見れば、眼中どよみて色青褪め、五音の調子狂ひしは、古鐵買に身を窶し銹びし心を磨きしか。

七兵　如何にも君へ申譯、斯くの通りでござりまする。

〽諸肌脱げば腹帯に、滲む血潮のから紅。

ト三郎槍を引き七兵衛肌を脱ぐ、襦袢の上へ白の腹帯をしめて居る、是れへ血潮にじみ居る、三郎見て、

三郎　ほゝお、よくぞ切腹いたせしぞ。

お賤　こりやまあ何で此やうに、お前は腹を切らしやんしたのぢや。（ト縋り泣く。）

三郎　定めて是れには仔細ぞあらん、苦痛を怺へてこれ弟、一通り言うて聞かせよ。

七兵　只今仔細をお話し申さん。

〽言ふも苦しき肩息に、（ト七兵衛苦しき思入、お賤茶碗へ水を汲み）

お賤　いかう息の切れる様子、水を一口呑ましやんせ。

三郎　あゝこれ、手負に水は大禁物。

お賤　それぢやというて。

三郎　はて、武士の女房に心得ざるか。

お賤　はあゝ。

〽三郎妻を留むれば、手負は腹帯ぐつとしめ。

ト七兵衛腹帯をしめ直し、きつと思入、竹笛入り床の合方になり、

七兵　今宵越後の陣中へ忍び入つたる其折柄、本陣におき謙信が謠をうたひ正行に、田村を舞はせ餘念なき遊興にすら油斷なく、鼓の調子に殺氣を知り、近習の者に遠見させ、時ならざりし兵糧の煙に敵の夜討を知り、防ぎの用意いたせしは、類稀なる英智の大將。

三郎　すりや謙信には、鼓の調子に、今宵の夜討を悟りしとな。

七兵　小蔭に忍び某も南無三寶と息を殺し、猶も樣子を窺へば臣下の者が諸國より、甲斐へ鹽を送らざる此處を計つて攻めたまへと、詞を盡して勸めしに、流石は賢者これを用ゐず、我が領國の越後より鹽を送りて人民の難儀を救ひ遣はせと、和田正行へ命じたり。

〽旣に今宵も信玄公には、夜討を仕掛けて、謙信が不意を討たんとなす程なるに、敵を助くる志し。

火を掛けんとは思ひしが、夜討を知られし其上に、かゝる仁者の名將へ敵たひ難く間者と名乘り成敗受けんと言ひたるに、

〽汝一人殺せしとて、味方の勝利になるにもあらず。

疾く〳〵歸れと勸められ、是非なく其場をおめ〳〵と、立歸りしは斯くの仕儀。

三郎　して又切腹なしたるは。

七兵　是れまで間者といふ事を、誰知るまいと思ひの外、疾より謙信間者と知り、却つて敵に計られて裏を掻かれし事ありしも、及ばぬ智慧で計ると思ふ心の愚さ、君へ御不覺取らせたる身の言譯の此切腹、何卒君へ兄上より、お詫びなされて下さりませ。

〽苦しさ怺へ七郎が、息も絶え〴〵物語れば、扨はそれゆゑ御最期かと、妻は涙の止途なく、兄は實にもと勞はりて。

ト此内七兵衞よろしく苦しき思入にて言ふ、お賤縋り泣く、三郎思入あつて、

三郎　すりや謙信には我が國へ鹽を送りて今日に、迫る諸民を救ふとか、目前敵の武田の領國、送りし鹽も止むるが是れ世の中の人情なり、今合戰の最中に鹽を送りて其敵を、救ふといふはならざる事、流石は海内無双の賢者、感ずるに猶餘りあり。

お賤　最前わたしへ討死でも、したなら跡で再縁しろと、無情ことを仰しやつたのは、此切腹をなさるゆゑ、それでの事でござりましたか。

七兵　命捨てねば御主君や、兄者人へ濟まざるゆゑ、切腹いたす覺悟ゆゑ、跡の歎きをさせまいと、無情ことを言つたるぞ。

お賤　其お心ならわたしも共々。

〽有合ふ短刀取上ぐれば、三郎早くも其手を捉へ、

ト お賤有り合ふ短刀を取り自害を仕ようとするを、三郎留めて、

三郎　こりや、早まつた事いたすまいぞ。

お賤　一緒に死んで共々に、未來で添ひたうござります、どうぞ死なして下さりませ。

七兵　自殺いたさば此世限り、未來は夫婦にあらざるぞ。

お賤　すりや死ぬにも死なれませぬか、はあゝ。（ト泣伏す。）

三郎　兄とはいへど某も、此合戰に出陣なせば、明日をも知れぬ我が命、たつた一人の弟なれど、

〽問ひ弔ひも心に任せず、

菩提を頼むは其方のみ。

七兵　必ず共に自殺いたすな。

お賤　其お詞に隨ひますから、未來までも女房と、どうぞ思うて下さりませ。

七兵　おゝ、盡未來まで我が女房。

お賤　えゝ嬉しうござりまする。

〽死ぬる刃を取直し、黒髪ふツつと押切れば。（トお賤件の短刀にて髪を切る、）

三郎 やゝ、こりや黒髪を切つたるは、

お賤 身を墨染に姿を替へ、

七兵 死ぬを止まり尼となり、

お賤 亡きその跡を弔ふ心。

三郎 實にそれでこそ天晴貞女、

〽折しも響く砲聲に、（ト本鐵砲の音する、）

七兵 遙に響く砲聲は、

三郎 今宵夜討の味方の合圖。（トお賤門口から向うを見て、）

お賤 陣所に火の手の見えるのは、

七兵 扨は敵にて裏を掻きしか、

三郎 味方を惱ます計略なるか、

お賤 さう聞く上は片時も早う、

七兵 夜討の出陣、

三郎　止め申さん。

ト三郎刀を差しながら、つかつかと門口へ行く、本釣鐘を打込み、七兵衛苦痛の思入、

お賤　あもし。(ト聲を掛ける、三郎立止る。)

七兵　これが此世の。(ト七兵衛うつとりとなる、三郎つかつかと側へ來り、)

三郎　こりや七郎。(ト七兵衛三郎を見て、)

七兵　兄者人。(ト顔を見合せ、)

兩人　さらば。

〽腹帶解けば果敢なくも、此世の息は、

ト本釣鐘七兵衛腹帶を解きがつくりとなる。お賤縋り泣く、三郎は行き兼れる思入、本釣鐘三重にて

よろしく、

幕

川中島武田本陣の場
八幡原山本討死の場

五幕目大詰

(役名――上杉謙信、山本道鬼齋晴行、旗持牛窪大藏、內藤修理之助正豐、大佛入道學心、諫早入道了碩、廣瀨鄕左衞門、飯富三郞兵衞、仁科藤太郞、甘利左衞門、井上文八郞、飯島長左衞門、高坂彈正忠、武田信玄等。)

(山本陣所の場)――本舞臺向う一面山又山の遠見、諸所に松の梢を見せ、眞中に杉の大樹、此上手柵矢來へ武田菱の紋附きし幕張、下手丸物の岩組、此間より淸水の流れ、前に同じ流れを書割りし土手板、ずつと上下柵矢來にて見切り、是れへ同じ幕を張り、日覆より杉の釣枝、總て山本道鬼齋陣所の體。爰に大佛入道學心、諫早入道了碩、法師武者切草鞋、附太刀鎧陣立裝、革床几に掛り居る、下手に○△□◎の軍兵四人控へ、此見得山おろしにて幕明く。

學心 何と諫早入道、是れまで數度の合戰に、一度勝てば一度負け、五分々々の敵味方、双方寸暇も油斷なければ、諸隊の輩方寸を頻りに廻らす此年月、如何に關守なければとて、最早十餘年この方の戰爭なれども、此度御主君たる晴行公が計策にて、上杉方も瞬くうちに降伏なすに疑ひなしと、此學心は見極めしが、育殿は如何思はるゝ。

了碩　如何にも御邊の言はるゝ如く、敵も名におふ上杉謙信、必死を極め戰爭なせども、軍事に秀でし味方の大將信玄公が指揮なすゆゑ、數多の兵隊武を勵まし鋭き戰ひ幾度となく、追ひつ追はれつ昨日まで、頻りに挑み戰ひしが、今日こそは戰場の勝敗に依り御主君が、村上義清が領地をば敵へ返すか、味方へ取るか、二つに一つの大事の合戰。

○　いや、いつも申す事ながら、戰は勝と負けるとでは、大きな違ひで我々まで。

△　勝利の節は敵陣より數多の武器を分捕なし、

□　骨も折らずに何れも方にお褒のお詞頂戴したり、

◎　目出度い御酒だと我々まで、お流れたら腹呑み次第。

學心　それが一つ間違つて、敗北なせば一生懸命、必死を極め防戰なし。

了碩　我輩はいふに及ばず、多くの軍卒落命させ、君には心痛遊ばされ。

○　命を的に働いて、運よく生きて居る時は、臆病者とお叱り受け、

△　武士は戰死を本望だと、誰しもいふが我れ人共に、負けて討死するよりは、

□　勝つて兜の緒をしめて引揚げて來る其時は、何處の山中海邊でも、

◎　人にちやほや取持たれ、おつな得物があるゆゑに、どうか戰は、

四人　勝ちたいものだ。

學心　今日出陣の戰爭は十の物なら十一まで、勝利は必定疑ひなし、頓て目出度き勝利にて、歸陣なせし其時は、

丁碩　洒池肉林の樂しみは、言ふに及ばず、其方達にも、君へ願うて立身さすれば、蔭日向なく働けよ。

四人　それは千萬忝けない。

○　其お詞をお聞き申せば、

△　威勢も滿ちて戰場へ、

□　向はぬ先きから勝利の心地、

◎　勝鬨擧ぐるは瞬くうち、

學心　はて潔き、

皆々　幸先きぢやなあ。（トばた／＼になり、花道より軍兵出來り、花道にて、）

軍兵　はツ、申し上げます。

學心
丁碩　何事だ。

軍兵　只今御本陣より高坂彈正樣、御主君へ御面談いたされんとあつて、直さま陣所へお出でにござり

ますする。（ト言捨て、引返してはひる。）
學心　なに、御本陣より高坂彈正樣が、主君にお逢ひなされたいとな。
了碩　定めて軍事の御評議ならん、直さま主君へ。
皆々　お知らせ申さん。（ト此時上手幕張りの蔭にて）
晴行　あいや、知らせに及ばぬ、高坂氏の入來承知いたした。
學心　すりや、御主君には、
皆々　御承知とな。
ト徐入りの合方になり、上手より道鬼齋晴行、附太刀切草鞋、好みの陣立、入道にて出來り、軍卒四人革床几を直す、晴行腰を掛けこなしあつて、
晴行　道鬼齋が此陣所へ、高坂氏も入來とは、必定軍議の密談ならん、軍卒共は次へ立て。
四人　畏つてござりまする。（ト四人の軍卒下手へはひる。）
學心　然し今日の御計策、事十分に整へば、
了碩　別に軍議の御談じは是れなき筈に存じまする。
晴行　何は兎もあれ親友の、入來とあれば面會なさん。

學心　然らば我々兩人も、
了碩　お出迎へ、
兩人　仕つらん。
ト小鼓の合方になり、花道より彈正、棒茶筅附太刀切草鞋、陣立のこしらへにて、鐵の陣笠を持ち出來り、花道へ留る、
晴行　高坂氏には君の警衞軍務に繁き御身にて、拙者が陣へ御入來ありしは、何御用かは存ぜぬが、御苦勞至極に存じまする。
彈正　仰せの如く某も、軍務に繁く寸暇を得ざれど、火急の儀にて御意得度く、推參いたしてござる。
晴行　拙者へ火急の御用とあれば、
學心　高坂樣には御會釋なく、
了碩　是れへお通り、
兩人　下さりませう。
彈正　然らば御免下されい。（ト右の合方にて彈正舞臺へ來る、學心有合ふ革床几を下手へ直し、）
學心　先づ是れへお掛け下さりませ。

彈正　決して床几には及びませぬ。

晴行　いや、拙者も是れへ掛けますれば、平にそれへお掛け下さい。

彈正　左樣なれば失禮御免、（ト晴行は上手彈正は下手の床几へ掛ける、學心了碩下手へ控へる、）扨入道殿には、今日の先鋒、御苦勞千萬に存じまする。

晴行　貴殿も昨夜は軍議に附き、深更までの御評議、御勤勞お察し申す。

彈正　拙者などは其席に列なりて、只御評議を承はるのみなるが、入道殿には御計策諸軍の懸引備への御配慮、誠に餘人の及ばぬ所、常々親友打寄りて御賞美申して居りまする。

晴行　左樣仰せ下されては、汗顏の至りでござる。して火急の御用とは。

彈正　ちと密々に入道殿に、申し上げ度きことござつて。

晴行　拙者に於てもそこ許へ、申し上げたい事がござる。

彈正　すりや入道殿にも某へ。

晴行　多分は貴殿と御同意ならん、高坂氏が某へ、御密談とあるからは、兩人共に退座いたせ。

學心
了碩　はツ、畏つてござります。

ト學心了碩思入あつて下手へはひる。跡兩人床几を放れ、上下へこなしあつて顏見合せ、歎息の思入、

是れにて誂への合方になり、兩人床几へ掛け、

晴行 高坂氏の御密談は、昨夜の計策喰ひ違ひ、西條山に越後勢居らざる事を某へ、御密談でござらうな。

彈正 如何にも入道殿のお察し通り、今曉常より川霧深く三尺先きも見えざりしが、日影に覆ひし雲霧晴れ遙に望めば本營の、西條山に人影なく、何時の間にかは下山なし、猿が馬場へ敵勢は車掛りで押出す樣子、殘念な儀にござりまする。

晴行 千悔なすとも是非なけれど、そも天文十六年より今永祿四年まで、既に十五年が其間、數度戰爭に及べども、敗軍なさゞる謙信、車掛りの强兵を、防ぐ手段は嘗てござらぬ。

彈正 ふう、すりや入道殿の御軍慮にも。

晴行 諸葛臥龍が再來なし、軍配取らばいざ知らず、某におき是れを防ぐ計策更にござらぬゆゑ、最早命數盡くる期と、疾くより覺悟いたしてござる。

彈正 扨は今日山本氏には、討死めさるお覺悟なるか。

晴行 如何にも、決心いたしてござる。

彈正 ふう。(ト是れにて合方きつぱりとなり、彈正是非なき思入、晴行こなしあつて、)

晴行　敵の變化を見聞なし所詮防戰なし難ければ、討死いたす所存なるが、此事士卒へ漏るゝ時は、氣後れなして上杉の兵に向つて戰ふ者なく、敗走なすは疑ひなし、さある時には我ばかりか、御先祖新羅義光公より二十七代連綿たる、武田の御家の恥辱となり、不覺を取りしを後世へ殘すが如何にも口惜しく、車掛りに敵勢が押寄せ來らば味方の備へ、蓑手になさば必ず勝利、決して氣遣ふ事なかれと士卒を勵まし置きたれど、變に臨み機に應じ軍配なすとも元よりして、蓑手といふ備へなければ、味方の勝利思ひも寄らず、此儀貴殿へ密々に申し入れんと存ぜし所、思ひ掛けなき御入來にて、道鬼が心中お明し申せば、貴殿は是れより信玄公へ此趣きを進達下され、一先づ兵を繰引きに、海津城へ引揚げたまひ、西條山の裏手へ廻りし精兵來らば一手となり、戰爭なすやうお傳へ下され、某事は此處に止まり、必死を極め一戰なし、敵勢喰止め申さん程に、必ず御異見お賴み申す。

彈正　其儀は承知仕つる。君へ御異見申し上げんが、山本氏にはどうあつても討死なさるお覺悟よな。

晴行　如何にも覺悟仕つれば、計らず只今お目に掛るが、最早今生のお別れでござる。

彈正　此趣きを我が君へ、言上なさば嘸や嘸味方の柱と賴みたる入道殿の事なれば、惜しませたまふは如何ばかり、某事も諸共に討死なして後世へ、其名を殘さんものなれど、此事直ちに我が君へ、

言上なして繰引に海津へ引揚げたまはねば、御身の大事に是非なくも、日頃斷琴の交りいたす山本氏が、討死めさるを餘所に見なして、御本陣へ赴く拙者が殘念さ。幼年の折兩親に別れしかども其砌りは、まだ物心あらざれば左程悲しみもあらざりしが、今日只今同盟の貴殿に別るゝ悲しさは、親にも勝る今際の名殘、實に腸を斷つ思ひ、武田方にて我人共に力と頼む入道殿、山本氏が討死と諸隊の輩聞くならば、右の腕を捥がれし如く、嘸や力を落すでござらう、十が九つ仕果せしと思ひし軍議畫餠となり、少なき人數の奇兵にて、車掛りの强兵と戰ふ時は兵士を費し、終には君の御大事。

晴行　そこを討つて某が萋手に備へを立て直し、防戰なせば必ず勝利と士卒を勵まし踏止まり、槍の穗先きの續くまで寄せ來る敵勢突倒し、叶はぬ時は潔く討死なすが君への忠節。

彈正　斯くまでお覺悟ある上は、某お止め申したとて、お止まりはよもあるまじ、最早是れが今生のお別れなれば入道殿と、せめて名殘りの水杯。

晴行　拙者も左樣存ぜし所、幸ひかしこへ流れ來る。

彈正　淸き淸水を汲みあげて、

晴行　是れにて別杯、

兩人　汲み交さん。

ト誂への合方、谺、水音をあしらひ、彈正思入あつて以前の笠當を取捨て、流れの水を陣笠にて汲取り、晴行へ差出し、

彈正　いざ、今生の別れの杯。

晴行　先づ高坂氏、貴殿より。

彈正　此別杯は入道殿お先きへ。

晴行　然らば御免下されい。

ト晴行陣笠を取り一口呑み、彈正陣笠へ手を掛け、晴行の顔をぢつと見て、

彈正　今にも寄手攻め來らば、討死めさるゝ入道の相好常に替りなく、勇氣盛んに滿ちたまふは、流石は山本晴行殿、流石は甲斐の大元帥。

晴行　貴殿も是れにて愁傷の、別れを惜しみし詞に引替へ、大丈夫なる其面、實にも武田の勇士なり。

彈正　斯かる叡智の入道殿も運盡き弓の弦切れて、今日討死の時到り。

晴行　修羅の街に終るのも、豫て覺悟の事ゆゑに、別れを惜しむ謂れなけれど、

彈正　是れまで數度の戰爭に敵味方とも勝敗は、負けず劣らず戰ひしが、

晴行　我が計策の裏をかゝれ、思はぬ不覺を取ると思へば、
彈正　其御無念は高坂が、膽にこたへて忘れはいたさぬ。
晴行　嘸や味方の兵士等も、
彈正　斯くと聞きなば口惜しく、
晴行　齒噛みをなすは目の當り、
彈正　思ひ廻せば戰場で、
晴行　昨日は敵を討留めて、
彈正　手柄をなせし武士が、
晴行　今日討死なすといふも、
彈正　武門の習ひといひながら、
晴行　はて是非もなき、
兩人　身の上ぢやなあ。
　　ト兩人名殘りを惜しむ思入よろしくあつて、彈正水を一口呑み跡をこぼす、晴行思入あつて、
晴行　百度千度申しても名殘りは盡きぬ、貴殿は早く御本陣へ、お越しあつて我が君へ、御異見の儀を

お頼み申す。

彈正　仰せの如く親友の別れに思はぬ時を移せり、是れより直に御本陣へ馳せ參じて我が君へ、海津へ御歸城あるやうに、篤と御異見申し上げん。

晴行　百事よしなにお頼み申す。

彈正　委細承知仕つる。（ト晴行思入あつて呼子の笛を出し吹く。ばた〳〵になり、以前の軍卒四人出來り）

四人　はッ、御用でござりまするか。

晴行　高坂氏を御本陣まで、お見送りいたせ。

四人　畏つてござりまする。

彈正　馬上で參れば必ずともに、御配慮には及び申さぬ。

晴行　然らば陣外までお送り申せ。

四人　はあ。（ト彈正床几を放れ）

彈正　左樣ござらば入道殿。

晴行　高坂氏。

彈正　あ、誠にこれが今生の、

晴行　これ。(ト押へる。彈正氣を替へ、)

彈正　いや、是れは何れも、御苦勞にござる。

ト小鼓の合方になり、彈正思入あつて四人附添ひ花道へはひる。晴行後を見送り。

晴行　才智勝れし高坂氏ゆゑ、布留那の辯で御異見申さば、多分御採用あらうとは、存ずるなれども日頃から、勇氣烈しき强將ゆゑ、御用ゐなきかも計られず、兎にも角にも我が計略の裏を搔れし上からは、敵勢襲ひ來りなば必死を極め防戰なし、刀の目釘の續かんだけ是にて喰止め討死なさん、さはさりながら信玄公、高坂氏の御異見を御採用あればよいが。(ト此時花道の揚幕にて遠寄せを打込む、晴行きつとなつて、)最早敵勢追々に、押寄せ來ると覺えたり、山本晴行入道が、一世一度の晴れの働き、敵に目に物見せてくれん。

ト槍を構へてきつと見得、此時下手幕張りの蔭より牛窪大藏好みの蔓軍兵のこしらへにて出來り、

大藏　はて、お勇ましいことだなあ。

晴行　や、そちは軍卒牛窪大藏、疾よりそれに居つたるか。

大藏　最前から幕張りの蔭に潛んで居りました。

晴行　すりや高坂氏と某が、密談なせしを聞きたるか。

大藏　殘らず聞いて居りました。

晴行　むう。（ト聞かれしかといふ思入、誂への合方かすめて遠寄せになり、大藏前へ出で、）

大藏　高坂樣との御密談承はつては濟みませぬが、如何なる事かと幕張りの小蔭に隱れて今日の、戰の樣子承はり、爰ぞ御恩の送り所、旦那樣が討死を遊ばしますなら私も、冥土のお供をいたす心、何の役にも立ちませぬ軍兵ながら御旗を持ち、旦那樣と御一緒に、命を捨てたうございまする。

晴行　高坂氏との密談を、聞いたとあれば是非もないが、我が討死をなす事を、味方の者に明す時は、忽ち勇氣を挫くゆゑ、深く包む事なれば、必ず他言いたすまいぞ。

大藏　手段によつては味方でも、欺く事が戰の習ひ、決して人には申しませぬから、旦那樣の冥土のお供、どうぞさせて下さりませ。（ト晴行思入あつて床几へ掛け、）

晴行　軍卒の身に似合はざる死を顧みぬ志し、天晴なる事ながら、元其方は我が故鄕、牛窪村の農人なる久左衞門が二男にて、親の賴みに二十の年我が家來にいたせしが、力量あるゆゑ末々は信玄公の御直參に取り立てやらうと思ひしが、今日某討死いたせば、思ひし事も水の泡、僅かな内の主從ながら恩を忘れず共々に、死なんといふは忝けないが、未だ親もある事なれば其方事は此場より、産れ故鄕の牛窪へ歸つて元の農となり、鋤鍬とつて田畑を耕し身を安樂に百歲の、壽を保ち

て世を迯れ、必ず共に一命を捨てるは無益の事なるぞ。

大藏　旦那樣には私の體をおかばひ下すつて、故鄕へ歸れとおつしやりますは、有難うはござりますが、故鄕へ歸つて百姓に、なります所存はござりませぬ。

晴行　それは惡い料簡なるぞ、我は甲斐の軍師といはれ、人に其名を知られしゆゑ、故鄕へ歸らば身の恥辱、今其方が歸りしとて、恥辱になるといふでもなし、惡い事はいはざれば我が意に從ひ故鄕へ歸れ。

大藏　いえ〳〵何とおつしやいましても、故鄕へ歸る氣はござりませぬ、旦那樣と諸共に討死をいたしまする。

晴行　それは益なき事なるぞ、我が討死は御本陣へ敵を入れまい爲なるぞ、斯く數次の戰爭ゆゑ嘸や國にて親兄弟が、そちを案じて居るであらう、故鄕へ歸つて無事な體を、見せるが則ち孝行なるぞ。

ト思入にていふ、大藏も思入あつて、

大藏　百姓づれの悴ゆゑ、御不便に思召して、左樣におつしやつて下さりますは、有難うはござりますが、そりやお恨みでござりまする。（ト合方きつぱりとなり、）假令旗持風情でも、旦那樣を初めとして名ある勇士のお方々、武田の勢は何萬と言はるゝ中の一人に、加はりまするは身の出世、假

令百年の壽命を保ち、生涯樂に暮せばとて、故鄕へ歸れば土百姓、來る出來秋に取り上げる何十俵といふ米より、二合半でも侍の米が喰ひたく思つた所、山本樣で軍兵のお抱へ入れがあると聞き、名主を賴んで願つて出た體も五尺に餘る上、骨組もよく力もあるので、お抱へ入れになつた嬉しさ、產れた年が寅年に千里一飛び軍兵の、數に入つたは身の仕合せと、悅んで居る此大藏、漸く覺えた鐵砲に替へて又候故鄕へ歸り、鍬を持つ氣はござりませぬ。人は一代名は末代、立派に爰で討死が、いたしたうござります。是れまで受けた御恩送りに、冥土へ行つて旦那樣へ、お仕へ申したうござりまする。

ト思入にて言ふ、晴行もこなしあつて、

晴行　すりやどうあつても討死が、いたしたいとそちは申すか。

大藏　へい假令心は樂にせよ、鋤鍬とつてとぼ〳〵と、長生きするより血氣の內、立派に爰で討死がいたしたうござりまする。（ト是れを聞き晴行感心の思入あつて、）

晴行　はて天晴なる志し、勇士も及ばぬ大丈夫、其魂を見る上は、今より三世の因みを結ばん。

大藏　そんなら旦那は私の、願ひを叶へて下さりまするか。

晴行　おゝ、念には及ばぬ、聞き屆けた。我と共に討死いたせ。

大藏　有難うございまする。（ト悦ぶこなし、晴行思入あつて、）

晴行　とはいへ國にて其方が、討死せしと聞くならば、親兄弟が歎くであらう、それが如何にも不便なるぞ。

大藏　なに、國には兄貴が跡を取り、親父を過して居りますから、別に困りはいたしませぬ。然し實の親兄弟、少しは歎きもいたしませうが、此大藏が旦那様を、思ふ程には泣きますまい。

ト大藏ほろりと思入。

晴行　我もそちが力量と、斯く天晴な魂を、空しく今日討死さすが、死しての後まで殘念なるぞ。

大藏　五尺に餘る體といへど、見る影もなき大藏を、それ程までに思召すは。

晴行　產れ故鄕が同村ゆゑ、他人のやうに思はれねば、一倍そちに不便が增すぞ。

大藏　冥加に餘るお詞が、あの世の母へ我が土產。

晴行　我は敵勢惱まして、屍を野外に晒すとも、

大藏　お首はわしが此首と、

晴行　一つになして冥土まで、

大藏　二人連立つ主從の、

晴行　三世の奇緣。
大藏　盡きずして、
晴行　實に頼もしき、
兩人　事ぢやなあ。（ト兩人よろしく愁ひの思入、上手より學心下手より了碩出來り。）
學心　我々兩人も我が君と、討死いたし御先途を、見屆けたうござりますれば、
了碩　何卒忠死の御供へ、お加へなされて下さるやう、偏に願ひ、
兩人　奉つる。
晴行　すりや先刻より其方達も、此場の始終を聞いて居つたか。
學心　今大藏が勇ましき、詞を聞いて兩人共、何おめ〳〵と存へませう。
了碩　御主君諸共花々しく、一戰なして後世の、記錄に美名を殘す所存。
學心　それゆゑ我々お許し受け、
了碩　討死なして冥土の魁、
學心　仕つりたう、
兩人　存じまする。

晴行　よくぞ申し出たるぞ、汝等といひ大藏まで命を捨て一戰なし、美名を殘す所存とあるゆゑ、討死許し遣はさん、流石は忠臣大佛、諫早、我も感服いたせしぞ。

學心　それ承はつて、學心も、

了碩　此了碩も安堵なし、

學心　有難う存じ、

兩人　奉つりまする。

大藏　こりや道連れが殖ゑて來たわえ。（ト此時どんちやんを烈しく打込む、皆々きつとなつて）

晴行　追々近附く越後勢、此陣營へ押し來らば、我が一眼にて睨み挫がん。

大藏　此大藏も討死と、覺悟いたせば御旗を死すとも敵の手へ渡さず。

學心　又我々は命限り、

了碩　切つて／＼切りまくらん。

晴行　いでや最後の、（ト床几を放れ跛のこなしにて槍をとんと突き、片足あげるを道具替りの知らせ）一戰なさん。（トきつと見得、遠寄せにて此道具廻る）

（信玄旗本の場）――本舞臺一面の平舞臺、後千曲川より海津の城を見たる山の遠見、上下山組の張物にて見切り、舞臺一面武田菱の幕を張り、よき所に松の立木、是れへ陣太鼓を釣し、日覆より松の釣枝、總て川中島信玄旗本の體。爰に枠入りの馬印八幡大菩薩諏訪明神などゝ記したる旗を立て、眞中に信玄畫面のこしらへにて、誂への軍配團扇を持ち、床几に掛り、前に干肴の折臺土器を載せし三方を置き、三幕目の廣瀬郷左衞門、飯富三郎兵衞、仁科藤太郎、甘利左衞門、井上文八郎、飯島長左衞門何れも鎧武者にて居並び、郷左等門長柄の銚子を持ち、前へ進み居る。後に軍兵六人銘々得物を持ち控へゐる。此見得床の送り、どんちやんの鳴物にて道具留る。

〽畏き修羅の街も軍神を、いさめの神酒に幸先きを、祝す九獻の干肴は、敵に勝栗功名を喜昆布とぞ見えにける。

ト此内信玄土器を取りあげ、郷左衞門酌をして酒を呑み、皆々へ順に土器をさすことよろしくあつて納まり、

郷左　はツ、君のお流れ有難く、

三郎　頂戴いたして、

六人　ござりまする。

信玄　抑々天文より今年まで、十五ヶ年の戰爭も、今日こそは輝虎の首級を取り得て見んことの、悦ばしき此出陣、汝等までも今日は、功名手柄をいたしてよからう。

鄕左　はツ、上意の如く上杉謙信、西條山に陣取りなすを、

三郎　不意に迫つて裏手より、先手の勢が一萬餘騎。

藤太　鯨波をつくつて攻め掛けなば、周章なして途を失ひ、

左衛　本國越後へ繰引に、惑亂なして引揚げんと、

文八　命からぐ\〜此處へ、追ひまくられて參るのを、

長左　前後左右に取り圍み、一人殘らず討つて取り、

鄕左　勝鬨揚ぐるは、

六取　瞬くうち、

信玄　やがて先手の小山田より、吉事の注進來るであらう、何れも出陣の用意いたせ。

六人　はツ。（ト立ち掛る、此時花道の揚幕にて、）

彈正　御出陣暫く、お待ち下され。（ト聲を掛ける、）

信玄　予が出陣の幸先きに、暫くと聲掛けたるは。

鄕左　正しく高坂、
六人　彈正殿。
〽聲かけまくも本陣を、さして入來る高坂彈正、それと見るより謹んで、
ト此内どんちやんをあしらひ、花道より以前の彈正出で、直に舞臺へ來り、下手下に居て、
彈正　はツ、折角の御出陣ながら、仔細あつて某が遮つてお止め申せば、何卒一先づ海津まで御退陣こそ然るべし。
〽申し上ぐれば不興の體。（ト信玄思入あつて、）
信玄　餘人は知らず其方は、山本道鬼と同意にて、機密を計りしものならずや、此期に及び出陣を止まれなど〻は其意を得ず、是れには謂れあるや如何に。
彈正　さん候、上意の如く二萬の勢は奇正に分ち、一萬二千を先手となし西條山へ攻め掛らせ、殘る奇兵の八千にて、此處に備へを立て、敵の歸國を待ち設け、不意を討取る手筈なりしが、其計策も空しく相成り、機密を悟られ候なり。
三郎
三人　何と。（ト是れより合方遠寄せになり、）
彈正　仔細と申すは外ならず、今曉山本晴行殿八幡ケ原まで出張あつて、地の理を計り埋伏の、用意

なさんとなされし所、
〽秋の習ひに朝霧の深く降りたる川添も、昇る旭に晴渡り、見れば敵勢いつの間にか。
西條山を乗りおろし、八代の渡しを打越して、猿が馬場まで追々に、
〽隊伍亂さず眞ッ魁、五七の桐の旗押立て其勢すぐつて一萬餘騎。
繰出す樣子に候へば、君には一先づ海津まで、御歸陣あつて然るべしと、某道鬼と評議の上、是へ馳附け參つてござる。
〽詞直ぐなる言上も、流石は年の高坂が、諷諫とこそ見えにける。
ト此内彈正よろしくこなし、六人はびつくりなし、

鄕左　扨は鋭き謙信が、
三郎　味方の機密を推量り、
藤太　西條山より乗り下し、
左衞　猿が馬場まで、
六人　押寄せしか。
〽信玄心に驚けど、更に臆する氣色もなく。（ト信玄こなしあつて氣を替へ）

信玄　いや小賢しき青坊主、假令味方の裏をかき、不意に迫つて參らうとも、退陣いたす謂れあらんや、然らば是れに待受けて、彼れめと對戰いたすであらう。

彈正　あいや其儀は然るべからず、申すまでには候はねど、敵に機密を悟られしは軍師の越度に候へば斯くいふ某山本氏と牒じ合せて敵を引受け、討死なして今日の、恥辱を雪ぎ候へば君には只管海津まで、御歸陣あつて然るべし。

信玄　いゝや其儀は不承知なり、假令今日此處にて、信玄討死いたすとも、味方の軍師に討死させ、いかで退陣いたされんや。

彈正　すりや如何やうに言上なすとも、御聞き濟みはござりませぬか。

信玄　おゝ謙信如きに恐怖なし、退陣なしては隣國の、織田齋藤の手前へ對し、武門の恥辱名の穢れ、是非とも對戰いたさにやならぬ。

彈正　すりやどうあつても。

信玄　えゝ、諄いわえ。

〽一心變ぜぬ猛氣の大將、高坂默して居たりしが、はたと前後に心附き、

ト此内彈正思入あつて、

彈正　はッ、恐入つたる拙者が粗忽、眞平御免下さりませう。
鄕左　なに、そこ許が、
六人　粗忽とは。（ト是れより床の合方になり）
彈正　されば勇氣の御大將、敵が近附き參りしゆゑ御退陣をなしたまへと、御諫言を申せしとて、何ゆゑお用ゐあるべきぞ、それ等の邊も辨へながら心逸りし我が誤り、是れと申すも山本氏はや討死の覺悟にて、西條山より先手の勢馸附け參るそれまでは、踏止まつて防戰なすと底意を明し候ゆゑ、君此處にましまさねば可惜勇士をやみ〳〵と討死さする事もなく、某かしこへ馳せ參じ說諭を加へ諸共に引揚げさせんと思ふがゆゑ、只管君へ押返し強諫なせしは粗忽なり、何卒御賢慮廻らされ、惜しき勇士の山本を救ひたまひて御退陣、偏に願ひ奉る。
〽思入つてぞ言上す、信玄實にもと承引も、引くに引かれぬ武門の意地。
ト此內信玄よろしく思入あつて、
信玄　勇士を惜しむ高坂が、我への諫言粗忽にあらず、忠義の段は感服いたす。
彈正　すりや御退陣下さるとな。
信玄　いや、退陣はいたされぬ。

彈正　そは何故ゆゑの、

皆々　御不服よな。

信玄　〽信玄床几を進めたまひ。（ト信玄前へ出る、是れより床のめりやすになり、）抑々此度の一戰は、先頃謙信當國へ出張なせしと聞きしゆゑ、我も居城を進發なし、當地へ出張り大軍にて、西條山へ押寄せて八代、上野、雨の宮、渡りを取切り敵國の、通路を堅く止めしかど、謙信更に驚かず、〽管絃を催し陣所にて、娯樂を盡すは心得ずと。間者を入れて敵陣の、樣子を探らせ見し所、牒じ合せて豫てより長野、倉ケ野、小幡等を味方に語らひ後より、我を襲はん計策と、早くも知れて退陣なし、一先づ海津へ引揚げしを、〽手段の相違無念さに、我を嘲り罵りしも、今又信玄此處を、引揚げ退陣なす時は、臆病未練と誹謗なし、罵られんな必定ゆゑ、利なるを知つて退かれず、〽惜しき勇士を無慚にも、討死さすると知りながら、今此陣は引き難し、武門の意地ぢや、こりや彈正、是非なき事とあきらめい。

〽事を分けたる猛將の、意地を貫く物語り、人々實にもと感じ入り、返す詞もなかりける、
折しも聞ゆる攻め太鼓、（ト此時花道の揚幕にて遠寄せを打込む、皆々向うへ思入あつて）

鄕左　最早敵勢、

六人　近附きしか。

彈正　はゝツ、其御軍慮を聞く上は、强諫なすべき所にあらず、某は晴行に助力をなせし其上にて君の
大事に到りなば、又も智略を廻らさん。

信玄　おゝ假令謙信機密を悟り、不意に陣所へ寄せ來るとも、敗北なすべき信玄ならねば、跡氣遣はお
と對戰いたせ、

彈正　左樣ござらば我が君樣、

信玄　いそふれ時堯。

彈正　はや、おさらば。

〽胸に軍慮を疊みつゝ、敵を計りて高坂は、勢ひ込んでぞ急ぎ行く。
ト此中彈正思入あつて信玄に辭儀をなし、逸散に花道へはひる、此内揚幕の遠寄せ段々に烈しくなる
皆々思入あつて、

郷左　追々敵勢近附く樣子。

三郎　して我が君の、

六人　御軍慮は、

信玄　軍は臨機應變にて、敵の備への模樣に依り、我又備へを立て直せば、必ず恐るゝ事なかれ。

郷左　何は格別軍馬の懸引、

三郎　早く樣子が、

六人　聞きたいものぢや。

〽樣子如何にと相待つ所へ、息をばかりに内藤が、眞一文字に馳せ來り。

ト是れへどんちやんを冠せ、花道より内藤修理之助鎧武者にて拔身を持ち、走り出來り、花道にて舞臺を見、下に居て、

修理　はッ、御注進申し上げまする。

信玄　おゝ、誰かと思へば内藤修理、その注進待ち兼ねたり。

郷左　君の御前へ、

六人　お進みなされい。

修理　はッ。

〽はつとばかりに進み寄り。（ト修理之助舞臺下手へ來り）

されば只今犀川の、方に當りて喧すしく、人馬の聲を揚げしゆゑ、某遠見いたせし所、

〽眞ッ魁けて柿崎が、熟す調練二千餘騎、二の手に續く上杉が、直ぐな手勢の右左り、月の村上芒野の、宇佐美山吉鬼小島、後備へは甘糟と、直江が麾を取り仕切り、

其勢一萬二千餘騎、

〽陽に開きて陰に閉ぢ、二行備への武者押しも、一鼓六足どん、えい〳〵えい〳〵聲を總角の、兜鎧や弓鐵砲、槍を構へて一廻り、めぐりて進む有様は、廻り燈籠に異ならず。

かゝる希代の軍法を、斯くいふ修理は未だ見ず、君にもはや〳〵防戰の、御用意あつて然るべし。

〽然るべしとぞ言上す。信玄左こそと打ち頷き、

ト此内修理之助よろしくあつて納まる、信玄思入あつて、

信玄　扨は謙信かねてより、熟練なせし軍法の車掛りで此處へ、押寄せ來ると覺えたり。

鄕左　して又それに對戰なすには、

三郎　如何なる御軍慮廻らさるゝや。

藤太　よもや此儘の備へでは、
左衛　防禦なす事、
六人　心許なし。
信玄　それぞ信玄泰然と、將棊備へに立て直し、彼れが荒膽挫いでくれん。
修理　して又血氣の謙信ゆゑ、若し旗本へ切り込む時は。
信玄　其時こそは我が密計。
修理　して密計と、
修理 六人　仰せあるは、
信玄　内藤近う。
修理　はツ。（ト信玄の側へ來る、信玄修理之助へちよつと囁く、修理之助思入あつて、）すりや影武者を。
信玄　あこれ、祕すべし〳〵。
〽令す智略ぞ。
ト皆々引張りよろしく床の三重、どんちやんにて此道具廻る。

（山本勘助討死の場）――本舞臺四間通し常足の二重、山組の蹴込み、向う一面山の遠見、左右同じく山組の張物にて見切り、二重平舞臺とも一面の芒原、正面に松の大樹、日覆より同じく釣枝、二重よき所にて手負の馬一疋倒れ居る、爰に以前の晴行ちぎれたる鎧、血に染みたる後鉢卷、手負の體にて血に染みたる槍を持ち、松の大樹を小楯に立ち掛り居る、是れを大勢軍兵の裝にて各々得物を持ち立ち向つて居る。此見得どんちやん、床の送りにて道具留る。

〽烈しけれ、槍の衾の篠薄、弓矢の果ても八幡ヶ原、爰を先途と山本が今ぞ必死の手負武者。

ト是れより鳴物をあしらひ、床と下座と打合せの合方になり、晴行大勢を相手に本行と見ゆる好みの立廻り十分あつて、ト〻皆々を突伏せ、ほつと思入、此時本釣鐘を打込み晴行苦痛の思入あつて、槍の穗先きを甜め、血潮にて喉を潤すこなしよろしくあつて、

晴行　西條山へ向ひたる味方の正兵馳せ附くまでは、此處にて喰止めんと必死を極め血戰なせしが、從兵殘らず討死なし、我も數ヶ所の手疵を負ひ、斯く駿足まで騎り潰せば運命とても早や是れまで。

〽言ひつゝ側に立寄つて弱りし乘馬を打見やり、不便のものやと晴行は浮む涙を振拂ひ、

ト此内晴行倒れし馬へ思入あつて、

いかに鬼鹿毛、汝畜類に生を得て如何なる因みある故にや、此晴行が乘馬となり、數度戰場を往

來なし、汗馬の勞を盡せし上、五體不具なる某の助けとなりし駿足に、是れまでいたはり飼ひおきしが、其の主從の緣も薄く、今ぞ別れの時來り、戰死なせしは過分なるぞ。

ト　たてがみ取つて撫さすり、流石强氣も愛別の悲嘆に沈みゐたりし所へ、寄せ來る敵を後になし、主の先途を見屆けんと手負ながらに馳來る兩人、

ト晴行倒れし馬へ別れをなして思入。此時ばた／＼になり、花道より以前の學心、了碩手負のこしらへにて走り出來り、直ぐ舞臺へ來て、

學心　御主君これに、

了碩　御座ありしか。

晴行　死せしと思ひし御身等は未だ存命致しをりしか。

學心　されば吾々、君の號令相守り、信玄公の御陣所を警固の爲に彼處へ立越え、

了碩　必死の防戰致せしかど、最早痛手に働けず、是まで引上げまゐつてござる。

晴行　して／＼先刻高坂氏に賴み越したる君の御歸陣、御諫言をお用ゐありしか。

學心　其儀も高坂彈正殿詞を盡し再度まで、君へ强諫めされしかど、

了碩　例の强氣に聞入れたまはず、最早敵勢本陣へ近附きしとの味方の取沙汰。

〽聞いて晴行歯がみをなし、（ト晴行思入あつて、）

晴行 殘念なりあやまてり、抑々天文十六年より數度戰爭の度毎に、我が軍法の圖にあたり、裏をかゝれし事もなく、勲功擧げて算へ難く、君にもそれを御賞美あつて、眞田穴山馬場高坂あるが中にも晴行を大元帥とお用ゐあつて、甲越不平の對戰も十五ケ年の今日まで、一度も不覺を取らざりしが、兩陣手詰の際に臨み、我が計策の裏をかゝれ、西條山へ向ひたる一萬二千の大軍の齟齬となりたる負戰、僅殘兵八千にて、車掛りの鋒先へ向ふは危き防戰故、

〽君を諫めて退陣を祈りし事もむなしくなり、

日頃強氣の御大將、武門の意地を張通して討死めさるゝ御所存なるか、斯と知つたら高坂を頼まで晴行我が君へ、自身に强諫なさんもの。

〽我は元より覺悟にて死する命は惜しからず、

惜しむは新羅義光公より續く名家を晴行が軍法智計の拙き故、滅亡さするか、むゝ、

〽殘念や無念やと、

假令痛手に弱るとも、

〽君の危急を救はんと、氣はあせれども鐵石の體にあらぬ晴行が、立たんとしてはどうと坐

し、無念涙ぞあはれなる、見る兩僧はたまり兼ね。

ト此内晴行　槍を杖に立上り、花道へ行かうとしては尻邊にどうとなり、無念の思入よろしく學心了碩はこれを見て思入あつて、

學心　御尤もなる其のお悔み、主君は深手を負ひたまへば、なか〳〵彼處へ行き難し、

了碩　然らは吾々兩人が、彼處へまゐり御主君の、御先途見屆けお助け申さん、

晴行　いや〳〵かゝる痛手にて、御先途などは覺束なし。

學心　なにこれしきに、

了碩　氣おくれなさんや。

〽刀を杖に立上る折にいづくか外丸の筒音高く飛來り、虛空つかんで死してんけり、晴行見るより氣をはげまし、

ト此内學心了碩　花道の方へ行かうとする、本鐵砲の音二つして兩人是にあたり、よろしく苦しみ落入る。晴行是れを見てびつくりなし、

晴行　やゝ、最早二人は最期を遂げしか、いで某も此場にて、潔く切腹なさん。

〽痛手ながらに血のしたゝるちぎれ鎧を脫ぎ捨て、鎧通しを手に取上げ、突立てんとなす彼

方にて。

ト此内晴行腹を切らうとする、花道の揚幕にて、

大藏　旦那樣いなう――。（ト呼ぶ、晴行聞き耳立て、）

晴行　やゝ、あの聲は家來の大藏。

大藏　旦那樣いなう――。

〽聲もかれ〴〵大藏が、手負ながらに爰かしこ、尋ね求むる主思ひ。

ト是れへどんちやんを冠せ、花道より以前の大藏、手足の疵を布にて結へ、ちぎれたる旗の附きし棹を擔ぎ、半より折れたる棹を杖につき、うろ〳〵として出來る、晴行是れを見て、

晴行　それへ參るは大藏か。（ト大藏晴行を見て、）

大藏　や、旦那樣か、

〽馳せ寄らんとして兩足の、痛手に惱む牛窪が、歩みものろくどうと坐し、

ト此内大藏花道にて思入よろしく、やう〳〵と舞臺へ來り下に居て、

旦那樣、殘念な事でござりまする。

〽わつとばかりに泣き伏せば、晴行始終打ち見やり、

晴行　扨は汝も深手を負ひ、最早存命叶はぬか。
大藏　旦那樣よりお預りの、御定紋の此旗を、敵の奴等に渡すまいと、お跡を慕ひ爰かしこ、駈け廻つて步くうち、切つはツつの其中ゆゑ、刀の切ツ先流れ矢それ丸、幾度となく體をかすり、たうとう仕舞が此痛手、
〽雜兵葉武者のお蔭には、首を目掛ける敵もなく、刃の下や槍の上、拔けつ潛りつやう／＼と。
こちらの方へ參りましたが、せめてあなたにお出逢ひ申し、旗をお渡し申した上、死なうと思つて居りましたが、旦那樣にも其深手、それぢやあいよ／＼此戰は、味方の負けとなりましたか、あゝ忌々しい事だなあ。
〽無念でござると雜兵も、悔し淚に暮れ居たる。（ト大藏よろしく思入）
晴行　はて天晴なる其心底、下郎ながらも武士の、恥辱を思ひ主人の旗、命に替へても敵方へ渡さゞるとは過分なり、斯くなり果つるは先刻も、申せし如く覺悟の前、今更悔む所でない。
大藏　思へば是れまで旦那樣が、戰にお負けなされぬゆゑ、お供に附添ふ大藏も、面白半分敵方の、死人を剝いで分捕りしも、今日は味方の負となり。

晴行　せめて首級は敵方へ、奪はれまじと思へども。

大藏　お出逢ひ申した甲斐もなく、痛手を負うて諸共に、

晴行　晒す屍は修羅道の、

大藏　此世からなる苦しみは、

晴行　故鄕を跡に牛窪を、

大藏　出て來たわしは寅の歲、

晴行　實に猛獸の、

兩人　身の果てぢやなあ。

〽今は主從隔てなき、修羅の巷に四苦八苦、目も當られぬばかりなり。

ト兩人よろしく思入あつて、

晴行　さあ大藏、猶豫なすべき所でない、自殺が出來ずば殺して遣らうか。

大藏　へい、苦しくつて堪りませぬ、止めを刺して下さりませ。

晴行　おゝ其苦痛を助けて遣るぞ。

大藏　それがお慈悲でござりまする。

晴行　どりや、介錯して遣はさん。

〽ぐさと貫く止めの刀、敵なく息は絶えにける。
ト此内晴行鎧通しにて大藏の喉を突く、是れにて大藏よろしく落入る、晴行件の刀を拔き、

いで某も、最期を遂げん。
ト刀を逆手に持ち、腹へ突立てる。此時ばた〳〵になり、下手より以前の修理之助走り出來り、

修理　やゝ、山本氏には御最期なるか。

晴行　左いふは内藤修理之助殿、して〳〵味方の樣子は如何に。

修理　されば貴殿が此處で、必死の防戰めされしゆゑ、味方の備へ立て直り、影武者までを整へたれば、假令謙信旗本へ、切込むとても容易には、君へ接戰なり難し。

晴行　むゝ、して〳〵高坂彈正殿は、未だ存命めさるゝか。

修理　高坂氏には智略を廻らし、若し我が君の危急に至らば、西條山に向ひたる正兵一度に取つて返し敵の後を立切りしと、流言させて味方を勵まし、敵の勇氣を挫きし上、君を海津へ引揚げさせんと、機密の策を設けられたり。（ト是れを聞き晴行悅ばしき思入にて、）

晴行　むゝ流石は高坂彈正殿、それにて手前も此世の思ひ出、いで此上は内藤氏、我が首討つて敵方へ

必ずお渡し下さるな。

修理　其儀は某身に引受け、御身の首級は取り隠し、主君へ土産に仕らん。

晴行　然らば内藤修理之助殿、

修理　山本氏には心残さず、

晴行　いざ〳〵介錯、

修理　はッ。

ト太刀を持ち後へ廻る、晴行はよろしく引廻す、此模様どんちやんの鳴物にて道具廻る、

（兩雄接戰の場）――本舞臺元の本陣の道具、爰に以前の鎧武者六人、唐の頭の兜、緋の衣軍配團扇を持ち、信玄と同じこしらへになり、上手に郷左衞門、三郎兵衞、其次に信玄、下手に藤太郎、左衞門、文八郎、長左衞門皆々雁行に並び、床几に掛り居る、此見得どんちやんにて道具留る。と花道の揚幕戸屋の内にて、

謙信　武田大膳大夫信玄へ、上杉謙信見參々々。

皆々　何と。

是れよりつッかけになり、花道より謙信畫面のこしらへにて馬に打乘り、切ッそぎの青竹を抱へ込み出來り、花道へ留り、舞臺をきつと見て、

謙信　珍らしや武田晴信、多年の恨み今日こそ、入道首を引提げて、本國越後へ凱陣なさん、いで尋常に接戰いたせ。

鄉左　やあ推參なる其雜言、信玄是れに控へたり

三郞　匹夫の勇の接戰を、好むは誠の將ならず、

信玄　車掛りの鉾先きを、挫くは武田の將棊備へ、

藤太　泰然自若となすとても、如何で汝に討たれんや。

左衞　眼あらば信玄を、それにて目利いたして見よ。

文八　大僧正たる信玄に、刃を向けるは奇怪なり。

長左　三拜なして無禮を詫び、疾く〱陣所を、

七人　退り居らう。（トきつといふ。）

謙信　むゝ、はゝゝゝゝ、やあ小賢しくも計りしよな、假令何人影武者を、拵へ置くとも此謙信、目指す相手に惑はんや、過ぎし永祿元年に、當所に於て和睦の折、大河を隔てし對陣も、遠目にそれ

と見覺えある、第三番目の信玄に、それへ參つて見參せん。

トきつと言ふ、是れにて六人びつくりなし、

六人　やゝゝゝ。

信玄　流石は謙信よく見拔いた、然らば見參いたしくれんが、我は匹夫の勇ならねば、是れに控へて接戰いたす。

謙信　やあ匹夫とは汝が事、我が上洛の留守を窺ひ、約を變じて拔け掛けなし、鰐ケ嶽を切取りしは、匹夫に劣る勇ならずや。

信玄　言ふな謙信、それこそは北條氏康の所勞を附入り、汝が附屬の上杉憲政襲ひ掛りしそれゆゑに、我れ扱ひを入れんと心得、出張なせしを敵と疑ひ、無禮をなせしそれゆゑに、武門の習ひ止むを得ず鰐ケ嶽を攻め取つたり。

謙信　假令如何程申し解くとも、約を破りし卑怯な信玄、積る遺恨の雪毛に比す、諏訪法性を斷ち割るは、是れに帶びたる小豆長光、汝が素頭刎ねし上、放生月毛の蹄に掛け、いでや陣所を蹴散しくれん。

信玄　左いふ汝が靑首を、信玄是れにて申し受けたぞ。

謙信　何を。

ト右鳴物にて謙信舞臺へ來る、此内六人兜と衣を脱ぎ捨て、鎧武者になり、太刀を拔きて謙信へ切つて掛る、謙信は件の青竹を振廻し、よろしく立廻り、トゞ六人を散々に打ち据ゑきつと見得、此時ばた〱になり、花道より修理之助青貝柄の槍を持ち、逸散に走り出來り、花道に下に居て、

修理　はツ、西條山へ向ひたる正兵一度に取つて返し、敵の後を立ち切りますれば、味方勝利に疑ひなし、御安堵あつて然るべし。（ト是れを聞き謙信びつくりなし、）

謙信　なに、後詰の兵が間に合ひしか。

修理　謙信、覺悟。

ト槍にて突いて掛る、謙信青竹を投げ捨て、太刀をすらりと拔放し、修理之助を切拂つて上手の信玄へ切つて掛る、信玄床几に掛りしまゝ軍配團扇にて受け留め、兩人畫面の見得、此内軍兵六人槍を持ち出來り、信玄を守護する。是れにて信玄は上手、謙信は眞中、修理之助は下手より槍を附ける。三方見合つて木の頭、引張りよろしく、オロシの鳴物にて、

幕

川中島（終り）

《附錄》 主なる興行年表

實錄先代萩

年時	座名	名題＼役割	甲斐	安藝	和助	三左衛門	小十郎	淺岡	黄門	板倉	松前
明治九年六月	新富座	早苗鳥伊達聞書（ほとゝぎすだてのきゝがき）	坂東彦三郎	市川左團次	市川左團次	尾上菊五郎	尾上菊五郎	澤村訥升	坂東彦三郎	澤村訥升	中村芝翫
明治十三年三月	市村座	伊達評定春讀物（だてひやうぢやうはるのよみもの）	市川權十郎	市川壽美藏	市川壽美藏	中村時藏	市川權十郎	助高屋高助	助高屋高助	助高屋高助	坂東彦十郎
明治十七年六月	春木座	早苗鳥伊達聞書（ほとゝぎすだてのきゝがき）	市川九藏	坂東彦十郎	中村獅若	中村時藏	中村時藏	助高屋高助	助高屋高助	助高屋高助	中村時十郎
明治二十三年九月	中村座	夜講釋伊達立讀（よがうしやくだてのたてよみ）	市川權十郎	市川八百藏	坂東家橘	中村福助	中村雁次郎	中村福助	市川權十郎	中村雁次郎	市川壽美藏
明治二十七年七月	市村座	實錄先代萩（じつろくせんだいはぎ）	……	……	……	……	尾上菊五郎	中村福助	……	……	片岡市藏
明治三十九年四月	東京座	同（おなじく）	……	……	……	……	澤村訥子	中村芝翫	……	……	市川高麗藏

年時	明治四十四年三月	大正四年二月	大正六年十月	大正八年五月	大正十四年四月
座名	同	歌舞伎座	市村座	歌舞伎座	同
名題	同	同	伊達大評定（だておほひやうぢやう）	實錄先代萩（じつろくせんだいはぎ）	同
	市川九團次	市川左團次	中村吉右衛門	……	……
	尾上菊四郎	市川小團次	中村東蔵	……	……
	尾上菊四郎	市川左團次	坂東彦三郎	……	……
	市川團升	實川延二郎	尾上菊五郎	……	……
	市川鬼丸	市川八百蔵	守田勘彌	片岡仁左衛門	市川中車
	市川猿之丞	中村歌右衛門	尾上菊次郎	中村歌右衛門	中村歌右衛門
	市川九團次	市川八百蔵	中村吉右衛門	……	……
	市川猿之丞	市川八百蔵	坂東三津五郎	……	……
	市川團右衛門	實川延二郎	中村東蔵	市川左團次	片岡市蔵

女書生繁

年時	明治十年三月	明治十六年三月	明治廿八年一月	大正九年五月
座名	新富座	久松座	春木座	市村座
役割／名題	富士額男女繁山（ふじびたひつくはのしげやま）	同	同	同
しげる	尾上菊五郎	尾上多賀之丞	中村福助	尾上梅幸
御家直	市川左團次	市川九蔵	市川八百蔵	尾上菊五郎
神保	中村宗十郎	市川權十郎	中村駒之助	中村吉右衛門
惣助	中村芝翫	市川照蔵	市川右田作	……
小助	市川左團次	中村鶴五郎	中村勘五郎	大谷友右衛門
およし	岩井半四郎	中村かほる	岩井松之助	……
利右衛門	中村仲蔵	坂東彦十郎	……	……

川中島

年時	座名	名題	謙信	額岩寺	信玄	喜兵衛	勘助	大藏	鬼小島	村上	お谷	小笹
明治九年三月	新富座	川中島東都錦畫（かはなかじまあづまのにしきゑ）	坂東彦三郎	坂東彦三郎	中村芝翫	中村芝翫	尾上菊五郎	市川左團次	市川左團次	澤村訥升	嵐大三郎	澤村訥升
明治十四年二月	大阪中座	同（おなじく）	嵐三五郎	嵐璃寛	中村芝藏	松尾猿之助	尾上多見藏	嵐琥珀郎	嵐橘三郎	嵐璃笑	瀬川吾妻	嵐璃笑
明治十五年六月	新富座	同（おなじく）	市川團十郎	市川團十郎	中村芝翫	中村芝翫	尾上菊五郎	市川左團次	市川左團次	市川海老藏	岩井紫若	…………
明治二十八年四月	市村座	同（おなじく）	市川九藏	市川九藏	中村芝翫	中村福助	市川猿之助	澤村訥子	澤村訥子	…………	…………	中村福助
明治三十三年五月	明治座	同（おなじく）	市川權十郎	市川權十郎	市川左團次	市川荒次郎	市川左團次	市川小米	市川左團次	中村成太郎	市川升若	市川米藏
明治四十年五月	歌舞伎座	同（おなじく）	市川猿之助	市村羽左衛門	市川八百藏	中村雁次郎	市川八百藏	市村羽左衛門	市川猿之助	澤村訥升	尾上梅幸	尾上芙雀
大正三年二月	市村座	同（おなじく）	尾上菊五郎	中村吉右衛門	坂東彦三郎	…………	尾上菊五郎	坂東三津五郎	中村東藏	…………	…………	河原崎國太郎
大正九年十一月	新富座	同（おなじく）	市川左團次	市川左團次	市川中車	…………	市川中車	中村福助	嵐吉三郎	…………	…………	市川新升

大正十四年十一月廿五日印刷
大正十四年十一月廿八日發行

『默阿彌全集第十二卷』

非賣品

補修　河竹糸女

校訂編纂者　河竹繁俊

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彥

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者　堀江關武

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所　常磐印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂